岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 88

百間川原尾島遺跡 3

旭川放水路(百間川)改修
工事に伴う発掘調査 Ⅸ

1994

建設省岡山河川工事事務所
岡 山 県 教 育 委 員 会

１．弥生時代後期の竪穴住居（竪穴住居１）

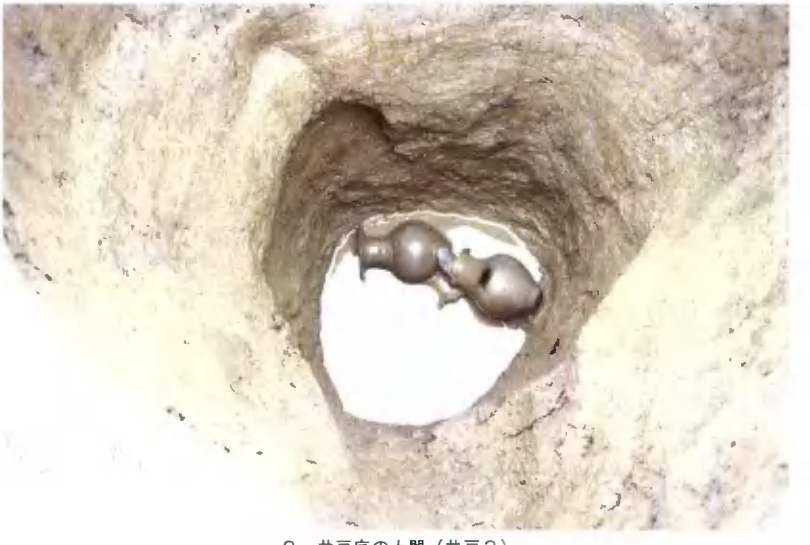
２．竪穴住居発掘調査風景（竪穴住居６）

巻頭図版２

１．周溝をめぐらせた竪穴住居（竪穴住居５）

２．洪水で埋没した土壙（土壙53）

１．土器棺墓群の発掘調査風景（土器棺墓２～４）



２．井戸底の土器（井戸２）

１．土壙１（検出状態）

２．土壙１（土器の出土状態）

１．土壙１出土土器

２．土壙１(右)・土壙55(左)出土土器

1．井戸７上層(上)・底(右)の土器出土状態

2．古墳時代後期の建物（建物41～43）

1．弥生時代前期水田

2．弥生時代前期水田

1．弥生時代後期水田

2．水田層断面

序

百間川は、洪水による被害をたびたび受けていた岡山城下を守るため、今から約300年前に、著名な陽明学者である熊沢蕃山考案の「川除(かわよ)けの法」（放水路計画）をもとに、岡山池田藩の郡代である名土木事業家津田永忠によって造られた旭川の放水路です。

百間川は、築造以来数多くの洪水から岡山市街地を守ってきましたが、一方で通水能力が小さく、また堤防が弱いことなどから時には沿川に大きな被害をもたらすこともありました。

このため、建設省では地元の方々をはじめとする関係者のご協力を戴き、昭和49年から本格的な改修工事を進めてまいりました。その結果、昭和58年には第一段階として戦後百間川に流入した程度の規模の洪水に対しても安全な断面が出来上がり、現在、第二段階の工事をすすめている所です。

ところで、百間川では故鎌木義昌氏等によって埋蔵文化財が発見されています。そこで、建設省では、岡山県教育委員会と協議を重ね、百間川改修に伴って遺跡の発掘調査を行ない記録に留めることとし、昭和52年から同委員会に発掘調査を委託し今日に至っています。

この間に調査した面積は、平成４年度末で約16万㎡に達しましたが、この中には10万㎡にも及ぶ弥生時代後期の小区画の水田跡を始めとする数々の重要な遺跡が発掘され、全国的にも注目されています。

本書は、このうち昭和57年度から平成２年度にわたって行われた百間川原尾島遺跡発掘調査の一部の結果をまとめたものです。本書が、埋蔵文化財に対する理解の増進と、学術、文化等のため、広く活用されることを期待します。

最後に、発掘調査並びに本書の編集に当たられた岡山県教育委員会を始めとする関係各位に対し、深甚なる謝意を表します。

平成５年９月

建設省岡山河川工事事務所長

原　田　　彪

序

岡山平野を南北に貫いて流れる旭川の下流部に形成された沖積平野は、古くから穀倉地帯として栄えており、平野の各所や周囲の丘陵にはこの地域の歴史を物語る数多くの遺跡が残されています。

東岸の平野を流れる百間川は、江戸時代に岡山城下を洪水から守るために設けられた人口の河川（放水路）で、洪水時に旭川の水を東に分岐させて操山の東側から児島湾に注ぐものです。この百間川の改修工事は昭和50年から本格的に施工されることになりましたが、それに際して、河川敷内に所在する遺跡の保存が大きい課題となりました。岡山県教育委員会では、その取り扱いについて建設省岡山河川工事事務所と協議を重ね、やむをえず破壊される部分については記録による保存の処置をとることとし、発掘調査に着手しました。

百間川遺跡群の発掘調査は、昭和52年４月の開始以来、本年で17年目をむかえていますが、弥生時代の水田跡をはじめ、縄文時代から中世にいたる貴重な遺構・遺物が発見され、吉備を代表する遺跡の一つとして注目を集めています。

調査の結果はこれまで順次報告書として刊行・公開しており、本報告書で９冊目となります。昭和57年度から平成２年度まで調査を実施した百間川原尾島遺跡は遺物・遺構ともに膨大なものであるため、３冊に分けて報告を行うこととしており、本報告書はそのうちの１冊目にあたるものです。今回収録した調査区では弥生時代前期の水田や後期の竪穴住居、土器棺群、また、古墳時代の建物群など注目される遺構・遺物が発見されています。

この報告書が文化財の保護・保存、さらに今後の研究の一助となれば幸いと存じます。

発掘調査の実施および報告書の作成にあたっては、旭川放水路（百間川）改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員の先生方から種々の御教示と御指導を得、また建設省岡山河川工事事務所をはじめ関係各位から多大な御協力をいただきました。記して厚くお礼申し上げます。

なお、上記対策委員の鎌木義昌先生は平成５年２月27日に逝去されました。長年にわたる御指導を深謝し、ここにつつしんで御冥福をお祈り申し上げます。

平成５年９月

岡山県教育委員会

教育長　森崎　岩之助

例　　言

1．本報告書は、旭川放水路（百間川）改修工事に伴い、建設省中国地方建設局の委託を受け、岡山県教育委員会が1982（昭和57）年度から1990（平成２）年度に発掘調査を実施した、百間川原尾島遺跡の発掘調査報告書である。

2．百間川原尾島遺跡は、岡山市原尾島に所在する原尾島遺跡のうち、百間川河川敷内に係る範囲をさす。

3．発掘調査は1983年度以前を岡山県教育庁文化課が、1984年度以降については岡山県古代吉備文化財センターが担当し、その総面積は6,704㎡である。

4．発掘調査および報告書の作成にあたっては、旭川放水路（百間川）河川改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会を設け、下記の方々に委員を委嘱した。対策委員各位からは終始有益なご指導とご助言をいただいた。記して深く感謝の意を表す次第である。

池葉須藤樹（元岡山市犬島中学校校長）　　鎌木義昌（岡山理科大学教授）
近藤義郎（岡山大学名誉教授）　　角田　茂（元岡山市岡輝中学校教諭）
出宮徳尚（岡山市教育委員会文化課課長補佐）　水内昌康（岡山県文化財保護審議会委員）

5．報告書の作成は、1992年度に行い、岡山県古代吉備文化財センター職員平井勝・宇垣匡雅・弘田和司が整理作業、トレース等を担当し、執筆は宇垣匡雅・平井勝・江見正己・柳瀬昭彦が行った。遺物の写真撮影は弘田・平井が担当した。

6．本文の執筆にあたっては各担当者が分担し、文責は文末に示した。

7．本報告書に係わる自然遺物のうち、一部のものについて鑑定・同定および分析を下記の諸氏・機関に依頼し、有益な教示を得るとともに、そのうちのいくつかについては報文をいただいた。記して厚く御礼申し上げる次第である。

土器の胎土分析　　白石　純（岡山理科大学）
ヒスイ勾玉の産地分析　　藁科哲男（京都大学原子炉実験所）
ガラス滓分析　　苅谷道郎（株式会社ニコン）
赤色顔料分析　　安田博幸（武庫川女子大学）
　　金杉直子（　　〃　　）
石器石材鑑定　　妹尾　護（吉備国際大学）
獣骨鑑定　　金子浩昌（早稲田大学）
種子鑑定　　松谷暁子（東京大学総合研究資料館）
樹種鑑定　　畦柳　鎮（岡山商科大学）

鉄滓鑑定　　大澤正己（新日本製鉄株式会社）

^{14}C年代測定　　社団法人日本アイソトープ協会

プラントオパール分析　　古環境研究所

また、土器等の検討に際して多くの方々から御教示を得たが、特に森淳、春成秀爾、大久保徹也の三氏から有益な教示をいただいた。厚く御礼申し上げたい。

8．本書の編集は宇垣匡雅が担当した。

9．出土遺物ならびに図面・写真類は岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）に保管している。

凡　　例

1．百間川原尾島遺跡は小字名で調査区を分けているが、これとは別に遺跡全体に20m方眼を組んでいる。上流（北西）から下流（南西）へのびる軸線にはA、B、Cとアルファベットを、それに直交する軸線には6、7、8等と数字を付しており、軸交点の南側の桝目を軸線名に区を付して8C区、25D区等と呼ぶ。

2．本報告書の遺構全体図および各遺構図の北方位は基本的に磁北であり、遺跡付近の磁北は西偏6°30′を測る。なお、1／1000および1／2000遺構全体図の北方位は真北である。

3．本報告書の土層断面図や遺構実測図の高度はすべて海抜高度である。

4．本報告書の遺構ならびに遺物実測図の縮尺率は下記のとおり統一しているが、例外については縮尺率を明記している。

遺構

竪穴住居・建物1／80　井戸・土壙・土壙墓・溝断面1／30

遺物

土器1／4　土錘・石錘1／3　土製品(紡錘車)・石器および石製品・金属製品1／2

玉類2／3

5．土器実測図のうち、中軸線の左右に白抜きのあるものは、小破片のため口径推定が困難なものである。

6．遺物番号は、材質を示すため、土器以外のものについて下記の略号を番号の前に付した。

石器および石製品：S　鉄器および青銅製品：M　土製品：C　玉類：J

7．本報告書に掲載した地図のうち、第2図は国土地理院の1／25000地形図、和気・西大寺・岡山北部・岡山南部を、第3図は岡山市域図1／2500地形図を複製・縮小したものである。

8．本報告書で使用した弥生時代から古墳時代前半期の時期は『旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査Ⅰ』において採用した、次頁に示す土器編年に基づいている。

編　年　対　比　表

時代	遺跡		百間川	雄町 (註1)	上東・川入 (註2)
弥生時代	前期	津島	百間川前期Ⅰ		
		門田	百間川前期Ⅱ	雄町 1	
			百間川前期Ⅲ	雄町 2	
				船山 3	
	中期	南方	百間川中期Ⅰ	高田	
				雄町 3	
		菰池	百間川中期Ⅱ	船山 5	
				菰池	
				雄町 4	
		前山Ⅱ	百間川中期Ⅲ	前山東	
				雄町 5	
		仁伍		雄町 6	上東・鬼川市 0
	後期	上東	百間川後期Ⅰ	雄町 7	上東・鬼川市Ⅰ
				雄町 8	
			百間川後期Ⅱ	雄町 9	上東・鬼川市Ⅱ
				雄町 10	
		グランド上層	百間川後期Ⅲ	＋	上東・鬼川市Ⅲ
		酒津	百間川後期Ⅳ	雄町 11	才の町Ⅰ
					才の町Ⅱ
古墳時代	前期	王泊六層	百間川古墳時代Ⅰ	雄町 12	下田所
				雄町 13	亀川上層
			百間川古墳時代Ⅱ	雄町 14	＋
			百間川古墳時代Ⅲ	雄町 15	川入・大溝上層

註1　正岡睦夫他「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』1　岡山県教育委員会 1972年

註2　柳瀬昭彦他「川入・上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16　岡山県教育委員会 1977年

目　　次

序
例　言
凡　例
目　次
第１章　歴史的・地理的環境 …… 1
第２章　調査および報告書作成の経緯 …… 9
　第１節　発掘調査の契機とこれまでの成果 …… 9
　第２節　調査の体制 …… 11
　第３節　調査の経過 …… 14
　第４節　報告書の作成 …… 16
第３章　調査の概要 …… 18
　第１節　三股ケ・丸田調査区 …… 18
　　１．三股ケ・丸田調査区の概要 …… 18
　　２．弥生時代前期・中期の遺構・遺物 …… 26
　　(1)　水田 …… 26
　　(2)　溝 …… 26
　　３．弥生時代後期の遺構・遺物 …… 35
　　(1)　水田 …… 35
　　(2)　竪穴住居 …… 35
　　(3)　建物 …… 55
　　(4)　井戸 …… 71
　　(5)　土壙 …… 86
　　(6)　土壙墓 …… 137
　　(7)　土器棺墓 …… 138
　　(8)　溝 …… 149
　　(9)　土器溜り他 …… 153
　　(10)　包含層・柱穴等出土の遺物 …… 155
　　４．古墳時代の遺構・遺物 …… 169
　　(1)　竪穴住居 …… 169
　　(2)　建物 …… 197
　　(3)　井戸 …… 211

(4) 溝 …… 222
(5) 遺構に伴わない遺物 …… 232
5．中世の遺構・遺物 …… 239
(1) 建物 …… 239
(2) 井戸 …… 246
(3) 土壙 …… 250
(4) 土壙墓 …… 250
(5) 溝 …… 251
(6) 遺構に伴わない遺物 …… 255
第2節 川内調査区 …… 257
1．川内調査区の概要 …… 257
2．弥生時代前期の遺構・遺物 …… 259
(1) 水田 …… 259
(2) 溝 …… 262
3．弥生時代中期の遺構・遺物 …… 263
(1) 水田 …… 263
4．弥生時代後期の遺構・遺物 …… 268
(1) 水田 …… 268
(2) 土壙 …… 272
(3) 溝 …… 272
5．古墳時代の遺構・遺物 …… 279
(1) 溝 …… 279
6．中世の遺構・遺物 …… 280
(1) 溝 …… 280
7．包含層出土の遺物 …… 281
第3節 左岸用水調査区 …… 282
1．左岸用水調査区の概要 …… 282
第4章 考察 …… 286
第1節 弥生時代の遺構・遺物について …… 286
1．弥生集落の変遷 …… 286
2．弥生時代後期末の遺構 …… 289
3．土壙1について …… 291

第２節　古墳時代の集落と遺物 …… 295
１．竪穴住居の規模と構造 …… 295
２．集落の変遷 …… 297
３．弥生時代末～古墳時代前期の甕について …… 299
付載１　百間川原尾島遺跡出土土器の胎土分析 …… 301
付載２　百間川原尾島遺跡出土のヒスイ勾玉の産地分析 …… 308
付載３　百間川原尾島遺跡９・10－Ｚ・Ａ区出土ガラス滓 …… 318
付載４　百間川原尾島遺跡の竪穴住居15中央ピット内に遺存した赤色顔料物質の
微量化学分析 …… 320
付載５　百間川原尾島遺跡・沢田遺跡出土土器のプラント・オパール分析 …… 322
付載６　百間川原尾島遺跡出土種子の鑑定結果 …… 325
付載７　百間川原尾島遺跡出土獣骨の鑑定結果 …… 326
百間川原尾島遺跡出土遺物一覧（観察）表 …… 327
１．土器観察表 …… 329
２．石器・石製品一覧表 …… 349
３．土製品一覧表 …… 353
４．金属器一覧表 …… 355
５．玉類一覧表 …… 359
６．竪穴住居21臼玉一覧表 …… 360
７．新旧遺構名称対照表 …… 361

図　目　次

第１図　百間川の位置 …… 1
第２図　百間川周辺遺跡分布図
（S＝１／50000）…… 2
第３図　百間川原尾島遺跡　調査区位置
（S＝１／7500）……14
第４図　グリッドの設定と調査区（１）
（S＝１／4000）……16
第５図　グリッドの設定と調査区（２）
（S＝１／4000）……17
第６図　三股ヶ・丸田調査区微高地の土層
（S＝１／80）……19
第７図　三股ヶ調査区西低位部の土層
（S＝１／80）……20
第８図　三股ヶ調査区西低位部出土遺物 …21
第９図　近世土取り跡（S＝１／800）……22
第10図　百間川原尾島遺跡北部　弥生時代
前期・中期遺構全体図
（S＝１／1000）……23
第11図　三股ヶ調査区　弥生時代前期・中
期遺構全体図（S＝１／400）……25
第12図　溝１ ……26
第13図　溝３・溝13・溝６・溝５ ……27
第14図　溝３・４ ……27
第15図　溝３・５出土遺物 ……28
第16図　百間川原尾島遺跡北部　弥生時代
後期遺構全体図
（S＝１／1000）……29
第17図　三股ヶ・丸田調査区弥生時代後期
遺構全体図（１）
（S＝１／250）……31
第18図　三股ヶ・丸田調査区弥生時代後期
遺構全体図（２）
（S＝１／250）……32
第19図　三股ヶ・丸田調査区弥生時代後期
遺構全体図（３）
（S＝１／250）……33
第20図　三股ヶ・丸田調査区弥生時代後期
遺構全体図（４）
（S＝１／250）……34
第21図　竪穴住居１ ……36
第22図　竪穴住居１出土遺物 ……37
第23図　竪穴住居２ ……38
第24図　竪穴住居２出土遺物 ……39
第25図　竪穴住居３・出土遺物 ……40
第26図　竪穴住居４ ……41
第27図　竪穴住居４出土遺物 ……42
第28図　竪穴住居５・遺物出土状況 ……43
第29図　竪穴住居５出土遺物 ……44
第30図　竪穴住居５外周溝・出土遺物 ……45
第31図　竪穴住居６ ……46
第32図　竪穴住居６出土遺物 ……47
第33図　竪穴住居７ ……48
第34図　竪穴住居７Ａ・Ｂ ……49
第35図　竪穴住居７最終床面 ……50
第36図　竪穴住居７出土遺物（１） ……51
第37図　竪穴住居７出土遺物（２） ……52
第38図　竪穴住居７出土遺物（３） ……53
第39図　竪穴住居８ ……54
第40図　竪穴住居８出土遺物 ……55
第41図　竪穴住居９・出土遺物 ……56

第42図　建物１……56
第43図　建物２……58
第44図　建物３……58
第45図　建物４……59
第46図　建物５……59
第47図　建物６……60
第48図　建物７……60
第49図　建物８……61
第50図　建物９……61
第51図　建物10……62
第52図　建物11……62
第53図　建物12……62
第54図　建物13……62
第55図　建物14・出土遺物……63
第56図　建物15・柱穴１、２出土遺物……64
第57図　建物16……65
第58図　建物17……65
第59図　建物18……66
第60図　建物19……66
第61図　建物20……67
第62図　建物21……67
第63図　建物22……68
第64図　建物23……68
第65図　建物24……69
第66図　建物25……69
第67図　建物26……70
第68図　建物27……70
第69図　建物28……70
第70図　井戸１……71
第71図　井戸１出土遺物……72
第72図　井戸２・出土遺物（１）……73
第73図　井戸２出土遺物（２）……74
第74図　井戸３……75
第75図　井戸３出土遺物（１）……76
第76図　井戸３出土遺物（２）……77
第77図　井戸３出土遺物（３）……78
第78図　井戸４……79
第79図　井戸４出土遺物……80
第80図　井戸５……81
第81図　井戸５出土遺物（１）……82
第82図　井戸５出土遺物（２）……83
第83図　井戸６……84
第84図　井戸６出土遺物……85
第85図　土壙１……86
第86図　土壙１出土遺物（１）……87
第87図　土壙１出土遺物（２）……88
第88図　土壙１出土遺物（３）……89
第89図　土壙１出土遺物（４）……90
第90図　土壙２・出土遺物……92
第91図　土壙３・出土遺物……93
第92図　土壙４……93
第93図　土壙５・出土遺物……94
第94図　土壙６……94
第95図　土壙７・８・９……96
第96図　土壙10・出土遺物……97
第97図　土壙11・出土遺物……98
第98図　土壙12・出土遺物（１）……98
第99図　土壙12出土遺物（２）……99
第100図　土壙13……99
第101図　土壙13出土遺物（１）……100
第102図　土壙13出土遺物（２）……101
第103図　土壙13出土遺物（３）……102
第104図　土壙14・出土遺物……102
第105図　土壙15・出土遺物……102

第106図　土壙16・出土遺物（1）……104
第107図　土壙16出土遺物（2）……105
第108図　土壙17・出土遺物……106
第109図　土壙18・出土遺物……106
第110図　土壙19・出土遺物……107
第111図　土壙20……107
第112図　土壙21・出土遺物……109
第113図　土壙22……109
第114図　土壙23……109
第115図　土壙23出土遺物……110
第116図　土壙24・出土遺物……111
第117図　土壙25……111
第118図　土壙25出土遺物（1）……112
第119図　土壙25出土遺物（2）……113
第120図　土壙25出土遺物（3）……114
第121図　土壙26・出土遺物……115
第122図　土壙27・出土遺物……116
第123図　土壙28・出土遺物……117
第124図　土壙29……118
第125図　土壙30……118
第126図　土壙31……118
第127図　土壙31出土遺物（1）……119
第128図　土壙31出土遺物（2）……120
第129図　土壙31出土遺物（3）……121
第130図　土壙32・出土遺物……122
第131図　土壙33～36……123
第132図　土壙37・出土遺物……124
第133図　土壙38・出土遺物……125
第134図　土壙39・出土遺物……125
第135図　土壙40・出土遺物……127
第136図　土壙41・出土遺物……127
第137図　土壙42……128
第138図　土壙43・出土遺物……128
第139図　土壙44・出土遺物……129
第140図　土壙45……129
第141図　土壙46……129
第142図　土壙46出土遺物（1）……130
第143図　土壙46出土遺物（2）……131
第144図　土壙47～51……132
第145図　土壙52……133
第146図　土壙53……133
第147図　土壙53出土遺物……134
第148図　土壙54……135
第149図　土壙55……135
第150図　土壙55出土遺物……136
第151図　土壙墓1・出土遺物……137
第152図　土器棺2副葬品……138
第153図　土器棺墓1検出状態および棺…139
第154図　土器棺墓2～5検出状態……140
第155図　土器棺2……141
第156図　土器棺3……142
第157図　土器棺4……143
第158図　土器棺5……144
第159図　土器棺墓6（右）・7（左）…144
第160図　土器棺6……145
第161図　土器棺7……145
第162図　土器棺墓8検出状態……146
第163図　土器棺8……147
第164図　土器棺墓9検出状態および棺…148
第165図　溝7・出土遺物……149
第166図　溝8……149
第167図　溝9……150
第168図　溝14……150
第169図　溝19……151

第170図　溝20出土遺物 ……151
第171図　溝26・27・33 ……152
第172図　8・9ＢＣ区土器溜り出土遺物（1） ……154
第173図　8・9ＢＣ区土器溜り出土遺物（2） ……155
第174図　9・10ＡＢ区土器溜り出土遺物 ……156
第175図　窪地1出土遺物 ……157
第176図　包含層、柱穴等出土遺物（1）…158
第177図　包含層、柱穴等出土遺物（2）…159
第178図　包含層、柱穴等出土遺物（3）…160
第179図　包含層、柱穴等出土遺物（4）…161
第180図　包含層、柱穴等出土遺物（5）…162
第181図　百間川原尾島遺跡北部　古墳時代遺構全体図（S＝1／1000）…163
第182図　三股ヶ・丸田調査区古墳時代遺構全体図（1）（S＝1／250）……165
第183図　三股ヶ・丸田調査区古墳時代遺構全体図（2）（S＝1／250）……166
第184図　三股ヶ・丸田調査区古墳時代遺構全体図（3）（S＝1／250）……167
第185図　三股ヶ・丸田調査区古墳時代遺構全体図（4）（S＝1／250）……168
第186図　竪穴住居10 ……169
第187図　竪穴住居10出土遺物 ……170
第188図　竪穴住居11 ……170
第189図　竪穴住居12 ……171
第190図　竪穴住居12出土遺物 ……172
第191図　竪穴住居13・出土遺物 ……173
第192図　竪穴住居14 ……174
第193図　竪穴住居14出土遺物（1） ……175
第194図　竪穴住居14出土遺物（2） ……176
第195図　竪穴住居15・出土遺物 ……177
第196図　竪穴住居16・出土遺物 ……178
第197図　竪穴住居19 ……179
第198図　竪穴住居19出土遺物（1） ……180
第199図　竪穴住居19出土遺物（2） ……181
第200図　竪穴住居20・出土遺物 ……182
第201図　竪穴住居21・出土遺物（1） …183
第202図　竪穴住居21出土遺物（2） ……184
第203図　竪穴住居21出土遺物（3） ……185
第204図　竪穴住居22 ……185
第205図　竪穴住居22出土遺物 ……186
第206図　竪穴住居23 ……187
第207図　竪穴住居23出土遺物 ……188
第208図　竪穴住居24 ……188
第209図　竪穴住居24出土遺物 ……189
第210図　竪穴住居25・出土遺物 ……191
第211図　竪穴住居26・出土遺物 ……192
第212図　竪穴住居27・出土遺物 ……192
第213図　竪穴住居28 ……193
第214図　竪穴住居29 ……193
第215図　竪穴住居30・出土遺物 ……194
第216図　竪穴住居31 ……194
第217図　竪穴住居31出土遺物 ……195
第218図　竪穴住居32・出土遺物 ……196
第219図　竪穴住居33 ……196
第220図　建物29 ……197
第221図　建物30 ……198

第222図　建物31 ……199
第223図　建物32 ……200
第224図　建物34 ……201
第225図　建物35 ……202
第226図　建物36・出土遺物 ……203
第227図　建物37 ……203
第228図　建物38（上）・39（下） ……204
第229図　建物41（左）・42（右） ……206
第230図　建物43・出土遺物 ……207
第231図　建物44（上）・45（下） ……208
第232図　建物46・出土遺物 ……209
第233図　建物47 ……210
第234図　井戸７（S＝１／40） ……211
第235図　井戸７出土遺物（１） ……212
第236図　井戸７出土遺物（２） ……213
第237図　井戸７出土遺物（３） ……214
第238図　井戸７出土遺物（４） ……215
第239図　井戸７出土遺物（５） ……216
第240図　井戸７出土遺物（６） ……217
第241図　井戸８ ……219
第242図　井戸８出土遺物（１） ……220
第243図　井戸８出土遺物（２） ……221
第244図　溝35 ……222
第245図　溝36 ……222
第246図　溝37出土遺物 ……222
第247図　溝35・36出土遺物 ……223
第248図　溝38・出土遺物（１） ……224
第249図　溝38出土遺物（２） ……225
第250図　溝38出土遺物（３） ……226
第251図　溝38出土遺物（４） ……227
第252図　溝39・出土遺物 ……228
第253図　溝40（上）・溝41（下） ……228
第254図　溝42・出土遺物 ……229
第255図　溝43・44 ……229
第256図　溝45 ……229
第257図　溝47（左）・48（右） ……230
第258図　包含層、柱穴等出土遺物 ……231
第259図　百間川原尾島遺跡北部　古代・中世遺構全体図（１／1000） …233
第260図　三股ヶ・丸田調査区古代・中世遺構全体図（１）（１／250） …235
第261図　三股ヶ・丸田調査区古代・中世遺構全体図（２）（１／250） …236
第262図　三股ヶ・丸田調査区古代・中世遺構全体図（３）（１／250） …237
第263図　三股ヶ・丸田調査区古代・中世遺構全体図（４）（１／250） …238
第264図　建物48 ……239
第265図　建物49 ……240
第266図　建物50 ……241
第267図　建物51 ……241
第268図　建物52 ……241
第269図　建物53 ……242
第270図　建物54・出土遺物 ……243
第271図　建物55・出土遺物 ……243
第272図　建物56 ……243
第273図　建物57 ……244
第274図　建物58 ……245
第275図　井戸９ ……246
第276図　井戸９出土遺物（１） ……247
第277図　井戸９出土遺物（２） ……248
第278図　井戸10・出土遺物 ……249
第279図　土壙56 ……250
第280図　土壙墓２ ……251

第281図　土壙墓３ ……251
第282図　土壙墓４ ……252
第283図　土壙墓５ ……252
第284図　溝50・51・52 ……253
第285図　溝52出土遺物（１） ……254
第286図　溝52出土遺物（２） ……255
第287図　包含層、柱穴等出土遺物 ……256
第288図　調査区北壁土層断面図（１）
（Ｓ＝１／80） ……257
第289図　調査区北壁土層断面図（２）
（Ｓ＝１／80） ……258
第290図　弥生時代前期の遺構全体図
（既報告調査区を含む）
（Ｓ＝１／2000） ……260
第291図　弥生時代前期の遺構全体図
（Ｓ＝１／500） ……261
第292図　前期水田層出土遺物 ……262
第293図　溝53・出土遺物 ……262
第294図　溝54・出土遺物 ……262
第295図　溝55・出土遺物 ……262
第296図　中期水田層出土遺物 ……263
第297図　弥生時代中期の遺構全体図
（既報告調査区を含む）
（Ｓ＝１／2000） ……264
第298図　弥生時代中期の遺構全体図
（Ｓ＝１／500） ……265
第299図　弥生時代後期の水田全体図
（既報告調査区を含む）
（Ｓ＝１／2000） ……266
第300図　弥生時代後期の水田全体図
（Ｓ＝１／500） ……267
第301図　後期水田の稲株痕
（Ｓ＝１／80） ……268
第302図　後期水田層出土遺物 ……269
第303図　島状高まり２出土遺物 ……269
第304図　大畦畔断面図
（Ｓ＝１／30） ……269
第305図　島状高まり断面図
（Ｓ＝１／80） ……269
第306図　弥生時代後期の水田全体図
（既報告調査区を含む）
（Ｓ＝１／2000） ……270
第307図　弥生時代後期の遺構全体図
（Ｓ＝１／500） ……271
第308図　土壙57（左）・58（中）・59
（右） ……272
第309図　溝56（左端）・57（左）・58
（中）・59（右端） ……272
第310図　溝60（左）・61（中）・62
（右） ……273
第311図　溝63 ……273
第312図　溝64（左）・65（右） ……273
第313図　溝66 ……274
第314図　溝67 ……274
第315図　溝69・70・72・73 ……275
第316図　溝70出土遺物 ……275
第317図　溝76 ……276
第318図　溝77・出土遺物 ……276
第319図　溝78 ……276
第320図　溝79 ……276
第321図　古墳時代以降の遺構全体図
（既報告調査区を含む）
（Ｓ＝１／2000） ……277
第322図　古墳時代以降の遺構全体図

（S＝1／500）……278
第323図　溝80 ……279
第324図　溝82・出土遺物 ……280
第325図　溝83 ……280
第326図　溝84・出土遺物 ……280
第327図　溝85 ……280
第328図　溝86 ……280
第329図　包含層出土の遺物 ……281
第330図　左岸用水調査区の遺構全体図
（S＝1／500）……282
第331図　調査区北壁土層断面図（1）
（S＝1／80）……283
第332図　調査区北壁土層断面図（2）
（S＝1／80）……284
第333図　稲株痕跡 ……285
第334図　包含層出土遺物 ……285
第335図　弥生時代後期の集落 ……287
第336図　弥生時代後期建物の軸線 ……288
第337図　8－11・ZA区洪水砂埋没遺構
……290
第338図　「籠目」復元 ……294
第339図　古墳時代竪穴住居 ……296
第340図　古墳時代建物群 ……297

表　目　次

表1　百間川原尾島遺跡　調査一覧 ……15

図　版　目　次

図版1　1　岡山平野と百間川（西から）
2　百間川原尾島遺跡付近
図版2　1　三股ヶ・丸田調査区　作業風景（北東から）
2　三股ヶ・丸田調査区　調査区の状況（北東から）
図版3　1　三股ヶ・丸田　近世土取り跡（南から）
2　三股ヶ・丸田　低位部下層の遺構（北東から）
図版4　1　溝3・4（南から）
2　三股ヶ・丸田　弥生後期水田（北東から）
図版5　1　三股ヶ・丸田　7～9－C・D区検出遺構（北東から）
2　三股ヶ・丸田　7～9－C・D区検出遺構（南東から）
図版6　1　竪穴住居1（西から）
2　竪穴住居2（東から）
図版7　1　竪穴住居3（南東から）
2　竪穴住居4（南西から）
図版8　1　竪穴住居5（北から）

2　竪穴住居５（西から）

図版９　1　三股ケ・丸田　８～11Ａ区検出の遺構（南東から）

2　建物28（北東から）

図版10　1　竪穴住居６　覆土下面（上）、床面（下）（南西から）

2　竪穴住居９（北東から）

図版11　1　三股ケ・丸田　９・10－Ｚ・Ａ区検出の遺構（北西から）

2　三股ケ・丸田　９・10－Ｚ・Ａ区検出の遺構（北東から）

図版12　1　竪穴住居７　洪水堆積層下での検出状態（南から）

2　竪穴住居７　床面（南から）

図版13　1　三股ケ・丸田　８・９－Ｂ・Ｃ区検出の建物（弥生・古墳）（北東から）

2　建物５（上）、建物６（下）（東から）

図版14　1　建物７（上）、建物８（下）（北から）

2　建物14（東から）

図版15　1　建物15（南から）

2　建物18（北から）

図版16　1　井戸１（北から）

2　井戸２（東から）

3　井戸３（南東から）

図版17　1　井戸４（南から）

2　井戸５（北東から）

図版18　1　井戸４底部（南から）

2　井戸５底部（北東から）

3　井戸６（南西から）

図版19　1　土壙１（南から）

2　土壙１底面（南から）

図版20　1　土壙３（北から）

2　土壙６（南西から）

図版21　1　土壙８（北東から）

2　土壙13（南東から）

図版22　1　土壙16（北西から）

2　土壙24（東から）

図版23　1　土壙25（北から）

2　土壙31（北から）

図版24　1　土壙38（北東から）

2　土壙40（南西から）

図版25　1　土壙44（東から）

2　土壙50（北西から）

図版26　1　土壙53（南東から）

2　土壙墓１（南から）

図版27　1　土器棺墓１（北から）

2　土器棺墓２～５（北西から）

図版28　1　土器棺墓２（南から）

2　土器棺墓２（南から）

3　土器棺墓３、４（南西から）

図版29　1　土器棺墓８、９（西から）

2　溝７（北東から）

図版30　1　三股ケ・丸田　８・９－Ｂ・Ｃ区土器溜まり（北東から）

2　三股ケ・丸田　９・10－Ａ・Ｂ区土器溜まり

図版31　1　発掘調査状況

2　竪穴住居10（南から）

図版32　1　竪穴住居11（南から）

2　竪穴住居12（西から）

図版33　1　竪穴住居13（南から）

2　竪穴住居15（南から）
図版34　1　竪穴住居14（北西から）
2　竪穴住居14　貯蔵穴（南東から）
図版35　1　竪穴住居16（西から）
2　竪穴住居19（南東から）
図版36　1　竪穴住居12・21・27（東から）
2　竪穴住居23（南から）
図版37　1　竪穴住居22（北東から）
2　竪穴住居22　竈（南東から）
図版38　1　竪穴住居24（南から）
2　竪穴住居25（西から）
図版39　1　竪穴住居31（南から）
2　竪穴住居31　竈（南から）
図版40　1　三股ケ・丸田　9・10－Z・A区古墳時代～中世の遺構
2　竪穴住居32（北から）
図版41　1　竪穴住居30（南西から）
2　建物29（北西から）
図版42　1　建物31（北東から）
2　三股ケ・丸田　9・10－A・B区古墳時代建物群（南から）
図版43　1　建物35（東から）
2　建物41～43（北から）
図版44　1　建物46（西から）
2　井戸7（北から）
図版45　1　井戸7　2層下部（北から）
2　井戸7　底部（南東から）
3　井戸8　底部（西から）
図版46　1　溝38（東から）・断面
2　三股ケ・丸田　5・6－C・D区古墳時代～中世の遺構（北東から）
図版47　1　三股ケ・丸田　8・9－B・C区中世の遺構（北東から）
2　三股ケ・丸田　9・10－A・B区中世の遺構（北東から）
図版48　1　三股ケ・丸田　5・6－C・D区中世の下がり（南から）
2　建物50、51（西から）
図版49　1　井戸9遺物出土状況（南から）
2　井戸9底部（南から）
図版50　1　土壙56
2　土壙墓2～4
図版51　1　川内　30C区土層断面（南から）
2　川内　26～28－C・D区の弥生時代前期水田（西から）
図版52　1　溝53～55（北から）
2　川内　29・30－C・D区の弥生時代中期水田（西から）
図版53　1　川内　25～28－C・D区の弥生時代後期水田（西から）
2　川内　26D区の稲株痕跡
図版54　1　川内　29～32－C・D区の弥生時代後期水田（東から）
2　川内　29～32－C・D区の弥生時代後期の遺構（西から）
図版55　竪穴住居1（27）・竪穴住居5（44～51）〈1〉出土遺物
図版56　竪穴住居5（47～56）〈2〉・竪穴住居4（39・41）・竪穴住居6（61～64）出土遺物
図版57　竪穴住居7（82～90）・井戸1（10

4～108）出土遺物
図版58　井戸２（110～117）・井戸３（123）〈１〉出土遺物
図版59　井戸３出土遺物〈２〉
図版60　井戸３（129・134）〈３〉・井戸５（153～167）出土遺物
図版61　井戸４（138・143）・井戸６（171・176）・土壙１（177・189）〈１〉出土遺物
図版62　土壙１（186～193）〈２〉・土壙２（196）出土遺物
図版63　土壙13出土遺物
図版64　土壙16出土遺物
図版65　土壙10（203・205）・土壙17（244）・土壙23（252～260）・土壙24（266）出土遺物
図版66　土壙19（249）・土壙25（270～280）〈１〉出土遺物
図版67　土壙25出土遺物
図版68　土壙31（316～326）・土壙28（308）・土壙39（347）・土壙41（357）出土遺物
図版69　土壙44（369～中段）・土壙47（381）・土壙53（385）出土遺物
図版70　土壙46（370～379）・土壙55（391・394）出土遺物
図版71　土壙29（上段）・土壙38（345）・土壙43（363・364）・建物15（98・100）出土遺物
図版72　土器棺１（397・398）・土器棺３（401）・土器棺４（402・403）
図版73　土器棺２（399・400）・土器棺５（404）
図版74　土器棺６（405・406）・土器棺８（409・410）
図版75　土器棺７（408）・土器棺９（411・412）・溝20（417・418）・８－９ＢＣ区土器溜まり（421・423）出土遺物
図版76　８－９ＢＣ区土器溜まり（419～424）・９-10Ａ区土器溜まり（426・右下）・窪地１（432・438）出土遺物
図版77　包含層・柱穴等出土遺物
図版78　竪穴住居14出土遺物
図版79　竪穴住居19（501～519）・竪穴住居24（563・564）出土遺物
図版80　竪穴住居24（553・557）・竪穴住居27（576）・竪穴住居30（579・580）・竪穴住居31（581・590）出土遺物
図版81　井戸７出土遺物〈１〉
図版82　井戸７出土遺物〈２〉
図版83　井戸７出土遺物〈３〉
図版84　井戸８出土遺物（647～657）・溝38（671～681）〈１〉出土遺物
図版85　溝38出土遺物〈２〉
図版86　溝38（675～696）〈３〉・土器溜まり（709）・井戸９（720～740）出土遺物
図版87　石器および青銅器
図版88　弥生時代の鉄器
図版89　弥生時代～中世の鉄器および石製品・玉類
図版90　プラントオパール顕微鏡写真（×250）

第１章　地理的・歴史的環境

百間川は、江戸時代はじめの寛文９年（1669年）から貞享４年（1687年）にかけて、旭川の放水路として造られた一大人工河川である。

それ以前の旭川は、竜の口山系の西端にあたる岡山市中原付近で平野に流れ出す際に分流し、大きくは、現在の流路のように南下するものと、岡山市米田と大多羅町の間の低位部に向かって南東へ流れるものと二つの流れがあったようである。

ところが、岡山城主であった宇喜田秀家が天正18年（1590年）から岡山城の大改築を行い、その際、旭川の流路を城の堀として取り込むために付け替え、ほぼ現在の姿に変えてしまった。この新しい流路は城の北方で大きく屈曲する不自然なものであったため、これ以後、岡山城下は度々の洪水の被害を受けることとなった。

この洪水を防ぐために熊沢蕃山や津田永忠により考え出されたのが百間川である。すなわち、岡山城と岡山市中原の中間付近に位置する岡山市竹田付近の東岸堤防筋に、「荒手」と称する洪水の越流堤を設け、ここからあふれ出た洪水を操山の北麓へ導き、そこから山裾に沿って東流させ、やがて操山丘陵の東端である岡山市米田の通称「大曲り」から南流させ、海へ流そうという構想である。この構想は寛文９年（1669年）現実に移され、その後、百間川内には洪水の力を更に弱めたり、沈砂の機能を備えた、第２、第３の「荒手」が築かれ、完成をみたのである。これが現在の百間川までに至っている。百間川という名の由来も「この荒手」の幅が導流堤を含め100間あったことによる（註１）。百間川の流路延長は岡山市竹田から河口の沖元までで約13kmにおよぶ。

第１図　百間川の位置

百間川の本流である旭川は、

1．百間川原尾島遺跡　2．百間川沢田遺跡　3．百間川兼基・今谷遺跡
4．百間川米田遺跡　5．備前車塚古墳　6．唐人塚古墳　7．賞田廃寺　8．井手廃寺
9．山王山古墳　10．乙多見遺跡　11．雄町遺跡　12．幡多廃寺　13．赤田遺跡
14．沢田大塚古墳　15．金蔵山古墳　16．旗振台古墳　17．操山103号墳
18．操山百山古墳　19．網浜茶臼山古墳　20．操山109号墳　21．網浜廃寺

第２図　百間川周辺遺跡分布図（S＝1/50,000）

吉井川・高梁川とともに岡山三大河川の一つに数えられる。その源は岡山県最北端の蒜山盆地の西南端、朝鍋鷲ヶ山（1081ｍ）に発し、真庭郡川上村をはじめとして、３村・８町・１市を流れ下り、岡山市江並で瀬戸内海に注ぐ。流路延長は142㎞に達する。

その上流域は早壮年期の侵食を示す（註２）山容の中国山地内にある。海抜1000～1100ｍの山々がそびえ、その谷間では古代より製鉄業が盛んに行われた。とくに、江戸時代から明治期にかけては大規模なたたら製鉄（註３）が盛行し、これに伴う大量の樹木の伐採は、岡山市における洪水の頻発と密接な関係をもつといわれる。

中流域はかつて隆起準平原の典型といわれた吉備高原一帯で、海抜400～500ｍの高原を深く削って流れる。この吉備高原の南端にあるのが海抜257ｍの竜の口丘陵で、その西端から、長い谷を下ってきた旭川はどっと平野へ流れ出す。

このように旭川の流域は山がちで、総面積の82.5％は山地によって占められ、平地はわずか14.7％にすぎない。しかも平地の大部分は岡山平野である（註１）。したがって大量の土砂が侵食によって運ばれ、下流の平野部でいっきに吐き出されることになる。

さてここで、百間川の位置する旭川東岸の平野（以下旭東平野と呼ぶ）について、その地理的な環境をみてみたい。この旭東平野は、地形的にはかなり外界から閉鎖された状態にあるといえる。西は旭川が流れ、北には竜の口丘陵、南には操山丘陵が長く横たわっている。この三方向の閉鎖線は強固であり、明瞭な境界線となりうる。これに対して東はやや閉鎖性が弱い。しかし、南東には芥子山を中心とする丘陵があり、北東には穴甘山王山丘陵が北から派生し、この両丘陵の間も低平ではあるが丘陵状を呈している。古代以前においては、一つの地域として認識しやすい地理的条件にあったといえる。

このように、旭東平野は単一地域としてのまとまりをもっているが、他地域との連絡は困難ではない。西では、旭川を渡れば旭川西岸の平野部が続き、20㎞離れた高梁川まで平野が連続している。東へは、芥子山と山王山の間の小さな谷部を遡れば、幅広く、低い峠を越えて、砂川流域の平野部に出る。この道は現在国道２号線やJR山陽本線が走っている。この平野部からさらに３㎞程東へ平野部を行けば吉井川に達し、北へ砂川を遡れば山陽町の広い盆地部に至る。また、旭川の水運もあり、その上、操山丘陵と芥子山の間では、干拓以前には海岸線が入り込んでいたと推定されることから、航海船の定泊も不可能ではない。むしろ、旭東平野は交通の要所ともいえる。奈良時代、この平野に国府が置かれたことは、きわめて自然な成り行きであったとも思われる。

この旭東平野には縄文時代以後、数多くの遺跡が形成されるが、その基盤となっている平野の地学的な構造について略述しておきたい。

百間川遺跡群のうち、原尾島遺跡や沢田遺跡では、微高地を掘り下げると、やがて砂層が現

われるが、その上面には腐植物が薄層をつくって一面に堆積している。その面の高度は海抜50cm前後であるが、それに連なると考えられる腐植物を資料として、広島大学の協力で^{14}C年代測定を試みたところ6005±$\frac{105}{100}$ y. B. P.（HR−095）の年代を得た。これに対しては、この腐植物の載った砂層が縄文海進最盛期の三角州堆積物とみなされている（註4）。

前述のように、旭川は長い丘陵地帯を侵食して深い河谷を形成し、岡山市中原で一気に平野部へ注ぐ。このため、この地点で扇状地を形成し、その末端からは低平な三角州地帯を生じる。旭東平野では、中原付近を頂点とし、東南方向へ緩く傾く扇状地が形成され、その末端は4mの等高線付近にあたる。このため、この付近には国府市場・雄町・清水などの湧泉が分布するという（註4）。扇状地の末端から海側は三角州低地になっているが、この三角州地帯が弥生小海退に伴う浅谷の開削作用を受け、分断されたものが微高地となっていて、自然堤防の微高地とは異なるとされる。（註4）。この三角州の微高地上に遺跡が展開する。

なお、JR 赤穂線以東の上道地区や平野北東部の東岡山地区は旭川の堆積作用が及ばないため、広範囲に後背湿地が残っていたとされる（註4）。

地理的環境についての説明はこれで終わり、次に、歴史的環境について述べることとする。

旭東平野周辺で確認されたもっとも古い遺物として、操山旗振台北遺跡（註5）出土のナイフ形石器がある。後期旧石器時代のもので、旧石器時代の遺物としてはこれのみが付近で確認されたものである。

縄文時代の遺跡としては、これまで旭東平野では、百間川遺跡群の調査の端緒となった、国道2号線百間川橋建設工事の際の縄文土器の出土と雄町遺跡（註6）出土の晩期の土器しか知られていなかった。しかし、改修工事に伴う発掘調査の進行によって、次々と新しい事実が発見され、今や、百間川の各地から縄文土器の出土が相継いでいる。もっとも古いものでは沢田遺跡の旧河道から出土した中期の土器片が2片ある（註7）。これについては磨滅が激しいため、また旧河道からの出土ということもあって、上流域あるいは丘陵部からの流入の可能性が考えられる。しかし、同じく沢田遺跡から出土した後期終末の凹線文土器（註7）については大形の破片で磨滅も少なく、この付近での居住が推測されることとなった。1984年度には百間川橋下の微高地内から、一定の範囲でやはり後期終末の土器片の散布が確認された。そして1987年度には、沢田遺跡の東端の丘陵裾部から微高地上にかけて、多量の後期後半の彦崎KⅡ式土器片の散布がみつかり（註8）、その包含層の下では貯蔵穴も確認されたことから、この時期からすでに低地部への人々の進出がみられ、定住が始まっていたことが明らかになった。

縄文時代晩期の遺物は雄町遺跡をはじめ、百間川遺跡群すべての遺跡から出土している。なかでも、百間川沢田遺跡からは多量の出土があり、これに伴って、サヌカイト製の打製石鏃や石庖丁形打製石器の出土がみられ（註8）、農耕の開始を遺物の面から裏付けようとしている。

これに対して、水田や堰等の遺構は今だ検出されず、旭東平野における水稲耕作の開始は今だ弥生時代前期中葉から遡りえていない。

弥生時代前期の遺跡は縄文時代晩期から続くものが多い。旭東平野では雄町遺跡・百間川原尾島遺跡・百間川沢田遺跡・百間川米田遺跡などが知られているが、やはり、百間川遺跡群の調査の進展により、新しい事実が判明している。

1984年度には百間川原尾島遺跡で前期後半の水田が検出されたが、1986年度には百間川沢田遺跡でやはり前期の水田が2面重なって検出され（註8）、下層のものは前期の中葉ではないかと考えられている。これら前期の水田は地形のたわんだ部分に作られたものが多く、全体に等高線に平行した方向に長くなる傾向があり、後期の方眼状の規格化された形状とは大きく異なる。また水田面積も小さいようである。

百間川沢田遺跡では前期中葉の環濠集落が確認された（註8）。幅4m、深さ2mの環濠を、90×100mの卵形にめぐらせた集落で、環濠の内側から竪穴住居4軒、円形周溝遺構2基が検出された。岡山県内では初の確実な検出例であり、今後の類例が注目される。

また、百間川原尾島遺跡の旧河道では、前期の杭列が水路を横断する形で10mにわたって打ち込まれているのが確認され、かなり大規模な灌漑土木工事が実施されていたことが明らかとなった（註9）。

このように、旭東平野では、すでに弥生時代前期にはかなり大規模な水田経営が行なわれていたことが考えられ、その力を生みだす人的結合も進んでいたことが想定される。それに対して、環濠集落の存在がどういう意味をもつのか、今後検討されるべき課題である。

弥生時代中期の遺跡は前述の遺跡の他に、赤田遺跡（註10）、乙多見遺跡（註11）などがある。赤田遺跡では高杯形土器で蓋をした甕棺墓が出土している。百間川遺跡群の中では百間川兼基・今谷遺跡が中心的な位置を占めるようになり、多くの遺跡や遺物が集中して出土している（註12）。なかでも、多量のガラス溶滓や20数棟にものぼる掘立柱建物の存在は注目され、ガラス工房の可能性も考えられている。この遺跡の南に位置する操山丘陵の谷部からは3個の銅鐸が出土していて（註13）、これとの関連も注意される。

弥生時代後期になると遺跡の数はさらに増加するが、それと同時に、微高地間には水田がびっしりと展開し、今日と変わらぬ風景がみられるようになる。この水田は百間川の外へも当然続いていくもので、藤原遺跡（註14）の調査などでも確認されている。百間川遺跡群の中では百間川原尾島遺跡が母村的な大規模集落に成長し、各住居跡からガラス小玉や銅鏃などの優秀な遺物を出土している。また、周溝をめぐらせた住居なども検出されている。原尾島遺跡はその後も長く、中心集落としての姿を保っていく。

弥生時代の最終末には、あたかも古墳時代の到来を招くかのように、大洪水が旭東平野を被

いつくす。百間川遺跡群内の各所で厚い洪水砂の堆積が確認されている。

古墳時代の象徴である前方後円墳は旭東平野の周縁の丘陵にも多く築造されている。なかでも、操山丘陵では、特殊器台形埴輪の出土が知られている網浜茶臼山古墳（全長74m）（註15）や操山109号墳（全長74m）（註15）に始まり、湊茶臼山古墳（全長150m）（註16）、そして金蔵山古墳（全長165m）（註17）と続く、首長墳の系譜がたどられ、まさに旭東平野に君臨した首長の奥津城にふさわしい。これに対して、三角縁神獣鏡11面を含む、総数13面の鏡を出土し、小林行雄氏の「同笵鏡論」（註18）の中で重要な位置を占める、竜の口丘陵の独立墳、備前車塚古墳（註19）は、吉備の最古式古墳の中で例外的に特殊器台形埴輪をもたず、その孤立性が注意されていたが、最近では、竪穴式石室の使用石材からも、その特異性が指摘されている（註20）。古墳時代の集落遺跡は弥生時代後期からさらに増加するようである。方形の住居が一般的となり、やがて5世紀の末からはカマドが造りつけられるようになる。掘立柱建物の住居も登場するようで、それぞれの集落で定着の動きがみられる。百間川沢田遺跡では、多くの井戸が掘られ、1軒の住居が1基の井戸を所有することが考えられるという（註21）。

飛鳥・奈良時代の代表的な遺跡は寺院跡である。旭東平野でも賞田廃寺（註22）幡多廃寺（註23）・井寺廃寺の存在が知られている。このうち前の2廃寺は発掘調査が実施され、いずれも奈良時代の盛期には壇上積基壇で整備され、奈良三彩などの優秀な遺物を出土していることから、これらの寺院の檀那であった氏族（おそらく上道氏）が、中央政府ときわめて強い関係にあったことが知られる。また、この三ヵ寺の建築・修復時期を考えると補完関係にあることが指摘され（註24）、これら三ヵ寺それぞれの建立者である氏族が互いに強いきずなで結ばれていたことが想定されている。

奈良時代にはこの旭東平野に備前国府が置かれていたといわれている。しかし、その所在地には諸説があり（註25）、いまだ明らかにされてはいない。しかし、これを傍証するかのような資料として、百間川米田遺跡における倉庫群（註26）と百間川原尾島遺跡の人形、斎串等の出土した溝跡（註27）がある。前者には「上三宅」と墨書されたり、「官」の字を押した須恵器が出土して、官衙関連施設の可能性が強く、国府の物資積み出し港かともいわれている。後者は「祓」の儀式をとり行なった場所ではないかといわれ、国府の辺境という位置から、この地が選ばれたのではないかと考えている。

なお、奈良時代の文献資料として著名な『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』（天平19年(747年)には、備前国の水田の記載があり、その中に「上道郡五十町　大邑良葦原東山守江　西石間江南海　北山」（註28）という字が見られる。この「大邑良」を現在の「大多羅」に、「石間」を現在の「岩間」に比定する考えがある。この考えに立てば、百間川米田遺跡は、茶臼山の南麓付近にあった大安寺領と隣接していたこととなる。

平安時代以降の旭東平野の状況はあまり明確ではないが、百間川原尾島遺跡からは多量の輸入陶磁器を含む中世遺物が出土し、近年の発掘では規格された集落の一部が明らかになっている（註29）。また百間川米田遺跡では、すでに多量の畿内産瓦器が出土し、その活発な交流が知られている。　（岡本寛久）

註

（註1）これらの歴史については『百間川小史』建設省・岡山県・岡山市　1986年に負うところが多い。

（註2）光野千春・沼野忠之・高橋達郎『岡山の地学』山陽新聞社　1982年

（註3）柳瀬昭彦他『奥土用・神庭谷製鉄遺跡』中国電力俣野川発電所埋蔵文化財発掘調査委員会　1986年

（註4）藤原健蔵・白神宏「岡山平野中部の沖積層と海水準変化」『瀬戸内海地域における完新世海水準変動と地形変化』藤原健蔵（広島大学文学部）　1986年

（註5）鎌木義昌「第1編　原始時代」『岡山市史・古代編』岡山市　1962年

（註6）高橋護・正岡睦夫他「雄町遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告』岡山県教育委員会　1972年

（註7）岡田博・浅倉秀昭・二宮治夫・中野雅美・内藤善史他「百間川沢田遺跡2・百間川長谷遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59』岡山県教育委員会　1985年

（註8）平井勝・岡本寛久他「百間川沢田遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84』　1993年

（註9）『岡山県埋蔵文化財報告15』　1985年
河本清「百間川遺跡群　水田跡が語る稲作技術」『原像日本⑤発掘と復元』旺文社　1988年

（註10）出宮徳尚・根木修・間壁忠彦・間壁葭子・水内昌康『幡多廃寺発掘調査報告』岡山市遺跡調査団　1975年

（註11）正岡睦夫「岡山市乙多見における溝改修工事に伴なう出土土器」『岡山県埋蔵文化財報告3』岡山県教育委員会　1973年

（註12）正岡睦夫・下澤公明・高畑知功・内藤善史「百間川兼基遺跡1・百間川今谷遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告51』岡山県教育委員会　1982年

（註13）鎌木義昌「岡山県兼基遺跡」『日本農耕文化の生成』　1961年

（註14）高畑知功「Ⅳ．発掘調査報告〔1〕藤原遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告16』岡山県教育委員会　1986年

（註15）宇垣匡雅「竪穴式石室の研究―使用石材の分析を中心に―」『考古学研究』第34巻第1号・第2号　考古学研究会　1987年

（註16）近藤義郎「湊茶臼山古墳」『岡山県史』第18巻　考古資料　岡山県1986年

（註17）西谷真治・鎌木義昌『金蔵山古墳』倉敷考古館　1959年

（註18）小林行雄『古墳時代の研究』青木書店　1961年

（註19）近藤義郎・鎌木義昌「備前車塚古墳」『岡山県史』第18巻　考古資料　岡山県1986年

（註20）（註15）に同じ

（註21）中野雅美「弥生・古墳時代初頭の井戸」『考古学と関連科学』鎌木義昌先生古希記念論文集刊行会　1988年

（註22）出宮徳尚・伊藤晃・水内昌康『賞田廃寺発掘調査報告』岡山県教育委員会　1971年

（註23）（註10）に同じ

（註24）（註10）に同じ

（註25）高橋護「古地形からみた備前国府」『岡山県埋蔵文化財報告１』岡山県教育委員会　1971年

（註26）井上弘・岡田博・二宮治夫・光永真一他「百間川当麻遺跡２」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告52』岡山県教育委員会　1982年

（註27）『所報　吉備』第６号　岡山県古代吉備文化財センター　1989年

（註28）『岡山県史』編年資料　岡山県　1988年　67ページ　147号文書

（註29）『岡山県埋蔵文化財報告19』岡山県教育委員会　1989年

第2章　調査および報告書作成の経緯

第1節　発掘調査の契機とこれまでの成果

岡山平野を南北に貫流する旭川の東岸に所在する百間川遺跡は、国道2号線の百間川橋をはさんでA地点とB地点の2箇所が周知されていた。昭和43年、建設省が旭川放水路（百間川）の改修工事を計画していることを知った岡山県教育庁文化課は、建設省岡山工事事務所に対し、以下の要望を行った。第1に、改修工事計画予定地には文化財保護法に基づく、周知の遺跡である「百間川遺跡」が所在すること。第2に、事業者である建設省は、文化財保護法に基づく措置、特に昭和32年6月11日閣議了解になった「文化財保護に関する関係官庁間の連絡強化について」の趣旨にそって、事前に文化財の保護に遺漏のないように計らうこと、の大略二点である。これに対して建設省は、河川内の土地買収交渉及び工事施行の調査計画を進めている段階であるとの回答であった。

その後建設省は、計画にそって地元耕作者と土地買収交渉に入り、難航の末昭和49年に決着をみたことから、昭和50年10月には河川敷に工事用道路を施工するなどして、本格的工事に入る姿勢を示した。

岡山県教育委員会は、このような改修事業の状況をふまえ、直ちに協議を申し入れ、実状の聴取と、改修事業に伴う百間川遺跡の取扱いについて協議した。その結果、基本的には埋蔵文化財包蔵地の範囲が確定したならば、当該地は発掘調査が終了した後に改修工事を施工することで合意した。

昭和51年4月には、建設省中国地方建設局岡山河川工事事務所長名で、文化財保護法第57条の3に先立つ事前協議の文書が提出され、これに基づいて協議を重ねた。そして昭和51年9月1日付で、中国地方建設局長より確認調査の依頼文書が提出され、同年11月1日から確認調査を実施するに至った。

確認調査（第1次調査）は、低水路部分の遺跡の確認および古地形の復原と新田サイフォン部分の一部発掘調査で、昭和51年11月1日から昭和52年3月31日まで実施した。その結果、岡山市原尾島（第1微高地）、同沢田（第2微高地）、同兼基・今谷（第3微高地）の3箇所に微高地が広がり、そこに遺跡が所在することが判明した。

昭和52年からは、確認調査の成果を基に、建設省の工事計画にそって発掘調査を進め、現在も継続中である。この間、調査の進展とともに各微高地間にも遺跡の広がりが確認され、また

確認調査では海ではないかと考えられていた岡山市米田（旧当麻遺跡）一帯も、遺跡であることが判明するなど、発掘調査対象範囲は著しく増加した。

百間川遺跡群における遺跡の形成は、縄文時代後期に始まる。沢田遺跡では多量の縄文後期土器とともに貝塚やドングリの貯蔵穴が発見されており、当時の食生活を知る貴重な資料となっている。また、同じ沢田遺跡で水稲農耕開始期の遺構・遺物も発見されており、このうち土器は「沢田式」と命名され、中部瀬戸内地域の基準資料となっている。

弥生時代には原尾島、沢田、兼基・今谷、米田の各遺跡に集落が認められるが、特に沢田遺跡の前期の環濠集落、今谷遺跡のガラス滓と関わる中期の掘立柱建物群は注目される。さらにこれらの集落周辺に広がる前・中・後期の水田、とりわけ洪水砂で埋没した後期水田は延長3㎞にもおよんでおり、水田の様相を知るうえで貴重である。

古墳時代も原尾島、沢田、兼基・今谷、米田の各遺跡に集落が形成されており、竪穴住居、掘立柱建物、井戸、溝などが発見されている。

古代では米田遺跡で規格的に配置された掘立柱建物や倉庫とともに「上三宅」と墨書された須恵器が発見されており、官衙的性格を有する遺跡と考えられる。

中世は米田遺跡で海浜に形成された建物群と、運河と推定される大溝などが発見されている。また原尾島遺跡でも溝で囲まれた建物群や土壙墓などが発見されており、中世村落を考えるうえで貴重な資料となっている。（平井）

第２節　調査の体制

発掘調査は、岡山県教育委員会が建設省中国地方建設局から委託を受け、昭和52年度から実施しており、現在も継続している。調査開始から発掘調査の主管は岡山県教育庁文化課であるが、昭和59年11月からは発掘調査の実施については岡山県古代吉備文化財センターが担当している。

今回報告する原尾島遺跡は、昭和58・59・63・平成元・２年度に実施したものである。調査員は当初の昭和57年度は６名の３班体制であったが、昭和59年度からは８名４班となり、昭和60年度には再び６名３班、さらに昭和62年度からは３名１班となり現在に至っている。

発掘調査にあたっては、遺跡の保護・保存ならびに調査の専門的な指導および助言を得るため、岡山県遺跡保護調査団の推薦を受けた方々に「旭川放水路（百間川）河川改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会」の委員を委嘱している。

旭川放水路（百間川）河川改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会

池葉須藤樹	元岡山市犬島中学校長	鎌木義昌	岡山理科大学教授 岡山県文化財保護審議会委員
近藤義郎	岡山大学名誉教授 岡山県文化財保護審議会委員	角田　茂	元岡山市岡輝中学校教諭
出宮徳尚	岡山市教育委員会文化課	水内昌康	元岡山市桑田中学校長 岡山県文化財保護審議会委員

発掘調査

昭和57（1982）年度

岡山県教育庁文化課

課　　長	早田憲治	課長代理	橋本泰夫
文化財主幹	高原健郎	埋蔵文化財係長	河本　清
主　　任	田中健治	主　　任	遠藤勇次
文化財保護主査	井上　弘（調査担当）	文化財保護主査	柳瀬昭彦（調査担当）
文化財保護主事	浅倉秀昭（調査担当）	文化財保護主事	平井　勝（調査担当）
文化財保護主事	古谷野寿郎（調査担当）	文化財保護主事	岡本寛久（調査担当）
主　　事	石井　茂		

昭和58（1983）年度

岡山県教育庁文化課

課　　長	早田憲治	課長代理	橋本泰夫
課長代理	吉本唯弘	文化財主幹	高原健郎
課長補佐	河本　清	主　　任	遠藤勇次
文化財保護主査	柳瀬昭彦（調査担当）	文化財保護主事	平井　勝（調査担当）
文化財保護主事	古谷野寿郎（調査担当）	文化財保護主事	江見正己（調査担当）
主　　事	楢原充二	文化財保護主事	山本明雄（調査担当）
主　　事	岩崎仁司（調査担当）		

昭和59（1984）年度（４月１日～10月30日）

岡山県教育庁文化課

課　　長	松元昭憲	参　　事	橋本泰夫
課長代理	逸見英邦	課長代理	吉本唯弘
文化財主幹	佐々木清	課長補佐	河本　清
主　　任	古瀬　宏	主　　任	遠藤勇次
文化財保護主査	井上　弘（調査担当）	文化財保護主査	柳瀬昭彦（調査担当）
文化財保護主事	平井　勝（調査担当）	文化財保護主事	岡本寛久（調査担当）
文化財保護主事	江見正己（調査担当）	主　　事	楢原充二
文化財保護主事	平井泰男（調査担当）	文化財保護主事	山本明雄（調査担当）
主　　事	宇垣匡雅（調査担当）		

昭和59（1984）年度（11月１日～３月31日）

岡山県教育庁文化課

課　　長	松元昭憲	課長代理	逸見英邦
課長代理	吉本唯弘	課長補佐	河本　清
主任（兼）	遠藤勇次		

岡山県古代吉備文化財センター

所長（兼）	松元昭憲	次　　長	橋本泰夫
総務課長	佐々木清	調査課長（兼）	河本　清
主　　任	古瀬　宏	主　　任	遠藤勇次
文化財保護主査	井上　弘（調査担当）	文化財保護主査	柳瀬昭彦（調査担当）

文化財保護主事　平井　勝（調査担当）
文化財保護主事　江見正己（調査担当）
文化財保護主事　平井泰男（調査担当）
主　　事　宇垣匡雅（調査担当）
文化財保護主事　岡本寛久（調査担当）
主　　事　楢原充二
文化財保護主事　山本明雄（調査担当）

平成2（1990）年度

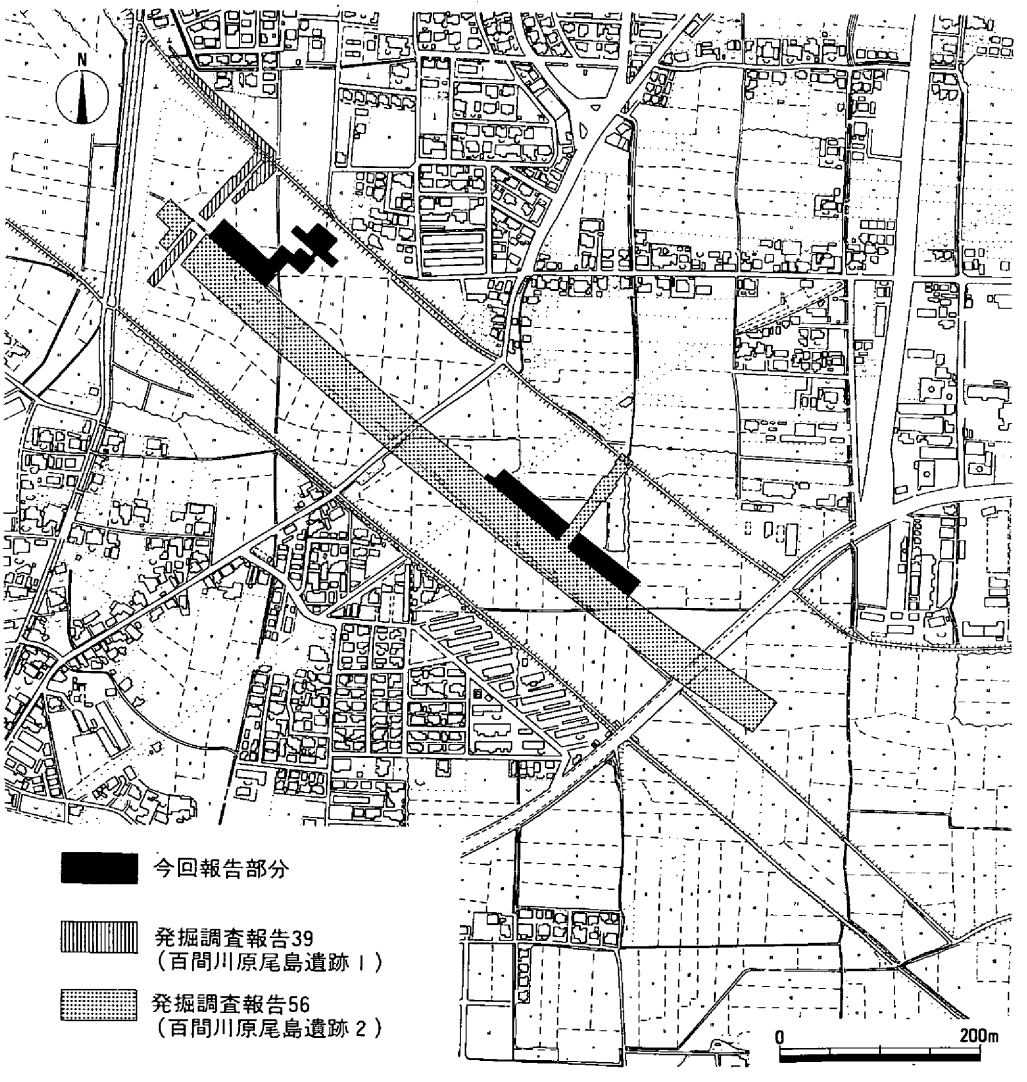
所長　長瀬日出明
総務課長　竹原成信
課長補佐兼第一係長　柳瀬昭彦
文化財保護主査　平井　勝（調査担当）
文化財保護主査　藤田耕平（調査担当）
主　　事　村田秀石（調査担当）
主　　事　大西治郎
主　　事　渡邊徹也
次長（調査第一係長事務取扱）河本　清
課長補佐兼総務係長　藤本信康
主　　任　平松郁男
主　　任　坂本英幸
主　　事　杉野　正
主　　事　嶋田慶彦
主　　事　亀山幸治

最後になりましたが、酷暑・厳寒のなか、日々発掘調査に従事されました下記の方々に、厚くお礼申し上げます。

赤城久夫　尾松代吉　佐々木和勲　松本友彦　笹田誠　松本包房　岡崎洋子　伍賀芳子
坂本由美子　西崎宏子　藤田光子　難波靖代　赤木輝吉　遠藤明雄　大森善太郎　岡本汎
小西修　籠井英夫　石田芙美子　入江美代子　国塩志保里　中村初子　服部勝得
兵藤きよ子　大前仁介　佐野雅男　新開清　永井巳之介　服部弘　松本三郎　成本和繁
畑本敏男　出原喜美子　新名定子　津島健子　服部美登利　原年子　原住子　明坂善美
加藤勢津子　石浜常夫　国重正武　西郷安夫　藤原勝治　山田道夫　鈴木順一　岡本孝
楠見静子　西崎知子　野崎千珠子　藤田球江　岡本喜代子　榊原末美　石田義人　橋本基
富田孝行　内田賢二　藤本順一　真重貞一　大窄暢毅　岩上太郎　那須鉄雄
事務所
田中純子　河上優子　木村仁美　光信恵子　窪田浩子　青山洋子　坂本恵里香
土井原弘子　湯浅育子

第３節　調査の経過

百間川原尾島遺跡は岡山市原尾島に所在し、国道２号線の百間川橋の上流側にひろがっている。百間川遺跡群の発掘調査は昭和52年度に着手し、それ以降、現在まで継続して実施されており、その成果も報告書等として随時公表されてきた。このうち原尾島遺跡に関しては昭和52年に左岸上流側で実施された新田サイフォン・新田樋門等の建設に伴う発掘調査については「百間川原尾島遺跡１」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』39として報告を行った。また、その



第３図　百間川原尾島遺跡　調査区位置（Ｓ＝1/7,500）

後昭和53年から57年にかけて実施した低水路および土手樋門関係の調査については「百間川原尾島遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』56で報告を行った。

今回報告を行うのは、昭和58年以降に実施した発掘調査の成果である。昭和58年以降は低水路の拡幅のため、低水路の左岸側に10m幅の調査区を設定して調査を進めたが、それ以外に微高地を横断する形で原尾島橋が建設されることになったためその部分の調査を行い、他に左岸用水路や樋門部分の調査も実施した。原尾島遺跡の調査面積は約17,767㎡、遺物の箱数も1,752箱に上る。これを1冊に収めることは不可能であるため本報告書を含めて3冊に区分し、整理作業担当者が担当した調査区を中心に報告を行うこととした。

本報告書では低水路部調査区のうちの上流部と下流部、原尾島橋建設関係の大部分、左岸用水路部分を取り扱ったが、調査は工事工程にそって進めているため、表1に示すように各年度・各班の調査区に細分される。報告ではまず小字名によって三股ヶ、丸田、川内等に調査区を区分し、ついで低水路水路掘削部、樋門、用水路などの工事名称を付し、さらに遺跡全体に組んだ20m方眼によって位置を示している。

調査員1人の1月あたりの調査面積は平均130㎡であるが、1～5の微高地上の調査区は遺構密度がきわめて高いため63㎡となり、低位部の水田を調査対象とする6～9では155㎡となる。（宇垣）

表1　百間川原尾島遺跡　調査一覧

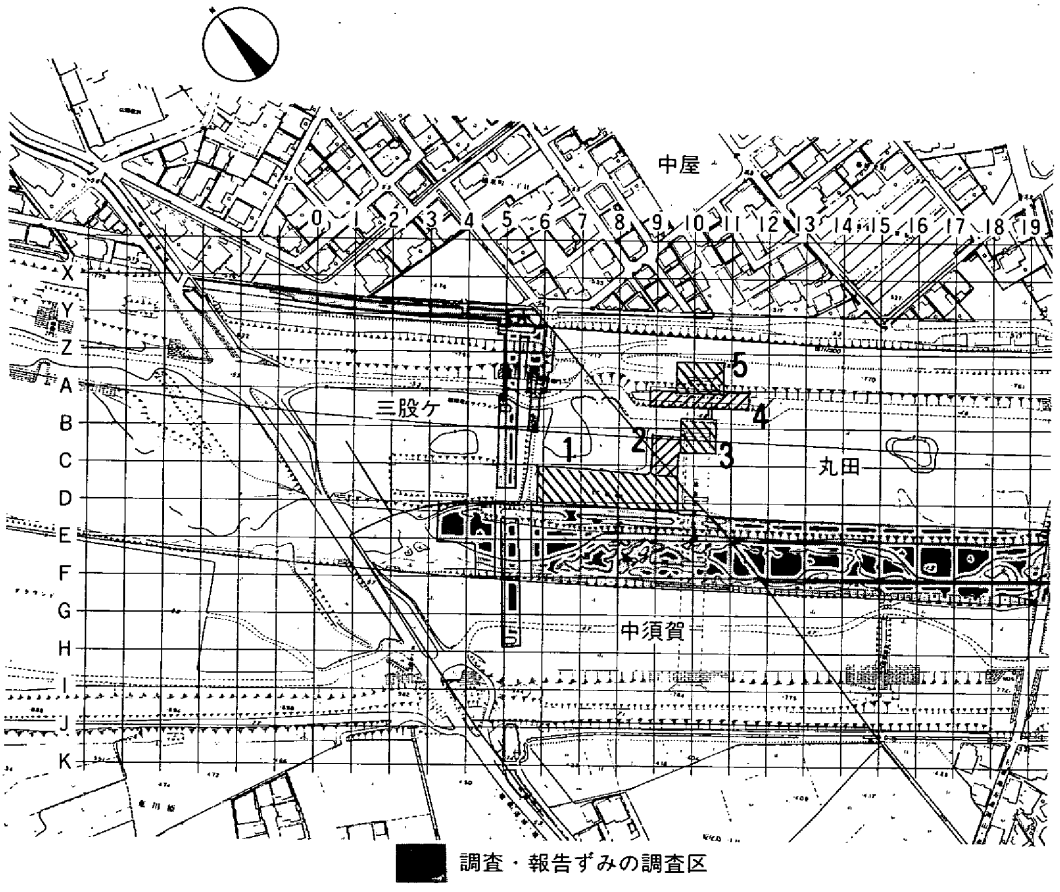
番号	地区名	担当者	期間	面積	遺物数
1	三股ヶ・低水路 6～9-C・D	江見・宇垣	1984.4.1～1985.2.28	1520	164
2	三股ヶ、丸田・低水路 8・9-B・C	柳瀬・平井勝	1985.1.16～3.31	330	96
3	丸田・橋梁Ⅰ 9・10-A・B	平井勝・古谷野	1983.5.10～8.17	360	104
4	丸田・橋梁護岸 8～11-A	江見・宇垣	1985.3.1～5.17	398	55
5	丸田・橋梁A 9・10-Z	江見・山本	1983.11～1984.4	520	95
6	左岸用水路	平井勝・古谷野	1982.10.14～11.12	260	1
7	丸田・低水路23～25-C・D	平井勝・藤田・村田	1990.6.12～1990.7.27	516	1
8	川内・低水路26～28-C・D	柳瀬・平井勝	1984.9.14～1985.1.15	1200	3
9	川内・低水路29～32-C・D	柳瀬・平井勝	1984.4.14～9.13	1600	1
				6704㎡	520箱

第４節　報告書の作成

報告書の作成は担当者２名で平成４年（1992）度に行った。整理対象面積は6,704㎡、出土土器は520箱で、これに石製品・土製品・金属器など478点が加わる。

出土遺物の水洗・注記は発掘調査時にすでに終了しており、４月からただちに整理・復元作業を開始し、12月に終了した。遺物量が多かったため、遺物の選別、復元作業を効率的に進める必要があり、それに努めたものの、全資料の検討も必要で、かなりの時間を費やすこととなった。同時に土器以外の遺物についても台帳の作成と実測にむけての選定作業を行った。

また、これらの作業と平行して遺構・遺物のトレースも進めたが、調査終了時から相当の年月が経過しているため、遺構図面の整理・検討は容易でなく、図面の調整に時間を要することもしばしばであった。

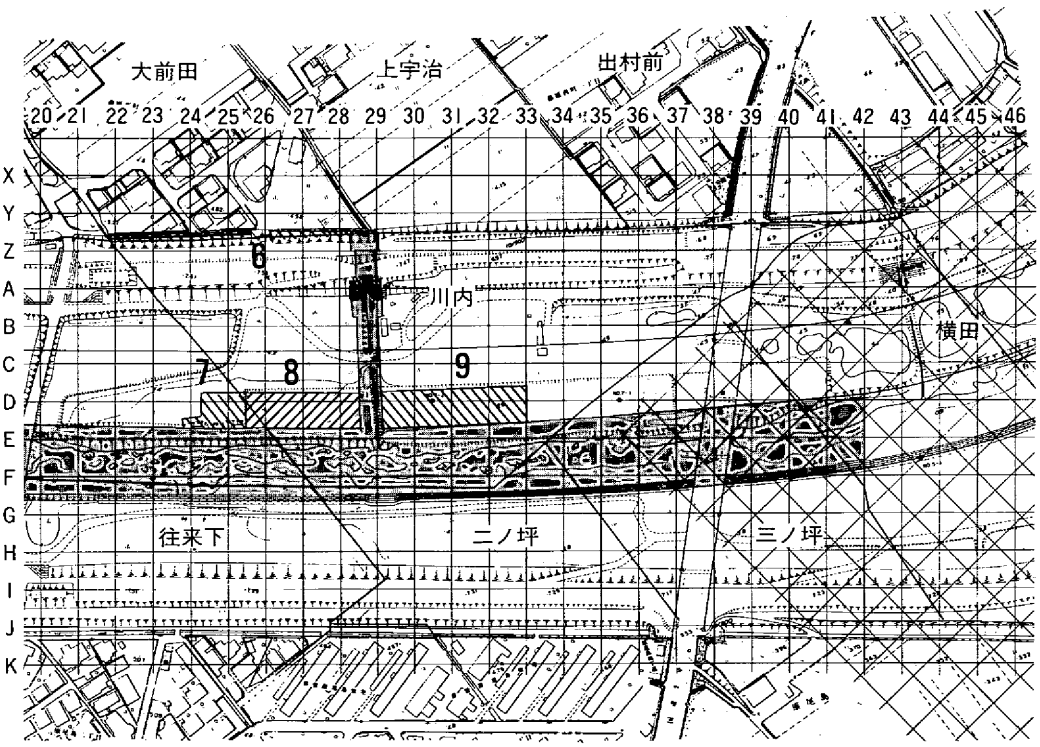


第４図　グリッドの設定と調査区（１）　（S＝1/4,000）
図中の調査区番号は表１に対応する。

遺物の実測については、整理作業の終了したものから順次進めていったが、遺物の総量が膨大であるため、まず井戸、住居などの出土品から着手した。ただし、それらについてもすべての遺物を実測することは困難であると見込まれたため、完形品を中心に実測することとなり、破片については実測対象に加えられなかったものが多い。９月に至って実測作業の見直しを行ったが、完形品を中心に実測しているため前年の「百間川沢田遺跡３」の作業実績を大きく下まわることが明かとなり、それまでに実測予定としたもののかなりを削減することとなった。最終的に、土器は790点、石器その他の遺物は120点の実測が可能であった。したがって、本報告書に掲載した遺物は住居、井戸の出土品、土器棺等が中心となり、溝、土壙、土器溜まり、包含層の遺物についてはその一部を掲載するにとどまった。

土器の実測は１月中で終了し、２月からは石器および特殊遺物の実測にかかった。

原稿の執筆については各担当者が分担しておこなったが、整理作業が遅れがちであったため、執筆に十分な時間をとることができなかった。　（宇垣）



第５図　グリッドの設定と調査区（２）　（S＝1/4,000）

第3章　調査の概要

第1節　三股ケ・丸田調査区

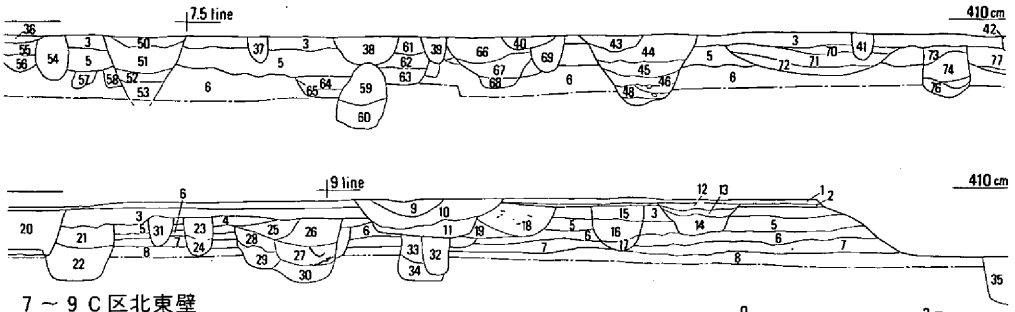
1．三股ケ・丸田調査区の概要

三股ケ・丸田調査区は百間川原尾島遺跡の北西部分にあたる。低水路調査区と原尾島橋関係の調査区からなり、調査区名も調査区の中央付近で変わるが、一連の集落遺跡であるため、ここでは一括して取り扱う。北側は新田サイフォン・樋門調査区（『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告39』）、南西に接する部分は中須賀調査区（『同報告56』）である。微高地の中心部から西側の低位部までを含んでおり、調査区は不規則な形ではあるが東西130m、南北65mである。

微高地は７Ｃ区以東の部分である。西端の７ライン付近が最も高く、その部分から西側へは急激に下がり、東側にはごくゆるやかに下がっていく。７～９ＣＤ区では水田耕作土下は弥生時代の包含層となり、その上面で中世・古墳時代の遺構が検出できる。弥生時代の包含層は薄く、その下側は密集した遺構によって一見包含層と思える状態になっている。遺構はこの中で認められるが、総じて検出しにくく最終的に基盤層・黄色粘質土上面で確認したものも少なくない。その東側の９・10ＡＢ区では水田耕作土下には古墳時代の包含層・灰黄褐色微砂があり、その下が弥生包含層となる。古墳時代の包含層の土質は弥生後期末の洪水堆積によく似ており、それが再堆積ないし攪乱を受けたものと思われる。東端の９・10Ｚ区では弥生後期末の洪水堆積層が微高地上に堆積しており、耕土下は洪水堆積層、その下は弥生後期遺構の密集（層）となり、古墳時代以降の遺構は洪水堆積層上面で検出できた。

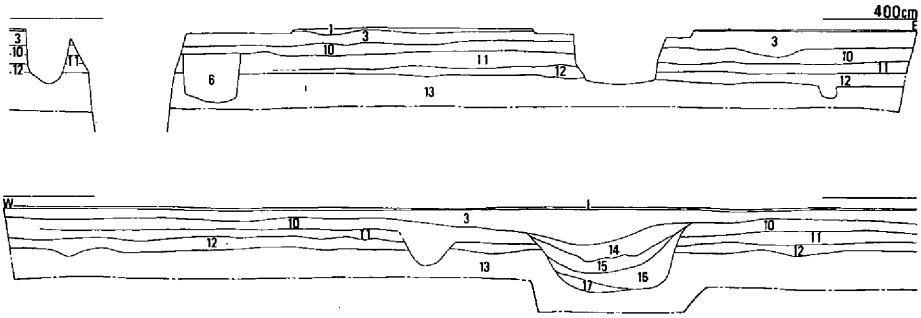
基盤層上面の高さは７Ｃ区北壁で海抜3.8m、10Ｚ区で3.64mである。なお、洪水堆積層は微高地の低い部分にのみ認められたが、１Ｘ区左岸用水調査区において海抜3.7mで洪水堆積によって埋没した住居が検出されていることや、７・８ＣＤ区でも古墳時代の柱穴埋土が砂質土あることなどからみて、弥生時代後期末の洪水は微高地上にまで及ぶものであったと考えてよいであろう。

微高地上には弥生時代後期を中心に大規模な集落が形成されており、竪穴住居、建物、土壙、溝、土器棺など多数の遺構が検出された。遺構は微高地が高い８・９ＣＤ区付近が最も密集しており、中須賀調査区の成果とあわせれば、密集部は南北方向の帯状を呈するようである。この部分には百・後・Ⅱ期からⅢ期の遺構が多く、百・後・Ⅳ期の遺構は東側のＺ～Ｂ区に多く



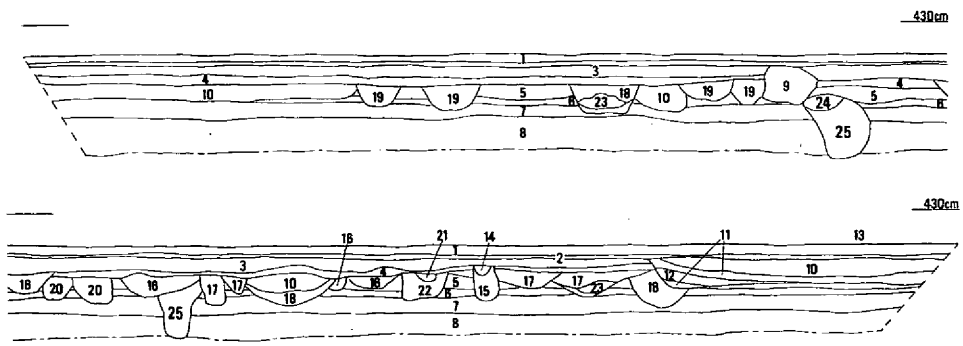
7～9C区北東壁

1．灰色砂質土(水田層)
2．鉄・マンガン沈着層
3．暗灰褐色微砂質土(土器片含む)
4．暗褐色微砂質土(土器片含む)
5．暗灰褐色微砂質土(基盤層)
6．黄褐色粘質土(　〃　)
7．黄灰褐色粘質土(基盤層)
8．黄褐色粘質土(　〃　)
20．竪穴住居15
50～53．建物30柱穴
59・60．建物30柱穴
38．土壙8
25～30．土壙37
64・65．溝8
70～72．溝9
9～11．撹乱
12～14．近世用水路
他は柱穴および土壙埋土(灰褐色～黒褐色粘質土)



9・10A区北東壁

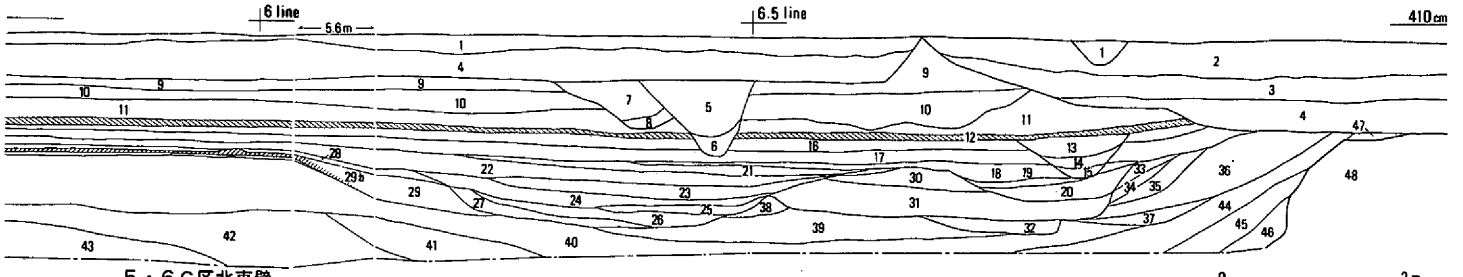
1．灰色微砂(鉄分の沈着)
3．灰茶褐色微砂(洪水砂)
10．暗褐色粘質土(遺物多く含む)
11．灰褐色粘土
12．暗褐色粘土
13．黄色粘土(炭をわずかに含む。基盤層)
6．黄色粘土斑灰褐色粘質土
14～17．暗褐色粘土(溝)



9・10Z区北西壁

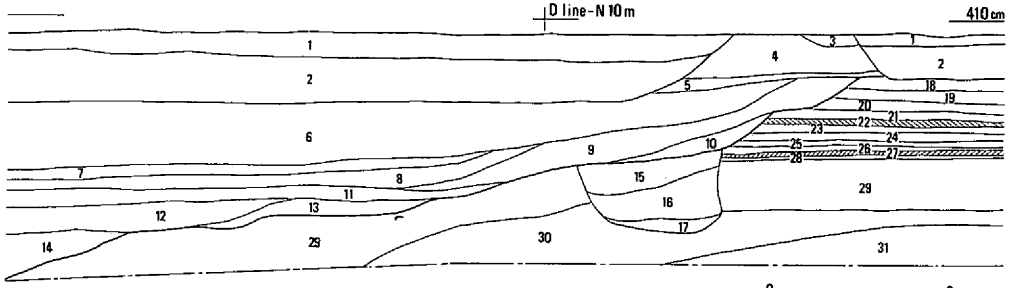
1．水田耕土
2．褐色微砂
3．淡黄褐色砂質土(洪水砂)
4．淡黄褐色砂質土
5．淡黄灰色粘質土
6．淡黄色粘質土
7．茶灰色粘質土
8．灰黄色粘質土
10．茶灰色粘質土
9．13～25．溝、土壙、柱穴埋土
11・12．撹乱

第6図　三股ケ・丸田調査区微高地の土層（S＝1/80）



5・6C区北東壁

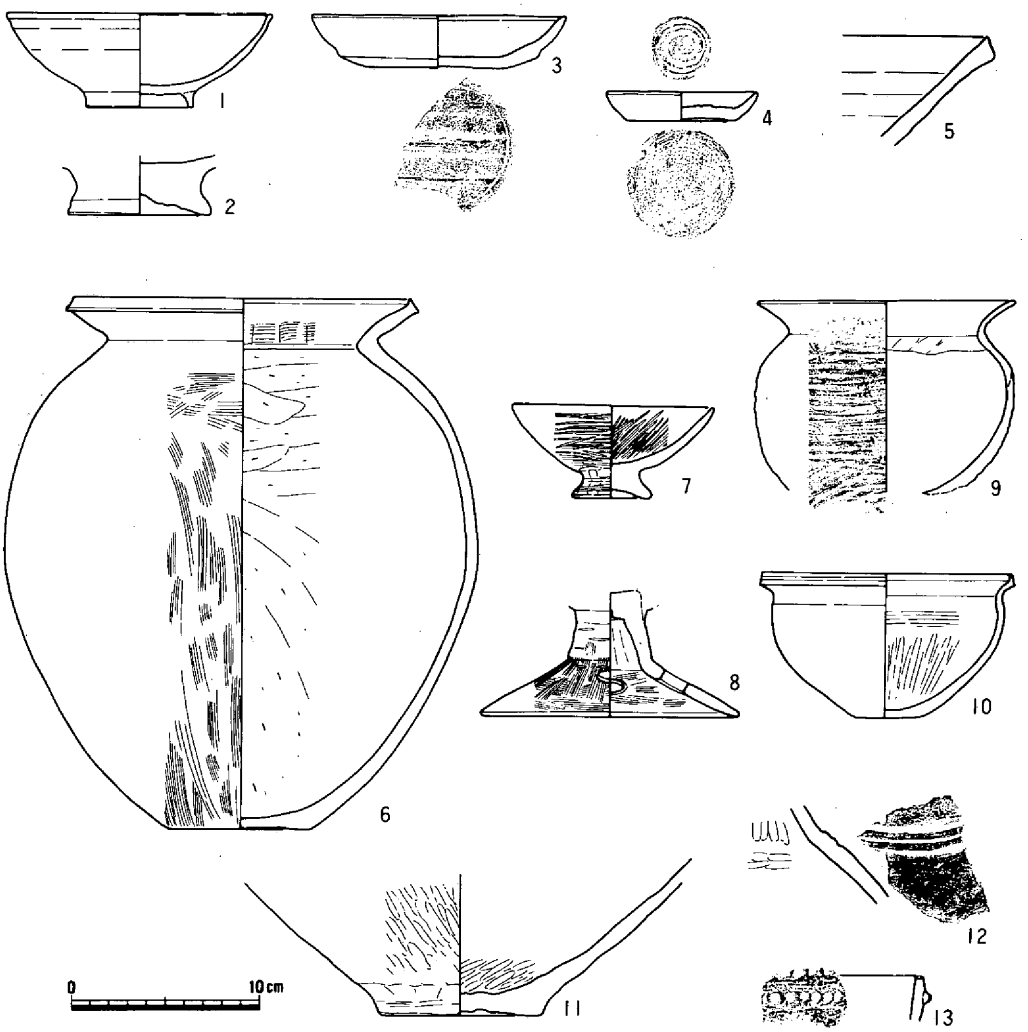
1～4．近世土取り埋土
5・6．溝51
7・8．溝50
9・10．黄灰色粘質土
11．淡黄灰色砂質土（洪水砂）
12．淡灰茶色粘質土（弥生後期水田）
13～15．茶灰色粘質土（溝7）
16～18、21、22．黄灰色～淡黄褐色粘質土
20．淡灰色砂
23～27．灰色砂～灰色粘土
29b．灰色粘質土（下層水田）
30・31．灰青色粘質土・粗砂（溝2）
32～37．淡灰色～暗灰色粘質土
40～46．淡褐色～灰色粘土
48．黄褐色粘質土（基盤層）



5C・D区北西壁

1・2．近世土取り埋土
6．灰色粘質土
7～10．灰色～淡黄灰色粘質土
11．灰色細砂
12～14．灰色～青灰色粘質土
20・21．淡黄灰色砂質土（洪水砂）
22．淡灰茶色粘質土（弥生後期水田）
27．灰色粘質土（下層水田）
29．淡茶灰色粘質土（弥生前期土器含む）
30．淡灰色粘土
31．淡灰色砂

第7図　三股ケ調査区西低位部の土層（S＝1/80）



第８図　三股ケ調査区西低位部出土遺物

なるようである。後期以前の遺構としては中期末の溝がある。縄文時代晩期、弥生時代前期の土器片も出土しているため、少なくともその時期からこの微高地が生活の場として利用されていたことは明かであるが、遺構がほとんど認められないことからみて、主要な居住域ではなかったものと思われる。

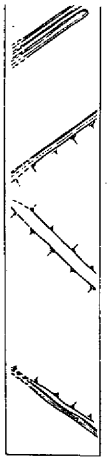
古墳時代にもこの微高地は居住域として利用され、多数の竪穴住居が建てられており、６世紀末ごろには大形の建物を中心とする集落に変わっていく。しかし、この集落は継続せず、古代には溝以外に目立った遺構は認められない。中世に再び集落がこの部分に形成されるようであり、その集落の廃絶後は水田域になったものと思われる。

微高地の西側は深い堆積層となっている（第７図北東壁）。堆積層下部の40層などでは微高地の際で深くなりその外側で若干高まる状況が認められ、沢田遺跡東側縁辺部の堆積と同様の状況を示している。堆積下部の29層には縄文時代晩期、弥生時代前期の土器片11～13が含まれている。また、23～27層は流路状の堆積であるが調査区中央部の断面では認められず、窪地状になっていたようである。この層よりも上方で年代が確定できるのは11層で、弥生時代後期末の洪水堆積層である。土器の出土もかなり多く６～11が出土した。こうした堆積状況からみて、この付近の堆積は比較的ゆるやかに進行したものと思われる。

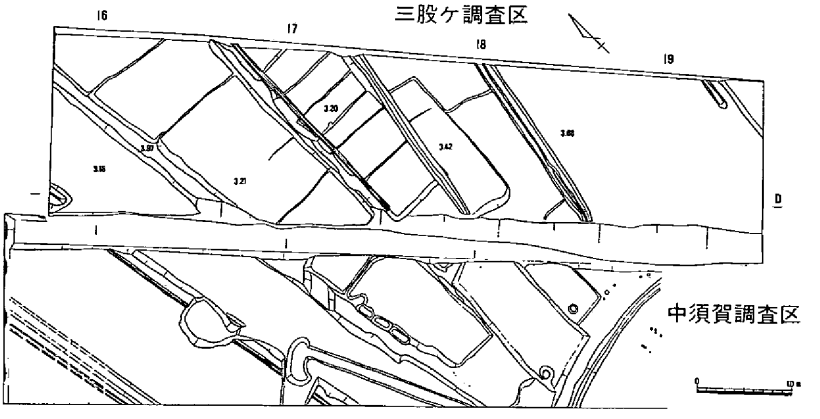
その後、中世の河道の変化によってに低位部は侵食を受け、再度その部分が埋没してゆく。中世の堆積層は６～14層（第７図北西壁）で、下がりの肩口には土器溜まりが形成されており１～５が出土した。

最後に近世の土取り跡についてふれておく。土取り跡は６～８ＣＤ区から新田サイフォン調査区、中須賀調査区にかけてひろがっており、南北方向の土手状の部分を残して掘られている（図版３）。土手状部分の間隔は一定せず12～９ｍを測る。底面は長方形の区画を南北に連ねたようになるが、それぞれの区画は数cm～25cmの段差をもつ。水田耕土下からの深さは一定しないが60cm前後で、採土後は砂礫および粘質土によって北側から埋め戻されている。中世の包含層や遺構を掘削し、字境になる用水路によって切られているため、およそ近世と思われるがその時期は限定できない。短期間のうちに非常に規則的かつ大規模に採土をおこなった跡であり、採土量は少なくとも1600㎥に達しており、百間川の築堤、改修等にかかわる採土であった可能性も考えられる。

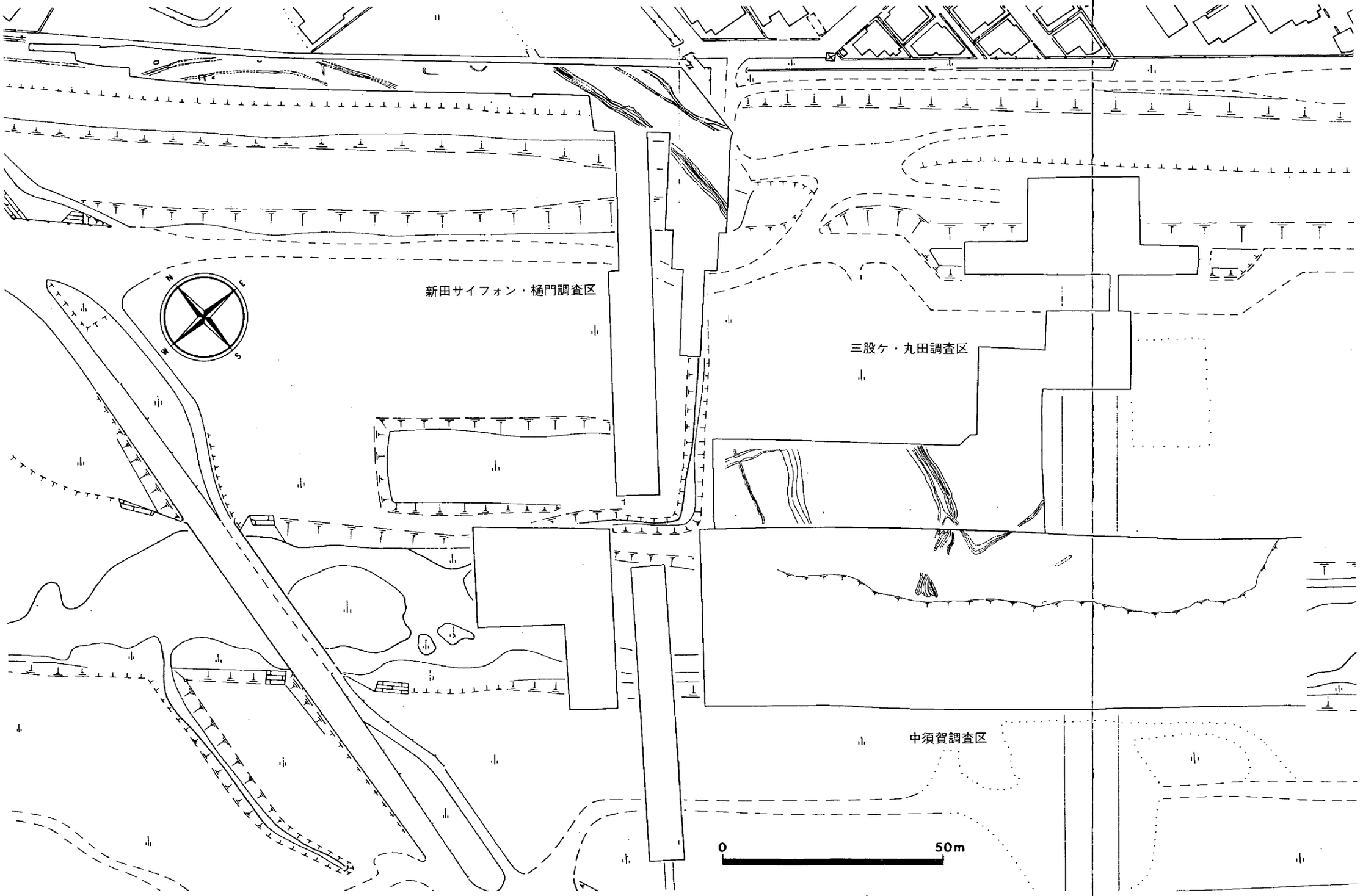
（宇垣）



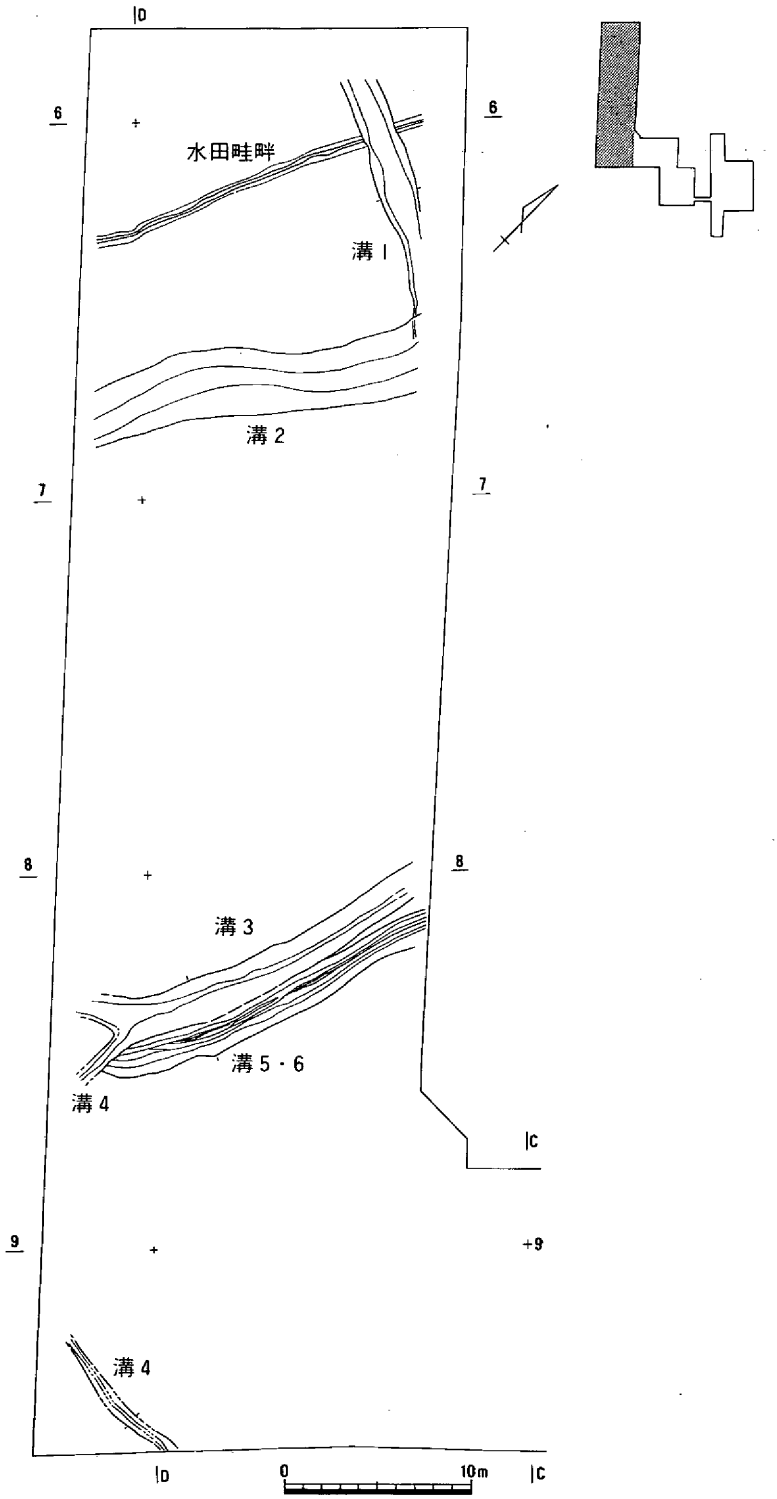
新田樋門調査区



第９図　近世土取り跡（Ｓ＝1/800）



第10図　百間川原尾島遺跡北部　弥生時代前期・中期遺構全体図（S＝1/1000）



第11図　三股ケ調査区　弥生時代前期・中期遺構全体図（S＝1/400）

2．弥生時代前期・中期の遺構・遺物

(1)　水田（第2図）

調査区の北西端、5・6CD区の低位部で検出した。6ライン付近で北東から南西方向にのびる畦畔を確認したのみであるが、この両側が水田面になると考えられ、畦畔線は7ラインの西側微高地の端部に平行するとみてよい。両者の間は約15m隔たっており、1区画がかなり広い水田である可能性もあるが、これに平行あるいは直交する畦畔を検出できていない可能性も考えられ、区画の大きさについては確実でない。

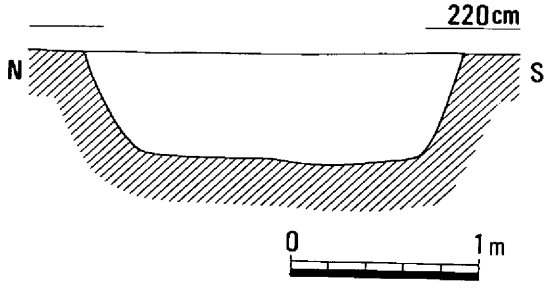
畦畔西側の水田層は中世の河道によって侵食されている。一方、東側は微高地に沿って形成された河道状堆積にむかってゆるやかに傾斜して終わっており、畦畔から水田層東端までの距離は5mである。この水田が形成された時点では河道状部分は埋まりきっておらず、微高地際が浅い窪地になっていたものと思われる。水田層、畦畔ともに暗褐色粘質土で、畦畔は上面幅約15cm、基部幅約60cm、高さ5cmを測り、水田層の厚さは3cmである。水田層の高さは2.15mで後期末の水田よりも30～80cm下方になる。

水田層、あるいはそれに近接する層からは土器が出土していない。水田層下の堆積層から前期の土器破片が出土しており、それよりも新しいとすることができるが、水田を切る溝1、層位的に上になる溝2の年代を確定することができない。あえて推定すれば前期の層よりもかなり上になり、後期以前であることから、中期のいずれかの時期かと思われる。　（宇垣）

(2)　溝

溝1（第3図、図版3）

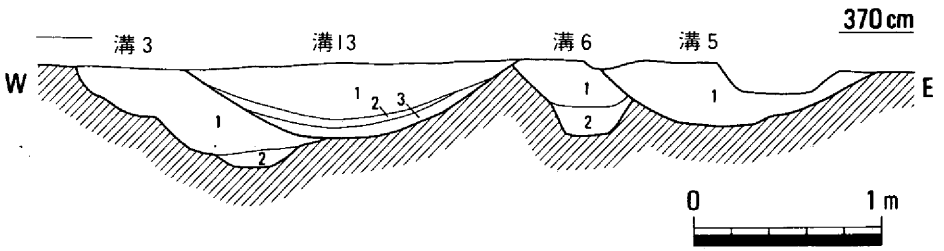
5・6C区で検出した幅2m、深さ55cmの溝である。上記水田の埋没後に形成されており、東端は溝2によって切られている。底面は西側が東側よりも17cm低くなっており、西流していたとみられ、埋土は暗灰色砂質土である。遺物をまったく含んでいないため、年代については前期以降とするにとどめざるをえない。　（宇垣）



第12図　溝1

溝2（第11図、図版3）

6CD区の南端で検出した北東－南西方向の溝で、微高地端部に沿って南流する。幅3.9m、深さ50cmを測り、溝底は南北両端で18cmの差をもっている。埋土は灰青色の粘質土および粗砂である。埋土中からは弥生前期の土器



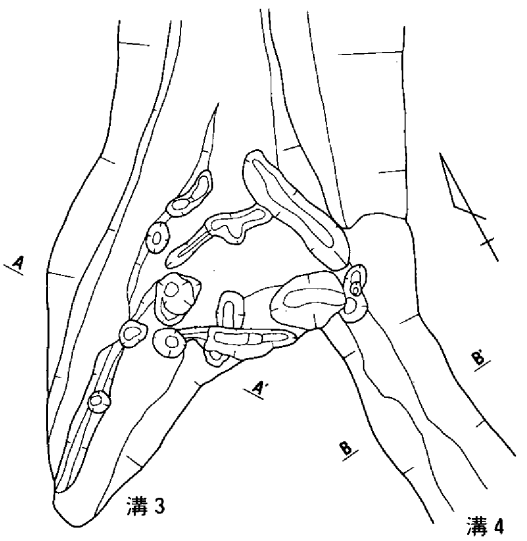
溝3
1．灰茶色粘質土
2．灰茶色粘質土

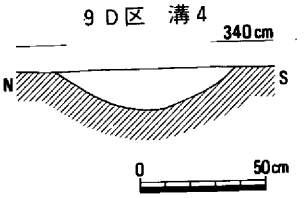
溝13
1．淡灰褐色粘質土
2．淡黄灰色粘質土
3．淡青灰色砂質土

溝6
1．淡灰褐色粘質土
2．褐灰色粘質土

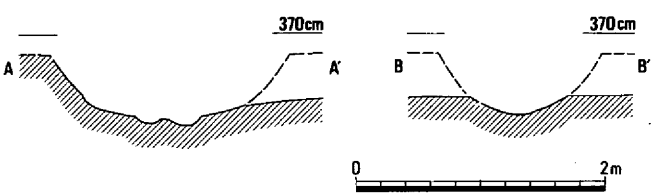
溝5
1．淡灰褐色粘質土

第13図　溝3・溝13・溝6・溝5





黒褐色粘質土

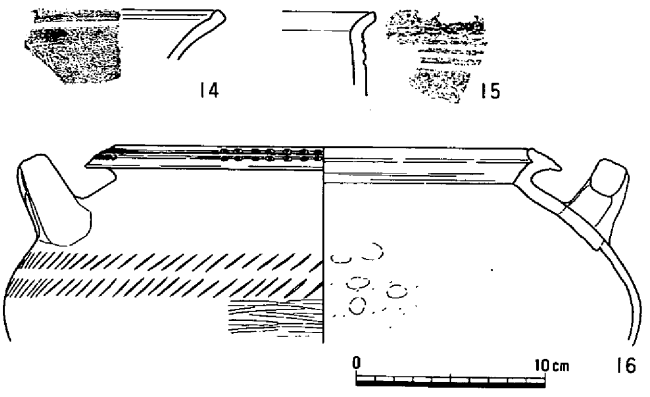


第14図　溝3・4

小片が出土しているが、流入遺物の可能性もある。（宇垣）

なお、第7図に示すように溝の埋没後、西側に流路状の浅い窪みが生じており（23～27層）、西の肩部が削られている。

溝3・溝4・溝5・溝6（第13～15図、図版4）



第15図　溝３・５出土遺物

８ＣＤ区の北西側、８ラインに近い部分で検出した溝群であり、いずれも南端は用水路によって削平されている。西から溝３、６、５とするが、これらのほかに溝３と５の間に後期の溝13があり、中期末から後期初頭にかけて、位置を若干変えながらもこの部分に継続して西流する溝が設けられていたようである。

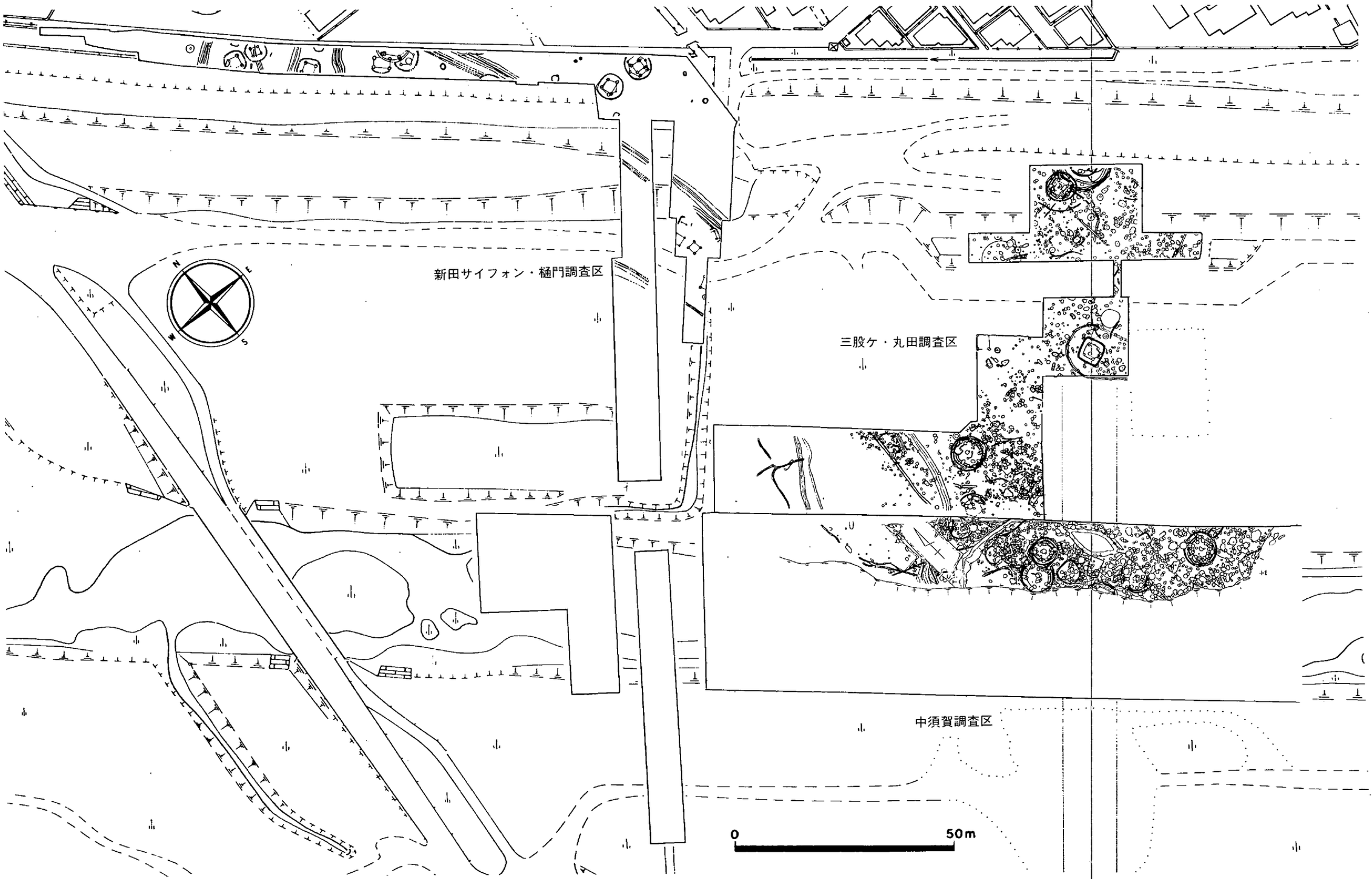
溝３は幅1.8m、深さ50cmを測り、南端で分岐している。第５図に示すように分岐点付近では径20cm、深さ６cm程度の小穴や短く浅い溝が認められ、木材は遺存していないものの、この部分に分流のための堰等の施設が設けられていたものと思われる。分岐した溝のうち西側の太いものを溝３、東側のものを溝４と呼ぶが、溝３は中須賀調査区の溝11・溝７に接続して南西方向に流れている。一方、溝４は中須賀調査区の溝13に接続し、南流したのち直角に曲がって東流し、再び９Ｄ調査区に入っており、微高地を横断する溝となっている。出土遺物は縄文晩期の浅鉢14、弥生前期の甕15などからなるが、出土量は少ない。遺物からは前期の遺構と考えられるが、中期末の溝５と全く平行しており、中期の遺構である可能性も考えられる。

溝５と６は断面でのみ分離できた溝であり、平面では２つの溝底として検出した。溝５は幅145cm深さ34cmを測るもので、中須賀調査区の溝10・溝８に続くと考えられる。

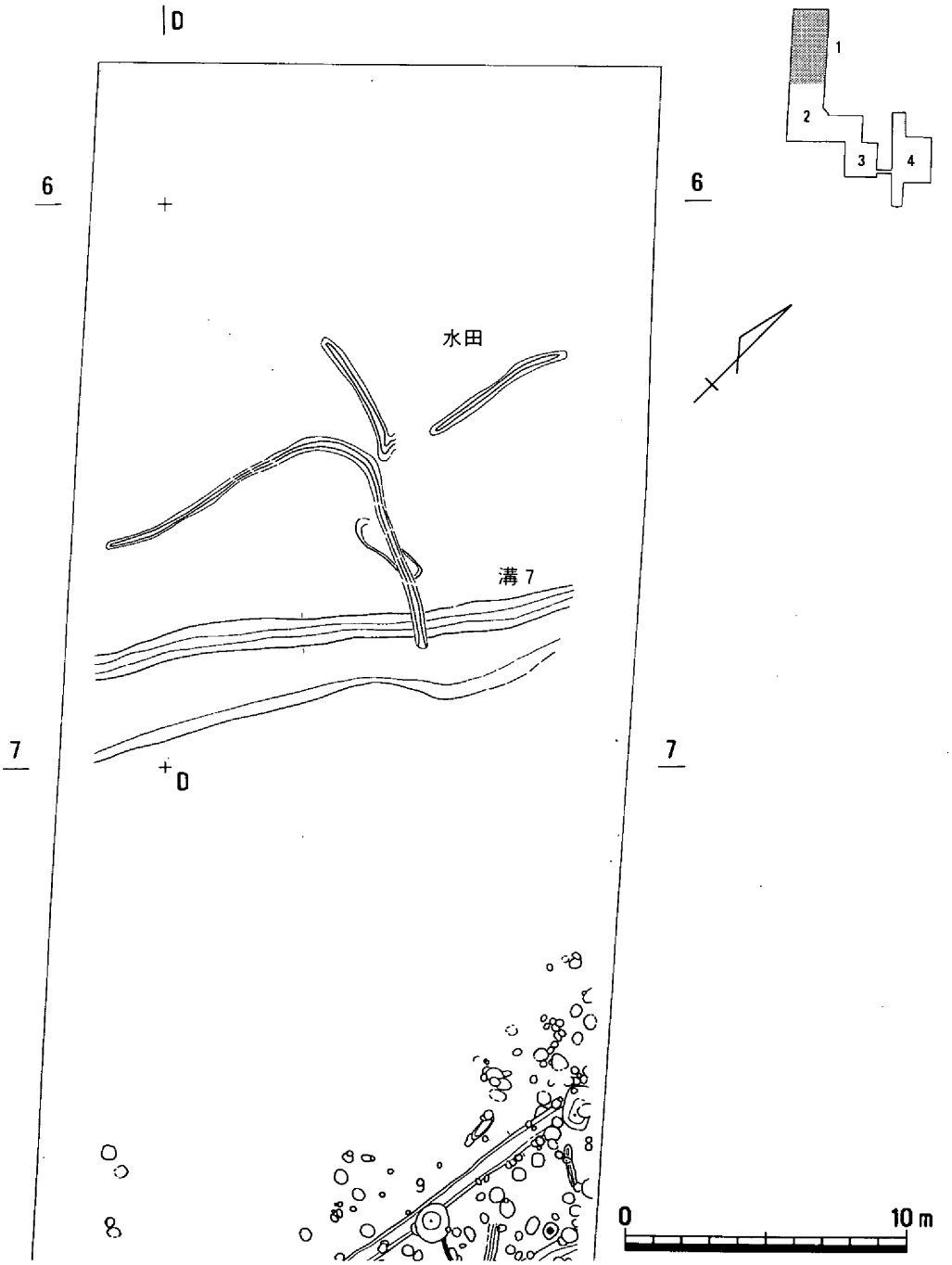
溝６は溝５よりもやや深く、推定幅80cm、深さ40cmを測る。中須賀調査区の溝との接続は明確でなく、中須賀調査区溝10のなかにはいってしまう可能性が考えられる。

この溝５からは百・中・Ⅲの把手付き鉢16がまとまった破片として出土しており、その時期前後の遺構とみられる。

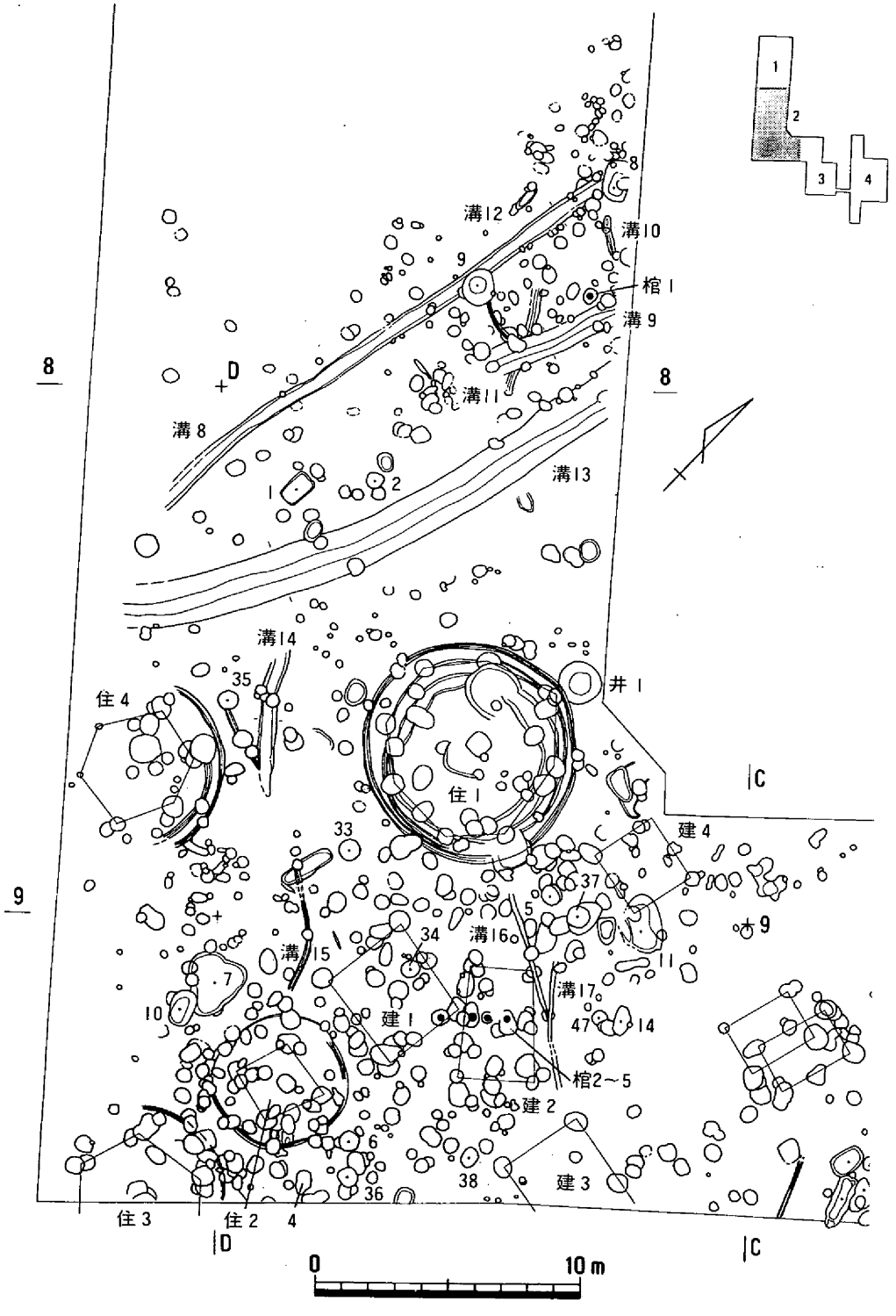
（宇垣）



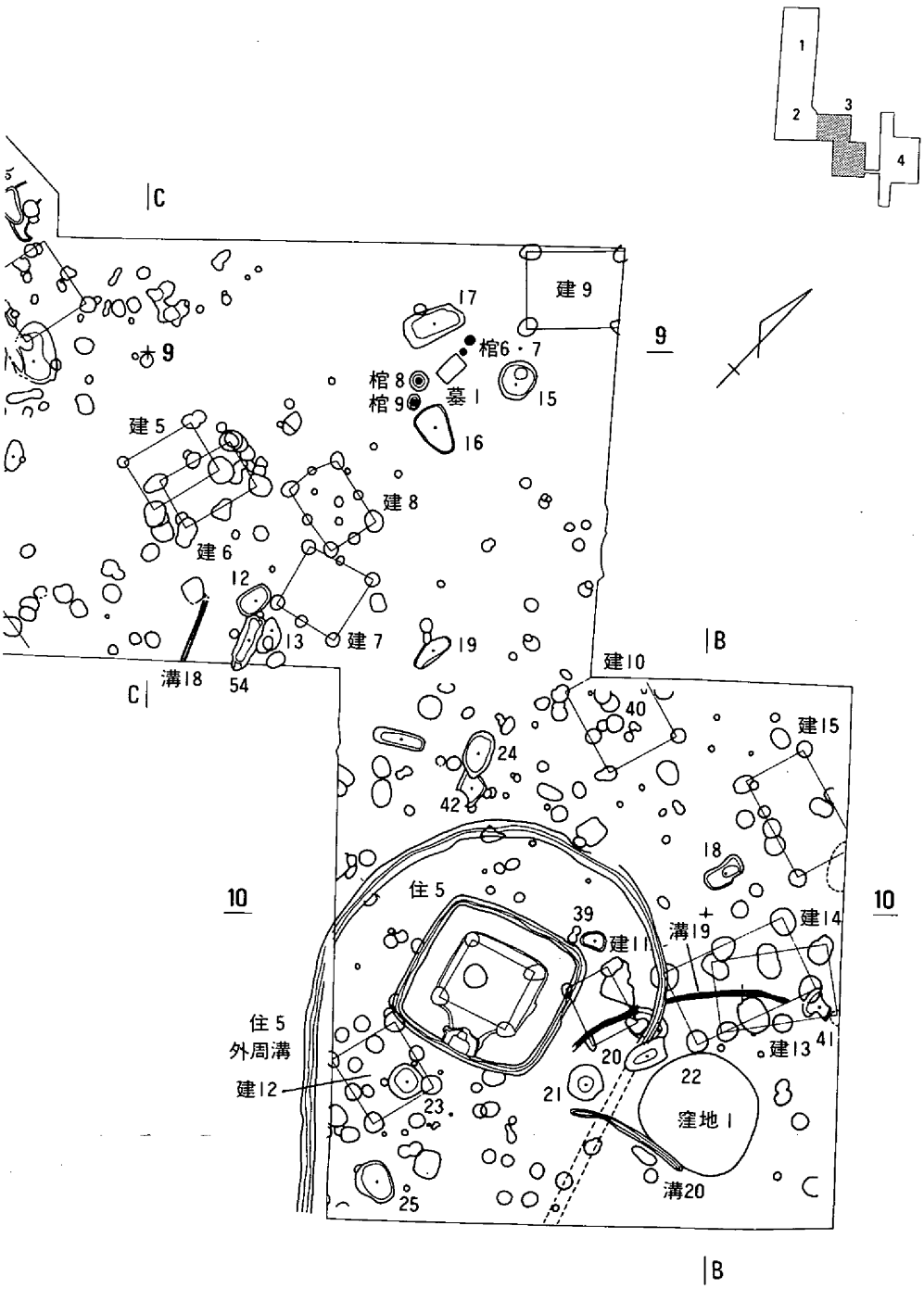
第16図　百間川原尾島遺跡北部　弥生時代後期遺構全体図（S＝1/1000）



第17図　三股ケ・丸田調査区弥生時代後期遺構全体図（1）（S＝1/250）
（第17～20図では土壙は番号のみを記し、中央に小黒丸を配している。）

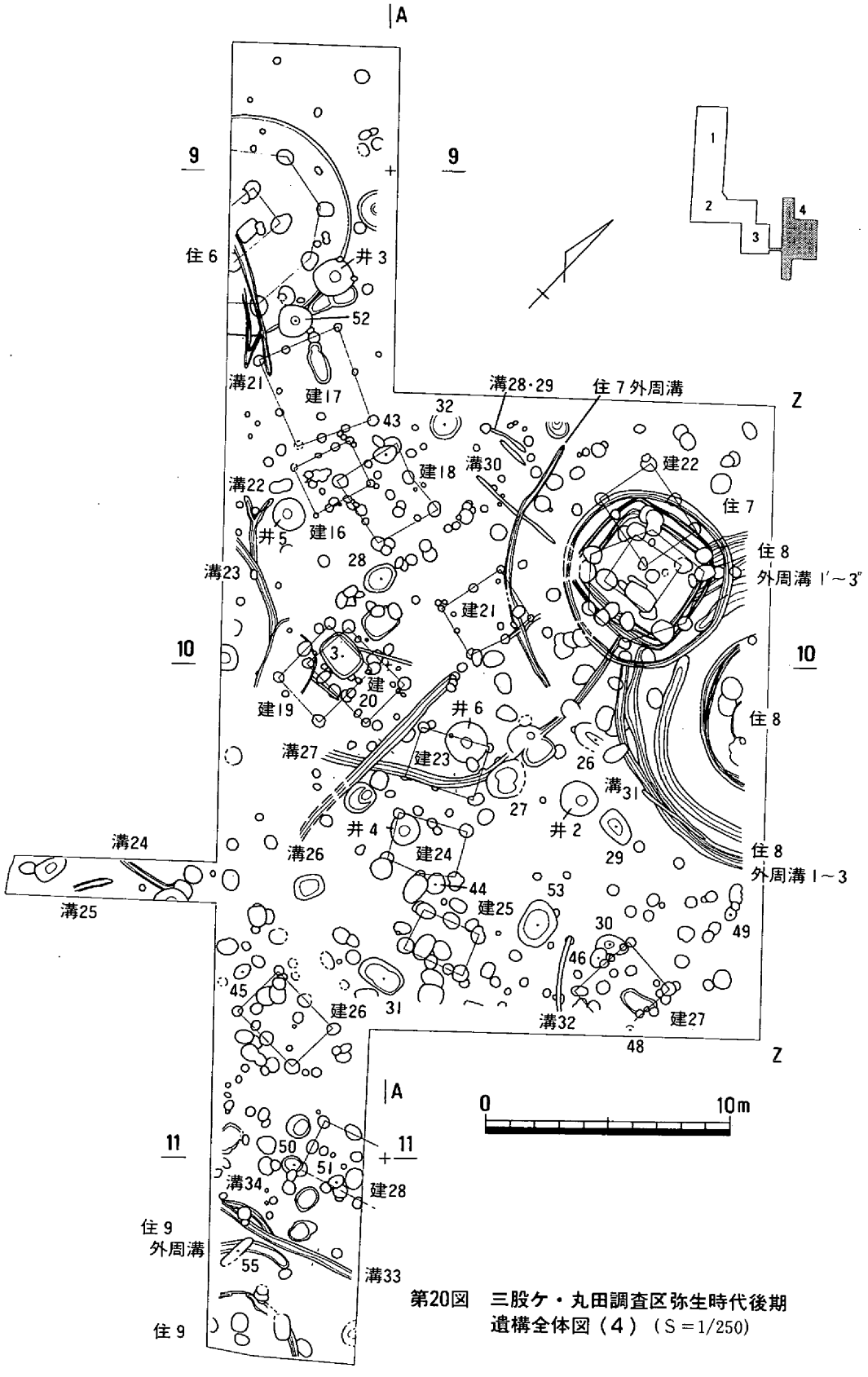


第18図　三股ケ・丸田調査区弥生時代後期遺構全体図（２）（S＝1/250）



第19図　三股ケ・丸田調査区弥生時代後期遺構全体図（3）（S＝1/250）

（第17～20図では土壙は番号のみを記し、中央に小黒丸を配している。）



第20図　三股ケ・丸田調査区弥生時代後期
遺構全体図（4）（S＝1/250）

3．弥生時代後期の遺構・遺物

(1) 水田（第17図、図版４）

微高地西側の低位部で検出した後期末の水田で、厚さ20cm前後の洪水堆積層に覆われている。水田層は淡灰茶色粘質土で、水田層自体は西隅の中世の侵食部分を除く５、６区のほぼ全域にひろがっているが、畦畔が認められたのはそのうちの東側部分である。検出された畦畔は十字形をなし、微高地縁辺に平行あるいは直交を示している。微高地に近接した部分の水田は幅７～９ｍで長辺を南北にとる長方形になるようである。また、西側部分では畦畔が確認されなかった。これについては、この部分で水田区画がかなり大きくなっている、あるいは水田層下が低位部の堆積層であるため畦畔の遺存状態が悪くなっている、という２つの理由が考えられるが、そのどちらであるのか判断しがたい。畦畔は幅40cm、高さ４cmの低平なもので、水口は開いているようである。水田面の高さは3.02ｍである。なお、遺構については後述するが、水田層下で百・後・Ⅱの溝７を検出した。この溝が水田に給排水するための溝であるとすれば後期の水田は少なくともこの時期までさかのぼることになる。

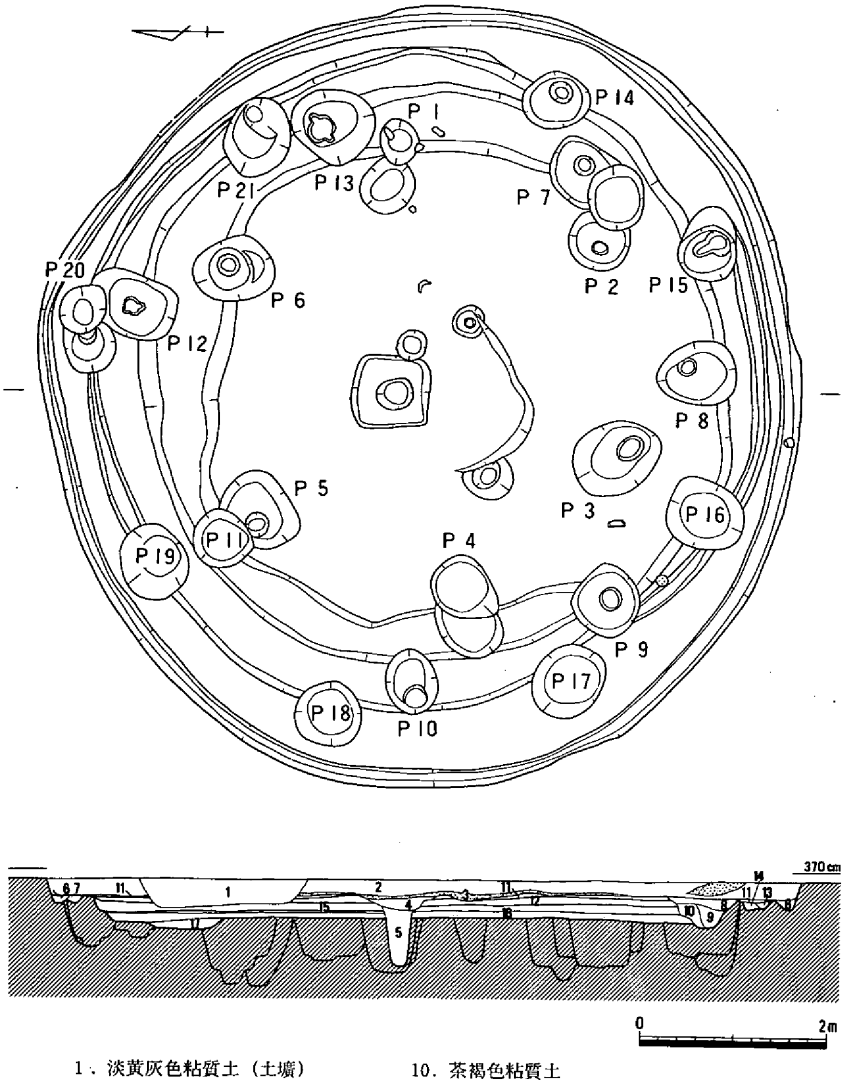
原尾島遺跡の微高地西側低位部においても後期水田と中期水田が所在することが判明した。この付近では中世に低位部のかなりの範囲が侵食されているため遺存範囲が狭いが、弥生時代においては他の低位部と同様に水田が営まれていたことをうかがわせるものである。（宇垣）

(2) 竪穴住居

竪穴住居は９棟を検出した。調査区の両側に集中して分布しており、中央の８・９Ｂ区付近には設けられていない。

竪穴住居１（第21・22図、図版５・６・55）

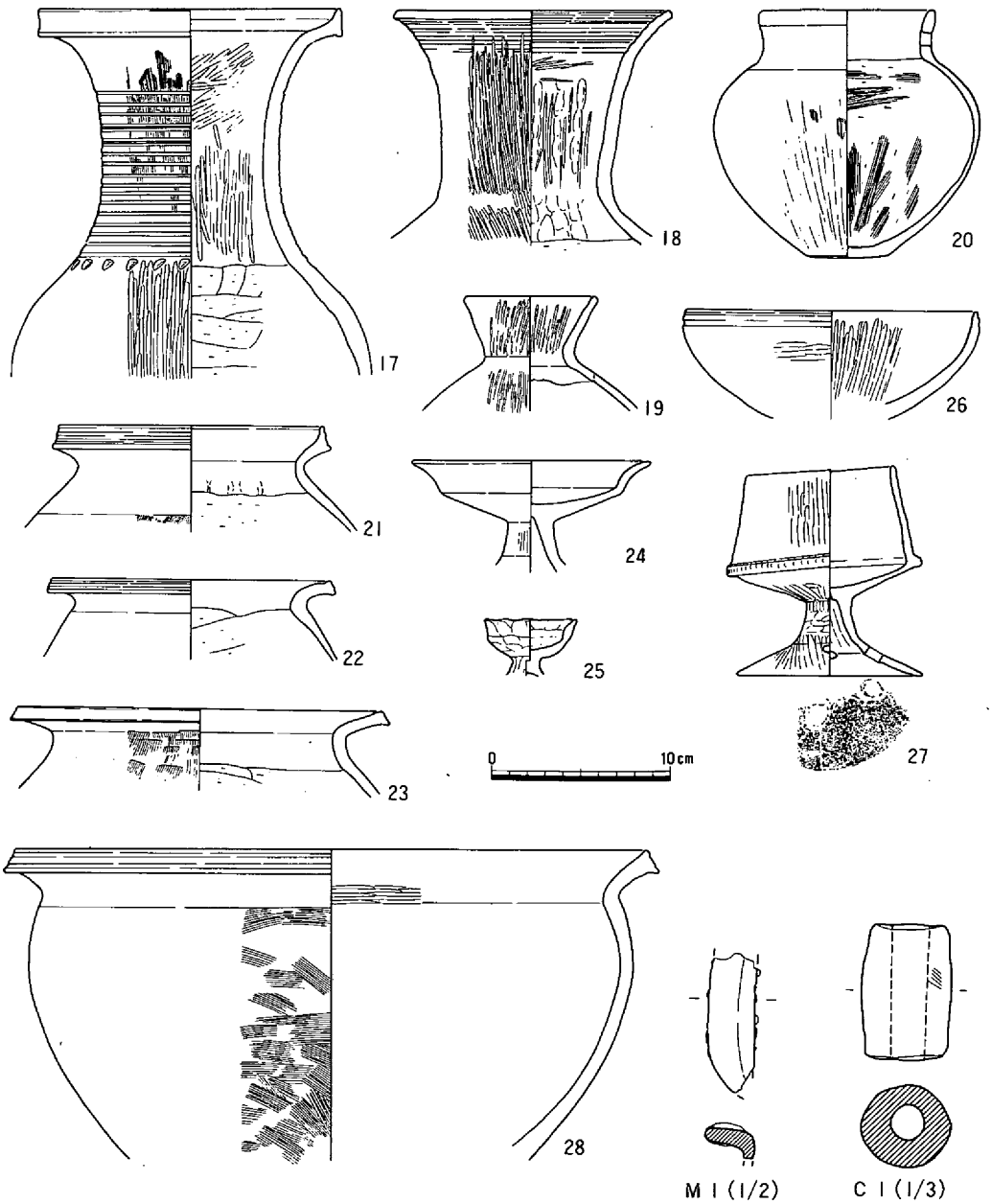
８Ｃ区の東寄りに位置する。２度の建て替えによる拡張がなされており、それに伴う柱穴も６～８本へと同心円状に拡がっていくことが明らかとなった。中央ピット等住居全体が把握できたのは最終の住居形態のみであるが、いずれも平面形態はほぼ円形を呈し、最古段階のものは径約６ｍを測り、主柱穴はＰ１～６の６本柱をもち、いずれも深さ60cm前後を測る。覆土中から20の壺片が出土している。中段階のものは古段階と比べやや規模の拡張がみられる程度であるが、径約７ｍを測り、主柱穴はＰ７～13の７本と考えられ、その深さは60～70cm前後を測る。なお、Ｐ12・13では柱根部分に左右に突出が認められ、礎板状の材が置かれていた可能性がある。最終段階の住居は径約8.2ｍを測り、検出面から床面まで深さ約20cmを残す。覆土中には焼土及び炭が混入しており、特に、住居址中央付近の床面上部には顕著に認められ、焼失住居である可能性がある。柱穴は部分的な建て替えもあるが、Ｐ14～21の８本柱で、深さ45～70



1．淡黄灰色粘質土（土壙）
2．灰茶色粘質土（焼土・炭混）
3．炭・焼土
4．暗茶褐色粘質土（焼土・炭含む）
5．暗茶褐色粘質土（炭多く含む）
6．灰茶色粘質土
7．茶灰色粘質土
8．暗茶褐色粘質土
9．茶褐色粘質土
10．茶褐色粘質土
11．淡黄褐色粘質土（床１）
12．淡黄褐色粘質土（床２　上面に炭薄層）
13．茶褐色粘質土
14．茶褐色粘質土
15．淡黄褐色粘質土（床３　上面に炭薄層）
16．淡黄褐色粘質土（床４　上面に炭薄層）
17．茶灰色粘質土（黄色土塊混）

第21図　竪穴住居１

cmを測る。床面中央にはやや北に偏した部分から中央穴が検出された。中央穴は一辺約80cmの浅い方形の段をもち、中央部分を円形に深く掘り込んでいる。遺物は覆土中からのものが主であるが、中央穴から26の小型鉢が、床面からは21の甕及び27の脚付カップ形土器が出土してい



第22図　竪穴住居１出土遺物

る。なお、27の脚部内面には布目状痕跡が認められる。また、覆土中からは土錘Ｃ１及び不明鉄器Ｍ１が出土している。鉄器Ｍ１は端部に折れ曲がった部分が認められることから鋤先の一部の可能性がある。以上、遺物の特徴から後期前半に遡るものもみられるが、百・後・Ⅲに廃絶したものと考えられる。（江見）

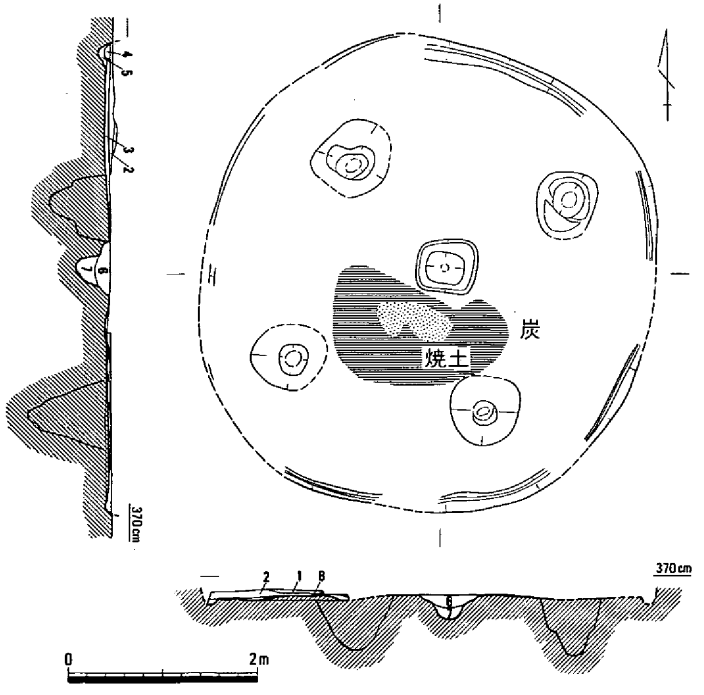
竪穴住居２（第23・24図、図版６）

９Ｃ区南端で検出した径５ｍの円形の竪穴住居で、検出した該期の竪穴住居のなかでは比較的小規模である。多数の柱穴や土壙によって切られているため遺存状況は良くない。検出も床面直上であったため拡張の状況についても検討できなかったが、貼り床等の状況からみて拡張がなされている可能性がある。ただしその場合でも、柱は建て替えられておらず小規模なものであったと思われる。径70cm、深さ60cm前後の深い柱穴をもち、中央には方形で二段掘りになった中央穴があり深さ38cmを測る。中央穴の南側付近がわずかにくぼんでおり、その中央に長径80cmの焼土面があり、周囲に薄い炭層が広がっている。貼り床は２面認められた。

遺物は住居北側の覆土下部に小規模な土器溜まり状をなして出土しており、その特徴から百・後・Ⅱと判断できる。なお、図示していないが、この住居からはガラス小玉２点とガラス管玉１点が出土した。このうち後者は風化・欠損が著しいが長さ６㎜、径４㎜を測り、もとは緑色であったようである。（宇垣）

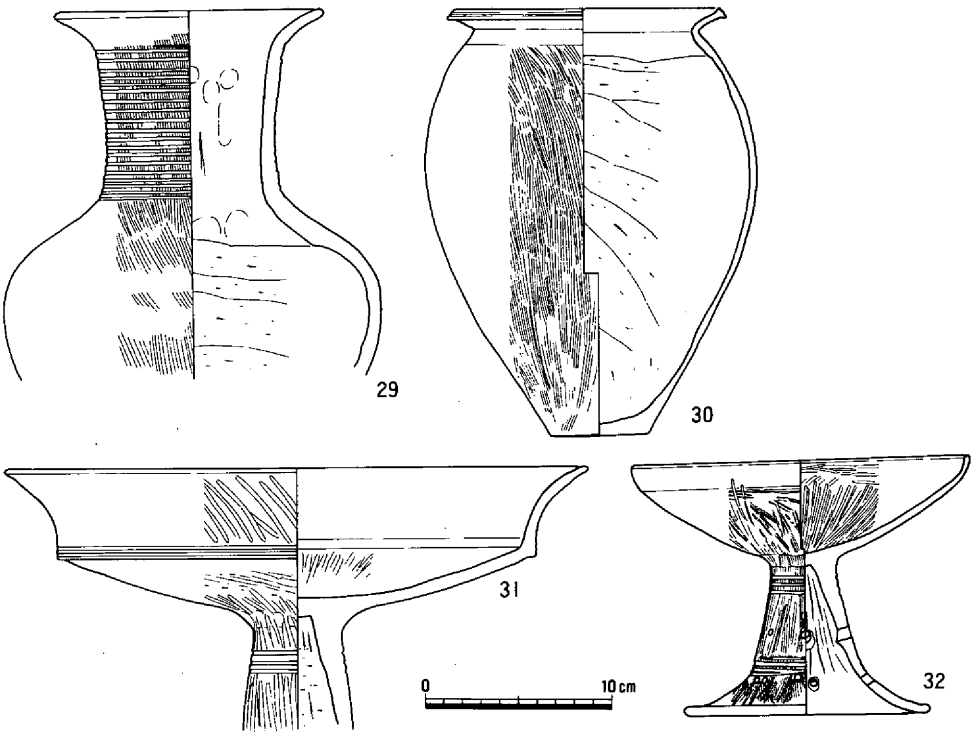
竪穴住居３（第10図、図版７・88）

竪穴住居２の南側、９Ｄ区において検出した径約７ｍの円形の住居である。南東側は別調査

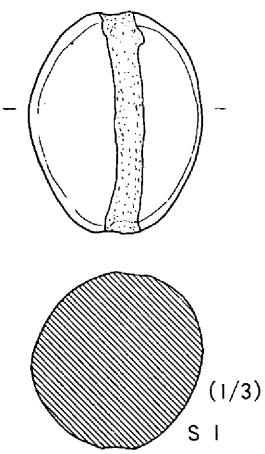


１．黄褐色粘質土（床１）
２．暗褐色土（炭・焼土含む）
３．暗褐色土（下面に床２）
４．暗黄褐色土
５．暗灰褐色土
６．黄褐色砂質土（炭・焼土含む）
７．暗褐色粘質土（炭多く含む）
８．暗黄褐色土（住居造成土か）

第23図　竪穴住居２



第24図　竪穴住居２出土遺物

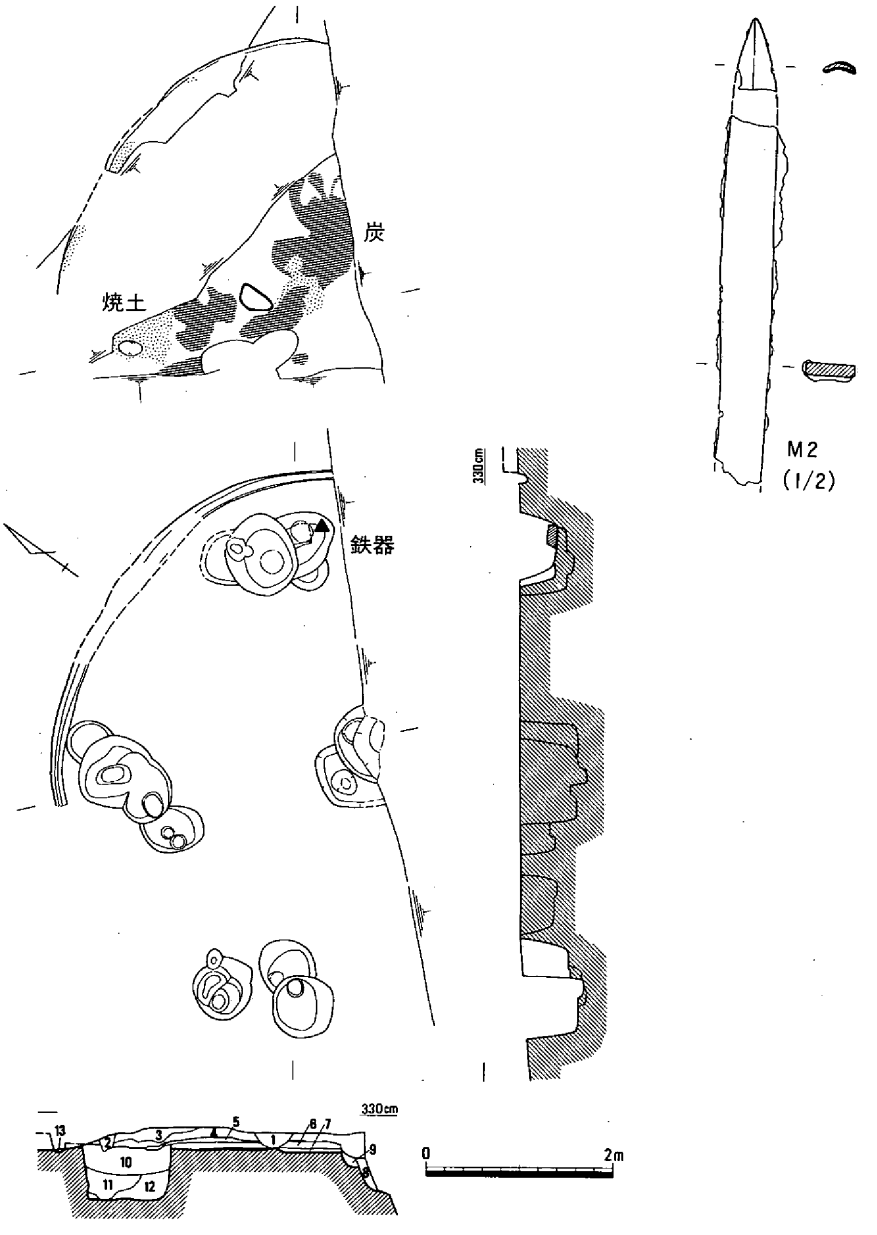


区になり、この部分は別に報告を行う。また、西半は用水路によって削られており、さらに残存部分のほぼ中央に中世の大溝がはいっているため、床面の残存はごくわずかである。火災に遭って廃棄された住居であり、残存する床の全域に焼土・炭層がひろがっている。廃絶時の床面では中央穴の北側の部分に長さ40cmの円礫が置かれており、上面は使用によって摩滅している。貼り床は部分的なものを含め５面が認められたが、大きくは６層の上と下に区分できる。

なお、最下の床面では中央穴の周辺が約５cm低くなっていたが、後には埋められてほぼ平坦な床面になっている。中央穴は掘り直しが認められ、古いものは床面からの深さ40cm、２回目のものは深さ90cmを測る。柱は６本で構成されるようであり、少なくとも４回の建て替えがなされているが柱の配置に大きな変更は見られない。住居平面の拡張がなされたかどうかは不明である。

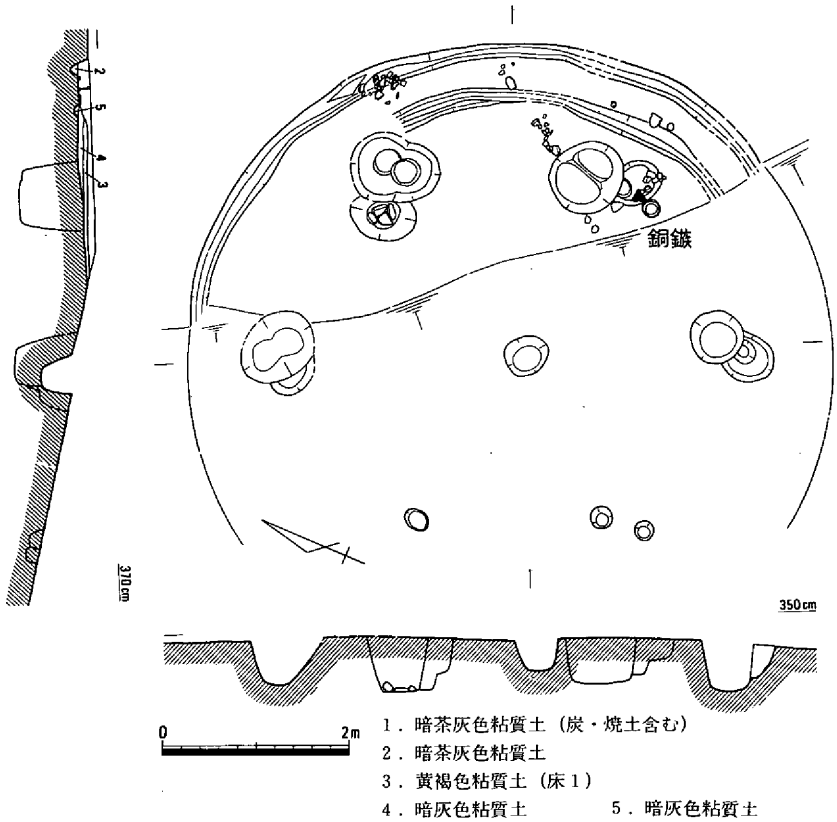
床面の遺存範囲が狭いためか、まとまった出土土器はなく、いずれも小破片である。覆土お

よび焼土層下の土器片からみて、住居の廃絶は百・後・Ⅲと推定される。そのほかに、第25図に示す鉈Ｍ２が東端の柱穴上面から出土している。刃部下半を欠損しているが、全長は12.5cm



1．暗褐灰色土（柱穴）
2．暗灰色土（柱穴）
3．淡黄灰色土
4．暗灰色土（焼土・炭多量）
5．明黄褐色粘質土（床１、２、３）
6．暗黄灰色土（下面に床４、５）
7．灰褐色粘質土
8．黒褐色粘質土
9．暗黄褐色粘質土
10．黄灰褐色粘質土
11．暗黄褐色粘質土
12．暗黄灰色粘質土
13．暗褐色土

第25図　竪穴住居３・出土遺物



第26図　竪穴住居４

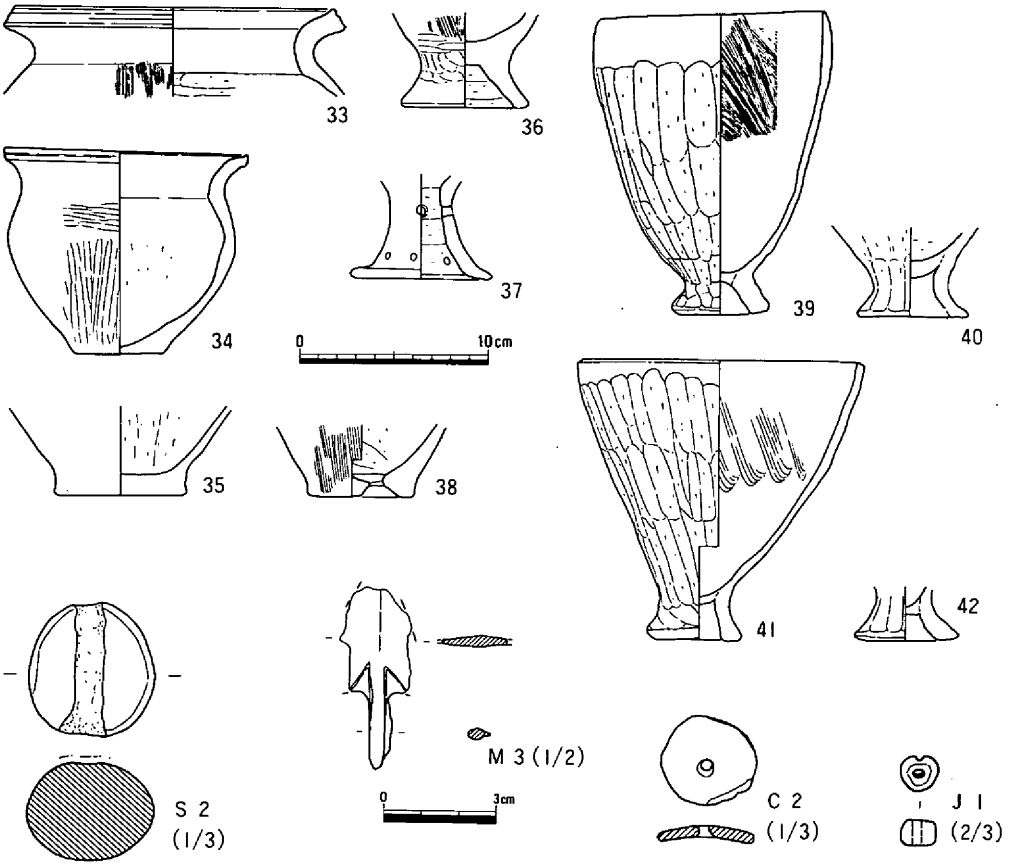
以上に復元され、基部から刃部へはゆるやかに移行するようである。他にガラス小玉１点が出土した。（宇垣）

竪穴住居４（第26・27図、図版７・56・87）

竪穴住居１の南西で検出した径6.9mの住居であるが、用水路によって床面の大部分を削られている。中須賀調査区の竪穴住居２が、この住居の用水路西側の残存部である。

覆土中には炭・焼土が含まれており、焼失住居と考えられる。柱は６本で構成されており、若干位置を違えて３回の柱の建て替えがなされているが、うち一回の建て替えは前の柱穴を拡張して柱を置き換えるものであったらしく、瓢箪形ないし楕円形の掘り方の底に二つの柱根跡が認められる。壁溝は２本認められ、住居の拡張がなされたことが知られるが、建築当初は柱が壁に相当接近した構造だったようである。

出土遺物のうち製塩土器39、41は北東の壁溝上からまとまって出土したもので、いずれも内面にはハケメ調整がなされている。39は脚部が明赤色、体部表面が淡赤色～黒褐色で器表もやや荒れた感じであるのに対し、41は色調は暗黄色～褐黒色で赤化した部分が見られず、器表も

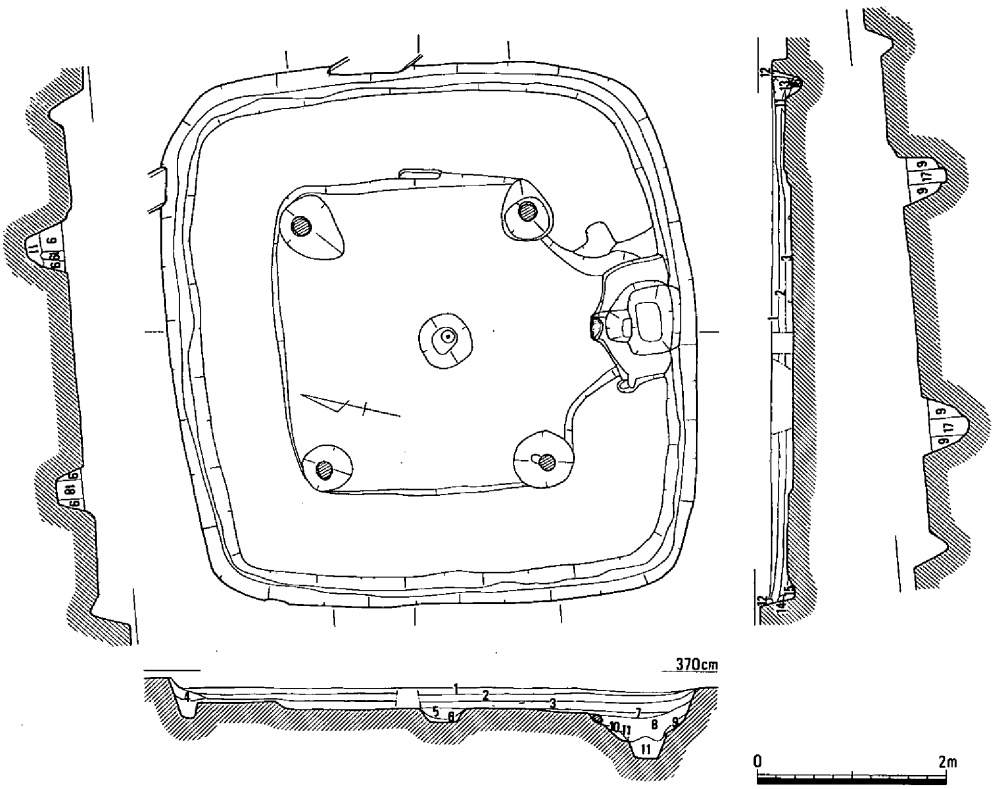


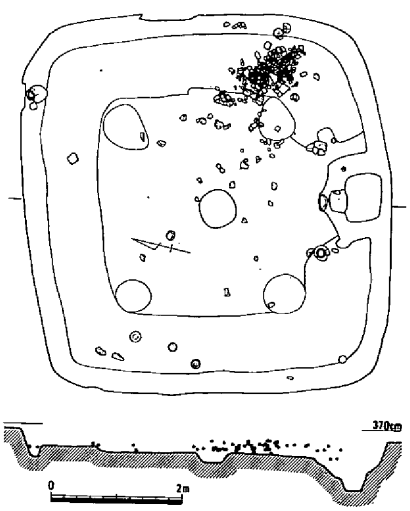
第27図　竪穴住居４出土遺物

まったく傷んでおらず、製塩土器としては未使用である可能性がある。42は覆土出土の製塩土器、40はやや器壁が厚く外面調整もケズリの後ナデで、小形の鉢と思われる。また、銅鏃は柱穴内から出土したもので、銅質はあまり良くなく明緑色を呈する。基部から茎にかけての部分にはバリが残った状態である。このほかに紡錘車Ｃ１、ガラス丸玉Ｊ１、石錘Ｓ２等が出土している。出土土器からみて、この住居の時期は百・後・Ⅱである。　（宇垣）

竪穴住居５（第28～30図、図版８・55・56）

９・10Ｂ区で検出された竪穴住居で、外側には溝がめぐる。竪穴住居の平面形はやや隅の丸い方形を呈する。規模は東西5.73m、南北5.62mを測る。住居の壁はほぼ垂直に掘下げられ、床面には壁にそって溝がめぐる。床面には壁側にそって幅約80cmの１段高いベッド状遺構が認められるが、南壁側中央は途切れている。このベッド状遺構が途切れた部分の壁に接しては土壙が掘られている。土壙はほぼ長方形を呈するが、５～10cmほど掘り下げたあたりで平坦部を形成し、さらに南壁にそって長方形の深い穴を穿っている。この深い土壙外縁の浅い掘り込み

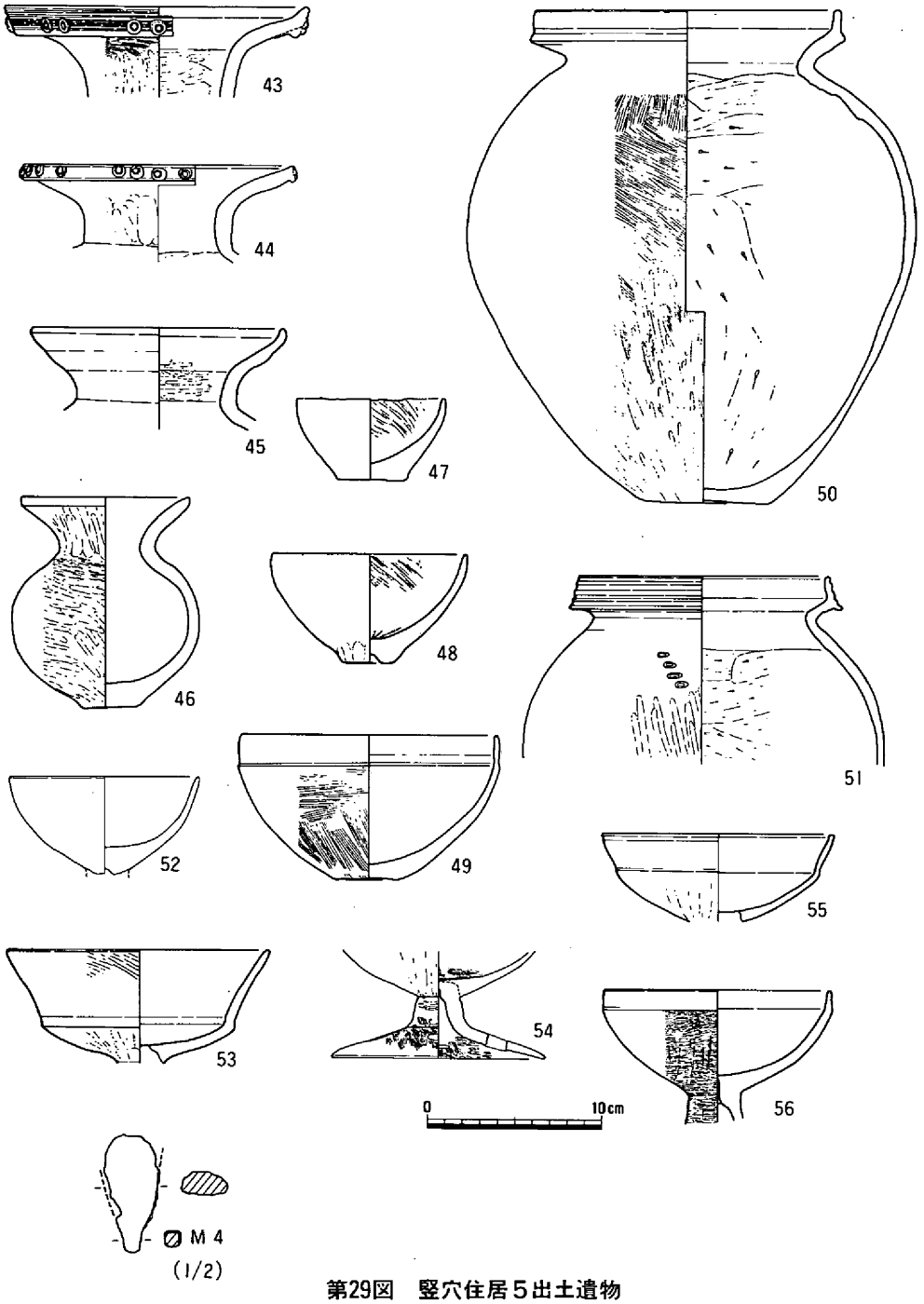




1．淡茶黄色砂質土（黄色土粒含む）
2．茶黄色土（炭含む）
3．茶灰色土（炭含む）
4．茶灰色砂質土
5．灰茶黄色土
6．灰
7．黄茶灰色土（炭含む）
8．茶灰黄色土（炭含む）
9．黄茶色土
10．黄褐色土
11．黄色土
12．淡茶黄色砂質土
13．茶黄色土
14．茶灰黄色土
15．茶灰色土（炭・焼土多く含む）
16．黄茶色土（黄色土粒含む）
17．暗灰黄色土
18．黄灰褐色土

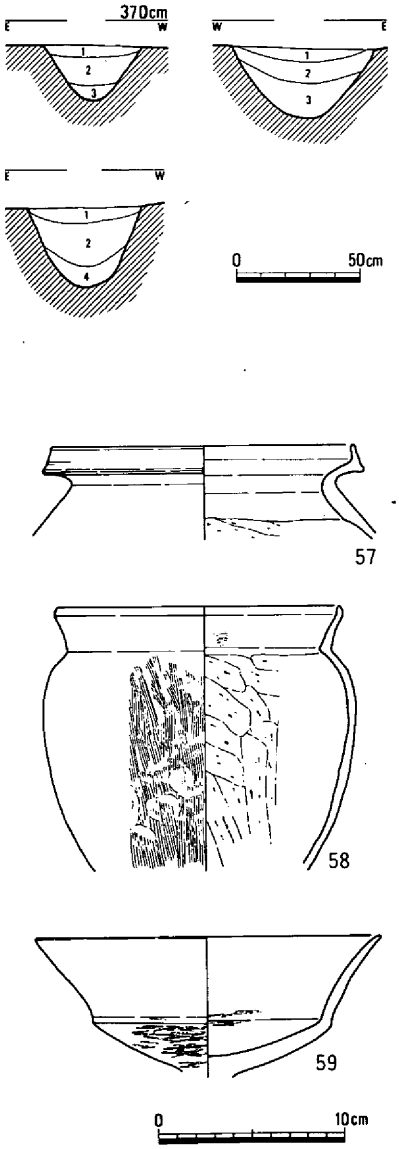
第28図　竪穴住居５・遺物出土状況

北辺中央部には、少し突出するように長さ20cm大の石が置かれている。この石の南側には、深い穴に取り付くように段が形成されている。なお穴の深さは床面から50cmを測る。



第29図　竪穴住居５出土遺物

柱穴はベッド状遺構の内側の四隅に穿たれている。いずれも柱痕跡が認められる。中央部にはほぼ円形の穴が穿たれており、底部近くには厚さ４㎝の灰層が認められた。中央ピットの南側周辺の床面は良く焼けており、また周辺約１ｍの範囲には厚さ１～２㎝に炭の堆積が見られ



第30図　竪穴住居５外周溝・出土遺物

た。

住居内の埋土は基本的に３層がほぼ整然と堆積しており、このうち上層を除いていずれも炭を多く含んでいた。

遺物は土器以外に鉄器や銅製品の小片が出土したほか、２～３㎝大の円礫が集中して認められた。これらの遺物は床面ないし床面近くから出土した。また、円礫集中部は東側のベッド状遺構上に認められたが、床面より少し浮いていた。

43～45は壺である。43と44はほぼ垂直に立上る頸部から強く外反する口縁部をもち、その外端面に円形浮文を張り付けている。52～56は高杯、47～49は鉢である。50と51は甕である。51は口縁部外端面にヘラ描沈線がめぐり、肩部には刺突が縦に四個認められる。これらの土器は百・後・Ⅳに比定される。

住居外周溝

９・10Ｂ区で検出された溝は、南東側は南東に向って延びるものの、竪穴住居５を囲むように流走する。規模は幅40～55㎝、深さ30㎝前後を測る。溝の断面形はＵ字状を呈するが、やや壁の立上がりの緩やかな部分もある。

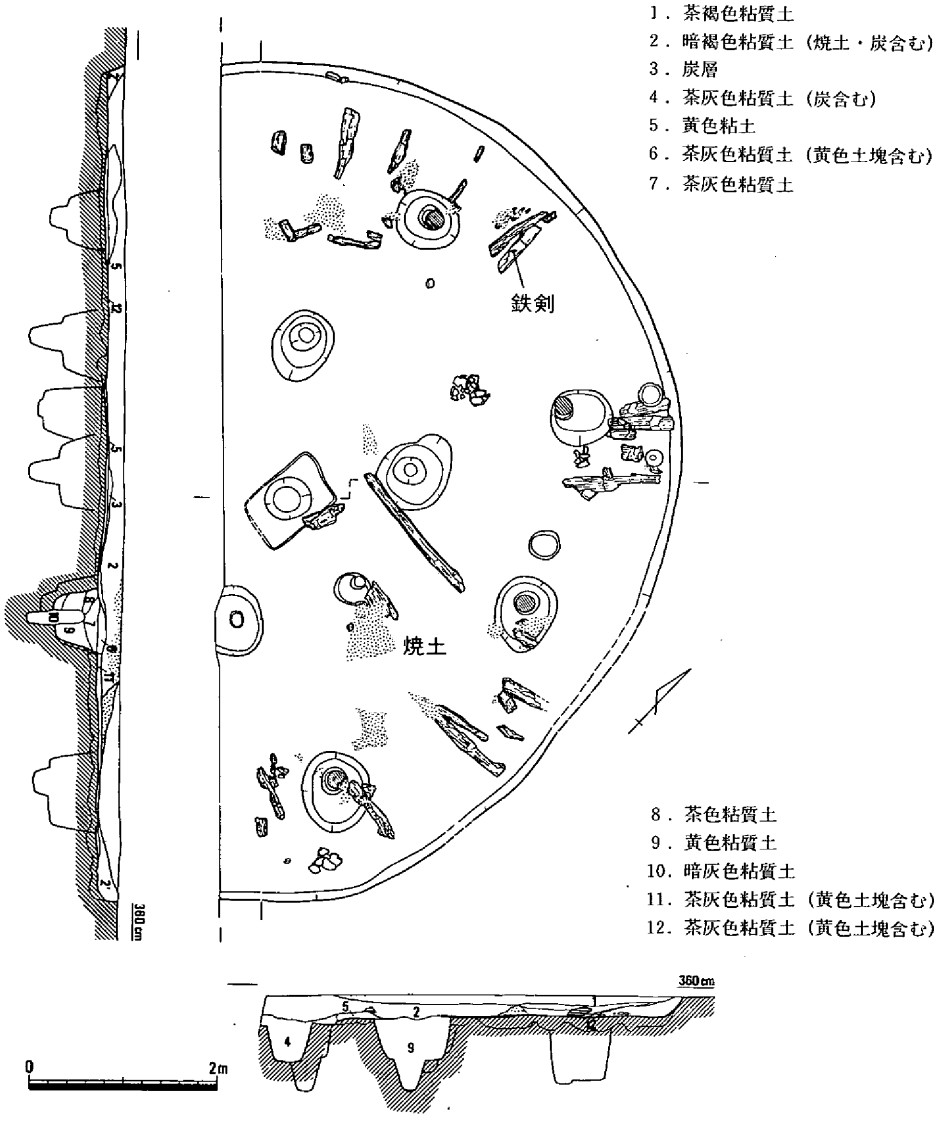
遺物は弥生土器が少量出土した。57と58は甕である。58はくの字状に外反する口縁端部をわずかにつまみあげ、外端部に面をもつ。59は高杯の杯部である。時期は百・後・Ⅳと考えられる。　（平井）

竪穴住居６（第31、32図、図版10・56・88）

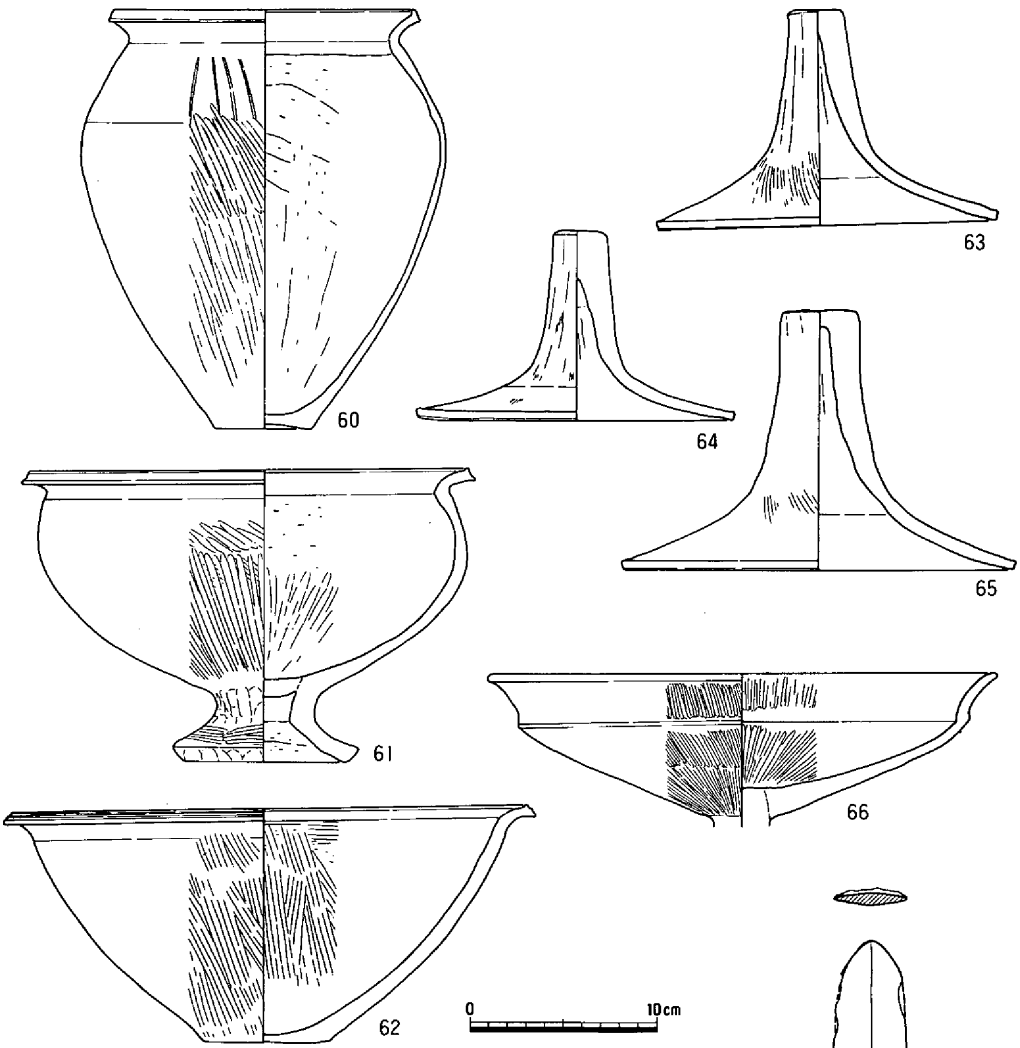
８・９Ａ区から北東約半部が検出されたもので南西半部は調査区外に延びており、住居東部は土壙52・井戸３に一部切られている。平面形態は推定径約９ｍ、床面までの覆土約20㎝を残す。住居は火災を受けており、覆土中には多量の炭・焼土が含まれていた。床面からは垂木等の炭化材が放射状に倒れた状態で検出された。柱穴は住居壁に沿って４本、中央穴の周りから３本検出しているが、推定平面形態から復元すれば、住居周壁沿いにめぐる８本と、中央穴を中心にやや南北方向に長軸をもつ４本の計12本の主柱によって建っていたものと考えられ、特

に、内側の柱穴はいずれも柱穴底部から柱根部分が20cm近く深くめり込んだ状態であった。中央穴は南北方向に長軸をもつ一辺90×60cm、深さ約10cmを測る方形の段をもち、さらにその中央に径約45cm、深さ約40cmを掘り込まれたものである。

床面の北東から台付鉢、その東部から鉢・高坏・蓋などが、南東部から甕が出土しており、そのうち蓋は図示した３点を含め計４点が出土している。小型の鉄剣は住居北東部床面に倒れた炭化材の上から出土したもので、長さ8.5cm、刃部下端で幅2.2cmを測り茎は短い。土器の特徴から当住居は百・後・Ⅱに比定される。　（江見）



第31図　竪穴住居６

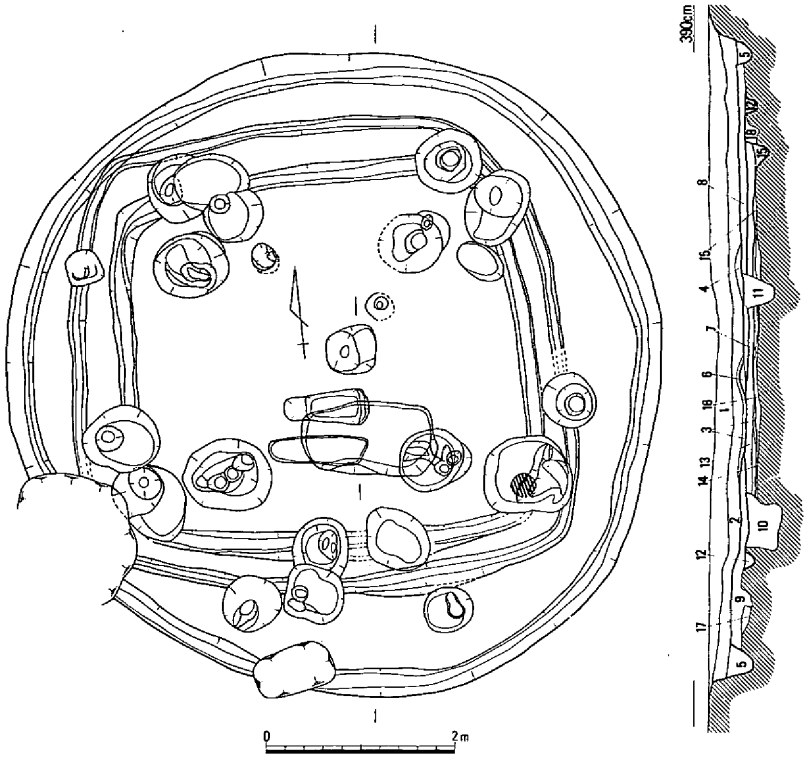


第32図　竪穴住居６出土遺物

竪穴住居７（第33～38図、図版11・12・57・88）

９Ｚ区に位置し後述する建物22を切り、竪穴住居８の住居外周溝１～３を切っている。当住居群は平断面から明らかなように、隅丸方形の平面形態をもつものから、二度の拡張を経て、最終的には円形の平面形態に移行し、廃絶したものである。

７Ａは長軸約4.40ｍ、短軸約4.20ｍを測るやや東西に幅をもついびつな隅丸方形を呈す。検出した施設は住居壁をめぐる幅約20㎝、深さ約10㎝の壁体溝及び、住居中央やや南寄りから約110×30㎝、深さ約５㎝の浅い長楕円形土壙のみであるが、主柱は下記７Ｂの主柱穴の位置に



1．淡黄灰色砂
2．暗灰色粘質土（黄色砂ブロックを少し含む）
3．炭層
4．灰色粘土（砂、焼土を多く含む）
5．暗茶色土
6．灰色粘土（黄色粘土塊を含む）
7．灰色粘質土（炭、焼土を含む）
8．灰黄色粘質土（黄色粘土塊を含む）
9．灰黄色土（黄色粘土塊を少し含む）
10．暗灰色粘質土（黄色土塊を少し含む）
11．灰黄色粘質土（黄色粘土塊を含む）
12．暗灰色粘質土（　　〃　　）
13．黄灰色粘質土（黄色粘土塊を含む）
14．灰黄色土
15．灰色粘土
16．黄色粘土（貼床）
17．暗灰色土
18．暗茶色土

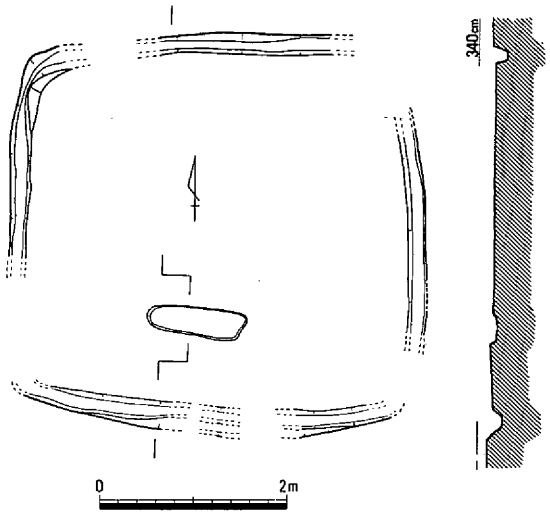
第33図　竪穴住居７

重複するか、共有されたもので、４本であったと考えられる。

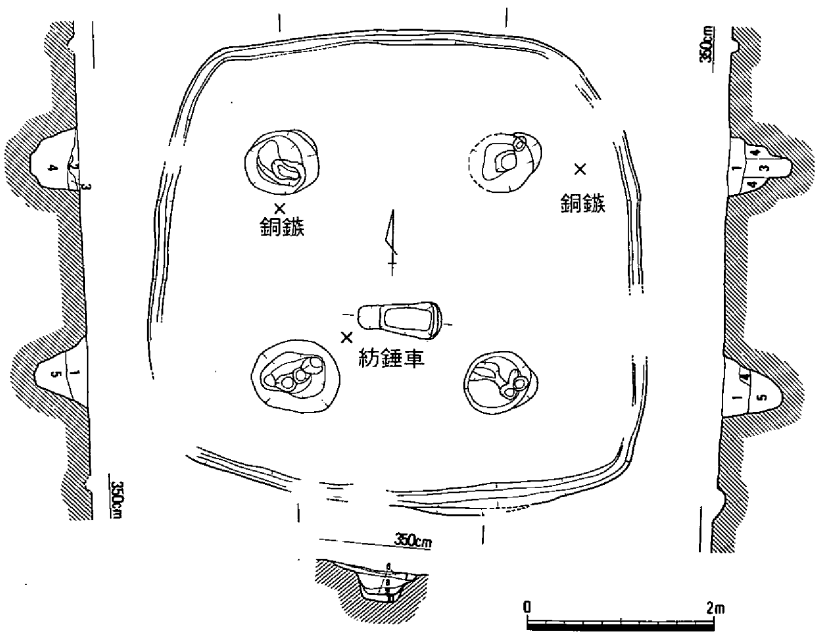
７Ｂは上記同様いびつな隅丸方形を呈すが、床面が10cmほど上がり全体に一回り大きく拡張されている。長軸約5.20m、短軸5.10mを測る。主柱穴は４本で、そのうち３柱穴には柱穴底部からさらにめり込んだ複数の柱根跡が認められることから、柱の立て替えが行われたようである。住居中央やや南寄りからは90×30cm、深さ約30cmの７Ａ同様東西方向に主軸をもつ土壙が検出されているが、当土壙は上記に比し深く、土壙東西部分に浅い段をもつ。土壙下部には炭層および炭混じりの粘質土が堆積していた。遺物は床面から紡錘車および銅鏃２点が出土したが一本は腐蝕が著しく、図示したM10も芯部分のみが残存するものである。

７Ｃは径約７m、深さ約30cmを残す。上層は当遺跡群一帯を覆った後期水田の洪水砂と同様

竪穴住居７Ａ

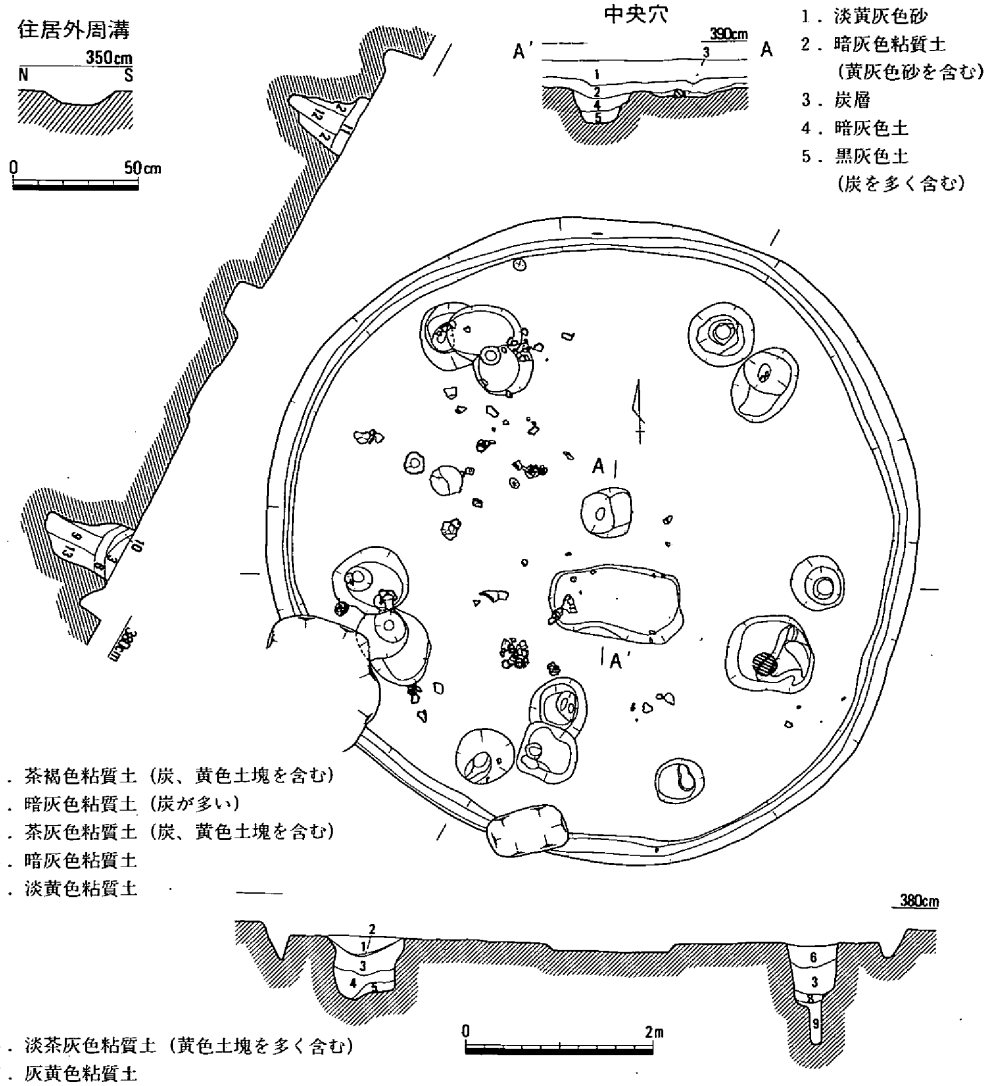


竪穴住居７Ｂ



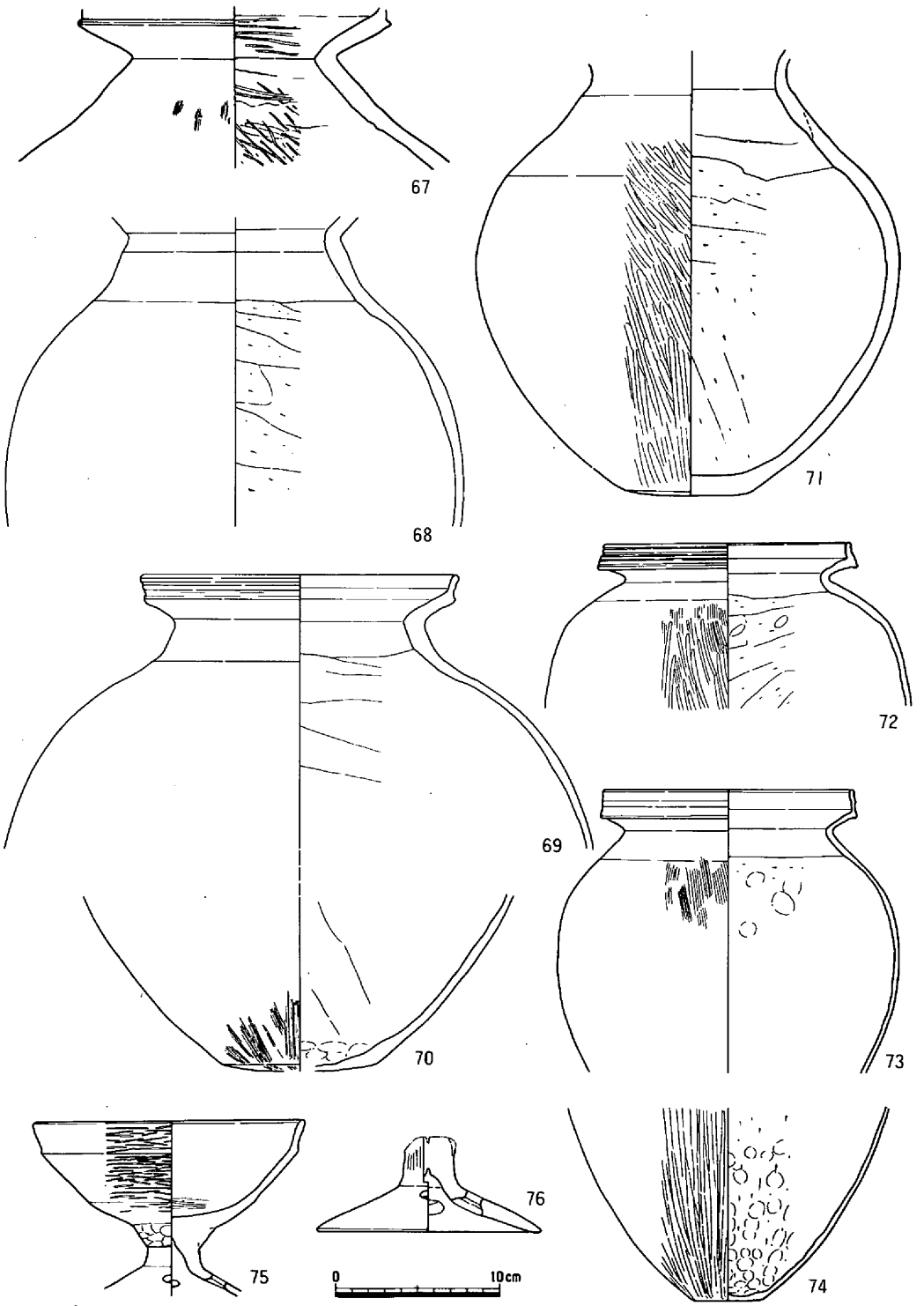
１．暗灰色土（黄色ブロックを含む）
２．暗灰色土（炭、焼土を含む）
３．暗灰色土
４．暗灰色土（黄色ブロックを含む）
５．黄色土（灰色粘土を含む）
６．炭層
７．暗茶灰色粘質土
８．黄茶褐色粘質土
９．黄灰色粘質土
10．黄灰色粘質土（炭を含む）

第34図　竪穴住居７Ａ・Ｂ

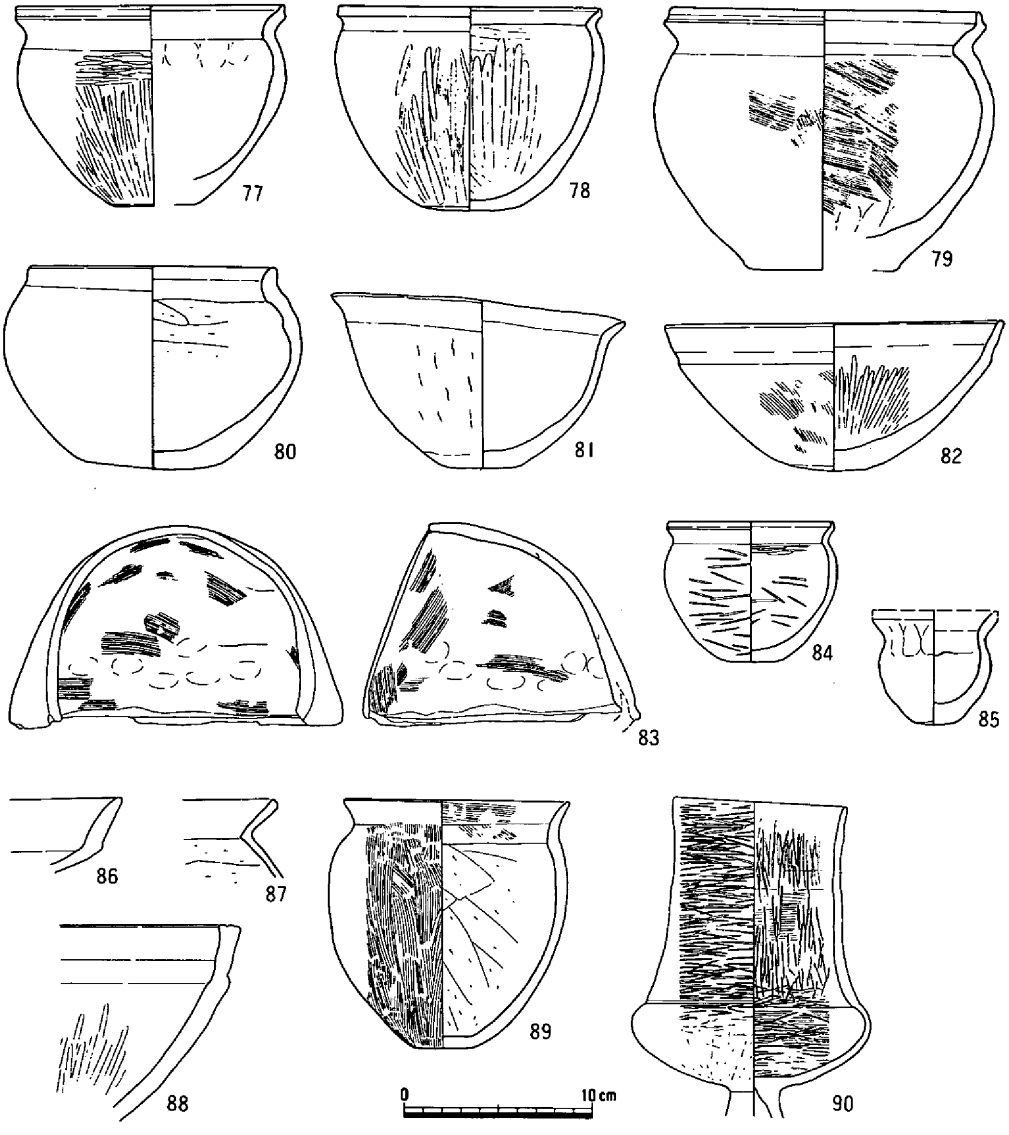


第35図　竪穴住居７最終床面

と考えられる砂層が堆積しており、また、断面から明らかなようにその状況は竪穴肩口が斜めに崩れていることから、住居廃絶後、時期をおいて埋没したと考えられる。主柱は平面形態および切り合い関係から、６本柱から廃絶時には５本に立て替えられていたものと考えられる。住居中央からは径約50cm、深さ約40cmの東側に段をもつ中央穴および、その南から東西方向に長軸をもつ140×65cm、深さ約８cmの浅い土壙が検出された。なお、中央穴下層は炭を多く含む



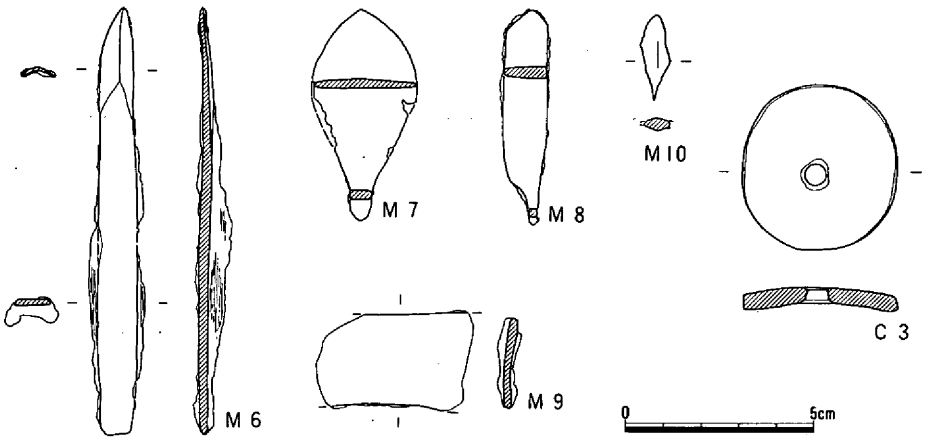
第36図　竪穴住居７出土遺物（１）



第37図　竪穴住居７出土遺物（２）

ものであった。遺物は大半が２層の床面および直上から土器類の他、鏃・不明鉄製品・ガラス滓１片などが出土している。遺物の特徴から百・後・Ⅳに比定される。なお、当住居南西部からは住居外周溝の一部と考えられる溝を検出している。住居壁から約２ｍの位置に、住居掘り方に沿って平面孤状、断面Ｕ字状を呈す溝で、幅約20cm、深さ約５cm、溝底部の海抜高3.5ｍを測る。溝内には暗茶褐色土が堆積していた。遺物は僅かながら弥生後期土器片が出土している。

（江見）



第38図　竪穴住居７出土遺物（３）

竪穴住居８（第39・40図、図版11）

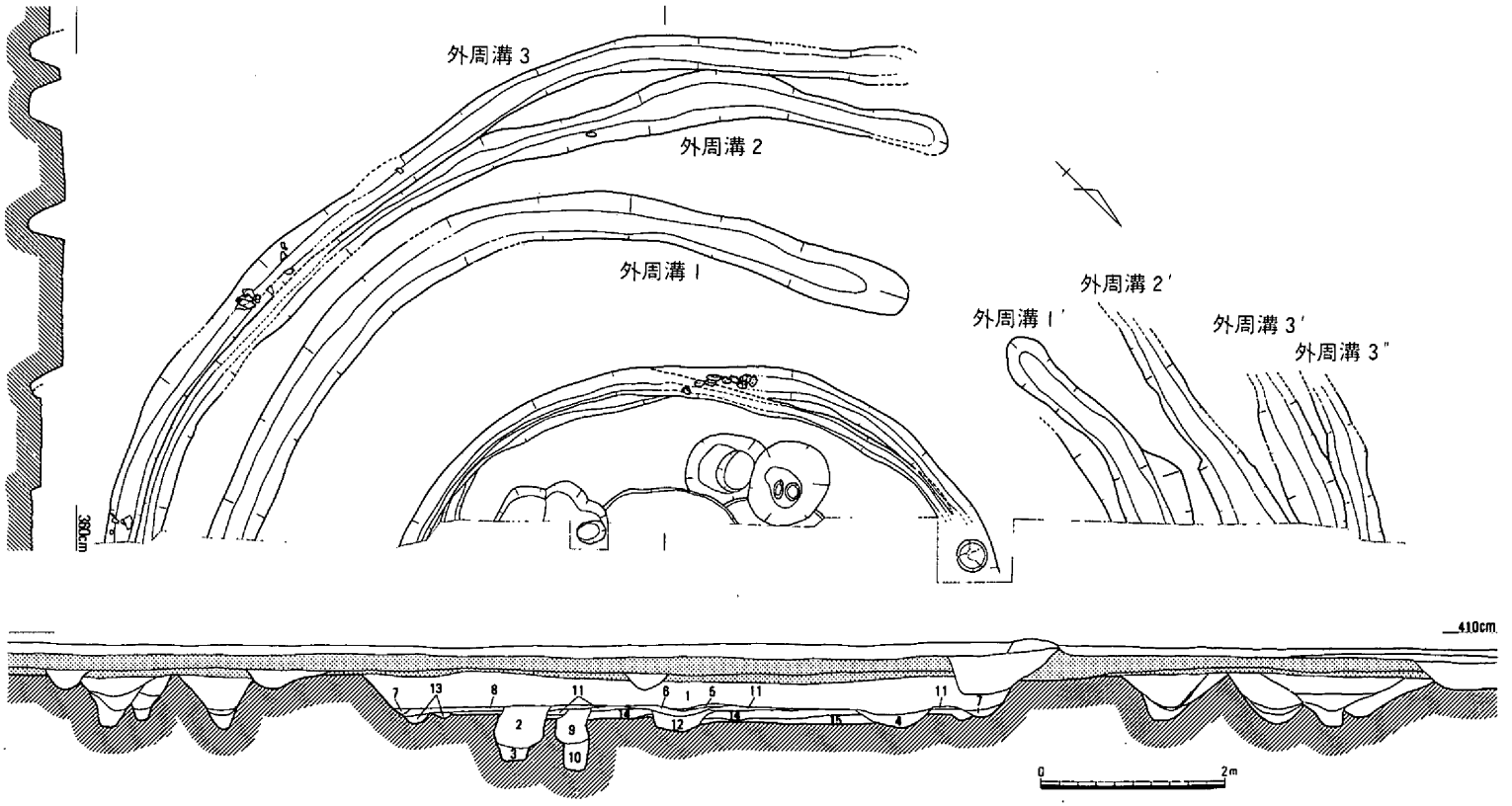
９・10Ｚ区に位置し、住居西側約1/3が検出され大半は調査区外に延びる。また、住居南部上層に竪穴住居９が所在し、住居を巡る外周溝が竪穴住居７に一部切られている。住居は一回の建て替えがなされている。住居の平面形態は旧が径６ｍ前後、新の径6.5ｍ前後のほぼ円形を呈するものと推定され、検出面から新住居床面までの深さ約20㎝を測る。断面観察から新住居床面は旧と比べ、５㎝余り高くなっている。柱穴においてもその切り合い関係から立て替えが認められるとともに、その配置から主柱は新旧いずれも５～６本と推定される。遺物は主に覆土から出土しているが、最終床面からは小礫および土器片に混じって高杯・砥石・ガラス小玉などが出土している。なお、床面下および旧壁体溝からも土器細片が出土しており、これら遺物の示す年代観は百・後・Ⅱの範疇のものである。

一方当住居には外周を巡る溝が検出されている。溝の検出40～50㎝、深さ40㎝前後を測る。

平断面の検討から、これらの溝は竪穴住居７による削平を受けているものの、住居外周溝１および１'、２～２'、３～３'および３"は住居西部で幅１ｍほどの間がとぎれており、この部分が住居への出入口であったものと考える。また、断面からこれらの溝は内側から外へ向かって新しくなることが明らかとなったが、出土遺物からの時期差は確認できず、上記同様の年代観を示すものである。なお、溝３から石錘Ｓ４が、溝２'から勾玉Ｊ３が出土しているが、後者については上層から古墳時代遺構も多数検出しており、材質・形態などから混入の可能性も否めないが当項へ記載した。（江見）

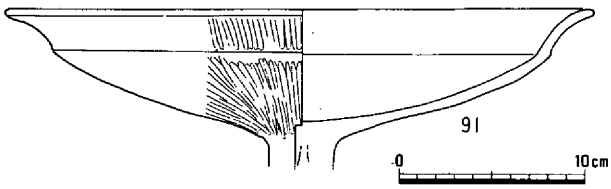
竪穴住居９（第41図、図版10）

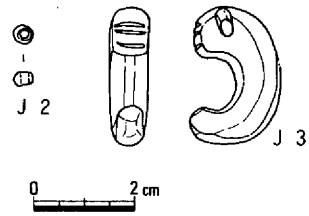
11Ａ区で検出された住居で、大部分は調査区外へ延びるため詳細は不明であるが、径５ｍ前

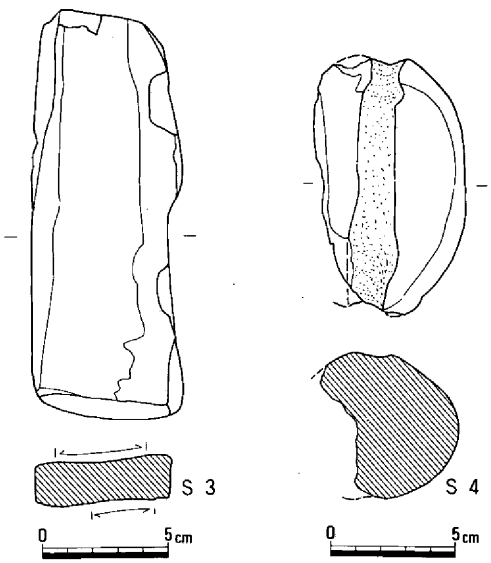


1．淡茶灰色粘質土　2．灰黄色粘質土　3．灰白色粘質土　4．淡茶褐色粘質土　5．炭層
6．灰茶色粘質土　7．茶灰色粘質土　8．灰褐色粘質土　9．灰黄色粘質土　10．灰白色粘質土
11．淡茶黄灰色粘質土　12．淡茶灰色粘質土　13．淡茶灰色粘質土　14．灰黄色粘質土　15．黄褐灰色粘質土

第39図　竪穴住居8







第40図　竪穴住居８出土遺物

後の円形を呈すると推定される。住居内は壁に接して溝がめぐっている。柱穴は１箇所のみで、他は不明である。なお、住居の外側には幅60cm前後の溝が弧状に認められる。おそらく住居を囲む溝の一部と考えられる。遺物は弥生土器が少量出土した。92は器高の低い甕である。93は小型の鉢、94は製塩土器である。時期は百・後・Ⅱと考えられる。（平井）

(3)　建物

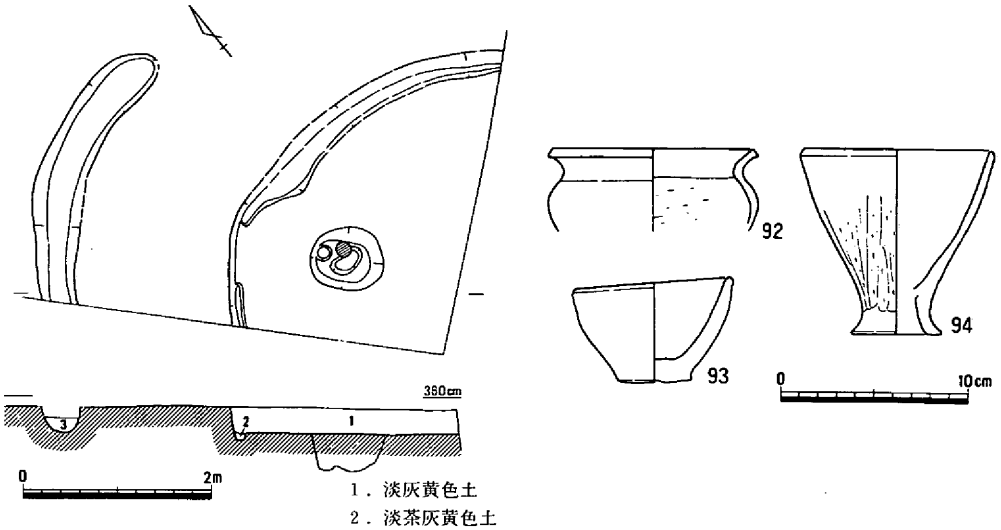
弥生時代後期の建物は28棟を検出した。２×１間程度のものが大半で、多くが軸線を南北ないし東西にとる。微高地東側に多数分布しているが、西部で検出した柱穴の大部分も本来は建物を構成するものであったと考えられ、柱穴が多すぎるために逆に建物の認定ができなかったと言わざるを得ない。したがって、本来の建物はここに示すものよりもさらに多かったとみて良いであろう。

建物１（第42図）

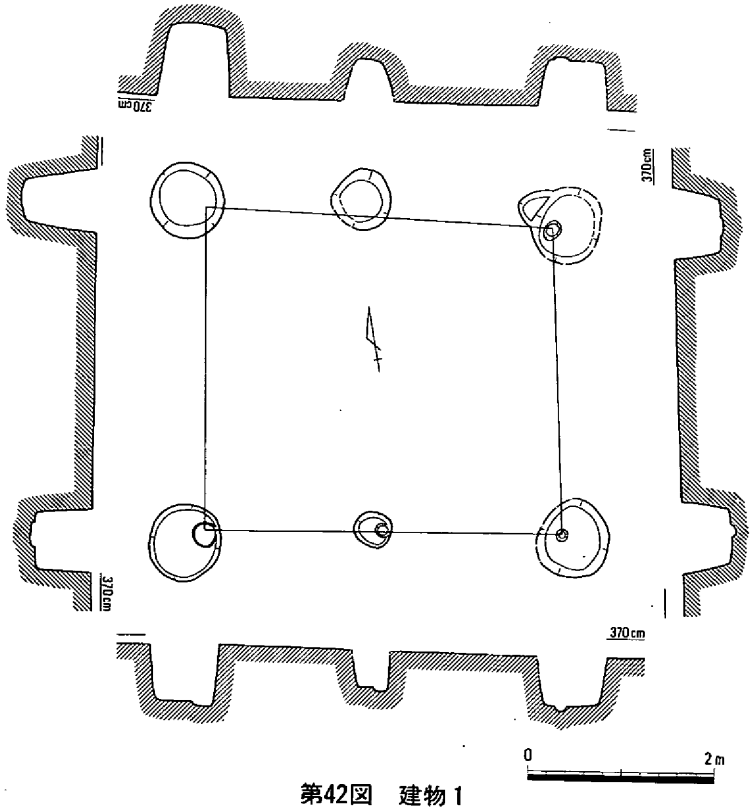
９Ｃ区で検出した２×１間の建物である。建物軸線をほぼ東西に取っており、建物の規模は東西3.80m、南北3.25mを測る。四隅の柱の掘り方は径75cm、深さ60cm前後と深く大きいのに対して、南北２辺中央の柱の掘り方は径40～60cm、深さ50cmと小さくなっている。建物の年代を決定するに足る資料はないが、柱の掘り方が他の柱穴によってかなり切られており、比較的古い時期、百・後・Ⅱ前後になるものと思われる。（宇垣）

建物２（第43図）

建物１の北東側で検出した２×１間の建物で、軸線を北西－南東にとる。建物の規模は長辺3.92m、南東短辺2.96mを測る。南東辺が北西辺よりも広くなっているため、建物の平面形は



第41図　竪穴住居９・出土遺物



第42図　建物１

台形気味になっている。柱穴のうち南西辺中央のものには土器溜まりが認められた。柱材の想定される部分に多量の土器が入っているもので、下端は柱穴底まで達している。柱材が腐朽した空洞に土器が廃棄された可能性もあるが、むしろ柱を撤去して生じた穴に土器片を埋納したのではないかと思われる。

これと同様な遺構は土壙47～51として示したものであり、建物撤去の際にしばしばこうしたことが行われているようである。

建物の時期は上記柱穴出土土器から百・後・Ⅲと推定される。（宇垣）

建物３（第44図）

９Ｃ区で検出された１間×１間以上の東西棟建物であるが、東側は調査区外となるため不明な点が多い。柱掘方は径60～80cmの円形を呈する。掘方底部には柱の重みによる凹みが認められ、その柱間の距離は3.15ｍを測る。

遺物は弥生土器の細片がわずかに出土した。建物の時期は後期と考えられる。（平井）

建物４（第45図）

８Ｃ区で検出された２間×１間の南北棟建物である。規模は桁行2.6m、梁間2.58ｍを測る。柱掘り方は円ないし楕円形を呈し、南側の掘り方にはすべて柱痕跡が認められた。なお、北西隅の掘り方は他の遺構と重なり、確認することができなかった。

遺物は弥生土器の細片がわずかに出土した。建物の時期は検出面から後期と考えられる。（平井）

建物５（第46図、図版13）

９Ｂ区で検出された１間×１間の南北棟建物である。規模は南北2.92m、東西の北辺２ｍ、同じく南辺2.10ｍを測る。柱掘り方は径20～90cmの円形を呈する。

遺物は弥生土器の細片がわずかに出土した。建物の時期は後期と考えられる。（平井）

建物６（第47図、図版13）

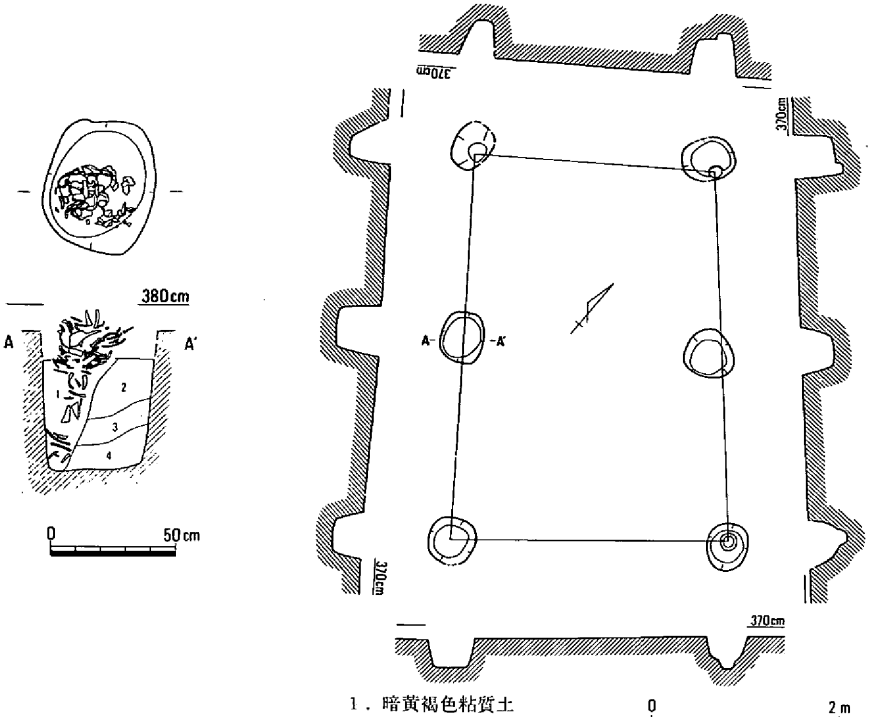
９Ｂ区で検出された１間×２間の南北棟建物である。規模は桁行2.94m、梁間２ｍを測る。柱掘り方は基本的に円形で径55～80cmを測る。

遺物は弥生土器の細片がわずかに出土した。建物の時期は後期と考えられる。（平井）

建物７（第48図、図版14）

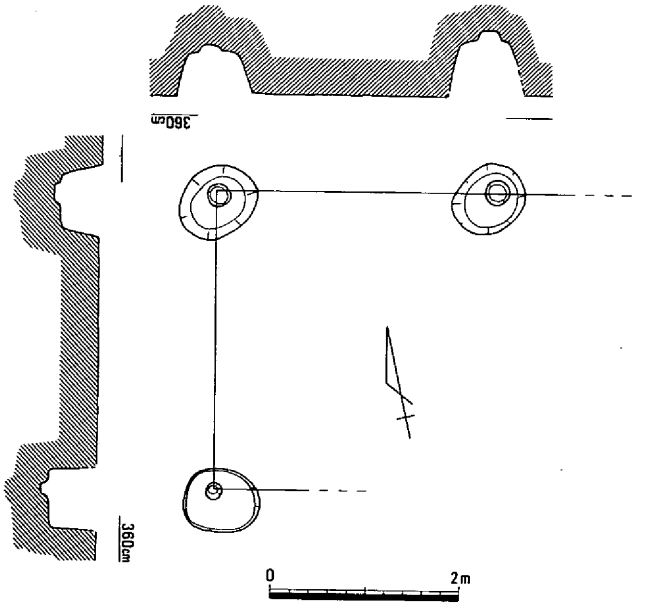
９Ｂ区で検出された２間×１間の南北棟建物である。規模は北側の梁間2.68ｍ、南側梁間2.5m、東側桁行2.65m、西側桁行2.27ｍを測る。柱掘り方は径30～50cmの円形を呈し、底には柱の痕跡と考えられる凹みをもつものがある。埋土は茶灰色土である。

遺物は弥生土器の細片がわずかに出土した。建物の時期は検出面から後期と考えられる。（平井）

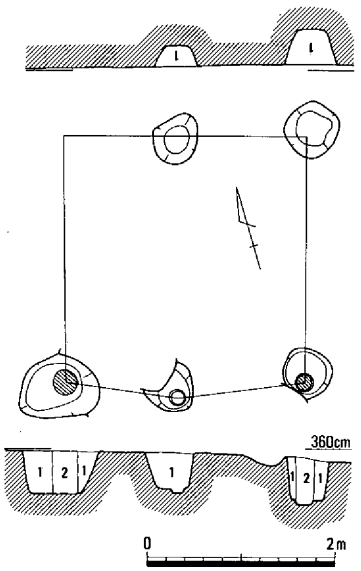


1．暗黄褐色粘質土
2．暗褐色粘質土（黄色土塊混）
3．暗褐色粘質土
4．暗褐色粘質土（黄色土塊混）

第43図　建物２

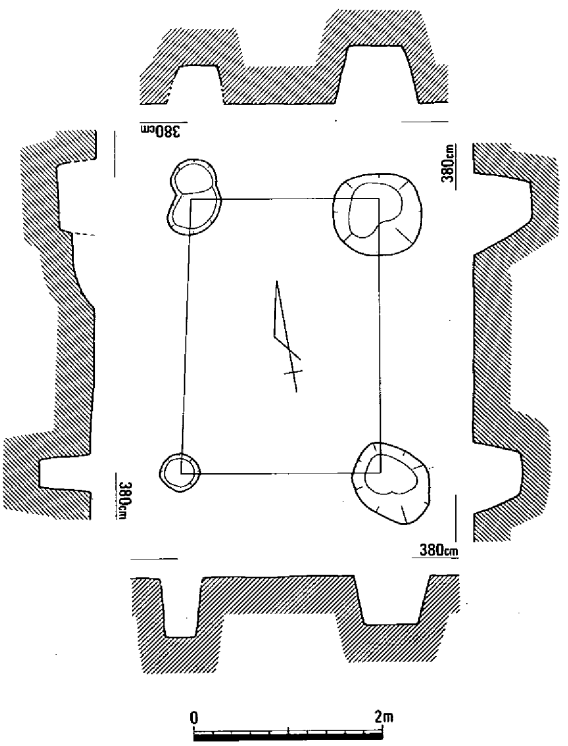


第44図　建物３



1．黄灰色土　2．暗褐色土

第45図　建物４



第46図　建物５

建物８（第49図、図版14）

９Ｂ区で検出された２間×２間の東西棟建物である。規模は桁行2.68m、梁間の東辺1.84m、同じく西辺2.02mを測る。四隅の柱掘り方以外は径も小さく、また深さも浅いことから建物６の柱とするにはやや問題もあるが、埋土が同じで、柱筋も通ることから２間×２間の建物とした。

遺物は弥生土器の細片がわずかに出土した。建物の時期は後期と考えられる。

（平井）

建物９（第50図）

８Ｂ区で検出された１間×１間の建物である。周辺に多く見られる東西ないし南北棟の建物とは方位が異なる数少ない建物の一つで、45°東へ振っている。規模は桁行3.53m、梁間2.85mを測る。柱掘り方は径50～70cmの円形を呈する。

遺物は弥生土器の細片がわずかに出土した。建物の時期は後期である。

（平井）

建物10（第51図）

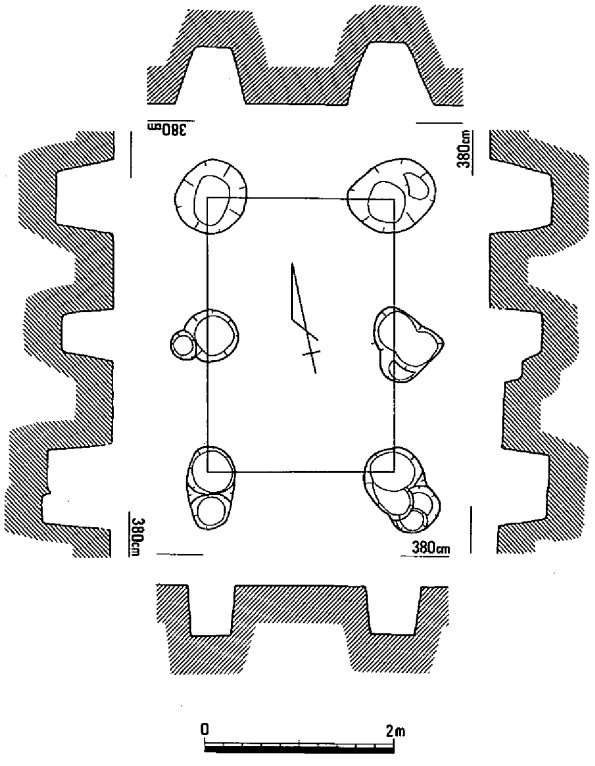
９Ｂ区で検出された１間×１間の東西棟建物で、北西端は調査区外となる。規模は桁行3.36m、梁間2.74mを測る。柱掘り方は径50cm前後の円形である。

遺物は弥生土器の細片がわずかに出土した。建物の時期は後期と考えられる。

（平井）

建物11（第52図）

10Ｂ区で検出された１間×１間の東



第47図　建物6

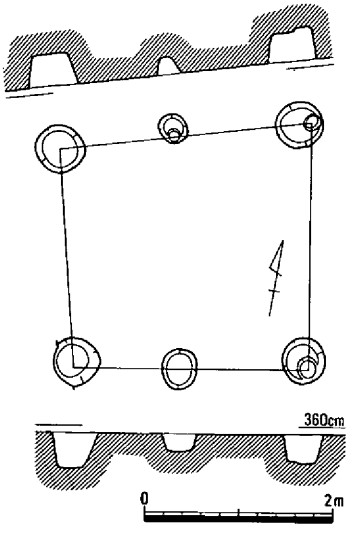
西棟建物である。規模は桁行2.30m、梁間の東辺1.80m、同じく西辺1.66mを測る。柱掘り方は径40cm前後の円形である。いずれも複数の掘り方が重複したような形状を呈している。しかし土層からは切り合い関係は明確でない。

遺物は弥生土器の細片がわずかに出土した。建物の時期は後期と考えられる。　（平井）

建物12（第53図）

10B区で検出された1間×1間の東西棟建物である。規模は桁行2.8m、梁間の西辺2.64m、同じく東辺2.55mを測る。柱掘り方は基本的に円形で、径は60～70cmである。

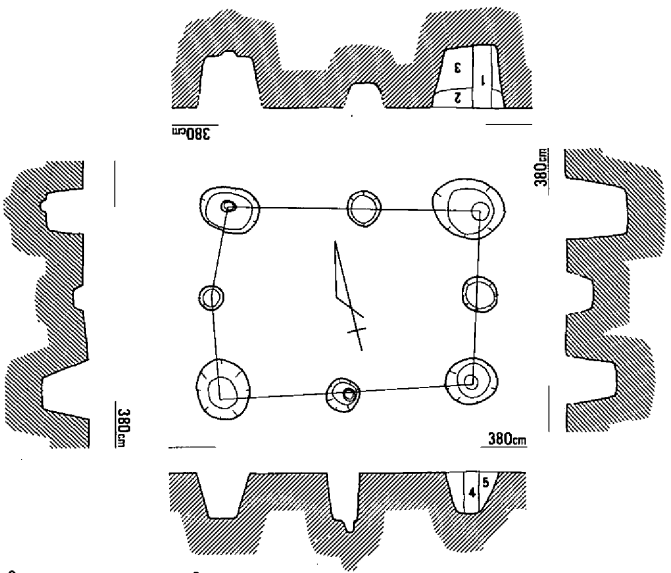
遺物は弥生土器の細片がわずかに出土しており、検出面および埋土などを合せて考えれば建物の時期は後期と考えられる。　（平井）



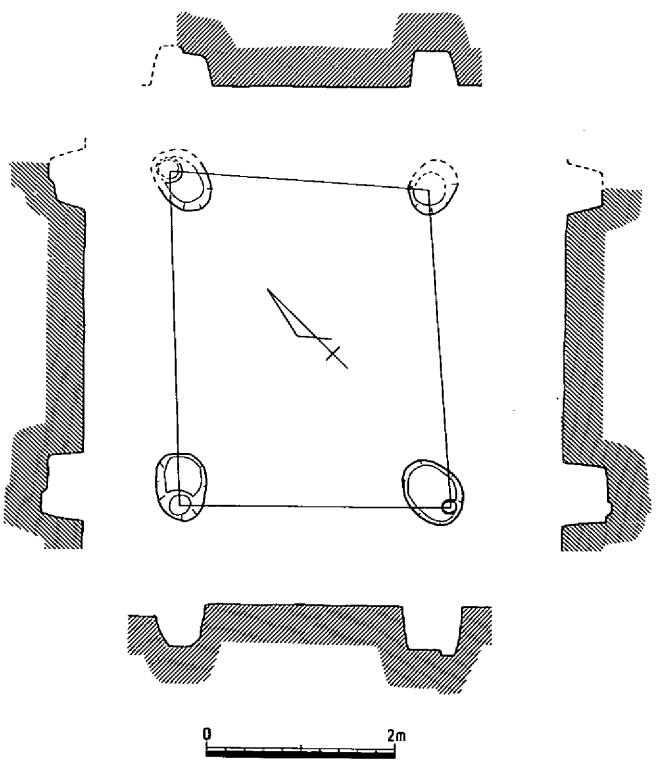
第48図　建物7

建物13（第54図）

10A区で検出された1間×2間の建物であるが、方位は建物10～12・14・15などの東西棟建物とは異なり、東に偏している。規模は桁行4.22m、梁間2.54mを測る。柱掘り方は径70cm前後の円形を呈する。このうち北西側柱筋の掘り方は、いずれも二つの掘り方が重複したような平面形を呈しているが、土層では切り合い関係は認められなかった。柱痕跡は認められなかったが、柱掘り方の底に柱の



第49図　建物8



第50図　建物9

重圧による凹みが残されていた。

遺物は弥生土器の細片がわずかに出土した。建物の時期は検出面および埋土から後期と考えられる。なお、建物14との先後関係は不明である。

（平井）

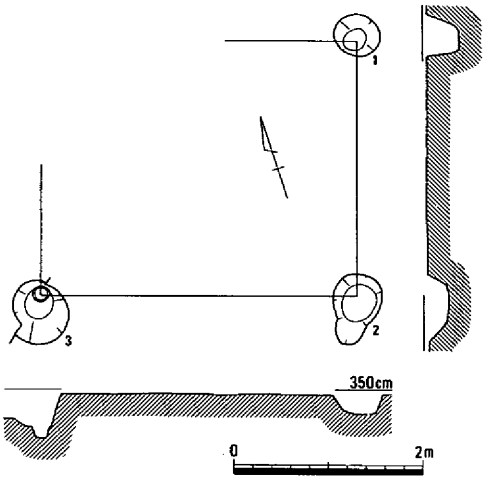
建物14（第55図、図版14）

10A・B区で検出された1間×2間の南北棟建物である。規模は桁行4.76m、梁間2.85mを測る。柱掘り方は径80～120cmの円形を呈する。柱痕跡は認められないが、掘り方底部に柱の重みによる凹みを残すものがある。遺物は弥生土器が少量出土した。95は甕の口縁部、96は高杯の口縁部である。時期は百・後・Ⅲと考えられる。　（平井）

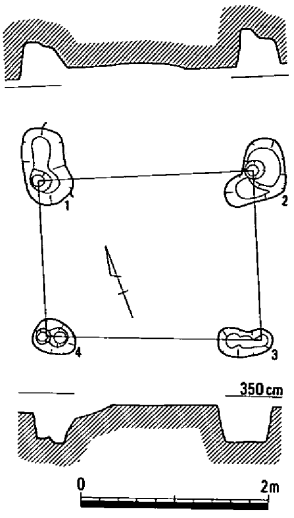
建物15（第56図、図版15・71）

9A区で検出された1間×2間の東西棟建物で、北東端は調査区外となる。規模は桁行3.94m、梁間2.36mを測る。柱掘り方は径60前後の円形で、P1には柱痕跡が認められる。

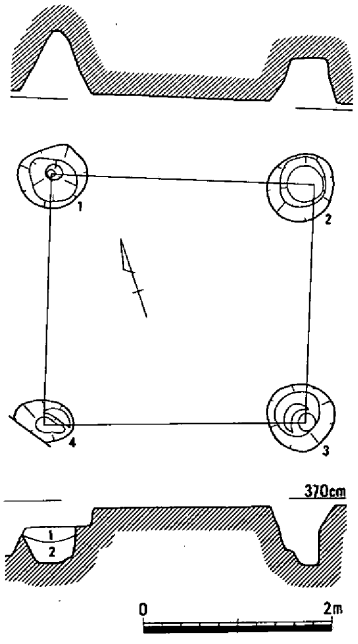
遺物は弥生土器がP1・P2から出土した。時期は



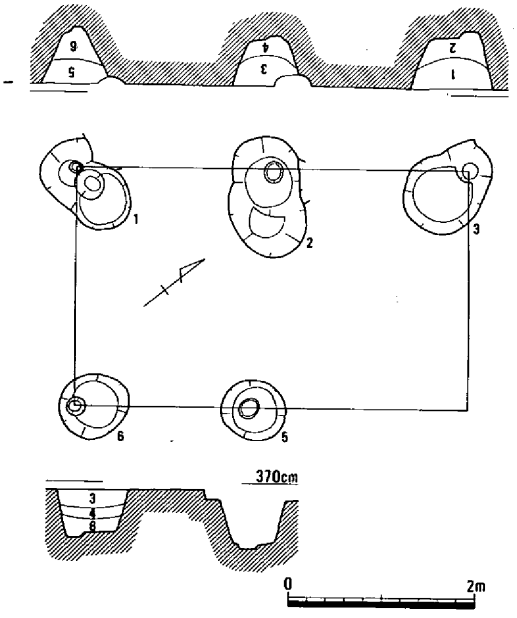
第51図　建物10



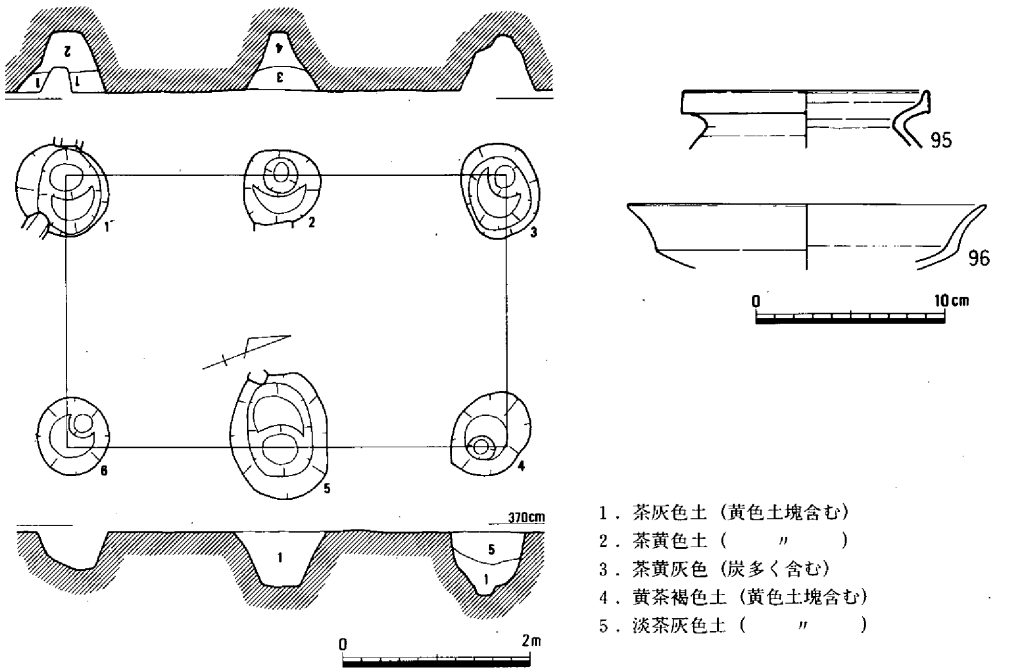
第52図　建物11



第53図　建物12



第54図　建物13



第55図　建物14・出土遺物

百・後・Ⅲと考えられる。（平井）

建物16（第57図）

9Ａ区の中央付近で検出した南北棟の建物である。柱間は２×１間、南北2.55m、東西2.01mを測る小規模な建物である。柱穴も径30cm前後、深さ30cm弱と小振りである。（宇垣）

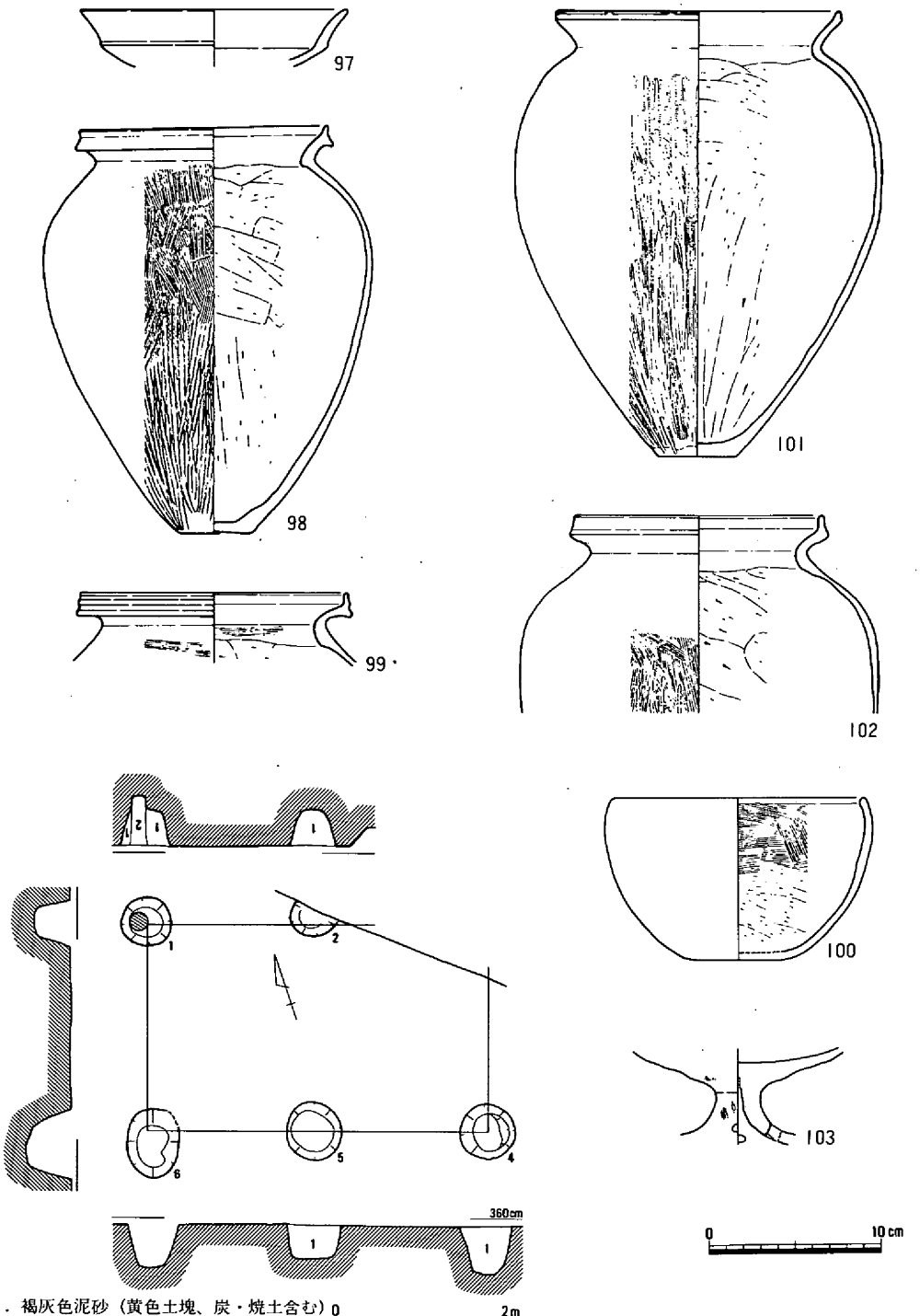
建物17（第58図）

建物16の西側に平行する形で検出した南北棟の建物であるが、軸線はやや東に振れている。建物の規模は東西3.66m、南北3.44mとＺ・Ａ区で検出した建物のなかでは大形である。柱間は長い南・北辺が２間、短い東・西辺が３間になっている。柱穴は径40cm前後、深さは四隅が40cm前後、他は30cm前後である。（宇垣）

建物18（第59図、図版15）

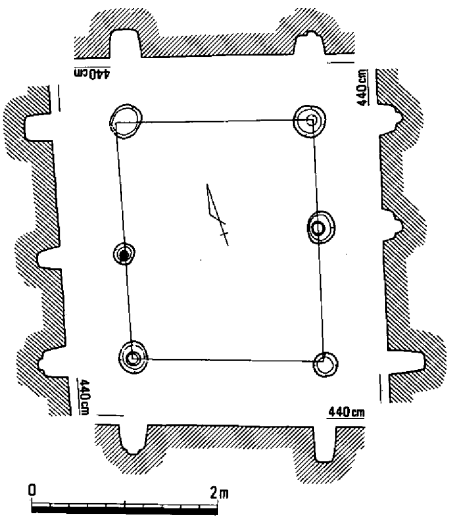
9Ａ～Ｚ区にまたがって検出されたもので、上記建物16の北東に位置し、それと一部重複する２間×１間の東西棟建物である。東西方向北側3.30m、南側3.10mとやや北側が広い。南北方向は2.80mを測る。柱穴は隅のものが長径60～70cm、深さ55cm前後を測るが、桁行き中央のそれは長径45cm、深さ約20cmと小さく浅い。柱穴からは後期土器細片が出土している。時期は北西隅の柱穴が土壙45に切られていることから百・後・Ⅱないしそれ以前である。（江見）

建物19（第60図）



1．褐灰色泥砂（黄色土塊、炭・焼土含む）
2．灰褐色泥砂（炭・焼土含む）

第56図　建物15・柱穴１、２出土遺物



第57図　建物16

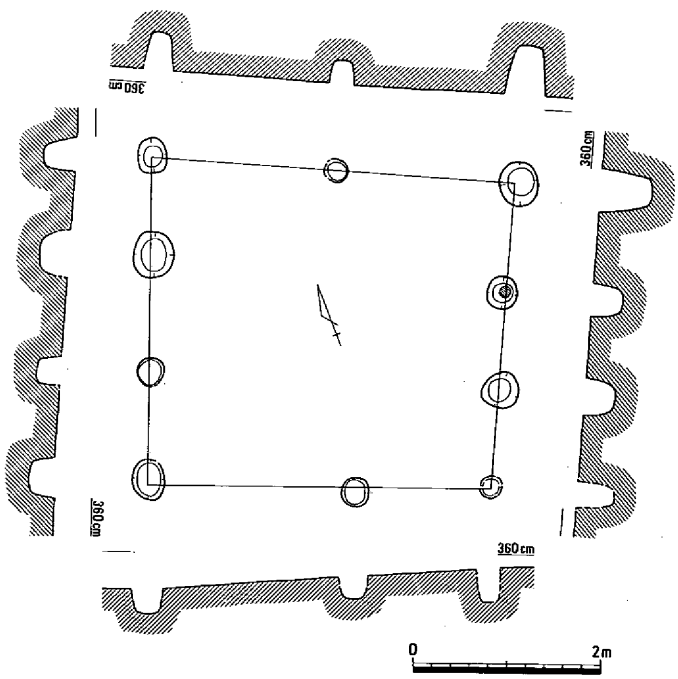
9・10A区から検出され、北東隅の柱穴が重複関係にある建物20の柱穴を一部切っている。2間×1間の南北棟で南北方向3.10m、東西方向は2.30～2.60mで北側がやや広い。柱穴は径45～70cmの楕円気味で、深さ50cm前後であまり差はない。柱穴埋土はいずれも褐色粘質土に黄色粘質土の小ブロックが混入するものであり、後期土器細片が僅かながら出土している。

（江見）

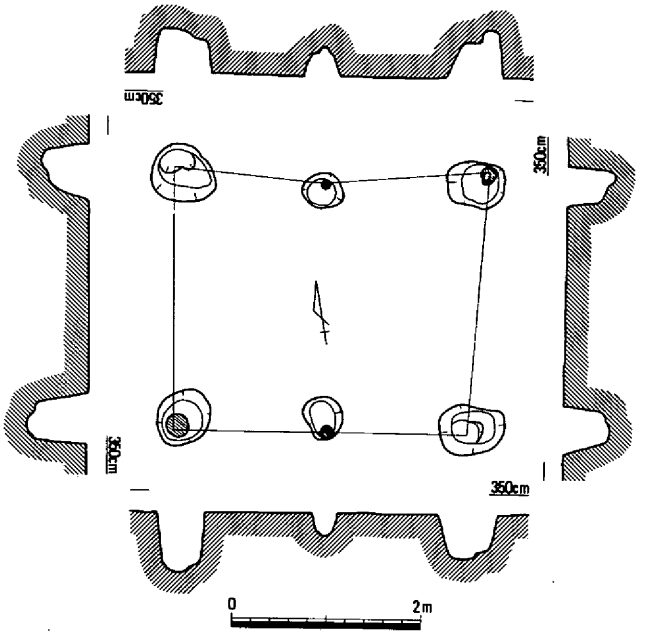
建物20（第61図）

9・10A区境付近から検出されたもので、前記建物19に切られている。

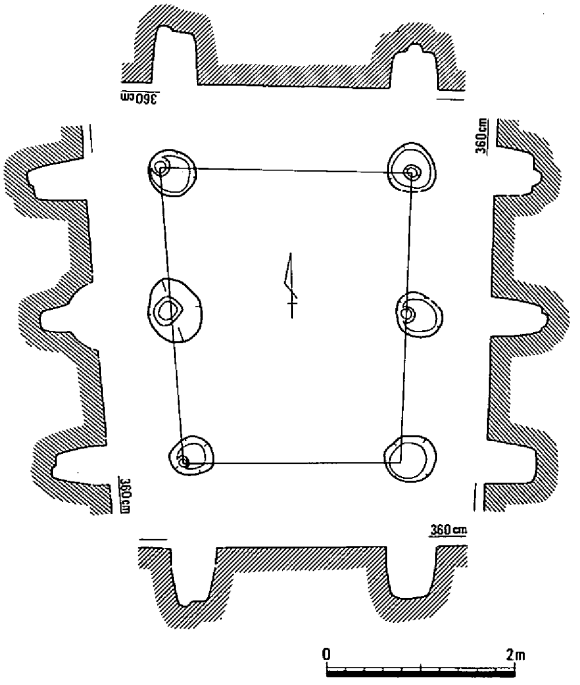
2間×1間の東西棟建物である。東西方向約3.20m、南北方向約2.30mを測る。柱穴は径50cm前後で、深さは30～40cmを測り、東西方向中央の柱穴はいずれも隅のそれと比べやや浅



第58図　建物17



第59図　建物18



第60図　建物19

い。残存する柱痕跡の径は15cm前後を測る。柱穴埋土は上記同様であり、遺物は後期土器細片が出土している。なお、当建物と方位を同じくするのは建物26・27などである。　（江見）

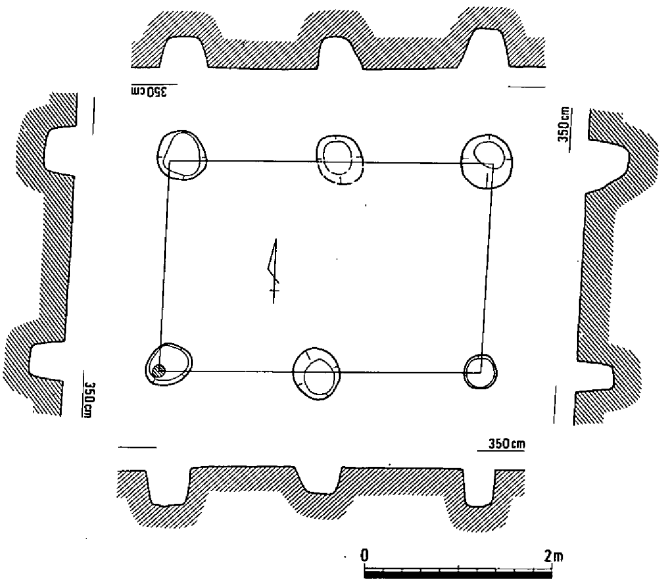
建物21（第62図）

9Z区南寄りに位置し、竪穴住居7の住居外周溝と重複関係にあたる。2間×1間のやや東に振る南北棟の建物である。東側中央柱穴が若干東にずれるが、南北方向2.90m、東西方向2.20mを測る。柱穴は径35cm前後、深さ25～40cmを測る。北西隅の柱穴に残存する柱痕跡の径約10cmと細く、建物全体も小規模なものであったと推定される。柱穴埋土は褐色粘質土に黄色粘質土の小ブロックが混入する。

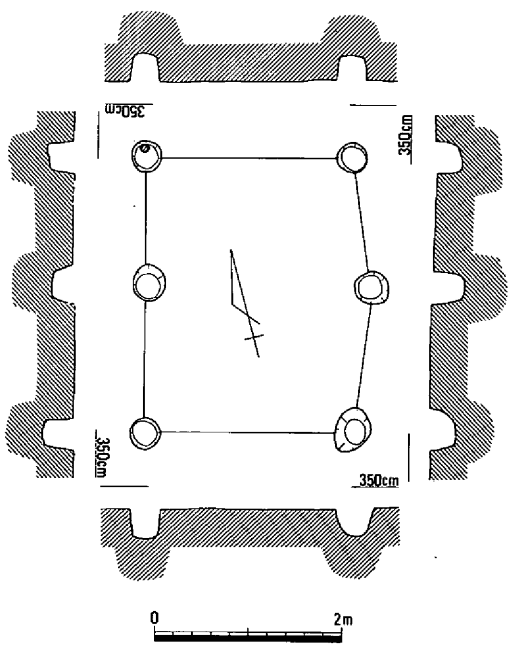
遺物は全くなく時期不明であるが、前記建物18と同様の埋土であり、建物の方位も一致している。　（江見）

建物22（第63図）

10Z中央東寄りに位置し、竪穴住居7に切られている。2間×1間の東西棟建物で、東西方向3.30m、南北方向



第61図　建物20



第62図　建物21

2.50ｍを測る。残りは悪く深さ10～20cmである。南側中央柱穴は柱根位置がややずれる。柱穴埋土は黄色および灰色粘質土の混合層で、遺物は西北隅の柱穴から後期土器細片が僅かに出土しているのみである。時期は百・後・Ⅳ以前である。

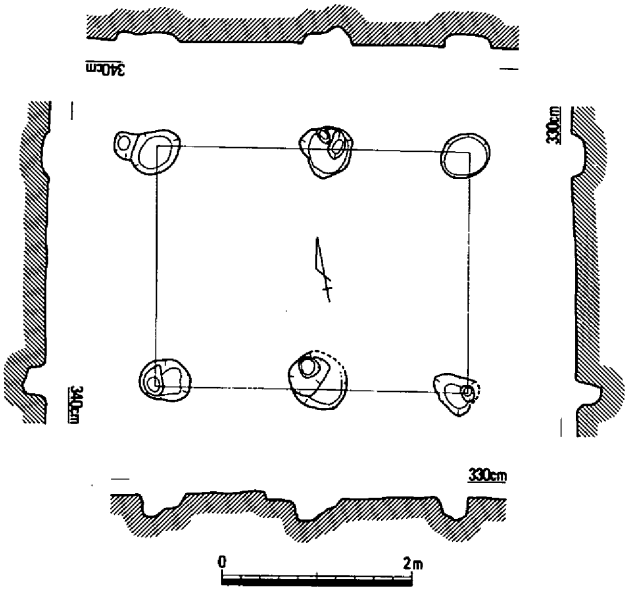
（江見）

建物23（第64図）

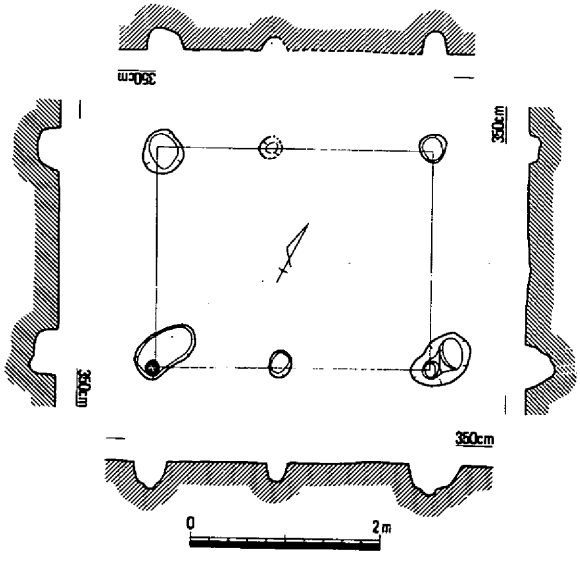
10Ｚ区の北西、建物21の南東に位置する。やや西に振る２間×１間の建物で、北側中央の柱穴は井戸６に、南西隅のそれは溝27に切られている。東西方向2.9m、南北方向2.3ｍを測る。四隅の柱穴は北東隅のそれがやや小さいものの径30～60前後、約25cmを測り、やや西に寄る中央の柱穴はいずれも径約20cm、深さ約20cmと小さく、柱穴埋土は褐色粘質土に黄色粘質土の小ブロックが混入していた。遺物は後期前半の土器細片が出土している。　（江見）

建物24（第65図）

10Ｚ区南西中央位置する。北西隅の柱穴は一部井戸４を切り、南側中央の柱穴は百・後・Ⅳの小土壙に切られている。２間×１間のやや西に振る東西棟の建物で、南側中央の柱穴は僅かに南にずれる。東西方向2.9m、南北方向２ｍを測



第63図　建物22



第64図　建物23

る。柱穴は4隅が径約60cm、深さ約40cmを測り、中央のそれは径約50cm、深さ約30cmとやや小さい。柱穴埋土は褐色粘質土に黄色粘質土の小ブロックが多く含まれていた。遺物は甕底部片のほか後期土器細片が数点出土したのみであるが、遺構の切り合い関係から百・後・Ⅱ～Ⅳの間と考えられる。　（江見）

建物25（第66図）

10Z区南寄り、建物24の南東に位置する、2間×1間のやや西に振る東西棟の建物である。東西方向2.6m、南北方向2mを測る。柱穴は60～80cmのやや楕円気味で、深さ40～50cmを測り、建物の規模の対し柱穴がやや大きい。柱穴埋土および遺物の状況は上記建物24と同様である。　（江見）

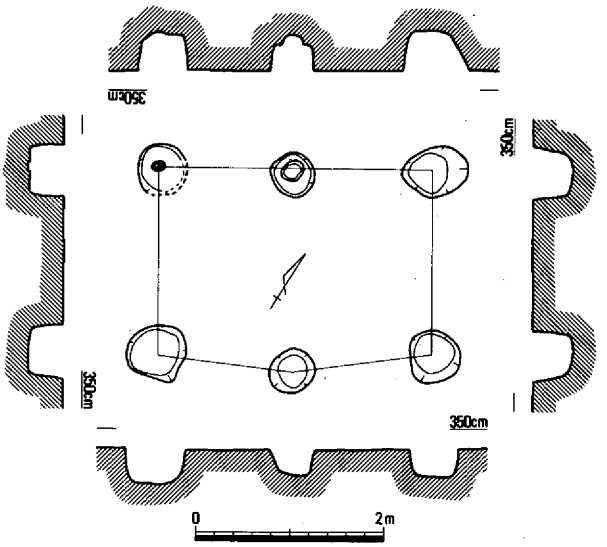
建物26（第67図）

10A区の南側で検出した東西棟の建物で、柱間は2×1間である。東西3.20m、南北2.35mを測る。柱穴はやや太く、径50cm前後、深さ55cm前後である。

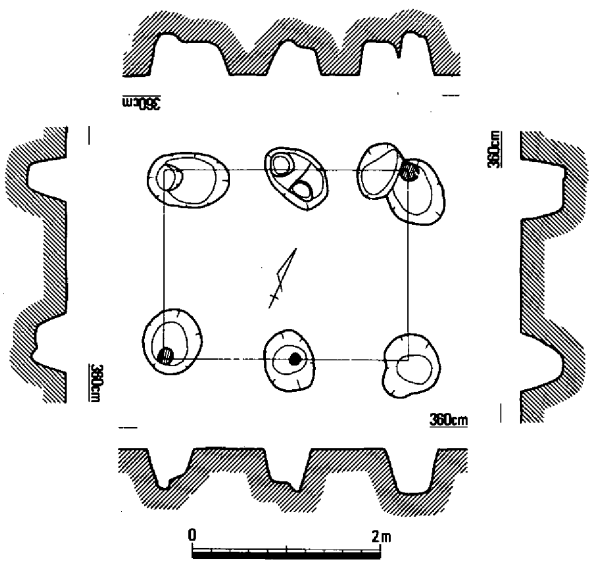
柱穴からは弥生後期土器片が少量出土したが、時期を確定するに至らなかった。　（宇垣）

建物27（第68図）

10Z区南東から検出された2



第65図　建物24



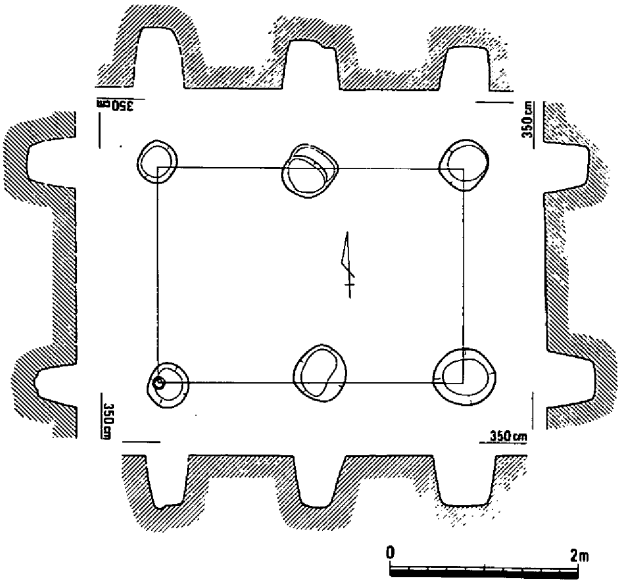
第66図　建物25

間×１間と考えられる南北棟の建物で、西側中央の柱穴は土壙47を切っている。南北方向３ｍ、東西方向2.5ｍを測る。四隅の柱穴は径50㎝前後を測り、東西中央のそれは径30㎝前後と小さい。深さは約30㎝を測る。柱穴埋土は褐色粘質土に黄色粘質土の小ブロックが混入していた。遺物は後期後半の土器細片が出土している。なお、北東および南西柱穴の上部は、当建物確認以前の後期洪水砂掘り下げ時に皿状に窪みを呈した部分であり、洪水直前に柱の抜き取りが行われた可能性を想起させる。　（江見）

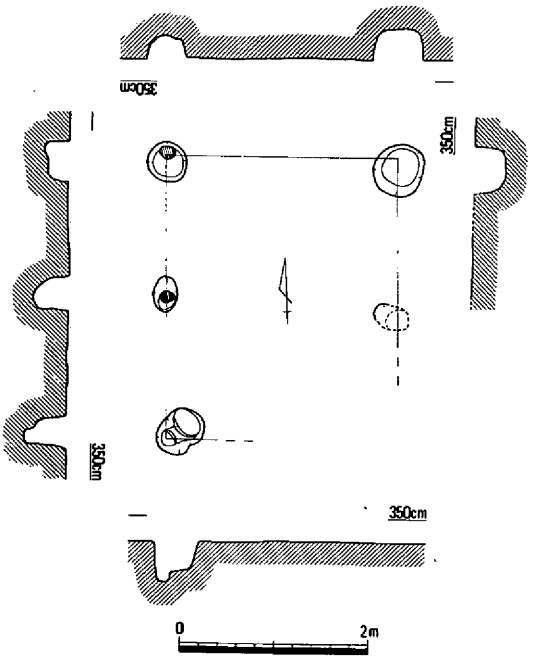
建物28（第69図、図版９）

10・11Ａ区で検出された２間×２間以上の建物である。規模は梁間2.2m、桁行は2.6mかそれ以上になる。柱掘り方は径45㎝～60㎝の円形を呈する。

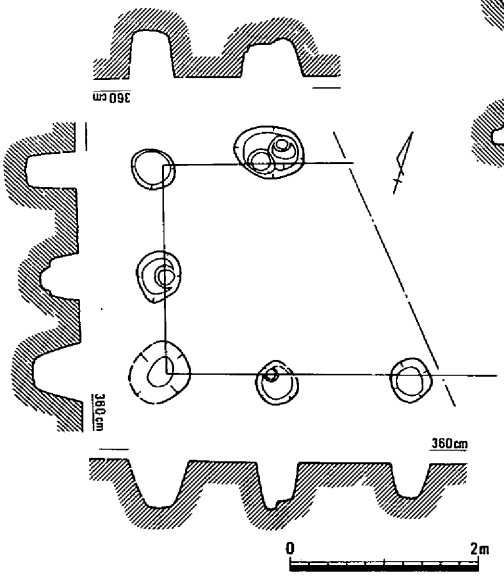
遺物は弥生土器の細片がわずかに出土した。建物の時期は後期と考えられる。　（平井）



第67図　建物26



第68図　建物27



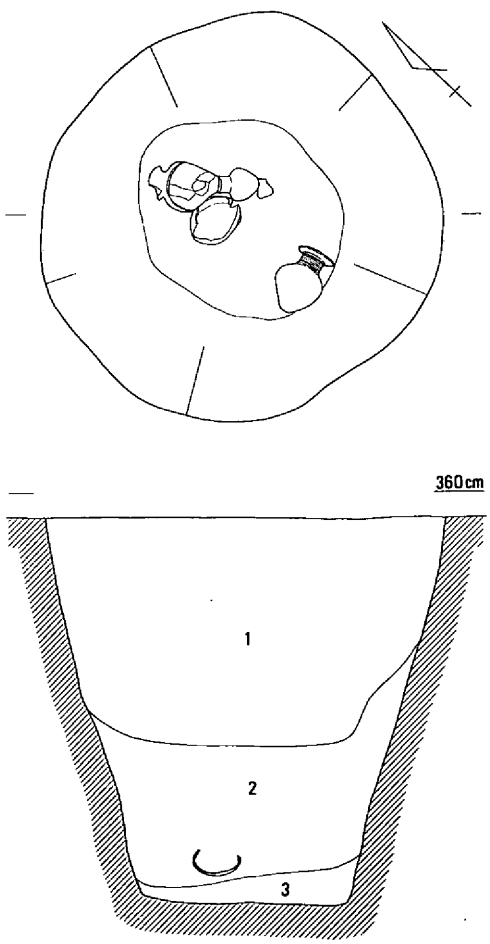
第69図　建物28

(4) 井戸

弥生時代後期の井戸は6基を検出した。井戸1のみが微高地西部、他は微高地東部での検出で、かなり遍在した分布状況である。井戸底からは長頸壺などの完形ないし準完形品数点が出土する例が多い。

井戸1（第70・71図、図版16・57）

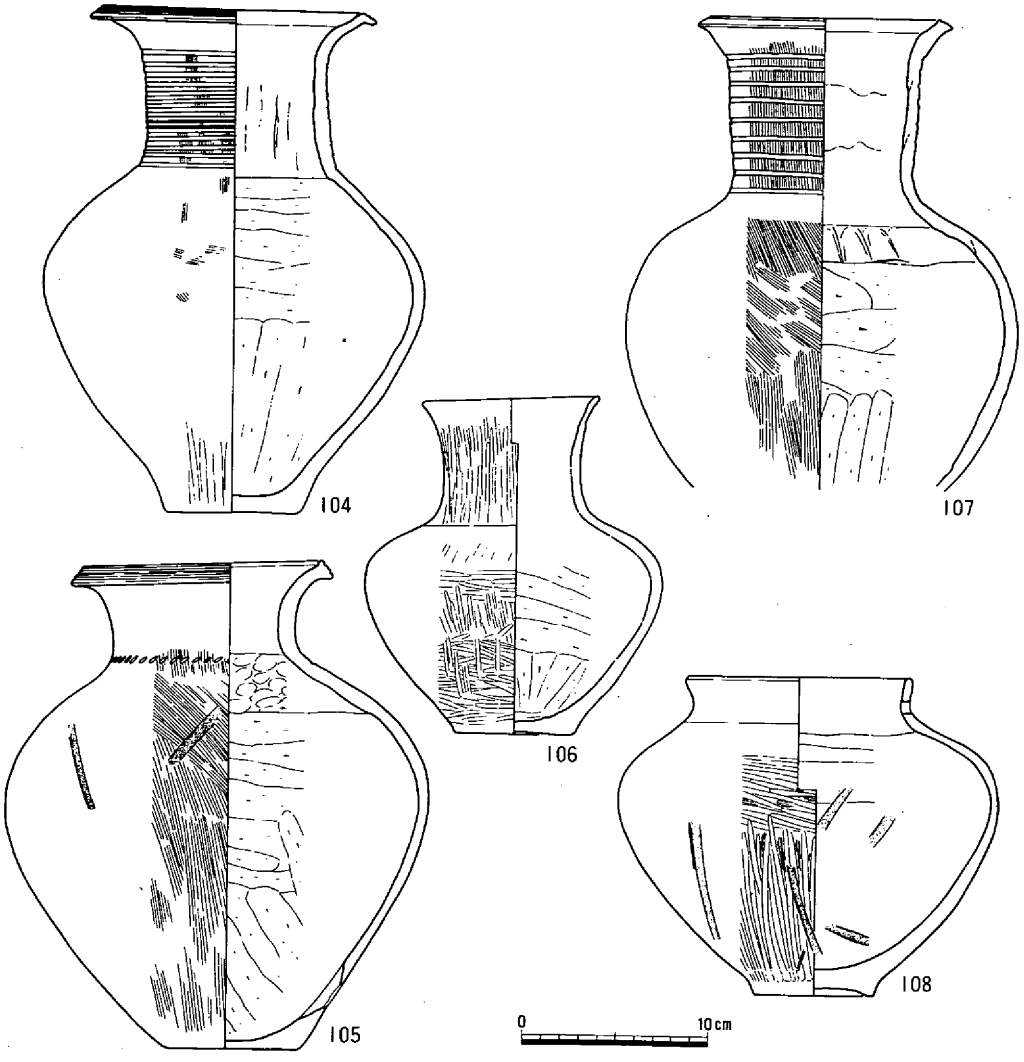
8C区の北東寄りに位置し、竪穴住居1の北側に接して検出された素掘りの井戸である。平面形は径約150cmのややいびつな円形を呈し、検出面からの深さは153cm、底部の海抜高は約2mである。壁の傾斜は急で屈曲部を呈す部分はほとんどみられず、ほぼ直線的に掘り込まれて、底に達している。底部は径90×75cmの不整円形の平坦面を呈す。埋土は1層が茶灰色粘質土に黄色粘質土のブロックが混入し、2層が黄色粘質土に暗灰色粘質土のブロックが混入するものであり、いずれにしても人為的に埋め戻されたものと判断される。3層は暗灰色粘土層で、井戸使用時に自然堆積したものと考えられる。



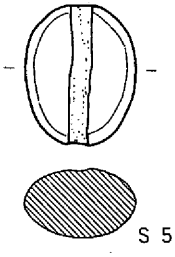
1．茶灰色粘質土（黄色土塊混じる）
2．黄色粘質土（暗灰色粘質土塊混）
3．暗灰色粘土

第70図　井戸1

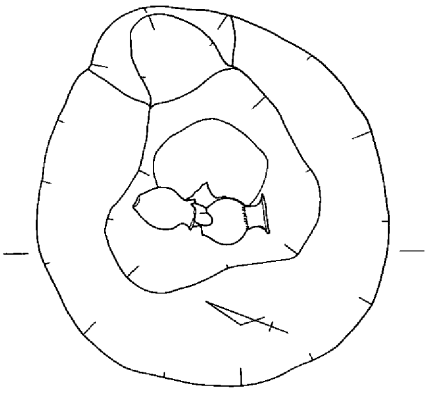
1層中からは石錘S5のほか、僅かに甕口縁および胴部破片と鉢底部片が出土したにすぎない。2層においても上部からは甕口縁1片および土器細片が出土した程度であったが、下部からは104～106が横位の、108がほぼ直立した状態で出土した。これら4点の壺はいずれも完形ないしは完形に復原できるもので、105の胴部下半に外側からの穿孔が認められる。また、105・108の外面には帯状の変色あるいは鉄分の沈着が認められ、紐かけ痕跡の可能性がある。108の短頸壺は頸部に2孔1対の円孔が穿たれており、外面下半の一部に剝落が認められる。赤褐色を呈し、胎土はほとん

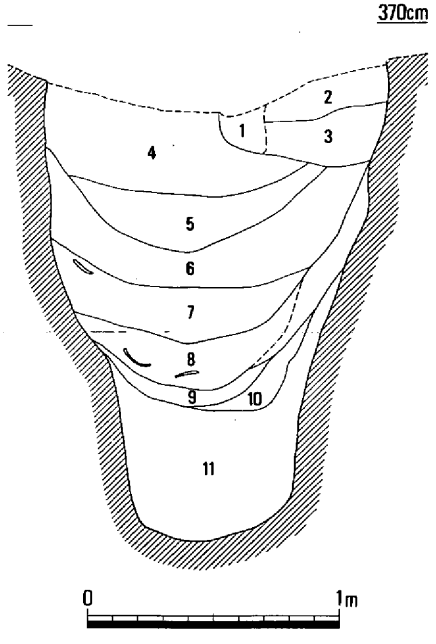


第71図　井戸1出土遺物



ど砂粒を含まない水こし粘土と称しているものに酷似している。なお、107は下層掘り下げ時に出土したもので、底部片も所在し完形近くに復原できるものであるが、まとまって検出されたものではない。以上、遺物の出土状態から当井戸は廃棄時に何らかの祭祀が行われたことを想像させるが、土器は混入を除き壺のみで構成されるものであった。遺物の特徴は百・後・Ⅱの古相に比定され、この時期に廃絶されたものと考えられる。（江見）



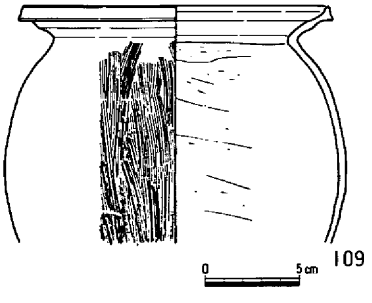


1．淡黄灰色砂質土（建物57　P－5）
2．淡灰黄色砂質土（　〃　）
3．灰黄色粘質土（　〃　）
4．淡茶灰色粘質土
5．淡茶灰色粘質土（炭を少し含む）
6．淡茶灰色粘質土（炭、黄色土塊を含む）
7．淡茶灰色粘質土（炭を少し含む）
8．灰色粘質土
9．灰黒色炭層
10．暗灰色粘質土
11．暗灰色粘土（炭を含む）

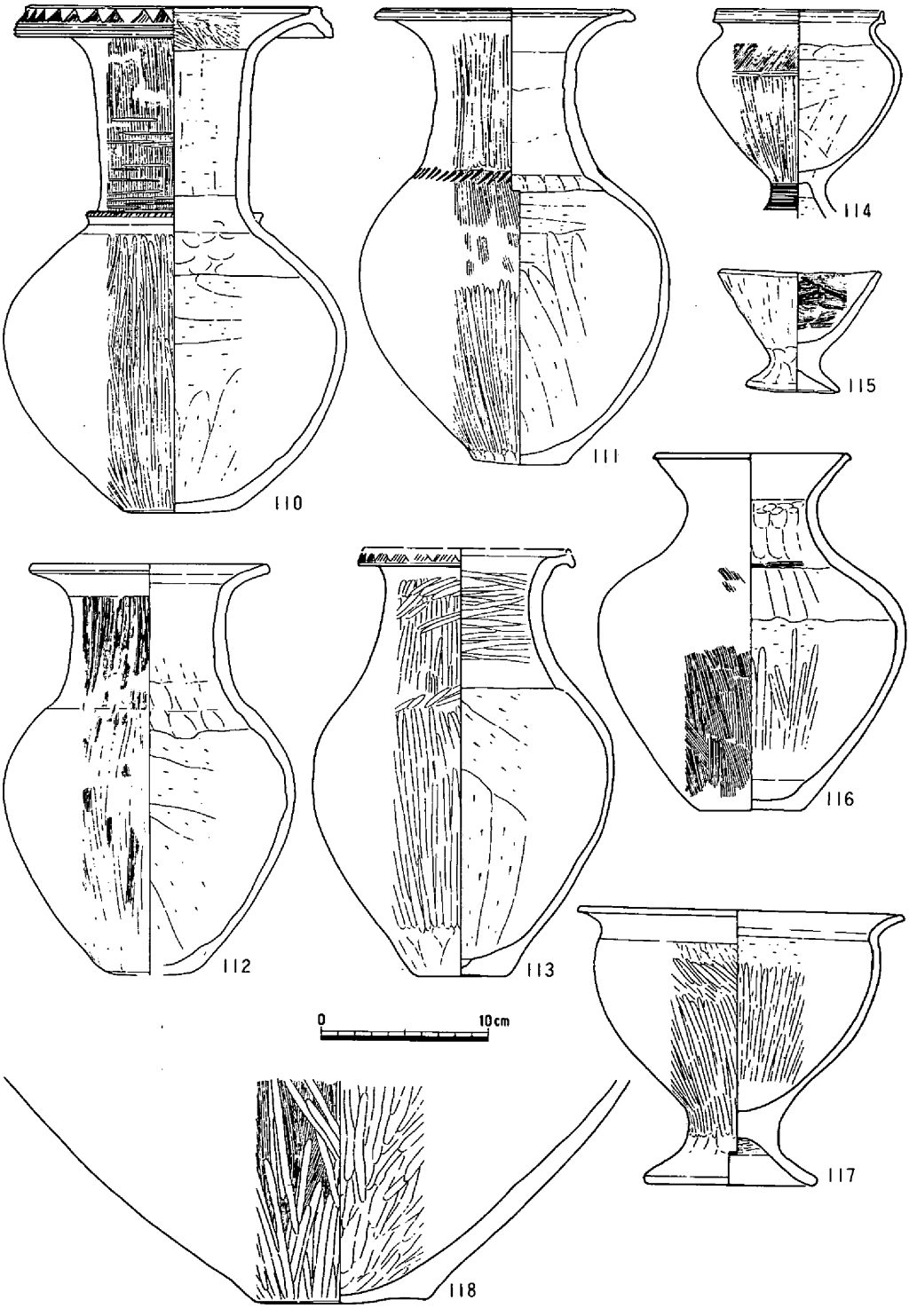
井戸２（第72・73図、図版16・58）

10Z区中央西寄りに位置している。平面形は長径154cm、短径145cmのほぼ円形を呈する。深さは検出面から216cm、底部の海抜高は1.35mを測る。壁の傾斜は急にやや湾曲気味に落ち込み、井戸中央付近からすぼまりながら径を減じている。一方、北東上部には窪みを呈す部分が検出されており、ここから水の汲み上げ作業がなされたように想像される。埋土は３層に大別される。上層（４～７）は淡茶灰色粘質土で部分的に黄色粘質土ブロックおよび炭が混入するものであった。中層（８～10）は炭混じりの灰色粘質土で特に９層は厚さ５cmあまりの炭層であった。下層（11層）には炭混じりの暗灰色粘土が堆積していた。

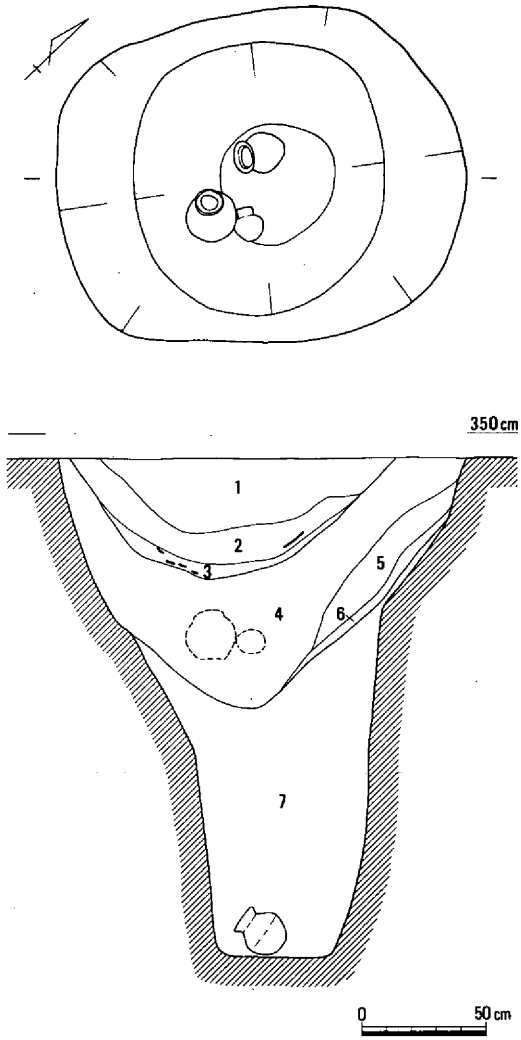
遺物は主に中層下部から下層にかけて出土しているが、井戸１出土土器と同様、当井戸においても甕は少なく、109の他数点出土をみる程度である。下層からは完形の壺110・113が、さらにその下部から壺112が出土した。中層出土の壺110は使用によるススが外面に付着しており、特に胴下半部には顕著に認められた。また、台付鉢114は外面に丹塗りが施されているもので、備中地域からの搬入品である。なお、台付鉢117は上層から出土している。以上、当井戸は土器の特徴から百・



第72図　井戸２・出土遺物（１）



第73図　井戸２出土遺物（２）



1．淡灰茶色粘質土（黄色土塊含む）
2．黄褐色粘質土
3．黄褐色粘質土
4．灰色粘質土
5．灰色粘質土
6．焼土

第74図　井戸３

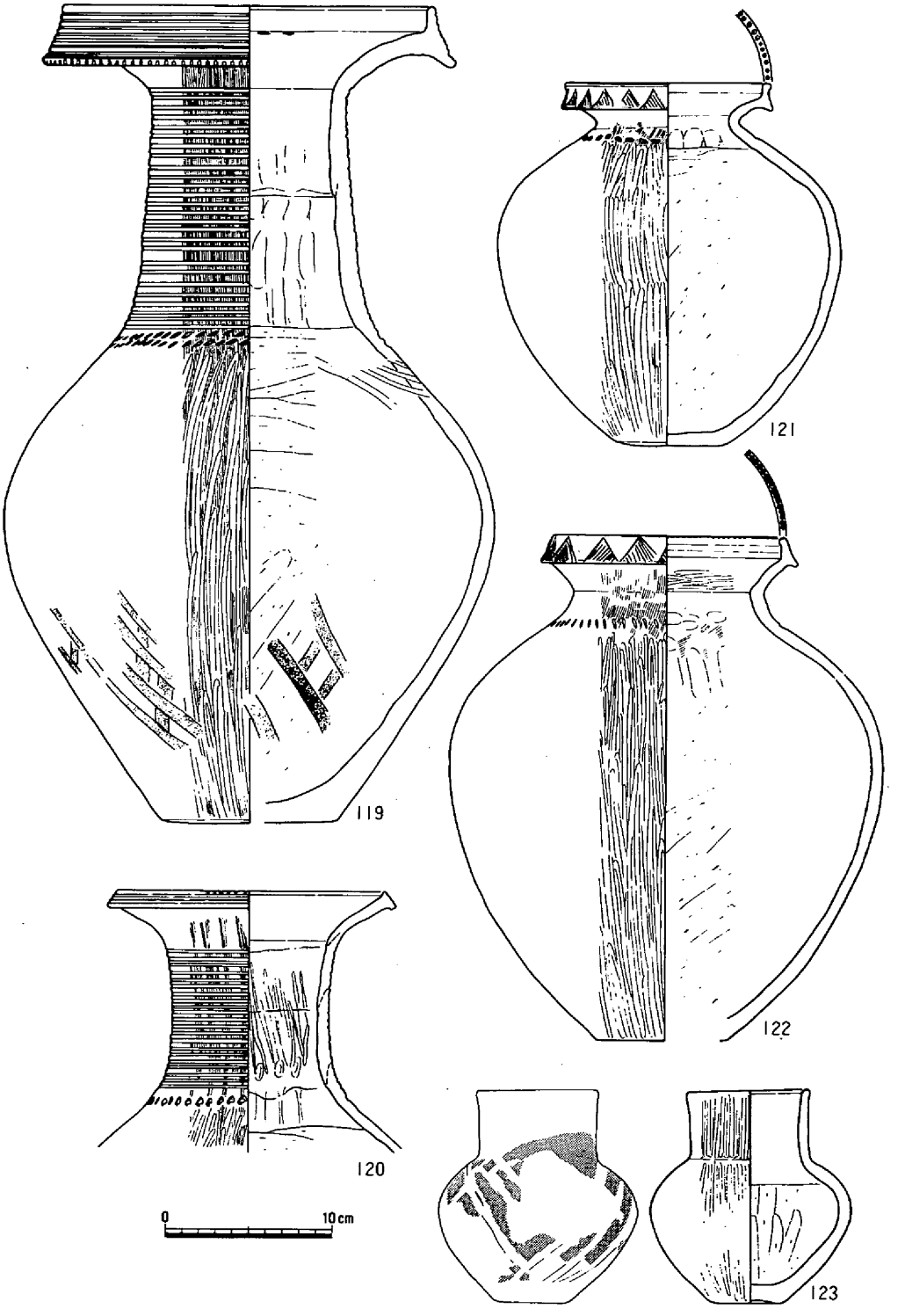
後・Ⅱに比定される。　（江見）

井戸３（第74～77図、図版16・58～60）

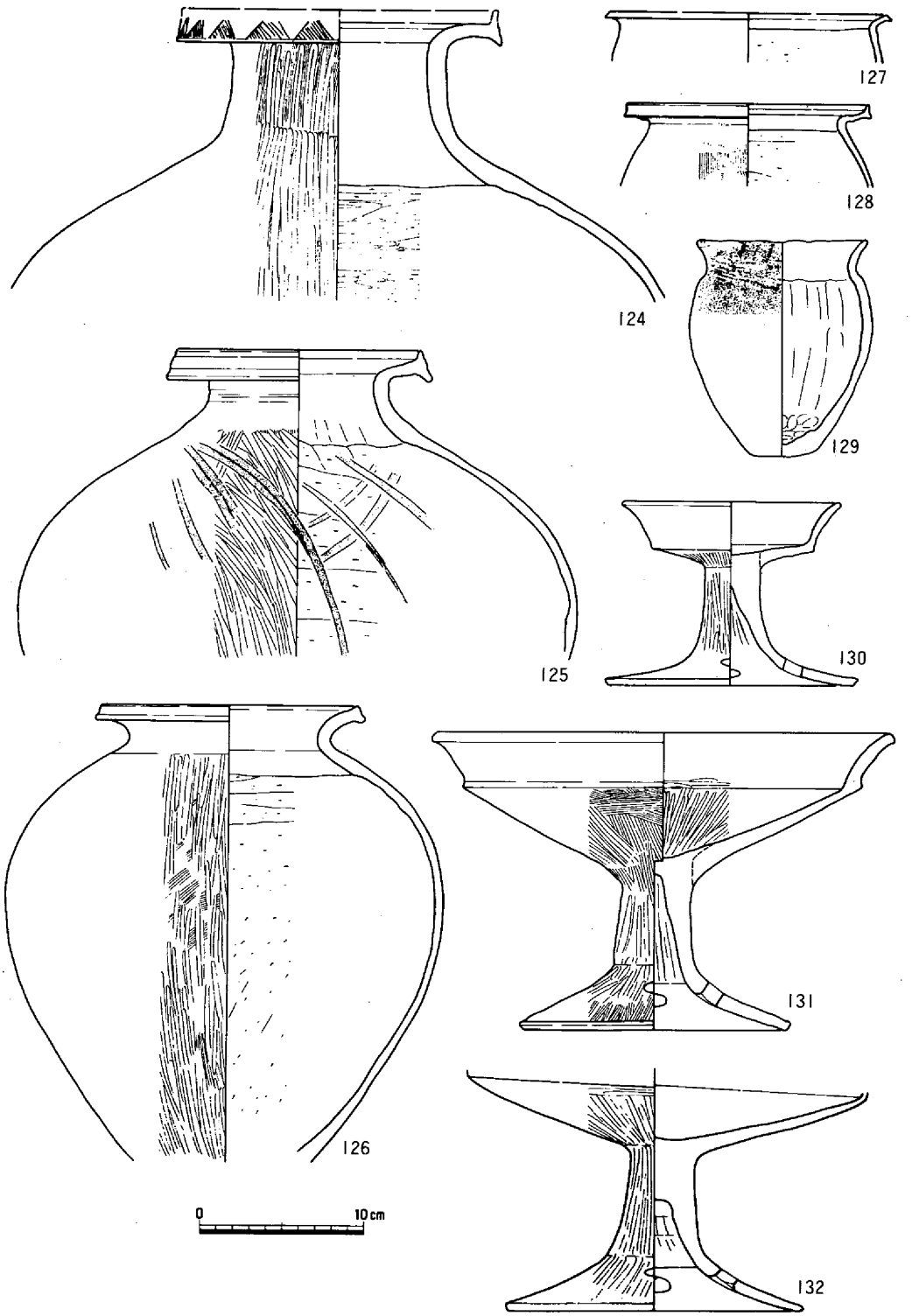
９Ａ区北西部で検出した径163㎝、深さ199㎝の井戸で、竪穴住居６の一部を切って掘削されている。上面は楕円形をなし、断面は上部が逆ハ字形、下部はほぼ垂直になる。

堆積土は上層・１～３層、中層・４～６層、下層・７層に区分でき、このうちの７層はさらに区分できるものと思われるが、湧水のため認定できなかった。遺物の大部分は２、３層から出土しており、いずれも破片であるが、多くはかなりの部分まで接合復原が可能であった。また、４層からは壺121と直口壺123が出土した。123は完形、121も胴部の一部が剝離している以外は完形である。井戸底からは136が完形で出土したほか、137がまとまった破片として出土した。

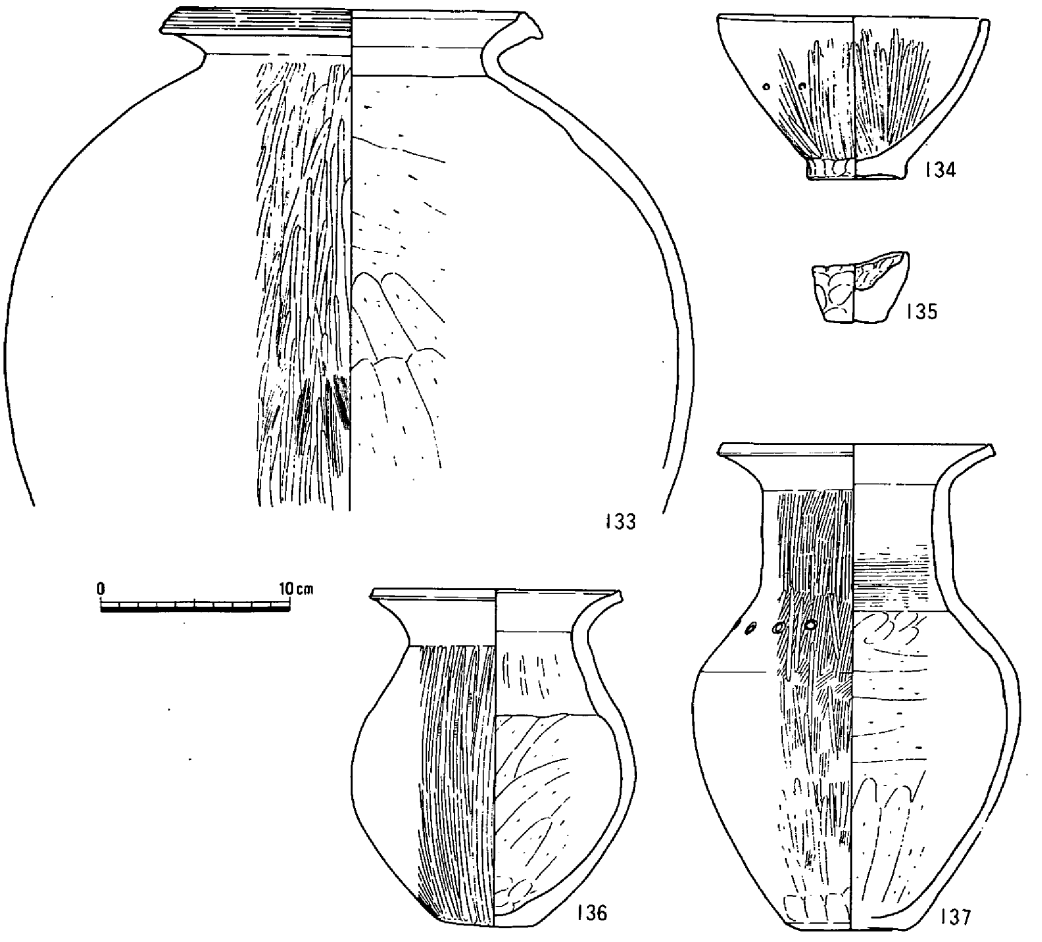
この井戸の出土遺物で特徴的なのは外表に籠目を残す個体が多数認められることである。後述のように籠目の痕跡は多様な特徴・色調であるため、図では123をのぞいて籠目痕跡のみを表現した。籠目痕跡が認められるのは119、123、125であり、すべて２～４層からの出土である。119の籠目は部分によって異なり、帯の間、つまり格子の内側が黒くなる部分と、逆に帯自体が黒くなっている部分があるが、いずれの場合も帯の両側は細い黒線になっている。帯は右下がりのものが明瞭で、左下がりの帯は不鮮明になっている部分がある。123は籠目の上からススを被ったように見受けられるもので、部分によってはさらに帯の中心部分が暗灰色を呈している。この部分は帯自体の炭化によって生じたように思われる。125では右下がりの帯は両側縁



第75図　井戸３出土遺物（１）



第76図　井戸３出土遺物（２）

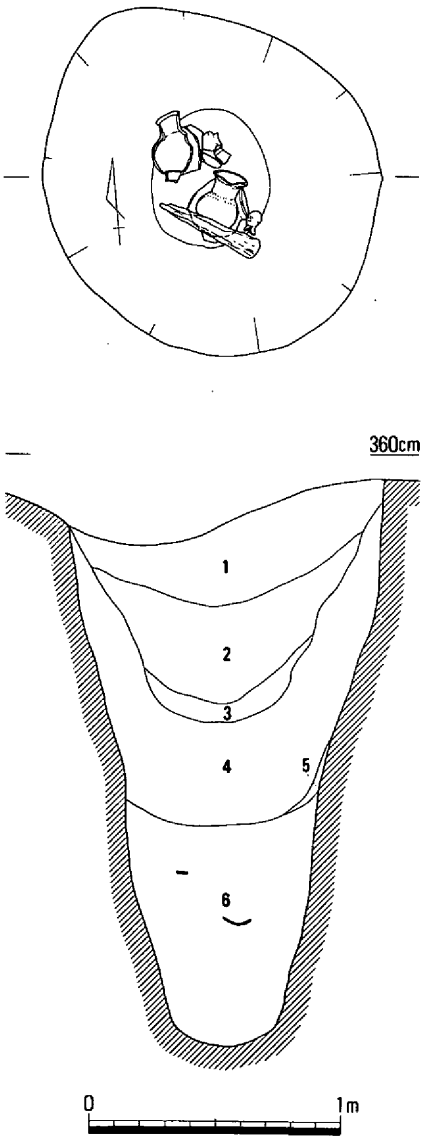


第77図　井戸3出土遺物（3）

の黒色の線によって明瞭に識別できるのに対し、左下がりの帯ははっきりしない黒色の帯になっている。

121は口縁を上方に拡張し鋸歯文をめぐらす壺で、122もほぼ同じ口縁形・器形である。124と125も口縁部の形態はきわめてよく似ている。また、壺133は器表の剝脱が著しく、頸部等の破面は焼成時破損と考えられる変色を生じており、121も同様な剝離を示している。図示できなかったが、同じ特徴をもつ破片がかなり出土しており、少なくとも上層出土土器の一部には焼成時の破損品が含まれている可能性が強い。後述の土壙1、2の出土土器から焼成時破損品と籠目が関連をもつと考えられるが、119以下の籠目はそれらとは異なる特徴をもち、また、これらの個体では器表の剝離が見られないため、焼成時に付いたものかどうか判断しがたい。

出土土器からこの井戸の埋没時期は百・後・Ⅲと考えられる。　（宇垣）



1．灰褐色粘質土（焼土を含む）
2．暗灰褐色粘質土（焼土を含む）
3．暗灰褐色粘質土（炭を多く含む）
4．黄灰褐色粘質土（炭、焼土、黄色ブロックを含む）
5．黄灰褐色粘質土（炭を多く含む）
6．灰色粘土（炭、焼土を含む）

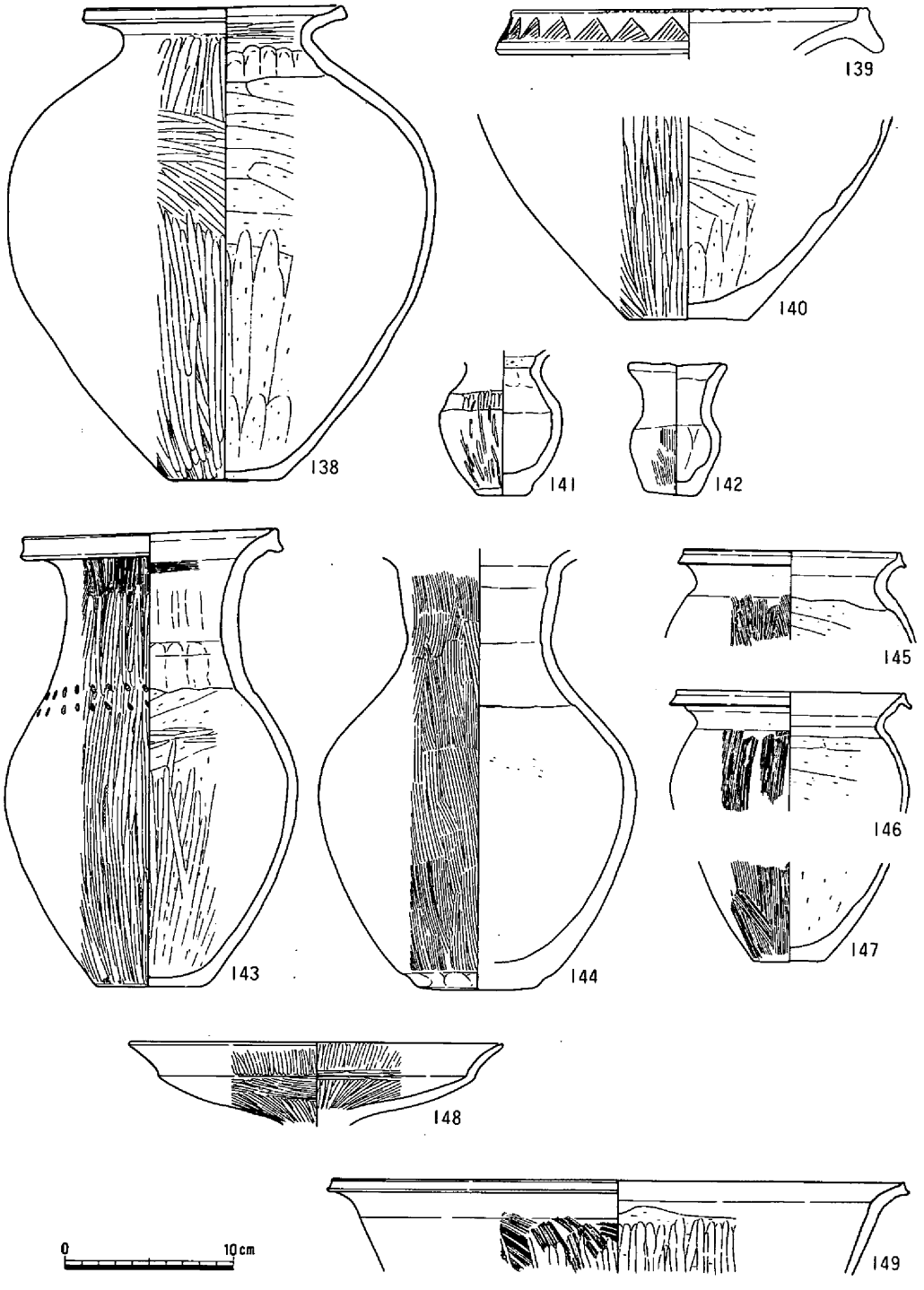
第78図　井戸４

井戸４（第78・79図、図版17・18・61）

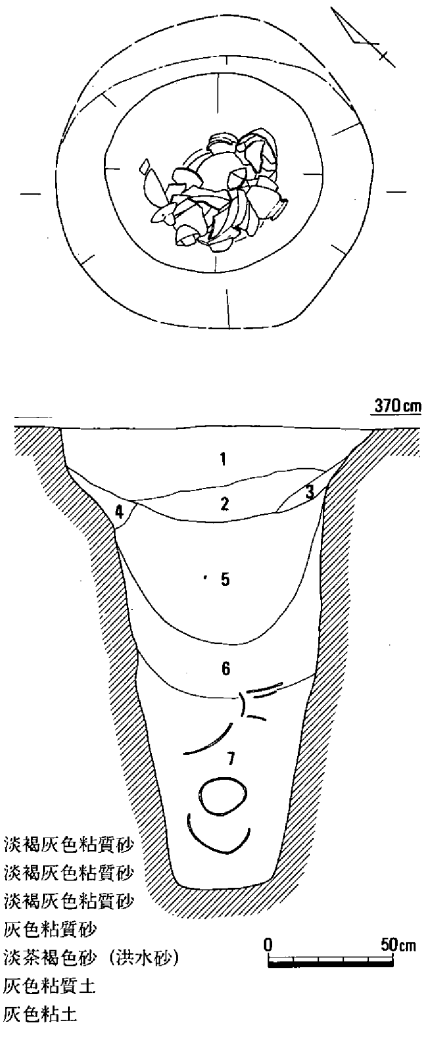
10Z区の南西端中央に位置し、建物24に一部切られている。平面形は長径150cm、短径130cmのほぼ円形を呈す。検出面からの深さは225cm、底部の海抜高は1.25mを測る。壁の傾斜は急で、やや内湾気味に下降し、中央付近で僅かに角度を変え底部に向かってすぼまっている。埋土は上層（1～3）、中層（4・5）、下層（6）の3層に大別される。上層は中央が異常に落ち込む状態を呈し、炭および焼土粒が混入する暗灰褐色粘質土で、3層には特に炭が多く混じっており、上・中層の区別は明瞭であった。なお、上層の断面形状は下記の下層上部の土器類とともに廃棄された自然木など大量の有機物の風化により生じたものと考えられる。中層は上層同様、炭・焼土粒が含まれるとともに黄色の粘質土ブロックが混入する黄灰褐色粘質土であり、人為的に埋め戻されたことが窺える。なお、炭を多く含む5層は一部壁際をめぐっていた。また、下層においてもグライ化する粘土層に炭・焼土粒が含まれていた。

遺物はいずれの層からも出土しているが、特に下層上部から自然木とともにまとまって出土している。ここからは口縁の一部を欠くもののほぼ完形の壺143をはじめミニチュア壺など図示し得た大半が出土している。また、壺144は約半分残存するものであるが、胴下半部外面に二次焼成の煤が付着しており煮炊きに使用されたものと考えられるもので、甕146の口縁部内面下半には刷毛痕跡が認められた。底部からは横位の状態で完形の壺138が単独で出土した。

以上、当井戸は遺物の特徴から百・後・Ⅱの時期に廃棄されたものと考えられる。　（江見）



第79図　井戸４出土遺物



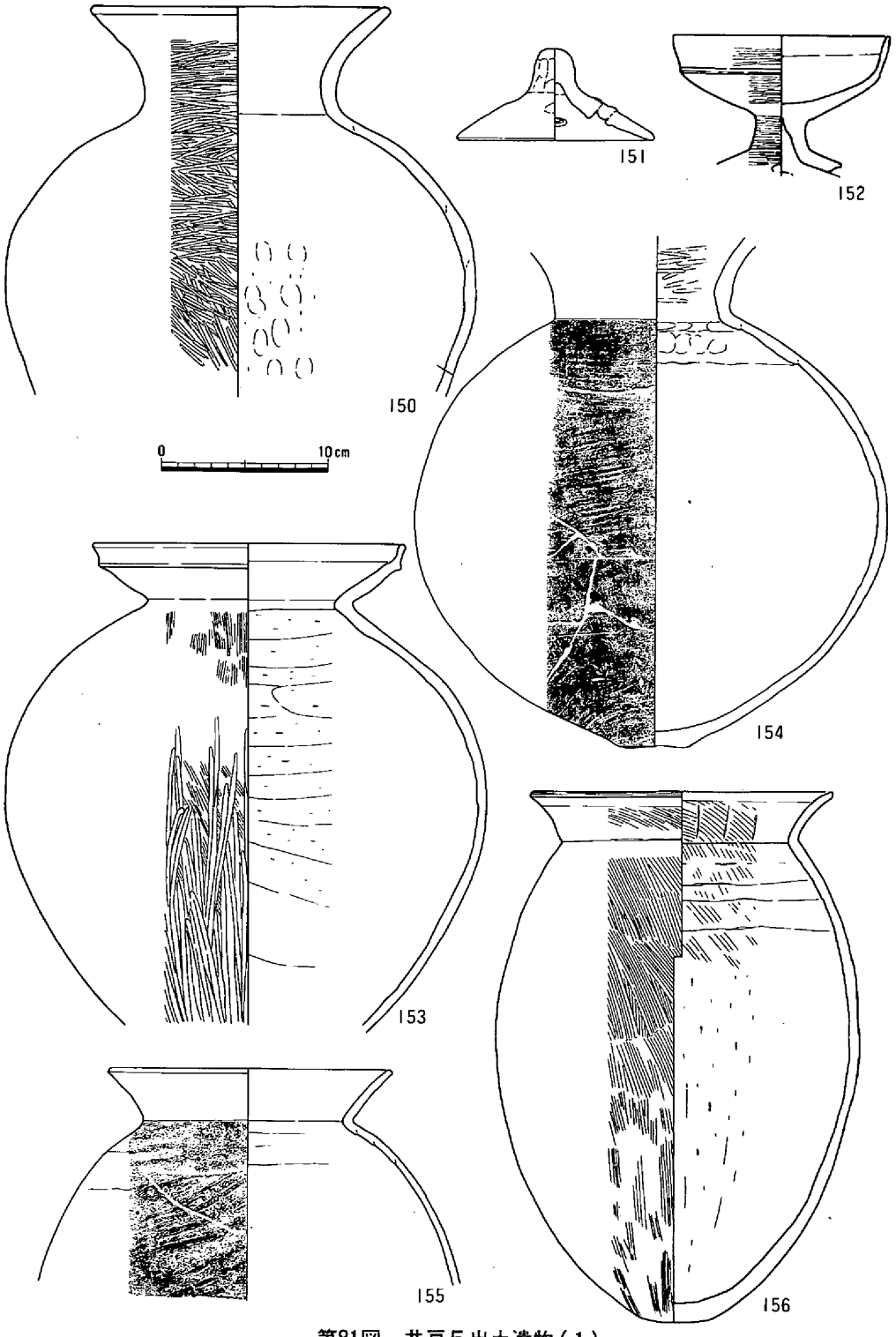
第80図　井戸５

井戸５（第80～82図、図版17・18・60）

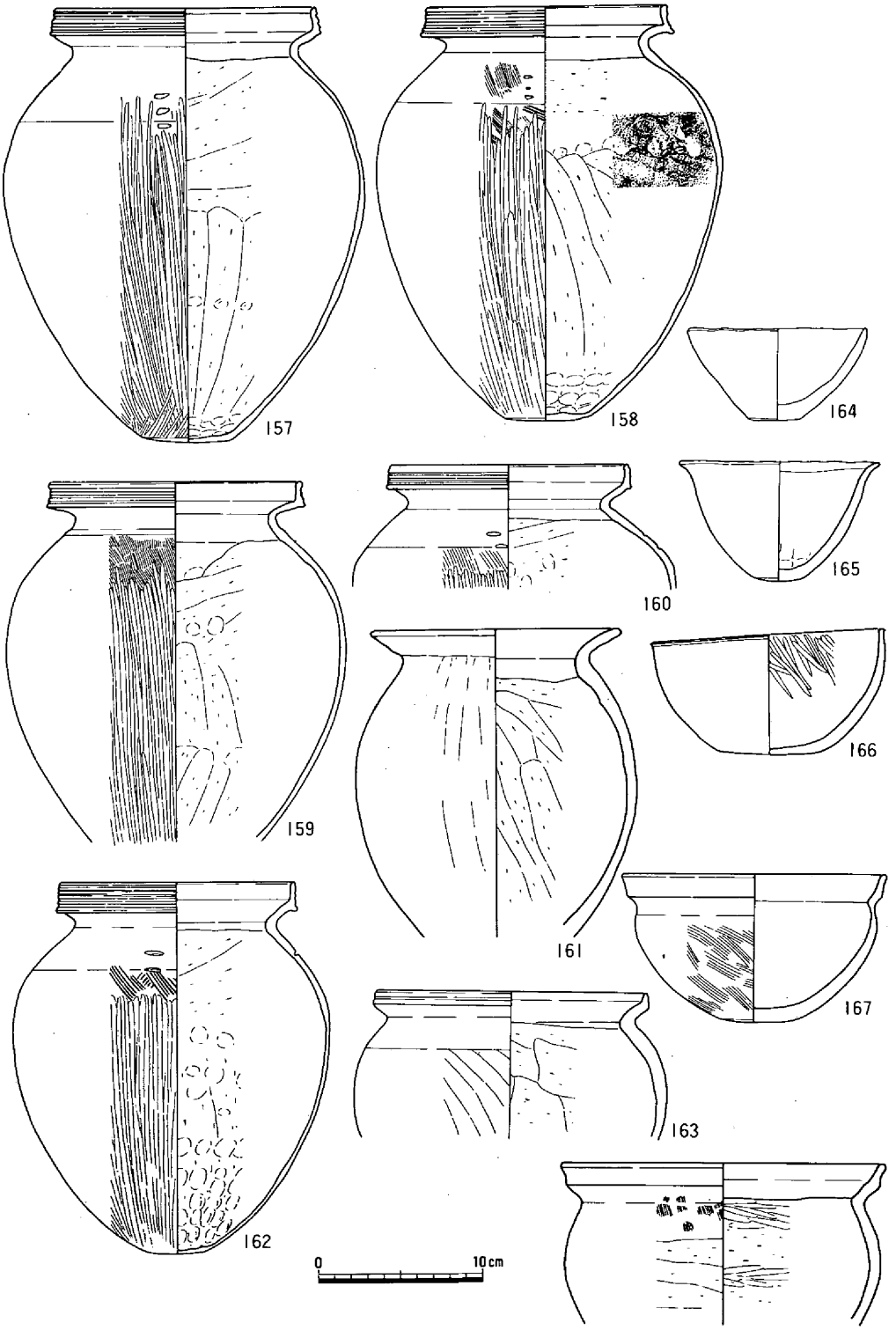
９Ａ区の北東、建物16の南に位置する。平面形は径約130cmのほぼ円形を呈す。検出面からの深さは185cm、底部の海抜高は1.8mを測る。壁の傾斜は上部で緩く皿状に下るが、検出面から深さ20cm前後の位置から角度を急に変え、底部に向かってほぼ直線的にすぼまっていく。埋土は上層（１～３）、中層（４・５）、下層（６・７）の３層に大別される。上層は淡灰褐色の粒子の細かい粘質砂で、中層の５層は後期水田を覆ったと同様の洪水砂である。下層は灰色粘質土が堆積していたが、上部６層は砂粒を僅かに含み、また、黄色粘質土のブロックをふくむもので、人為的に埋め戻されたものと考えられる。下部７層は炭粒が含まれていた。なお、中層下部の堆積状況は上記井戸４と同様中央部分の陥没が異常であるが、下層に有機質の堆積物が所在したことの結果と考えている。

遺物は上・中層からはなく全て下層から出土した。特に、６層下部から７層にかけての南部分には底部に向かって折り重なるようにして検出された。なお、上部出土の小型鉢165・166や７層中の甕158は完形品であり、その下部から出土した甕157や上部出土の壺154、甕156などは破損した状況で出土したものであるが単なるゴミ捨て穴として利用されたとは考えにくく、何らかの祭祀の後に廃棄された土器の一群ではないかと考える。

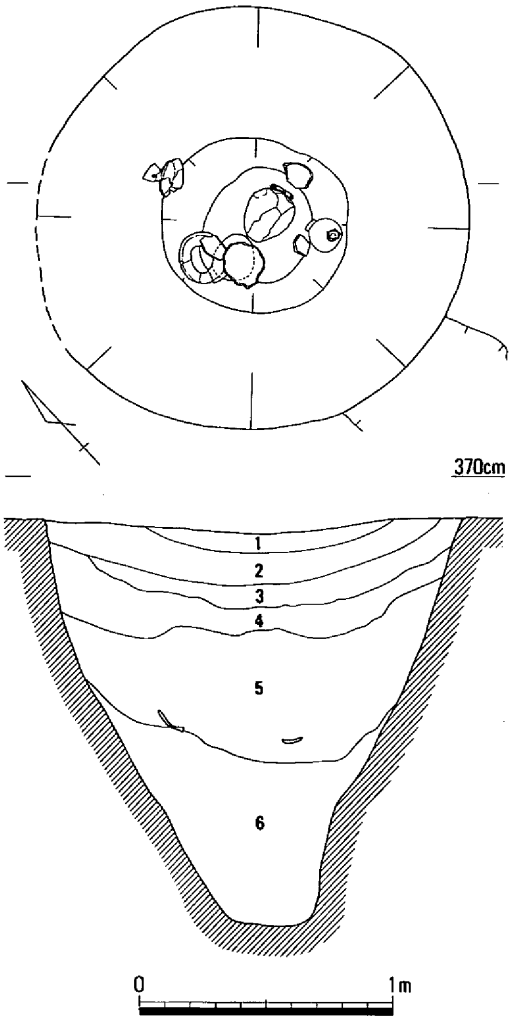
壺154・甕155はいずれも外面に叩き目痕跡が残るもので、甕の肩部には竹管状の刺突が認められる。また、長胴の甕156は淡黄褐色を呈し胎土中に雲母が目立つもので、前者は播磨地域から、後者は中国地方西部（山口県東部）からの搬入品の可能性がある。蓋151は高杯脚部の製作途中に外方から穿った４孔を再度粘土により埋め、脚柱部を指頭圧およびナデで仕上げている。甕157～160・162は胴部外面刷毛の後篦磨き、内面篦削りおよび円形圧痕が残るものである。特に、158の肩部内面には円形圧痕を顕著に残すものであり、この部位においては円形圧痕



第81図　井戸５出土遺物（１）



第82図　井戸５出土遺物（２）



1．芥灰褐色砂質土（炭、焼土を多く含む）
2．黄茶褐色砂質土（黄色土塊を含む）
3．黄灰色砂質土
4．灰褐色粘質土（黄色土を含む）
5．黄色粘質土（基盤層に近い）
6．黄色粘土（基盤層に近い）

第83図　井戸６

の後へラケズリされていることが観察された。小型鉢166は底部内面に黒く焦げ付き状を呈し、外面下半は二次焼成により剥落が著しいことから煮炊きに使用されたものと考えられる。

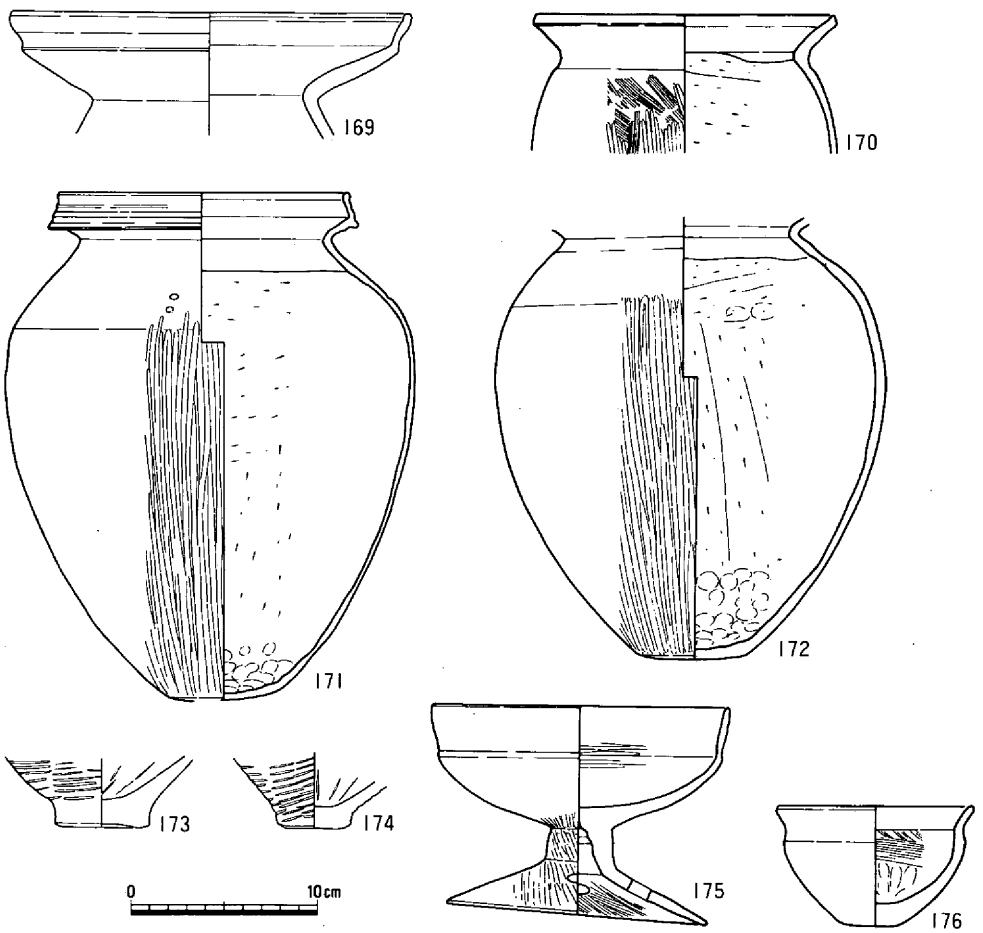
以上、当井戸出土の土器はその特徴から百・後・Ⅳの範疇に入るものであり、この時期に廃絶されたものと考えられるが、今少し井戸の埋没状況を観察すると、洪水砂と以下の土層との相違が明瞭なこと、５層下部から底部までの深さが約１ｍを測ることなどから廃絶の要因が洪水によって埋没したのではなく、祭祀的な行為後に廃絶されたもので、その後廃棄された土器とともに埋め戻された６層以下の陥没が生じる前後になって洪水に覆われたと考える。

（江見）

井戸６（第83・84図、図版18・61）

10Ｚ区の西寄りに検出された素掘りの井戸で、建物24の北辺中央の柱穴を切って存在する。規模および形態は、径約170cmのほぼ円形を呈し、深さは検出面から約170cmを測り、断面形は底に向かってすぼまるジョウゴ形を呈する。埋土は上・中・下の３層に大別され、上層（１～３層）は茶灰褐色～黄灰色の砂質土で、１層には炭・灰・焼土を多く含み、２・３層には基盤層の黄色塊を含む。中層（４・５層）は灰褐色と黄色の粘質土で、基盤層の黄色塊の混入または基盤層と同じ土で埋まっていた。下層は黄色粘土層で、下半はグライ化していた。

遺物は５～６層から比較的多くの土器片が出土しており、とくに底に接した状態でほぼ完形の甕171・172が検出されている。二つの甕はいずれも良く使用され、外面にススとふきこぼれ



第84図　井戸６出土遺物

痕、内面の底部近くに米のオコゲ痕が認められる。壺169、小鉢176は６層の中ほどから上部、高杯175は５層下部に認められた。叩き目をもつ173・174の甕は、搬入品と思われる。なお、前者は二次的な火を受けて、表面が赤茶色に風化している。

出土土器の形態的特徴から、この井戸の廃絶の時期は百・後・Ⅳの新相と思われる。さらに、近隣の井戸５の埋土に、広く弥生時代後期の水田を覆った洪水砂と同質の土が認められ、また本井戸と土器の時期差がほとんどないことから、井戸６の廃絶後あまりほど遠くない時期に洪水をむかえたものと考えられる。（柳瀬）

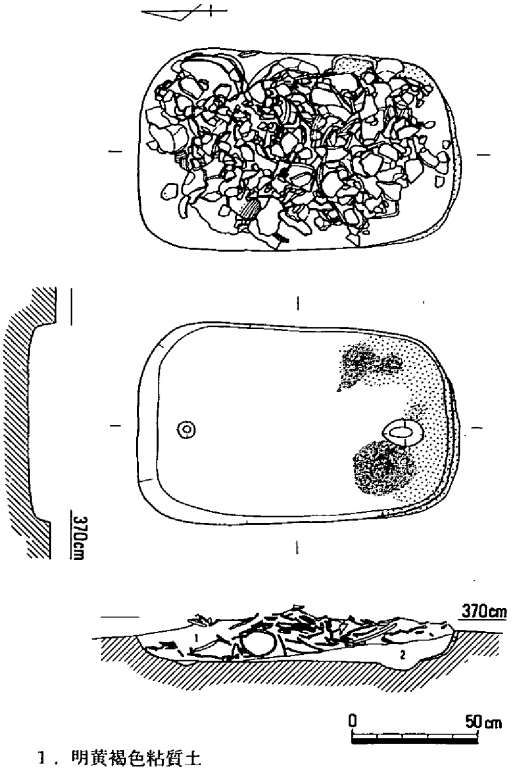
(5)　土壙

土壙55基を掲載した。特殊な形態・性格のものや大形のものについてはほぼすべてを記すことができたが、小形の土壙では割愛したものも多い。また、出土土器の一部を示したもの、遺構のみを示したものも少なくない。

土壙１（第85～89図、図版19・61・62）

８Ｃ区西側で検出した隅丸長方形の土壙で、北側を中心に全体が削平を受けている。長軸をほぼ南北にとり、長さ124cm、幅78cm、検出面からの深さ13cmを測る。東西両壁と南壁は急角度で立ち上がるが、北壁の立ち上がりはやや緩やかである。土壙南側の壁面は暗赤橙色に焼けており、焼土は南壁中央上部が最も厚くなっている。また、底面は南壁から25cmの付近はよく焼けたのか明赤橙色を呈しており、北側でも部分的に薄い赤色に焼けた部分が認められる。

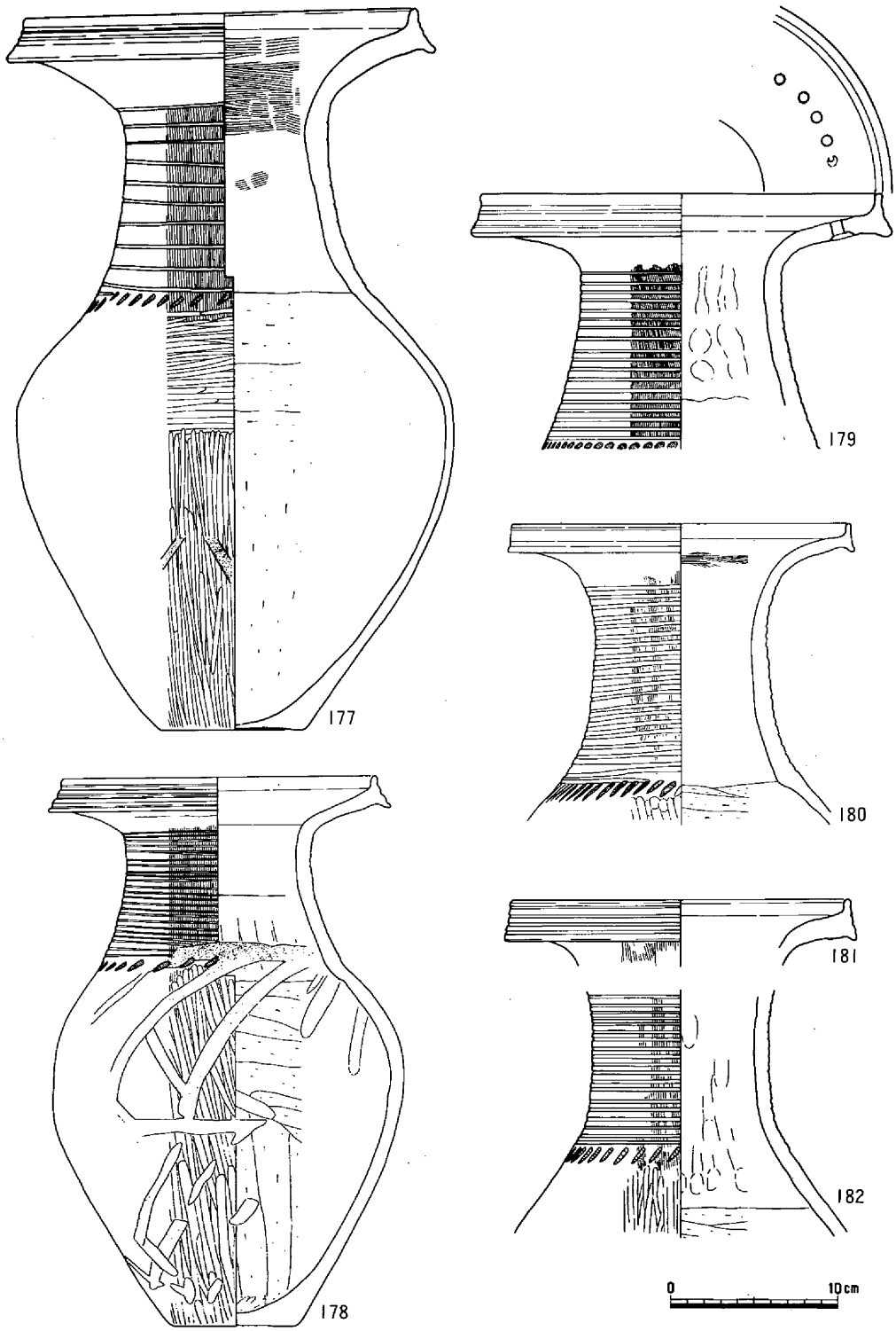
土壙の底には南側を中心に炭・焼土を多量に含む暗黄褐色粘質土が堆積しており、その上から多量の土器片が出土した。土器の出土量はきわめて多く、土よりも土器片の方が多い状態であった。土器層の上面は比較的小形の破片が多いが、その下は大形の破片になり、下部では大形の壺や長頸壺が破砕しているもののほぼ器形をとどめる形で出土した。長頸壺177は土壙中央付近に、178は西壁に添う形で横転しており、壺186～189は東壁に添って並んだ状態で出土した。このうち壺はいずれも口縁を下に向けており、胴部下半（上側）の破片は落ち込んだ状態というよりも壊して入れ込んだように、内面を上に向けて出土した。出土土器の総数は図示したものを含め長頸壺10、壺７、甕３、台付き鉢１であり、大形の土器が主体を占め、高杯は含まれていない。



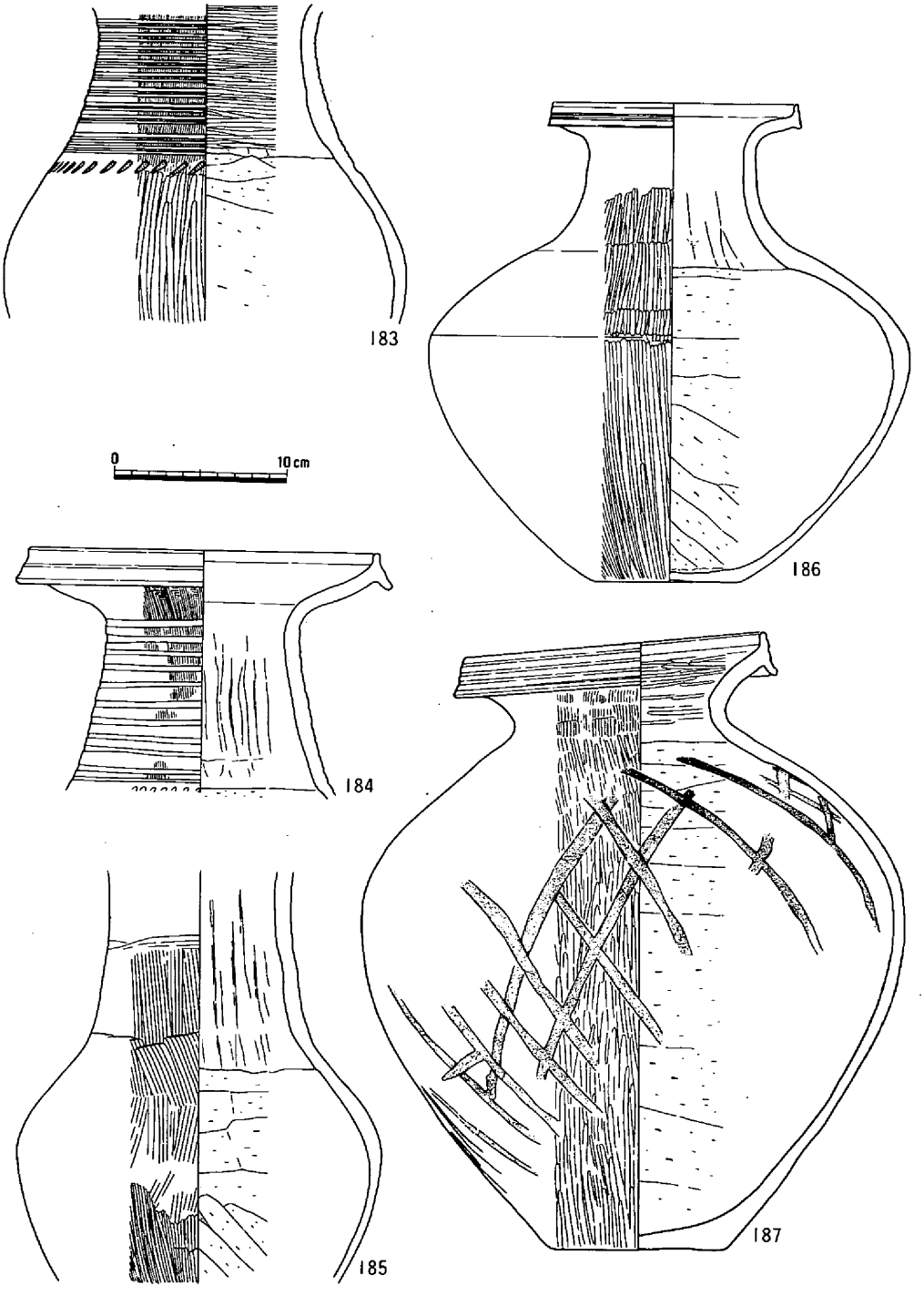
１．明黄褐色粘質土
２．暗黄褐色粘質土（炭・焼土多く含む）

第85図　土壙１

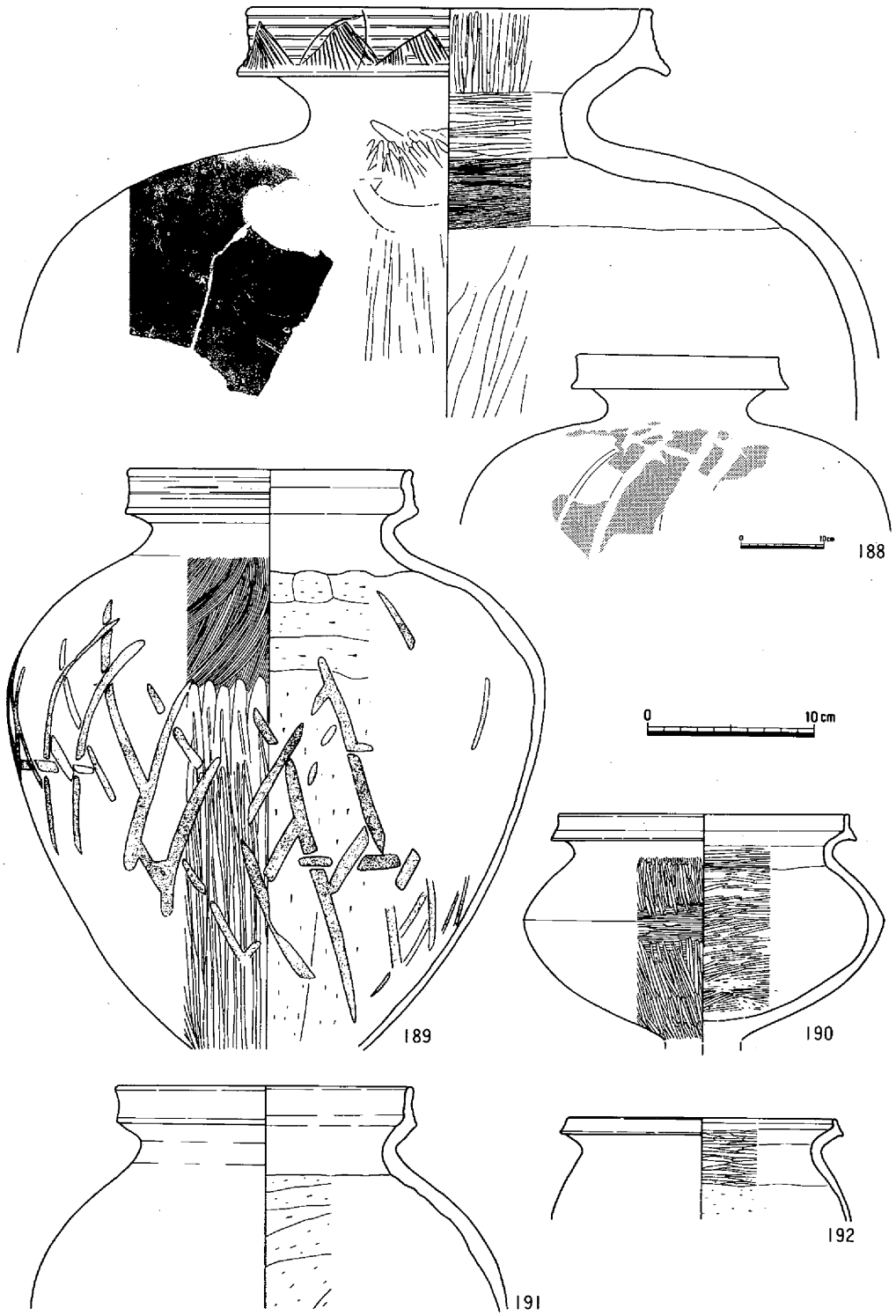
出土土器のうち３点には明瞭な籠目が認められる。長頸壺178の籠目は左下がりの帯がよく残るほか、胴部中央に横帯が認められる。187では左下がりの帯と



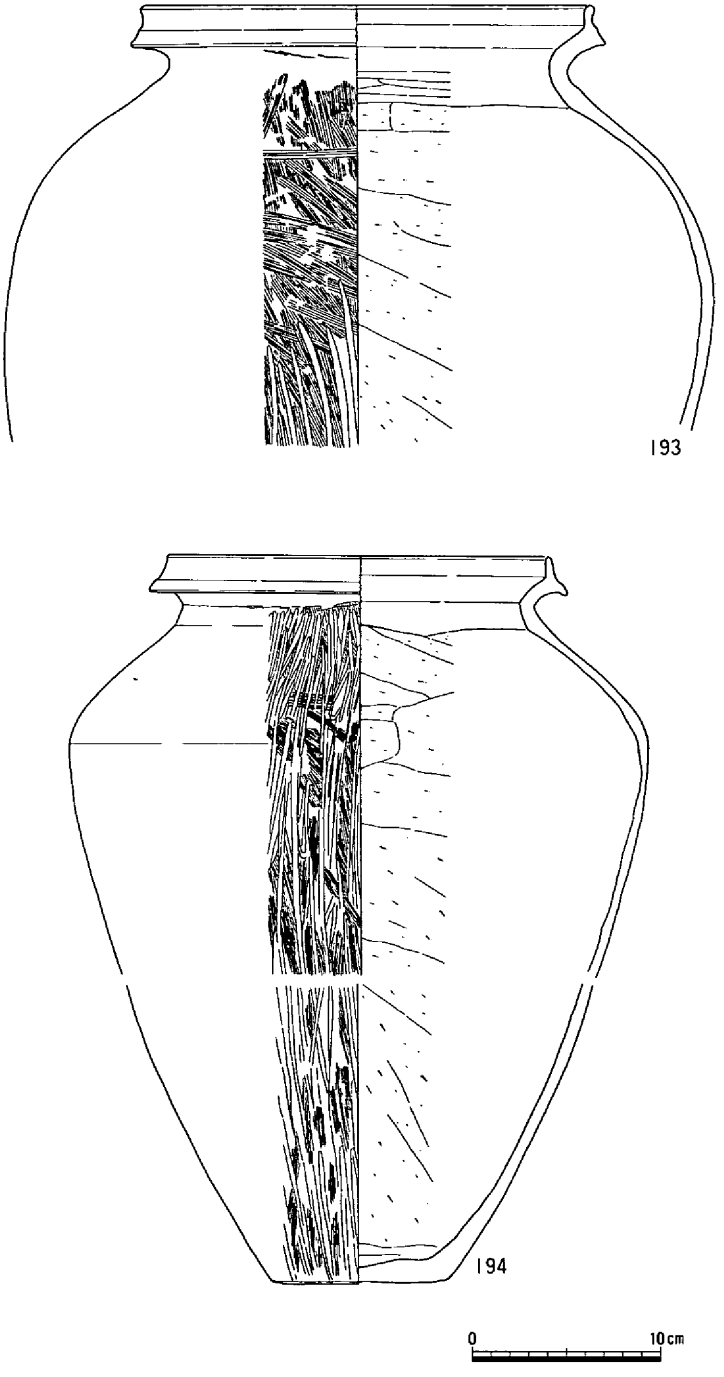
第86図　土壙１出土遺物（１）



第87図　土壙1出土遺物（2）



第88図　土壙１出土遺物（３）



第89図　土壙１出土遺物（４）

右下がりの帯が交差する状況が比較的よく認められる。横方向の帯は見られないが、あるいは胴部下左側の帯がそれに相当するかもしれない。189は籠目が最も良く遺存する個体で、胴部のほぼ全面に籠目が見られ、横帯も２段認められる。

これらの籠目の発色は一定でなく、一個体内でも変化が大きいため十分に記載しがたいが、189では器表の色調が暗赤褐色の部分では明赤褐色に、淡褐色の部分では褐橙色に帯が現れており、器表に対してネガティブに現れる部分とポジティブな色調で現れる部分とがある。また、帯が黒斑を横断する場合はその部分の黒色が薄くなる。187もほぼ同様で、器表は明黄褐色であるのに対し、帯は淡黄褐色～明赤褐色である。178では帯の表出はすべてネガティブである。177も部分的に籠目状の発色が認められるが、籠目の一部かどうか確実でない。一方、188では胴部上半にススが付着しているが、全面に付着するのではなく、細長い斜め方向の空白が生じており、この部分に帯つまり籠目原体が存在した可能性がある。

出土土器に共通した特徴として、１．断面の色調が漆黒色～黒色を呈する、２．器面の剥離、３．破面の変色がある。特徴２が最も顕著に生じているのが177であり、口縁部付近は鱗状あるいは層状に表裏に裂けたようになっている。３の破面の変色としたのは破面が本来の色調を示さず、内外面と同じかそれに近い色調を呈するものである。これについては接合を進める過程で認識したため187、189などでは確認できていないが178、188、190、193などでは顕著に認められる。

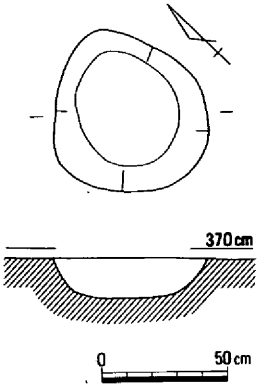
出土土器はいずれも口縁端部を上方に拡張し、長頸壺はハ字形の比較的短い頸部をもっている。こうした器形の特徴から、この土壙の時期は百・後・Ⅲ期に位置付けられる。また、遺構の性格については後に検討を行うが、土器の焼成壙である可能性が強い。

なお、188の肩部には細い線刻が認められる。ヘラミガキが部分的に被っているため不明確であるが、上下２本の弧線とその左端に施される短い直線からなっており、鹿を描いている可能性が強い。また、図示していないが甕の底部から胴部にかけての破片が出土しており、その破片ではススの付着は認められない。（宇垣）

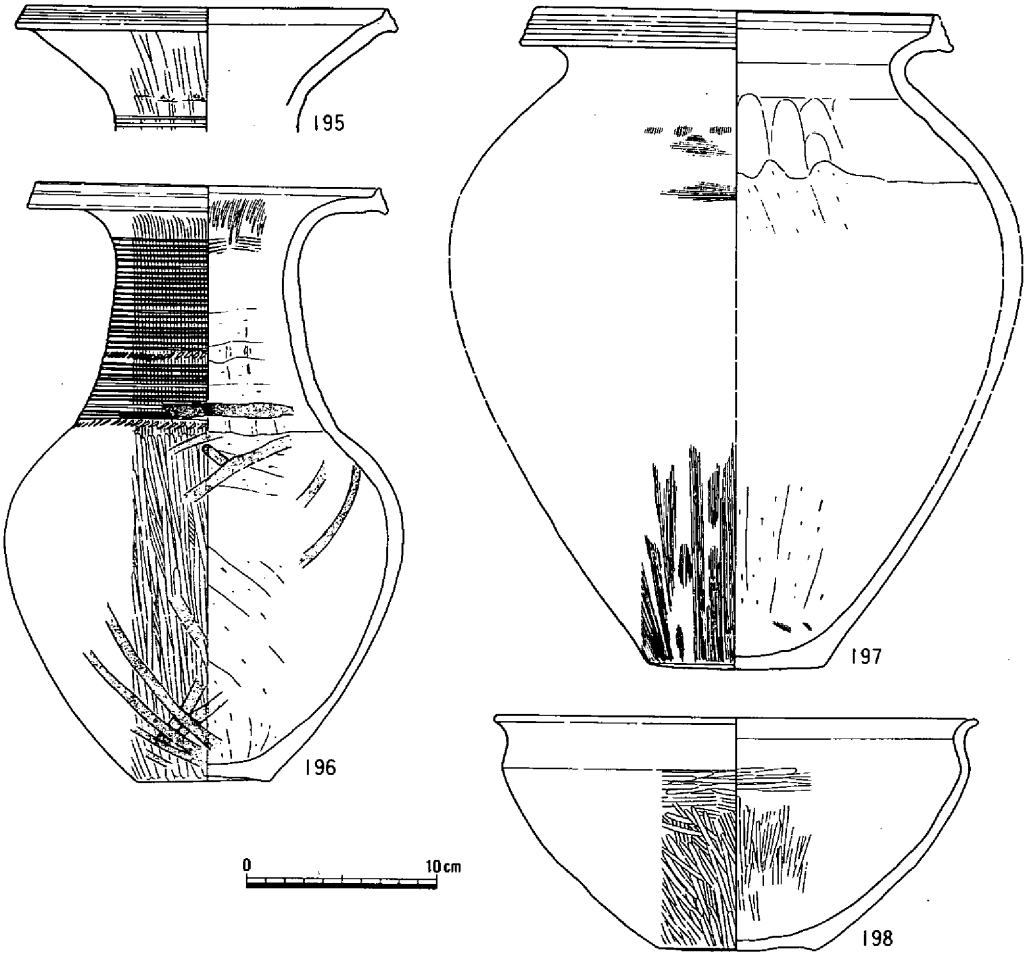
土壙２（第90図、図版62）

土壙１の北東２ｍで検出した径60㎝、深さ16㎝の不整円形の土壙である。埋土は茶灰色粘質土で炭片が混じっている。出土土器の量は多くないが、そのうちの一部は土壙１出土土器と接合する。甕194がそれであり、口縁部～頸部が土壙１の土器層下部から、肩部以下が土壙２からの出土である。土壙１が攪乱を受けた形跡が認められないにもかかわらず破片が外に出ていることから、この二つの土壙は同じ時期に機能しており、土壙１の土器の一部が土壙２にも投棄された可能性が考えられ、それは他の土器の年代観からも矛盾しない。

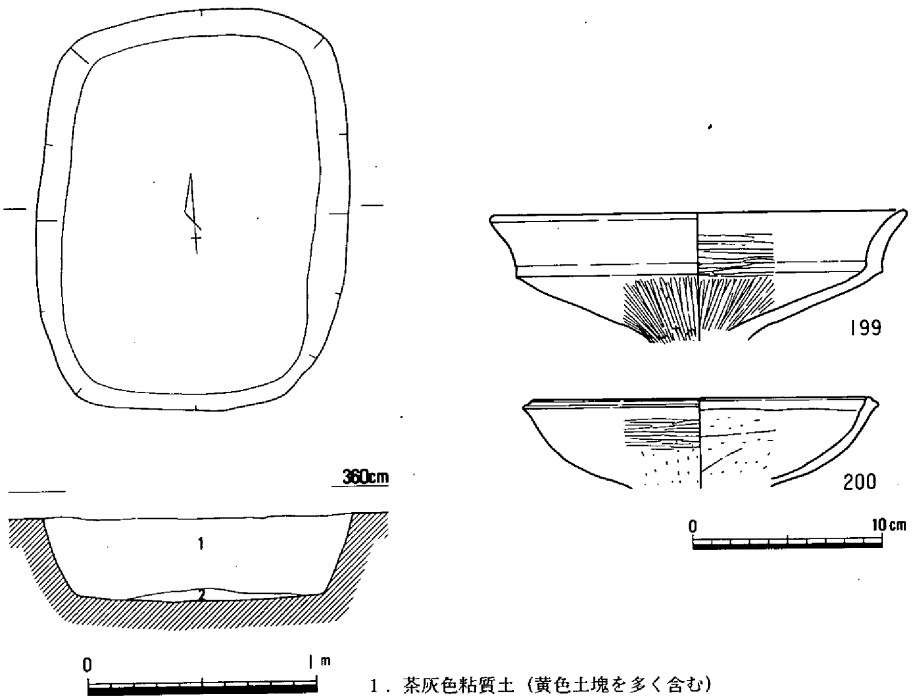
いずれの土器も土壙１出土資料とほぼ同様な特徴をもっている。特に196は暗灰色のくすん



だ色調で、通常の長頸壺にくらべて焼成が不良な感じであり、口縁部、頸部を中心に器壁の剝離・剝脱が顕著である。断面は灰黒色である。この土器にも籠目が認められ、図では同一面に表示しているが籠目が残るのは胴部下端とその反対側の肩部である。やや不明確ながら頸部下端を水平にめぐる帯も認められる。帯の色調はおおむね明褐灰色で器表の色調よりも薄く現れるが、すべての部分で薄くなるわけではなく器表よりも黒くなっている箇所もある。黒斑にかかる部分では淡暗褐色となる。鉢198はこの時期の高杯とおなじ精良な粘土が用いられたもので、胎土の特徴であるのか剝離は認められない。壺197も



第90図　土壙２・出土遺物



第91図　土壙３・出土遺物

器壁の剝離が顕著である。（宇垣）

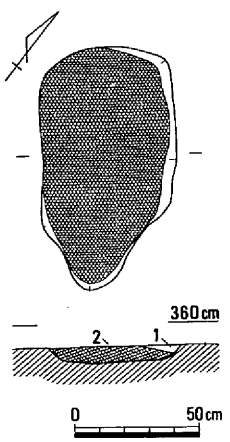
土壙３（第91図、図版20）

９Ａ区の東端、10Ａ区にまたがって検出された。南北方向に主軸をもつ隅丸長方形の土壙で、断面逆台形状を呈す。規模は長軸175cm、短軸145cm、深さ約70cmを測る。土壙内は黄色粘質土ブロックの混入する茶灰色粘質土で大半が覆われており、土壙の底部中央には最大厚５cmの焼土塊が堆積していた。平面的には把握できなかったものの径数10cmの焼土面があった可能性が強い。

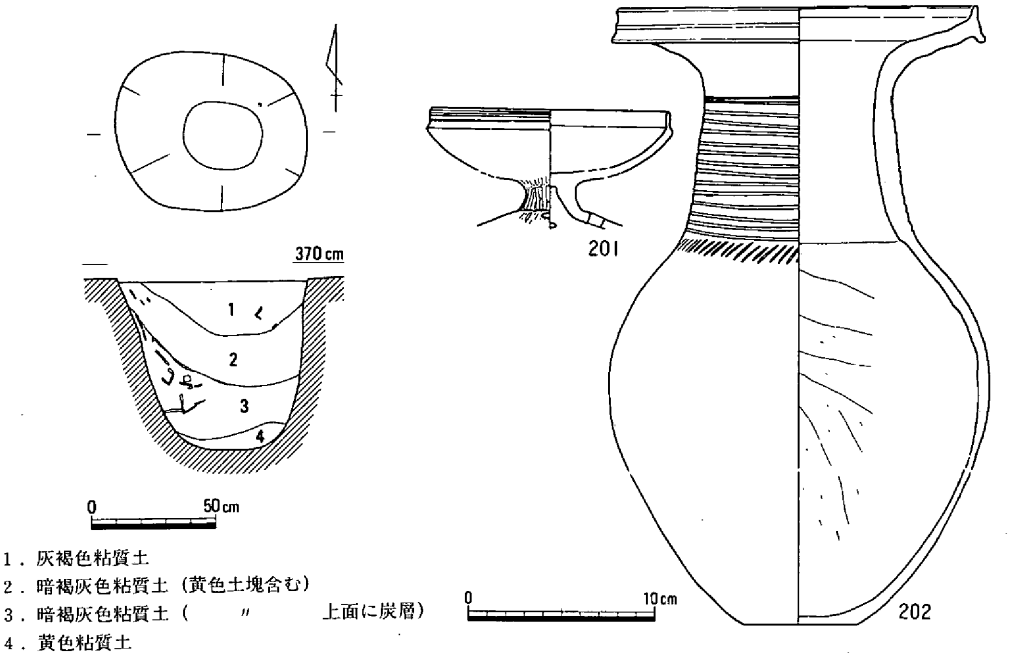
遺物はいずれも小破片で埋土中に混入したものと考えられるが、その特徴は百・後・Ⅱの範疇を示す。（江見）

土壙４（第92図）

竪穴住居２の南側で検出した長さ95cm、幅53cm、深さ７cmの浅い長方形気味の土壙である。土壙内には明灰色の粘土がはいっている。粘土は土壙内の堆積に通常みられる粘土、粘質土とは明らかに異なっており、いずれかから採取してきた粘土を入れた遺構

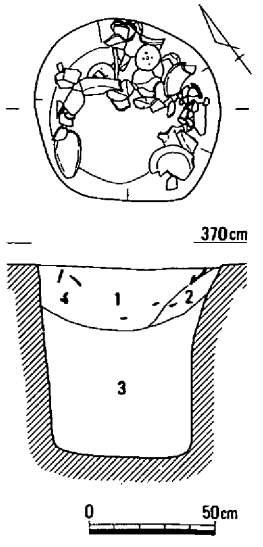


第92図　土壙４



1．灰褐色粘質土
2．暗褐灰色粘質土（黄色土塊含む）
3．暗褐灰色粘質土（　　〃　　上面に炭層）
4．黄色粘質土

第93図　土壙５・出土遺物



1．茶褐色粘質土（炭・黄色土混）
2．焼土
3．茶灰色粘質土

第94図　土壙６

と考えられる。土器が出土していないため時期は決定できないが、調査最終段階で検出できた遺構であり、後期前半の遺構かと思われる。（宇垣）

土壙５（第93図）

竪穴住居１の東側で検出した長径75cm、深さ70cmの不整円形の土壙である。埋土はすべて粘質土で２層と３層の間には炭の薄層が認められる。また、埋土は３層を中心に基盤層のブロックが入っており、ある程度は埋め戻された可能性がある。遺物は土壙の西側に集中している。規模は小さいながら円筒状に掘り込まれており、小規模な井戸とすべき遺構かもしれない。出土土器から埋没時期は百・後・Ⅲと推定される。（宇垣）

土壙６（第94図、図版20）

竪穴住居２の東側で検出した径74cm、深さ77cmの円筒形の土壙で、規模・形状は土壙５に似る。上層には高杯を中心とする小規模な土器溜まりが形成されているが、それらのなかにはススの付着したものが認められ、廃棄時に若干火を受けている可能性があ

る。出土土器から百・後・Ⅲに埋没したと判断できる。（宇垣）

土壙７（第95図）

竪穴住居２の西側で検出した長さ240cm、幅221cm、深さ58cmの不整形な大形の土壙で、百・後・Ⅲの土壙10に切られている。壁面はほぼ垂直に下がっており、底はかなり凹凸をもつ。埋土中には炭・焼土を含む層も認められる。遺物は少なく、百・後・Ⅰの壺、製塩土器などの破片が出土している。（宇垣）

土壙８（第95図、図版21）

７Ｃ区の調査区北東壁に接して検出した土壙で、溝７を掘り込んでいる。不整長方形の平面で、長さ152cm、幅98cm、深さ43cmを測り、断面形は舟底形である。埋土は上層１～３層、中層４～６層、下層７、８層に区分できる。このうち中層は黒褐色土で、炭・焼土を多量に含んでいる。上層と中層は明瞭に区分でき、中層は土壙の使用に関わる堆積、上層はその後の堆積の可能性がある。土器は主に上層から出土しており、百・後・Ⅱと思われる。（宇垣）

土壙９（第95図）

土壙８の南側に所在し、同様に溝７を切っている。不整楕円形の平面をなし、長径143cm、深さ50cmを測る。壁面の傾斜は比較的ゆるやかで、比較的広い底には若干凹凸が認められる。埋土のうち２層は黒褐色で炭・焼土を含んでいる。土器の出土量は少ない。（宇垣）

土壙10（第96図）

９Ｄ区北寄り土壙６の南に位置し、これを切っている。平面は不整楕円形を呈し、底部は２段になる。長軸145cm、短軸95cm、深さ35および45cmを測る。埋土は４層に分かれるが、１層中からは一括廃棄された状態で、図示した甕をはじめ壺・高杯・小型鉢など、本来完形であったと思われる土器が多数出土している。なお、高杯は短脚で外反する短い口縁部をもつもので、甕の特徴などから時期は百・後・Ⅲに比定される。（江見）

土壙11（第97図、図版65）

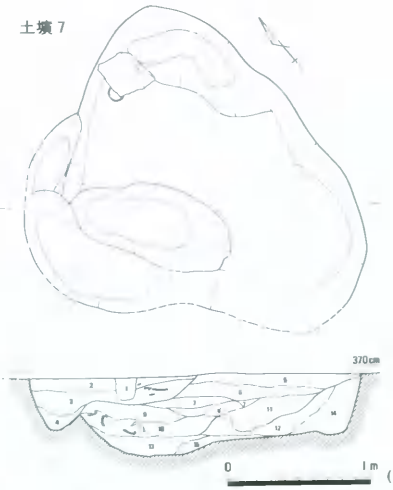
８・９Ｃ区で検出された長楕円形を呈する土壙である。規模は長さ214cm、幅154cmを測る。底部は平坦で、壁は緩やかに立ち上がるが、南側は一坦急斜に立上った後、平坦部を形成する。

遺物は弥生土器が少量出土した。207は甕、210は鉢、208・209は高杯である。時期は百・後・Ⅱと考えられる。（平井）

土壙12（第98・99図）

９Ｂ区で検出された長楕円形の土壙である。規模は長さ127cm、幅82cmを測る。断面形を見ると、４層は掘りすぎと考えられることから、南側は底部に向って緩やかに下がり、一坦平坦となるが、北側中央は１段深くなる。そして北側の壁はほぼ垂直に立上る。埋土は３層に分かれるが、遺物は２層ないし１層と３層の境に含まれていた。

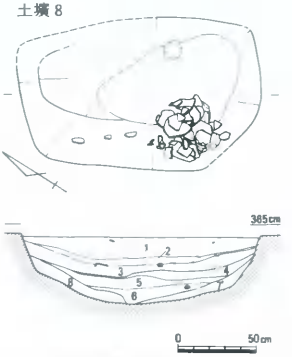
土壙7



（S＝1/40）

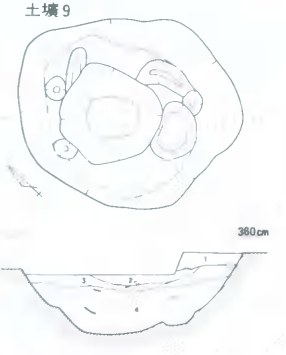
1．淡黄褐色砂質土（焼土多く含む）
2．暗茶灰色粘質土（炭多く含む）
3．暗茶灰色粘質土
4．暗茶灰色粘質土
5．暗茶褐色粘質土
6．暗茶灰色粘質土
7．淡茶褐色粘質土
8．暗灰色粘質土（焼土多く含む）
9．淡茶褐色粘質土
10．暗灰色粘質土
11．暗灰色粘質土
12．淡茶褐色粘質土
13．暗灰色粘質土
14．淡茶褐色粘質土
15．淡茶褐色粘質土

土壙8



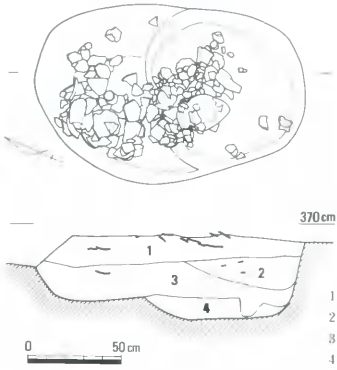
1．暗灰褐色土（炭・焼土含む）
2．暗褐色土
3．暗褐色土
4．黒褐色土（炭・焼土多量）
5．黒褐色土（炭・焼土多量）
6．黒褐色土（
7．暗黄褐色粘質土
8．暗黄褐色粘質土

土壙9



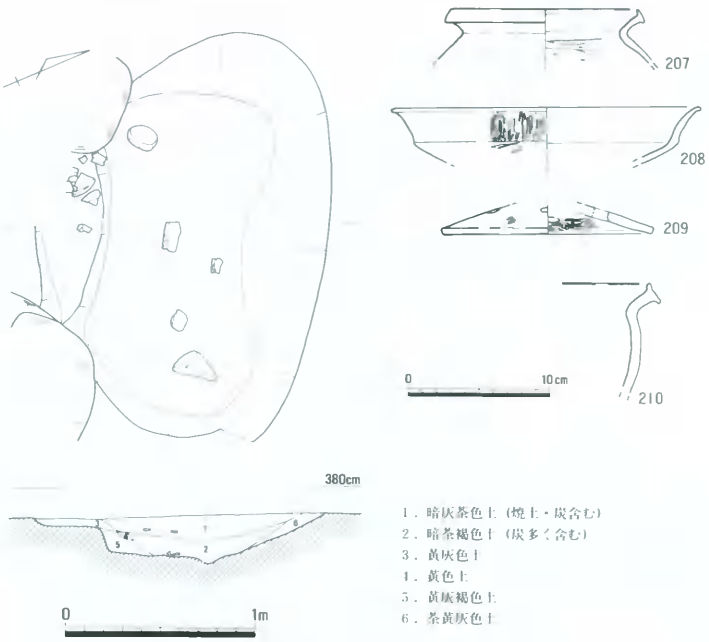
1．黄褐色微砂質土
2．黒褐色粘質土（炭・焼土多量）
3．暗褐色粘質土
4．暗黄褐色粘質土（炭小量含む）

第95図　土壙7・8・9

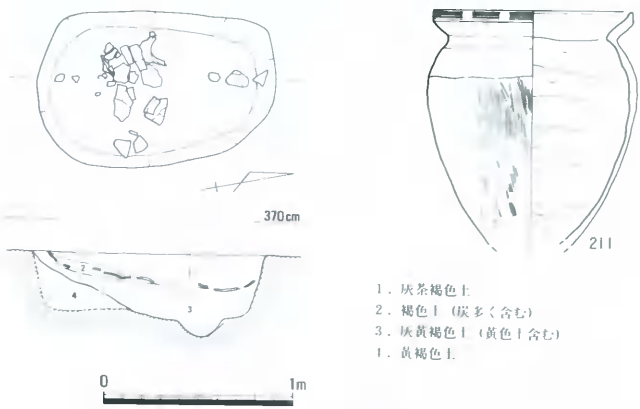


1．暗茶褐色粘質土
2．暗茶灰色粘質土（炭多く含む）
3．暗茶灰色粘質土（焼土混じる）
4．淡黄灰色粘質土

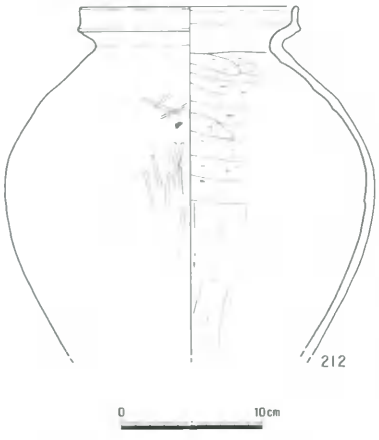
第96図　土壙10・出土遺物



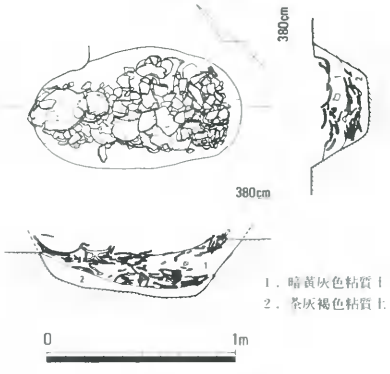
第97図　土壙11・出土遺物



第98図　土壙12・出土遺物（１）



第99図　土壙12出土遺物（2）



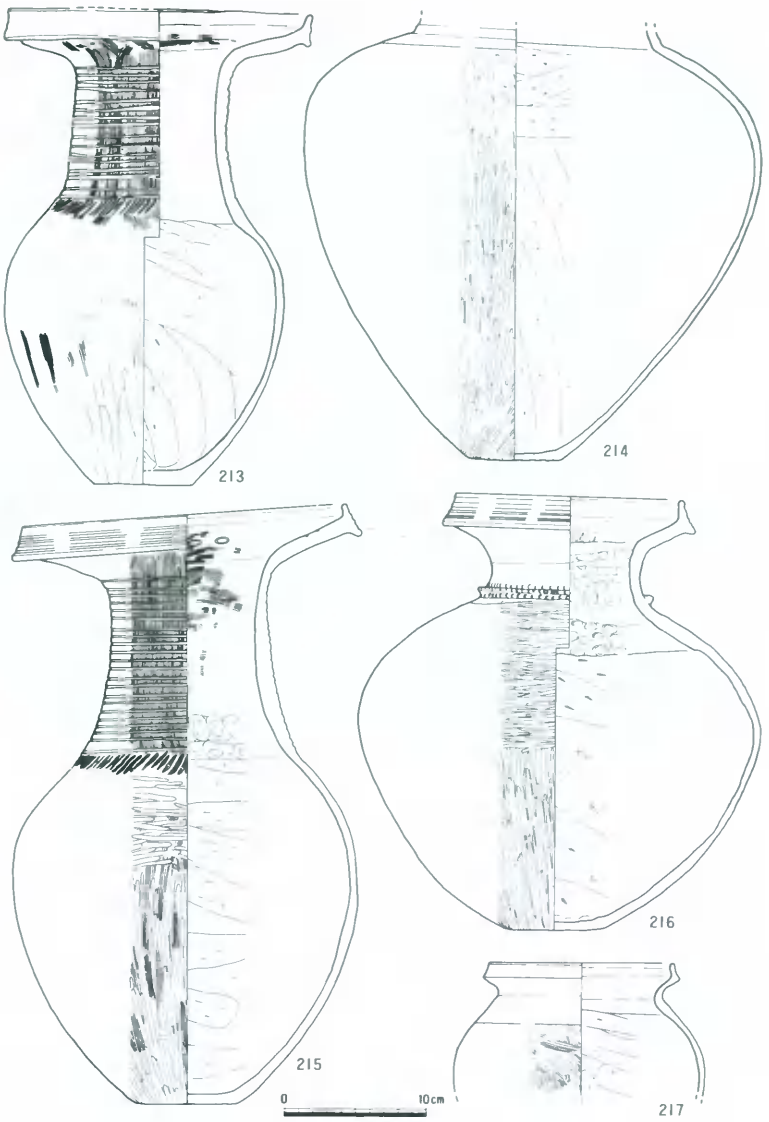
第100図　土壙13

遺物は弥生土器が出土した。いずれも甕で、211は口縁端部をわずかに上方へつまみあげているが、211は口縁端部をほぼ垂直に立上げている。時期は百・後・Ⅲと考えられる。（平井）

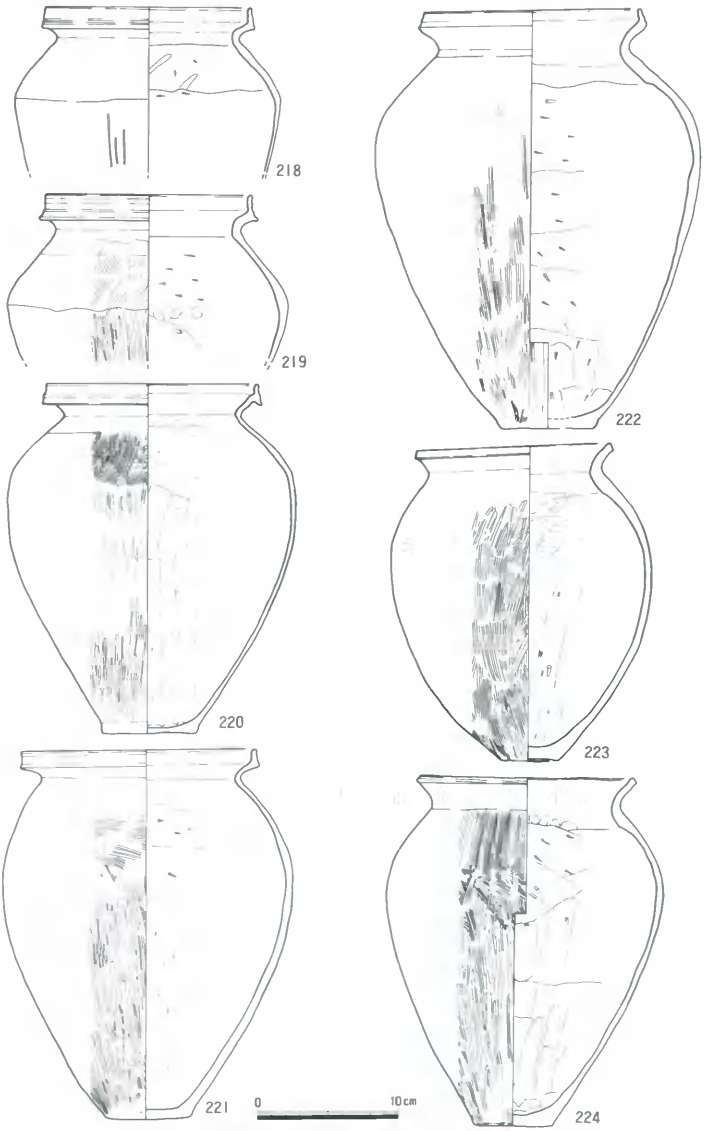
土壙13（第100～103図、図版21・63）

9B区で検出された長楕円形を呈する土壙である。規模は長さ110cm、幅65cm、深さ25cmを測る。土壙内の埋土は大きく2層に分かれ、1層には大量の土器が廃棄されていた。

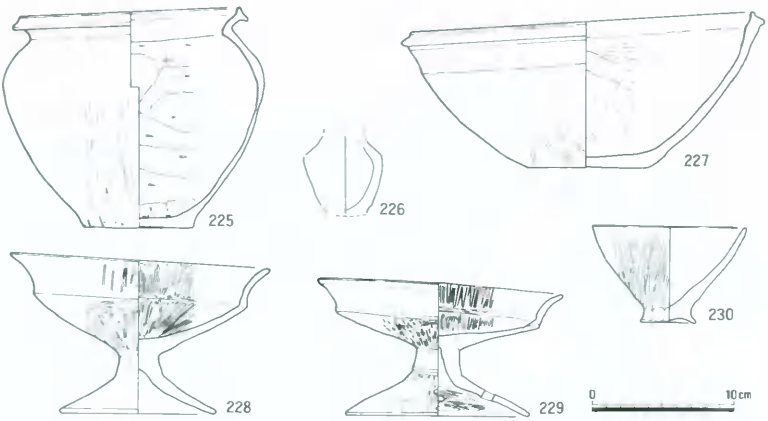
213から216は壺である。このうち213と215は長頸壺で、頸部には多条沈線をめぐらせ、頸部と胴部の境界には刷毛状工具による刻目を施す。また口縁部内面には横位に2箇の円形刺突が施されている。214は全面丹塗りで丁寧に仕上げられている。216は頸部下端に突帯がめぐり、その上下には半截竹管状工具によるC字形の刺突が施される。217から224は甕である。このうち217から222は口縁端部を上方へ拡張する口縁部を有し、器壁は概して薄く仕上げるが、223と224は口縁部をくの字状に外反させ、端部は拡張せず面をもつように仕上げる。225・227・230は鉢である。230の底部は脚台状に外方へ少しつまみ出している。228、229は高杯である。いずれも脚柱部は短かいが、229は下端に沈線がめぐる。透かしは228には認められないが、229は4方向から穿孔されている。杯部は内外面ともに丁寧なヘラ磨きが施されるが、口縁部内外面は暗文風になっている。胎土は精選された粘土を用いている。以上の土器の時期は百・後・Ⅲと考えられる。（平井）



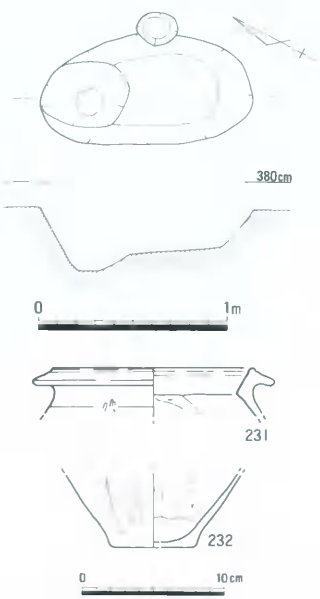
第101図　土壙13出土遺物（1）



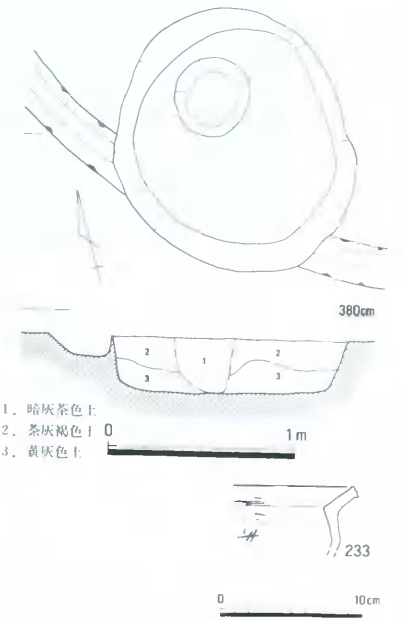
第102図　土壙13出土遺物（2）



第103図　土壙13出土遺物（３）



第104図　土壙14・出土遺物



第105図　土壙15・出土遺物

土壙14（第104図）

9C区で検出された長楕円形を呈する土壙である。規模は長さ111cm、幅60cm、深さ32cmを測る。底部はほぼ平坦で、北西端は一段深くなる。壁は急傾斜で立ち上がる。

遺物は弥生土器が少量出土した。231は甕の口縁部、232は甕の底部である。時期は百・後・Ⅰと考えられる。（平井）

土壙15（第105図）

9B区で検出された楕円形を呈する土壙である。規模は長さ144cm、幅126cm、深さ28cmを測る。底部は平坦で、壁は急傾斜で立ち上がる。

遺物は弥生土器がわずかに出土した。233は鉢の口縁部で、口縁端部外面には退化凹線が2条めぐる。時期は百・後・Ⅱと考えられる。（平井）

土壙16（第106・107図、図版22・64）

9B区で検出された隅の丸い長三角形状を呈する土壙である。規模は長さ186cm、幅112cm、深さ10cmを測る。底部はほぼ平坦で、壁は急傾斜で立ち上がる。土壙内には多くの土器が廃棄されていた。

遺物は弥生土器が出土した。234は大型の鉢である。235と236は器台の口縁部と脚部である。235は大きく開いた口縁部内面に円形刺突を2列めぐらし、さらに口縁端部外面にも複合鋸歯文を描いている。時期は百・後・Ⅰと考えられる。（平井）

土壙17（第108図、図版65）

8B区で検出された長方形状の土壙である。規模は長さ218cm、幅114cm、深さ18cmを測る。底部はほぼ平坦で、壁は急傾斜で立ち上がる。

遺物は弥生土器が少量出土した。243は壺、244は高杯、245は製塩土器である。時期は百・後・Ⅱと考えられる。（平井）

土壙18（第109図）

9A区で検出されたやや歪んだ長方形の土壙である。規模は最大長150cm、最大幅75cmを測る。土壙底部はほぼ平坦で、北側中央部には楕円形の浅い穴が穿たれている。壁は急傾斜で立ち上がる。

遺物はすべて弥生土器で、底から20cmほど浮いて出土した。246は甕、247と248は製塩土器の脚部である。時期は百・後・Ⅰと考えられる。（平井）

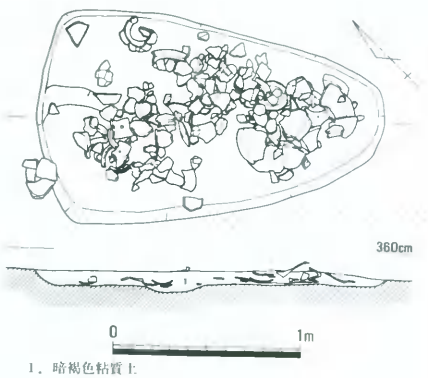
土壙19（第110図、図版66）

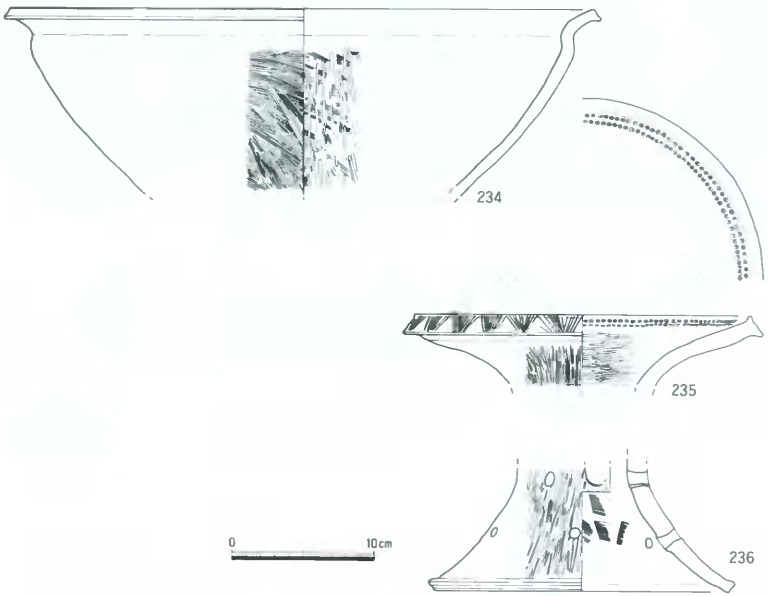
9B区で検出された細長い土壙であるが、東側から南側にかけて削平を受けている。規模は長さ1.95m以上、幅61cm以上になる。土壙底部はほぼ平坦で、中央は一段低くなっている。埋土は暗茶褐色土で、礫や土器を含んでいる。

遺物は弥生土器が出土した。大型鉢249の器表には有機物付着による変色と考えられる帯状（幅１cm前後）の痕跡が、口縁部から右下がりに３本、そしてその３本とクロスするように左下がりに１本が認められる。籠のようなものの痕跡である可能性が考えられる。時期は百・後・Ⅱと考えられる。　（平井）

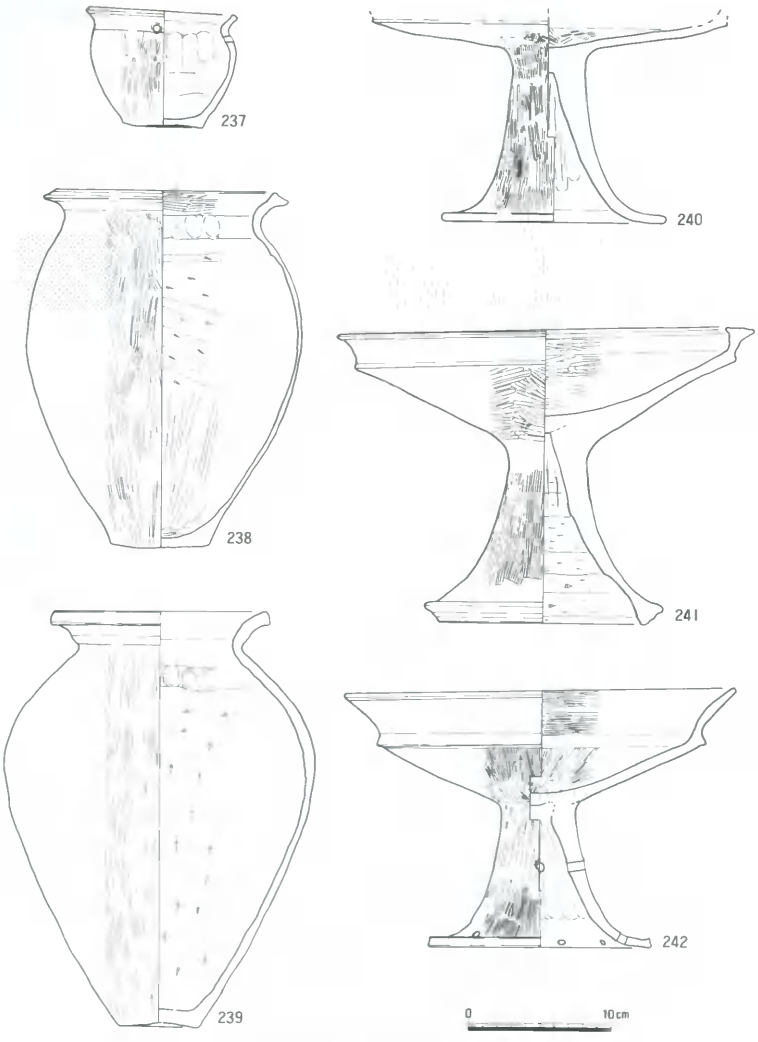
土壙20（第111図）

10B区で検出された長楕円形の土壙で、竪穴住居５外周溝に切られているが、土壙21を切っている。規模

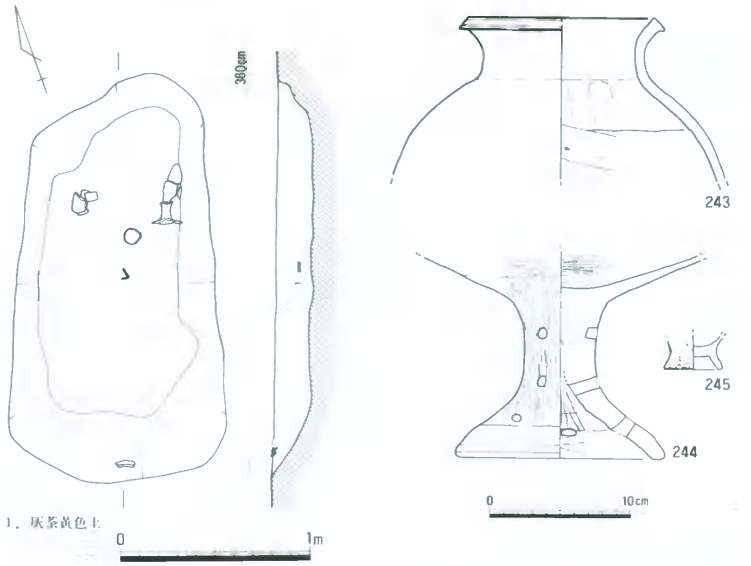




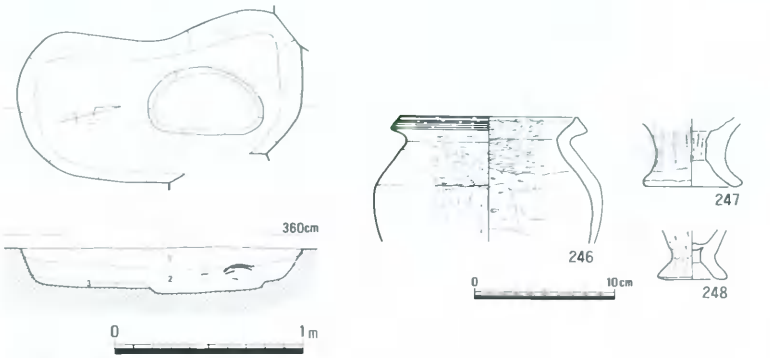
第106図　土壙16・出土遺物（１）



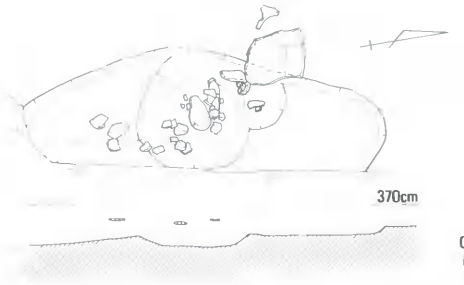
第107図　土壙16出土遺物（2）

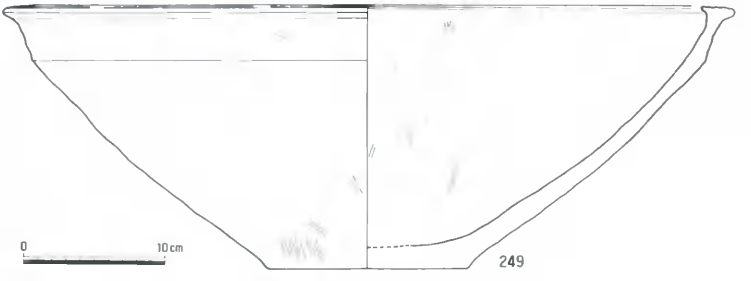


第108図　土壙17・出土遺物

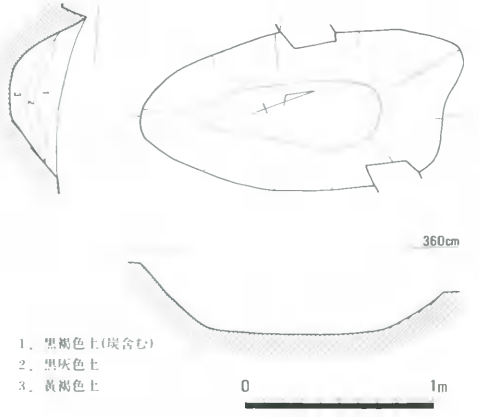


第109図　土壙18・出土遺物





第110図　土壙19・出土遺物



第111図　土壙20

は最大長172cm、最大幅81cmを測る。底はほぼ平坦で、壁はやや緩やかに立ち上がる。

（平井）

土壙21（第112図）

10B区で検出された円形の土壙である。規模は径130cm、深さ60cmを測る。土壙の底は丸みをもっており、壁はやや急傾斜で立ち上がる。

遺物は弥生土器が少量出土した。250は甕で、くの字状に外反した口縁部の端をわずかに上下に拡張している。時期は百・後・Ⅱと考えられる。（平井）

土壙22（第113図）

10B区で検出された楕円形を呈する土壙で、南東部は土壙20に切られている。規模は最大長141cm、最大幅105cmを測る。土壙の底部は西が深く東に向って徐々に浅くなる。埋土は暗灰黄色土である。

遺物は弥生土器の細片がわずかに出土した。土壙の時期は後期と考えられる。（平井）

土壙23（第114・115図、図版65・88）

10B区で検出された円形の土壙である。規模は径125cm、深さ45cmを測る。土壙の底部はほぼ平坦で、壁は急傾斜で立ち上がる。埋土はほぼ整然とレンズ状に堆積しており、各層に弥生土器を含む。

遺物は弥生土器が出土しているが、特に多いのは4層である。251は胴部が大きく膨らむ壺である。252～257は口縁部がくの字状に外反し、その端部は丸ないし尖りぎみに仕上げる甕である。258・259・263はくの字状に外反した口縁端部に面をもつものないしわずかに上下に拡張する甕である。260は鉢、261と262は高杯である。262は少し時期が古いものである。時期は百・後・Ⅱと考えられる。（平井）

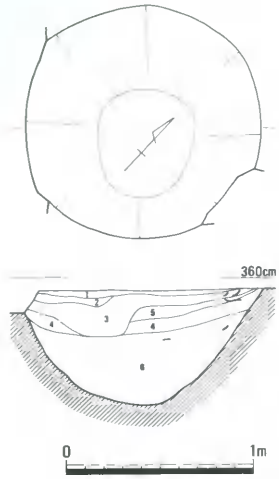
土壙24（第116図、図版22・65）

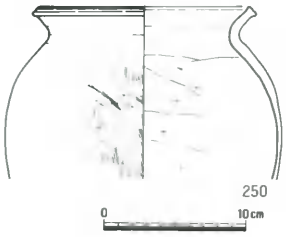
9B区で検出された長楕円形を呈する土壙である。規模は最大長173cm、最大幅100cmを測る。土壙の底は平坦であるが、南側は一段高くなる。壁は急傾斜で立ち上がる。土壙内には炭と焼土塊がまとめて廃棄されていた。

遺物は弥生土器が少量、礫や焼土塊とともに出土した。264・265・267・268は甕である。264は他の3点と異なり、口縁部がくの字状に外反したまま終る。266は小型の壺で、胴部外面はヘラ削りで仕上げる。269は高杯の杯部である。時期は百・後・Ⅲと考えられる。（平井）

土壙25（第117～120図、図版23・66・67）

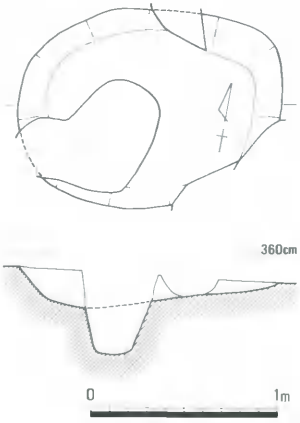
10B区で検出された楕円形を呈する土壙である。規模は最大長157cm、最大幅132cmを測る。土壙の底部はほぼ平坦で、壁は急傾斜で立ち上がる。検出面からの深さは浅いが、これは土器が大量に検出されるまで土壙の存在に気がつかなかったためである。土壙内の土器は、礫など



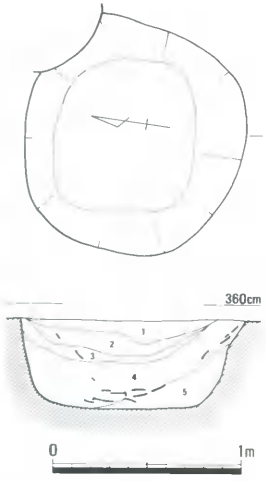


1．淡灰色粘質土
2．灰色土
3．暗灰色土(炭・焼土多く含む)
4．暗灰黄色土
5．灰黄色土(黄色土塊含む)
6．暗灰黄色粘性微砂質土

第112図　土壙21・出土遺物

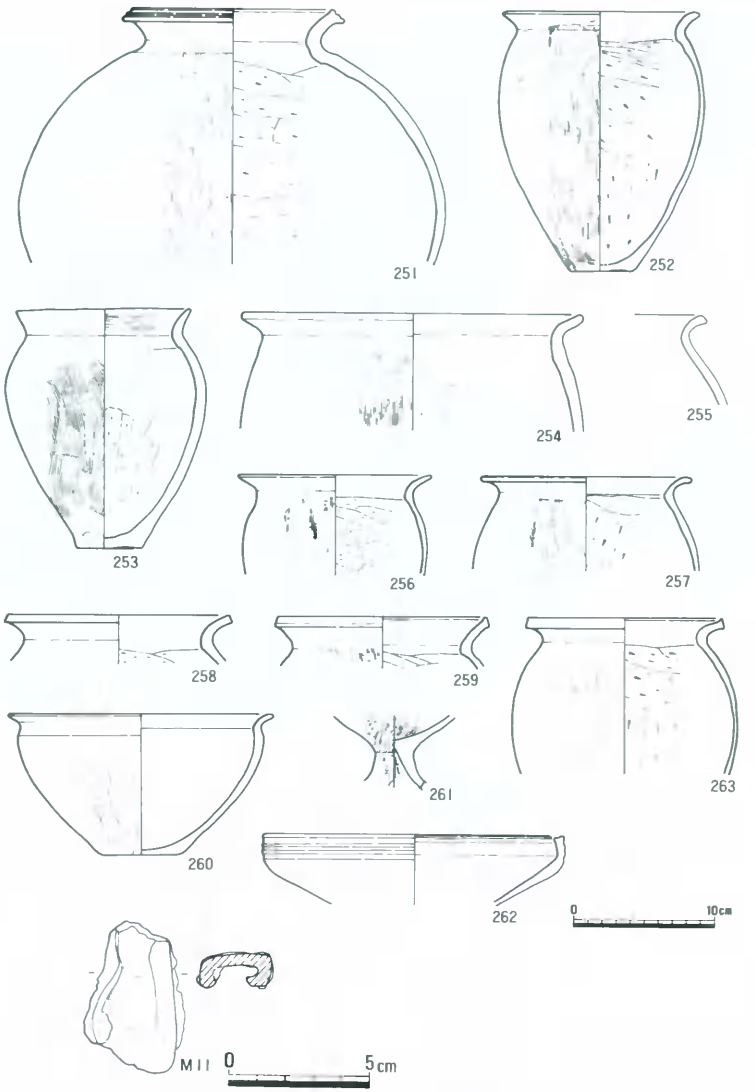


第113図　土壙22

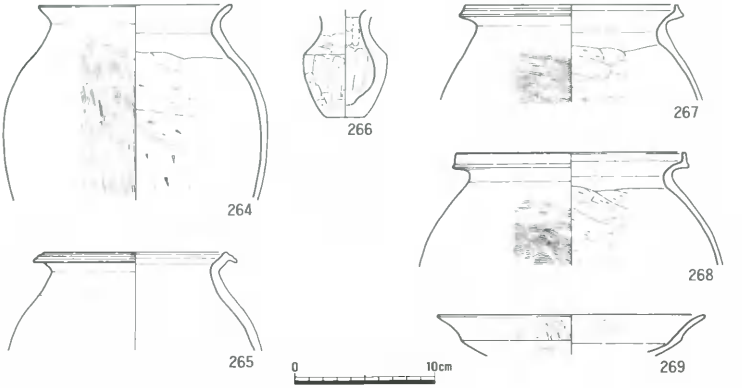


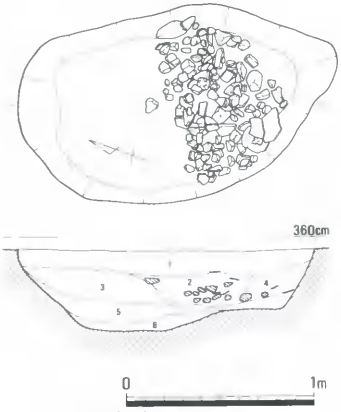
1．淡灰色粘質土
2．暗灰褐色土(炭・焼土含む)
3．明黄灰色土(黄色土塊含む)
4．黄灰色土
5．暗灰黄色土

第114図　土壙23



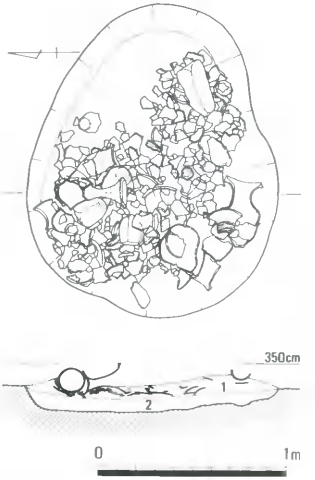
第115図　土壙23出土遺物





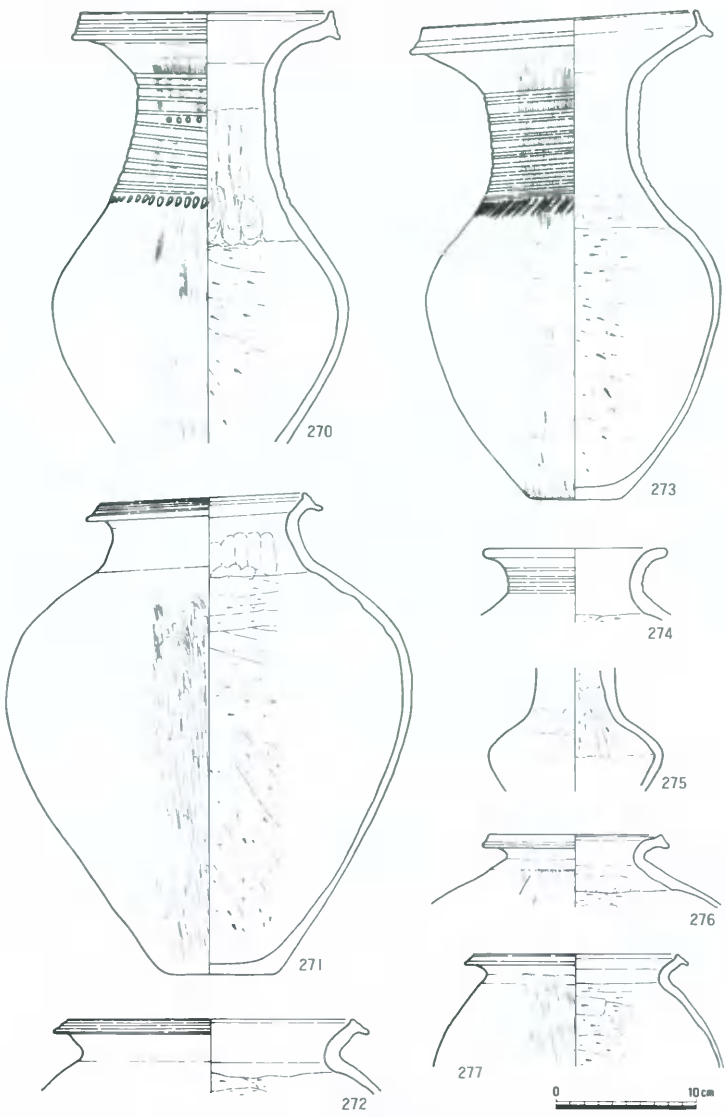
1．暗黄灰色粘質微砂
2．黒灰色土(炭を多く含む)
3．灰黄色粘質土
4．暗灰色土
5．明黄褐色土
6．灰色土

第116図　土壙24・出土遺物

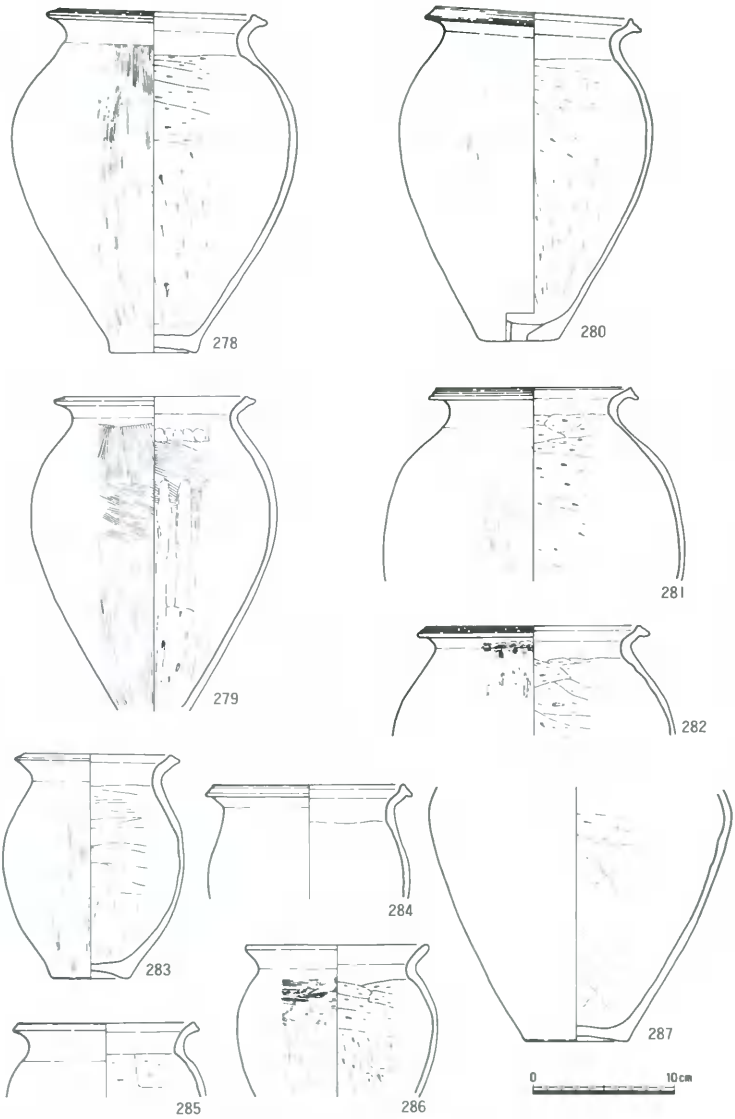


1．灰褐色土(炭・焼土多く含む)
2．褐灰色土(黄色土塊、炭・焼土含む)

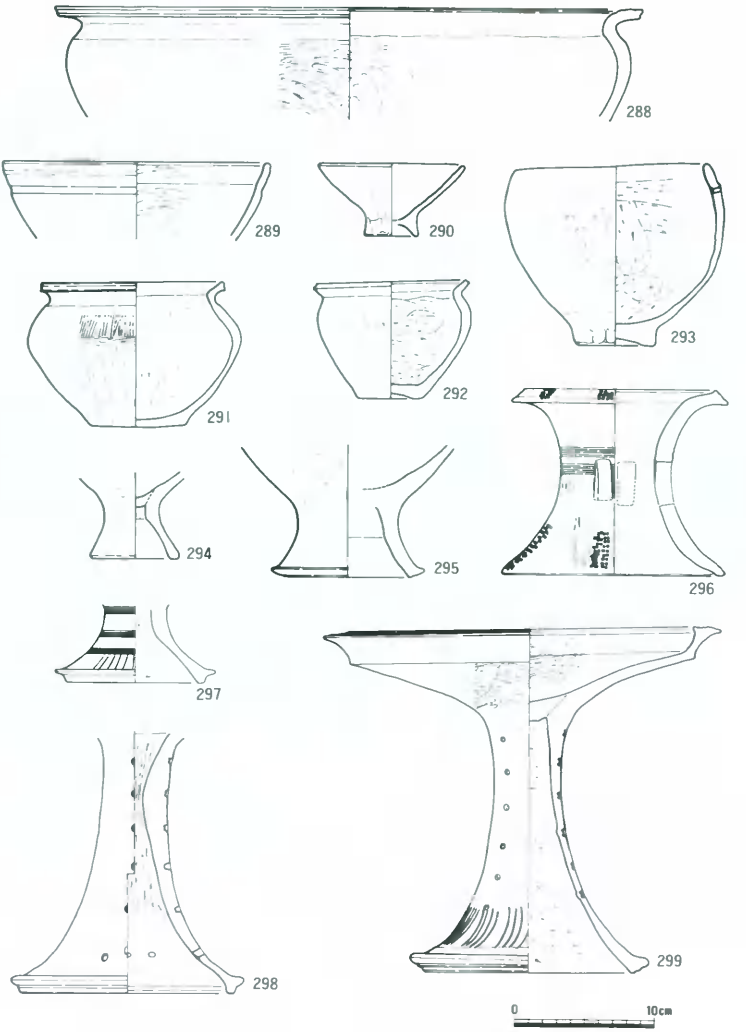
第117図　土壙25



第118図　土壙25出土遺物（１）



第119図　土壙25出土遺物（２）



第120図　土壙25出土遺物（３）

とともに1層目に集中して廃棄されていた。

遺物はすべて弥生土器である。270・271・273～276は壺である。274は頸部に凹線をめぐらせ、口縁部は短くくの字状に外反する。272・277～286は甕である。280は底部に円形の穿孔がみられる。288～293は鉢である。293は口縁部に小円孔が穿たれている。294と295は脚台部である。296は小型の器台で、口縁部外端面および脚部外面に円形刺突列が施される。297～299は高杯で、297の脚部は短いが、他は長くなる。298の脚部には縦に円形刺突が4方施されるが、最下は円孔となり横に3個が並ぶ。299は縦に円形刺突が3方施され、最下には4本1組のノ状のヘラ描文が施される。以上の土器の時期は百・後・Ⅰと考えられる。（平井）

土壙26（第121図）

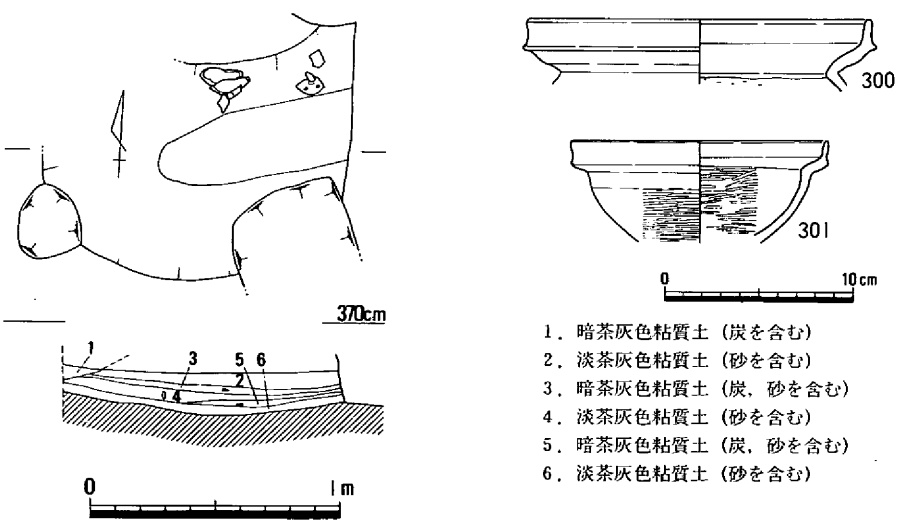
10Z区の中央北寄りから検出された平面楕円径を呈す浅い溜まり状の土壙である。推定径約150×100cm、深さ7cmを測る。埋土は炭を多く含むもので、遺物は底部よりやや浮いた状態で出土している。いずれも破片で百・後・Ⅳの特徴を示す。（江見）

土壙27（第122図）

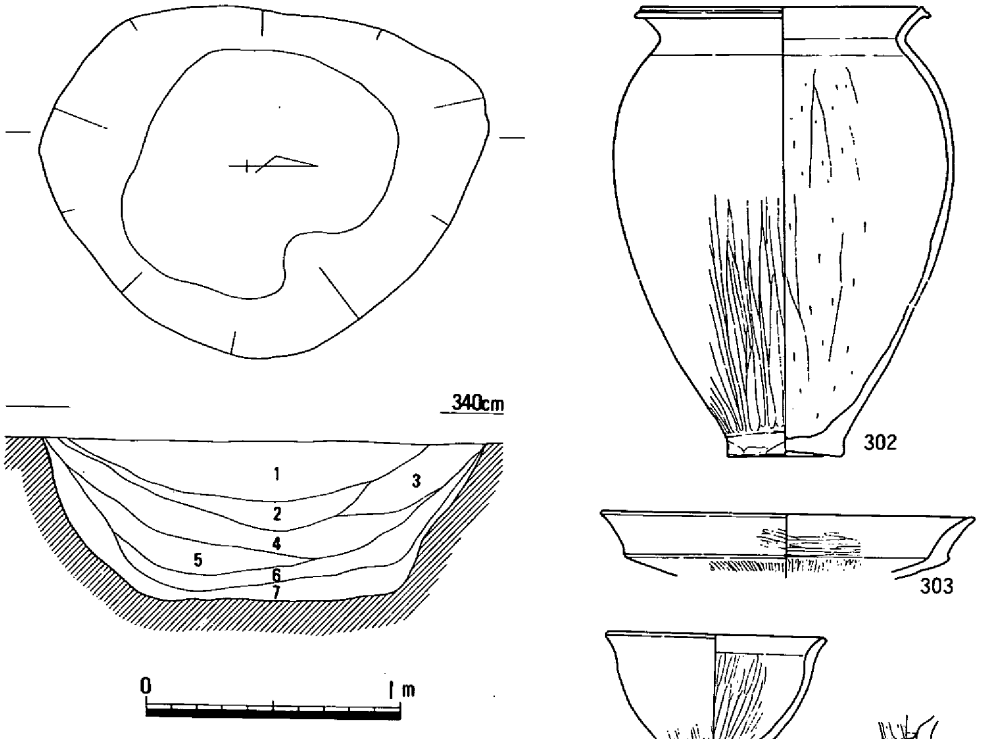
10Z区の中央西寄りに位置し、溝27を切っている。平面不整円形を呈し、底部もいびつな形状を示すが、大型の深く掘り込まれた土壙である。径180×140cmの南北方向に主軸をもち、深さ65cmを測る。遺物はいずれも破片であり、製塩土器脚部は図示した以外にも数個出土している。百・後・Ⅱの特徴を示す。（江見）

土壙28（第123図、図版68）

9A区東端に位置し平面は不整円形を呈す。径140×110cmの南北方向に主軸をもち、深さ



第121図　土壙26・出土遺物



1．暗茶灰色粘質土（炭を含む）
2．灰黄色粘質土（黄色土塊を含む）
3．黄灰色粘質土
4．淡茶灰色粘質土（褐色土を含む）
5．淡茶灰色粘質土（灰色土を含む）
6．淡茶灰色粘質土（炭を多く含む）
7．茶灰色粘質土

第122図　土壙27・出土遺物

50cmを測る。遺物は主に3・4層から出土しており、土壙南東部からは壁に沿って落ち込む状態で出土している。いずれも破片で、百・後・Ⅱの特徴を示す。（江見）

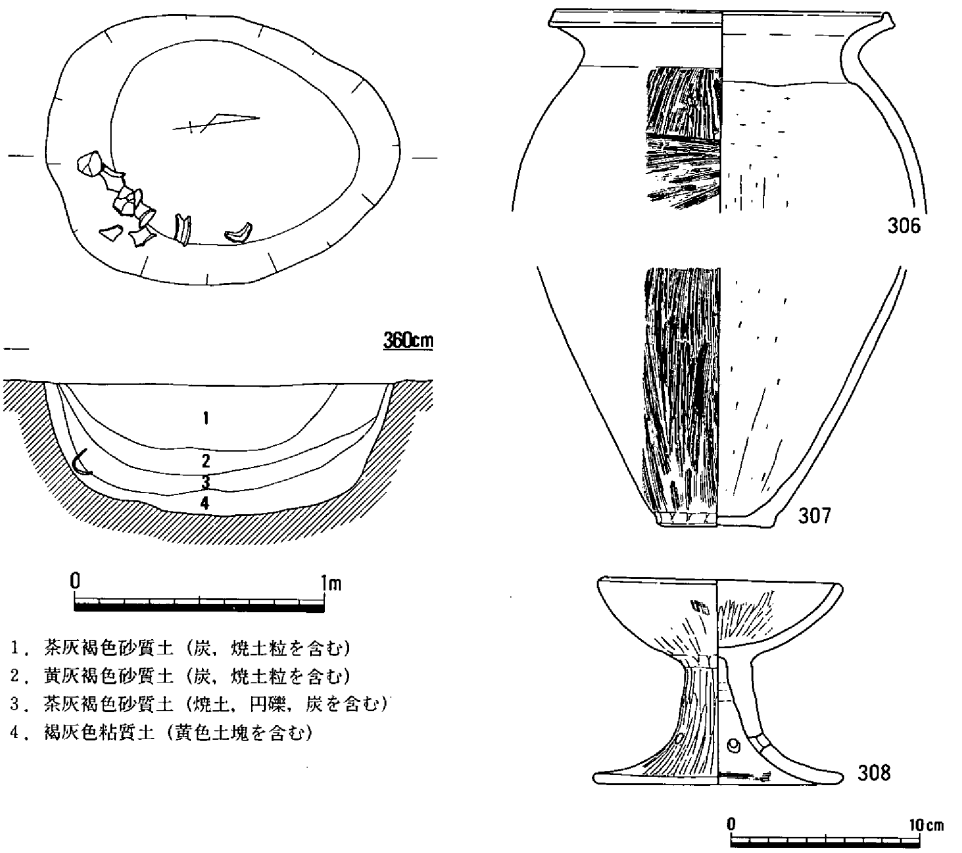
土壙29（第124図、図版71）

10乙区の中央、井戸2の東に位置する。東西方向に主軸をもつ平面不整長方形の土壙である。長軸145cm、短軸95cm、深さ約50cmを測る。遺物は1層から主に出土しており、特に土壙北部では壺・甕・高杯などが投げ込まれた状態で出土している。百・後・Ⅱの特徴を示す。

（江見）

土壙30（第125図）

10乙区東寄りに位置する。平面不整楕円形の土壙で径130cm×73cm、深さ約45cmを測る。土壙の掘り込みは緩く、断面椀状を呈す。遺物は主に1層上部から出土しているが、いずれも破片



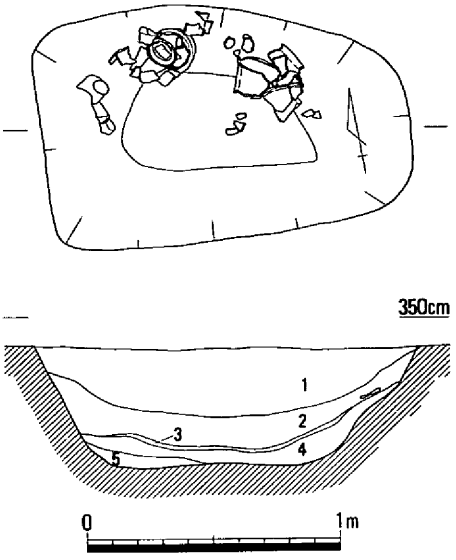
第123図　土壙28・出土遺物

であり、百・後・Ⅱの特徴を示す。　（江見）

土壙31（第126～129図、図版23・68）

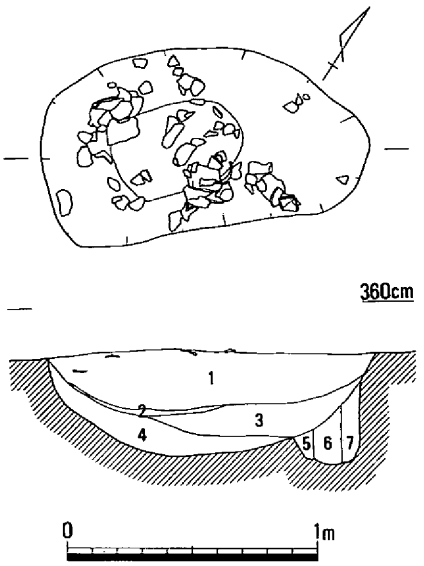
10A区の東端、建物25の南に位置する。ほぼ東西方向に主軸をもつ平面不整長方形の土壙で、東側底部が一段高くなっている。長軸190cm、短軸110cm、深さ約30cmを測る。土壙底部西端および東寄りに長さ約30cm、幅約10cm、深さ数cmの小口板状の僅かに窪む箇所が認められ、土壙墓の可能性もある。

遺物は1層の炭を多量に含む暗灰茶色土から小礫とともに一括廃棄された状態で出土している。高杯・鉢などの小型の土器が目立ち、特に高杯は西側から多く、また、中央下部から壺および器台などが出土している。なお、完形復原できた土器が多いもののいずれも破砕され、散在する状況であった。器種は壺309をはじめ甕・高杯・脚付直口坩321・330・鉢類・製塩土器・器台などが出土している。壺の形態は甕に似るが外面には煤等二次焼成を受けた形跡は全く認められないものであった。また、図示できなかったもののの口径28cm、高さ43cm、胴部最大



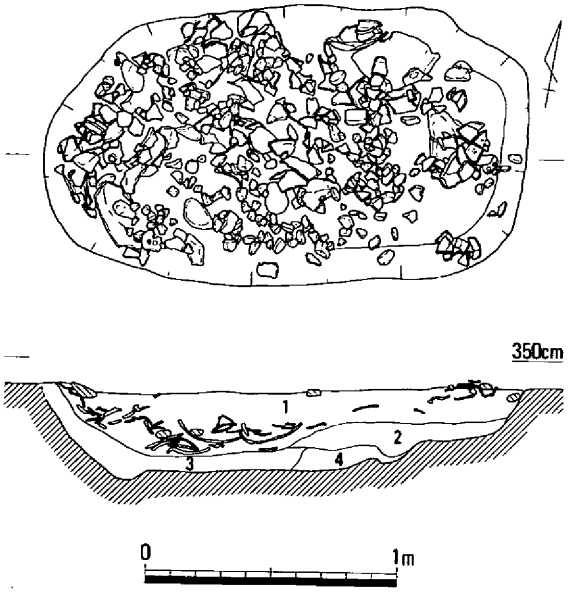
1．淡黄灰色粘質土
2．暗黄灰色粘質土
3．炭層
4．暗黄灰色粘土（黄色土塊を含む）
5．黄色粘土

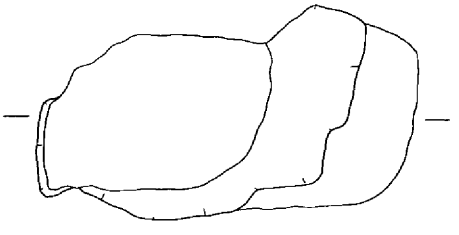
第124図　土壙29



1．淡黄灰色粘質土（炭，砂を少し含む）
2．炭層
3．淡茶灰色粘質土（焼土，炭を含む）
4．淡茶灰色粘質土（黄色土塊を含む）
5．黄色粘質土
6．暗青灰色粘質土
7．淡茶灰色粘質土（黄色粘質土を含む）

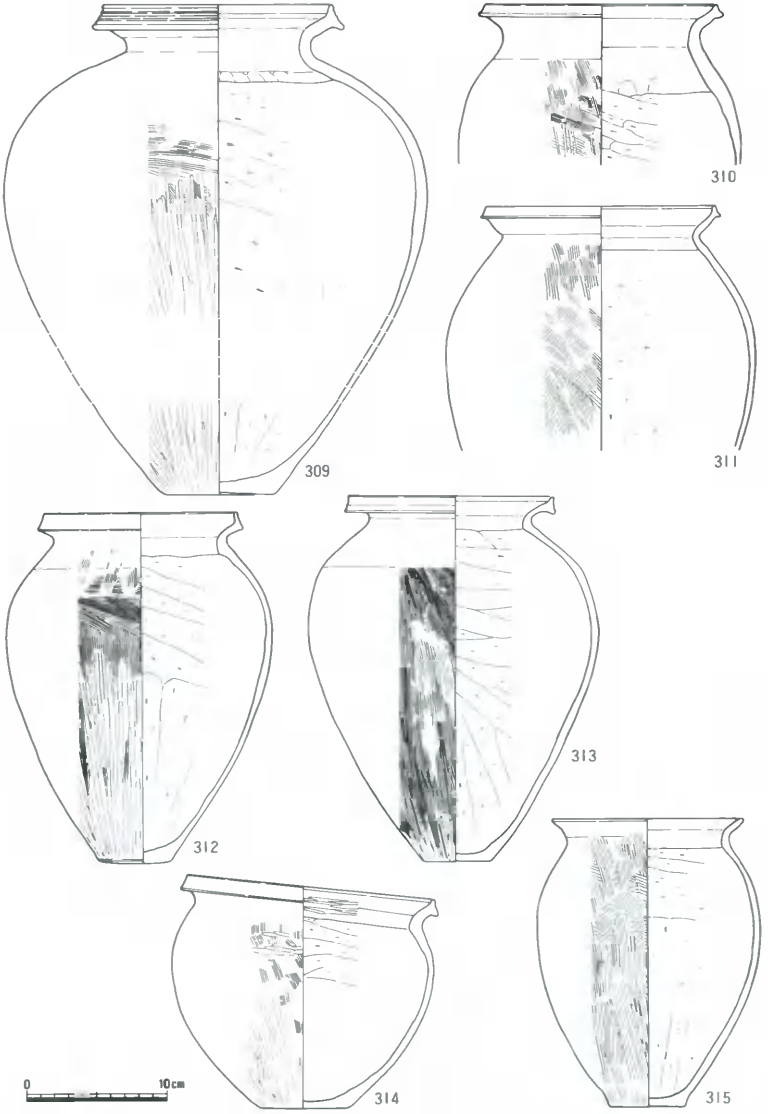
第125図　土壙30



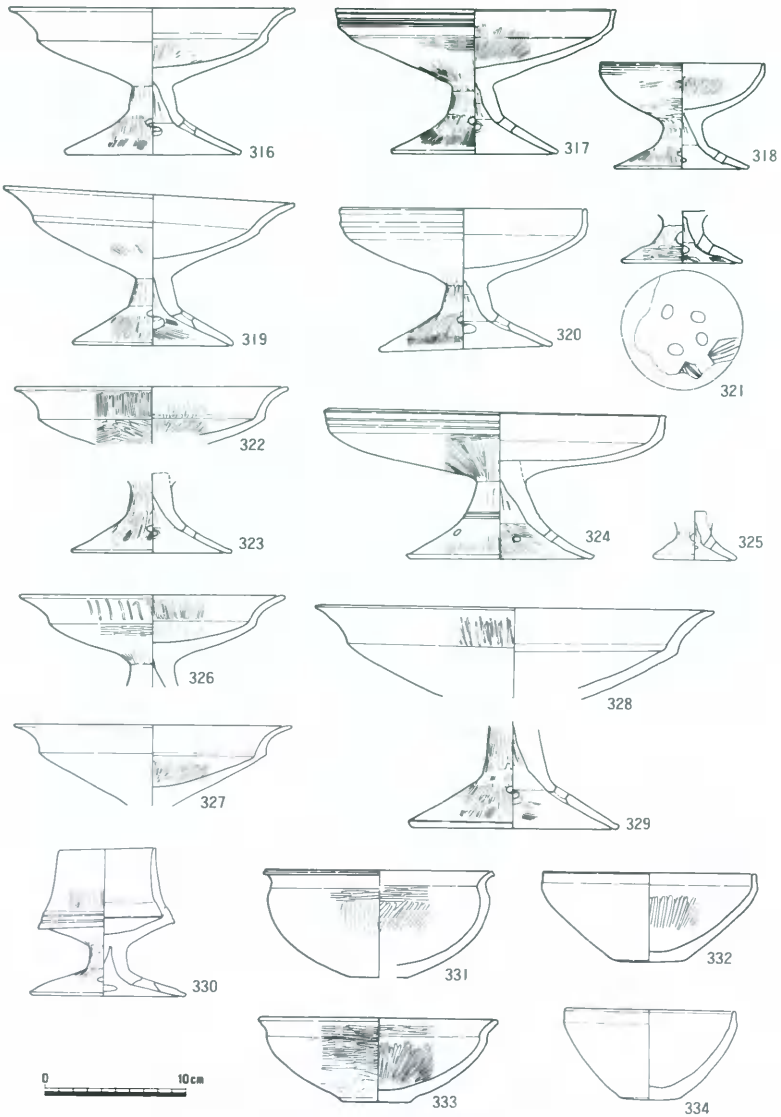


1．暗灰茶色土（炭を多く含む）
2．茶灰色土
3．茶灰色土（黄色土塊を少し含む）
4．茶灰色土（黄色土塊を多く含む）

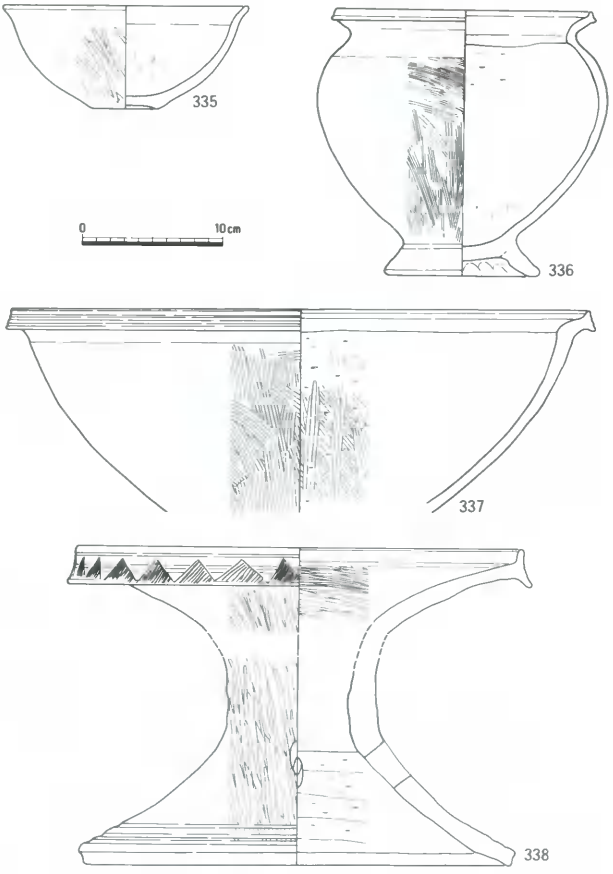
第126図　土壙31



第127図　土壙31出土遺物（1）



第128図　土壙31出土遺物（2）

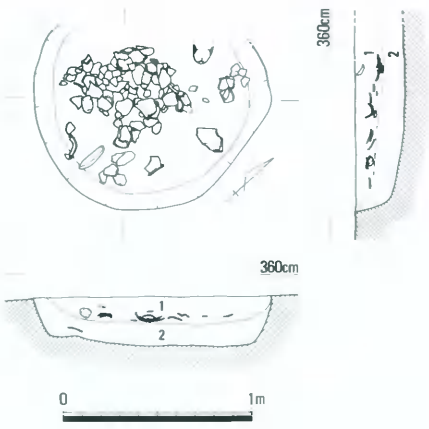


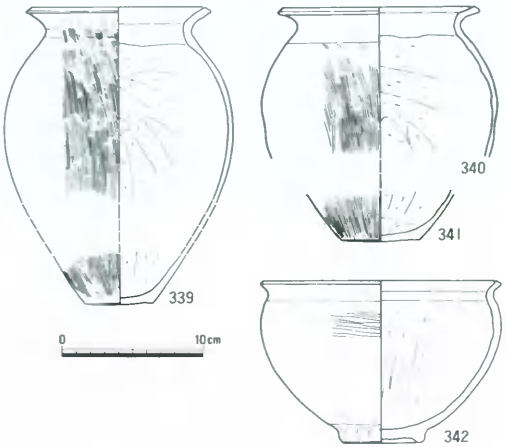
第129図　土壙31出土遺物（3）

幅38cmの大型壺も出土している。高杯は口縁が外反するものと、内湾気味に直立するものの2種あり。後者の口縁外面には凹線状の施紋がみられる。脚付直口坩321の脚内面には鋸歯紋風の稚拙な篦描が施されている。以上、これら遺物の特徴は百・後・Ⅲに比定される。（江見）

土壙32（第130図）

9Z区中央西寄り調査区端から検出された平面ほぼ円形を呈す土壙で、径約120cm、深さ約





第130図　土壙32・出土遺物

25cmを測る。遺物は主に1層から、小礫とともに廃棄された状態で出土している。図示した遺物のほか小型鉢・高杯の破片なども出土している。百・後・Ⅱに比定される。

（江見）

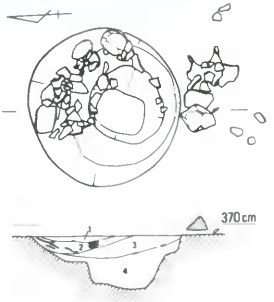
土壙33・土壙34・土壙35・土壙36

比較的規模・形状が似た4基の土壙である。土壙33は竪穴住居1の南側、土壙34はその東に、土壙35は竪穴住居4の北側、土壙36は竪穴住居2の東側に所在する。いずれも径は70cm前後で、深さは30～10cmである。壁面の立ち上がりは強く、底面はほぼ平坦なものと一段下がるものがある。土壙38を除いて埋土中には炭・焼土が含まれており、それに混じって多数の土器片が所在している。土壙35が百・後・Ⅱ期、土壙33、34がⅢ期、土壙36がⅣ期である。

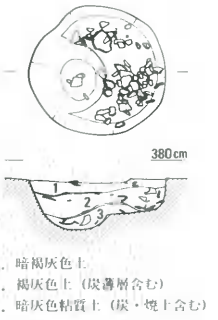
（宇垣）

土壙37（第132図）

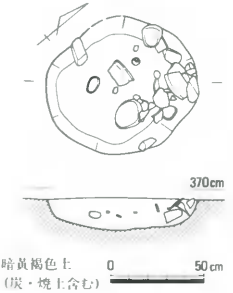
竪穴住居1の東側で検出した円形の土壙で、径約90cm、深さ22cmを測る。土壙内からは壺、長頸壺が口縁を下にして破砕した状態で出土した。出土の2点の土器は胴部径が30cmを越える大形のもので、厚い器壁をもつ。図示した以外の土器も壺や長頸壺で、甕の破片は少ない。ススの吸着や赤変が認められる破片が多く、破砕後に火を受



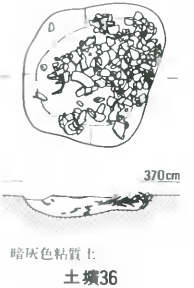
土壙33



土壙34



土壙35



土壙36

第131図　土壙33～36

けているようであるが、土壙埋土中には炭・焼土はほとんど認められず、火を受けたのは別の場所であった可能性も考えられる。遺構の時期は出土土器から百・後・Ⅲと判断できる。

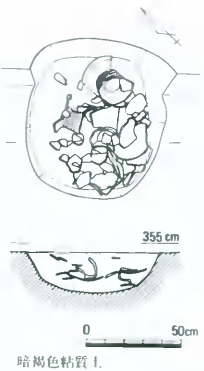
（宇垣）

土壙38（第133図、図版24・71）

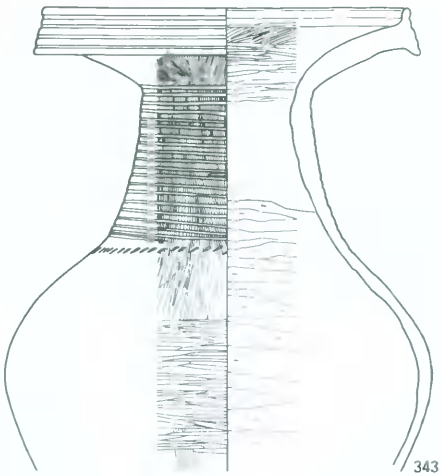
建物２の南東で検出した楕円形の土壙で、長径80cm、深さ32cmを測る。土壙35などと同様に埋土上部に炭を含む暗灰色土が堆積しており、345のほか高杯や甕など多数の土器片が出土した。出土土器は百・後・Ⅲ期である。（宇垣）

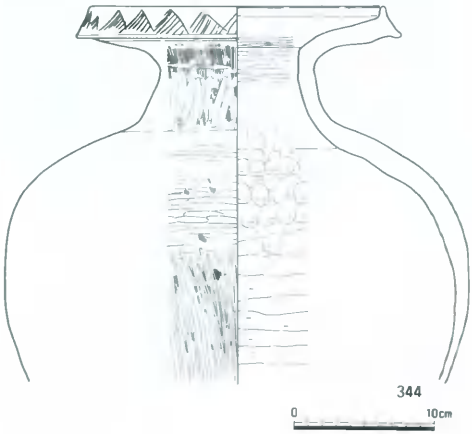
土壙39（第134図、図版68）

10B区で検出された楕円形状の土壙である。規模は最大長88cm、最大幅62cmを測る。土壙の



第132図　土壙37・出土遺物





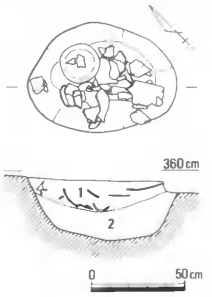
底部はほぼ平坦で、壁は急傾斜で立ち上がる。

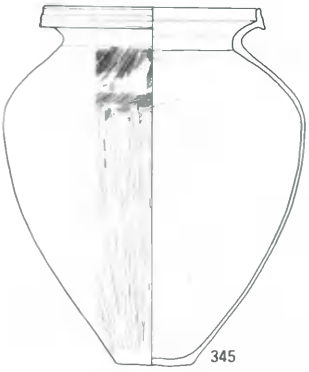
遺物は弥生土器が北東側でまとまって出土した。347は高杯、350は鉢で、それ以外は甕である。甕は口縁部がくの字状に外反したままのもの（351）と、外反した口縁端部をわずかに上方へつまみ上げたもの（346・349）、そして上方へ長く立ち上がるもの（348）とがある。時期は古・後・Ⅳと考えられる。

（平井）

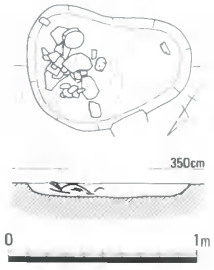
土壙40（第135図）

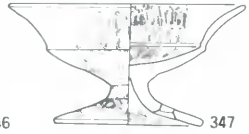
9B区で検出された円形を呈する土壙である。規模は径66cm、深さ32cmを測る。底はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は3層に分れ、2層には土器、3層には焼土塊を多く含む。3層に集中的に認められた焼土塊は、大きいものは拳大前後から小さいものは3cm前後のもので、全体が良く焼けて赤褐色になっている。埋土は極めて細かく、砂粒はほとんど含まない。

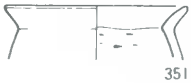




第133図　土壙38・出土遺物







第134図　土壙39・出土遺物

遺物は弥生土器が少量出土した。353は甕、354は高杯の杯部である。時期は百・後・Ⅱと考えられる。（平井）

土壙41（第136図、図版68・88）

10A区で検出された楕円形状の土壙で、北側は井戸10、南側は建物38の柱掘り方によって切られている。規模は幅100cm、深さ20cmを測る。底部はほぼ平坦で、壁は急斜に立上る。埋土中には礫および土器を含んでいた。

遺物は弥生土器が出土した。355～357は甕である。357はくの字状に外反した口縁端部に刻目をめぐらし、胴部外面にはタタキ目が認められる。358と361は鉢である。359は高杯、360は装飾高杯ないし器台の口縁部である。土器は新旧混ざっており、遺構の詳細な時期は不明である。（平井）

土壙42（第137図）

9B区で検出された楕円形状の土壙で、北側は土壙24に切られ、南側は古墳時代の土壙に切られている。規模は現存長84cm、最大幅98cmを測る。深さは10cmと浅く、底は丸みをもち壁は緩やかに立ち上がる。土壙内北側には礫と土器が少量まとまっていた。

遺物は弥生土器の細片がわずかに出土した。土壙の時期は後期と考えられる。（平井）

土壙43（第138図、図版71）

9A区中央東端に位置し、建物18の柱穴を一部切っている。平面不整楕円形を呈し、径90×65cm、深さ35cmを測る。埋土は2層に分かれるが、遺物は1層からいずれも破砕され投棄された状態で出土しいてる。土器の特徴は百・後・Ⅱを示す。（江見）

土壙44（第139図、図版25・69）

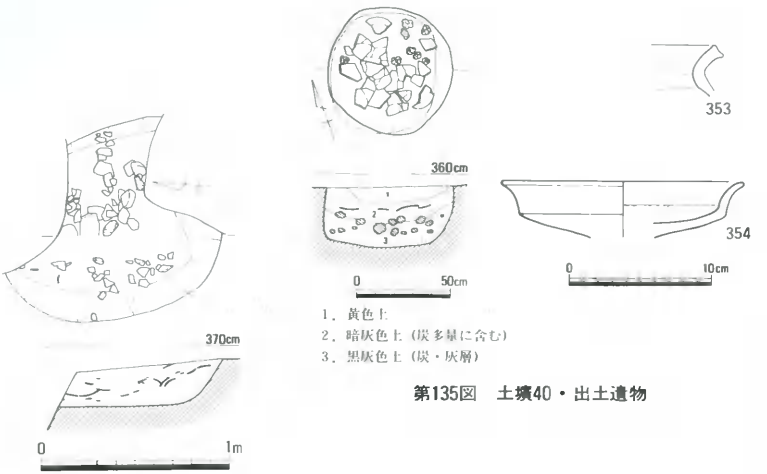
10Z区の中央西寄り、建物24の南東に接して検出された。平面はやや南北方向に幅をもつ不整円形を呈す。径85×75cm、深さ30cmを測る。埋土は4層に分かれ、遺物の多くは3層の炭を除去中より4層上部に拳大の礫とともに破砕された状態で出土した。図示し得た壺369は口縁の一部を欠くもののほぼ完形であった。他に壺3・甕4・高杯1などが出土しており、これら遺物は百・後・Ⅱに比定されるものである。（江見）

土壙45（第140図、図版25）

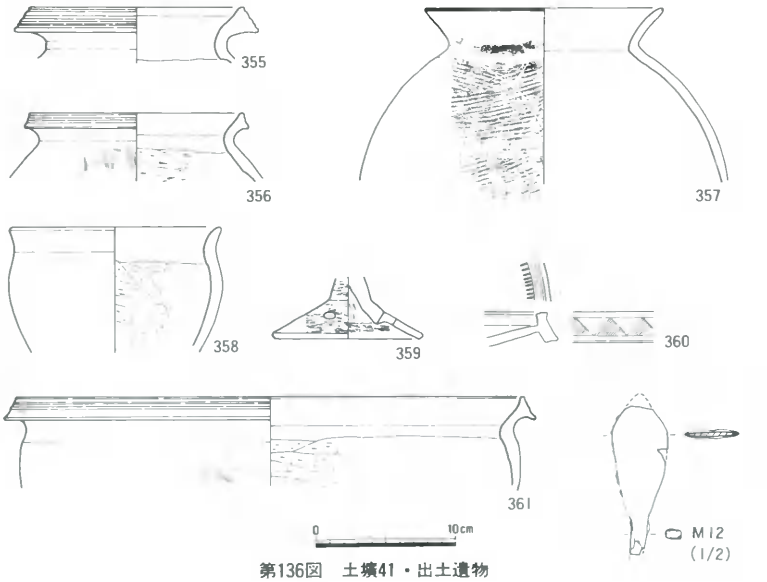
10A区で検出した長径80cmの楕円形の土壙で、深さは32cmである。埋土中に多数の土器片が含まれるが、いずれも小破片である。百・後・Ⅱである。（宇垣）

土壙46（第141～143図、図版70）

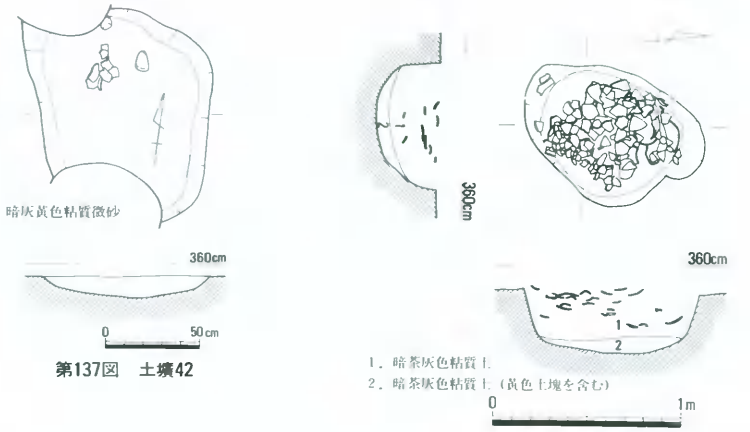
10Z区東寄りに位置し、土壙30を切っている。平面は楕円形を呈し径85×65cm、深さ35cmを測る。土壙は中央に向かって緩く掘り込まれており、底部はやや窪む。土壙内は茶灰褐色粘質土が堆積していたが、上層には焼土および炭が多く含まれていた。遺物は上層から密に重なった状態で出土した。完形復元できたものも多く含むものの、器表面が荒れているものや接合部分の色調差が激しいものが多く、二次的に火を受けたものが大半を占める。長頸壺370・371の頸部はやや外方へ立ち上がり気味の古い様相を残すものである。371は口縁部外面の状態から



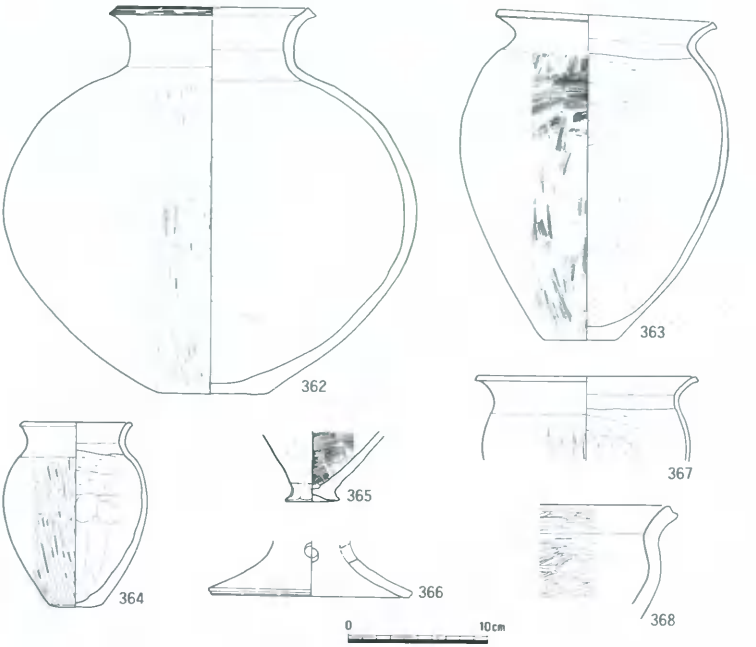
第135図　土壙40・出土遺物



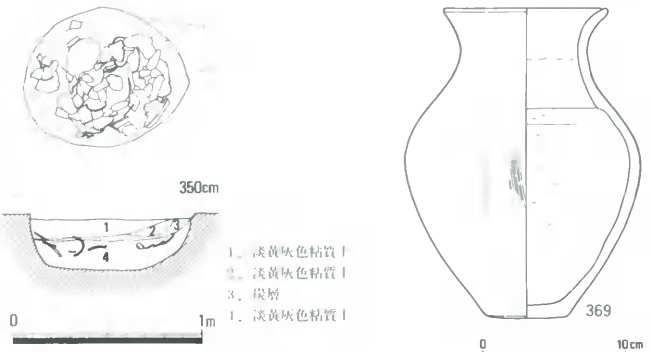
第136図　土壙41・出土遺物



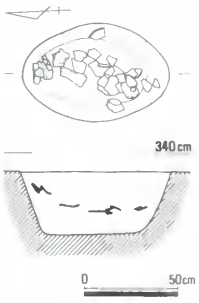
第137図　土壙42



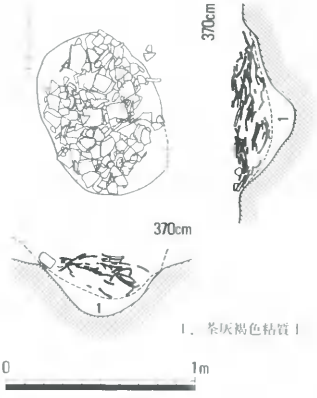
第138図　土壙43・出土遺物



第139図　土壙44・出土遺物



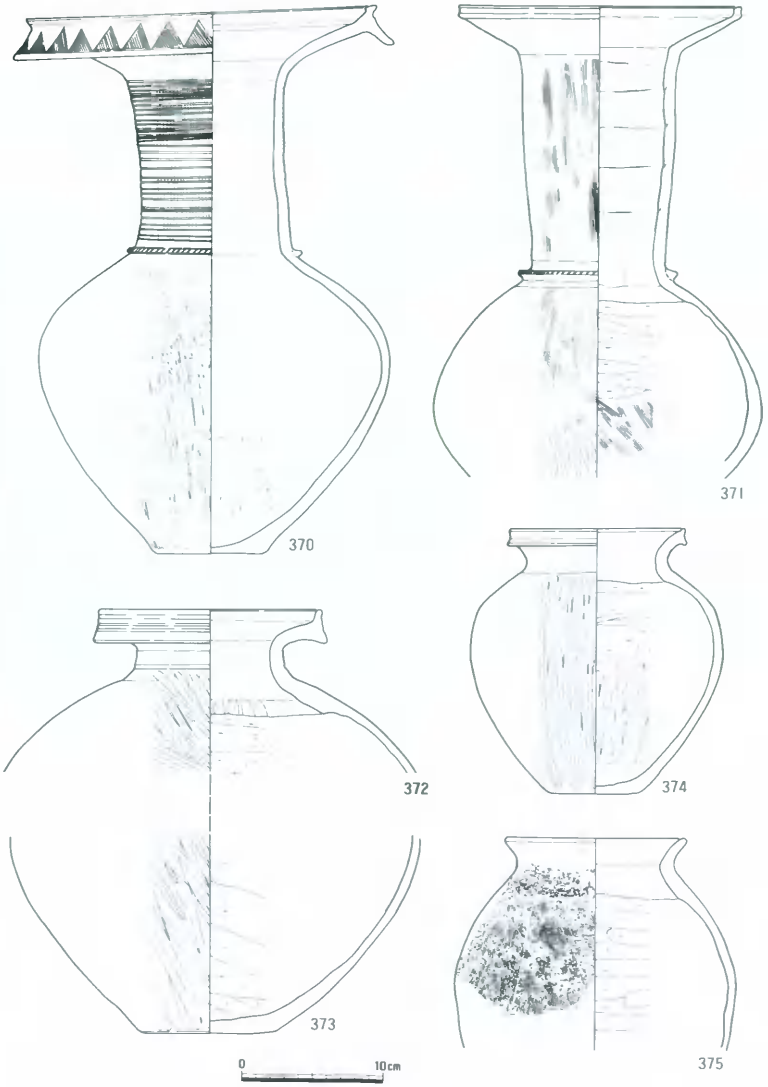
第140図　土壙45



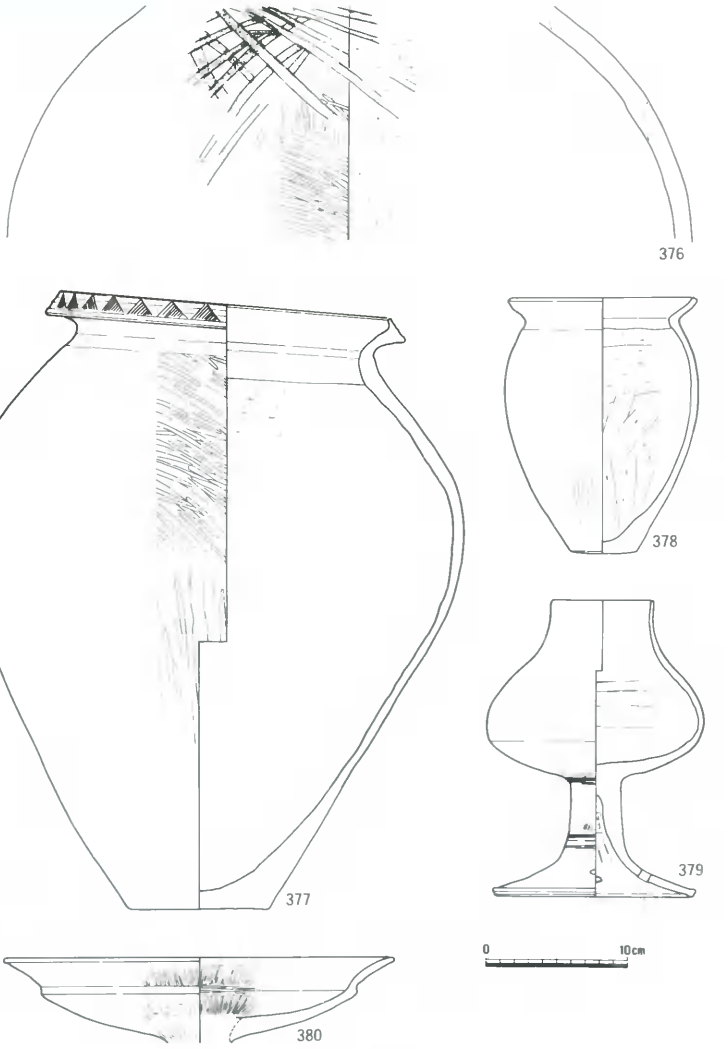
第141図　土壙46

図示したような口縁形態とみなしたか。370と同様な口縁で、下方への拡張部分が完全に剥脱している可能性もある。甕375の胴部上端にジグザグ状の稚拙な篦描きが、上半に篦磨き風の・記号が施されている。大型壺376の外面には籠目が認められ、帯は器表よりもやや暗い色に発色している。大型の甕377は口縁に鋸歯紋が巡らされているもので、下半部には煮炊きによる煤等の付着は認められなかった。以上、土器の特徴は庄・後・Ⅱを示す。（江見）

土壙47・土壙48・土壙49・土壙50・土壙51（第144図、図版25・69）



第142図　土壙46出土遺物（１）

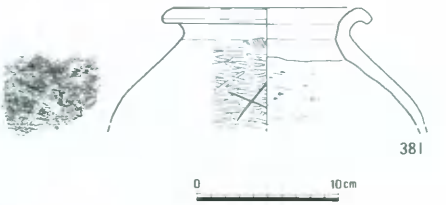


第143図　土壙46出土遺物（２）

1．茶灰色土

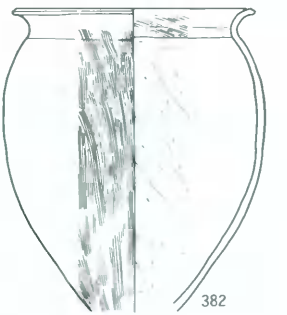
0　1m

土壙47・出土遺物

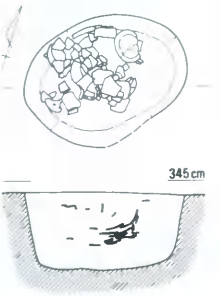


1．黄灰褐色粘質土

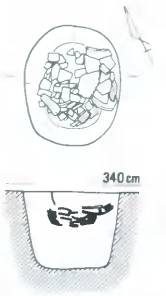
土壙48



土壙49・出土遺物

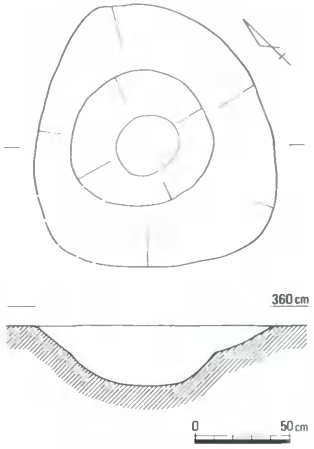


土壙50

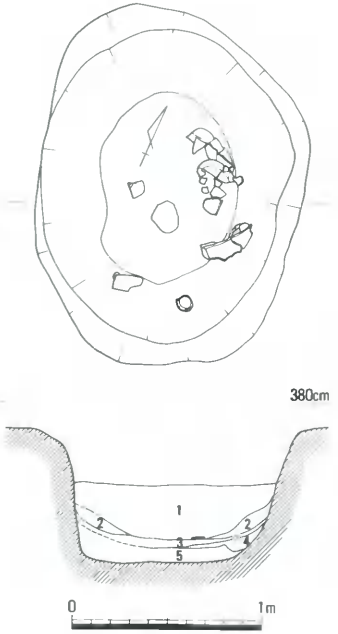


土壙51

第144図　土壙47～51



第145図　土壙52



1．淡茶褐色砂質土（洪水砂）
2．暗灰色砂質土（わずかに炭を含む）
3．黒色炭層
4．暗灰色粘質土（黄色粘質土を含む）
5．淡黄色粘質土（暗灰色粘質土を含む）

第146図　土壙53

土壙47～51は円形ないし楕円形の平面形で、中央部に土器片が密集して入るものである。土壙の形状からみて柱穴であり、柱材の跡に土器がはいったとみられ、同様な状態を示すものに建物２の柱穴がある。土壙底よりも若干高い位置に土器が集中していることが多く、柱を抜き取った跡であるのか柱材が腐朽した跡であるのか判断しがたいが、破片の密集状態からみて、意図的に土器片が入れられた可能性が強い。

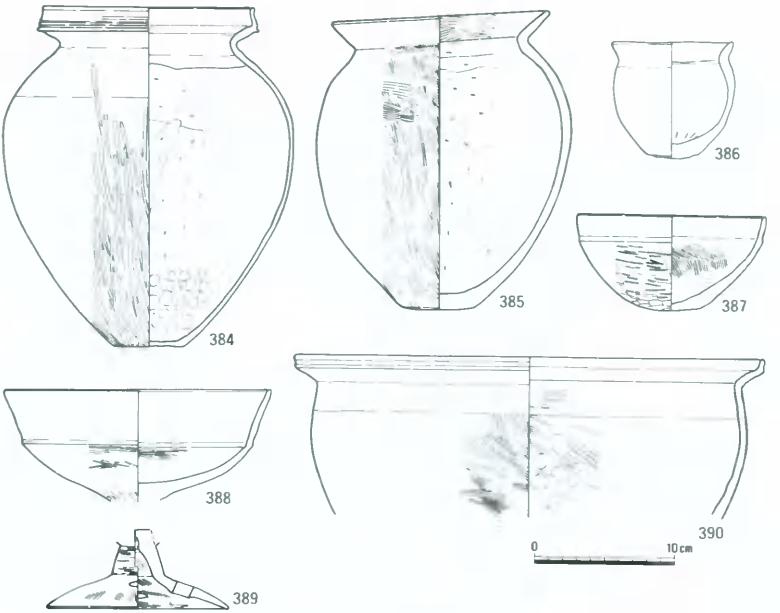
土壙47出土の壺381は口縁を強く外反させるもので、肩部には×字形の文様が施されている。

土壙50はやや大きく長径87cm、深さは42cmである。土器量は多く、甕、長頸壺、高杯などからなり、完形に接合復原できるものを含んでいる。百・後・Ⅲである。

また、土壙51は土壙49の東側に位置する径62cmの土壙で、中央部に多数の土器片が入っている。土器は長頸壺、甕、高杯などからなり、そのうち甕は使用によって器表がかなり剥落したものを含んでいる。土壙49と同じ百・後・Ⅲであり、これらによって構成される建物を検討したか、それを認定するに至らなかった。

土壙47は９Ｃ区北側、土壙48、49は10Ｚ区東縁部、土壙50、51は11Ａ区に所在する。

（宇垣）



第147図　土壙53出土遺物

土壙52（第145図）

9A区の中央付近で検出した径135cm、深さ31cmの土壙で、平面の大きさは井戸に近いが断面は皿状をなす。遺物は出土していないが、埋土はすべて褐色砂質土・洪水堆積層であり、後期末の洪水によって埋没した遺構と推定される。（宇垣）

土壙53（第146・147図、図版26・70）

10Z区中央南寄りに位置し、上部を洪水砂で覆われた土壙である。平面不整楕円形を呈し、径190×140cm、深さ70cmを測る。壁は急な角度で底部に達しているが、検出面から10cm前後での肩部では洪水で崩されたためか傾斜は緩い。底部は平坦である。遺物は洪水層下面から高杯および鉢が、炭層から甕が出土している。甕はいずれも破損後の二次焼成を受けており、唯一完形品の小型鉢386においても検出時に2カ所に分かれて出土していることなどから、当土壙はゴミ捨て穴として機能したものと考えられるとともに、その機能を十分に果たさないうちに洪水によって埋没したものと推定される。時期は百・後・Ⅳの新相である。（江見）

土壙54（第148図）

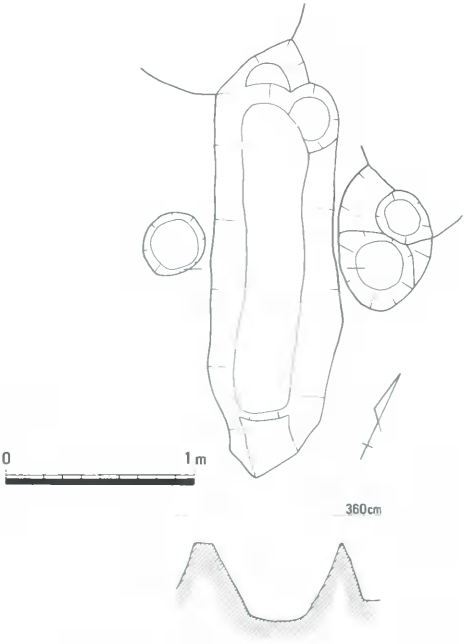
9B区で検出された長楕円形状を呈する土壙で、南東端は調査区外となり、北西端は他の遺構に切られている。規模は長さ2.3m、幅70cm、深さ40cmを測る。土壙底部はほぼ平坦で、壁は急傾斜で立ち上がるが、両端は途中に平坦面が形成される。埋土は茶灰褐色土である。

遺物は弥生土器の細片がわずかに出土した。土壙の時期は後期と考えられる。（平井）

土壙55（第149、150図、図版70）

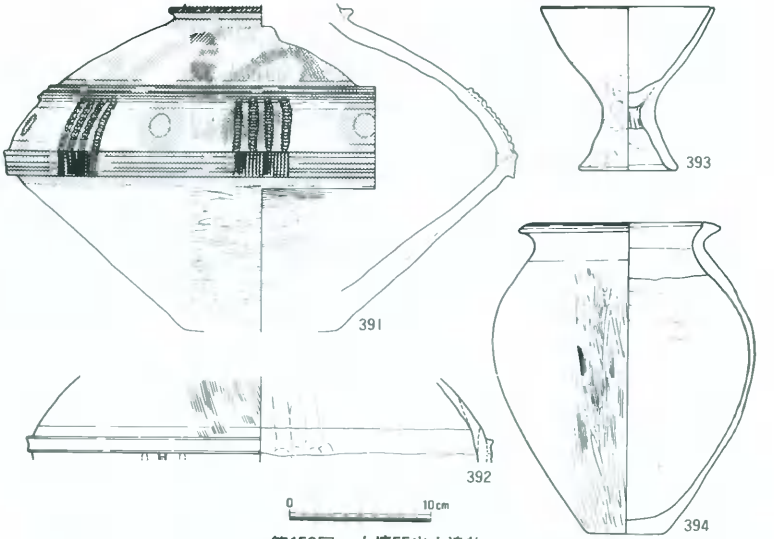
竪穴住居9の北側に位置する長さ170cm、幅46cm、深さ5cmの浅い土壙で、竪穴住居9の外周溝を切って掘り込まれている。軸線をほぼ南北にとり、埋土は灰黄褐色土である。

土壙の中央付近からは甕394がほぼ完形の状態で出土し、壺391は394の底部の上付近に破片が集積した状態で出土した。壺391は頸部以上を欠損するが、算盤玉形の胴部をもつ大形の壺で、胴部最大径部分と肩部に幅の広い突帯をめぐらせ、その間には4本1単位の縦方向の細い突帯と、すべて剝脱しているが円形の浮文が配されている。縦の突帯には刻み目が、その下側



第148図　土壙54

第149図　土壙55



第150図　土壙55出土遺物

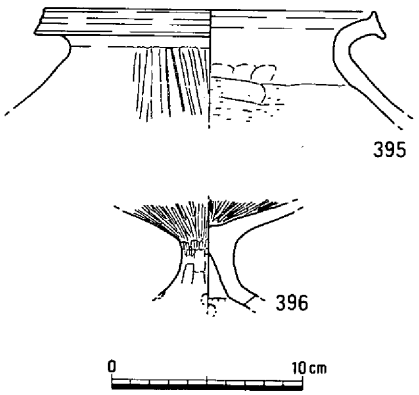
の突帯上には板状工具による刺突文が施されている。また、頸部下端にも刻み目をもつ突帯がめぐっている。突帯すべてと円形浮文には赤色顔料が塗られ、さらに肩部にも波状の文様が描かれている。胴部下半の外面調整はケズリの後ヘラミガキである。また、胴部下半の成形に際しては外側に粘土を貼り加えているようである。壺392は小片1点が土壙中から出土し、他は包含層出土である。391に似た器形、大きさで、2本の突帯がめぐると思われるが突帯の位置が391よりも低くなり、器形も丸味をもつようである。縦の小突帯は3本が認められるが、両側が欠損しているため1単位の数は不明である。赤色塗彩は認められないが、本来塗られていなかったのかどうか不明である。伴出の甕394はよく使用されているのか表面が摩滅気味である。外面調整はタテハケで部分的にヘラミガキが施される。出土土器から、この土壙は百・後・Ⅱの古い段階に位置づけられる。土壙の形状からみて土壙墓の可能性も考えられるが、土器が土壙の中央にまとまって入っており、祭祀に用いた土器を埋納したとみてもよいのではないだろうか。壺391、392はのちに吉備で盛行する特殊壺を思わせる器形・大きさであり、特殊壺の祖形となる器種と考えられ、これに類似するものは兵庫県赤穂市原田中遺跡1号墓から出土している。

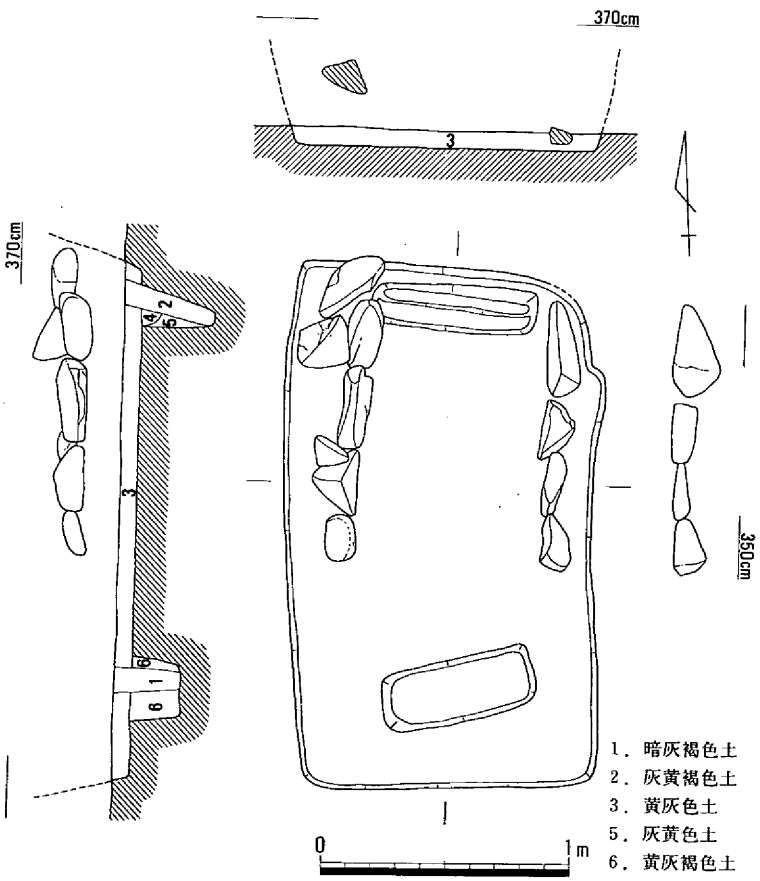
〈宇垣〉

(6) 土壙墓

土壙墓１（第151図、図版26）

９Ｂ区で検出された長方形をした木棺墓である。周辺には土器棺が集中している。墓壙の規模は長さ208cm、幅124cmを測る。深さは検出面から10cmほどであるが、列石の状況から考えても50cm以上はあったものと推定される。墓壙内には北半部のみであるが、南北方向に列石が２列置かれていた。この列石はおそらく木棺の側板を押えていたものと考えられる。また南北両





第151図　土壙墓１・出土遺物

端近くには長方形の掘り込みが認められ、土層断面からこの中に木棺の小口板が差し込まれていたことが確認された。これらの痕跡から木棺の規模を推定すると、長さ150cm前後、幅60cm前後と思われる。

遺物は弥生土器が少量出土しているが、この木棺墓に供献されたものではないと考えられる。395は甕、396は高杯である。土器の時期は百・後・Ⅲと考えられる。　（平井）

(7)　土器棺

土器棺墓は9基を検出した。土器棺墓1、土器棺墓2～5、土器棺墓6～9の3群からなっており、それぞれの群ごとに密集して所在する。各群間の距離は約20mである。本調査区外では『原尾島遺跡1』左岸用水調査区で3基が1列に並ぶ群が検出されている。

口縁部を欠くものが多いがすべて百・後・Ⅱとみられ、他の時期の土器棺墓は認められなかった。

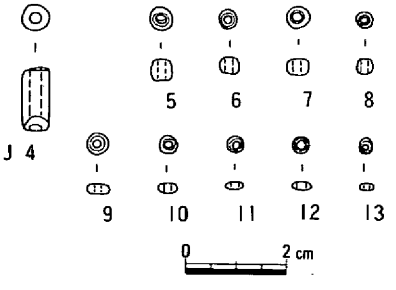
土器棺墓1（第153図、図版27・72）

7C区の東隅で検出した。他の土器棺墓にくらべて掘り方が明瞭で、検出面から底までの深さは50cmを測る。埋土の上層には土器破片が多数含まれていた。棺体には完形の壺が、蓋には鉢を打ち割って、底部から胴部にかけての部分を長径35cmの楕円に近い形に整えたものが用いられていた。壺は胴部下半を下にして置かれており、胴部の下端には径6㎜の焼成後の穿孔が認められる。棺内の土は精査したが副葬品等は認められなかった。また、蓋内面の一部にのみ赤色顔料の塗布が認められた。この土器棺墓の時期は百・後・Ⅱである。　（宇垣）

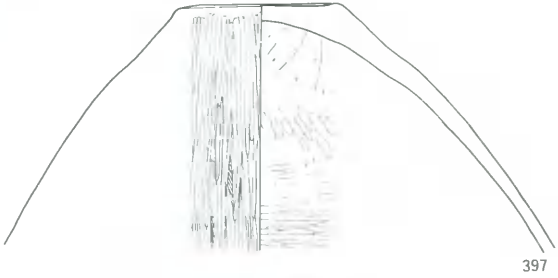
土器棺墓2（第152・154・155図、図版27・28・73）

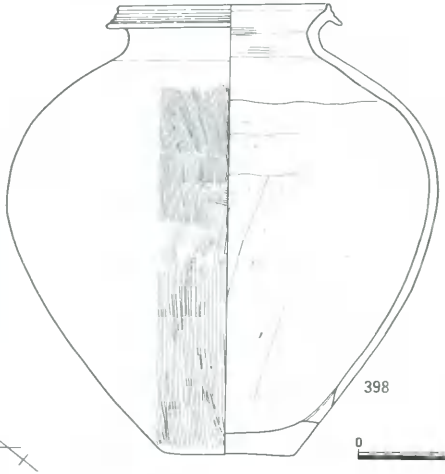
8C区のほぼ中央で土器棺墓3基とその可能性のあるもの1基を検出した。これらは長さ3mの直線をなしており、同時に埋葬がなされたのでないとすれば、墓標ないし小規模な盛土があったと考えられる。

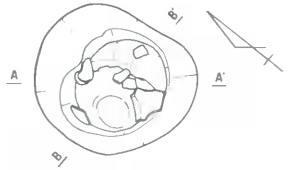
土器棺墓2はこれらのうち南端に位置するものである。掘り方は検出面で径63cm、深さ23cmを測る。棺体には頸部以上を欠き取った壺を用い、その上に大形の壺の胴部を20～30cmの大きさに割ったものを4～5重に重ねて蓋としている。棺体の壺の底部には径約3cmの穿孔がなされている。土器棺に副葬品が伴う例はまれであるが、この棺では棺内からはガラス小玉9点のほか、白色に風化したガラス製の管玉1点が出土した。該期の成人埋葬の副葬品に対しても遜色ないものである。

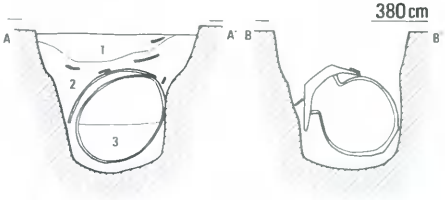


第152図　土器棺墓2副葬品



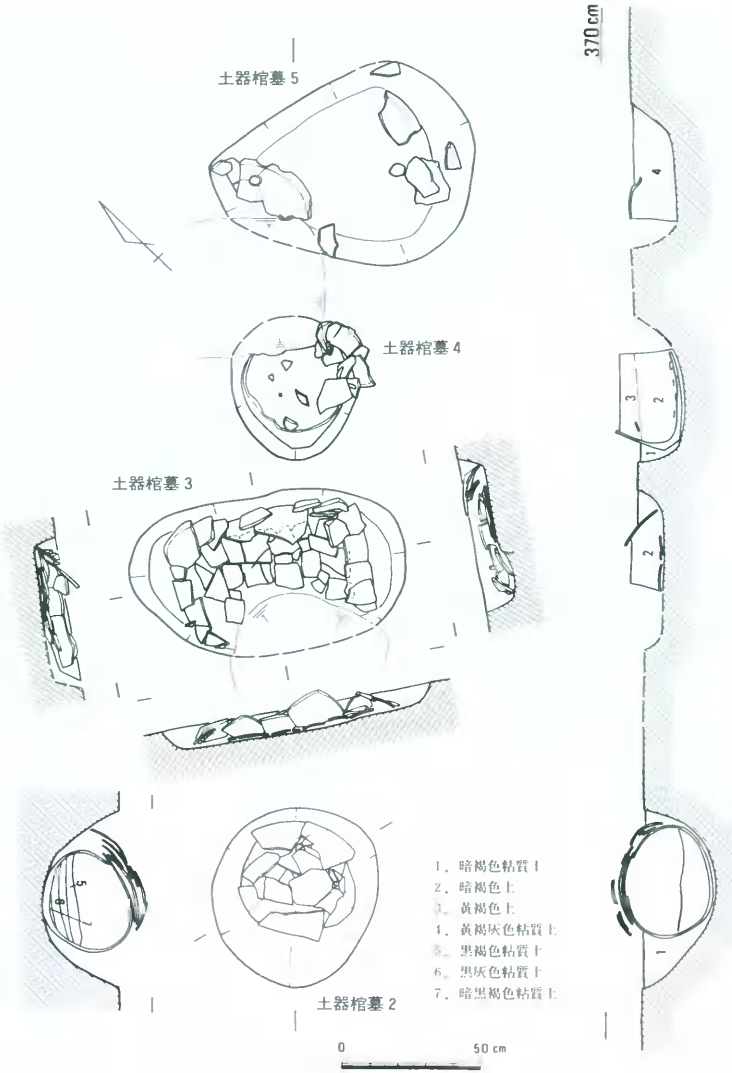




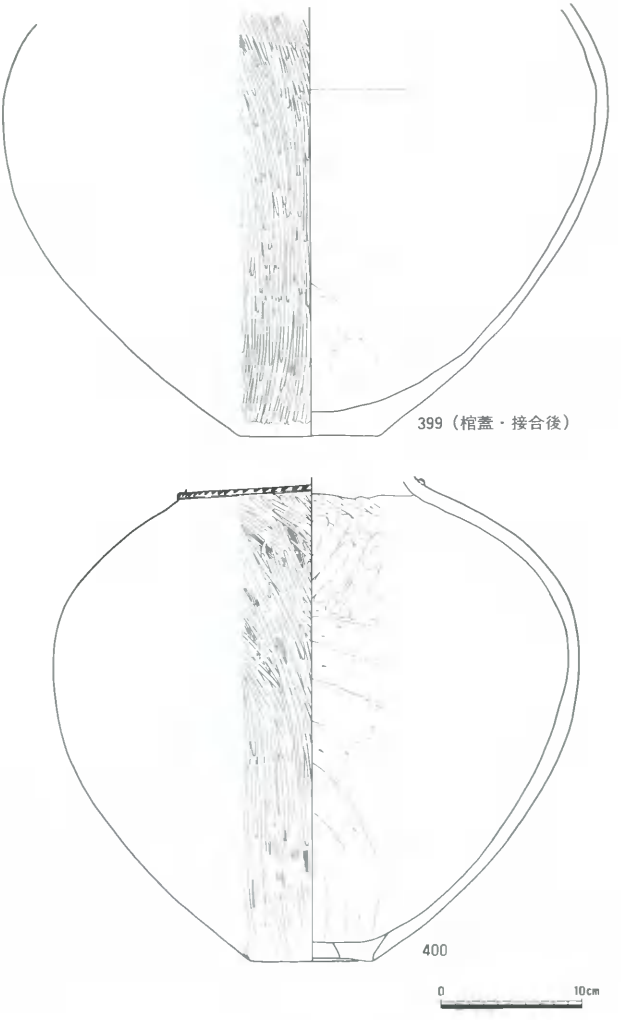


1．灰色微砂質土（黄色土塊含む）
2．暗灰褐色土
3．暗灰色粘土

第153図　土器棺墓１検出状態および棺



第154図　土器棺墓２～５検出状態



第155図　土器棺２

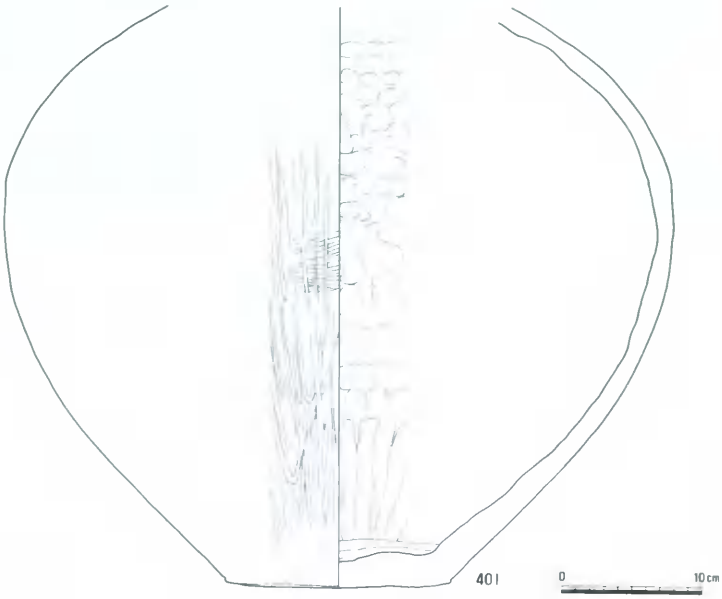
口縁部を欠くものの頸部の突帯等からみて、時期は百・後・Ⅱと思われる。（宇垣）

土器棺墓3（第154・156図、図版28・72）

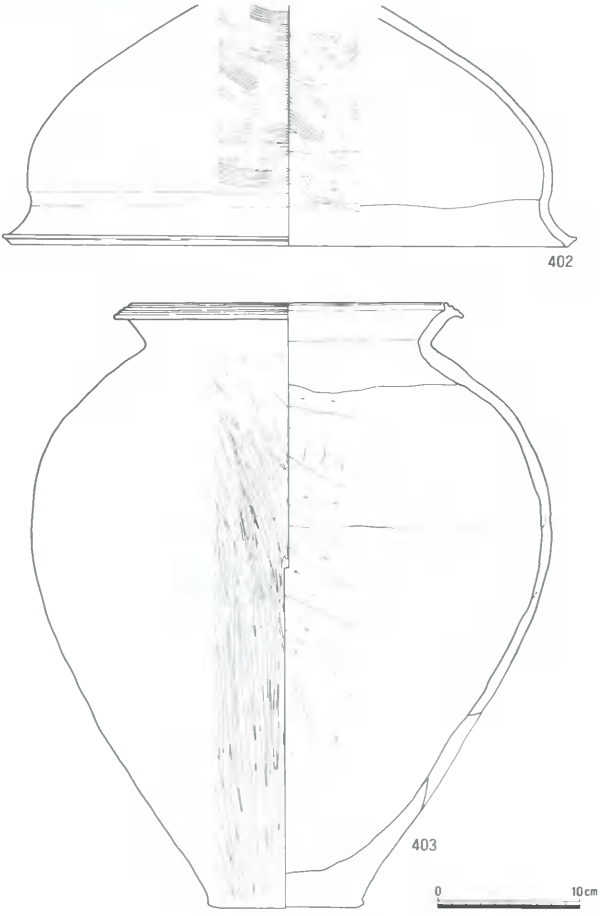
胴部最大径47.6cmの大形の壺を割って長方形の破片を作り、それを配して棺底・側壁を形成する特殊な埋葬である。南側壁と棺底の一部は百・後・Ⅲの建物の柱穴によって掘削されている。土器片の長さは8～20cmと一定しないが、幅は8cm前後でほぼ共通しており、製作時の粘土帯の積み上げに沿って割っているようである。棺底の土器敷き範囲は53×32cm、壁面の内法は66×42cmで、棺底と壁面の間には6cm前後の隙間がある。壁面は30～45度に内傾しているが、土圧によるものと思われる。棺内には土器片等が落ち込んでおらず、天井は木材等の有機物であった可能性が強い。棺の時期は確定できないが、百・後・Ⅱないし Ⅲと思われる。第156図には破片を接合したものを示している。（宇垣）

土器棺墓4（第154・157図、図版28・72）

土器棺墓3の北側に所在する。上部が削平されており棺体上部と蓋の大部分が失われ、さらに古墳時代の柱穴によって破損している。蓋には鉢が、棺体には甕が用いられている。甕の胴



第156図　土器棺3

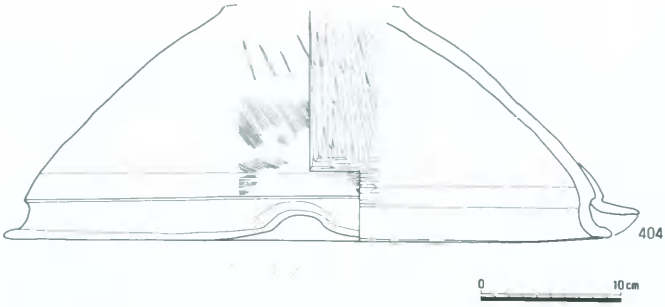


第157図　土器棺４

下部には長径５㎝の穿孔がなされているが、土器棺１、２の穿孔がいずれも外側からであるのに対し、この棺では内側からなされている　棺の時期は百・後・Ⅱである。（宇垣）

土器棺墓５（第154・158図、図版73）

土器棺墓４の北側で検出した不整楕円形の土壙である。土壙内に１個体分の鉢が散乱した状



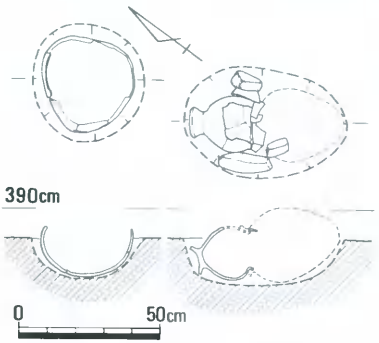
第158図　土器棺5

態であり、確実に土器棺と判断できる遺構ではないが、土器棺が攪乱されたものである可能性が考えられたため、一応ここに掲載した。鉢は片口をもつ大形のもので、個体の半分弱が出土した。口縁に近接した部分に径3㎝の穿孔が認められる。遺構の時期は他の土器棺墓と同じ百・後・Ⅱである。（宇垣）

土器棺墓6・7（第159～161図、図版74・75）

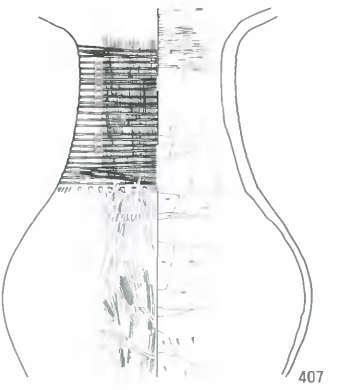
8・9B区に近接して検出されたデポ的な土器であるが、出土状態から土器棺の可能性を考えた。どちらも標高380㎝面での遺構検出中に確認されたが、掘り方は不明であった。

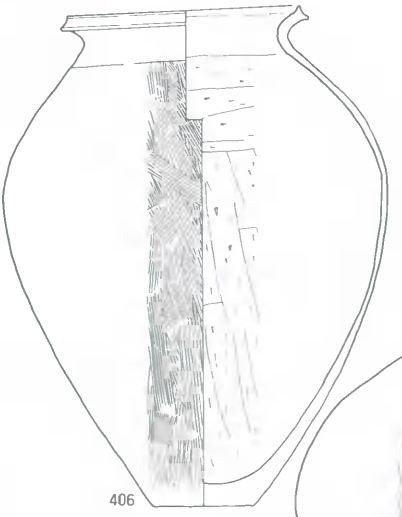
土器棺6は台付鉢と比較的大型の甕を、口縁部を合わせ口にして使用していたとみられるが、甕は上面での遺構検出中に取り上げてしまっており、出土位置と傾きなどから第159図の状態を想定した。台付鉢405は胴部上半から口縁部にかけての約3分の1を欠損しているが、口縁部を覆う位置から407の長頸壺片が出土している。長頸壺は頸部の約3分の1の破片で、蓋の一部の役目をしていた可能性がある。甕406は検出時の上部にあたる胴部上半を一部欠損しているが、後世の削平によるものと思われる。



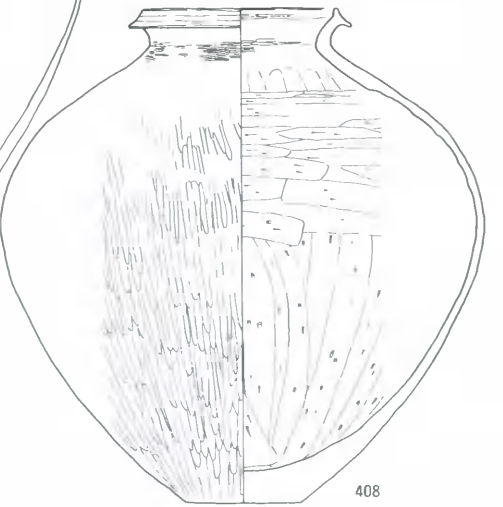
第159図　土器棺墓6（右）・7（左）検出状態

土器棺墓7は身部の壺のみ出土している。壺は口縁部をやや上部にむけた横倒しの状態で据えられており、肩部から胴部にかけての、口縁部を含む約3分の1を削平により欠損した状態で見つかっている。蓋部は確認されていない。壺は口縁部の破片





第160図　土器棺６



第161図　土器棺７

が内部に落ち込んだ状態で出土していたため、第161図のように復元可能であった。ただ、完形のままでは頸部が狭いため、棺としては口縁部あるいは肩の一部を打ち欠いて使用したと思われるが、欠損部分が多く不明である。

土器の形態的特徴から、百・後・Ⅱの時期が与えられる。（柳瀬）

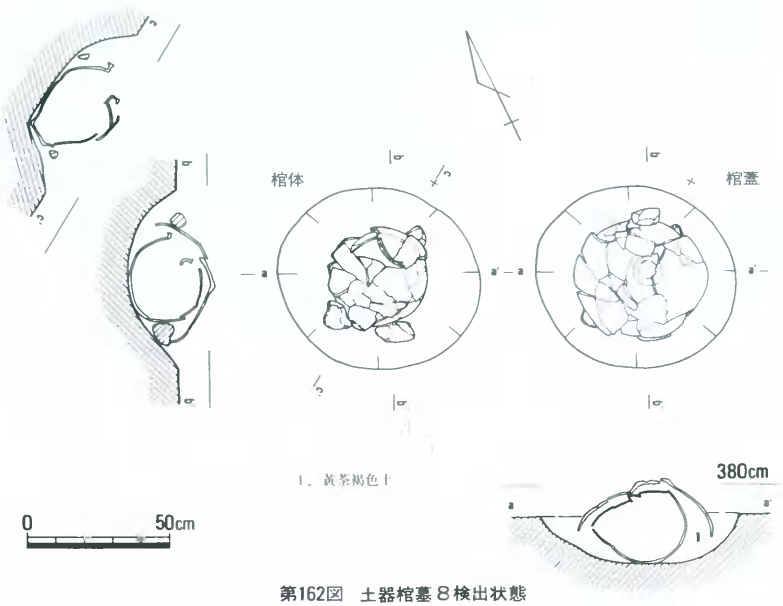
土器棺墓8（第162・163図、図版29・74）

9B区の土器棺墓6の南約1.5mに位置する、鉢蓋・甕身セットの土器棺墓である。棺の掘り方は径約70cmの円形を呈し、検出面での深さ約20cmを測るが、土器の出土状態からして径約80cm、深さ50cm以上はあったと思われる。

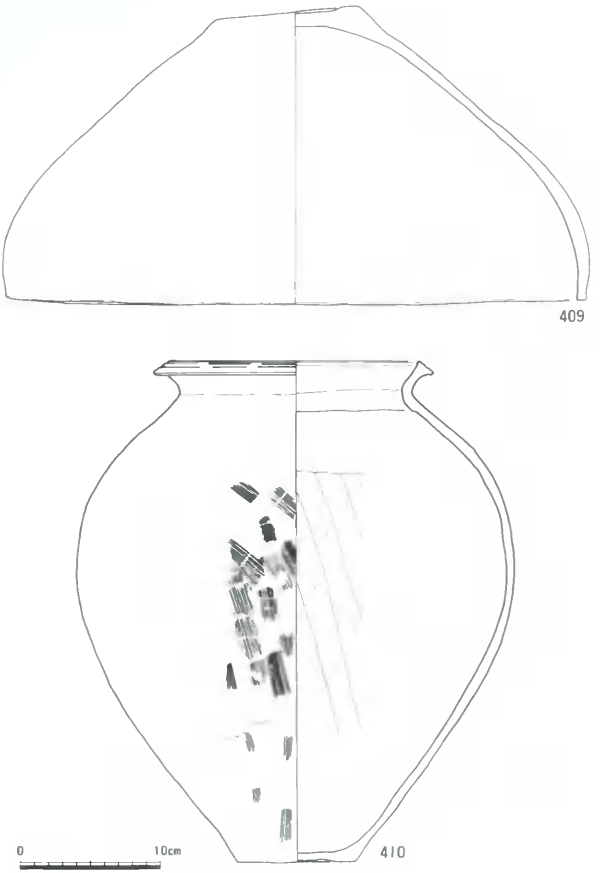
甕は掘り方の中央部に横倒しで据え置かれ、安定させるためか口縁部と底部の両脇の3箇所に握り拳大の石が配されていた。鉢は、口縁部をほぼ水平にして、甕全体を覆うように検出された。甕の中には掘り方内と同じ黄茶灰色の粘質土が流入していたが、遺物等は見つかっていない。

鉢・甕ともに欠損部はなく、甕にも穿孔はない。また、両者ともに器表面が剥離等で荒れており、使用頻度の高いものが再利用されたらしい。

鉢の口縁部は外反させることなく端面を丸くおさめ、形態的な面での時期決定を困難にして



第162図　土器棺墓8検出状態



第163図　土器棺８

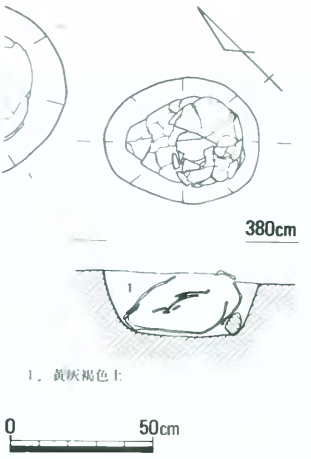
いるが、甕410のとくに口縁部の形態的特徴は、百・後・Ⅱの比較的古い時期に比定される。

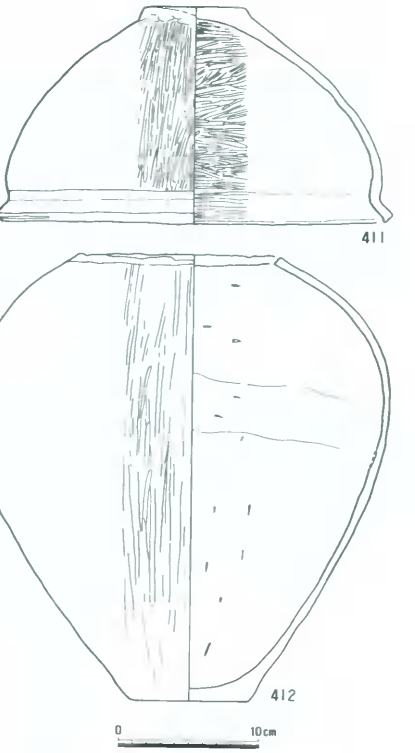
（柳瀬）

土器棺墓９（第164図、図版29・75）

９Ｂ区の土器棺墓８の南東に隣接して検出された、鉢蓋・壺身セットの土器棺墓である。棺の掘り方は長径約55cm、短径約45cmの楕円形を呈し、検出面での深さは約20cmを測る。

身の壺は、頸部付根から上を打ち欠いた胴部を棺に使用し、掘り方の中央部に口部をやや上



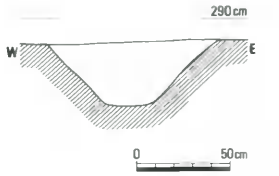


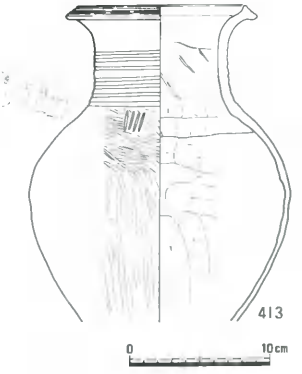
第164図　土器棺墓９検出状態および棺

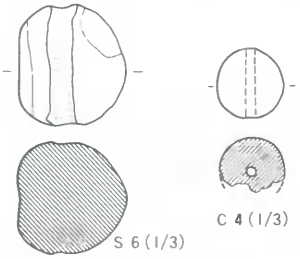
部に向けて横たえ、蓋の鉢は斜めに伏せて壺の口部を覆っていた。また、壺の肩部下の位置には、土器棺を支えるように掘り方の底に接して握り拳大の石が１個置かれていた。出土の状態は、164図のように蓋・身ともに上圧のためか割れてわずかに潰れていたが、いずれも完形に復元され、穿孔などは認められていない。

鉢は中型のもので、胴部の内外面ともに比較的雑な篦ミガキで調整されていて、器表面が荒れているところから使用頻度が高かったことを窺わせる。壺は体形から長頸壺と思われ、胴部の外面は鉢とほぼ同様で、器表面が荒れている。打ち欠かれた頸部から口縁部にかけての破片等は、この墓壙内には確認されていない。

時期は、鉢・壺の形態的特徴から百・後・Ⅱと思われる。　（柳瀬）







第165図　溝７・出土遺物

第166図　溝８

(8)　溝

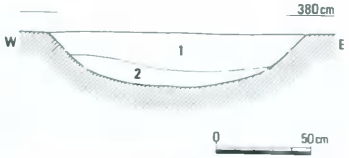
検出した28本の溝は、微高地西部および西低位部を南北に流れる比較的大形のものと、微高地上の小規模で方向の不規則なものとに区分できる。住居をとりまく溝・住居外周溝については竪穴住居の項で取り扱った。

溝７（第165図、図版29）

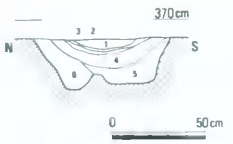
６ＣＤ区の南東部を微高地の縁辺に沿って北東から南西へ流れる溝で、後期水田層下で検出した。上面幅100cm、深さ70cmを測り、断面は逆台形をなす。溝底の高さや断面形からみて新田樋門調査区溝８と接続する可能性が考えられる。堆積土は茶褐色粘質土である。出土遺物のうち、壺413は肩部に４本の沈線を平行に配した記号文が描かれている。石錘６は縄掛け部を敲打によって作り出した石錘で298ｇ、４は球形の土錘で約４割が欠損した状態で34ｇを測る。他に図示できていないが、出土土器は百・後・ⅠからⅡの古い段階であり、この溝はその時期に機能したものと思われる。この溝が微高地の傾斜変換部に開掘されたものであるとするならば、溝の埋没後、後期末までの間に水田が東側に３ｍ広げられたことになる。（宇垣）

溝８（第166図）

７Ｃから８Ｄ区にかけて南流する溝である。上面幅70cm、深さ20cmを測り、断面は低い逆台形を呈する。堆積土は上層が黄灰褐色粘質土、下層が暗灰褐色粘質土である。土器がほとんど出土していないため時期を判断することができないが、土壙・柱穴など他の遺構に切られ、逆に切る例が見られないことからみて、後期のなかでも古い段階、場合によっては中期にさかのぼるものと考えられる。上流側は溝



第167図　溝9



1．茶褐色粘質土　4．淡茶褐色粘質土
2．暗灰色粘質土　5．暗灰色粘質土
3．暗灰色粘質土　6．淡灰色粘質土

第168図　溝14

底の高さ等から新田樋門調査区溝7に接続すると思われるが、下流側の中須賀調査区調査区では多数の溝が交差しているため接続関係は確実でなく、あえて推定すれば溝12に続くかと思われる。（宇垣）

溝9（第167図）

溝8と溝13の間で検出した溝で、流走方向は同じである。調査区壁で幅134cm、深さ28cmのU形の断面をボすが、平面での検出は底近くまで掘り下げて後に可能であった。この付近の溝としては一番浅く、溝底は3.52mである。遺物がほとんど出土していないが、他の遺構との切り合いからみて、溝8と同様に後期前半ないし中期に位置づけられる可能性が強い。南端は竪穴住居25に切断されている。（宇垣）

溝10・溝11・溝12

溝8と溝9の間で検出した小規模な溝である。溝10は長さ150cm、幅25cm、深さ12cmの小規模なもので東西方向をとる。溝11は長さ400cm、幅30cm、深さ5cmの浅い溝で溝9によって中央を切断され、南東端は竪穴住居25によって切られている。溝12は弧を描く小規模な溝で長さ170cm、幅15cm、深さ数cmで、竪穴住居の壁溝の可能性を考えたが住居を想定することはできなかった。いずれからも土器が出土していないため時期は判断しがたい。（宇垣）

溝13

溝3に重複し同方向に流れる溝で、上幅180cm、深さ40cmを測る。この部分には先行して溝3、5、6が掘削されており、長期間にわたって流路が固定されていたようである。出土遺物が少量であるため時期を決しがたいが、後期前半ごろと思われ、中須賀調査区溝1に続くようである。（宇垣）

溝14（第168図）

溝13の東側で検出した南東－北西方向の溝で、上幅65cm、深さ12cmを測る。百・後・Ⅱ期の土器が出土しており、あるいは溝13から分岐する溝かもしれない。（宇垣）

溝15

竪穴住居２の北西で検出した溝で、柱穴や土壙に切られながら竪穴住居４の北側付近まで続いている。幅20cm、深さ４cmを測る。遺物が出土していないため時期は不明である。（宇垣）

溝16・溝17

竪穴住居１の東側で検出した２本の細い溝である。溝16の東端を溝17が切っている。規模はほぼ同じで幅18cm、深さ約７cmを測る。遺物は伴っていない。（宇垣）

溝18

９Ｂ区で検出された北西から南東方向へ流走する溝である。南東側は調査区外へ延びるが、北西へは約２ｍで途切れる。規模は幅15cmを測る。埋土は灰茶褐色土である。

遺物は弥生土器の細片がわずかに出土した。溝の時期は後期と考えられる。（平井）

溝19（第169図）

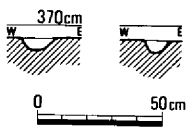
10Ａ・Ｂ区で検出された溝で、北東から南西方向に流走するが、長さ８ｍほどで途切れる。規模は幅15cm前後、深さ５cmを測る。

遺物は弥生土器の細片がわずかに出土した。溝の時期は後期と考えられる。（平井）

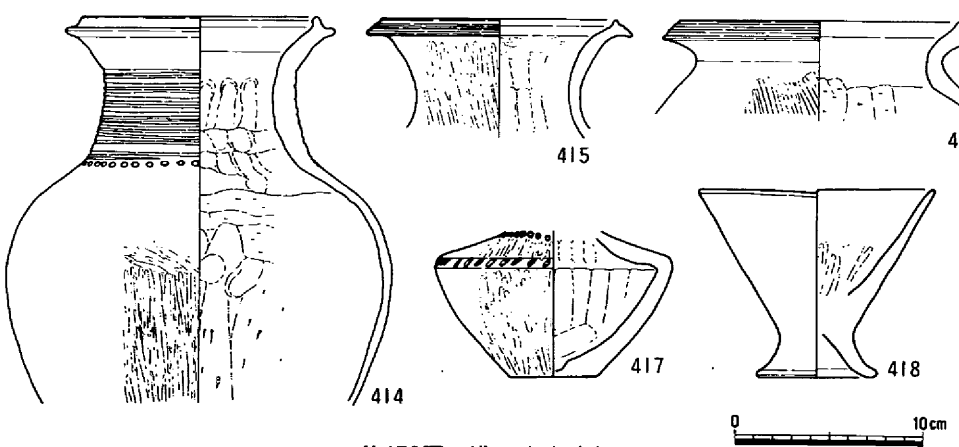
溝20（第170図、図版75）

10Ｂ区で検出された溝で、ほぼ東西方向に流走する。規模は長さ4.5m、幅20～25cm、深さ15cmを測る。

遺物は弥生土器が出土した。414・415・417は壺である。417は胴部から頸部へ移行する場所に円形刺突をめぐらし、さらに肩部にも列点文を施す。416は甕、418は台付鉢である。時期は百・後・Ⅱと考えられる。（平井）



第169図　溝19



第170図　溝20出土遺物

溝21

9A区西側で検出した溝で、3本が斜めに交差している。いずれも深さは5cm内外で、幅は15～35cmである。竪穴住居6の埋没後に掘削されており、百・古・Ⅰの土器溜まりによって一部削平されている。（宇垣）

溝22・溝23

溝21の南東に所在するY字形の溝・溝22と、それを切る弧状の溝・溝23である。溝22は幅25cm、深さ3cmの浅い溝である。一方の溝23は幅30cm、深さ15cmの溝で、竪穴住居の外周をめぐる溝である可能性も考えられる。埋土は両方とも茶灰色粘質土で炭を含んでいる。（宇垣）

溝24・溝25

10A区で検出された溝である。溝25は北東から南西方向に流走する溝で、規模は長さ1.5m、幅25～30cm、深さ3cmを測る。埋土は暗茶色土である。

溝26はほぼ東西方向に流走する溝で、西は調査区外へ、東は土壙に切られている。規模は幅25cm、深さ5cmを測る。埋土は暗茶色土である。

遺物は溝25・26ともに出土していないが、溝の時期は検出面および埋土から後期と考えられる。（平井）

溝26（第171図）

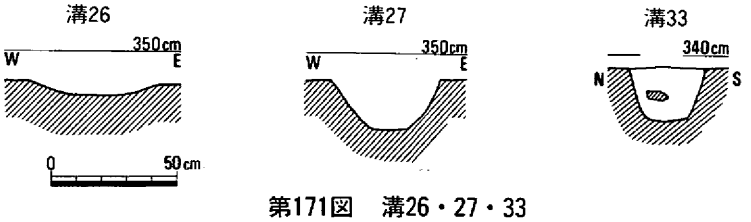
10A～Z区に位置する南北方向の溝で、溝27を切っている。幅約50cm、深さ約5cmの浅い溝で、約9mにわたって検出された。その方位から西に検出された建物19・20との関連を窺わせる。遺物は後期土器細片が出土している。（江見）

溝27（第171図）

10Z区に位置する南北から南西方向に弧状を呈す溝で、一部土壙27に切られている。幅約45cm、深さ約20cmを測る。断面はU字形を呈し、底のレベルは北に向かって僅かに下がっており、その差は約10cmを測る。溝には炭・焼土混じりの茶灰褐色粘質土が堆積しており、遺物は甕・鉢・高杯など、いずれも破片が出土している。時期は百・後・Ⅱに比定される。（江見）

溝28～30

9Z区中央西寄りに位置し、溝30は竪穴住居7の住居外周溝に切られている。いずれも東西



第171図　溝26・27・33

方向に延びる幅約15cm、深さ約３cmの小規模なもので、淡褐色粘質土が堆積していた。遺物の出土はみられなかったが遺構の切り合い関係から後期後半以前であろう。（江見）

溝31

10Z区中央北寄りに位置し竪穴住居８に切られている。幅約15cm、深さ約５cm、検出長約３mの東西方向に延びる小規模な溝である。後期後半の土器細片が出土している。（江見）

溝32

10Z区中央南寄りに位置する南東方向にやや弧状を呈す溝である。幅約15cm、深さ約５cmを測る。遺物は後期後半の土器細片が出土している。（江見）

溝33・溝34（第171図）

溝33は11A区を東西に流れる幅35cm、深さ20cmの溝で、埋土は黄茶灰色土である。溝の一部には土器と礫が密集する部分がある。出土土器から百・後・Ⅱ期に位置付けられる。溝34は溝33に切られる弧状の溝で、溝33の旧い流路の可能性がある。幅、深さとも溝33よりわずかに小さい。（宇垣）

(9) 土器溜り他

８・９BC区土器溜り（第172・173図、図版30・75・76・87・88）

耕作土及びその直下の鉄分・マンガン層を除去すると弥生時代の土器溜りが検出された。土器溜りは８・９BC区の北東部に集中しており、約10mの範囲に２m前後の集中部が９個所認められたほか、南西部にも１個所存在した。

これらの土器溜りは、いずれも大量の土器片が積み上げられていた。土器片は完形に近く復原できるものも含むが、多くは細片である。その中には被熱による赤化ないし火バネ状の剝離が認められる土器片が含まれていた。また焼土塊も含むことから火を用いる作業に関係して形成されたものと考えられる。

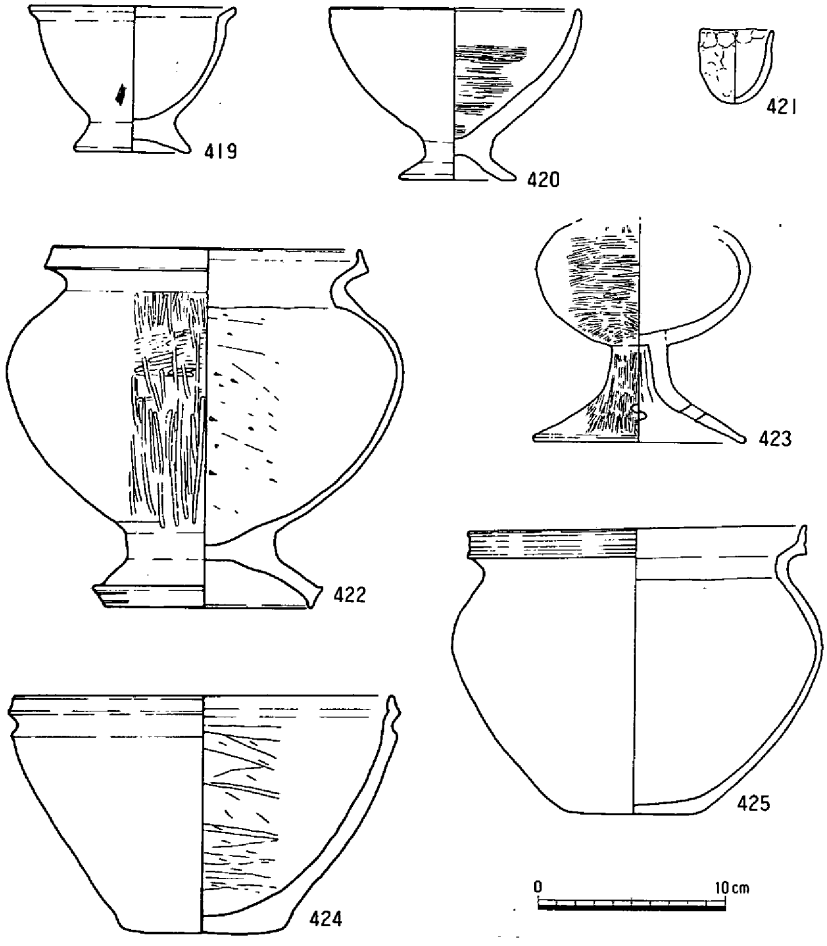
土器溜りから出土する土器は後期の前半を中心として後期全般にわたっている。図示した土器はその一部である。419・420・422は台付鉢である。422はしっかりした脚台で、脚端はわずかに上下に拡張する。421は手捏ね、423は台付壺である。423は口頸部を欠くが、やや開きぎみに立上る細長い口頸部が付くものと考えられる。424・425は鉢である。

S７は打製石包丁である。やや粗雑な作りであるが、長辺の一方を刃部とし、他方を背部としている。両端辺には抉りが作出されている。

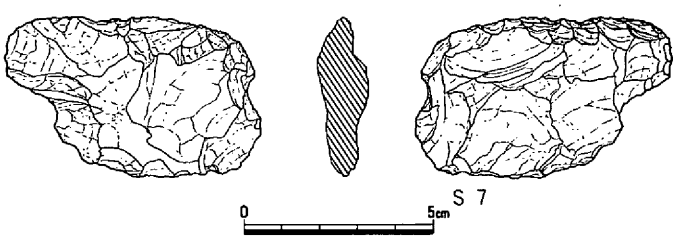
M13は鉄製の摘鎌で、長方形の鉄板の両端を、木製の基部を装着するように折り曲げている。基部側には木質がわずかに残存している。（平井）

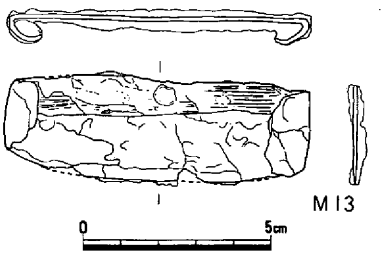
９・10AB区土器溜り（第174図、図版30・76）

9・10ＡＢ区の北東部で、７ｍ前後のほぼ円形に広がる土器溜りが検出された。土器溜りは中央が高く盛り上がり、マウンド状をなしていた。土器は完形になるものはほとんどなく、細片が多い。土器の中には被熱によって赤化したもの、あるいは火バネ状に器表が剝離したもの、また変形したものなどが認められた。時期は後期前半を中心に、後期全般にわたっている。その器種組成は以下の通りである。まず最も多いのは甕で、52％を占める。この数値は口縁部での割合であるが、底部でみると63％になる。底部の場合は壺ないし鉢との区別が困難なものもあり、それぞれの比率は多少誤差が生じることを考えても、50％を多少上まわるものと推定される。次いで高杯が17％を占める。脚端部では19％であることから20％を若干下まわる程度と考えられる。次いで壺12％、鉢11％と続く。以上の甕・高杯・壺・鉢で92％を占め、残りは



第172図　８・９ＢＣ区土器溜り出土遺物（１）





第173図　８・９ＢＣ区土器溜り出土遺物（２）

製塩土器や器台などである。図示した土器はその一部である。

426は直口壺で、色調は淡いチョコレート色を呈し、胎土に角閃石を含む。頸部外面にはタタキが認められ、内面は指頭圧痕が顕著である。427・428・430は壺の口縁部である。427は口縁端部を上下に拡張し、その端面に円形浮文をめぐらす。また頸部には櫛状工具による条線が施される。428は口縁端部と口縁部の下端に円形浮文をめぐらし、さらに内外面には櫛描波状文を施す。430は口縁端部を折り曲げ、その外端面に円形浮文をめぐらす。429は高杯で、口縁外面に波状文をめぐらす。431は壺の口縁部で、口縁端部外面には３本１組の棒状浮文と篦描きの格子目文をめぐらす。なお棒状浮文と、その棒状浮文の位置する口縁上端面には丹が塗られている。

Ｓ８は石錘で、円礫に浅い凹みが全周めぐる。（平井）

窪地１（第175図、図版76）

10ＡＢ区で検出された楕円形を呈する凹みで、規模は最大幅4･3m、深さ15cmを測る。当初は円形の住居と考えていたが、平面形は歪み、床面にはピットすらないため凹みとした。埋土は炭化物を含む淡茶黄色土である。

遺物は弥生土器以外に獣骨も認められ、そのうちの１つは馬であった。図示した土器はこのうちの一部である。432～434は壺である。432は短い頸部に沈線をめぐらし、その下端に刻目を配す。434は壺の口縁部で、口縁端部外面には鋸歯文がめぐる。435～437は甕である。438・439は鉢で、438は頸部に一対の穿孔がみられる。（平井）

⑽　包含層・柱穴等出土の遺物

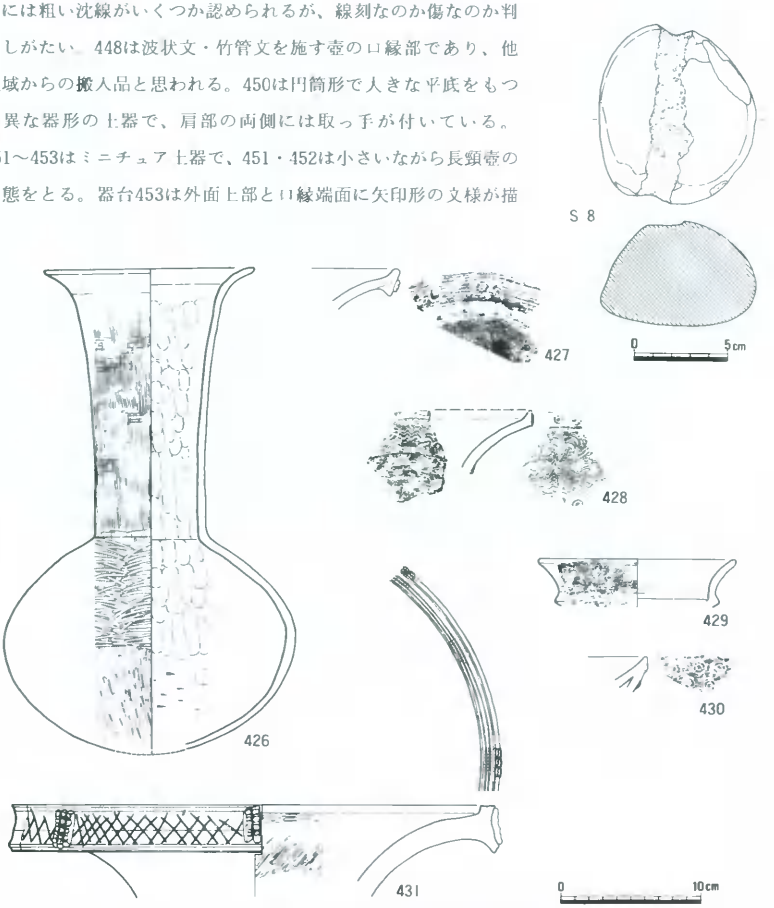
包含層、柱穴出土の遺物の量は多く、そのほとんどが弥生後期の土器である。ここではそのうちの特殊なものや石器、鉄器についてふれておく（第176～180図、図版77・87～89）。

440、441は縄文晩期の深鉢の口縁部である。

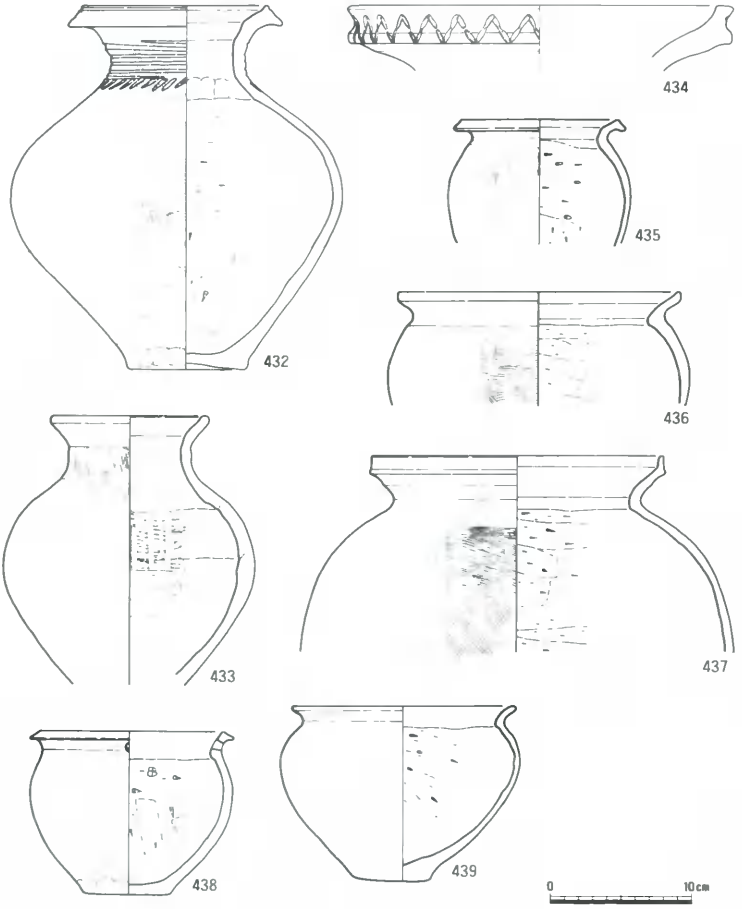
442は壺肩部外面に細い線刻が認められる破片であるが、絵画かどうか不明である。弥生後

期と思われる。443は手あぶり形土器の笠部の破片で、斜面中ほどの部分には細い突帯を貼り付けている。外面および口縁拡張部には櫛描きの波状文を施す。9A区の弥生後期末の洪水堆積中からは小規模な土器溜まりが複数の検出されたが、444～446はその出土遺物の一部で、445と446は同一の土器溜まりからの出土である。このうち445と446は讃岐北部地域からの搬入品であり、内面上半には棒状の工具による押圧の痕跡が認められる。

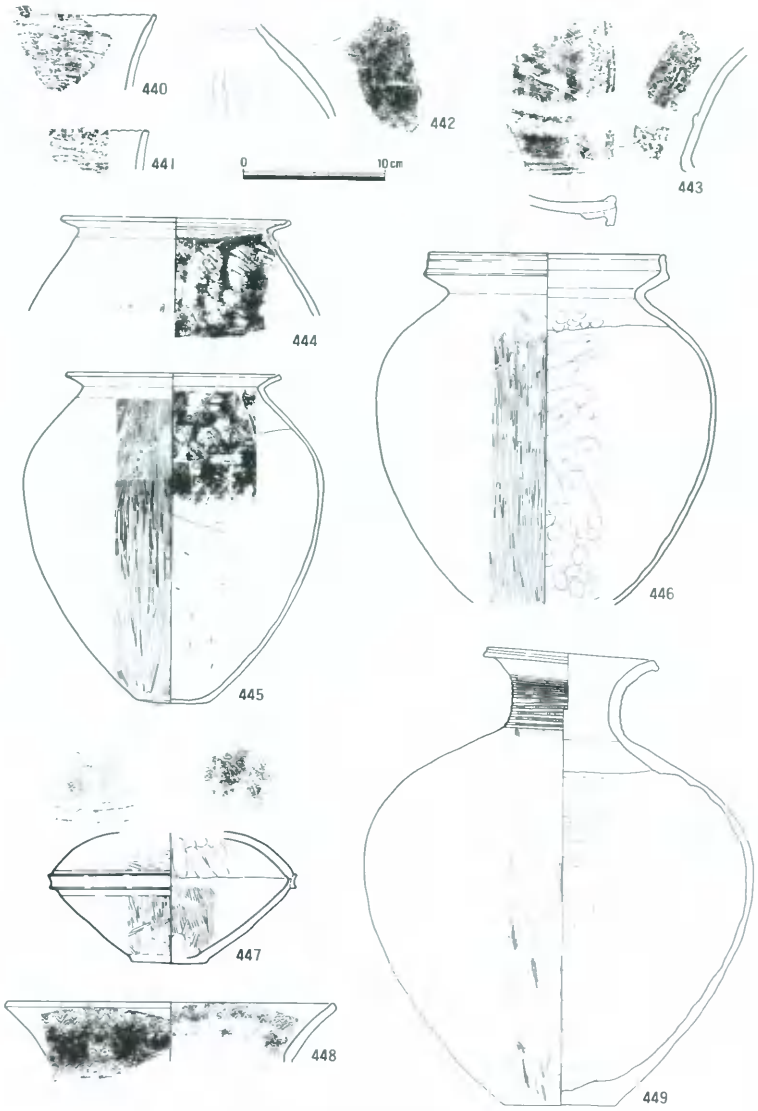
447は算盤玉形の壺で胴部中央に細い突帯を巡らせている。肩部には粗い沈線がいくつか認められるが、線刻なのか傷なのか判断しがたい。448は波状文・竹管文を施す壺の口縁部であり、他地域からの搬入品と思われる。450は円筒形で大きな平底をもつ特異な器形の土器で、肩部の両側には取っ手が付いている。451～453はミニチュア土器で、451・452は小さいながら長頸壺の形態をとる。器台453は外面上部と口縁端面に矢印形の文様が描



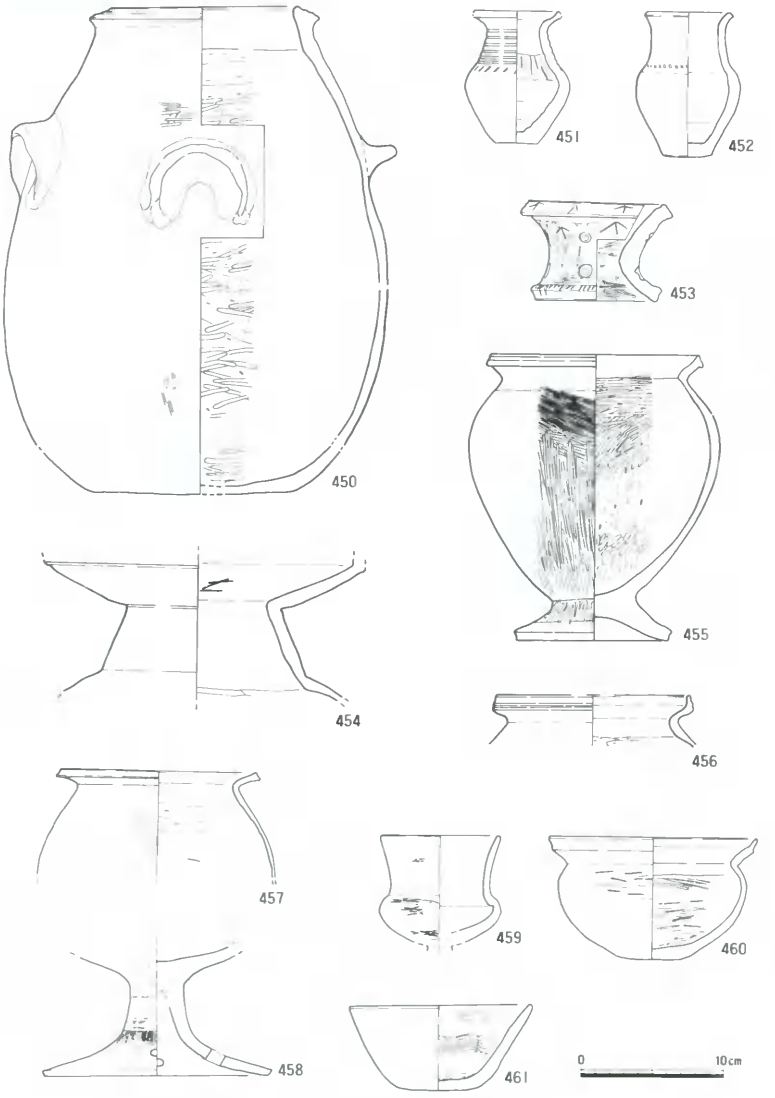
第174図　9・10AB区土器溜り出土遺物



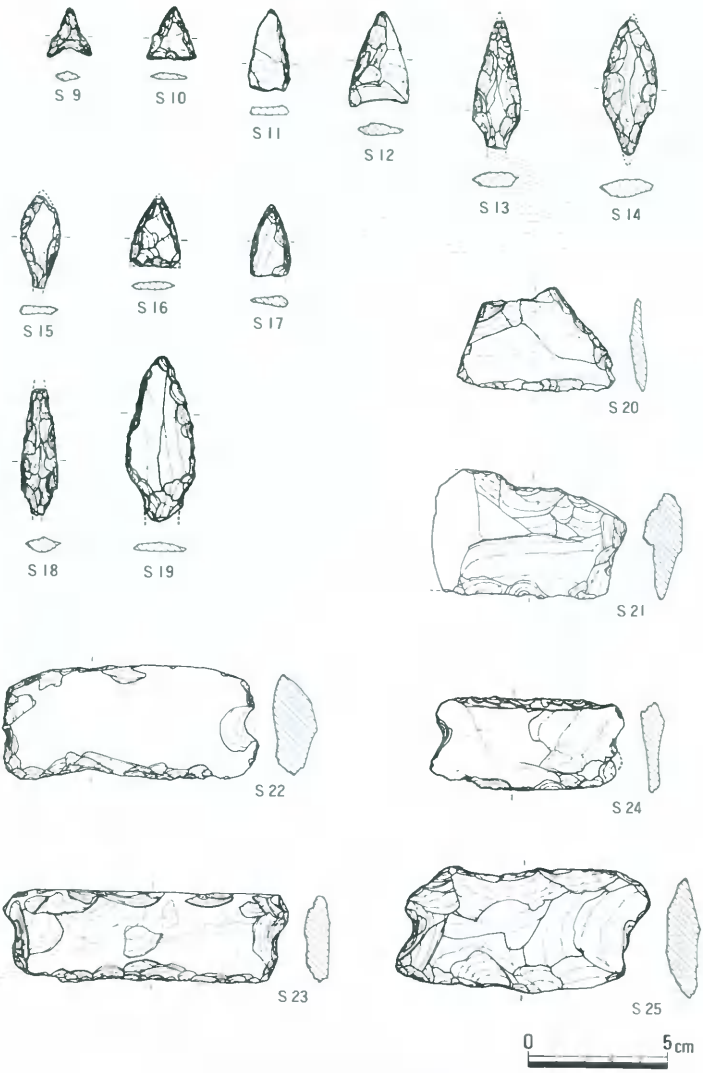
第175図　窪地１出土遺物



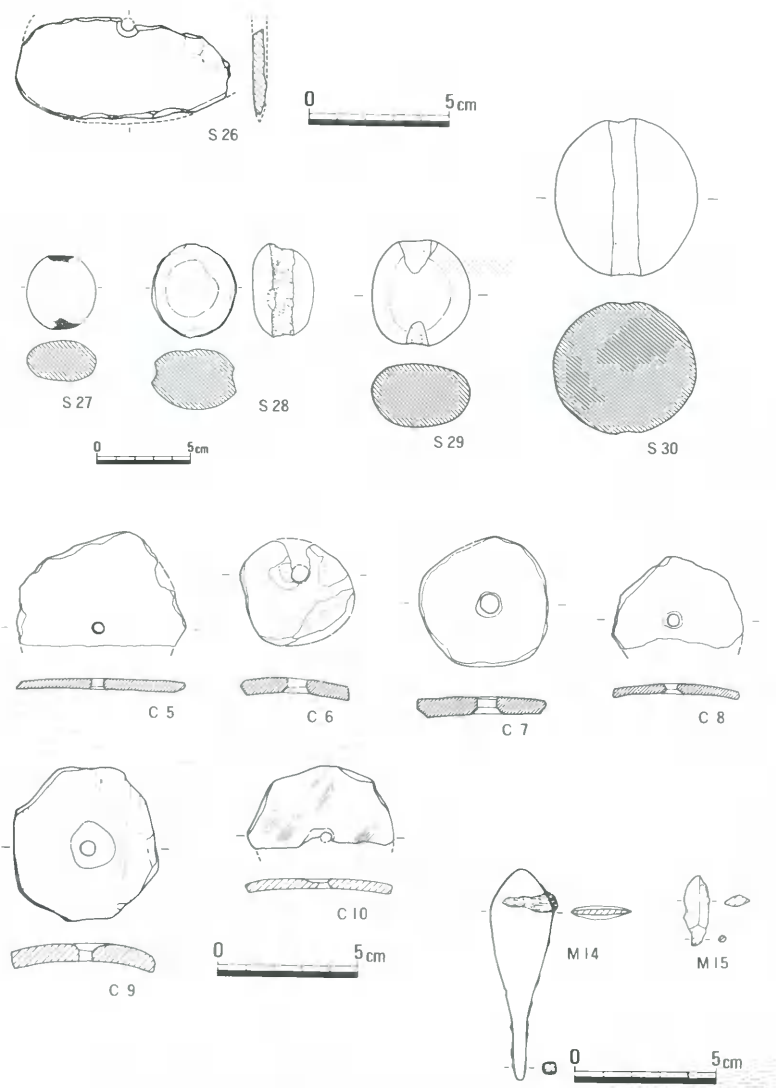
第176図　包含層、柱穴等出土遺物（１）



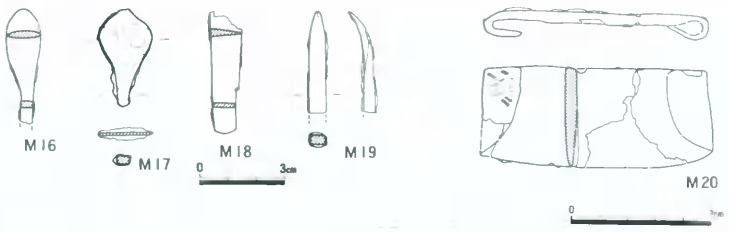
第177図　包含層、柱穴等出土遺物（2）



第178図　包含層、柱穴等出土遺物（３）



第179図　包含層、柱穴等出土遺物（４）



第180図　包含層、柱穴等出土遺物（5）

かれている。

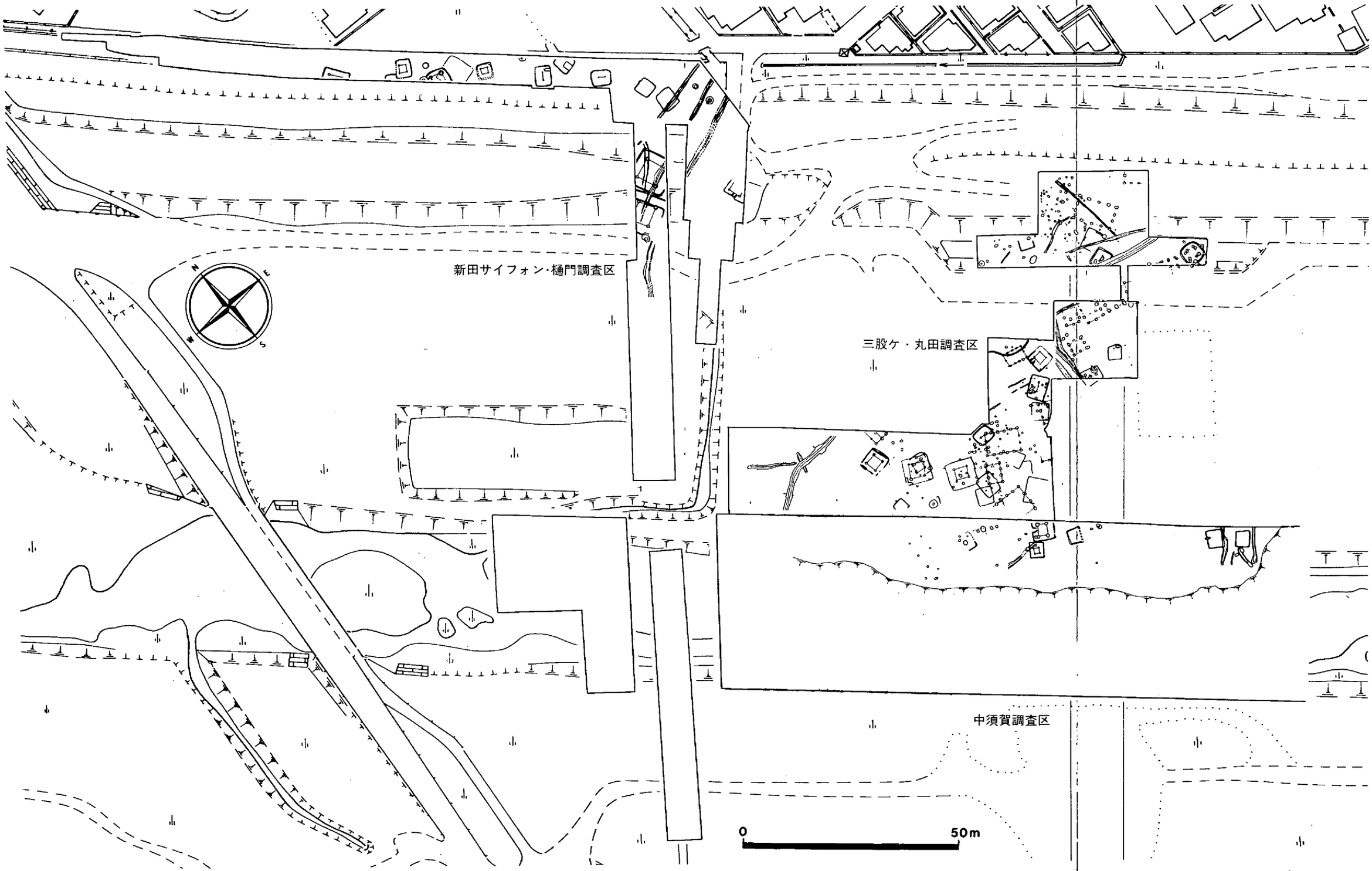
石錘や砥石以外の石器で確実に遺構に伴うものは認められない。石鏃は凹基、平基、有茎などさまざまな形態のものが出土しており、大きさ・重量もかなりのばらつきを示している。これらのうちの多くは後期前半のものであろうが、古い時期のものも含まれていると思われる。石包丁は5点出土した。S22はスレートの円礫を素材とするもので、図に示した側ではほぼ全面に礫面を残している。24は安山岩を用いたもので剥離はかなり粗雑である。23、25はサヌカイトの石包丁である。このうち23は背部分を中心に研磨が加えられている。26は磨製石包丁の破片で、材質はスレートである。

石錘は円礫の側縁全周あるいは両端に敲打を加えたもので、重量は45～548ｇである。

紡錘車はいずれも土器片を用いたもので、径は5㎝前後である。大部分は縁辺を打ち欠いて成形しているが、C6、7のようにさらに研磨を加えるものもある。

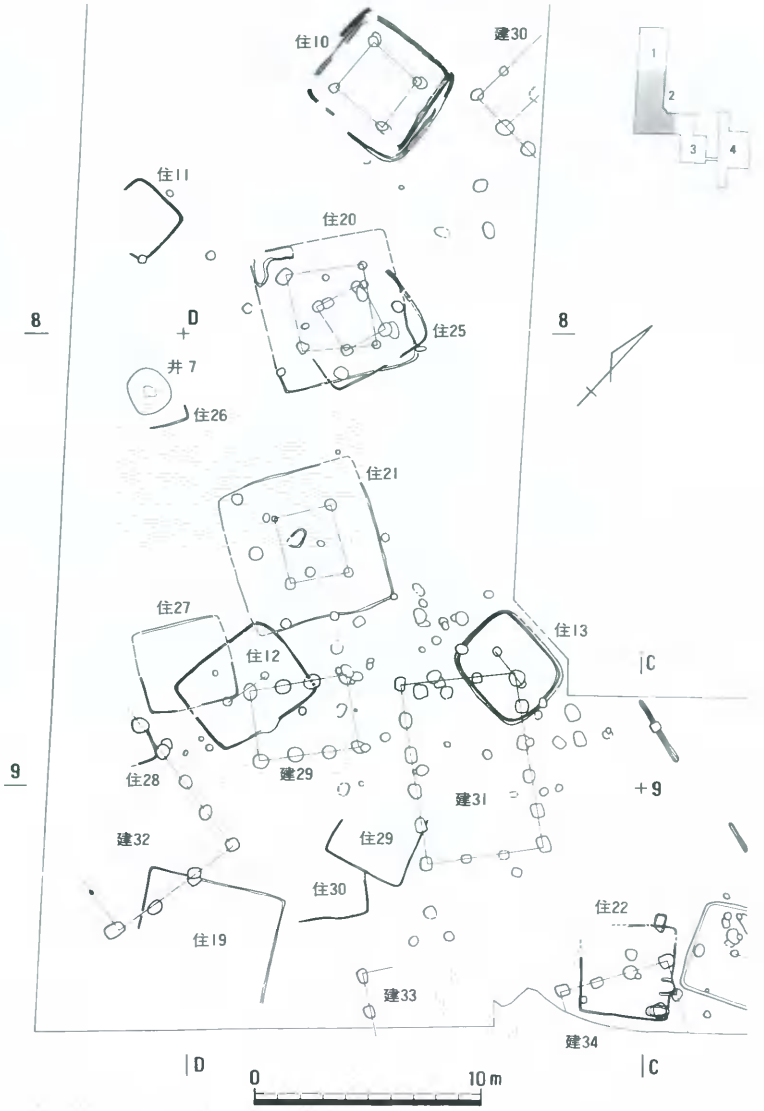
銅鏃は遺構に伴って3点が出土しているが、それ以外に9・10AB区包含層から出土したM15がある。遺存状態が良くなく縁辺部のほとんどが欠落している。6点の鉄器のうち、M14・16・17は鉄鏃、18は刀子である。鉇19は洪水堆積層下面からの出土で、弥生時代後期末である。鍬（鋤）先M20は土壙からの出土で、器面の一部に藁状の繊維が錆化によって遺存している。長さ8.4㎝、幅3.6㎝を測る。

玉類のうち勾玉J14は翡翠製で、孔が認められない。側面や下端面はかなり光沢をもつのに対し、頭部端は研磨がなされてはいるもののほとんど光沢をもたないことからみて、孔付近で欠損し、再度研磨を加えたものと思われる。付載に記すように、糸魚川産の石材が用いられていることが判明した。管玉15、16は緑色凝灰岩製と思われる。（宇垣）

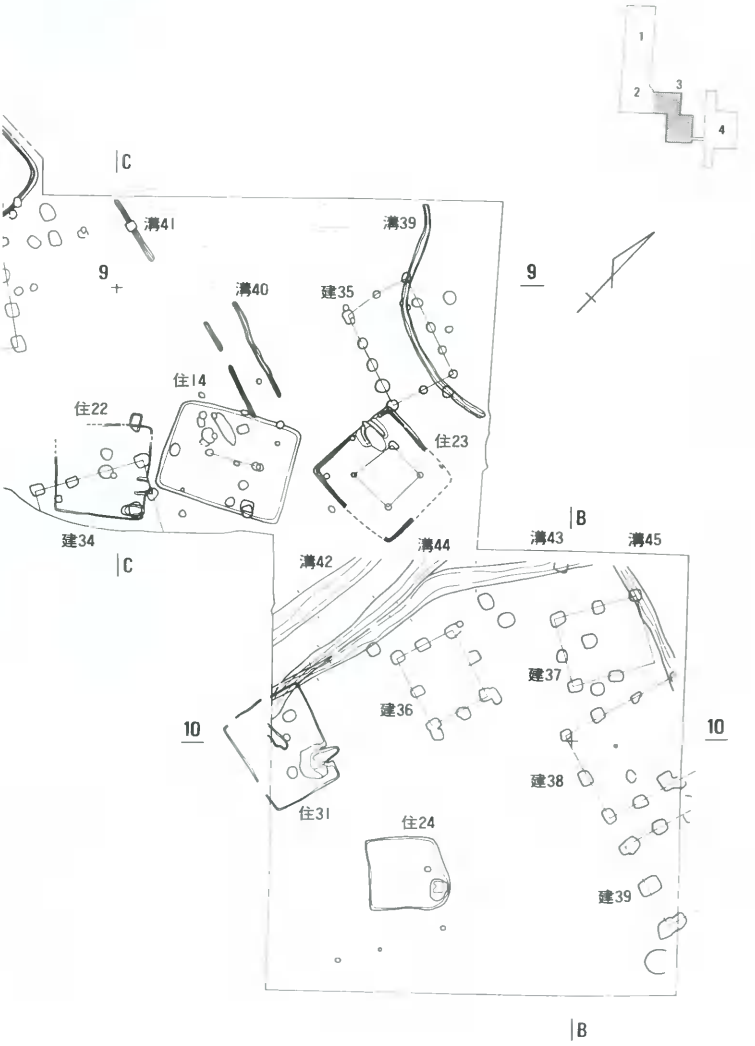


第181図　百間川原尾島遺跡北部　古墳時代遺構全体図（S＝1/1000）

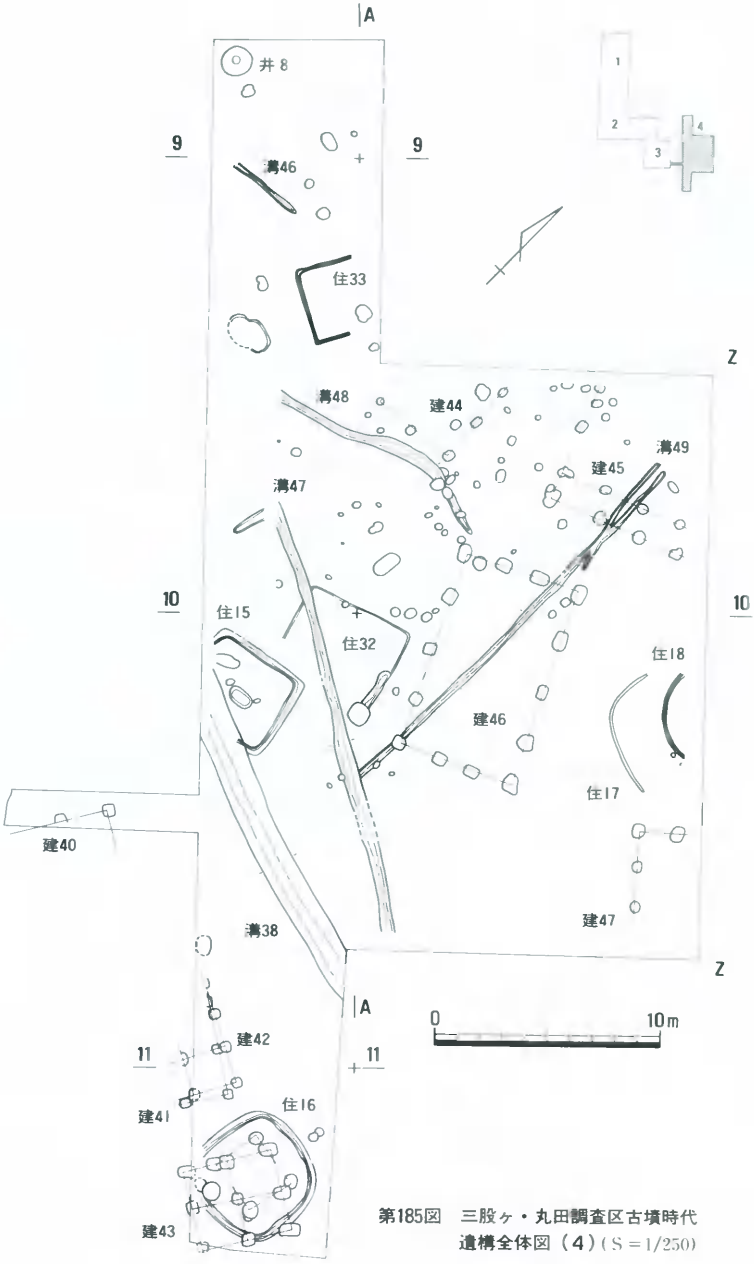
第182図　三股ヶ・丸田調査区古墳時代遺構全体図（1）（S＝1/250）



第183図　三股ヶ・丸田調査区古墳時代遺構全体図（２）（S＝1/250）



第184図　三股ヶ・丸田調査区古墳時代遺構全体図（3）（S＝1/250）



第185図　三股ヶ・丸田調査区古墳時代
遺構全体図（4）（S＝1/250）

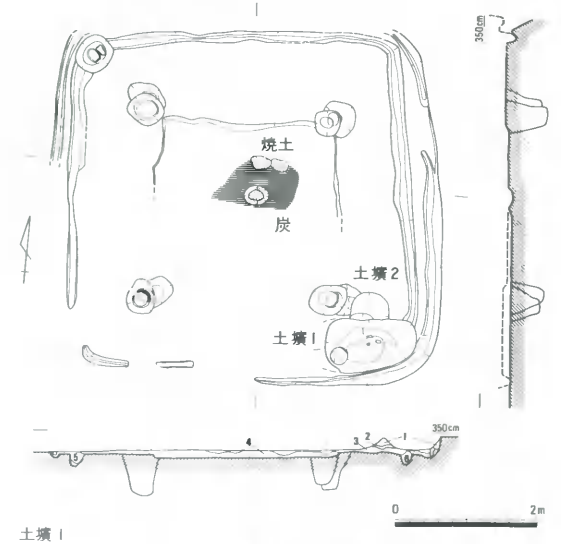
4．古墳時代の遺構・遺物

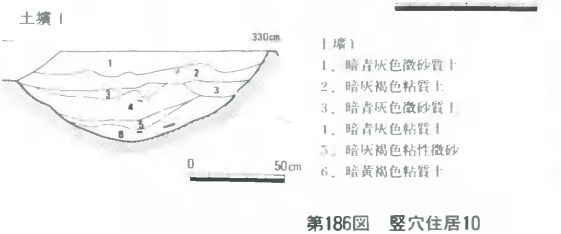
(1) 竪穴住居

竪穴住居23棟を検出した。調査区のほぼ全域に分布するが、西半部のほうが密度が高い。弥生時代の竪穴住居の少なかった調査区中央部にも5棟が建てられている。

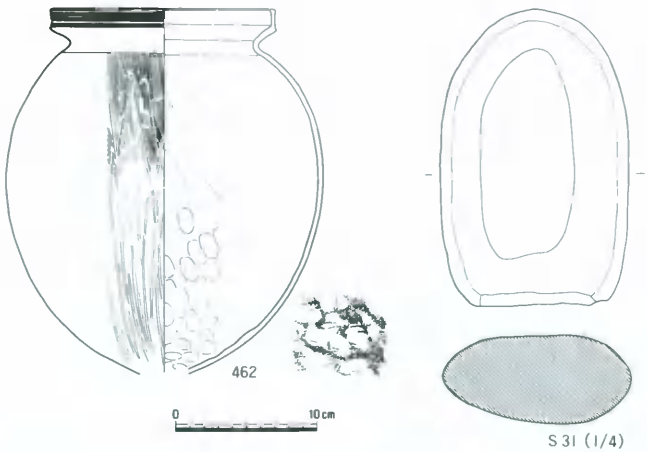
竪穴住居10（第186・187図、図版31）

7C区のほぼ中央に位置する方形の竪穴住居で、軸線をほぼ南北にとる。近世の土取りによって住居および覆土の大部分が削平されており、南半部では床面も遺存していない。住居の規模は東西が5.6m、南北は推定5.3mである。柱は4本で、建て替えがなされており、二回めの柱は前の柱よりもわずかに南側に移っている。住居の拡張に伴って壁溝は2回設けられており、外側のものは辺がやや弧状をなしている。なお、外側の壁溝は、精査したが東辺の一部が途切れた状態であった。床面北半では柱穴を結んだ線を境に外側が約4cm高くなっており、低いベッド状遺構がめぐるようである。床面ほぼ中央には長径37cm、深さ7cmの中央穴（炉）が設けられている。底面はよく焼けており、周囲には炭層がひろがっている。また、中央穴の北20cmの部分にも炭層下で小規模な





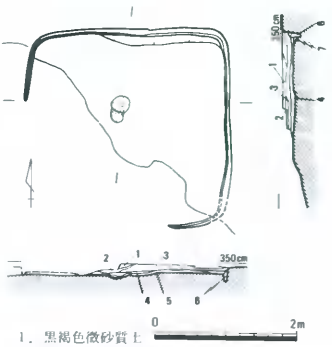
第186図　竪穴住居10



第187図　竪穴住居10出土遺物

焼土面が認められた。

住居の南東隅には長径130cm、深さ58cmの土壙１が設けられている。柱穴と壁溝の間いっぱいに収まり、古い壁溝を切っており、住居の拡張後に築かれたものである。完形に近い甕462のほか土器破片がかなり入っていることから貯蔵穴と考えられ、これが切る北側の土壙２も先行する貯蔵穴と思われる。北西隅の床面では古い壁溝を切って径54cm、深さ37cmの柱穴が設けられており、砥石S31は礎石に転用された状態で出土した。住居に伴う遺物は少ないが、住居の年代は貯蔵穴出土の土器が示す古・古・２期とみてよいであろう。なお462は遺存状態が良好で、胴部内面下半の円形圧痕には木目状の凹凸が認められる。（宇垣）



1．黒褐色微砂質土
2．黒褐色混炭・焼土層
3．黒褐色微砂質土
4．明黄色微砂質土（貼り床）
5．黒褐色微砂質土
6．黒黄褐色粘質土
7．暗黄色微砂質土

第188図　竪穴住居11

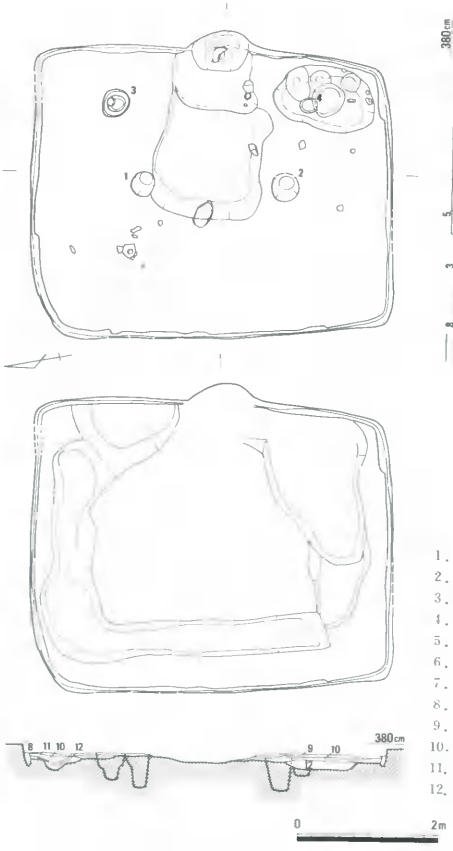
竪穴住居11（第188図、図版32）

竪穴住居10の南８mのところで検出した南北2.9mの小規模な住居である。ほとんど遺物が

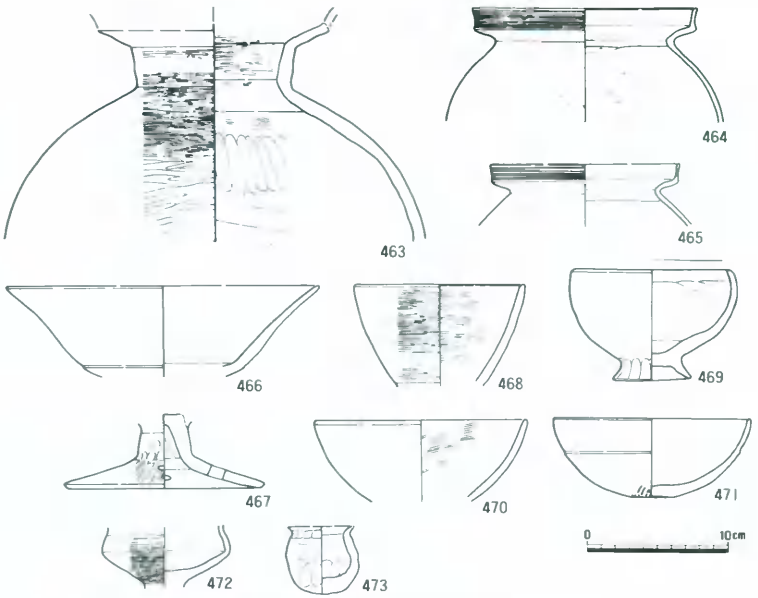
出土しなかったが、軸線が竪穴住居10とほぼ一致しており、同じ時期のものである可能性が強い。床面中央やや北寄りの部分には浅い中央穴が２基重複して設けられているが、いずれも貼り床４層の下であり、貼り床の上では中央穴は認められなかった。覆土上層の２層には焼土がかなり含まれていたが、床面上からは炭化材等は検出されず、埋没時に流入したものと思われる。精査したが柱穴は確認できなかった。（宇垣）

竪穴住居12（第189・190図、図版32）

８Ｃ区南隅で検出した東西4.10m、南北5.15mの長方形をなす竪穴住居で、竪穴住居27が重複している。主柱穴は２本であるが、東壁に近接して柱穴３、４があり、変則的な台形をなす柱の配置になる可能性が考えられる。床面中央から東側にかけては幅約140cmの浅い長方形のくぼみが形成され、その東端には住居から張り出すように楕円形の土壙が設けられている。また、床面北東隅には長径145cm、深さ15cmの浅い土壙が設けられている。



第189図　竪穴住居12



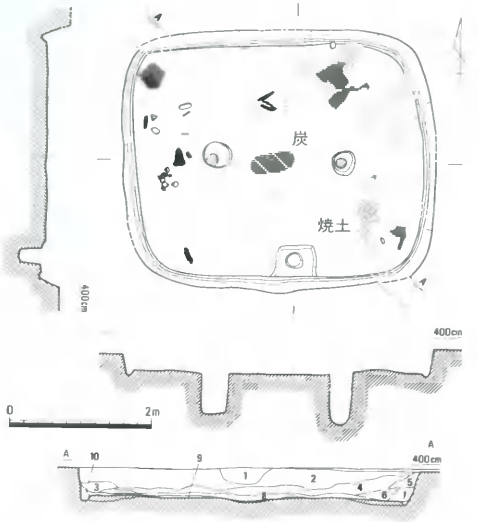
第190図　竪穴住居12出土遺物

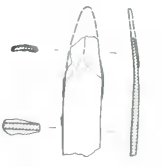
埋没時の床面においては中央穴は認められなかったが、貼り床面下から長径40cmの小規模な焼土面が検出できた。また、貼り床を除去したところ旧い壁溝は認められず、かわってコ字状の浅く幅の広い溝が検出できた。溝の輪郭は住居平面よりもやや狭く、深さは不規則である。旧い住居の壁体を撤去した痕跡である可能性が考えられる。

床面上には土器片が比較的多く、壺463は柱穴１の西側に散乱した状態で、高杯466は東辺中央の土壙からの出土である。このうち壺463は二重口縁をもつもので、胎土は比較的精良で外面には細かい横方向のミガキが認められる。鉢は469のみが完形品で、471はほぼ完形に復元できた。鉢471は高杯466の胎土に近い明赤褐色の精良な胎土であるのに対し、470は暗褐色を呈し金雲母・角閃石を多量に含んでおり、他地域からの搬入品である。471では底部に叩きが認められる。これらの土器から、この住居の時期は百・古・Ⅰと考えられる。（宇垣）

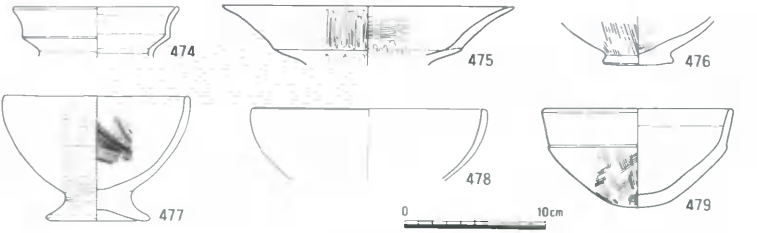
竪穴住居13（第191図、図版33）

８Ｃ区東部で検出した東西4.44m、南北3.70mの隅丸長方形を呈する住居で、軸線は他と同様ほぼ南北をとる。検出面から床面までの深さは40cmであるが、断面上端は現水田層によって





1．明褐色砂質土　6．灰褐色土
2．灰褐色土　7．灰褐色土（焼土・炭を多量に含む　上面に炭薄層）
3．褐色土　8．暗褐色土（　〃　）
4．灰褐色土　9．黄褐色粘質土
5．褐色土　10．暗黄灰色粘質土



第191図　竪穴住居13・出土遺物

削られており、本来はさらに深いものであったようである。焼失住居であり、床面上および覆土中からは炭化材と多量の焼土が出土した。特に東側では焼土が広い範囲に落下しており、屋根に用いられていた土である可能性が強い。２本の柱の間は浅くくぼんでおり、その部分に楕円形の炭の散布が認められたが焼土面は認められなかった。床面の南壁に接する部分には幅55

cm、深さ5cmの方形の掘り込みがあり、その中央に柱穴が設けられているが、その用途は推定しがたい。

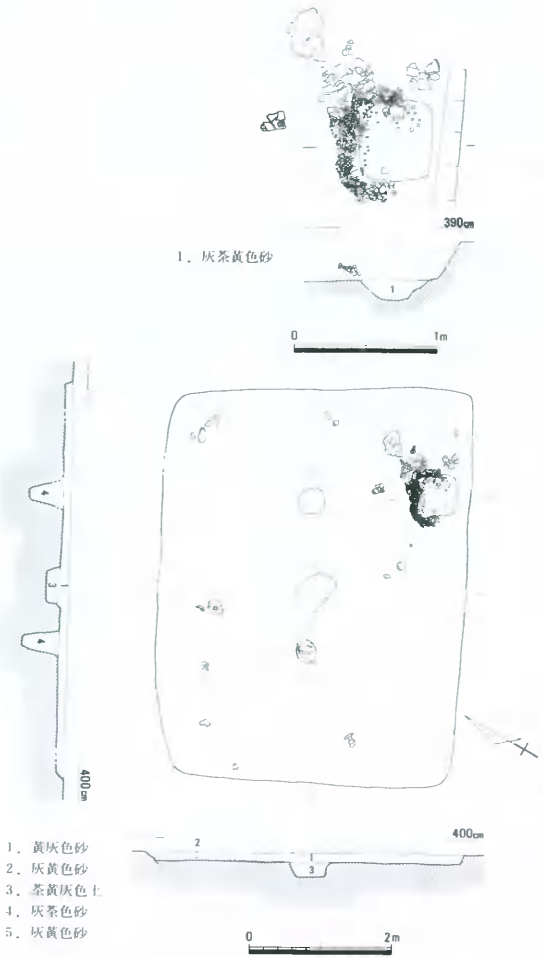
床面からは遺物の出土量は少なく、鉢477、479のほか小破片が出土したにすぎない。鉢M21・22は覆土中からの出土である。出土土器からみて、この住居の年代は百・古・Ⅰと推定される。（宇垣）

竪穴住居14（第192～194図、図版34・78）

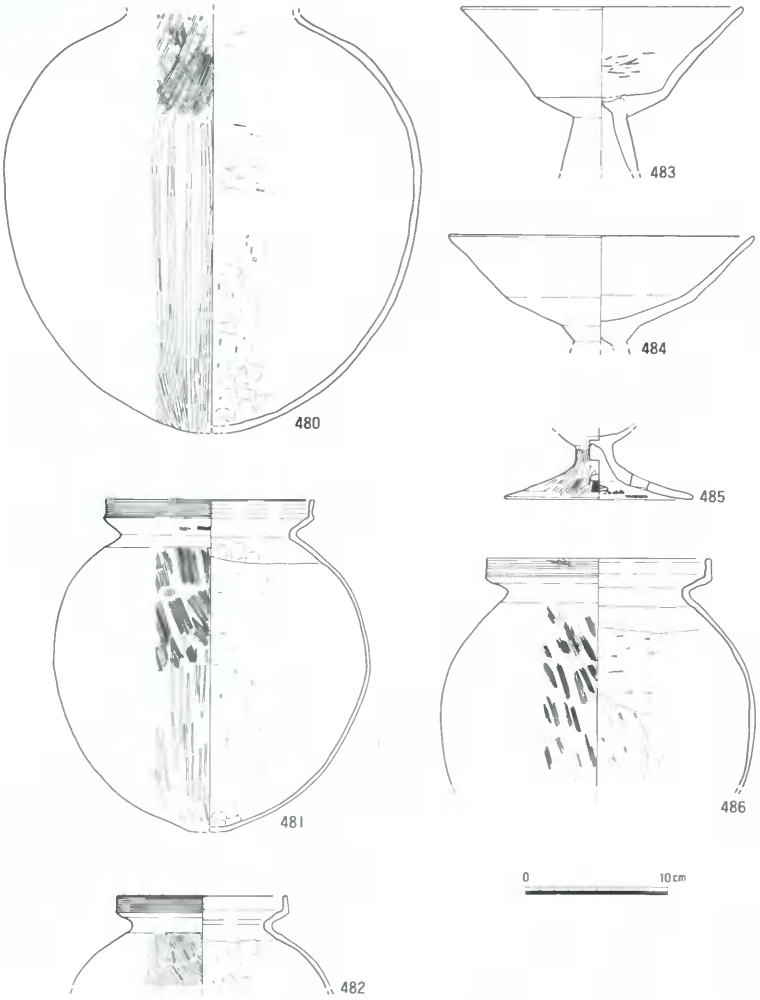
9B区で検出された方形の竪穴住居である。規模は長辺5.6m、短辺4.3m、深さ12cmを測る。

住居内の南側長辺の東寄り壁際に長さ57cm、幅50cmの方形を呈する土壙が掘られている。この土壙の北側をコの字状に囲むように小円礫帯が認められた。ただこの円礫帯は床面から少し浮いていることから、土壙を囲むような土手を築き、その上に置いたとも考えられるが、土層観察では明確にし得なかった。

住居内中央には長方形を呈する中央ピットがあり、この中央ピットを挟んで東西に柱穴が認められた。また中央ピットの北東側には火所がある。土器は床面より少し浮いた状態で散在していたが、483は西側の柱穴内に落ち込んでいた。

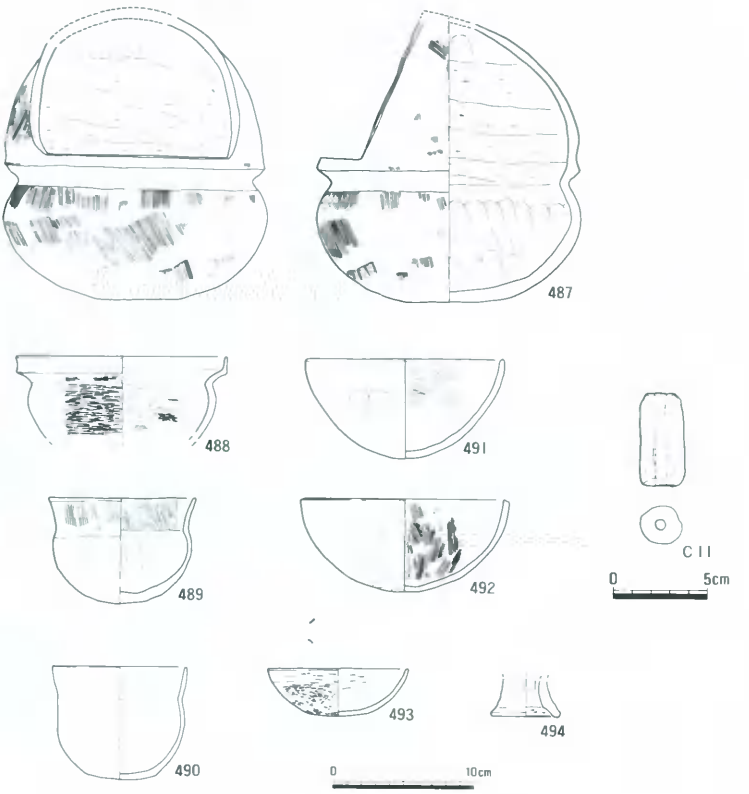


第192図　竪穴住居14



第193図　竪穴住居14出土遺物（1）

遺物は土師器と土錘が出土した。480は口縁部を欠くが大型の甕である。481・482・486の甕はいずれも口縁端部を上方に拡張し、その外面に櫛描沈線を施すもので、胴部はほぼ球形にな

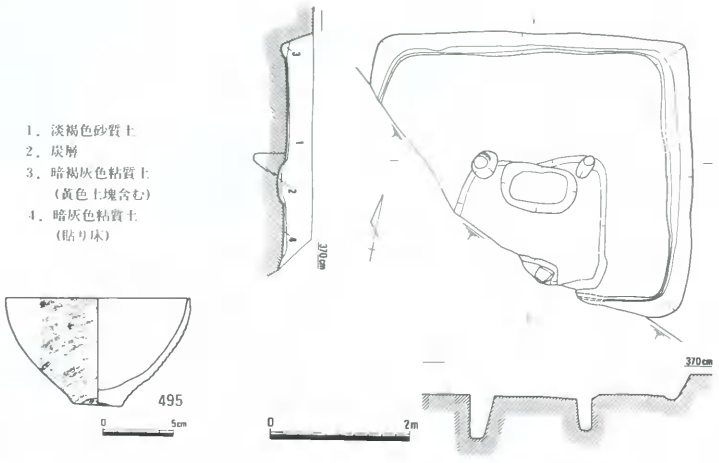


第194図　竪穴住居14出土遺物（2）

る。483～485は高杯である。487は手捏り形土器である。488は口縁部をくの字状に外反させ、さらに端部を上方へ拡張した鉢で、胴部外面は丁寧に磨いている。489・490は口縁部を少し外反させた小型の鉢である。491～493は椀形の土器で、491と492は少し深いが、493は浅い。いずれも外面はヘラ削りで仕上げている。494は製塩土器の脚部である。これらの土器の時期は古・古・Ⅰと考えられる。（平井）

竪穴住居15（第195図、図版33）

10A区北部で検出した方形の竪穴住居である。東西4.70m、南北4.00mの小規模なもので、

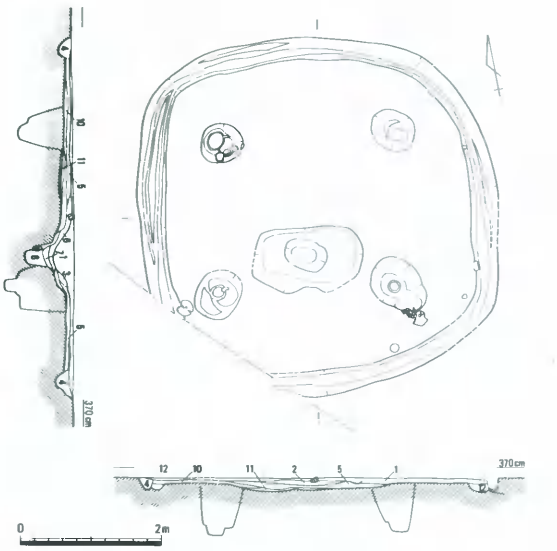


第195図　竪穴住居15・出土遺物

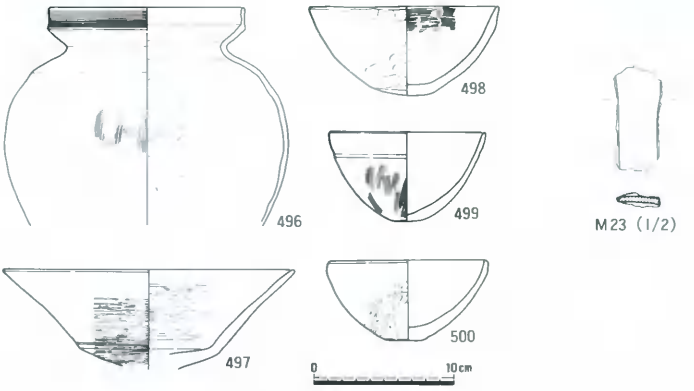
検出面からの深さは35cmである。床面のほぼ中央に２本の柱があり、その南側に中央穴が設けられている。中央穴は長径110cm、深さ12cmを測り、下部には炭がたまっていた。また、付載４に示すように、中央穴内からは赤色顔料（ベンガラ）が少量検出された。住居の南壁に接する部分には方形の貯蔵穴が設けられているようであるが、大部分が溝38に掘削されている。当初の床面では柱の南側に、幅220cm、長さ推定195cmの台形の平面で周囲よりも８cm低い部分が形成されているが、後には貼り床によってその大半が埋め立てられ、東側だけが段を残すようになっている。住居の覆土は弥生時代後期末の洪水砂と同質の淡褐色砂質土であるが、再度洪水に遭ったのではなく、周囲の洪水堆積層が崩壊・流入したのではないかと思われる。出土遺物はわずかであるが、古・古・Ⅰと考えられる。（宇垣）

竪穴住居16（第196図、図版35）

11A区で検出した四辺が弧状に張り出す住居で、東西5.10m、南北5.15mを測る。弥生時代後期末の洪水堆積層の除去後に平面形を確定して掘り下げたため検出面からの深さは浅いが、本来はより上方から掘り込まれたものである。住居の埋没後に建物43が設けられている。住居は小規模な拡張がなされており、壁溝が部分的に二重になっている。南東の柱穴は二つの柱穴が切り合っているが、他のものは柱穴底の柱痕跡が２つ認められる状態であり、基本的に旧い柱穴を利用して柱の建て替えを行っているようである。貼り床は３層認められるが、下部の２層は近接しており、大きくは上下２層で住居の拡張に対応しているようである。



1．灰褐色砂質土　5．灰褐色砂質土（貼り床１）　9．暗褐色土
2．黒灰色砂質土　6．暗灰色砂質土（炭含む）　10．暗灰色砂質土（黄色砂塊含む）
3．暗灰褐色砂質土　7．黒褐色土　11．暗褐色土（貼り床２、３）
4．明灰褐色砂質土　8．黒褐色土（炭含む）　12．明褐色砂質土



第196図　竪穴住居16・出土遺物

床面の中央やや南寄りの部分には長径155cm、深さ58cmの中央穴が設けられている。中央穴の埋土下部は炭を含み、また中央穴の周囲には径2.8mの範囲で炭の薄層の広がりが認められる。

覆土は洪水砂の再堆積と思われる灰褐色砂質土であり、その中には土器片多数が投棄されて土器溜まりを形成していた。ここには床面付近から出土した資料のみを提示しているが、これらの土器から住居の年代は百・古・Ⅰと判断できる。なお、鉄器M23は覆土中から出土したもので、両端を欠損しているが、鉇の可能性が強い。（宇垣）

竪穴住居17（第185図）

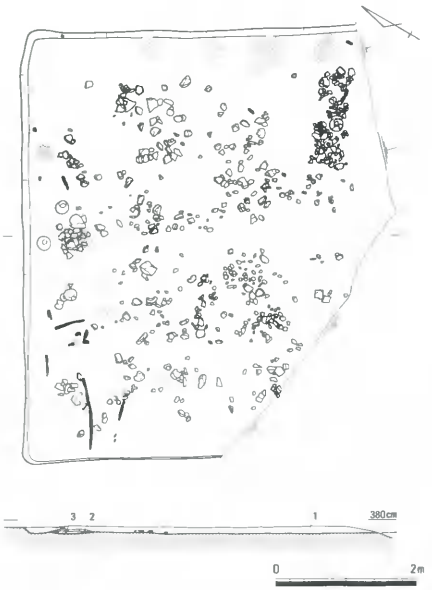
10Z区北寄りに位置し竪穴住居10を切り、住居の大半は調査区外に延びる。後期洪水砂層除去後に壁体溝のみが検出され、その形状から円形の平面形態を呈するものと判断されるが、主柱穴その他は確認できなかった。残存する壁体溝の幅約15cm、深さ5cmあまりを残す。溝内には灰褐色粘質砂粒が堆積しており、土器細片が数点出土した。なかに短脚高杯の小破片が混じるものの、住居の検出状況から古墳時代初頭の時期と考える。（江見）

竪穴住居18（第185図）

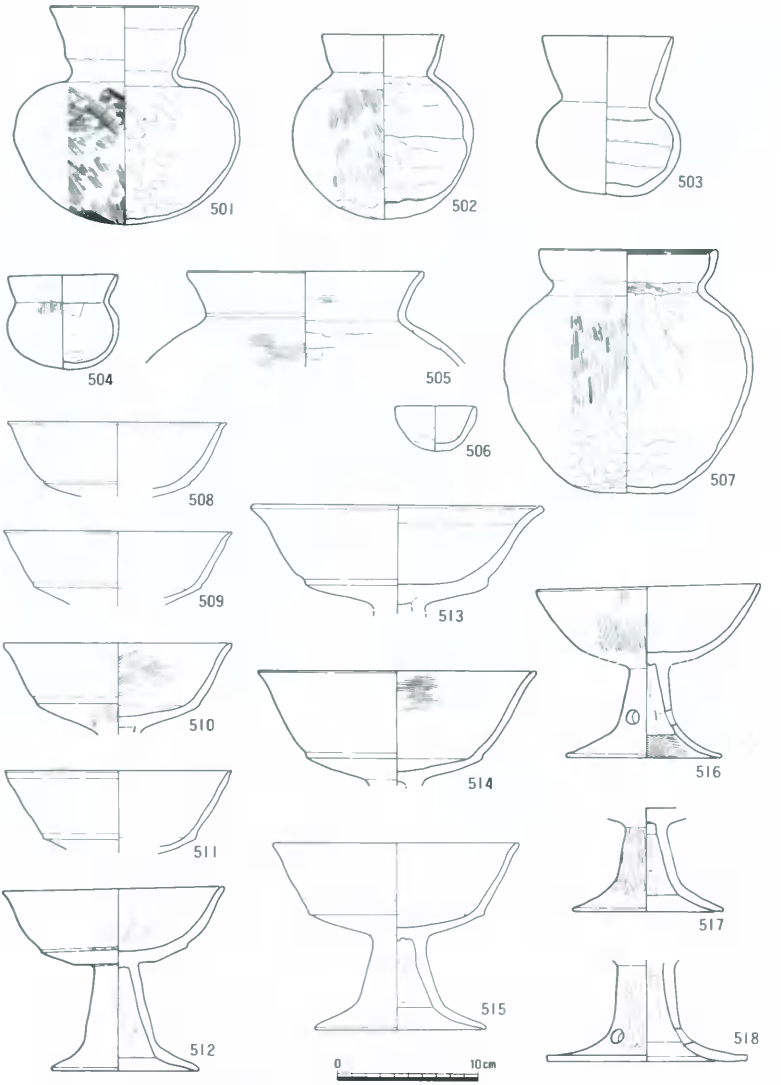
10Z区竪穴住居の南側に位置し、上記同様洪水砂層除去後に壁体溝のみ検出されたもので、主柱その他は確認できなかった。平面形態は隅丸方形を呈するものと考えられる。残存する壁体溝の幅約15cm、深さ2cmを残す。堆積する灰褐色粘質土からは僅かに土器小破片が出土したのみで、当住居は上記同様古墳時代初頭と考える。（江見）

竪穴住居19（第197～199図、図版35・79）

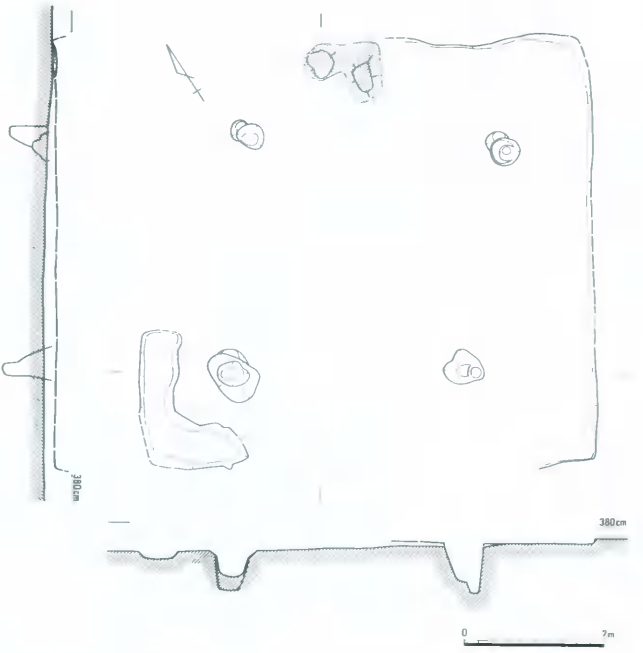
調査区南端、9CD区に位置

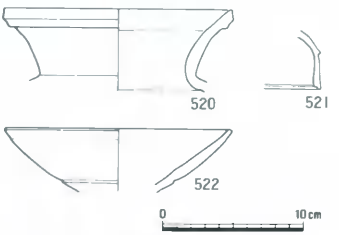


第197図　竪穴住居19



第198図　竪穴住居19出土遺物（１）



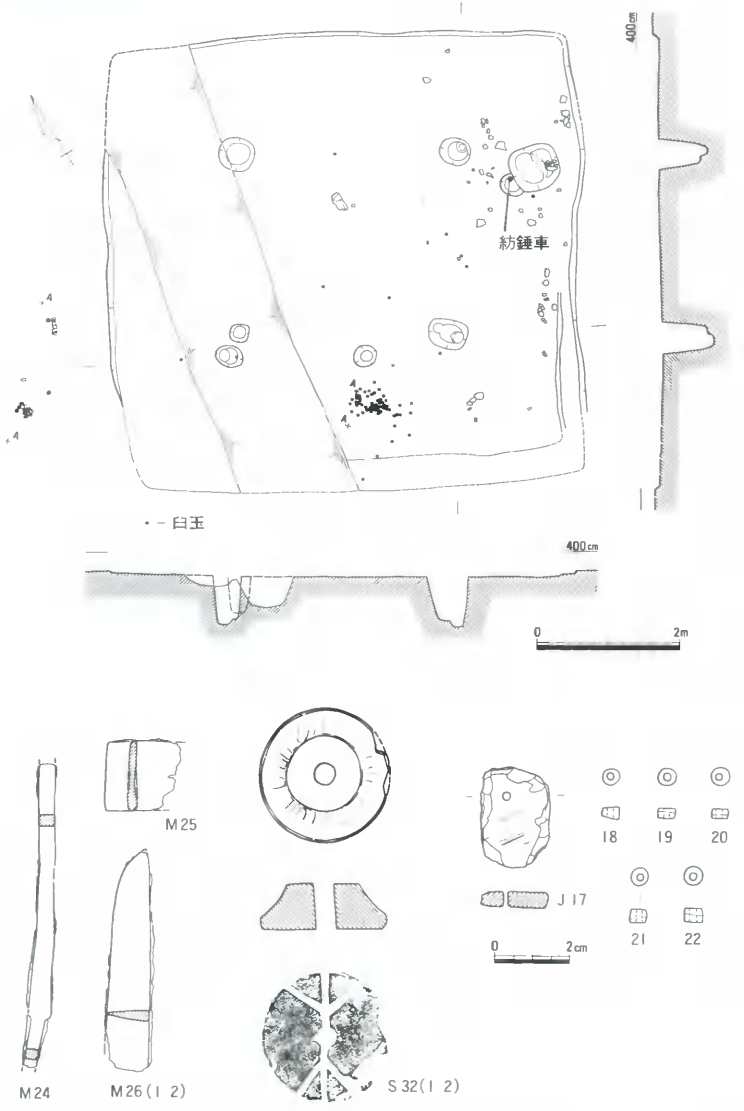


第200図　竪穴住居20・出土遺物

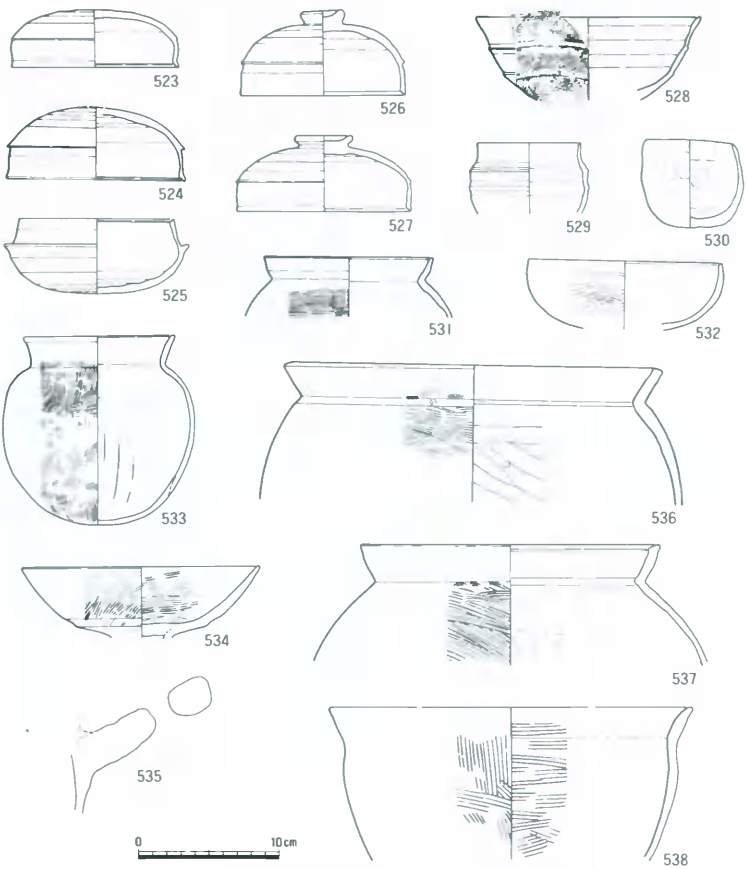
以上、遺物の特徴から当住居址は百・古・Ⅲに火災により廃棄されたもので、造り付けの竈をもつ住居としては初現的な例であろう。（江見）

竪穴住居20（第200図）

7C区から一部8C区にかかって検出した比較的大形の住居であるが、近世の土取り遺構によって床面の大部分が削平されており、さらに竪穴住居25が重複しているため、遺存状態はきわめて良くない。住居の規模は南北6.10mで、東西は西隅と想定される付近に所在するL字形の溝までとみれば6.20mとなる。柱穴は4本で比較的壁に近い部分に配されている。南側のものを除いて重複が認められ、柱の建て替えがなされたことを示している。北東辺の中央内側部分には長さ約1mの瓢箪形に焼土が散布しており、その最も厚い部分は7cmを測る。この部分が竈の位置を示すと考えられるが、



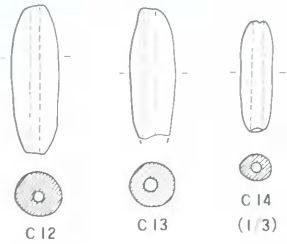
第201図　竪穴住居21・出土遺物（1）



第202図　竪穴住居21出土遺物（2）

その形状を明確にとらえることはできなかった。上記のような遺存状態であるため出土遺物は少ない。ここに示したものは南隅にわずかに遺存した覆土および柱穴から出土したものであり、520、521は須恵器、522は土師器高杯である。これらの資料からこの住居は5世紀末～6世紀初頭ごろに営まれたものと考えられる。（宇垣）

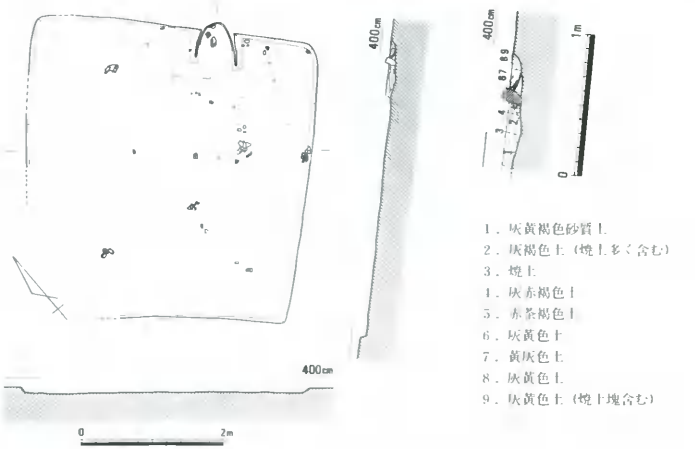
竪穴住居21（第201～203図、図版36・89）



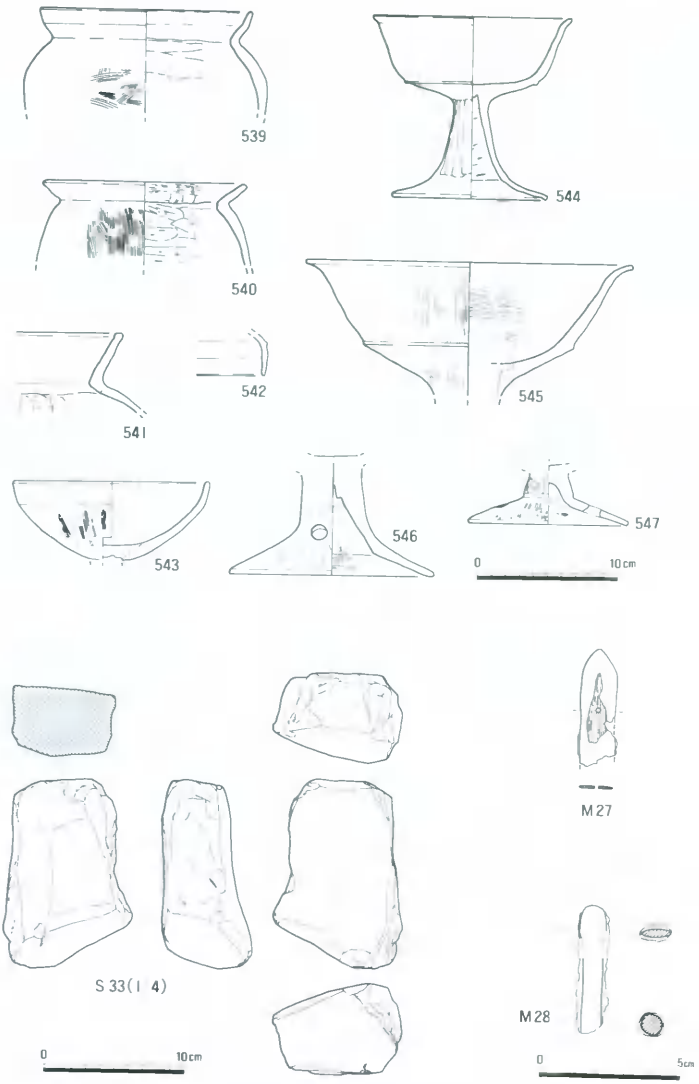
第203図　竪穴住居21出土遺物（3）

8C区の中央南側で検出した大形で方形の竪穴住居である。竪穴住居20と同じ軸線をとり、両者の間隔は3.5mを測る。住居の西側部分を近世の水路が貫通しているが、柱穴は下半が遺存していた。住居の三辺は遺存していたが、南壁は削平および攪乱のため、かろうじて床面の範囲を把握できる程度であった。柱は4本で、そのうち南側のものは底面が瓢箪形になり、西では2本の柱穴になっている。また、南東辺と南西辺の内側付近では廃絶時の床面よりも6cm下で旧い床面が認められるが、この床面は北側にむかってゆるやかに上がっているため、他の部分では認められない。これらの状況から、この住居は南側への拡張・建て替えがなされたとみられる。

この住居では床面からかなりの量の遺物が出土したが、特筆されるのは玉類で、臼玉101点とガラス小玉1点が出土した。図中にドットで出土状況を示しているが、床面中央からやや南に寄った部分に分布の中心があり、10点ほどが他の部分に散布している。最も密集する部分の下部では6点および5点が連なった状態で出土しており、少なくとも一部は糸が通った状態で埋没したようである。点数が多いため実測図には5点のみを示し、他は一覧表に計測数値を示



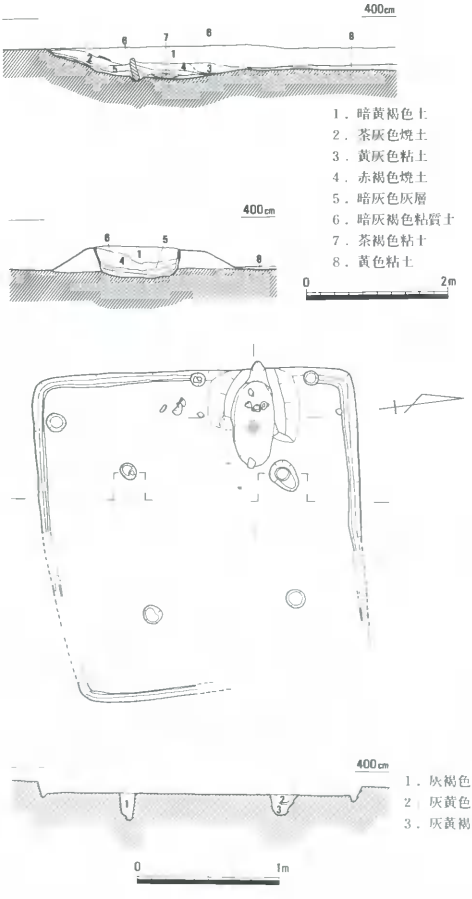
第204図　竪穴住居22



第205図　竪穴住居22出土遺物

しているが、玉の直径が5㎜内外、高さが2～5㎜とばらつくのに対し、孔径はほぼ1.9㎜に一致しており同一の工具で穿孔されたものと考えられる。臼玉の材質は蛇紋岩と推定される。臼玉以外では、臼玉密集部中から臼玉と同じ石材で製作された不整長方形の製品J17が1点出土しており、形態は整っていないが上部に穿孔があり、勾玉形模造品とみてよいであろう。また、これ以外に同じ石材で製作された紡錘車S32が出土している。

鉄器は3片出土した。いずれも破片であるが、M24は長頸鏃の篦被から茎にかけての破片とみられ台形関をもつ。M26は刀子である。523～529が須恵器、530～538が土師器、C12～14は土師質の土錘である。出土土器のうち533は完形に復元できた小形の甕で、外面は全面にススが付着している。須恵器の型式はTK23型式と思われ、この住居の年代は5世紀末ごろと推定される。(宇垣)

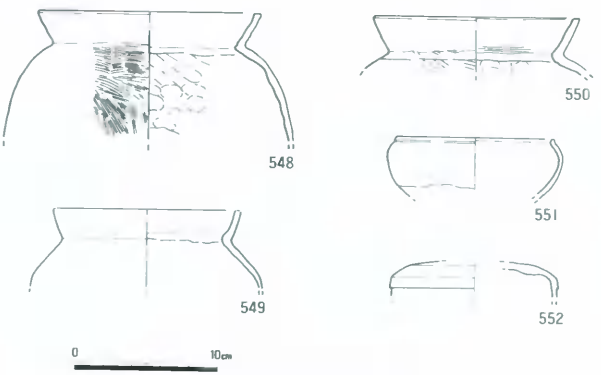


第206図　竪穴住居23

竪穴住居22（第204・205図、図版36）

9B・C区で検出された方形の竪穴住居で、西隅は削平のため明確でない。規模は一辺4.10mを測る。住居の北東やや南寄りの壁にはカマドが付設されている。削平のため煙道部の残りは良くないが、燃焼部は床面を少し掘り凹めており、中央には細長い石を立てて支脚としている。柱穴は精査したが検出されなかった。

遺物は土師器・須恵器以外に鉄器、砥石が出土した。土師器には甕と高杯が認められる。539は口縁部に少し上方への屈曲が認められる。541はやや長



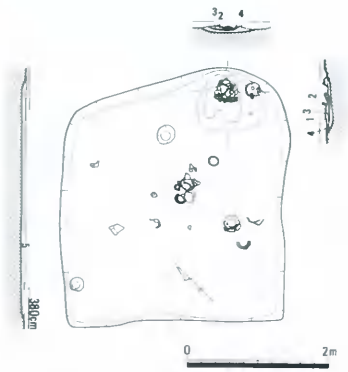
第207図　竪穴住居23出土遺物

く外反ぎみに立上る口縁部をもち、その端部は内側にわずかつまみだされる。543～547は高杯である。須恵器は杯蓋542で、天井部との境は段がめぐる。

S33は砥石である。M28は鉄鎌と考えられる。住居の時期は出土した土器から５世紀末～６世紀初め頃と考えられる。（平井）

竪穴住居23（第206～207図、図版37）

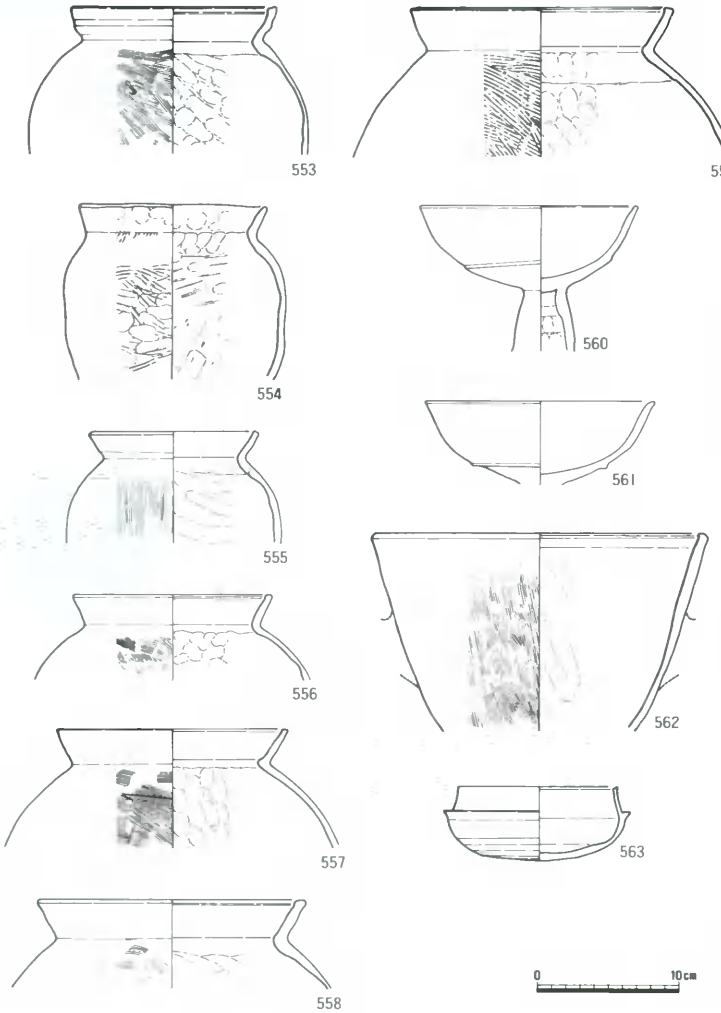
９Ｂ区で検出された方形の竪穴住居で、北東隅と南壁の一部は後世の遺構によって削られている。規模は一辺4.5mを測る。住居内は壁にそって溝がめぐるが、カマドの両側に掘られた小ピットで終る。カマドは西辺の中央からやや北寄りに付設されており、煙道部は削平のため住居からあまり外へ延びない。燃焼部は長楕円形に少し掘り凹め、その中央には細長い石を立てて支脚にしている。燃焼部の底部はあまり焼けていないが、両側の壁は赤褐色に良く焼けている。柱穴は４箇所認められ、ややいびつであるが４本柱と考えられる。



１．焼土　２．褐色土（焼土粒含む）３．焼土
４．赤褐色土　５．淡茶黄色微砂

第208図　竪穴住居24

遺物は土師器と須恵器が出土した。土師器は甕と鉢が認められる。甕はいずれもくの字状に外反する口縁部をもつもので、その上端部は平



第209図　竪穴住居24出土遺物

坦に仕上げられる。551は鉢で、口縁端部はわずかにつまみ上げられる。須恵器は杯蓋563で、天井部と口縁部の境には段状の鋭い稜線がみられる。これらの土器は5世紀の終り頃と考えら

れる。（平井）

竪穴住居24（第208・209図、図版38・79・80）

10B区で検出された方形を呈する竪穴住居である。規模は一辺3.05mを測る。北東辺の東寄りには厚さ5cm前後に硬く焼けた焼土面がある。この焼土面は北東辺の壁から突出するような位置にあり、当初カマドかと考えたが、底の焼け方が他のカマドとは異なることから炉床とした。炉床の中央には石と土師器の甕が押しつぶされた状態で認められた。柱穴は床面を精査したが検出することができなかった。

遺物は土師器と須恵器に加え、鉄製品や獣骨が出土した。553～562は土師器で、このうち553～559は甕である。553は口縁部に二重口縁の様相が認められるが、他はくの字状に外反する口縁部である。554と555を除いていずれも口縁端部上面に面をもち、内面に少しつまみ出す特徴をもつ。胴部内面は一部にヘラ削りが認められるものの、ほとんどは指で押さえつけながらナデている。560と561は高杯の杯部である。562は甑であるが、把手は剝落している。563は須恵器の杯で、口縁部は長く立ち上り、その上端部に面をもつ。以上の土器は土師器に布留式の特徴を残しており、また須恵器も比較的古い様相をもっている。このことから本住居が廃棄されたのは5世紀終り頃を前後する時期と考えられる。（平井）

竪穴住居25（第210図、図版38）

竪穴住居20の埋没後、重複して設けられた竪穴住居であるが、遺存状況は同様に不良である。住居の規模は南北5.18mで、4本の柱をもつ。柱穴は方形気味でそのうちの2本には柱痕跡が認められた。床面が遺存するのは東壁に近い部分に限られており、竈の有無等については不明である。北辺の一部では壁溝が認められたが、それ以外の部分では検出できなかった。覆土は淡褐灰色砂質土である。

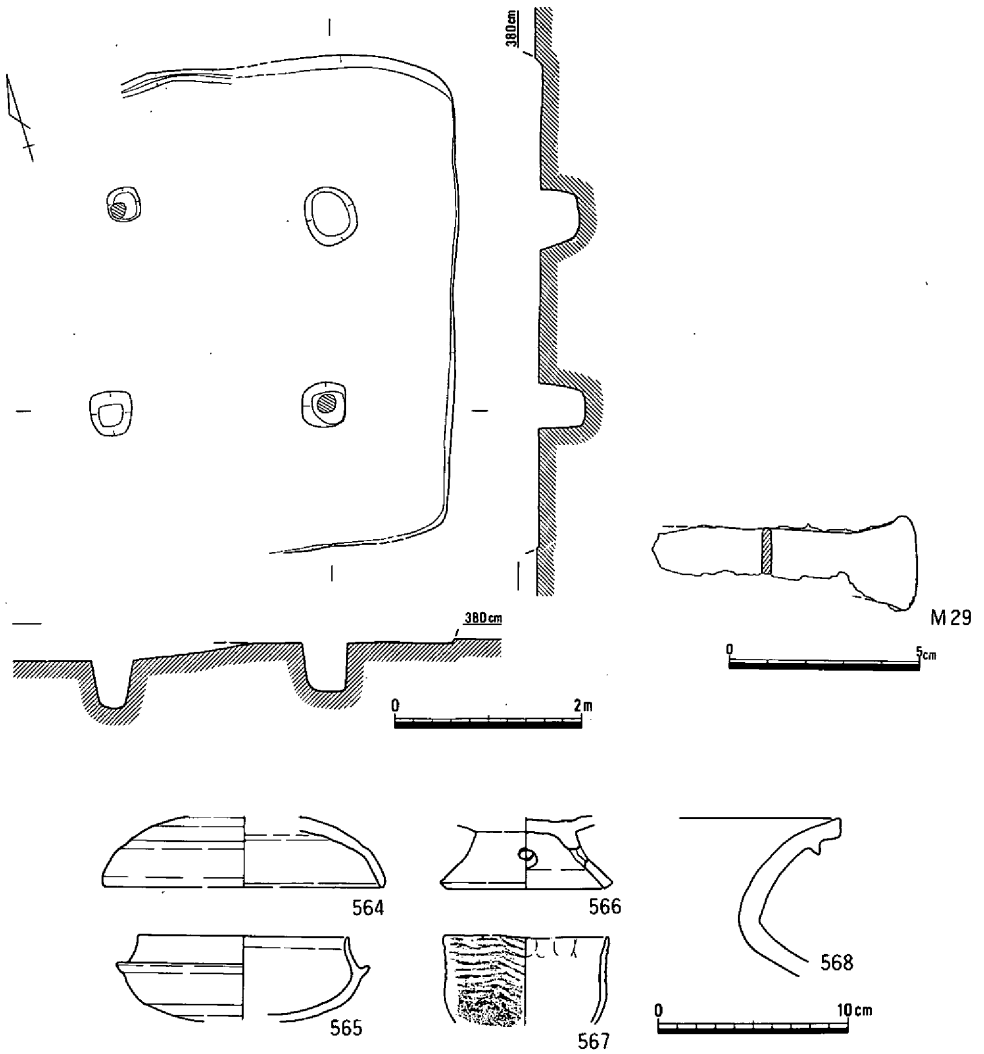
鉄器M29は北西の柱穴から出土したが、欠損が著しく器種が明かでない。567は体部上半にタタキを施す製塩土器であるが、この住居に先行する竪穴住居21に伴う可能性がある。出土須恵器564～566、568はかなり年代幅があり、どれが伴うのか判然としない。一応、最も新しい杯蓋564から推定される6世紀後半と考えておく。（宇垣）

竪穴住居26（第211図）

8D区の北隅で検出した住居であるが、近世の掘削や用水路による削平のため、北東半の床面と北・東壁の一部しか遺存していない。精査したが柱穴は認められなかった。覆土は灰褐色土である。出土遺物としては須恵器高杯568と土師器甕570があるが、いずれも小破片であり、住居の年代は古墳時代後期とするにとどめざるをえない。（宇垣）

竪穴住居27（第212図、図版36・80）

竪穴住居21の南側に所在し、竪穴住居12を切って造られている。住居の規模は東西3.82m、



第210図　竪穴住居25・出土遺物

南北4.00mである。竈が南東壁のやや南寄りの部分につくようであるが、この付近に削平が及んでいることもあって遺存状態が良くなく、竈底の焼土面と炭・灰の堆積が部分的に残っているだけであった。柱穴は検出できなかった。覆土は褐灰色土であった。

出土遺物としては須恵器571、572、土師器573～575、製塩土器576があり、土師器椀575は竈の南側から、製塩土器576は南西壁付近に破片が密集した状態で出土した。このうち576は器形の半分が接合復原できたもので、外面の口縁部付近には不規則な格子状の叩きが、内面には二枚貝条痕が施される。杯蓋571の形状からみて住居の年代は6世紀後半と推定される。

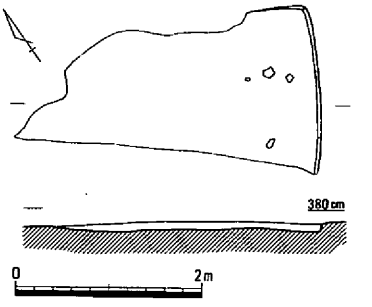
（宇垣）

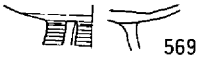
竪穴住居28（第213図）

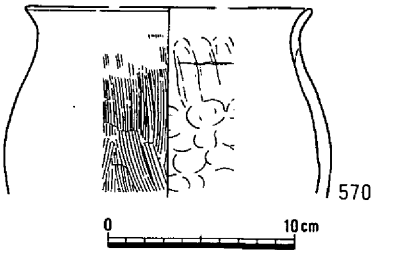
８Ｄ区の東隅、竪穴住居28の南側で検出した住居である。用水路による削平のため、ごくわずかの範囲しか遺存しおらず、さらに残存部の西端は建物31によって切られている。覆土は褐色粘質土であるが遺物を含んでいないため、住居の年代は古墳時代後期とするにとどめざるをえない。　（宇垣）

竪穴住居29（第214図）

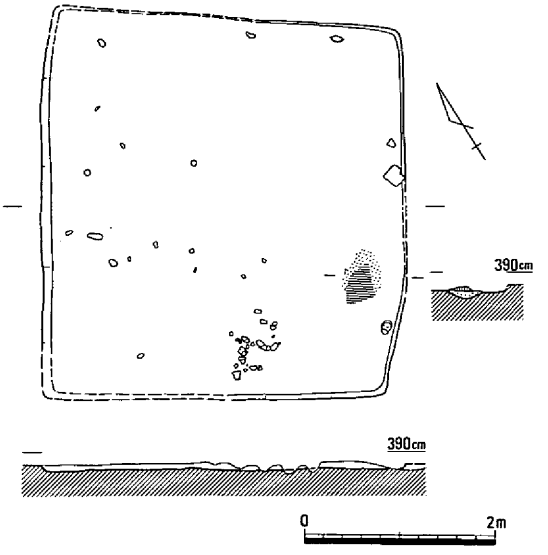
８Ｃ区西側で検出した住居で、竪穴住居30を切っ

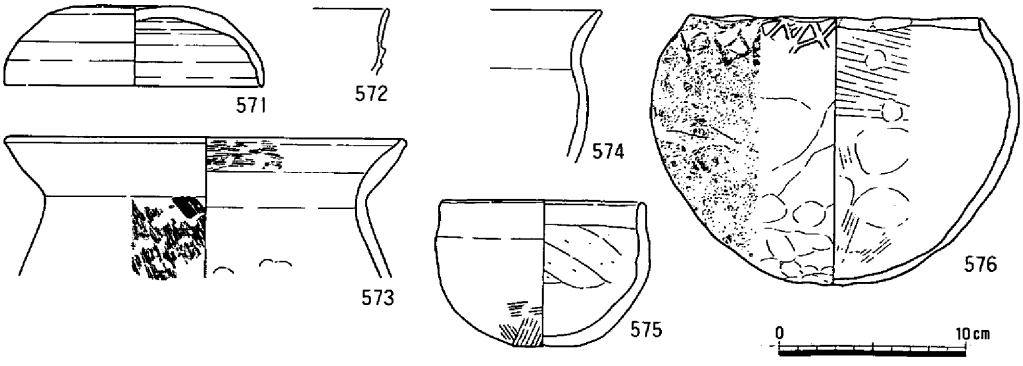




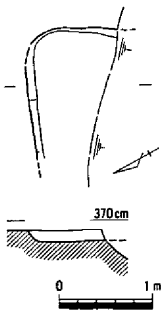


第211図　竪穴住居26・出土遺物

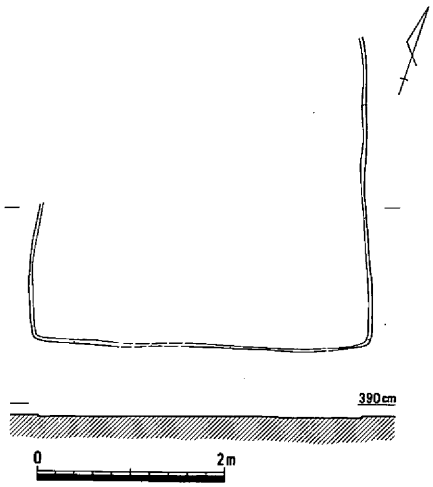




第212図　竪穴住居27・出土遺物



第213図　竪穴住居28



第214図　竪穴住居29

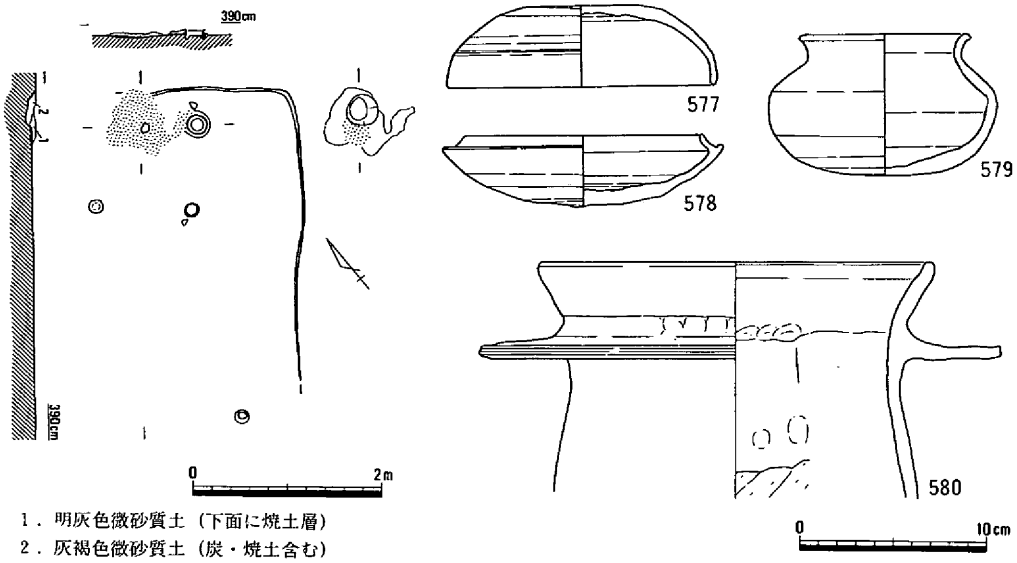
て作られている。北側は削平のため遺存しておらず、南半部もほとんど床面のみの検出である。住居の規模は東西3.62mである。遺物を伴っていないため、竪穴住居30の６世紀末よりも新しいと言えるのみである。（宇垣）

竪穴住居30（第215図、図版41・80）

この住居も床面の一部がかろうじて残存しているもので、規模も不明である。北東の壁の中央付近に竈が設けられているが、削平を受け径約30cmの楕円形の焼土面とそれを覆う焼土・炭層が認められるのみであった。竈の東側には羽釜形土器580の頸部以下を打ち欠いたものが置かれており、部分的に焼土・炭で覆われていた。実測図には付近から出土した胴上部破片を接合したものを示している。また、竈の西側からは杯蓋577が伏せた状態で、南側からは杯身578が置かれた状態で出土しており、さらに南側から短頸壺578が出土した。なお、竪穴住居29も同様であるが、精査したが柱穴は検出できなかった。出土の須恵器はＴＫ209型式に位置付けられ、後述の建物群と同じ時期である。（宇垣）

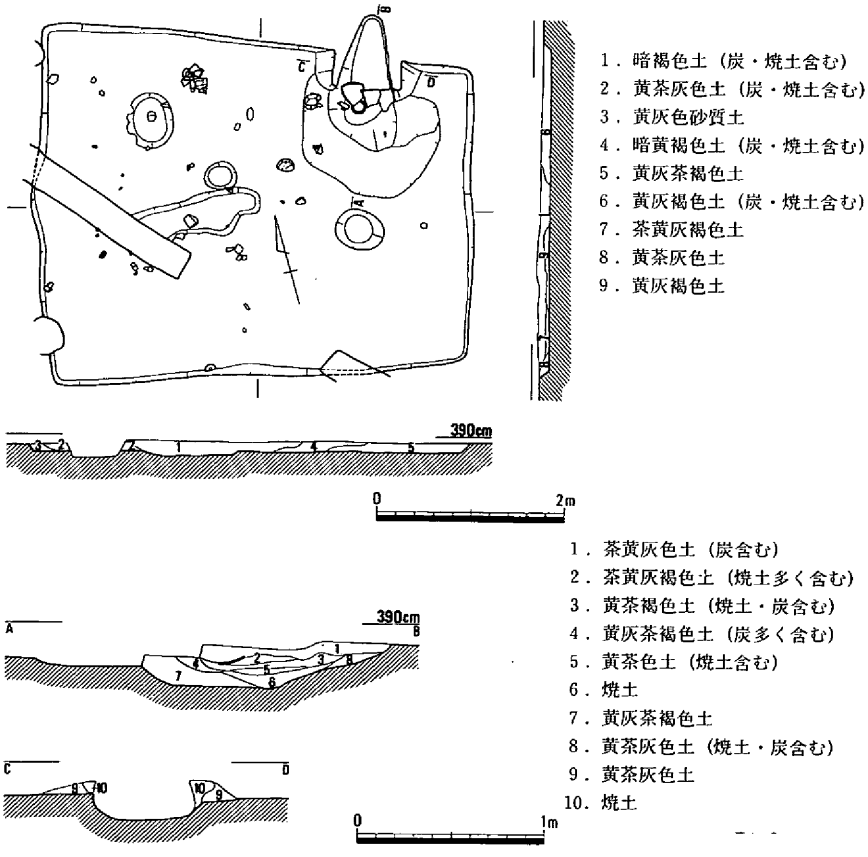
竪穴住居31（第216・217図、図版39・80）

９・10Ｂ区で検出されたカマド付の竪穴住居である。平面形は西辺に比べて東辺が若干短いため長台形を呈する。規模は長軸で4.65m、西側短辺3.55m、東側短辺3.10mを測る。北側の長辺東寄りにはカマドが付設されている。カマドの煙道部壁は良く焼けているが、少し掘り凹めた燃焼部の底はあまり焼けていない。燃焼部からは底から少し浮いた状態で、須恵器の杯と甕の破片が出土した。これらの須恵器は焼けておらず、また底からも浮いていることから、カマドの廃棄後に敷かれたものと考えられる。住居の埋土には炭や焼土が多く含まれていた。なお柱穴については、床面を精査したがそれらしい痕跡を認めることができなかった。



1．明灰色微砂質土（下面に焼土層）
2．灰褐色微砂質土（炭・焼土含む）

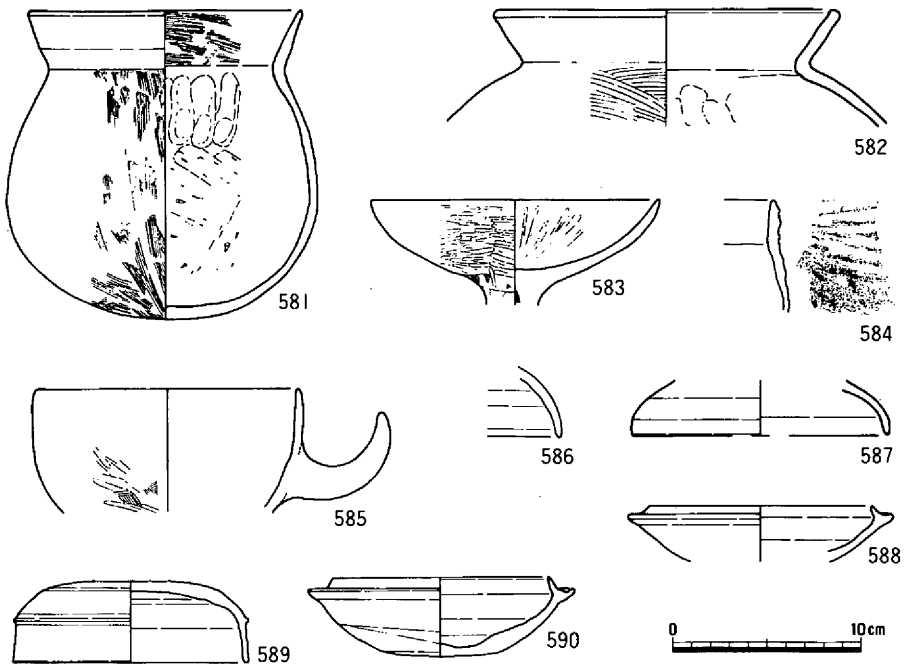
第215図　竪穴住居30・出土遺物



1．暗褐色土（炭・焼土含む）
2．黄茶灰色土（炭・焼土含む）
3．黄灰色砂質土
4．暗黄褐色土（炭・焼土含む）
5．黄灰茶褐色土
6．黄灰褐色土（炭・焼土含む）
7．茶黄灰褐色土
8．黄茶灰色土
9．黄灰褐色土

1．茶黄灰色土（炭含む）
2．茶黄灰褐色土（焼土多く含む）
3．黄茶褐色土（焼土・炭含む）
4．黄灰茶褐色土（炭多く含む）
5．黄茶色土（焼土含む）
6．焼土
7．黄灰茶褐色土
8．黄茶灰色土（焼土・炭含む）
9．黄茶灰色土
10．焼土

第216図　竪穴住居31



第217図　竪穴住居31出土遺物

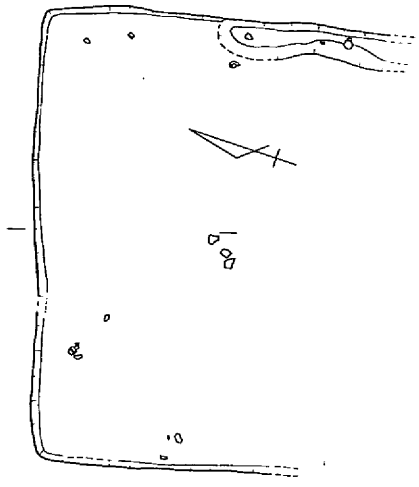
遺物は須恵器と土師器以外に鉄製品や獣骨が出土した。581～583・585は土師器である。581はくの字状に外反する口縁部をもつ甕で、胴部最大径は下位にある。582も甕で、口縁端部内面がわずかにつまみ出される。583は高杯の杯部、585は把手の付く椀である。584は製塩土器で、外面には荒いタタキが認められる。586～590は須恵器である。586・587・589は杯蓋、588・590は杯である。以上の土器を見ると新旧２時期に分けられるが、カマド内に敷かれていた590から、この住居の廃絶はおよそ６世紀終りから７世紀初め頃と考えられる。

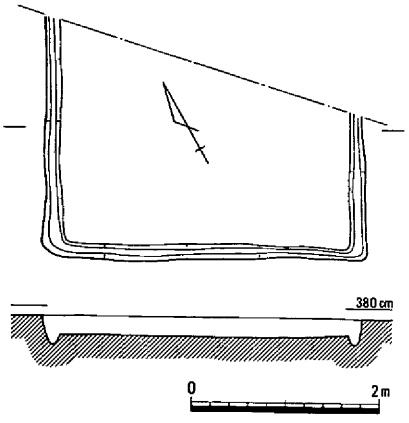
（平井）

竪穴住居32（第218図、図版40）

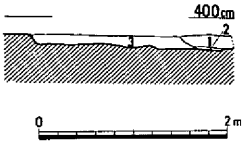
９Ａ区北端、10Ｚ区にまたがって検出され、溝47に切られている。平面形態は方形を呈すが上部の削平が激しく、南部分は検出し得なかった。規模は一辺4.9m、検出面から床面まで約10cmを測る。柱穴および壁体溝は確認できなかったが、東壁中央付近からは壁に沿って幅約30cm、長さ180cm以上、深さは床面から約10cmの溝状を呈す部分を検出している。遺物は少なく、床面から出土した土器もまばらに破片が散在する状況であった。土師器甕・高杯、須恵器杯身・杯蓋などが出土している。６世紀末～７世紀初頭にかけてのものであろう。

（江見）

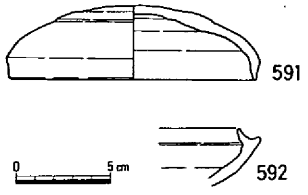




第219図　竪穴住居33



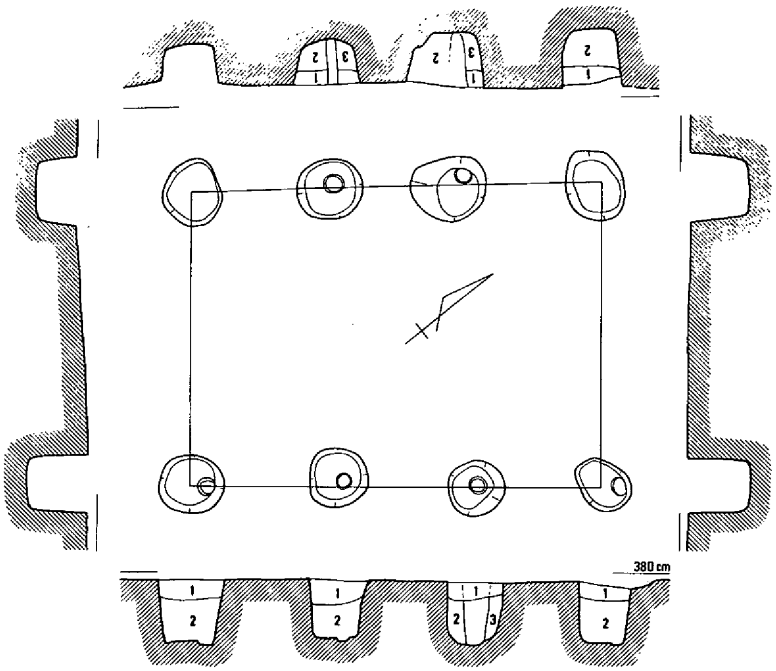
1．淡褐灰色粘質土
2．褐灰色粘質砂
3．淡褐灰色粘質砂



第218図　竪穴住居32・出土遺物

竪穴住居33（第219図）

9A区の北東に位置し、住居北側は一部調査区外に延びる。平面形態は方形を呈し、規模は一辺3.85m、床面までの深さ約20cmを測る。住居端には幅約15cm、深さ約10cmの壁体溝が巡っているが、柱穴は確認されなかった。住居内には淡茶灰色粘質土が堆積しており、遺物は土器細片が数片出土するのみであった。古墳時代後半期のものであろう。（江見）



1．茶褐色粘質土
2．茶灰色粘質土（黄色土塊含む）
3．茶灰色粘質土（黄色土塊多く含む）

第220図　建物29

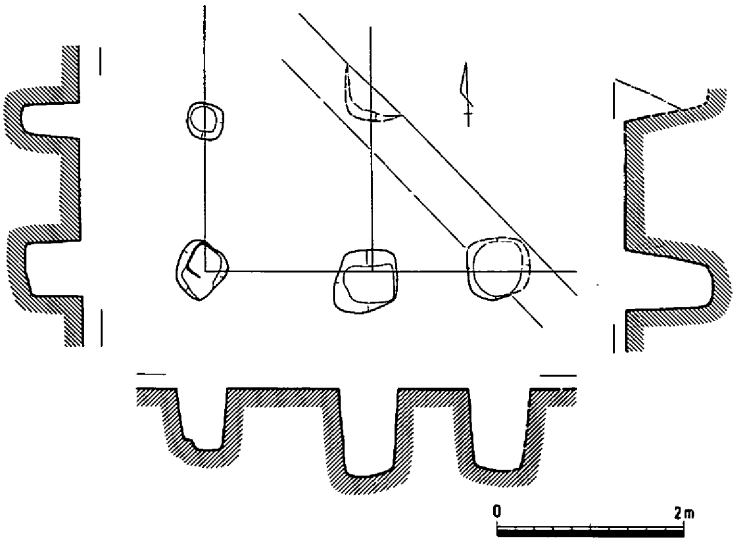
(2)　建物

古墳時代の建物は19棟を検出したが、その大部分は後期後半のものである。特に溝38の南側では軸線を同じくする建物が密集して検出されている。

建物29（第220図、図版41）

８Ｃ区南側で検出した。柱間は３間×１間で、桁行4.35ｍ・梁間3.25ｍと比較的大きな建物である。柱穴は径60～70㎝の円形で、検出面からの深さは60㎝内外である。断面のいくつかでは柱痕跡が認められ、他のものも底面に径15～20㎝柱根跡が認められた。

建物の軸線は南西―北東方向で、建物31に直交するような配置になっているが、両者の時期はまったく異なるものである。柱穴埋土からは弥生土器小片しか出土していないため時期の限定が困難であるが、竪穴住居12に切られていることから、百・古・１ないしそれ以前とすることができる。したがって、弥生時代の建物である可能性も十分に考えられるが、弥生時代の遺構よりも高い位置で検出しており、また、弥生時代の遺構に切られていないことから、古墳時代初頭のものと推定した。さかのぼっても弥生時代後期末よりも古くなることはないと思われ



第221図　建物30

る。　（宇垣）

建物30（第221図）

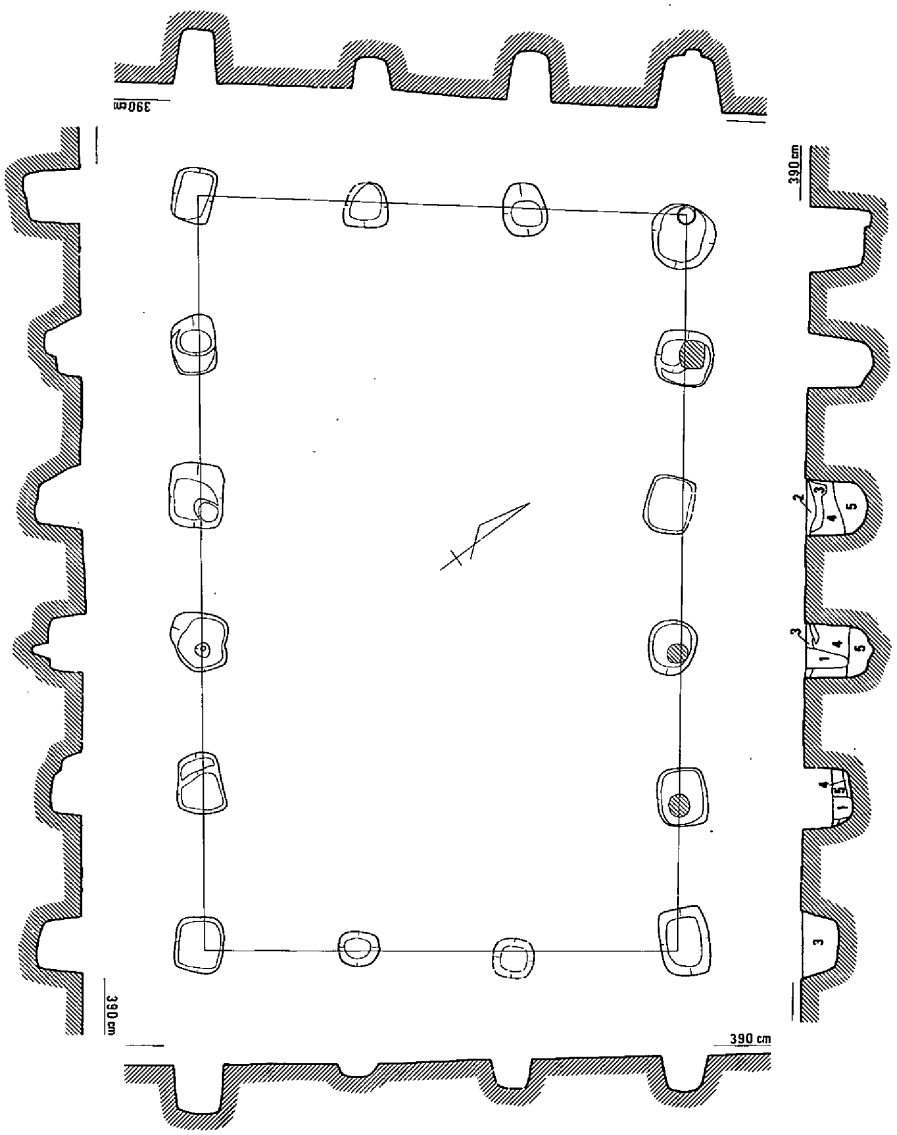
７Ｃ区の東縁で検出した古墳時代後期の建物であるが、主要部は調査区の外になる。北西端の柱穴は近現代の用水路によって削られており、さらにその西側一帯は近世の土取りによって大きく掘削されている。柱穴はほぼ方形の平面で、南側中央の最も状態の良いもので東西70cm、南北65cm、深さ92cmを測る。中央および東側の柱穴は規模、深さともにほぼ一致するのに対し、西側の２本はやや浅く平面形も小さい。ここでは、この西側の２本の柱穴を庇と考えたが、柵あるいは別の建物となる可能性もある。柱穴埋土中には須恵器破片が含まれており、古墳時代後期の建物と判断できる。　（宇垣）

建物31（第222図、図版42）

８・９Ｃ区で検出した東西８m、南北5.15mを測る大形の建物である。柱間は５間×３間で軸線を北西一南東方向にとる。柱穴の平面形はおおむね方形をなし、平均的な大きさのもので長さ60cm、幅55cm、深さ60cmを測る。柱穴埋土は砂質土を基調とし、柱痕跡を残すものもある。それぞれの柱穴の深さはややばらついているが、四隅が他よりも深くなる傾向にあるように見受けられる。

柱穴埋土のいくつかから須恵器甕胴部破片が出土しており、古墳時代後期の遺構と判断できる。　（宇垣）

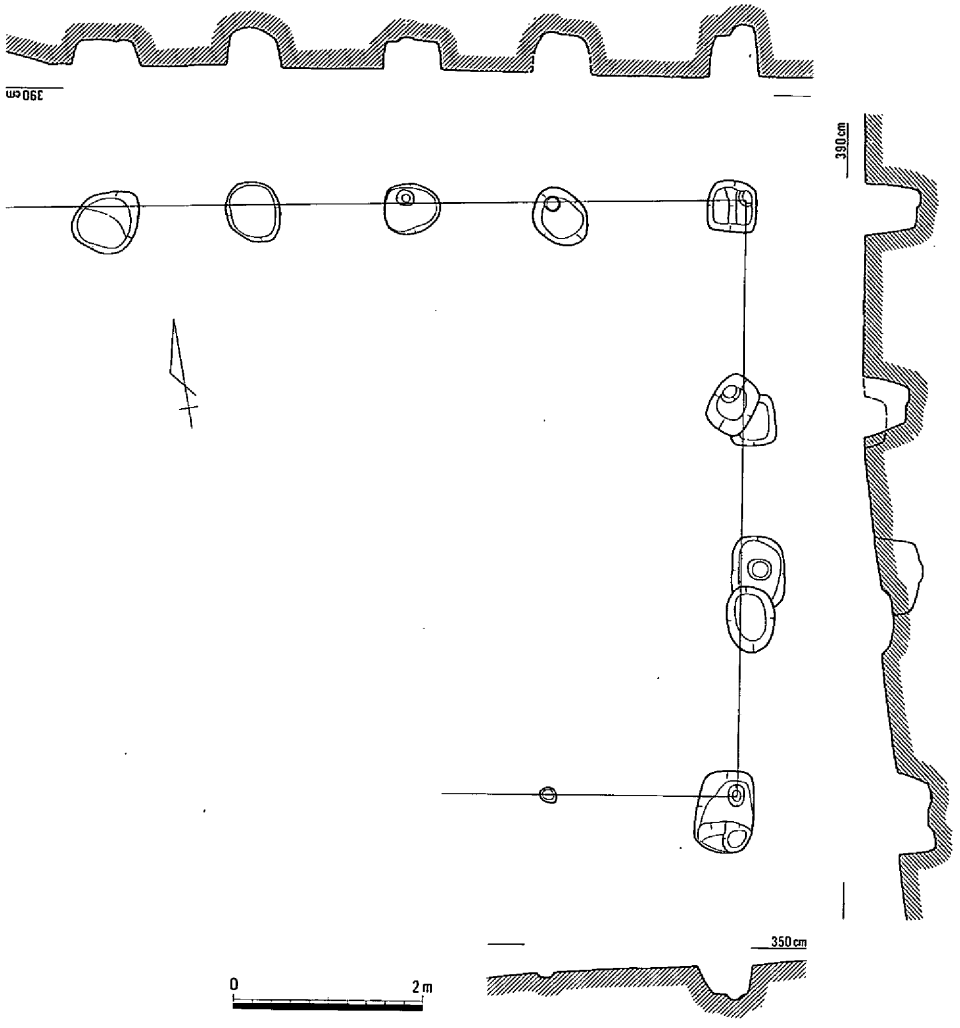
建物32（第223図）



1．暗灰褐色土　2．黄灰色砂　3．黄灰色砂質土
4．暗黄灰色粘質土　5．暗灰色粘質土　0　2m

第222図　建物31

建物29の南側、９Ｄ区北隅付近で検出した大形の建物であるが、西側および南側が用水路によって削られており、南辺は東隅の柱穴とそれに続く柱穴の下底がをわずかに残るにすぎない。軸線をほぼ東西にとり、梁間は３間で6.2m、桁行は残存部が４間で長さ7.2mを測る。両隅の柱穴が最も深くなる東辺のありかたからみて、北辺が現状で終わるとは考えられず、さら



第223図　建物32

に１ないし２間西に伸びると考えられ、10m前後の長さになると推定される。今回検出した古墳時代後期の建物のなかでは最大のものである。

柱穴は建物31と同様に方形を呈するものと、楕円形の平面になるものとがある。北東角の柱穴を例に取れば東西53cm、南北55cm、深さ60cmである。東辺中央の柱穴２基は柱穴の掘り直しが認められ、当初は南北の角を結ぶ線よりもやや外側に柱が配置され、後に線上に配置し直されたと見ることができる。また、東南隅の柱穴では底の２ヶ所に柱根跡とみられるくぼみがあり、柱の建て替えないし改修がなされているようである。柱穴の埋土には須恵器片が含まれており、建物31などと同様、古墳時代後期の建物である。　（宇垣）

建物33

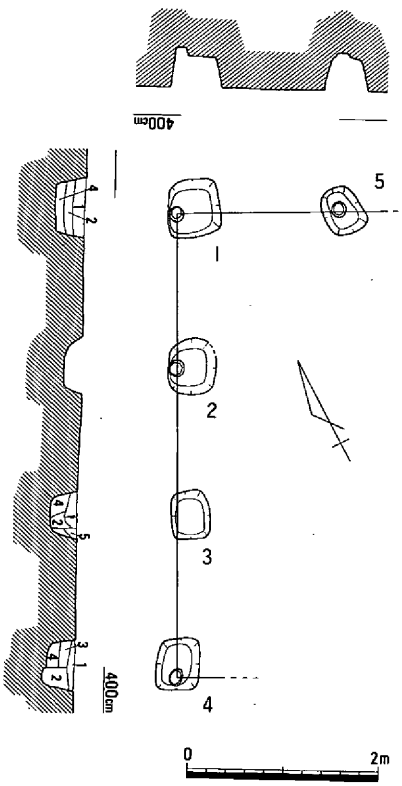
建物31の南東で検出した2基の柱穴からなる。長さ70～55cm、幅45～50cmの隅丸長方形を呈し、深さは25～40cmを測る。二つの柱穴の柱根跡の距離は165cmで、建物31の柱間の距離とほぼ同じである。埋土は暗褐色砂質土で須恵器破片を含んでおり、他の建物と同じ古墳時代後期のものと思われるが、これら以外には柱穴を検出できなかった。建物31と同様の軸線になると思われるが、これが建物の南北どちら側の辺なのか不明である。

（宇垣）

建物34（第224図）

9B・C区に検出された3間×1間以上の建物である。柱穴の掘り方は、長辺50～60cm、短辺45～55cmの隅丸方形を呈し、深さは約20～40cmを測る。柱穴内には径15cm前後の柱痕跡が認められ、柱痕間は約160cmを測る。この建物は、北東に10m程離れて検出された建物35と方位を同じくするため、同時期に存在した可能性が強い。

遺物は、柱穴の掘り方から数片の弥生土器や須恵器小片が出土しており、建物時期の特定はできないものの、古墳時代後期と思われる。（柳瀬）



1．灰黄褐色砂　4．黄灰色土
2．暗灰黄色砂　5．灰黄色砂
3．灰褐色土

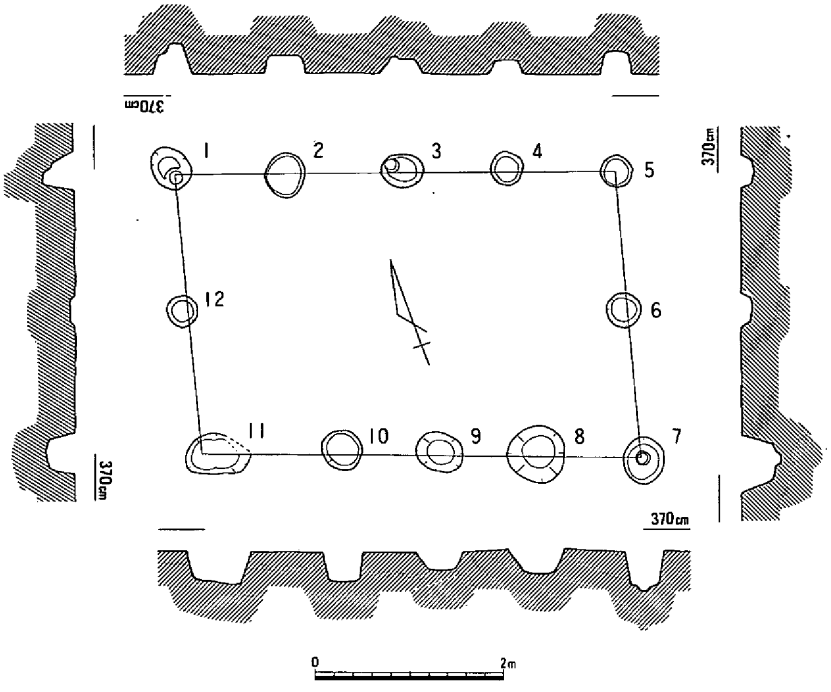
第224図　建物34

建物35（第225図、図版43）

8・9B区に検出された4間×2間の建物である。柱穴の掘り方は、径約35～60cmのほぼ円形を呈し、深さは20～30cmのものが多い。柱穴間の距離は桁行方向で110cm前後、梁間方向で150cm前後を測る。この建物は、9B区の建物34、9・10A区の建物38・39と建物方位を同じくし、とくに南側の桁行方向の柱穴列は建物38・39の南側の梁間方向の柱穴列と、同一線上に一致する。そのため、この建物はこれらの建物とほぼ同時期に存在した可能性が強い。ただ、建物38・39などは柱穴の掘り方が隅丸方形を呈するのに対し円形で小規模なため、多少の時期差があるかあるいは建物の性格に違いがあるかの何れかが考えられる。

遺物は、柱穴の掘り方から弥生土器・土師器・須恵器の細片が少量出土しているのみである。

（柳瀬）



第225図　建物35

建物36（第226図、図版42）

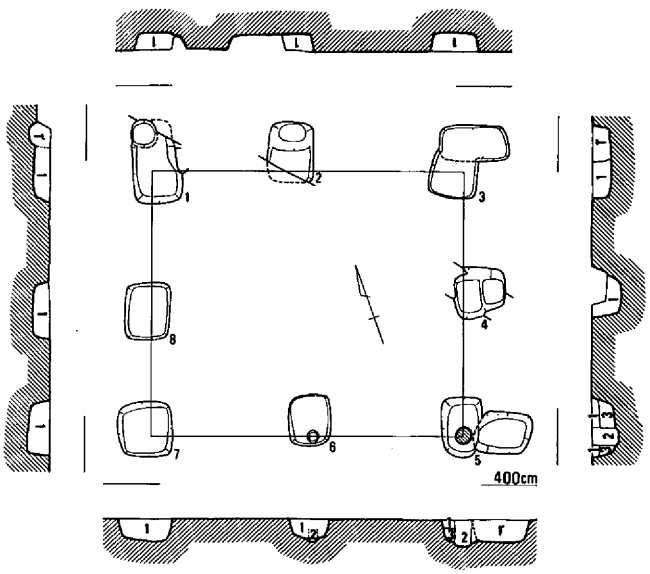
９・10Ａ・Ｂ区にまとまる４棟の建物のうち、建物38・39の南西側に方位を同じくして建てられた、２間×２間の東西棟建物である。規模は柱痕跡がないため明確でないが、梁間2.8m、桁行3.3mを測る。柱掘り方はやや隅の丸いものもあるが、基本的には方形で、１辺が50～60cmである。北と東側の柱掘り方の外側には一部重なるように柱掘り方が並ぶ。その先後関係は明確にし得なかったが、建替えによる拡張と考えられる。

遺物はわずかであるが、Ｐ８から土器が出土している。いずれも須恵器で、593は杯蓋、594は高杯の脚部である。２点の須恵器は時期が異なるが、建物の時期は593の示す６世紀終りから７世紀初め頃と思われる。（平井）

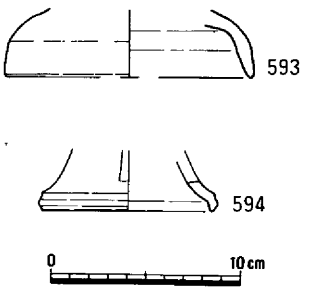
建物37（第227図、図版42）

９Ａ・Ｂ区で検出された建物で、建物38の西側に位置するが、他の３棟とは方位が少し異なりやや東に偏する。一部柱掘り方を確認し得ていないが、２間×２間の南北棟建物と考えられ、桁行3.7m、梁間3.1mを測る。柱掘り方は基本的に一辺50～60cmの方形を呈する。柱痕跡はＰ４・５・６に認められ、その柱間はＰ４・５間で190cm、Ｐ５・６間で160cmを測る。

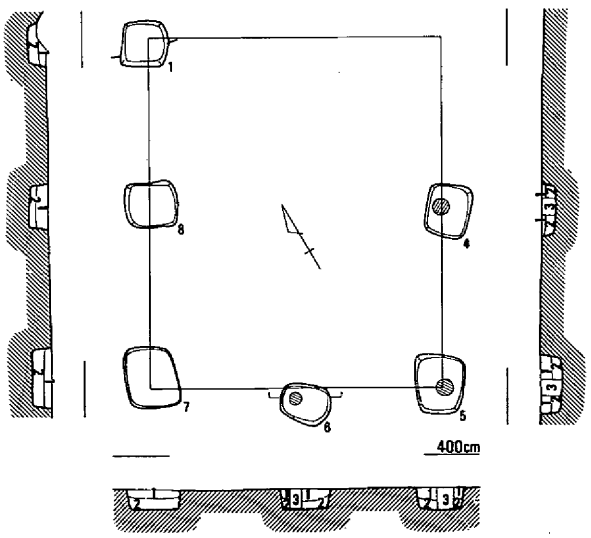
遺物はわずかに須恵器の細片が出土しているが、時期を比定できるものではない。建物の時



1．黄灰色微砂　2．黄灰茶色微砂
3．茶黄灰色砂質土　4．茶灰色砂質土



第226図　建物36・出土遺物



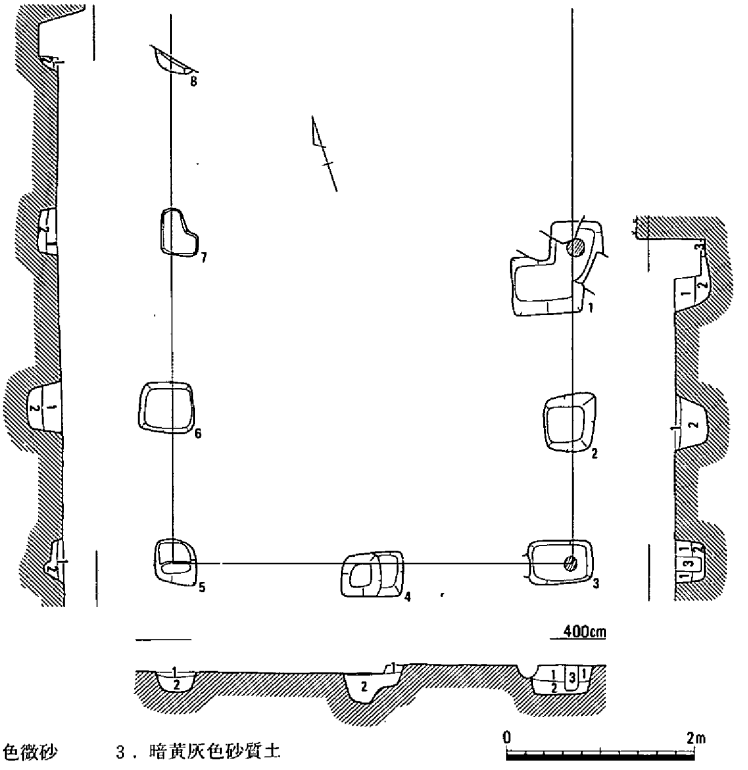
1．黄灰色微砂　3．灰褐色粘質土
2．茶黄灰色砂質土

第227図　建物37

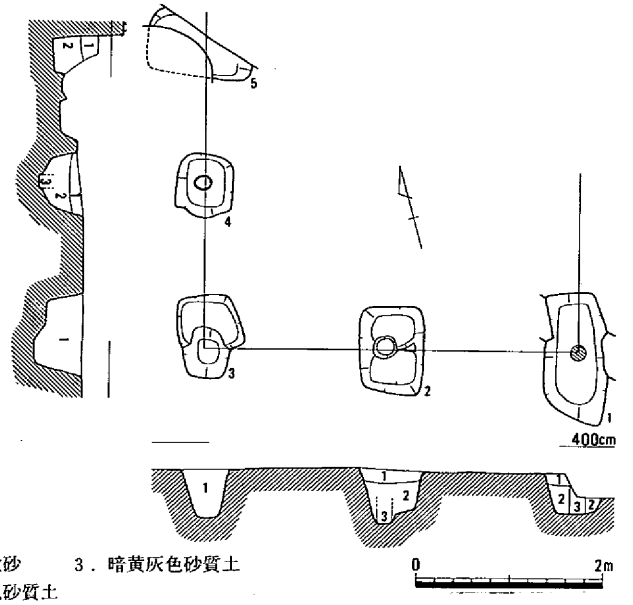
期は、検出面および柱掘り方の埋土から他の建物に近い時期と推定される。　（平井）

建物38（第228図、図版42）

9・10A区で検出された南北棟の建物で、建物39と南辺の柱筋を揃えている。建物の北側は調査区外のため明確でないが、桁行は3間ないしそれ以上、梁間は2間である。規模は桁行5.5mかそれ以上、梁間4.2mを測る。柱掘り方は基本的に一辺40～70cmの方形であるが、P3・4などは長方形を呈する。P1は二つの柱掘り方が切り合っており、長方形のP3・4なども二つの柱掘り方が重なっ



１．黄灰色微砂　　３．暗黄灰色砂質土
２．茶黄灰色砂質土



１．黄灰色微砂　　３．暗黄灰色砂質土
２．茶黄灰色砂質土

第228図　建物38(上)・39(下)

た結果と考えれば、建て替えが推定される。

遺物はわずかに須恵器の細片が出土しているが、時期を特定できるものではない。建物の時期は、建物36などと方位を揃えていることからほぼ同時期と考えられる。（平井）

建物39（第228図、図版42）

10A区で検出された建物で、建物38の東側に平行し、かつ南辺の柱筋をも揃えている。北側は調査区外となるため全体は不明であるが、桁行２間以上、梁間２間となる。規模は桁行3.3mないしそれ以上、梁間3.9mを測る。柱掘り方は方形ないし長方形で、一辺が60～140cmである。Ｐ３は柱掘り方が切り合っており、Ｐ１・２もその可能性がある。

遺物は須恵器の細片がわずかに認められるが、詳細な時期は不明である。建物の時期については、建物36・38と方位を同じくすることから、ほぼ同時期と考えられる。（平井）

建物40（第185図）

10A区で検出された建物であるが、細長い調査区に柱掘り方が２個所認められたのみであり、不明な点が多い。柱掘り方は一辺50cm前後の方形を呈し、柱痕跡も認められる。その柱間距離は2.2mを測る。

遺物は出土しなかったが、建物の時期は検出面および埋土から古墳時代後期と考えられる。（平井）

建物41・建物42（第229図、図版43）

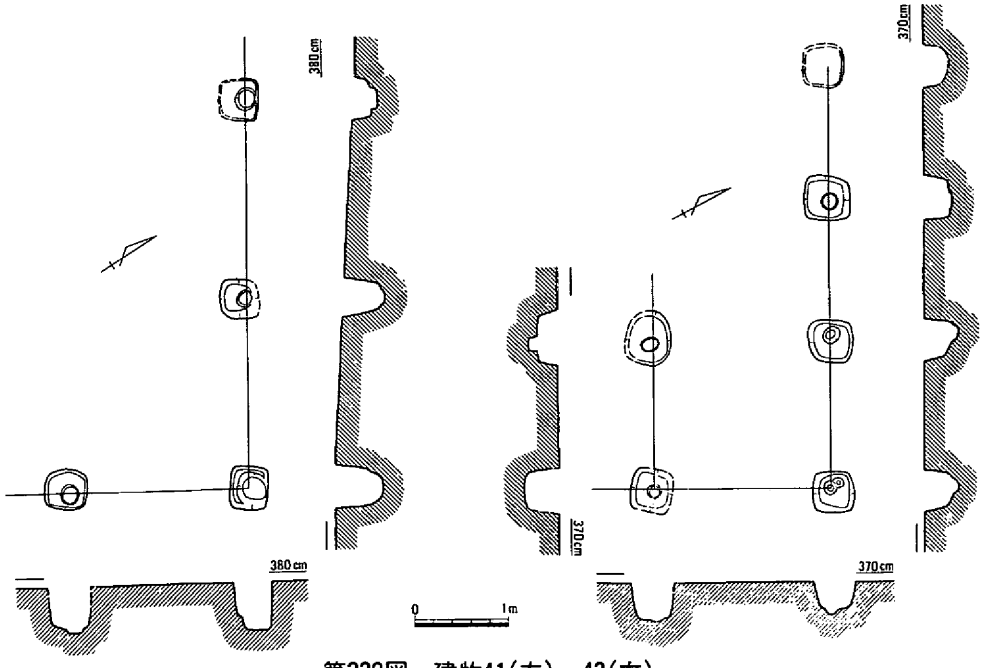
A区11ライン付近で検出した建物で、２棟が重複している。いずれも建物東隅から北辺にかけての部分が調査区に所在しており、北辺が若干調査区側に出る建物42が建物41を切っている。

建物41は２間以上×１間以上で、北西一南東方向の柱間が平均207cm、北東一南西方向の柱間が190cmを測る。他の建物の多くが桁行と梁間で柱間の長さがかなり異なっているのに対し、この建物では大きな差は認められず、建物42と同様に倉である可能性が考えられる。柱穴の平面形は方形で、長さ約45cm、幅約40cm、深さ約50cmである。

建物42は３間以上×１間以上の柱間であるが、建物内側に柱穴が配置されており、総柱の倉になると考えられる。北西一南東方向の柱間が平均154cmであるのに対し、北東一南西方向の柱間は190cmであり、前者がやや狭くなっている。柱穴の平面形および規模は建物41のものとほぼ同じであるが、深さが35cm前後とやや浅くなっている。

この建物41と42は同じ場所で少し位置をずらせて建て替えられた倉と考えられる。東側に所在する建物43も倉であるが、建物41と建物43の距離は2.8mであり、２棟の倉が近接して所在したのか、３回の建て直しの結果であるのか判断しがたい。（宇垣）

建物43（第230図、図版43）



第229図　建物41(左)・42(右)

北東一南西方向3.90m、北西一南東方向3.65mを測る2×2間の倉で、11A区北端で検出した。南端の柱穴は側溝にかかっており、断面等から復原した。

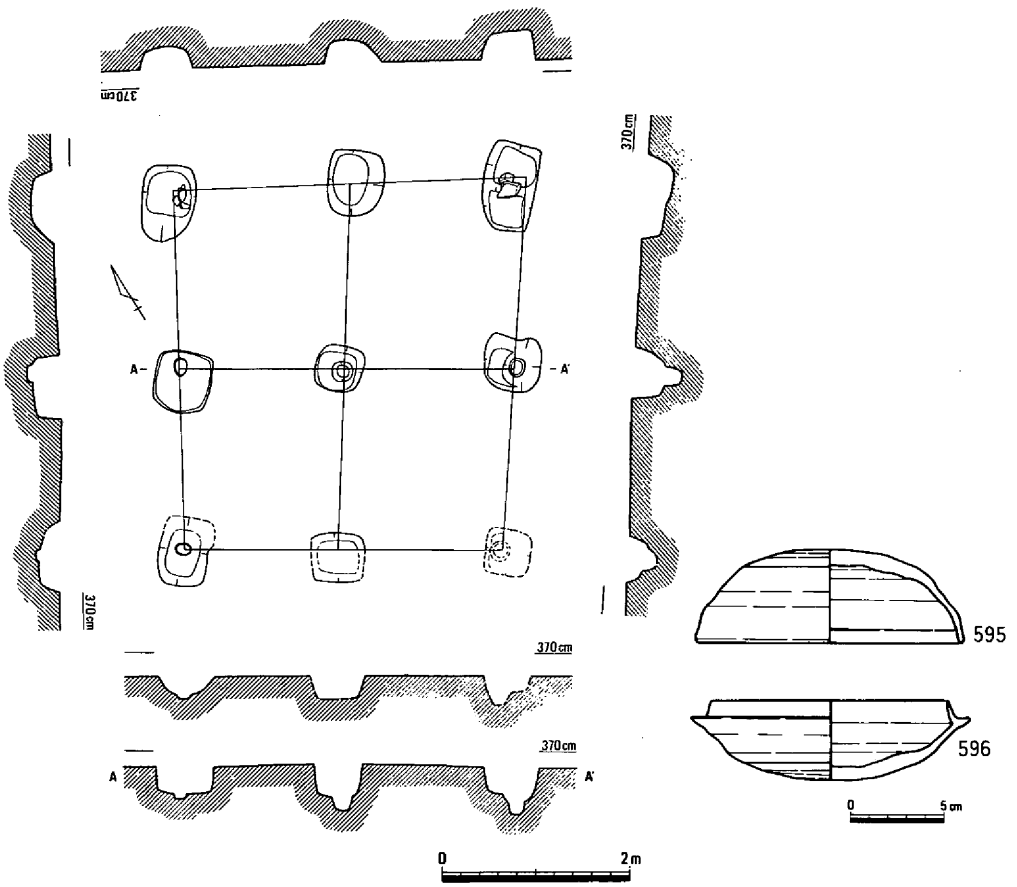
柱穴は四隅のものが長さ約90～80cm、幅55cmの長方形、他のものが長さ60cm、幅50cm前後の方形で、深さは51～23cmである。埋土はいずれも黒褐色砂質土である。なお、北隅の柱穴内からは須恵器杯蓋595・杯身596が出土した。この二つの須恵器は接合によって完形に復原でき、柱穴内に埋納されたものと思われる。　(宇垣)

建物44（第231図）

9Z区中央西寄りに位置し、一部調査区外に延びる桁行2間以上×梁間2間の南北棟建物である。桁行4m以上、梁間3.80mを、桁行の柱間は1.8m～2m、梁間のそれは1.9mを測る。柱穴の平面形態はやや丸みをもつ方形で、長さ30～50cm×30～50cm、深さ10～20cmを測る。埋土は褐灰色砂質土である。遺物は須恵器を含む土器細片が出土しており、時期は6世紀末から7世紀初頭と考えられる。なお、後述する溝49とほぼ同方位を示す。　(江見)

建物45（第231図）

9Z区中央東寄りに位置し、一部調査区外に延びる桁行3間以上×梁間2間以上で、南側に庇をもつ、棟がやや南に振る東西棟建物と推定される。桁行6m以上、梁間4m以上、桁行の柱間は1.9～2.2m、梁間のそれは1.8～2mを測る。柱穴の平面形態は方形・円形の両方あり、

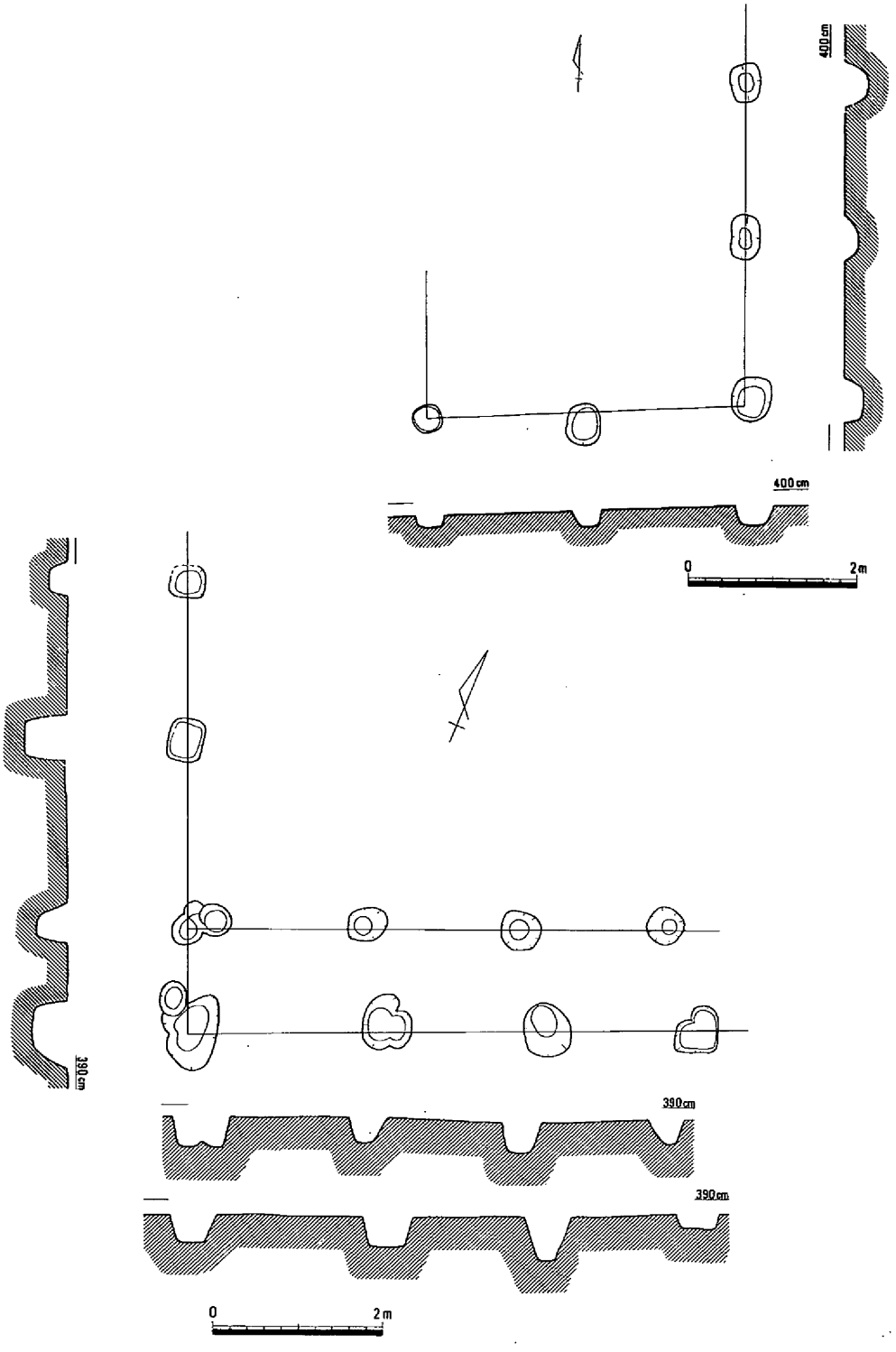


第230図　建物43・出土遺物

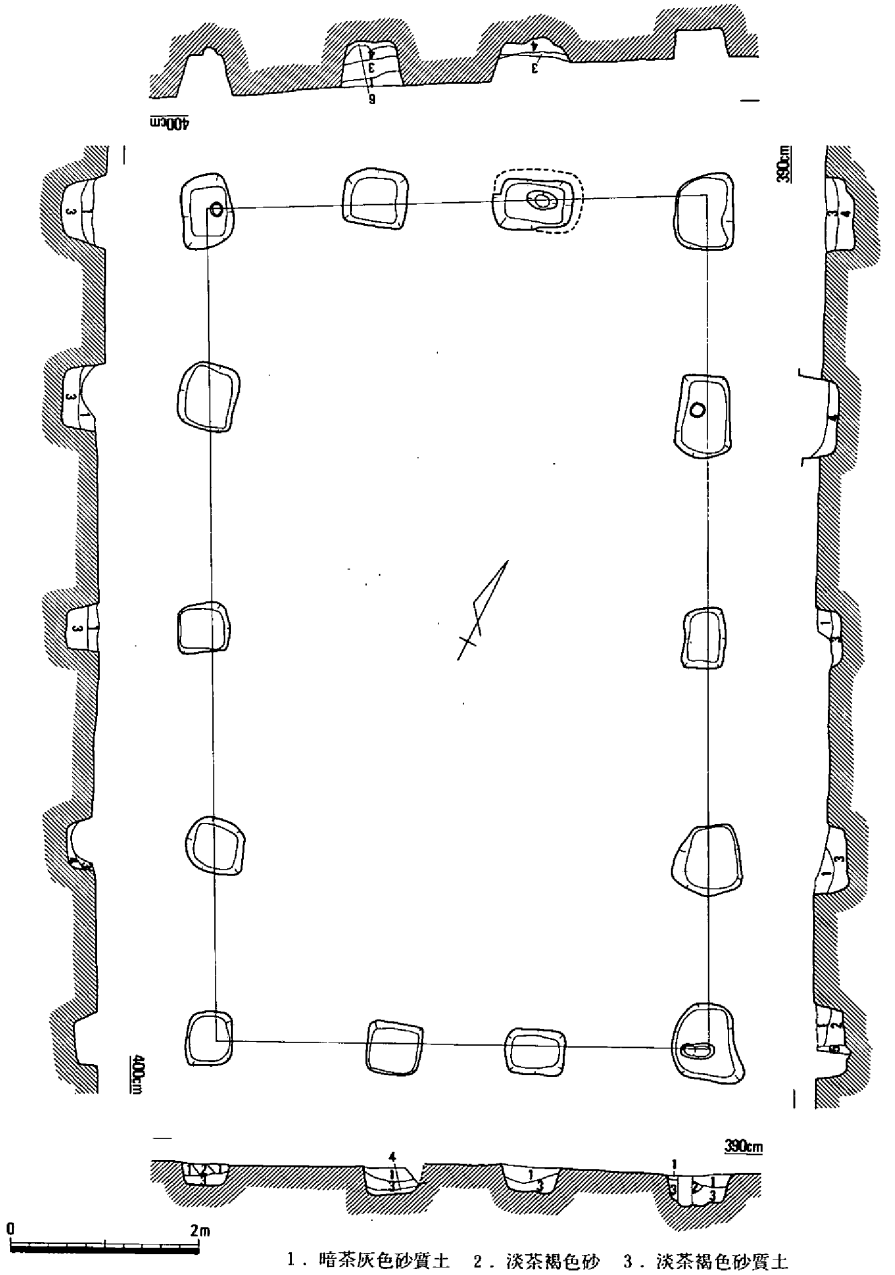
径は40～50cm、深さ20～50cmを測る。庇は建物から約60cm出ており、柱間は1.8～2.3mとばらつきがある。また、柱穴径は60cm前後、深さ20～50cmを測る。なお、庇は桁行の柱間ともずれを生じているが、この柱穴群が当建物と並行することから一応庇と考えた。遺物は須恵器を含む土器細片が出土しており、古墳時代後半期のものであろう。　（江見）

建物46（第232図、図版44）

9・10Z区にまたがって検出された桁行4間×梁間3間の、棟がやや西に振る比較的大型の南北棟建物である。なお、建物は重複関係にある溝49を切っている。桁行9m、梁間5.25m、床面積47.25㎡を測る。桁行の柱間は2～2.4m、梁間のそれは1.6m～1.8mを測り、梁間の中央2柱穴の間は南北ともに間隔が狭くなっている。柱穴の平面形態は50～80cmの方形あるいは長方形を呈し、深さは残りのよい北西隅の柱穴で約40cmを測る。底部に柱根跡が認められるものは4柱穴あり、その規模から当建物には径約15cmの柱が使用されたものと推定される。埋土



第231図　建物44(上)・45(下)



第232図　建物46・出土遺物

は上層に砂質土が、下層に向かうにつれ粘質を増すものであった。

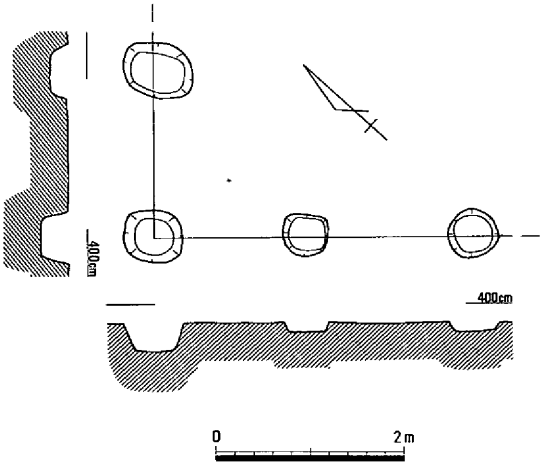
遺物はほとんど無く、時期が推定される資料としては僅かに須恵器片597・598が北東隅および南東隅の柱穴から出土している。

以上、当建物は６世紀末～７世紀初頭あるいはそれ以降に建てられたものと考えられる。

（江見）

建物47（第233図）建物47

10Ｚ区中央東寄りに位置し、大半が調査区外に延びる桁行２間以上×梁間１間以上の北西～南東に棟方向をもつ建物である。桁行3.4ｍ以上、梁間2.8ｍ以上、桁行の柱間は1.6～1.8ｍ、梁間のそれは1.8ｍを測る。柱穴の平面形態は円形を呈し、径50～70㎝、深さ10～30㎝を測り、北西隅の柱穴は他に比べ深い。埋土は淡褐灰色粘質砂が堆積しており、遺物は古墳時代前半の土器細片が出土している。（江見）



第233図　建物47

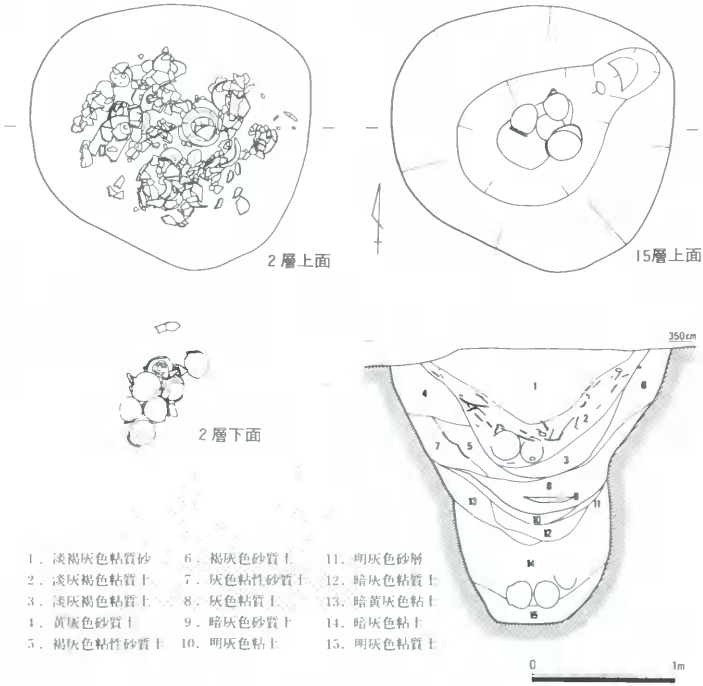
(3) 井戸

検出した2基の井戸はいずれも古墳時代前期のものである。井戸7は微高地西側に、井戸8は微高地東側に所在する。

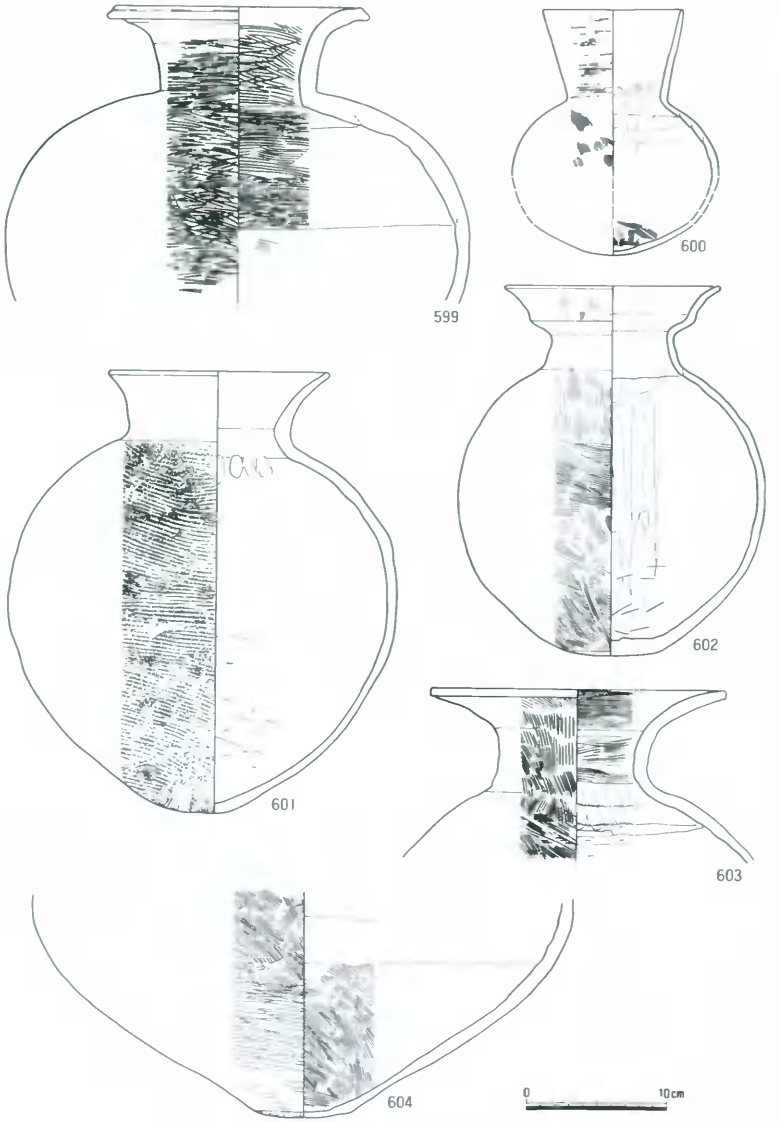
井戸7（第234～240図、図版44・45・81～83）

8D区の北端で検出した大形の井戸である。上面は竪穴住居26によって若干削平を受けている。上面形は径2.00mの楕円形をなし、深さは195cmを測る。上面から1m付近までが比較的ゆるやかで、それ以下がほぼ垂直の壁面となっている。壁面の北東側は上面から125cmのところまで抉り込んだようになり、幅20cmの小さな平坦面が作られている。

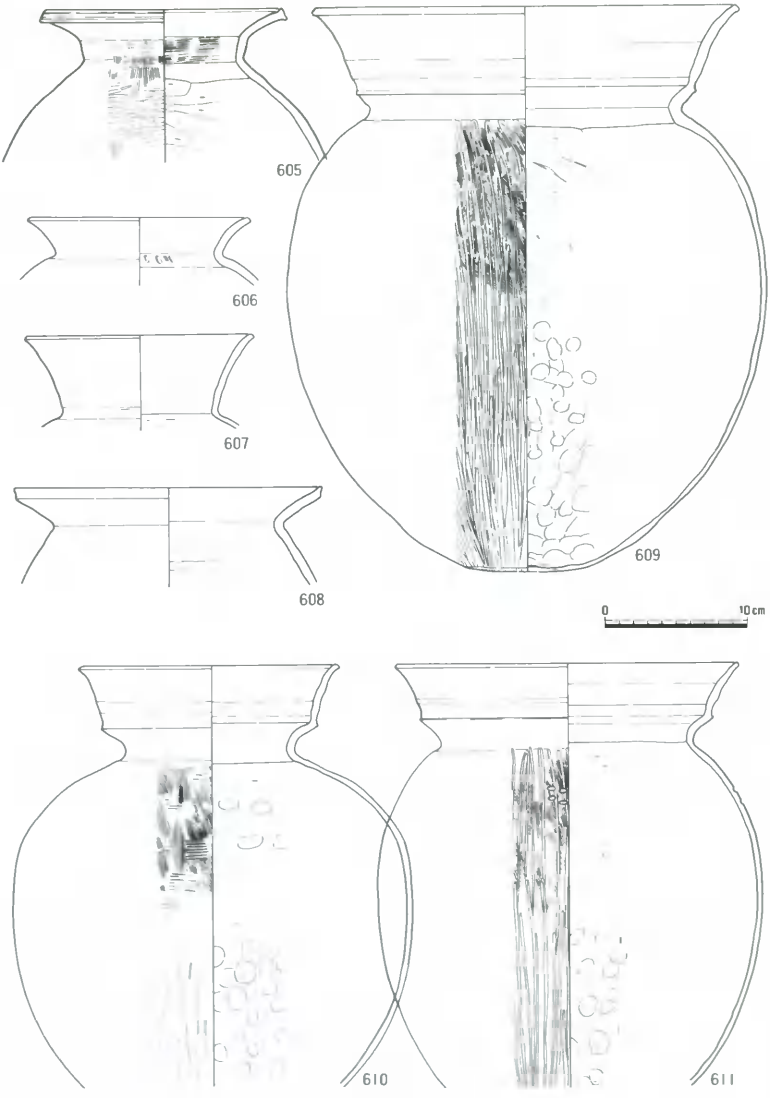
埋土は大別すれば1～3、4～9、10～14、15層に区分することができ、9層までが砂質土、10層以下が主に粘質土となっている。埋没の過程を復元すれば、15層が井戸使用時の堆積土、10～14層が比較的ゆるやかに埋没が進んだ段階、4～9層が埋没が急速に進む段階、1～



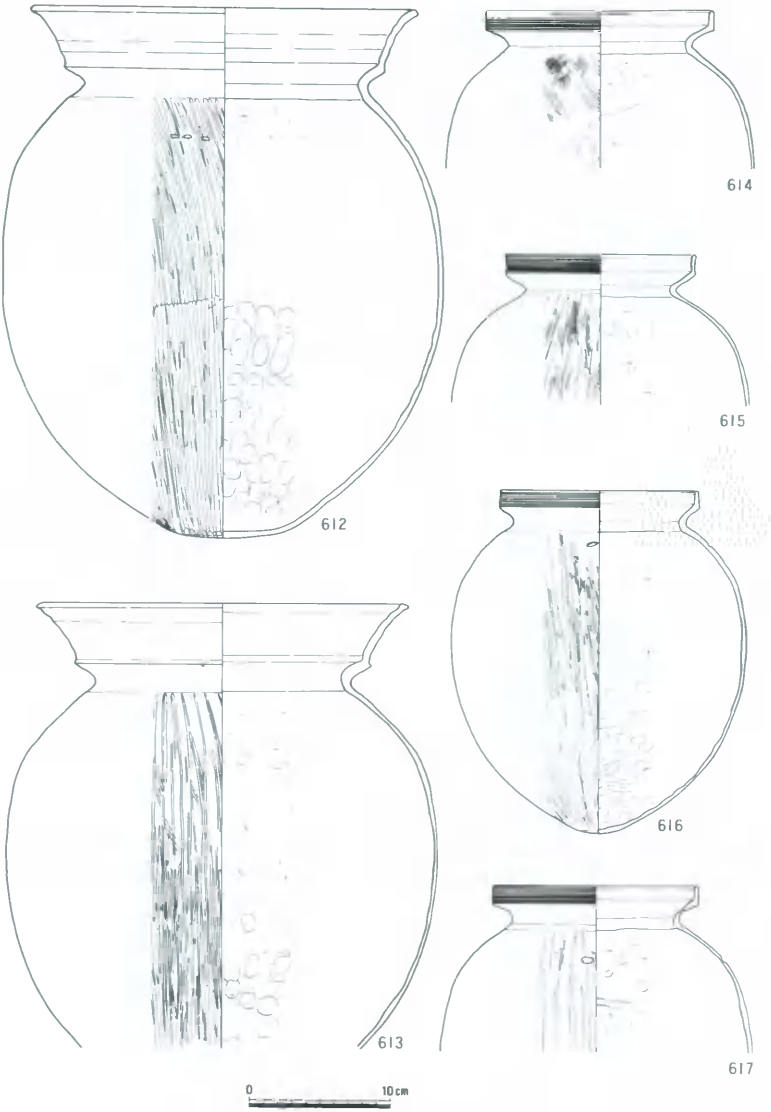
第234図　井戸7（S＝1/40）



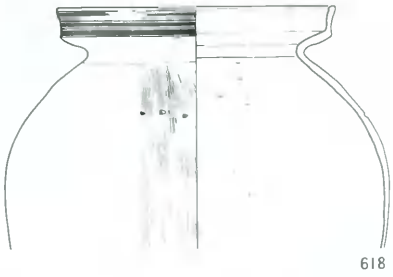
第235図　井戸７出土遺物（１）

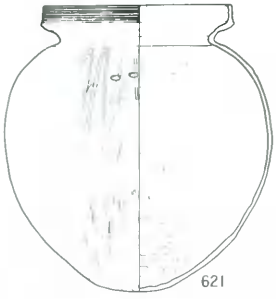


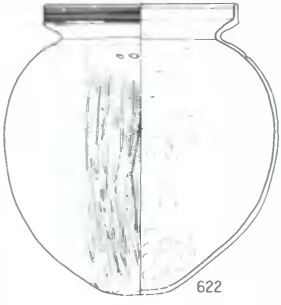
第236図　井戸7出土遺物（2）

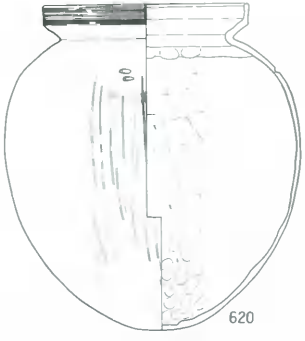


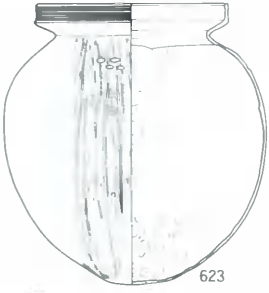
第237図　井戸7出土遺物（3）



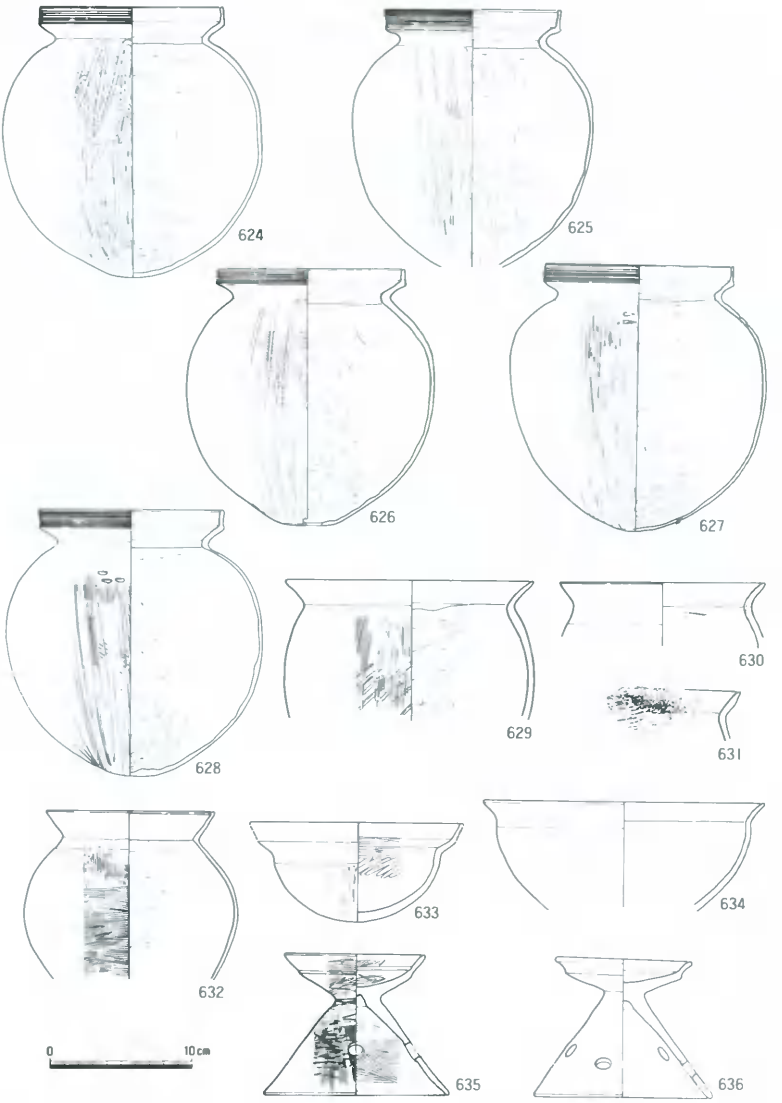




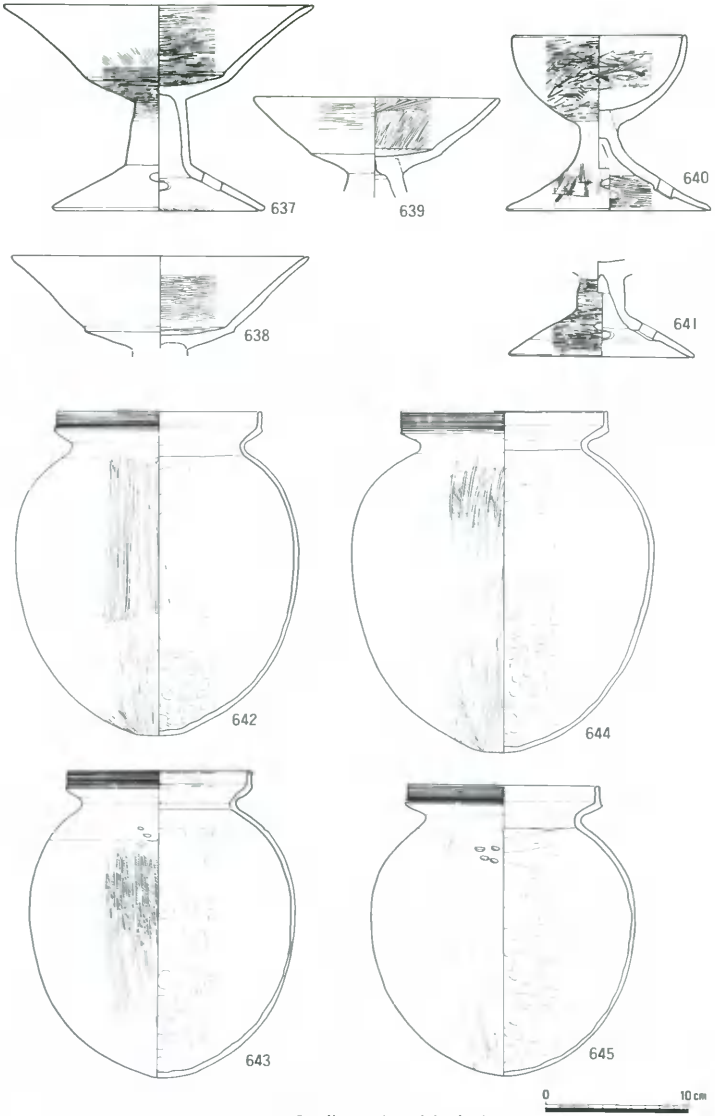




第238図　井戸７出土遺物（４）



第239図　井戸７出土遺物（５）



第240図　井戸７出土遺物（６）

3層が埋没が相当進み窪地状になった所をやや掘り広げて土器を投棄し、それが埋没する段階とすることができよう。

埋没最終段階の2層中には土器溜まりが形成されており、大量の土器が出土した。土器溜まり上部は破片が密集した状態であったが、下部からは7点の甕が完形ないし準完形で出土した。また、上部の資料も接合によって完形になるものが多く、本来は完形品が主体をなす土器溜まりであったようである。土器溜まりの土器総数は約50点程度とみられ、そのうちの20点が完形ないし準完形品である。図化した土器は43点である。なお、壺の口縁部破片でススが付着するものが含まれており、土器溜まり形成後に火を受けていることが考えられるが、特に炭は認められず、小規模な焚火程度であったと思われる。また、15層上面からは甕4点がまとまって出土しており、井戸廃棄時の祭祀に伴うものと考えられる。

壺599～605、607、610のうち600のみが砂粒の少ない精製の胎土で外面には丹塗りが施される。602は二重口縁の壺で球形の胴部をもち、平底気味の底部を残している。外面はケズリののちハケメ、内面の調整は浅いユビナデである。赤褐色を呈し砂粒の含有は比較的少ない。これら以外のものは胎土が比較的よく似ており、粗砂を含み灰白色～明褐色を呈する。601は外面にタタキが施されており、603もタタキののちにハケメが施される。また、直口壺607、壺610は609等の甕と同じ粗砂を含まない胎土で、器壁も薄い。610の外面調整は浅いタタキの後タテハケである。607は口縁部のみの破片であるためなんとも言えないが、610では胴部下半にススが付着しており、甕609、611などと同じ大形の煮沸容器としての用いられたようである。

甕は大形の608、609、611～613と小形の606、614～632に大別できる。大形品は大きく外反する口縁部をもち口径が大きい609、611～613と、く字の口縁をもつ608に区分でき、胎土も前者が細砂を含んでいるのに対し、後者は壺と同じく粗砂を含んでいる。609等では外面にススの付着が認められる。一方、小形品は壺と同様な胎土をもつ606を別にすれば、A．直立する口縁拡張部の外面に櫛描沈線を施すもの、B．く字の口縁をもつもの、C．内湾気味のく字口縁の先端を肥厚させる布留式甕、の3つに区分できる。

これらのうち、圧倒的多数を占めるのがAで、小形甕全体の約8割を占めている。いずれも3㎜前後のきわめて薄い器壁をもち、外面調整はタテハケののち粗いヘラミガキであるが、ヘラミガキの範囲、密度は一定しておらず、きわめて疎らなものから比較的密なもの、上端を波状に施すものなどさまざまである。また、これらのうち619や628ではハケメに先行するタタキが部分的に認められる。内面には円形圧痕およびヘラケズリが施されている。これらは口径が大きな618を除外すれば、口径12.3～13.4cm、器高18.3～20.5cmの小型品と口径13.9～15.9cm、器高23.0～24.4cmの大型品に分離できる。この小形甕Aは大形甕609等と同じ胎土をもつが、ともに肩部に米粒形の刺突文をもつものが認められる。刺突文の数は一定せず、少ないもので

1点、多いもので4点である。なお623、626の2点には底部に穿孔が認められる。Bの3点は断面がく字をなす口縁をもち、器壁が比較的厚い点で共通するが、胎土や内面調整などではばらつきをもつ。外面調整は629ではタタキののちタテハケ、630がナデ、631がタタキである。Cは632の1点のみの出土である。器壁は約2㎜ときわめて薄く、胴部外面にはヨコハケが施される。胎土はAに似るが、色調は赤色が強く、他地域からの搬入品の可能性がある。

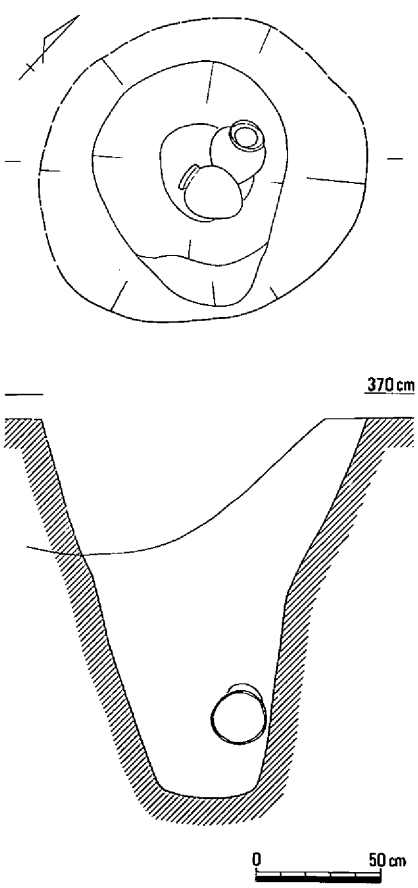
633～641は小型精製器種であり、鉢、器台、高杯がある。器台635の脚部には4つ、636には7つの孔が施される。高杯637、638では丹塗りが認められる。いずれも幅の狭いヘラミガキが顕著である。

上記の資料が2層からの出土品であるのに対し、甕642～645は15層上面から出土したものである。器形に大きな差はないが、2層出土の小形甕Aでは626のように胴部下端に弱い凹面が認められるのに対し、これらは凹面が微弱であるかほとんど認められない。以上の出土資料は、その特徴から百・古・Ⅱの古い段階に位置付けられる。（宇垣）

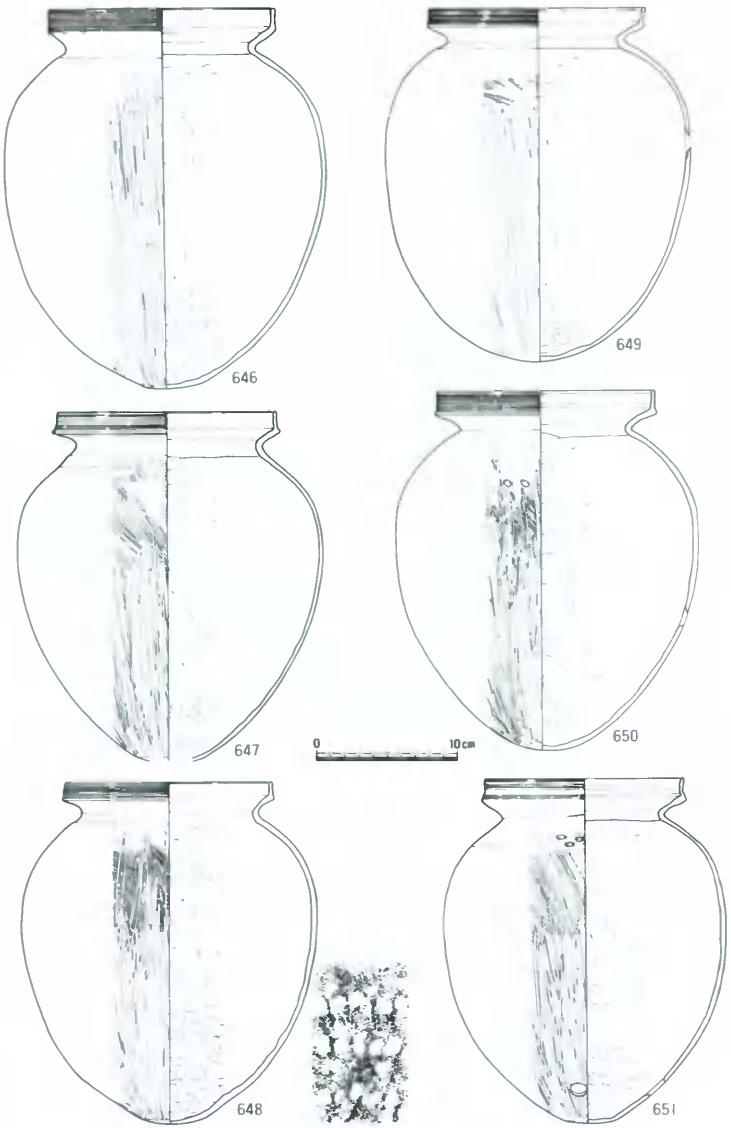
井戸8（第241～243図、図版45・84）

8A調査区で検出した、上面推定径1.3m、深さ1.50mの井戸である。上面の中央から西側にかけての部分は用水路によって削平されている。壁面は上から70cm付近で傾斜の変換点をもち、その部分で傾斜がさらに強くなって底面に達している。雨水の流入のため断面の実測ができなかったが、埋土は3層に区分でき、上層が弥生時代末の洪水砂の再堆積かと思われる褐色微砂、中層が灰色粘質土、下層が灰色粘性砂質土で、中層には炭小片が認められた。

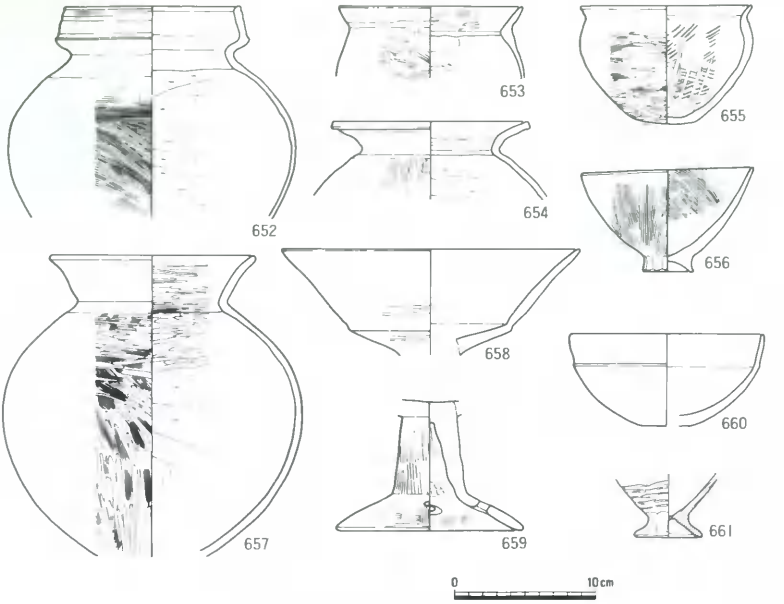
出土遺物は甕、壺、高杯、鉢、製塩土器などからなる。このうち甕648、651は井戸底部から出土したもので、口縁の一部を欠損するほかは完形である。この2点のうち651には胴部下半に円形の穿孔が認められ、他に649、650でも胴部に穿孔がなされている。甕646～651の法量は口径14.1～15.6cm、器高24.2～26.9cmである。これらのうち、648では462などと同様に、胴部内面下半にヘラケズリののち施される円形圧痕には木目状の痕



第241図　井戸8



第242図　井戸８出土遺物（１）



第243図　井戸８出土遺物（２）

跡が認められる。652は前記の甕と同じ胎土で口縁拡張部をもつが、その外面には櫛描沈線が施されておらず、また、口縁拡張部は厚く、内傾している。胴部が球形気味で外面に横方向のハケメが施される点も他と異なっており、布留式甕との関係において注目される資料である。657は球形の胴部とやや外反気味の口縁部をもつ甕で、胴部内面はヘラケズリが施されるものの、器壁はかなり厚い。661は外面にタタキが施される製塩土器の脚部である。

以上の出土遺物から、この井戸は百・古・Ⅰに位置付けられる。（宇垣）

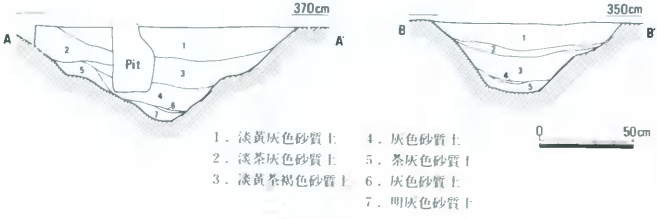
(4) 溝

検出した溝は15本である。溝38など、微高地を東西に横断する溝は弥生時代には見られなかったものである。

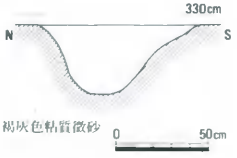
溝35（第244・247図、図版46）

調査区の西端、６Ｃ・Ｄ区で検出した古墳時代後期の溝である。東から西に向かい、調査区のほぼ中央で屈曲して南西に流下している。上部はかなり削平されているが、遺存状態の良好な部分で幅215㎝、深さ50㎝を測り、断面は浅いＶ字形～逆台形を示している。流走方向や規模からみて、この溝は10Ａ区の溝38の先端にあたると考えられ、それは下記の出土遺物の年代からも矛盾しない。

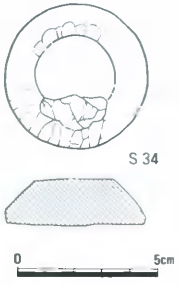
出土遺物は須恵器662～665、土師器668、669他に鉄鏃M30・31、土錘Ｃ15、砥石Ｓ35、鉄滓などがある。665など５世紀末ごろの遺物も含んでいるが、他はいずれも６世紀末～７世紀初頭に比定できる。鉄器のうち30は、この時期の鉄鏃としては刃部が大きく、別の器種とみたほうがよいかもしれない。砥石35は砂岩の自然石を用いたものであるが、側面のほぼ全面が使用されている。（宇垣）



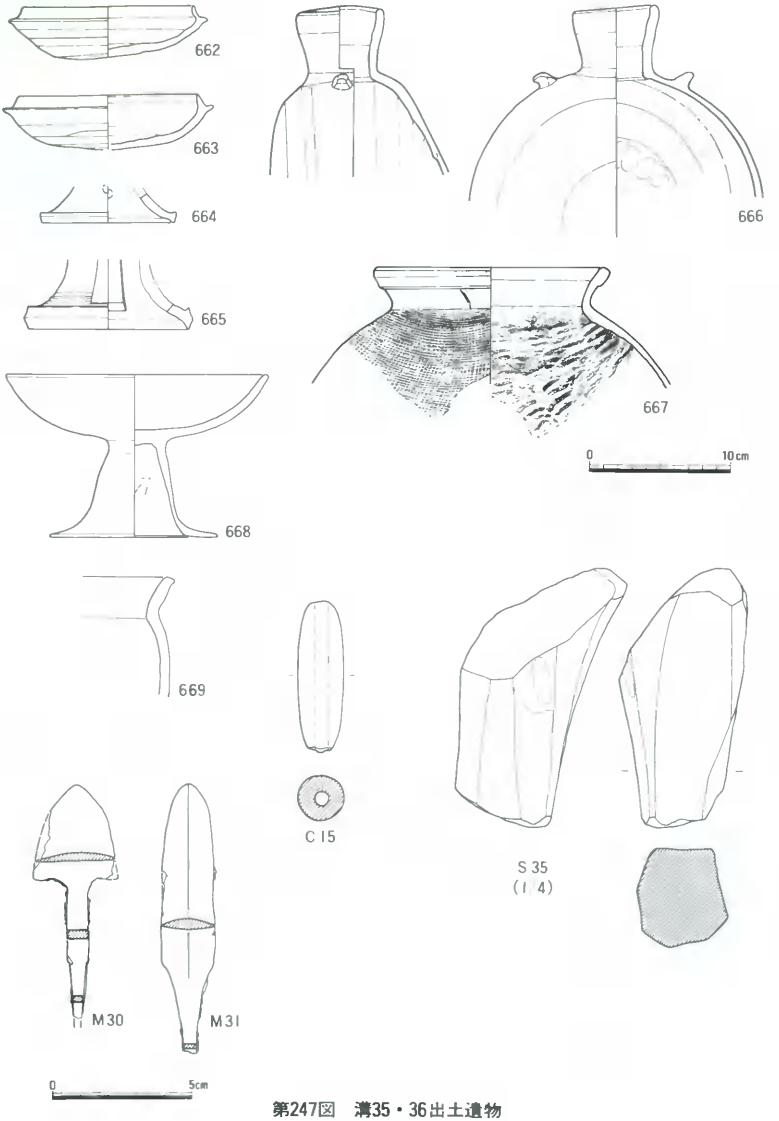
第244図　溝35



第245図　溝36



第246図　溝37出土遺物



第247図　溝35・36出土遺物

溝36（第245・247図）

溝35の屈曲部付近から北西方向にのびる幅84cmの溝で、断面付近が最も深くなり37cmを測る。溝の北西側は６ライン付近で終わっているが、これは溝の上部が削られているためで本来はさらに北西に伸びていたと思われる。南西側は古代の溝50に切られており、溝35との関係は不明である。埋土は褐灰色粘質微砂で、溝35の埋土よりも溝50のものに似ており、遺構の年代が古墳時代後期よりも新しくなる可能性もあるが、出土の須恵器甕667の時期とみるならば６世紀末ごろで、溝35の掘りなおしあるいは分流となる。（宇垣）

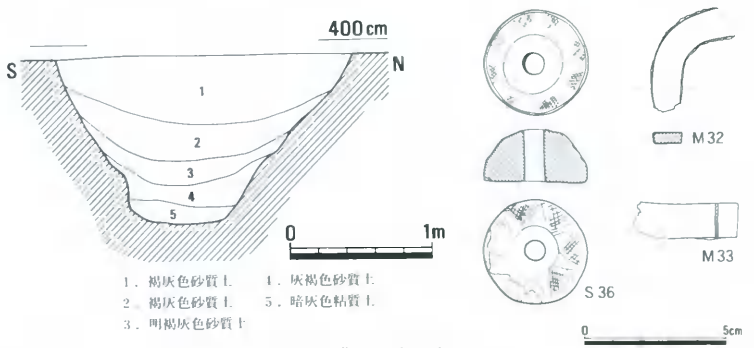
溝37（第246図、図版89）

溝35に中央を切断された長さ524cm、幅90cm、深さ38cmの溝で、南端上部は溝51に削られている。中央付近の底面から径5.2cm、高さ1.7cmの輝緑岩製の紡錘車の未成品Ｓ34が出土した。中央の穿孔はなされておらず、工具によって削った痕跡が全面に見られ、研磨は施されていない。おおまかに形を削り出した時点で頂部の一部が欠損したため放棄したものと考えられる。弥生土器以外に土器が出土していないため時期を確定できないが、溝35よりは古く、竪穴住居21と同じ５世紀末ごろかと思われる。（宇垣）

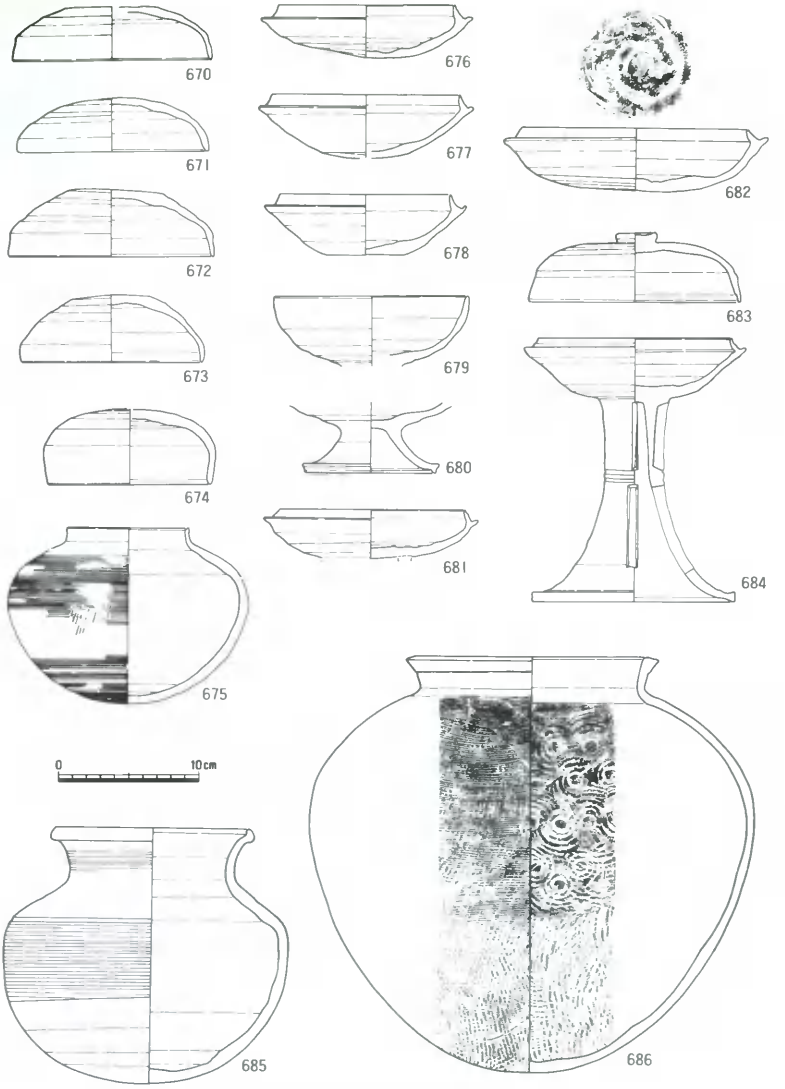
溝38（第248～251図、図版84～86・89）

10Ａ区で検出した東西方向の溝で、上面幅210cm、底面幅65cm、深さ118cmを測る。堆積土は１～４層が砂層、５層が粘質土である。

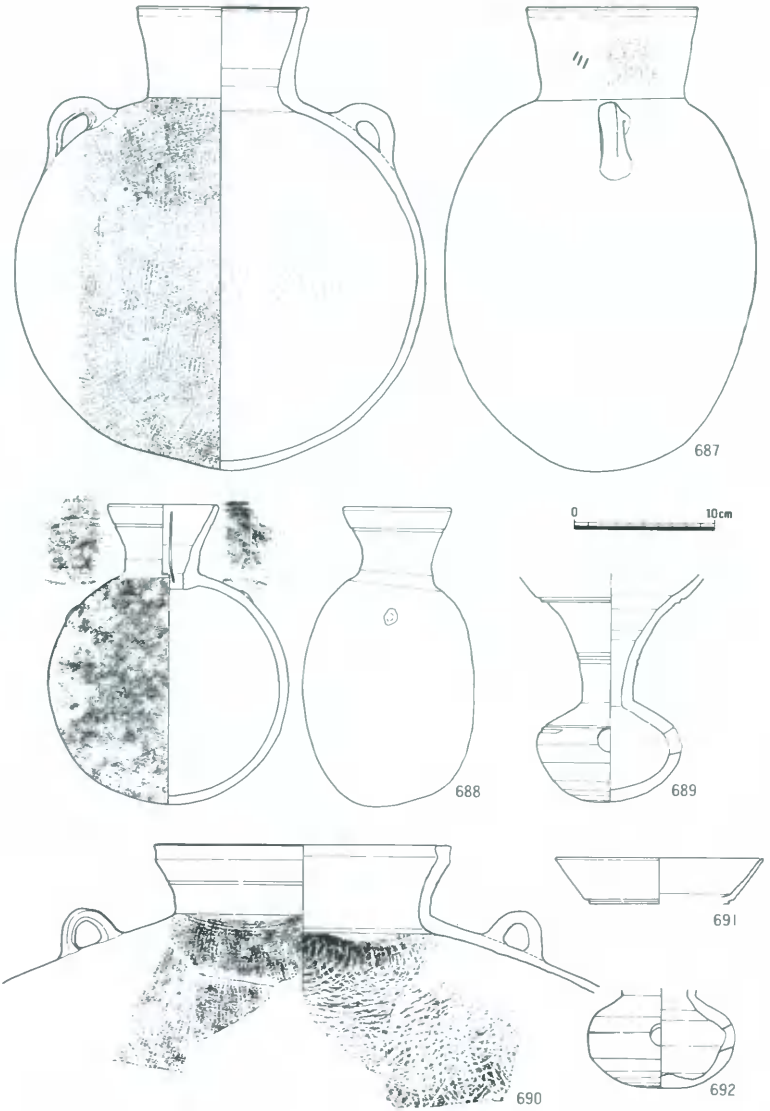
弥生土器のほかに、須恵器、土師器が大量に含まれており、しかも完形品や完形に接合できる資料が多数認められた。須恵器670～693は杯、高杯、有蓋高杯、坩、壺、提瓶、甑、甕などからなり、土師器694～699は椀、高杯、甕、甑、鉢などで、この時期の土器類のほぼ全器種が



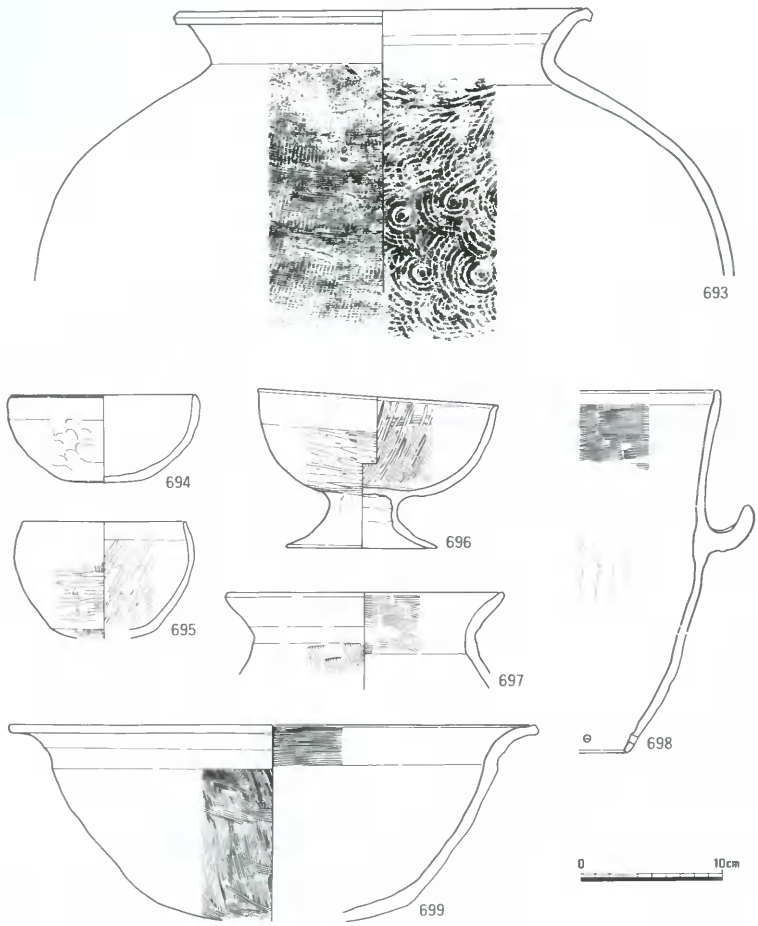
第248図　溝38・出土遺物（１）



第249図　溝38出土遺物（2）



第250図　溝38出土遺物（3）



第251図　溝38出土遺物（4）

認められる。特に、提瓶は図示した2点のほかに数個体分の破片が出土しており，甕も691・692以外に破片が認められる。有蓋高杯や甕といった古墳において見られることの多い器種が多く、日常に使用された土器以外に集落内での祭祀に用いられた土器が含まれている可能性が考えられる。杯身682は他のものよりも一回り大きく、器壁も厚い。内底には同心円当具の圧痕

が認められる。687は大形の提瓶で胴部はタタキ成形ののちにカキメが施され、頸部にはヘラ記号がある。また688の頸部にもヘラ記号があり、外面には×、内面には縦線が記されている。土師器鉢699は外面全体にススが付着し煮沸に用いられたものとみられ、鍋と呼んだほうがよいものである。また、図が前後するが、土器以外の遺物として紡錘車、鉄器、鉄滓がある。紡錘車S36は頁岩製とみられ、径3.7cm、高さ2.0cmと小ぶりである。断面は丸みをもち、斜面部と下面に鋸歯文が刻まれている。鉄器M32、33は小破片であるため器種を認定しがたい。また、鉄滓は鍛冶滓と推定される。

出土の須恵器はほぼTK209型式の範囲に収まるものと考えられ、溝は6世紀末から7世紀初頭を中心とする比較的短い期間に機能したものであったと思われる。（宇垣）

溝39（第252図）

8・9B区で検出された溝で、東西方向に大きく蛇行しながら流走する。規模は幅28cm、深さ10cmを測る。溝の断面はU字形を呈する。埋土は灰茶褐色砂質土である。

遺物は土師器と須恵器が出土した。701は壺の口縁部で、波状文がめぐる。時期は5世紀の終り頃と考えられる。（平井）

溝40（第253図）

9B区で検出された南東から北西方向に流走する溝である。規模は延長4.5m、幅18cm、深さ10cmを測る。埋土は灰茶色土である。遺物は出土しなかったが、溝の時期は検出面および埋土から古墳時代と推定される。（平井）

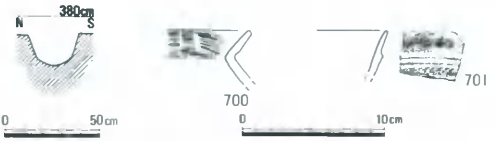
溝41（第253図）

8・9B区で検出された溝で、溝49と平行して流走する。南東方向へはあまり延びず、北西部は調査区外となる。規模は延長11m、幅17cm、深さ8cmを測る。埋土は灰茶色土である。

遺物は出土していないが、溝の時期は検出面および埋土から古墳時代と考えられる。（平井）

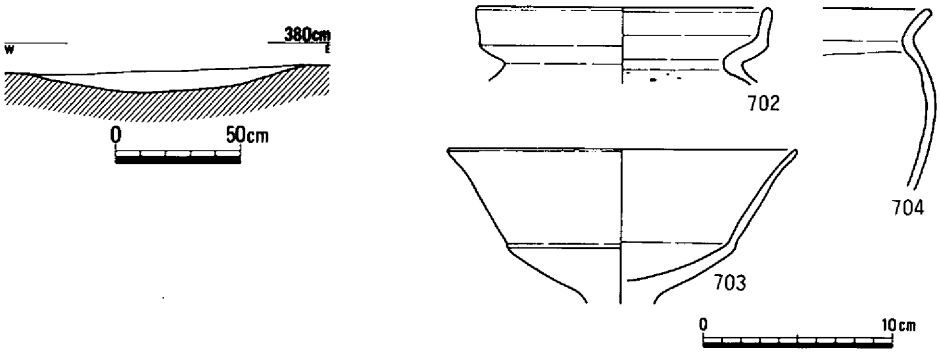
溝42（第254図）

9B区で検出されたほぼ南北に流走する溝である。溝の幅は110cm前後であるが、検出面からの深さは10cmと浅い。埋土は

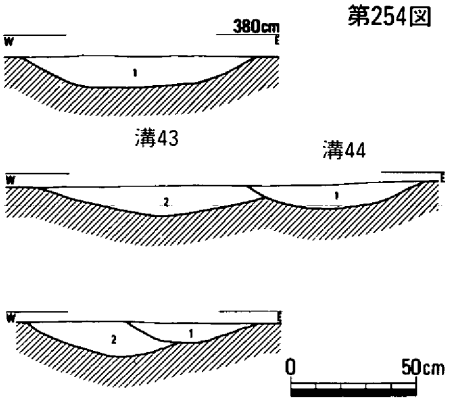


第252図　溝39・出土遺物

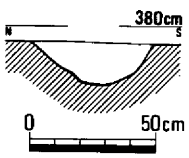
第253図　溝40（上）・溝41（下）



第254図　溝42・出土遺物



第255図　溝43・44



第256図　溝45

淡黄灰色砂である。

遺物は土師器が少量出土した。702は甕の口縁部である。704も口縁部がくの字状に外反する甕である。703は高杯の杯部で、口縁は外反しながら長く立上る。時期は百・古・Ⅰと考えられる。

（平井）

溝43・溝44（第255図）

９Ｂ区で検出されたほぼ南北に流走する溝である。溝43は溝44に切られており、幅50～80cm、深さ10cm前後を測る。溝44は溝43と重なりながら流走するが、溝43が途切れるあたりから北側は東に屈曲し、北東に向く。溝の幅は40～100cm、深さ10cm前後を測る。埋土は溝43が淡黄灰色砂質土、溝44は茶灰黄色砂質土である。

遺物は出土していないが、溝の時期は検出面および埋土から古墳時代と考えられる。

（平井）

溝45（第256図）

９Ａ区で検出された溝で、ほぼ東西に流走する。溝の幅は45～55cm、深さ20cm前後を測る。埋土は淡茶灰色砂質土である。

遺物は出土していないが、溝の時期は検出面および埋土から古墳時代と考えられる。

（平井）

溝46

9A区北端で検出した幅22cm、深さ3cmの浅い溝である。遺物は出土していないが検出面から古墳時代の溝と推定した。（宇垣）

溝47（第257図）

9～10A区に位置する北西から南東に延びる溝で、竪穴住居32を切っている。溝はほぼ直線的に約20mにわたって検出された。断面緩い逆台形状を呈し、幅40～70cm、深さ15～24cmを測る。溝底部のレベルは海抜3.5m前後で、流れの方向は明らかでない。埋土は褐灰色砂質土が堆積しており、遺物は古墳時代前半の土器細片が出土しているものの、住居との切り合い関係から古墳時代後半に埋没した溝と判断されるとともに、当溝の南側には同様の方位をもつ建物40・41などが所在することから、集落を区画する溝として機能していた可能性が強い。

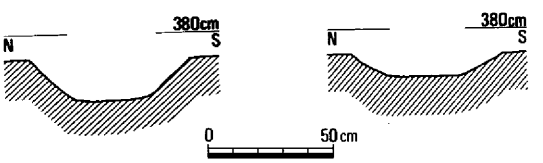
（江見）

溝48（第257図）

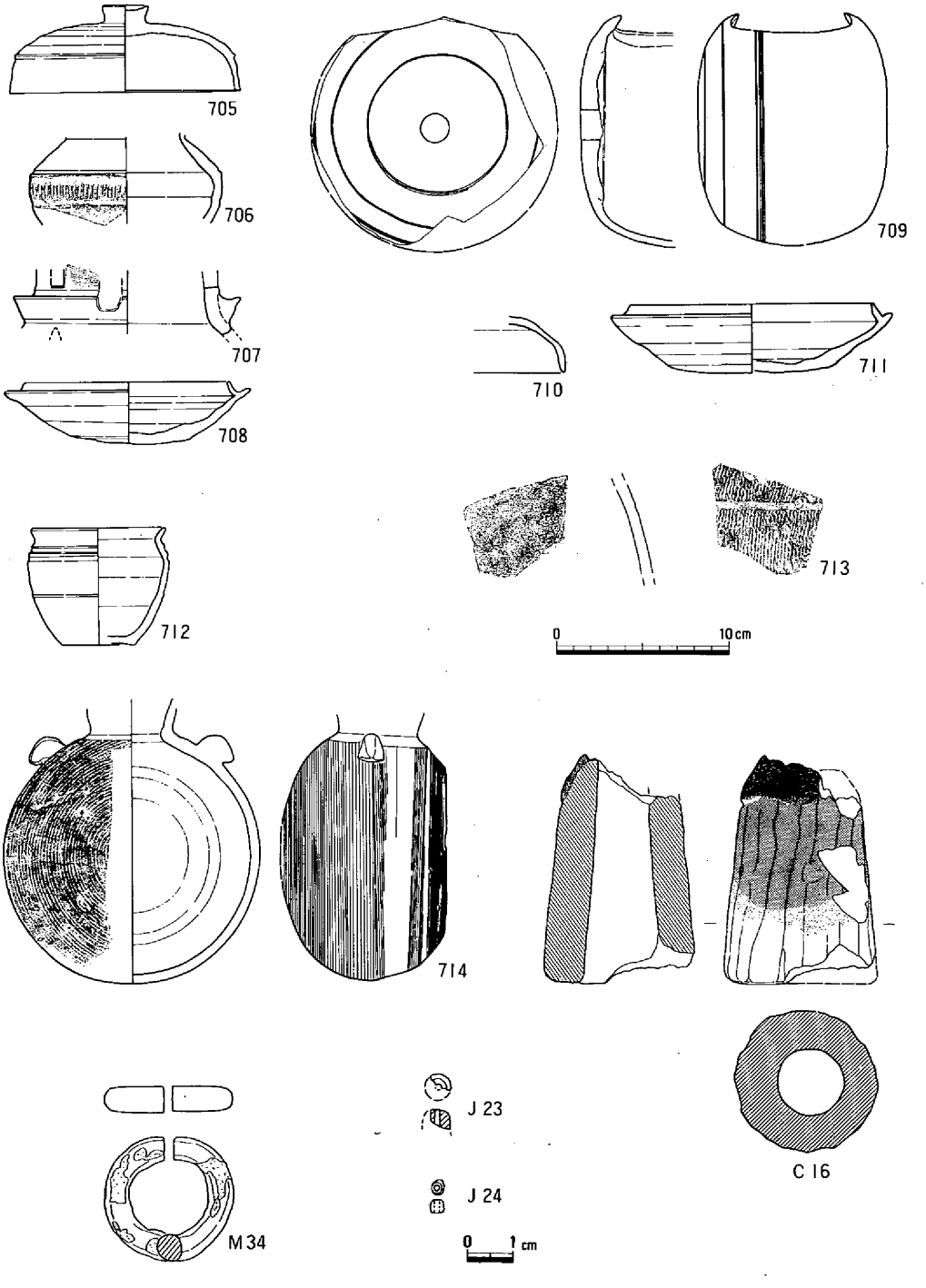
9A～Z区に位置するやや弧状を呈す東西方向の溝で、長さ約10m検出された。断面皿状を呈し、幅35～65cm、深さ約10cmの浅いもので、底部のレベルは海抜3.6m前後であまり差が認められない。溝からは須恵器を含む土器細片および鉄滓が出土しており、古墳時代後半に埋没した溝と考えられる。（江見）

溝49

9～10Z区に位置する直線的に南北方向に延びる溝で、建物45・46と重複関係にあり、建物46に切られている。溝は北部で二股に分かれた状況を示し、長さ約19mにわたって検出された。断面皿状を呈し、幅20～30cm、深さ数cmの浅い溝である。遺物は須恵器を含む土器細片および鉄滓が出土しており、古墳時代後半に埋没した溝と判断され、その機能としては溝の残存度は低いものの西側に所在する同方位の建物44との関連が窺われ、集落を区画する溝として機能した可能性が強い。（江見）



第257図　溝47(左)・48(右)



第258図　包含層、柱穴等出土遺物

(5)　遺構に伴わない遺物

古墳時代の包含層はあまり遺存しておらず、おもに調査区中央のＢ・Ｃ区で認められた。ただし調査区の他の部分でも中世の柱穴などに須恵器が混入している例がかなり認められ、もとは調査区のほぼ全域に古墳時代の包含層がひろがっており、それが中世以降に削平を受けたものと思われる。第258図、図版86・87に示す遺物は包含層のほか、土壙や柱穴、中世以降の包含層などから出土したものである。

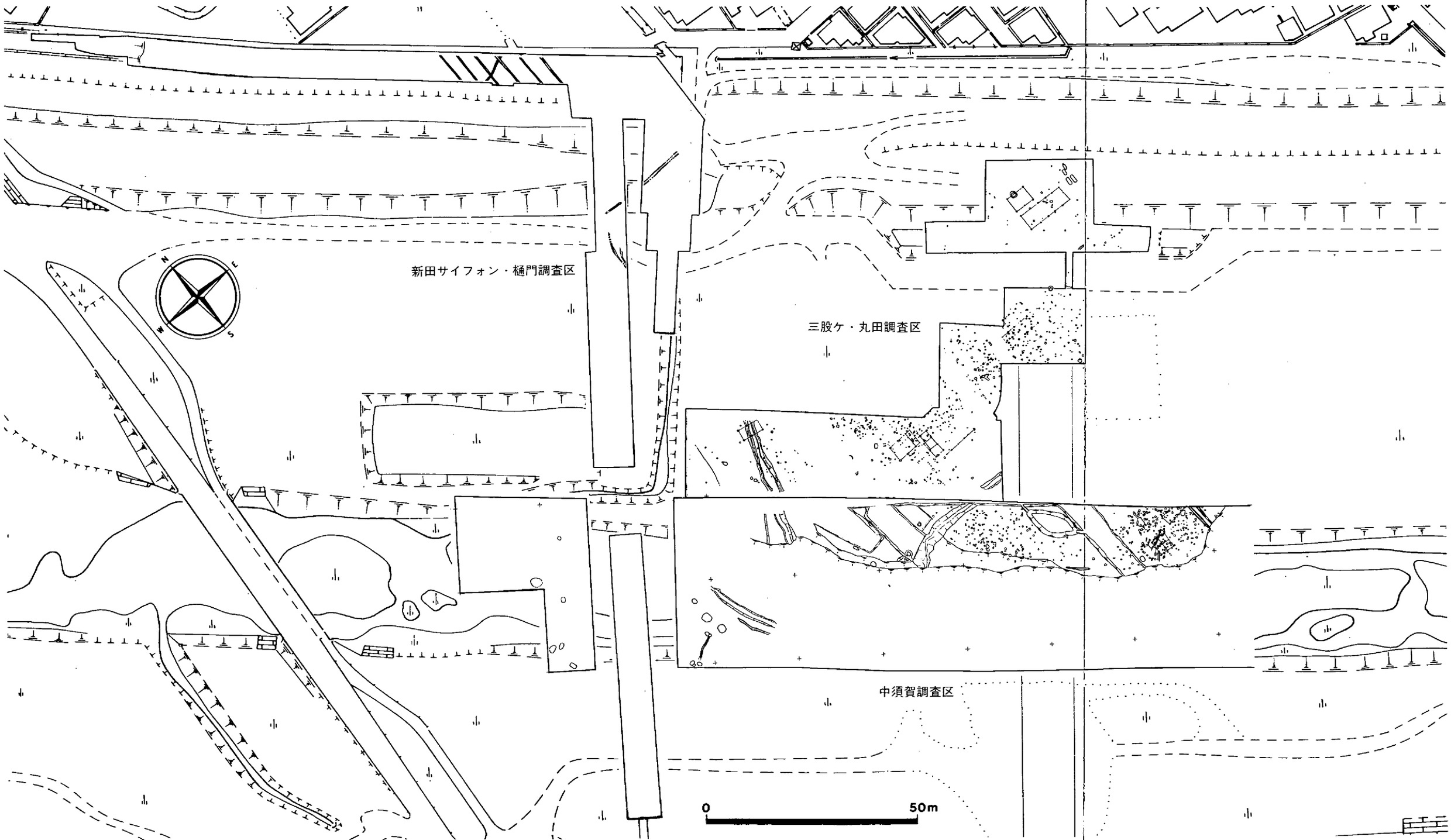
707は筒形器台の裾から筒部へ屈曲する部分の小破片で、８Ｃ区から出土した。屈曲部には断面三角形の突帯がめぐらされ、筒部には方形の、裾部には三角形と推定される透かし孔が施されている。突帯には小像が飾られていたようで、突帯の側縁に粘土の接着が認められる。焼成は良好で、破面は赤紫色、表面は暗灰色を呈する。

709は特殊偏壺で、９・10Ｚ区の竪穴住居33を切る土壙から出土した。杯710、711が伴っている。ほぼ片面の破片で、中央には径18㎜の円孔があり、口縁の中央は波状に尖っている。装飾は三重の沈線文だけでこの器種としては装飾性に乏しく、裏面側の破片である可能性が考えられる。特殊偏壺は中部、東海地方を中心に分布する須恵器であり、本資料は中国地方でははじめての出土である。伴出の杯710、711から６世紀末～７世紀初頭に位置付けられる。

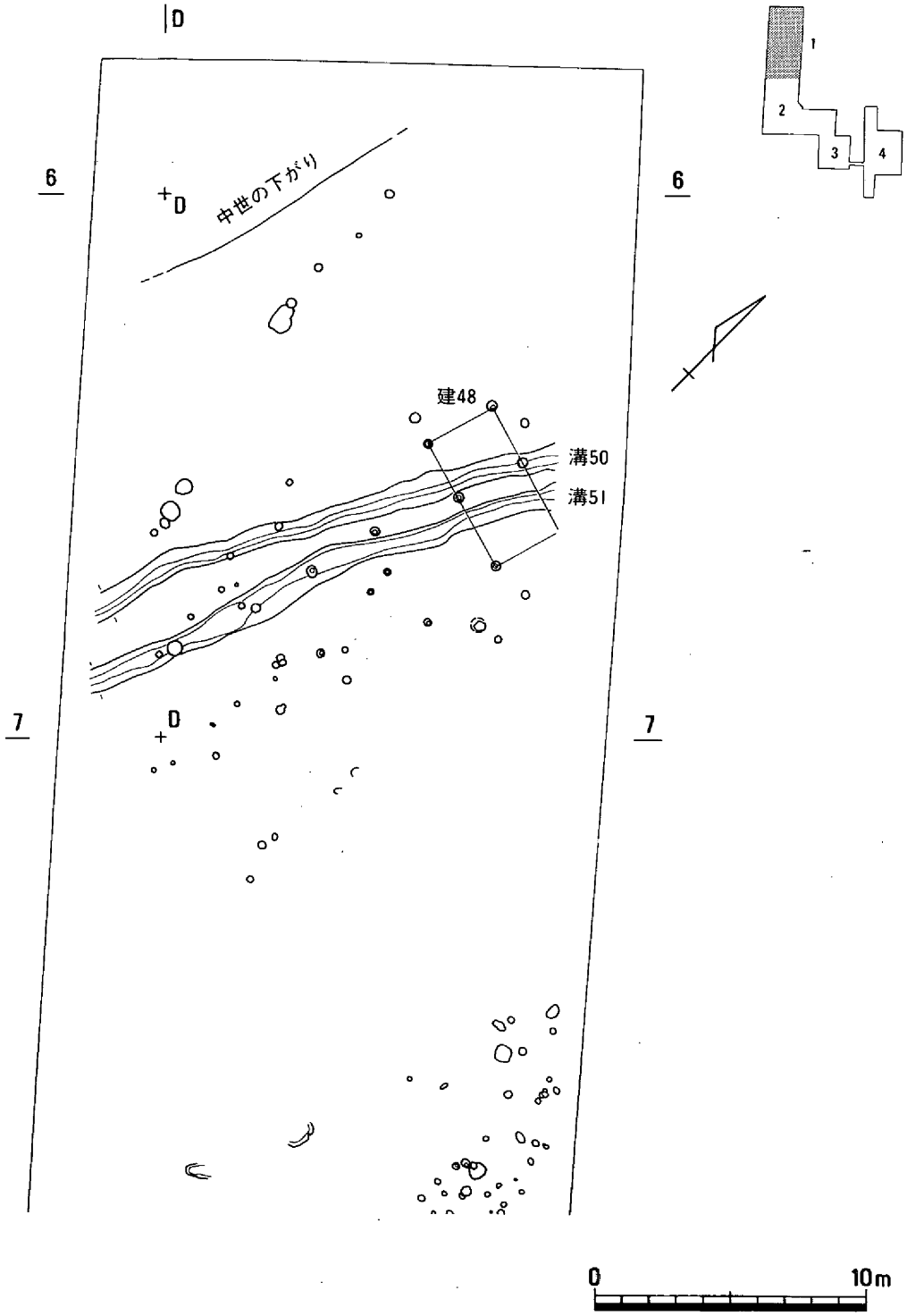
713は８・９ＢＣ区から出土した陶質土器破片で、外面には縄目ののち沈線が施され、内面はナデ調整である。灰色を呈する。提瓶714は10・11Ｚ区からの出土で、溝38から遊離したものかもしれない。M34は10・11Ｚ区から出土した耳環である。鍍金は剝離しているが保存状態は良好である。長径29㎜を測る。

フイゴ羽口は小破片が数点出土しているが、形状を把握できるのはＣ16のみである。この資料は７Ｃ区の攪乱層から出土したものであるため時期を確定できないが、断面形がハ字状をなし中世のフイゴの形状とやや異なるため古墳時代後期のものと考えた。先端は溶融して黒いガラス質になっており胎土中にはモミ痕跡が顕著に認められる。

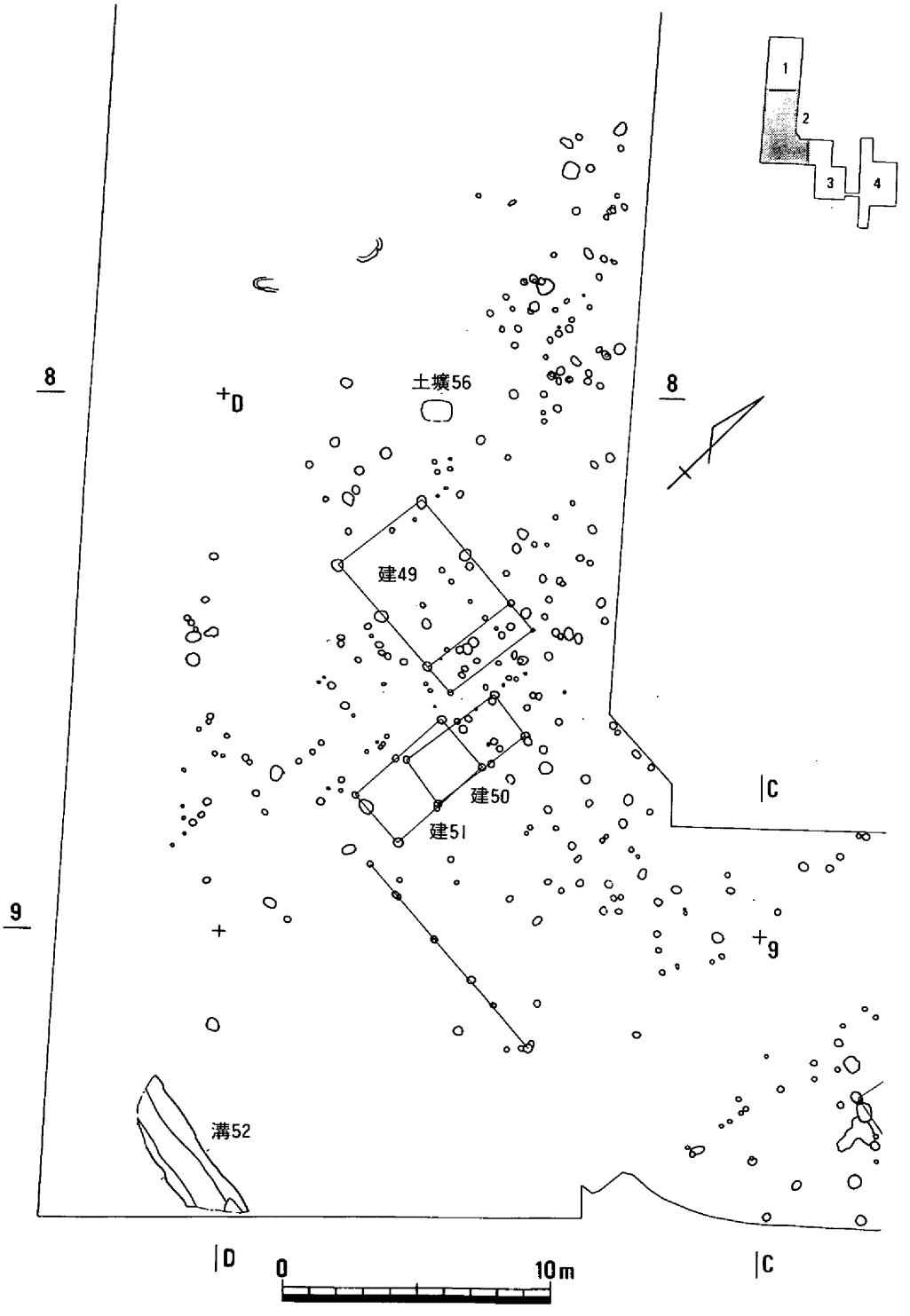
Ｊ23は古墳時代の柱穴から出土した琥珀製のなつめ玉、24はそれに伴出したガラス小玉である。　（宇垣）



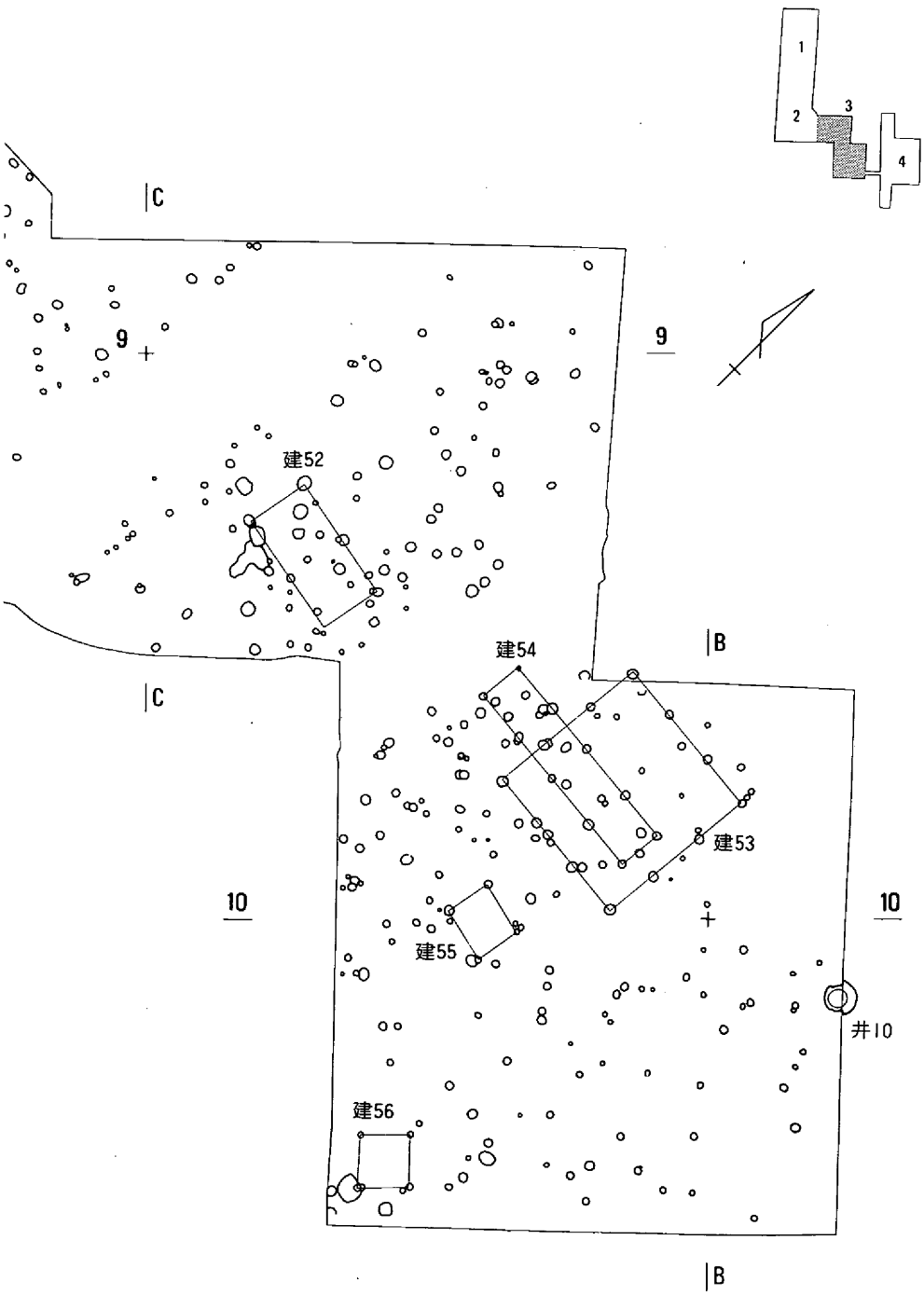
第259図　百間川原尾島遺跡北部　古代・中世遺構全体図（S＝1/1000）



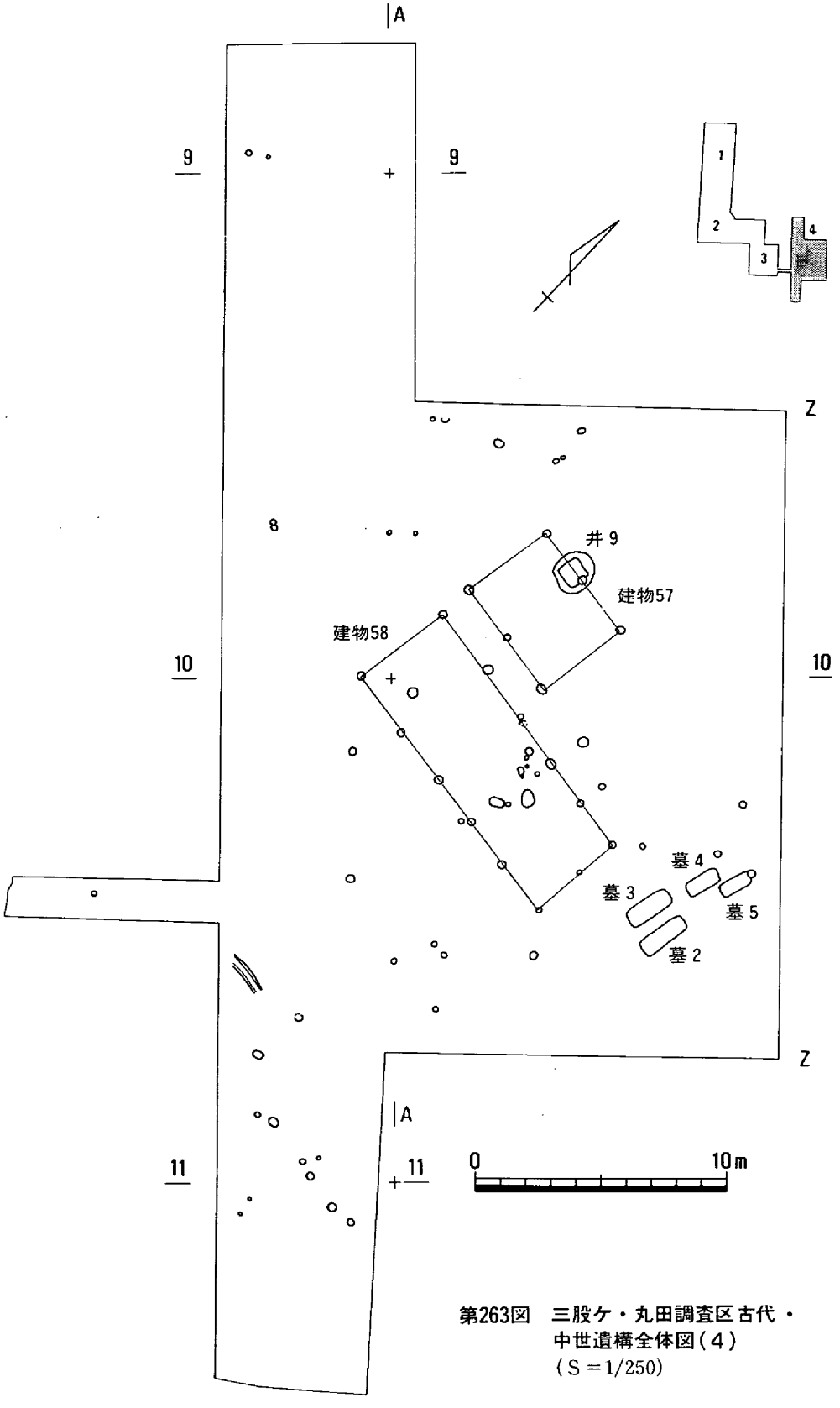
第260図　三股ケ・丸田調査区古代・中世遺構全体図（1）（S＝1/250）



第261図　三股ケ・丸田調査区古代・中世遺構全体図（２）（Ｓ＝1/250）



第262図　三股ケ・丸田調査区古代・中世遺構全体図（3）（S＝1/250）



第263図　三股ケ・丸田調査区古代・中世遺構全体図(4)
(S＝1/250)

5．中世の遺構・遺物

(1) 建物

調査区内で多数の柱穴を検出したが、建物として認定できたものは少ない。柱穴の密度は調査区東部では低くなる。出土遺物から時期を判断できるものは少ないが、溝61や微高地西斜面堆積の遺物は13世紀に位置付けられるものであり、建物もおおむねその時期のものと考えられる。

建物48（第264図）

微高地の西端、６Ｃ区で検出した東西棟２×１間の掘立柱建物である。上部を削られているため、柱穴の深さは20～６㎝である。柱穴の径は40㎝弱で、径20㎝前後の柱痕跡が認められた。建物は桁行5.08ｍ、梁間2.75ｍを測る。（宇垣）

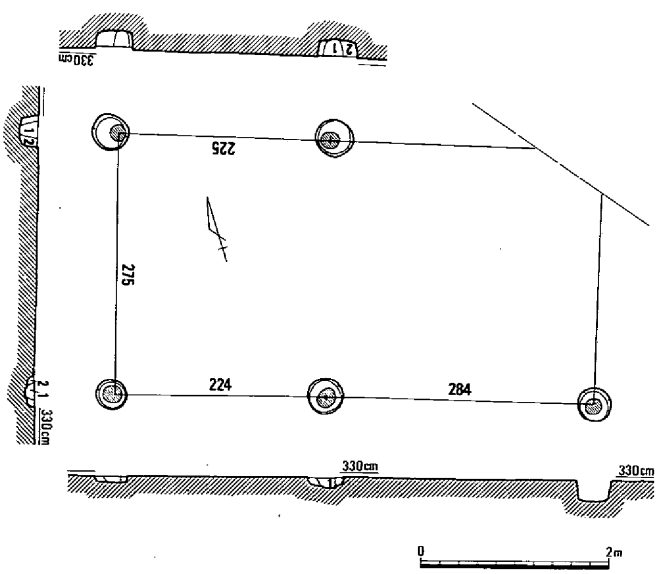
建物49（第265図）

８Ｃ区のほぼ中央で検出した東西棟の建物で、２×１間に柱を配し、東側に庇をもつようである。桁行は南辺で5.05ｍ、梁間は西辺で3.94ｍを測る。柱穴はやや大きく長径50㎝前後で、深さは36～10㎝と東側が浅くなっている。柱穴のうち３本からは柱痕跡が認められた。

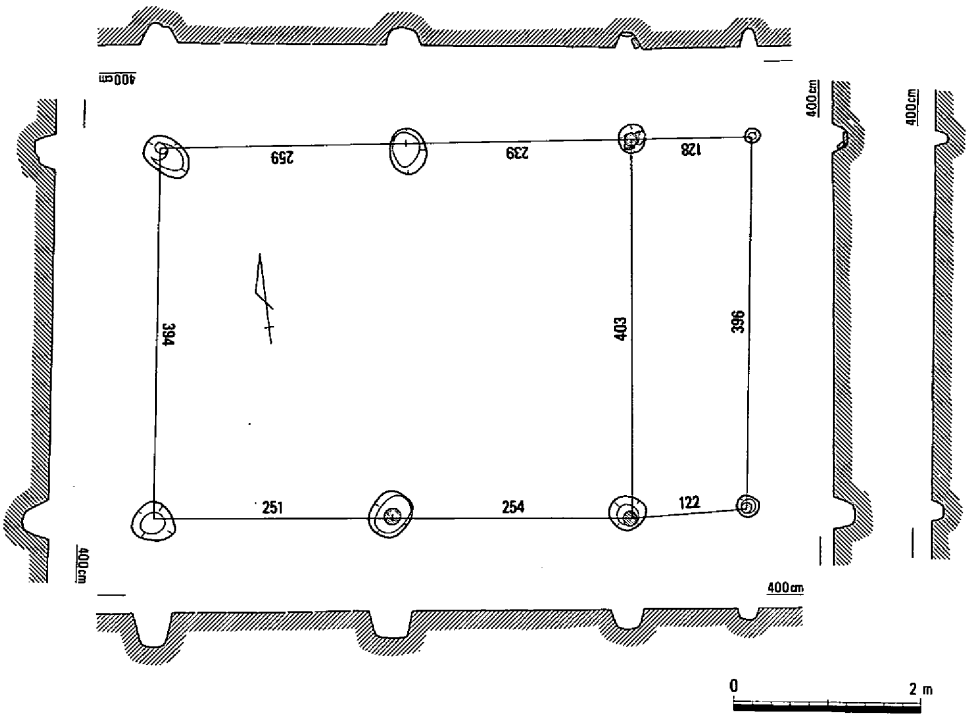
（宇垣）

建物50（第266図）

建物49の南東側で検出した南北棟の建物で、建物49と同じ軸線をとる。２×１間の柱間で、



第264図　建物48



第265図　建物49

南北4.09m、東西2.06mの小規模な建物である。柱穴は径30cm以下、深さは7～16cmとややばらついている。（宇垣）

建物51（第267図、図版48）

建物50に半ば重複する形で検出した建物で、この建物の柱穴が建物50の柱穴を切っている。柱間は建物50と同じ2×1間であるが軸線がやや異なり、規模もわずかに大きい。南北4.21m、東西2.45mを測り、柱穴は径35～20cmである。柱穴の深さは10cm内外で、いずれからも柱痕跡が認められた。（宇垣）

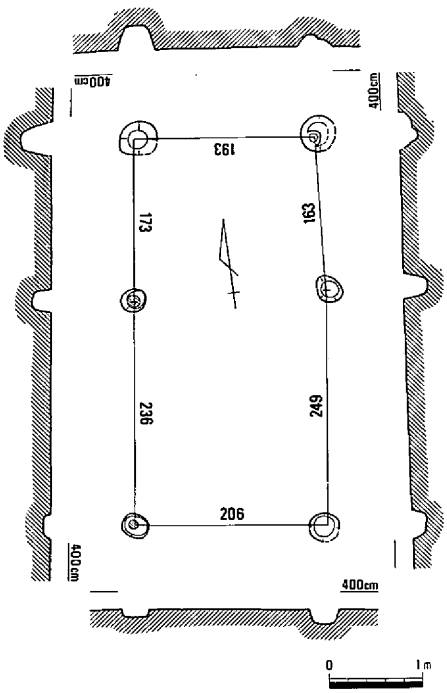
建物52（第268図）

9B区に検出された2間×1間の建物である。規模は、桁行460cm、梁間228cmを測る。柱穴の掘り方は、径25～45cmのほぼ円形を呈し、深さ10～20cmを測る。柱痕跡は径14～15cmを認めた。建物の桁行はほぼ東西方向に一致し、同区東側に検出された建物53・54と方位をほぼ同じくする。

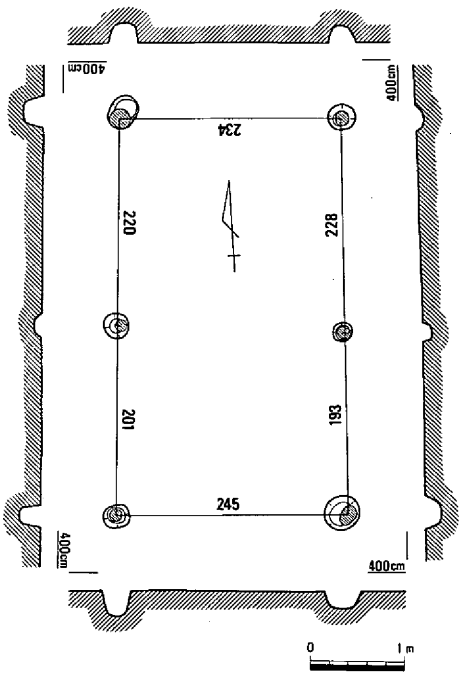
遺物は、柱穴埋土から早島式の椀片が出土しており、中世の建物と思われる。（柳瀬）

建物53（第269図）

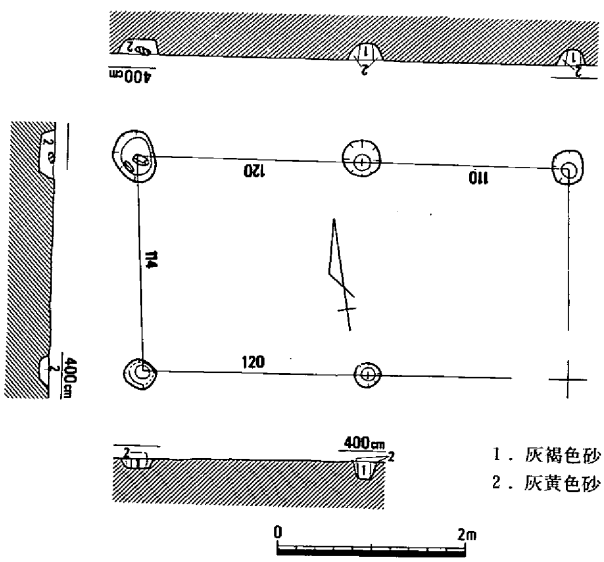
9A・B区の耕作土直下で検出された3間×3間の東西棟建物である。規模は桁行6.02m、



第266図　建物50



第267図　建物51



第268図　建物52

梁間5.98mを測るが、柱間距離は等しくなく、最大は214cm、最小は196cmである。柱掘り方の平面形は円形で、径30～40cmを測る。柱痕跡を残すものが多いが、P12は中心に石を置いている。

遺物は各柱掘り方内から土器の細片が出土しているが、中世という幅の中で理解し得る程度のものである。（平井）

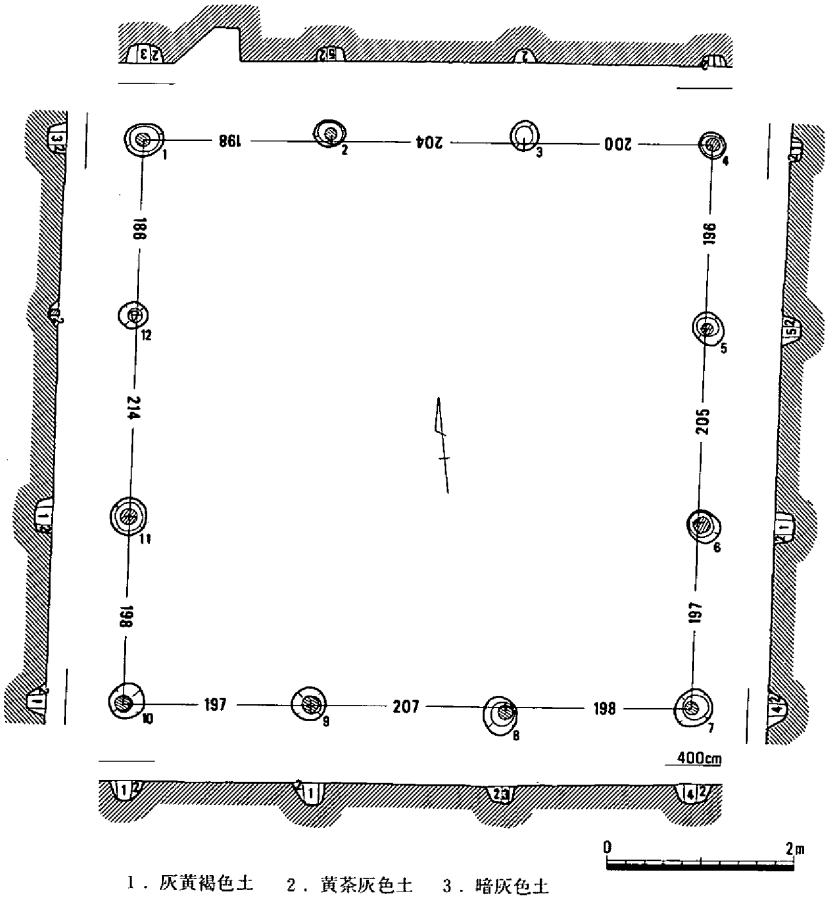
建物54（第270図）

9B区の耕作土直下で検出された4間×1間の東西棟建物である。規模は桁行の北辺が7.89m、同じく南辺が7.71m、梁間の東辺が1.62m、西辺が1.70mを測る。柱掘り方の平面形は径25～40cmの円形であるが、検出面からの深さは5～20cmと浅い。柱掘り方内には柱痕跡をとどめるものが多いが、P1・7は中心に石を置いている。

遺物は各柱掘り方内からわずかな土器の細片が出土した。715は瓦器椀の底部で、内面には荒い暗文が認められる。建物の時期は鎌倉時代と推定される。（平井）

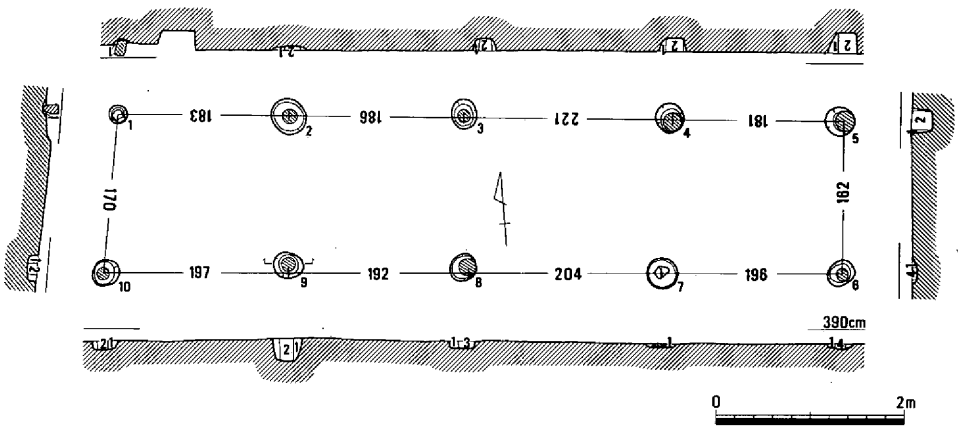
建物55（第271図）

9・10B区の耕作土直下で検出された1間×1間の建物である。規模は桁行の北辺2.00m、同じく南辺2.03m、梁間の東辺1.62m、同じく西辺1.68mを測る。柱掘り方の平面形は径



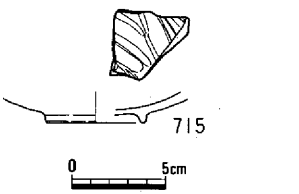
1．灰黄褐色土　2．黄茶灰色土　3．暗灰色土
4．灰褐色土　5．暗灰褐色土

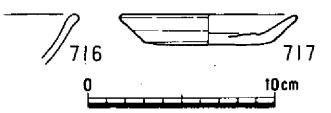
第269図　建物53

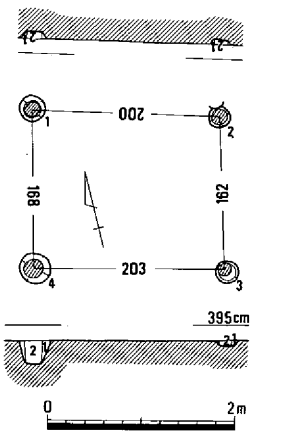


1．茶黄灰色土　2．暗灰褐色土　3．黄灰茶色土　4．灰黄茶色土

第270図　建物54・出土遺物

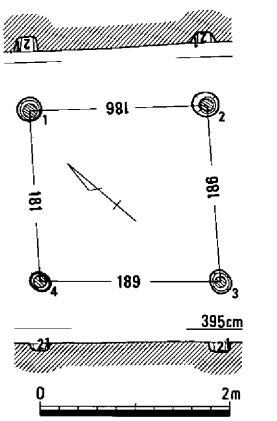






1．茶黄灰色土
2．暗灰褐色土

第271図　建物55・出土遺物



1．茶黄灰色土
2．灰褐色土

第272図　建物56

20～30cmの円形で、いずれにも柱痕跡が残る。

遺物は土器が少量出土した。716は土師器椀の口縁部である。717は土師器の小皿である。建物の時期は中世と考えられる。（平井）

建物56（第272図）

10B区の耕作土直下で検出されたややいびつな1間×1間の建物である。規模は一辺181cmから189cmを測る。柱掘り方の平面形は径25cm前後の円形で、いずれにも柱痕跡が認められる。

遺物は認められないが、建物の時期は検出面および柱掘り方の埋土から中世と考えられる。

（平井）

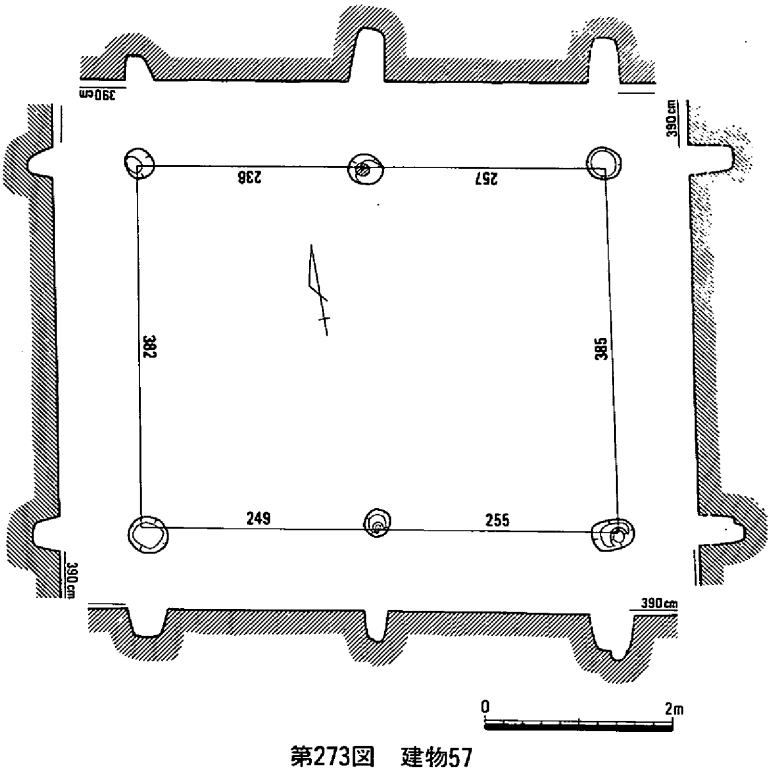
建物57（第273図）

9Z区の南寄りに位置し井戸9を切っている。桁行2間×梁間1間の東西棟建物で、桁行4.93・5.04m、梁間3.82・3.85m、床面積約19㎡を測る。柱穴の平面形態は円形で、径30～40cm、深さ30～60cmを測り、特に北側中央の柱は井戸の上に設置されたためか、深い。また、当柱穴には柱痕跡が残っており、柱の径は約10cmを測る。埋土は淡黄褐色粘質土であり、遺物は古墳時代土器細片が出土しているが、遺構の切り合い関係から鎌倉時代以降の建物と考えられる。

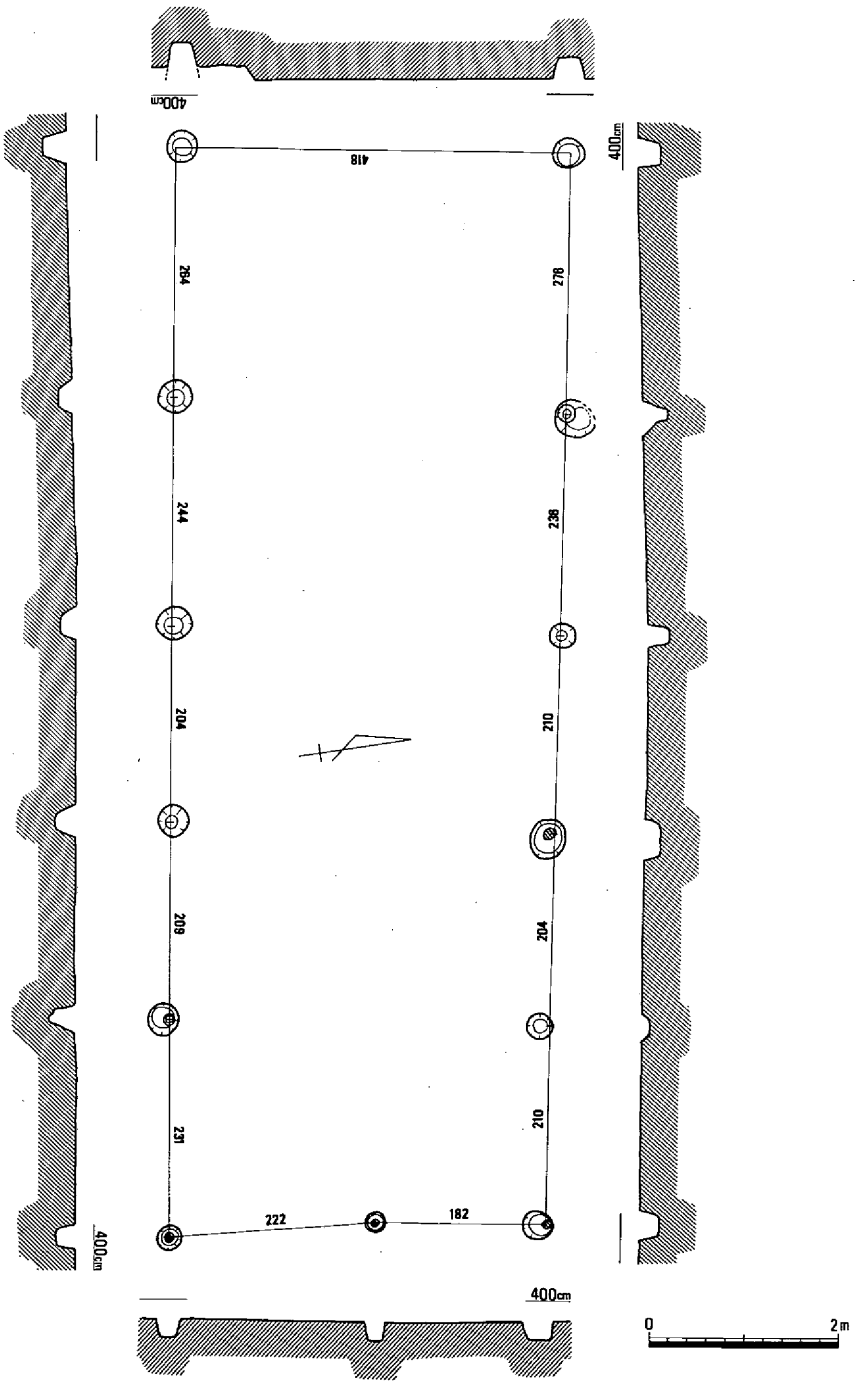
（江見）

建物58（第274図）

10Z区に位置し、建物56の南に並行して検出された桁行5間×梁間1間の東西棟建物である。桁行き8.6・8.88m、梁間4.18・4.04mを測り、西側および南側が対応する辺に対していずれも少し長い。床面積は約40㎡を測る。柱穴の平面形態は円形で、径25～40cm、深さ15～20cmを測る。なお、東側中央の柱穴は径20cmで他に比べ一回り小さい。埋土は淡褐色の粘質土あるいは砂質土が堆積しており、遺物は弥生～古墳時代土器片に混じって早島式土器細片が出

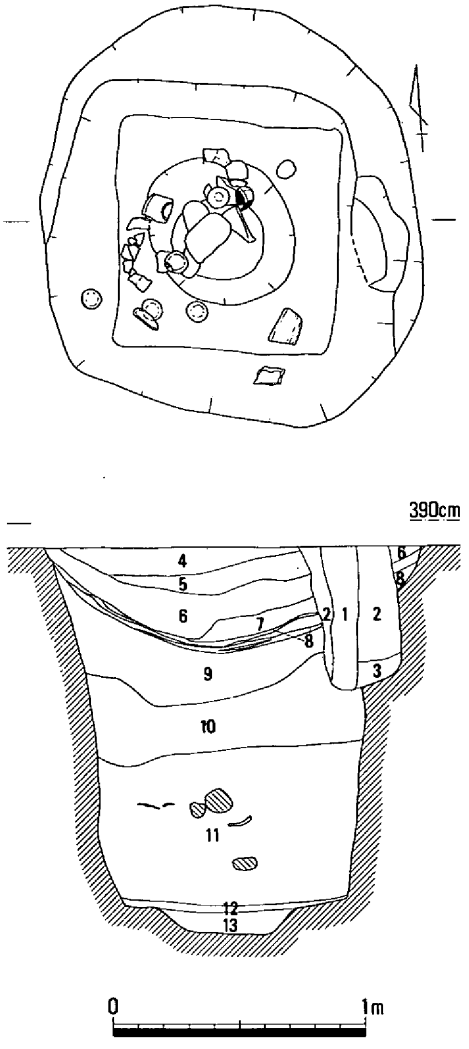


第273図　建物57



第274図　建物58

土している。鎌倉時代の建物と考えられる。　（江見）



1．淡茶灰色粘質土
2．淡黄褐色粘質土（灰、炭、焼土を含む）
3．淡茶灰色粘質土
4．暗黄灰色粘質土（炭を含む）
5．暗灰黄色粘質土
6．灰層
7．黒色炭層
8．灰黄色粘質土
9．淡茶灰色粘質土（淡灰色砂を含む）
10．暗灰色粘土（褐色粘質土、炭を含む）
11．灰色粘土および褐灰色細砂
12．褐色細砂

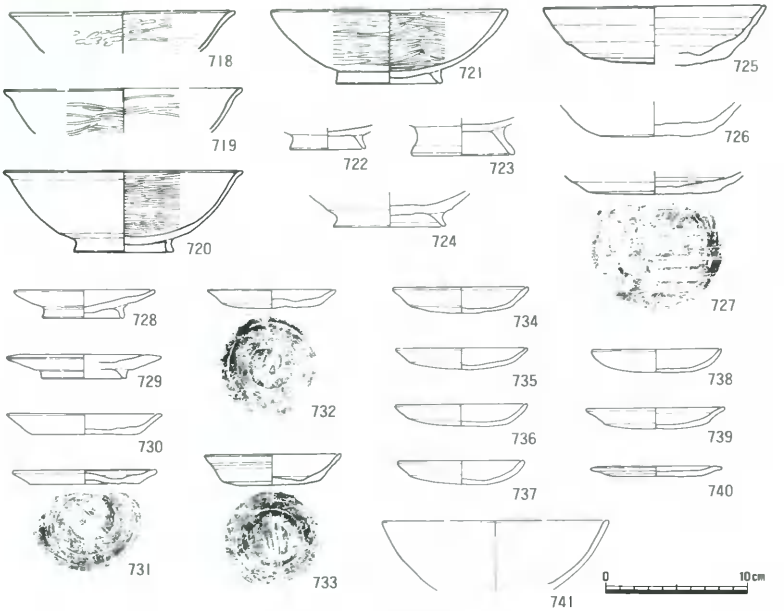
第275図　井戸９

(2)　井戸

井戸９（第275～277図、図版49・86）

９Ｚ区東寄りに位置し、建物57の柱穴に一部切られている井戸である。平面形態は検出面において不整円形を呈すものの、後述するように本来は方形を呈していたものと考えられる。壁の傾斜は検出面から深さ５～20cmの間は緩く下がるもののそれ以下は急になり東壁においてはほぼ垂直に直線的に掘り込まれている。また、西壁の底部付近は井戸水の滞水位置を示すかのようなやや窪んだ状態が認められる。また、４面の壁は整然と面をなし、角も明瞭に残ることから板材による枠が填められていた可能性が強い。底部は約90×90cmの方位に沿った正方形を呈し、その中央には更に径65×55cm、深さ約10cmの土壙が掘り込まれていた。最深部の海抜は2.25ｍである。

井戸内の堆積土は上層４～８、中層９・10、下層11、最下層12・13の４層に大別される。断面皿状に堆積する上層は下部に炭層と粘質土の薄層が互層をなして堆積しており、その上部は炭・焼土混じりの粘質土および灰層がレンズ状に堆積していたが、この上層が堆積する段階には井戸北東部の井戸の肩が崩れていたものと考えられ、平面形態は本来底部と同様の方形プランを呈し、一辺約150cmを測るものであったと推定される。遺物は南西部から２枚重なって検出された完形の土師質小皿736・738をはじめ、以下いずれも破片であるが土師質椀718・719、内黒の土師質椀721～723、土師質杯727、備前焼椀741、土師質小皿731、土師質鍋



第276図　井戸9出土遺物（1）

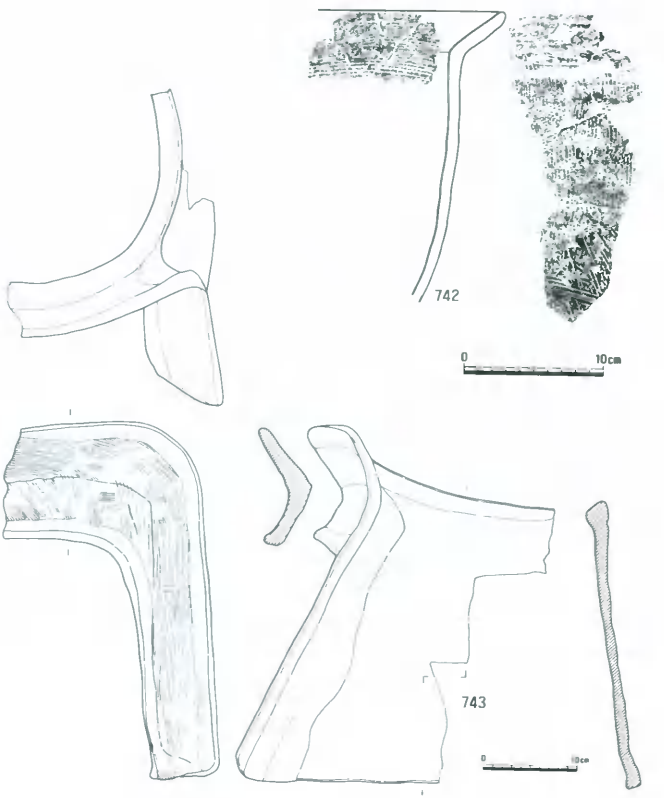
742が出土している。

中層上部はよくしまった粘質土で、下部は砂泥が混入する粘質土であり，意識的に埋め戻された堆積層である。遺物は南西部の円礫下およびその東から完形の土師質小皿732・740が出土している。

下層においても堆積層は粘土層に粘質土や炭が混じる埋め土である。遺物は底部に接するものはなく海抜2.6～2.8mの間に投げ込まれた状態で出土している。中央には10～20㎝の円礫が、その東から竈743、西から土師質椀720、周りからは完形に近いがいずれも破片の土師質小皿728～730・734・735・737・739、土師質杯725・726、平瓦片などが出土している。

最下層は上部に粘土および細砂が混じりあった状況を呈すが、下部は砂のみで下面に向かうに従って細かな微砂粒になっていた。この砂層は井戸掘削時に意識的に埋められたものと考えられるが、最下層の遺構形態から井戸使用時には径30㎝前後の曲物が設置されていた可能性があり、井戸廃棄時に、上記枠材とともに曲物も抜き取られたように想像される。

以上、上層の堆積状況から上層と中層以下には若干なりとも時間差のあることが明らかに



第277図　井戸９出土遺物（２）

なったが、遺物においては現時点で時期差を見出せないが、古代末の好資料である。

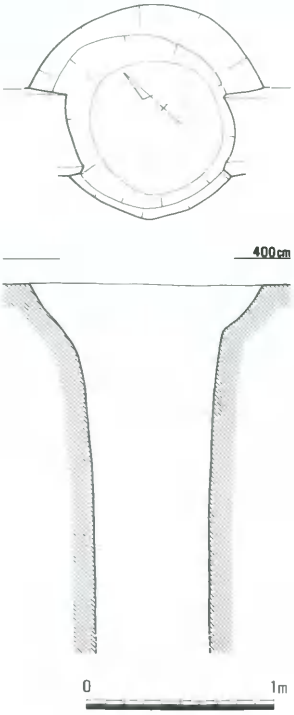
（江見）

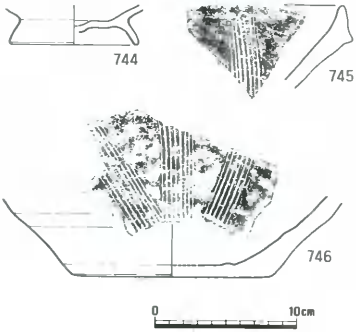
井戸10（第278図）

10Ａ区の耕作土直下で検出された井戸で、一部調査区外になるが、井戸の範囲のみ拡張した。井戸の平面形は径113cmの円形を呈するが、下に向って急速に幅を狭め、検出面から40cmあまりで径70cmにまで狭まる。これ以下はほぼ垂直な壁となるが、185cmほど下がったところで湧水が激しくなり、危険なことから掘下げをやめた。埋土は黄茶灰色土である。

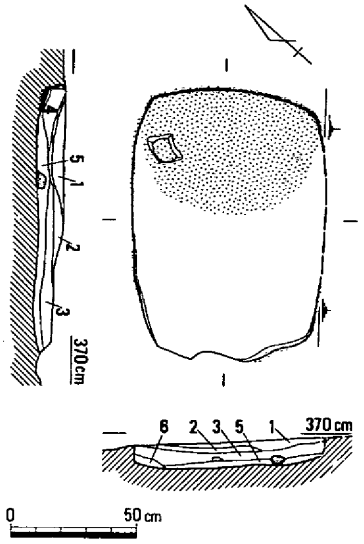
遺物は少なく、土器以外には獣骨が出土した。744は土師器の高台付椀の底部である。745と

746は備前焼の擂鉢で、内面には櫛描沈線が放射状に引かれる。時期は室町時代と推定される。（平井）





第278図　井戸10・出土遺物



1．暗褐色土
2．赤黒色焼土
3．明灰褐色土
4．灰褐色土
5．含炭灰褐色土（下部は炭層）
6．焼土

第279図　土壙56

(3)　土壙

土壙56（第279図）

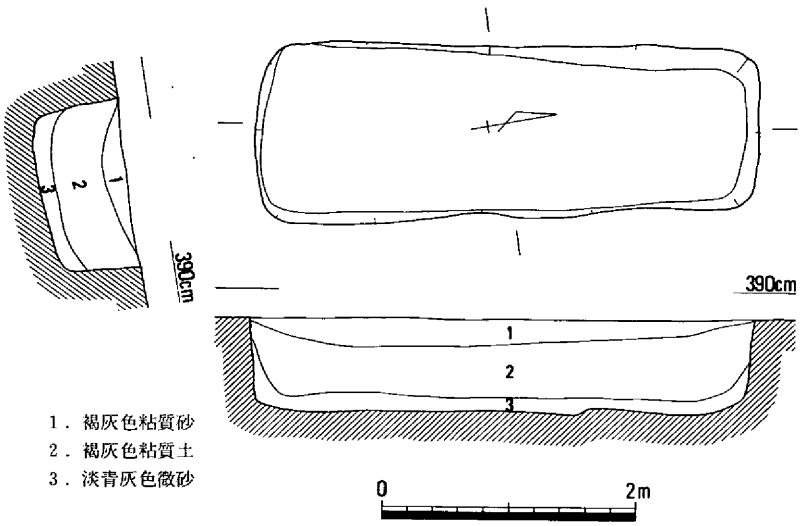
建物49の北西側で検出した浅い箱形の焼土壙で、長さ110cm、幅77cm、深さ24cmを測る。各辺はやや外側に張り出しており、軸線は北東―南西方向である。北東の壁面が最もよく焼けており、橙色に堅く焼け締まっている。他の壁も、下端はそれほどでもないが上部はかなり焼けて赤黒色を呈している。底面は北東側が薄い赤色に焼けており、北隅近くでは部分的に黒色に堅く焼け締まった部分も認められる。また、明確ではないが埋土中にも焼土面とみられる部分があり、複数次にわたって火が焚かれた可能性が強い。埋土中には炭、焼土片が混じっており、底面には薄く炭が堆積している。

埋土中に須恵器を含み、竪穴住居25を切って作られていることから、この土壙の時期は古墳時代後期後半ないしそれ以降とすることができるが、下限については不明とせざるをえない。なんらかの炉であろうと思われるが遺構の性格についても判断しがたい。（宇垣）

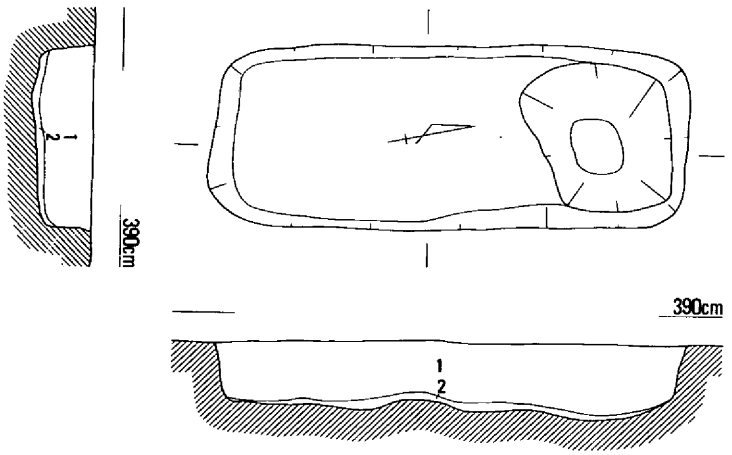
(4)　土壙墓

土壙墓２～５（第280～283図、図版50）

今回調査において中世の墓址は10Z区東寄りから４基のみ検出された。いずれも南北方向に主軸をもつ平面長方形を呈するもので、南側に長さ約200cm、幅約70cmの２基がほぼ並行して、北側にややずれるものの長さ約130cm、幅約60cmの２基が位置する。深さは約30cmを測る。土壙掘り込みの角度は急で、土壙墓２においてはほぼ垂直に掘り込んでいる。底部は平坦ではなくやや凹凸がみられる。埋土は褐灰色の粘質砂が堆積していたが、土壙墓２・３からは底部に淡青灰色微砂の薄い層が確認された。遺物は僅かに土器細片が混入する程度で副葬品等の出土はない。また、棺材・釘なども検出されなかったため土壙墓として扱っているが、土壙の形態から木棺の納められた可能性が強い。なお、土壙の規模から北側は小人、南側は成人の墓と推定される。時期は遺構の検出状況から中世と考えられる。（江見）



第280図　土壙墓２

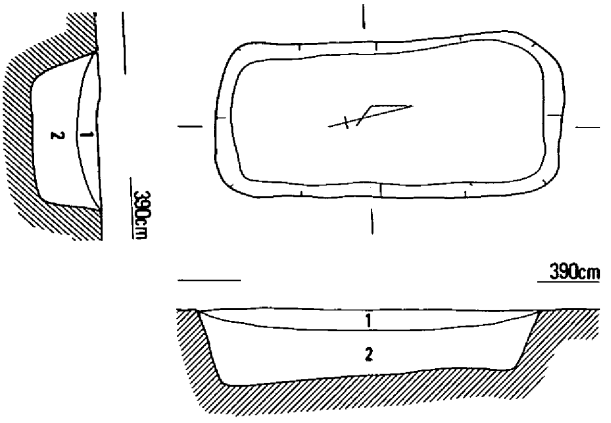


第281図　土壙墓３

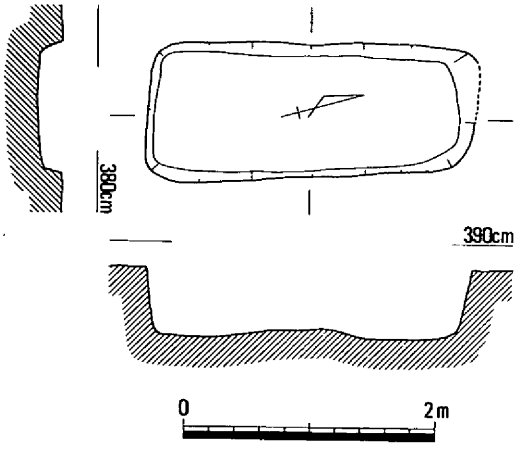
(5)　溝

溝50（第284図）

６ＣＤ区を南北方向に流れる２本の溝のうち西側に位置するものである。中世の遺構よりも古く、古墳時代後期の溝35を切っていることから古代の遺構とすることができるが、古い時期



第282図　土壙墓4



第283図　土壙墓5

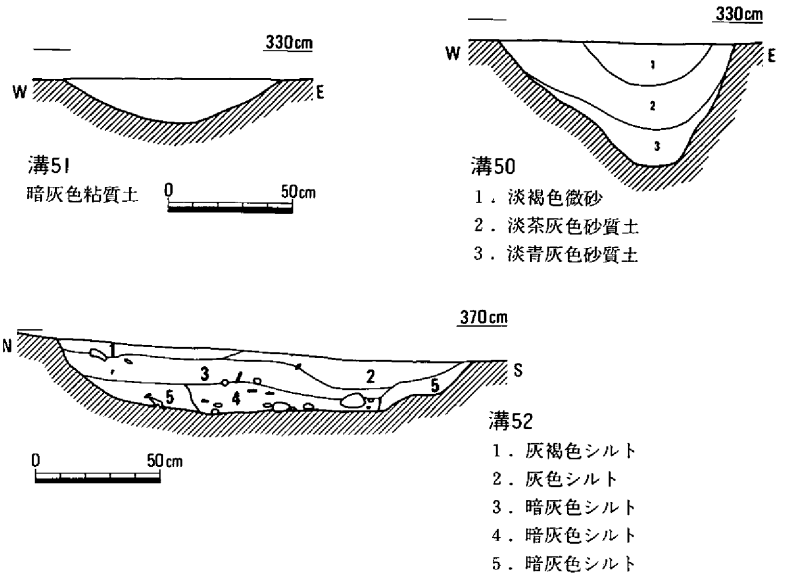
の遺物しか出土していないため時期を限定できない。上幅は約90cm、深さは北端で35cm、南端で50cmを測る。（宇垣）

溝51（第284図）

溝50の東側を平行して流れる溝で、上幅85cm、深さ18cmを測り、断面は皿形である。溝50と同じく時期は古代という以上には限定できない。（宇垣）

溝52（第284～286図、図版89）

9CD区東側で検出した東西方向の溝であるが、西端は用水路で削られているため調査区内

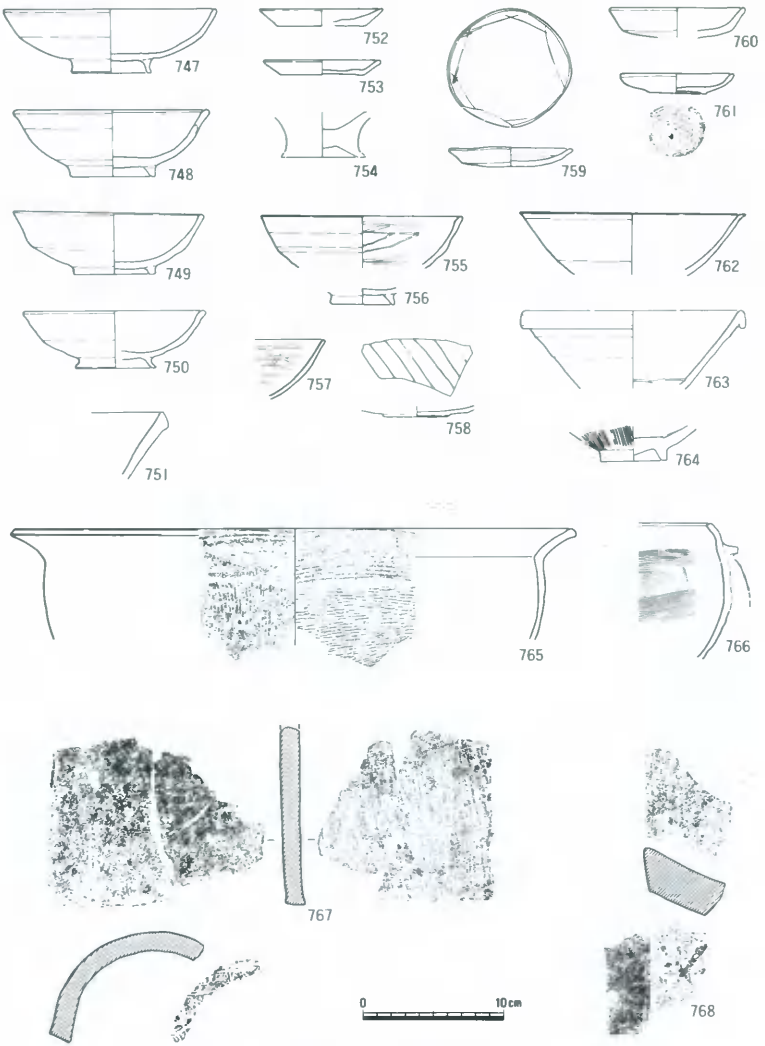


第284図　溝50・51・52

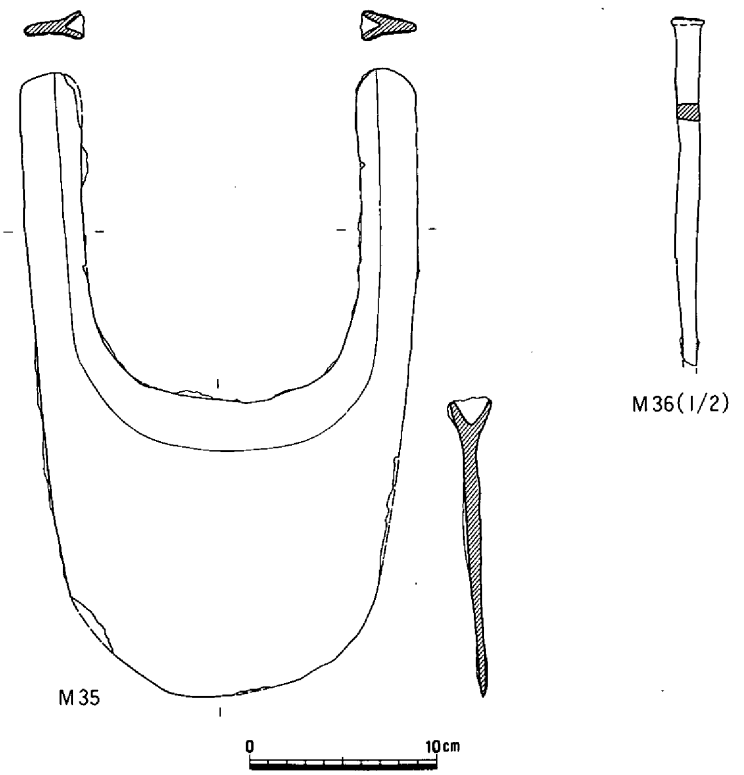
での検出範囲は短い。溝の断面は浅い逆台形を呈し、上幅170cm、深さ20cmを測る。埋土は基本的に灰色粘質土であり、４層の状況から少なくとも１回の改修がなされたことがうかがわれる。溝内からは４層を中心に多量の遺物が出土した。

遺物は土師質高台付椀、小皿、瓦器椀・脚付き羽釜、白磁椀、青磁椀、鉢、土鍋、瓦、鉄器などからなる。土師質高台付椀747～750は口径12.6～14.6cm、器高4.1～4.7cmを測り、内面および外面上半がナデ、外面下半には指紋が残る。内面にはいずれの個体も重ね焼きの痕跡が認められる。瓦器椀755～758は内面上部に乱雑な平行の暗文が、内底には平行の暗文が施される。瓦器椀はいずれも小片からなるが、瓦器皿759～761には完形品や部分欠損品が含まれている。759では内面に多角形をなすような暗文が施されており、761では糸切りが認められる。また、766は瓦質の脚付羽釜で、外面調整はユビオサエ、外面下半にはススの付着が認められる。762、763は白磁碗、764は青磁碗、751は東播系のこね鉢、765は土鍋である。瓦の出土量は少なく、ここに図示した767、768程度である。焼成は良好で768では下面に格子のタタキが認められる。鉄器のうちM35は長さ32.8cm、幅21.1cm、重量920ｇを測る大形の鋤先で、溝底面から出土した。また、釘はここでは最も残存状態の良好なM36のみを示しているが、他に破片５点が出土している。

この溝は東西方向で、この時期の建物と同じ軸線である。おそらく屋敷地境などなんらかの地割りになるものと思われるが、検出範囲が狭いため集落全体のなかでの評価は今後の課題としたい。出土遺物から、この溝の埋没時期は13世紀前半であったと考えられる。　　（宇垣）



第285図　溝52出土遺物（1）

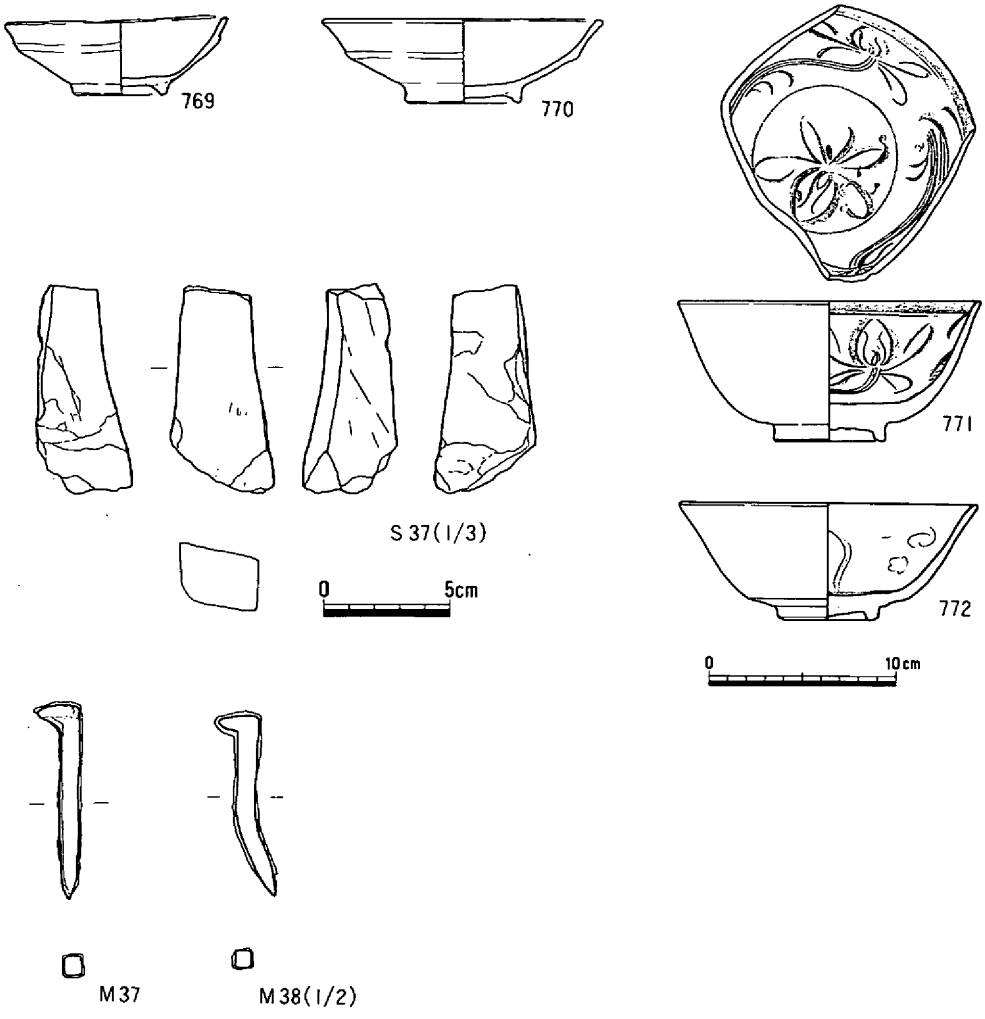


第286図　溝52出土遺物（２）

(6)　遺構に伴わない遺物

中世の遺物の出土量は少なく、ここではいくつかの遊離遺物と柱穴出土遺物を示した（第287図）。調査区のうち中世の遺物が比較的多かったのは５～７ＣＤ区の土取り遺構の埋土であり、この付近に中世の包含層・斜面堆積が形成されていた可能性がある。

769は口径11.6cm、器高4.0cmとかなり小形になったもので、この型式の土師質高台付椀の出土量は少ない。砥石Ｓ37は包含層から、釘M37、38は柱穴からの出土である。青磁椀771、772はいずれも遊離して出土したものであり、771では内面に蓮華文が、772では簡略な文様が彫り込まれている。（宇垣）



第287図　包含層、柱穴等出土遺物

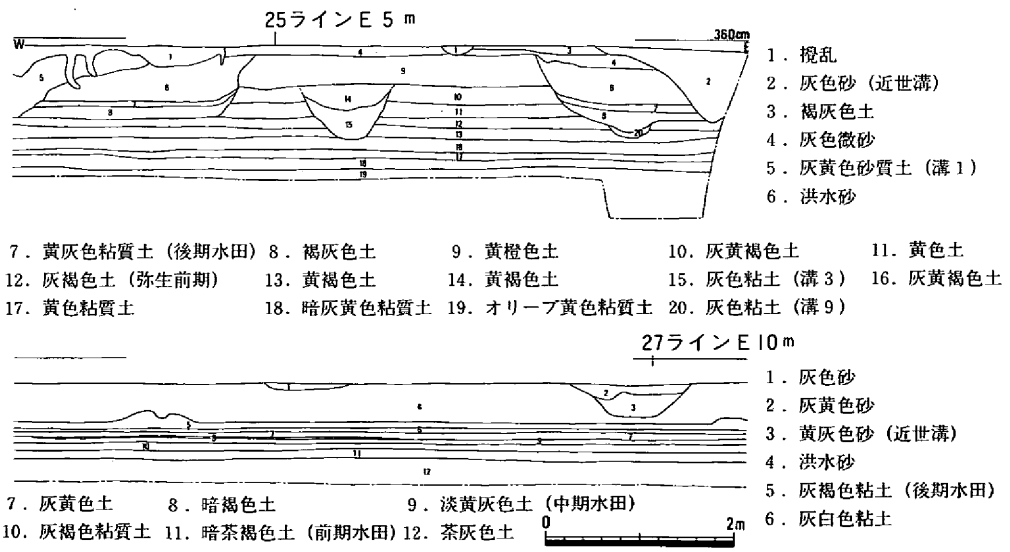
第2節　川内調査区

1．川内調査区の概要

本調査区は、国道2号線百間川橋の上流約200mに位置する。調査範囲は低水路掘削予定幅80mのうち、北寄りの幅20m、長さ180mが対象で、南側の幅40mについてはすでに調査が終了し、報告書（「百間川原尾島遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』56）も刊行されているが、北側の残り20mについては未調査である。

調査区は上流側に広がる原尾島遺跡の微高地と、下流側に広がる沢田遺跡の微高地間に形成された低位部にあたり、弥生時代においては専ら水田として利用されていた。

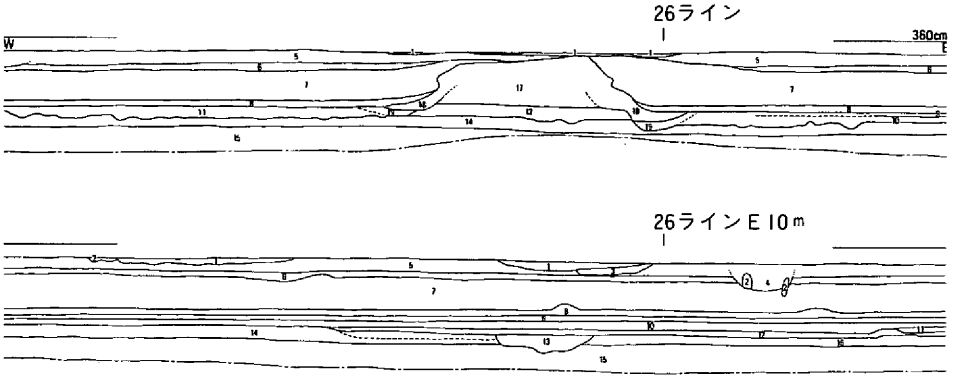
層位は、標高3.5m前後を測る現地表下に現代水田耕作土、鉄分・マンガンを多く含む淡黄褐色砂層、そして灰色粘土層（中世）、灰黒色土層（古墳時代）と続き、その下は弥生時代後期末の洪水砂層となるが、島状高まりの頂部は淡黄褐色砂層に接している。洪水砂層は厚さ50～60cmを測り、その直下は弥生時代後期の水田層となる。後期水田層直下には、これもおそらく後期の水田層と考えられる暗黄灰色粘質土層があり、これを取り除くと後期の遺構が検出される。暗黄灰色粘質土層の下は、中・前期水田層のない場所は、黒褐色土、そして弥生時代の基盤層となる黄灰褐色土層へと続く。これに対し、中・前期水田が所在する場所は、後期水田層下に黄灰色土層を挟んで中期水田層（淡黄灰色土）となり、さらにその直下の灰褐色粘質土層



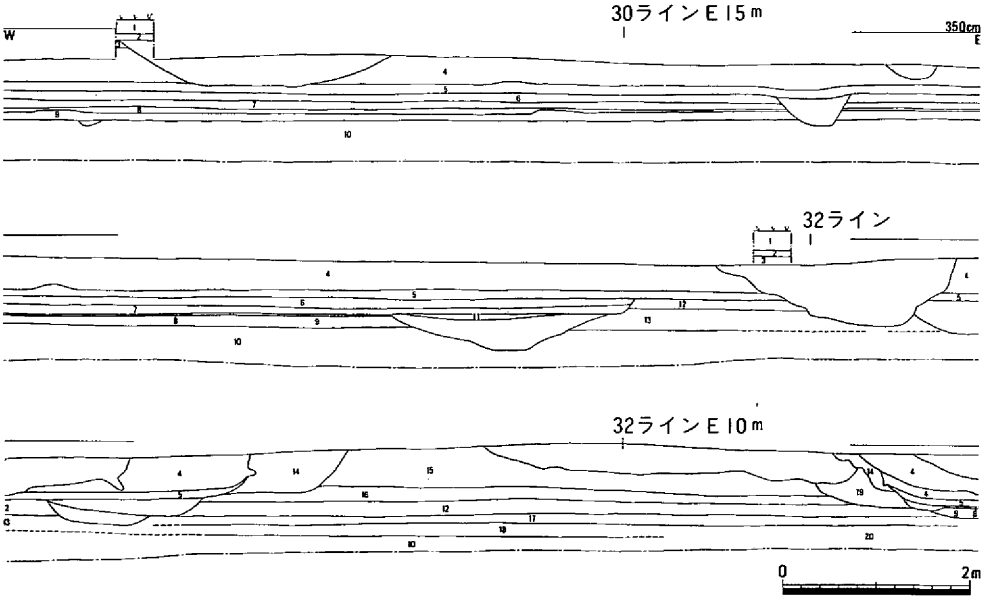
第288図　調査区北壁土層断面図（1）（S＝1/80）

を挟んで前期水田層になる。なお前期水田面の標高は2.6m前後を測る。

検出された遺構は、弥生時代から中世に属するものであるが、弥生時代が主体をなす。中世の遺構は、洪水砂層の認められる場所に堆積している灰色粘土層を取り除いて検出した。主な



1．撹乱　2．灰白色砂　3．灰色土（黄色砂混り）　4．暗灰褐色土　5．灰色粘質土（中世）
6．灰黒色土　7．洪水砂　8．暗灰色粘土（後期水田）　9．淡灰色粘質土　10．淡灰褐色土
11．淡黄灰色土（中期水田）　12．灰褐色粘質土　13．黒灰色粘質土　14．暗茶褐色土　15．茶黄灰色粘質土
16．暗茶褐色土（前期水田）　17．灰黄色土（鳥）　18．灰褐色土　19．灰色粘土



1．現代水田耕土　2．鉄分・マンガン層　3．淡灰黄色土　4．洪水砂　5．灰褐色土（後期水田）
6．淡灰黄色土　7．黄灰色土（中期水田）　8．茶灰黄色土　9．暗茶褐色土（前期水田）　10．茶灰色土
11．茶灰色土　12．暗茶灰色土　13．茶灰色土　14．暗灰色粘質土　15．茶灰色土
16．灰茶色土　17．黄灰茶色土　18．明茶灰色土　19．茶灰褐色土　20．茶灰色土

第289図　調査区北壁土層断面図（2）（S＝1/80）

遺構は溝である。いずれもほぼ南北方向に流走しており、この中には片側に瘤状の張出しが認められるものがある。

古墳時代の遺構は灰黒色土層を除去して検出した。遺構はわずかで、いずれも溝である。

弥生時代の遺構はまず洪水砂層を除去し、後期の水田を検出した。後期水田は調査区全域に広がっており、島状高まり周辺を除けばほぼ田の字状に整然と区画されている。後期水田層下には、畦畔は認められないが、水田層と考えられる層があり、これを取り除くと後期の遺構が検出される。これらの遺構はおそらく後期前半を中心とした時期と推定されるが、遺物が少ないため時期を明確にし得ないものが多い。後期水田層下の遺構もほとんどは溝であるが、その他に浅い土壙やピットが認められる。溝の多くは南北方向に流走するが、溝66は北東方向から大きく屈曲して南西方向へ流走する。

中期水田は後期水田層下の間層を取り除くと検出されるが、畦畔の高さはわずかしか残存していない。中期水田の広がりは、東側で水田の端が検出されたものの、西側では明確でない。しかし26・27ライン付近の可能性が強いことから、東西約100ｍの範囲と推定される。

中期水田層下の土を取り除くと前期水田が検出される。前期水田も畦畔の高まりはほとんどなく、痕跡程度の場所もある。前期水田の広がりは中期水田の広がりとほぼ重なり合うようで、東西約100ｍの範囲に認められる。水田の東側には南北方向に３条の溝が流走している。

なお、本調査区では弥生時代前期をさかのぼる遺構・遺物は出土していない。　　（平井）

２．弥生時代前期の遺構・遺物

(1)　水田（第291・292図）

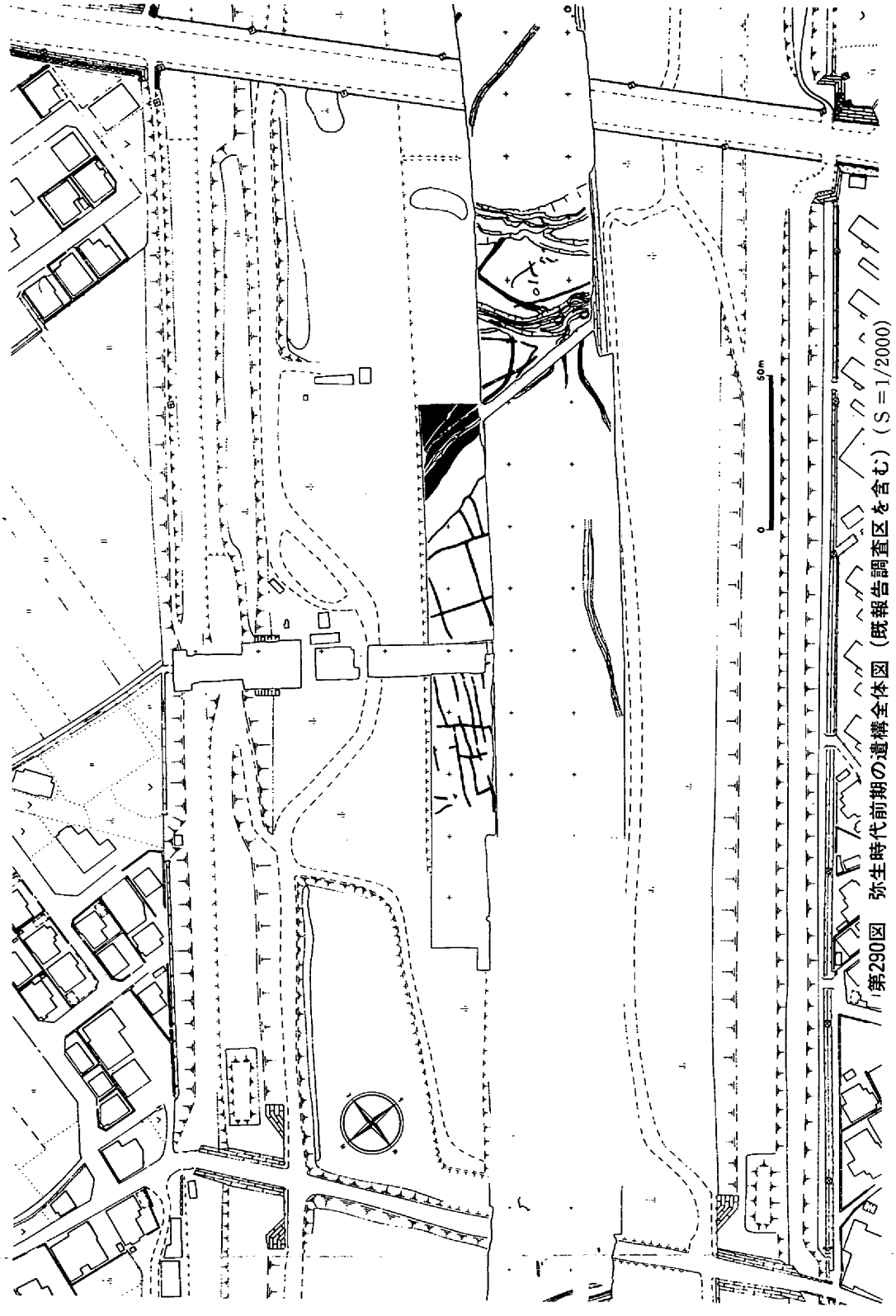
前期の水田は26～32Ｃ・Ｄ区で検出された。26～28Ｃ・Ｄ区では淡灰褐色土、29～32Ｃ・Ｄ区では灰白色粘土をわずかに残して検出作業を実施したところ、幅30cmあまりの暗茶灰色を呈する畦畔が認められたことから水田とした。

水田はおよそ26ラインから32ラインの範囲に認められるが、東側では水田層の端が明確に検出されたのに対し、西側では不明瞭となる。しかし、26ラインから大きく西側に広がる様相が認められないことから、東西約100ｍの範囲と推定される。

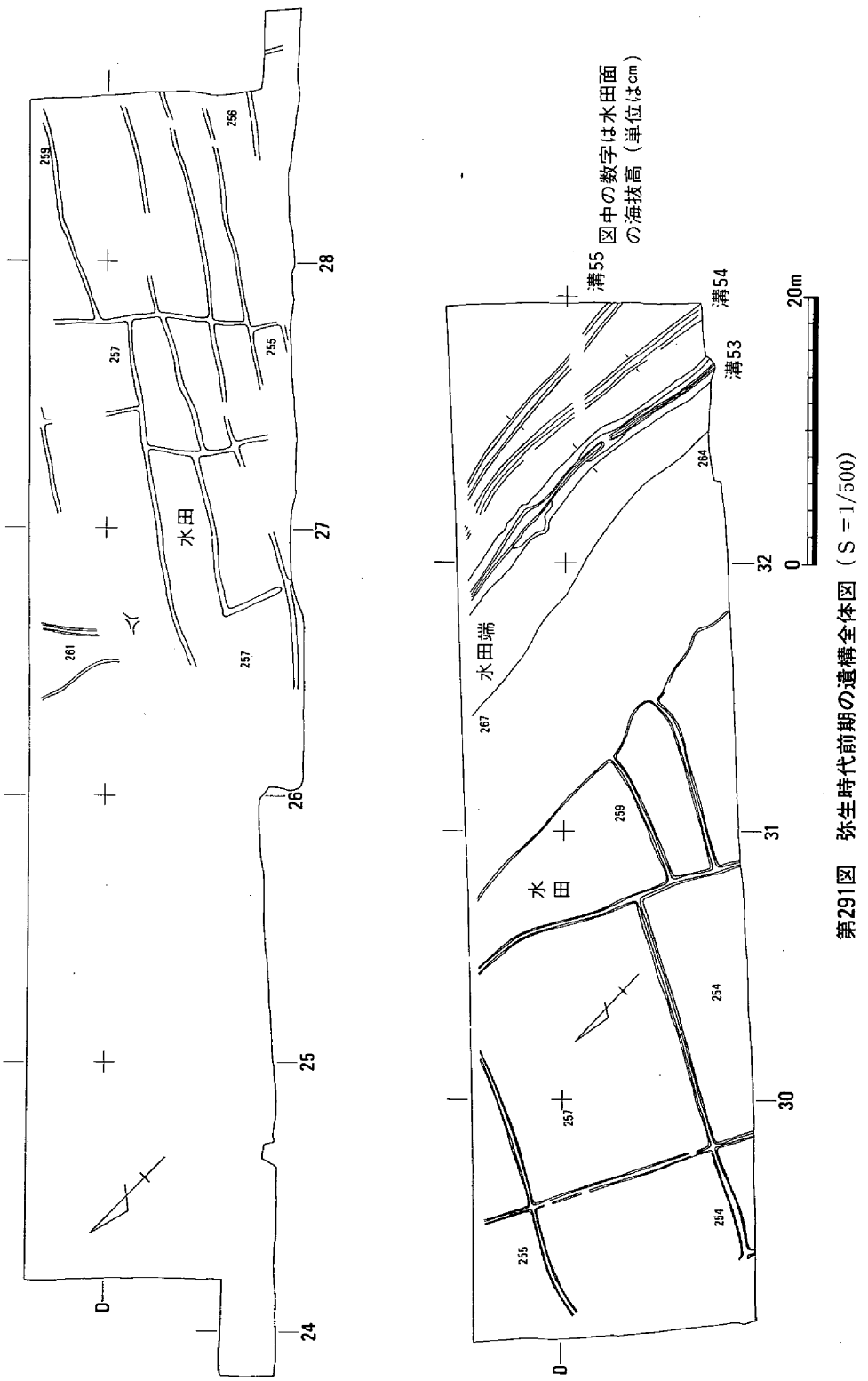
水田面の高低差はあまりなく、全体的に東側から西側に向ってわずかに低くなるものの、その差は10cmにも満たない。畦畔の幅は20～30cm内外であるが、高さは頂部が削平されているため１cm内外と低く、その痕跡しか認められない部分もある。

水田の区画は26～28Ｃ・Ｄ区では細長い長方形となるが、29～32Ｃ・Ｄ区では正方形に近くなる。水田層は暗茶灰色ないし灰茶色の粘質土で厚さ10cmあまりを測る。

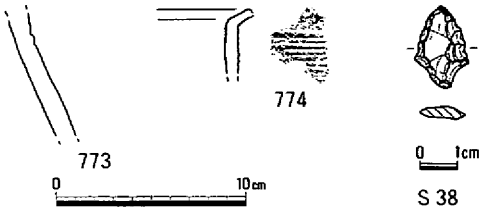
水田層中からは前期土器の細片が出土するものの、水田形成の詳細な時期は不明である。図



第290図　弥生時代前期の遺構全体図（既報告調査区を含む）（S＝1/2000）



第291図　弥生時代前期の遺構全体図（S＝1/500）



示した遺物は壺と甕の細片および石鏃である。甕はく字状に強く折れ曲がった口縁下に篦状工具による多条沈線が施される。時期は百・前・Ⅲと考えられる。　（平井）

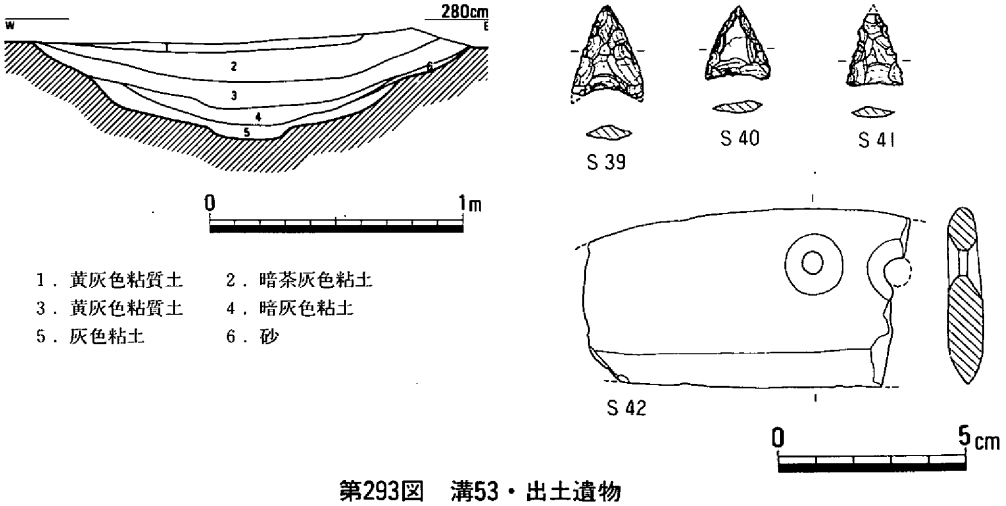
第292図　前期水田層出土遺物

(2)　溝

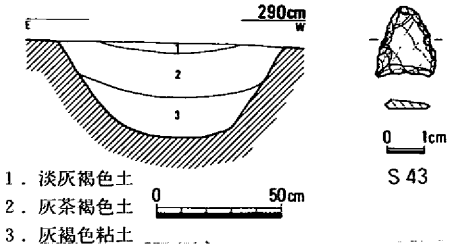
溝53（第293図）

32Ｃ・Ｄ区をほぼ南北に流走する溝である。溝は幅150から180cm、深さ40cmあまりを測る。幅に比較して深さは浅く、壁の立上りは緩やかである。底の中央には幅30cmほどの浅い溝がさらに掘り下げられている。溝底の高低差は北端と南端を比較してもほとんどない。

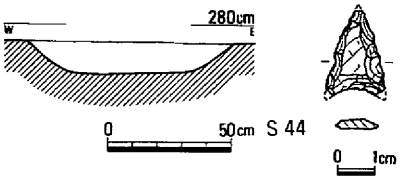
遺物は土器の細片および石器が出土した。図示し得た遺物は石鏃と磨製石包丁である。溝の



第293図　溝53・出土遺物



第294図　溝54・出土遺物



第295図　溝55・出土遺物

時期は、検出面と土器の細片から前期に属すると考えられる。（平井）

溝54（第294図）

32C・D区で検出された溝で、溝53の東側を平行して南北に流走する。溝は幅90cm前後、深さ30～40cmを測る。底はほぼ平坦で、壁は急斜に立上る。溝底の北端と南端の比高差はほとんどない。埋土はほぼ3層に分かれ、灰褐色粘土層中には前期土器の細片が含まれていた。

遺物は土器の細片と石鏃が出土した。溝の時期は土器の細片と、検出面から前期に属すると考えられる。（平井）

溝55（第295図）

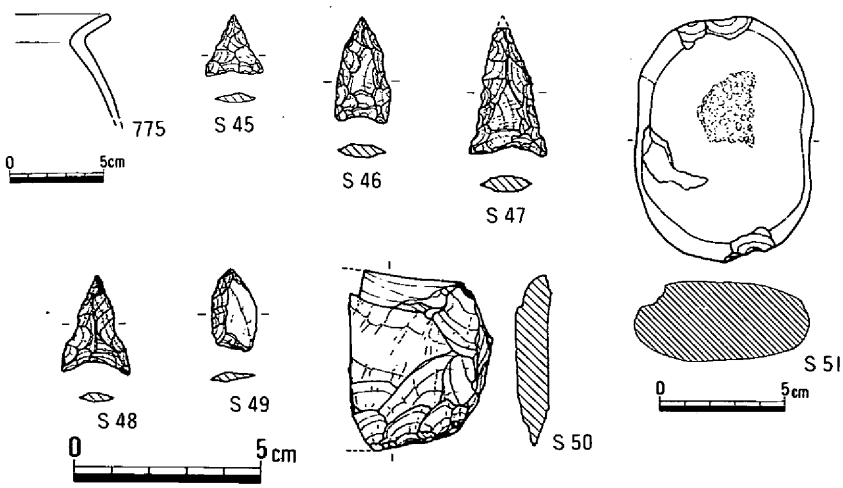
32C・D区を南北に流走する3条の溝のうち、1番東側に位置する溝である。溝は幅80～100cm、深さ15cm内外を測る。底の幅は広く平坦で、壁はやや急斜に立上る。溝底の高低差はほとんどない。埋土は暗茶褐色土であるが、焼土と炭を多く含んでいた。

遺物は土器の細片がわずかと石鏃が出土した。溝の時期は土器の細片と検出面から前期と考えられる。（平井）

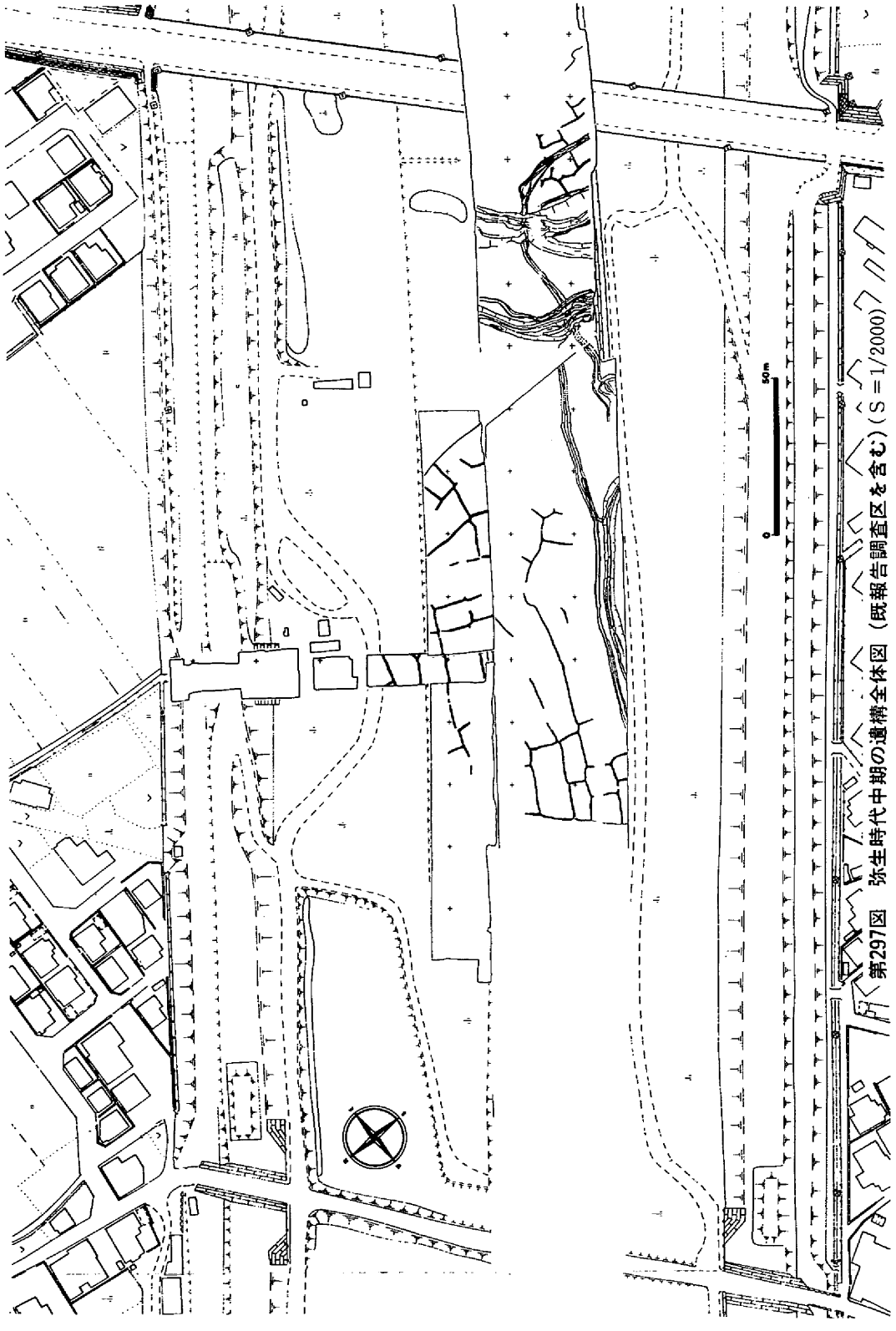
3．弥生時代中期の遺構・遺物

(1) 水田（第296・298図）

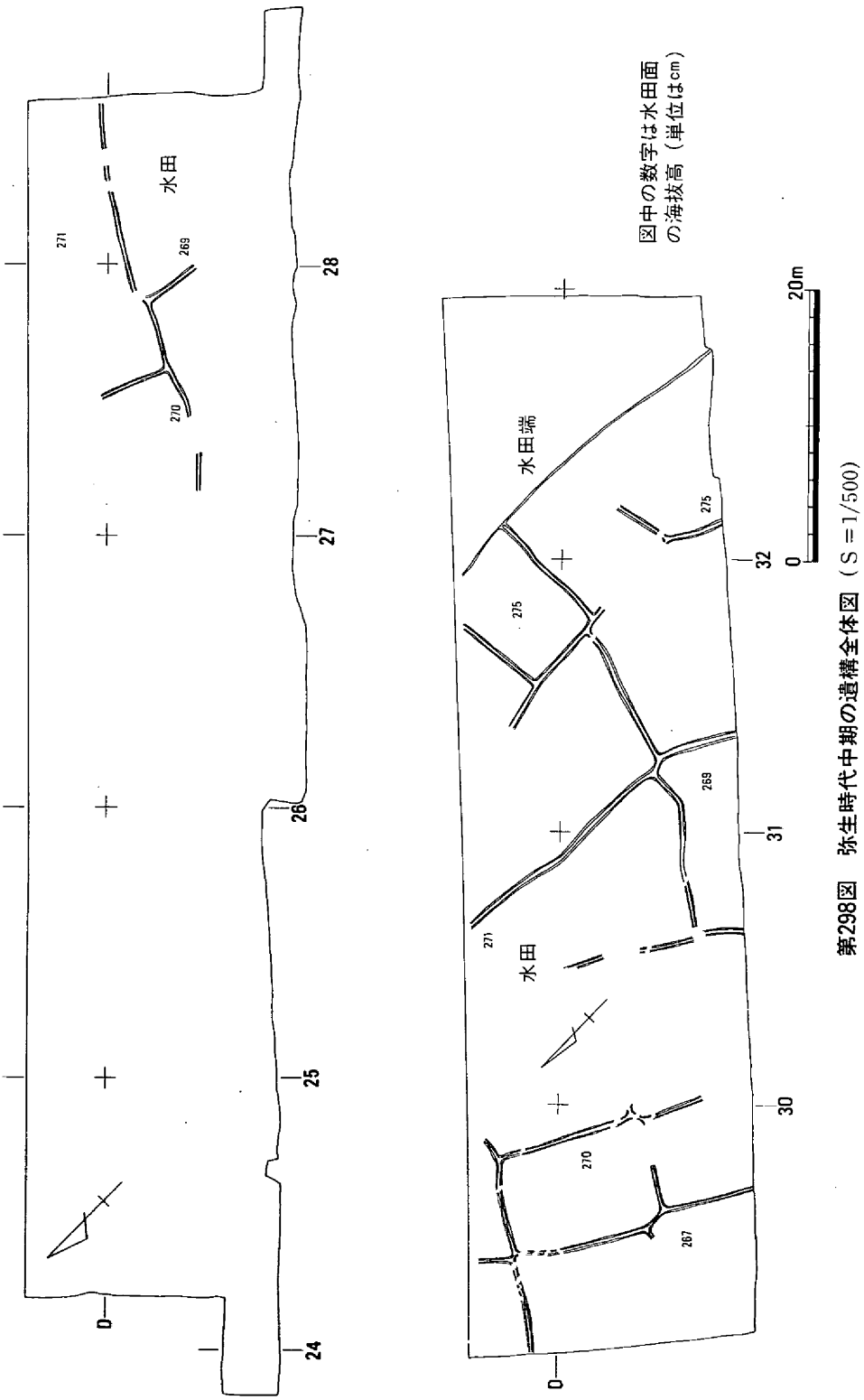
中期水田は27～32C・D区で検出された。東端は32C・D区で認められ、前期水田より少し東側に拡張された様子がうかがわれた。西端については明確にし得なかったが、水田層の広がりから、26ラインを西に大きく越えることはないようである。したがって調査範囲内では東西100～120mの範囲に広がるものと考えられる。水田面の高さは中央部が少し低く、全体的に西



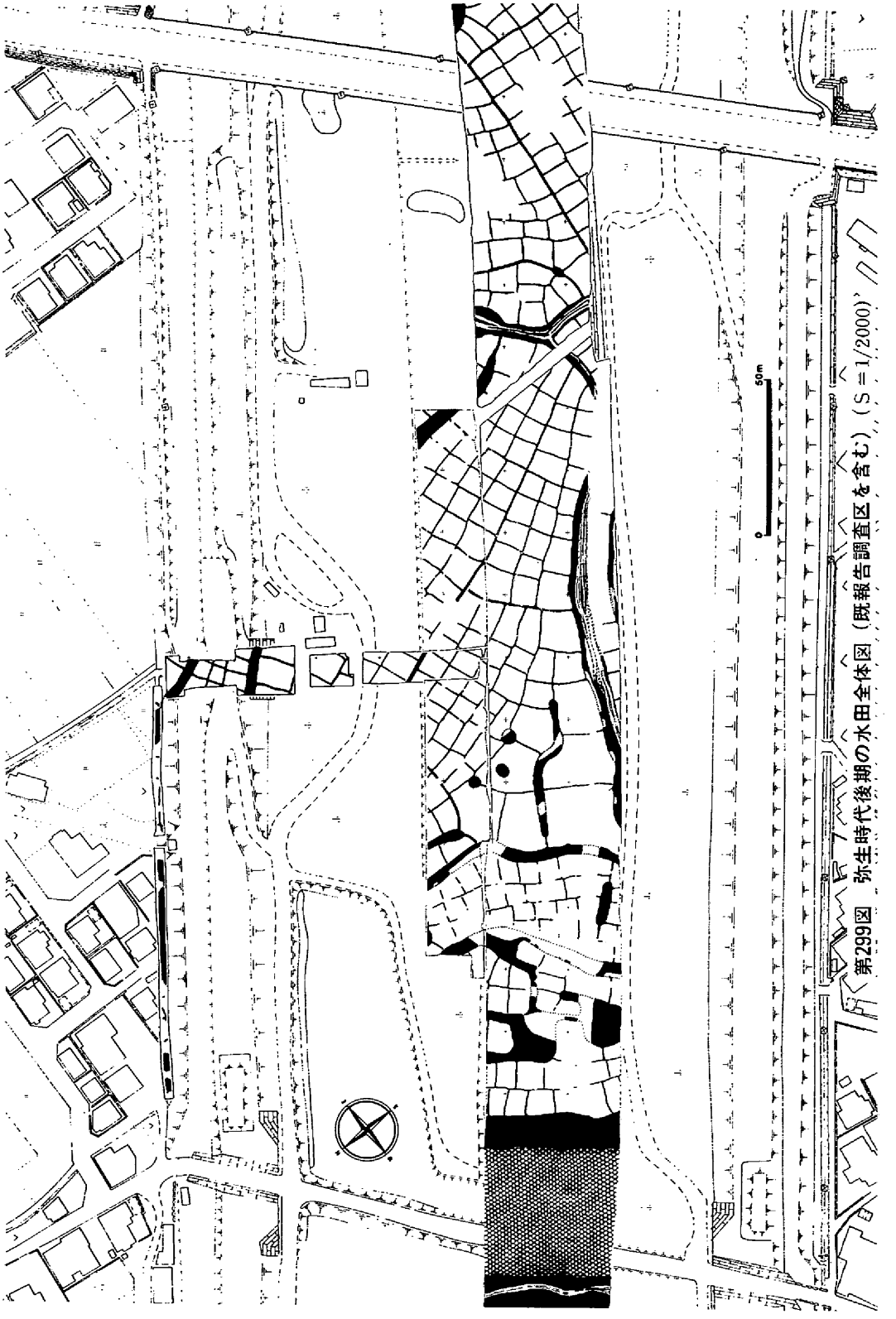
第296図　中期水田層出土遺物



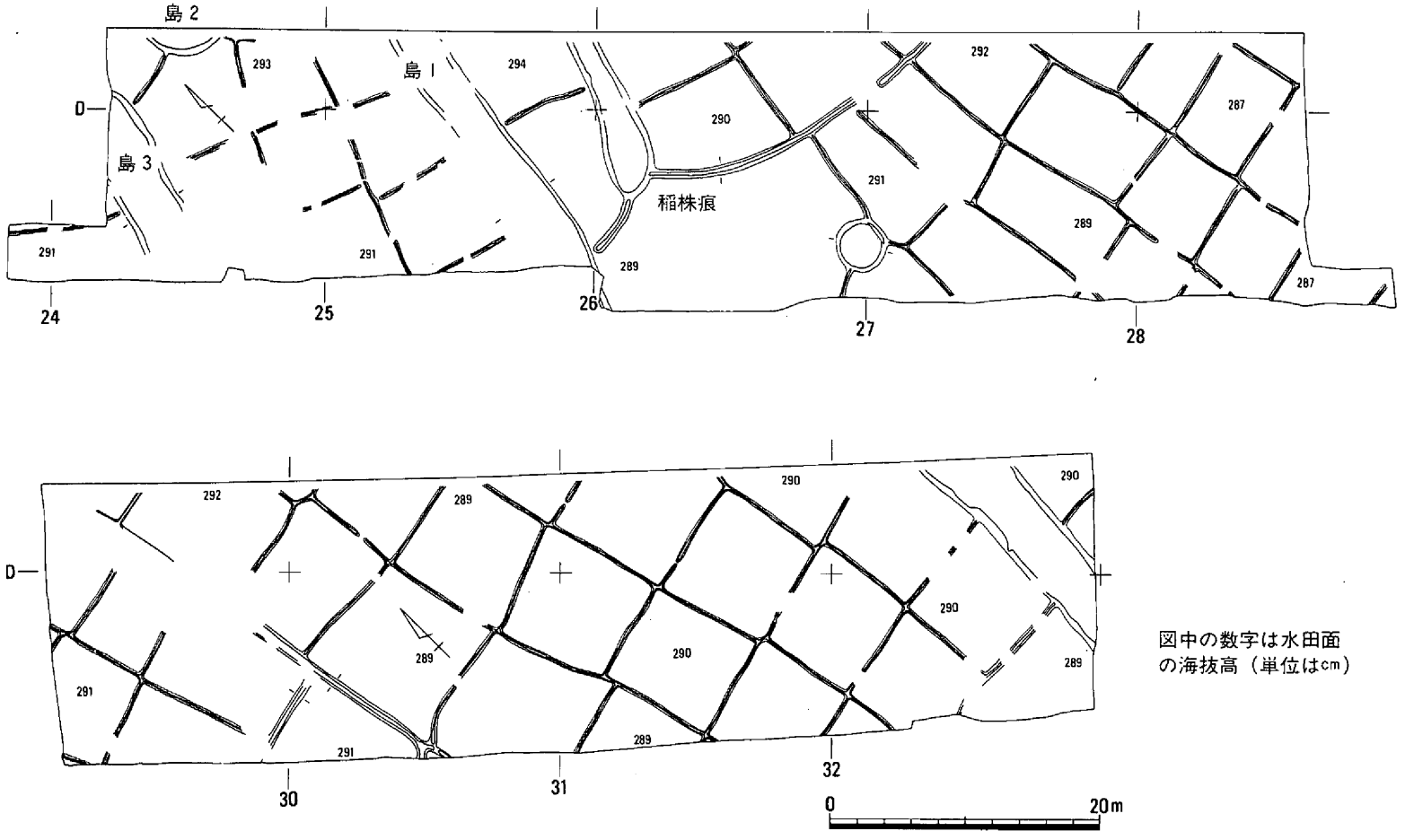
第297図　弥生時代中期の遺構全体図（既報告調査区を含む）（S＝1/2000）



第298図　弥生時代中期の遺構全体図（S＝1/500）



第299図　弥生時代後期の水田全体図（既報告調査区を含む）（S＝1/2000）



図中の数字は水田面の海抜高（単位はcm）

第300図　弥生時代後期の水田全体図（S＝1/500）

に向いてわずかに傾斜している。

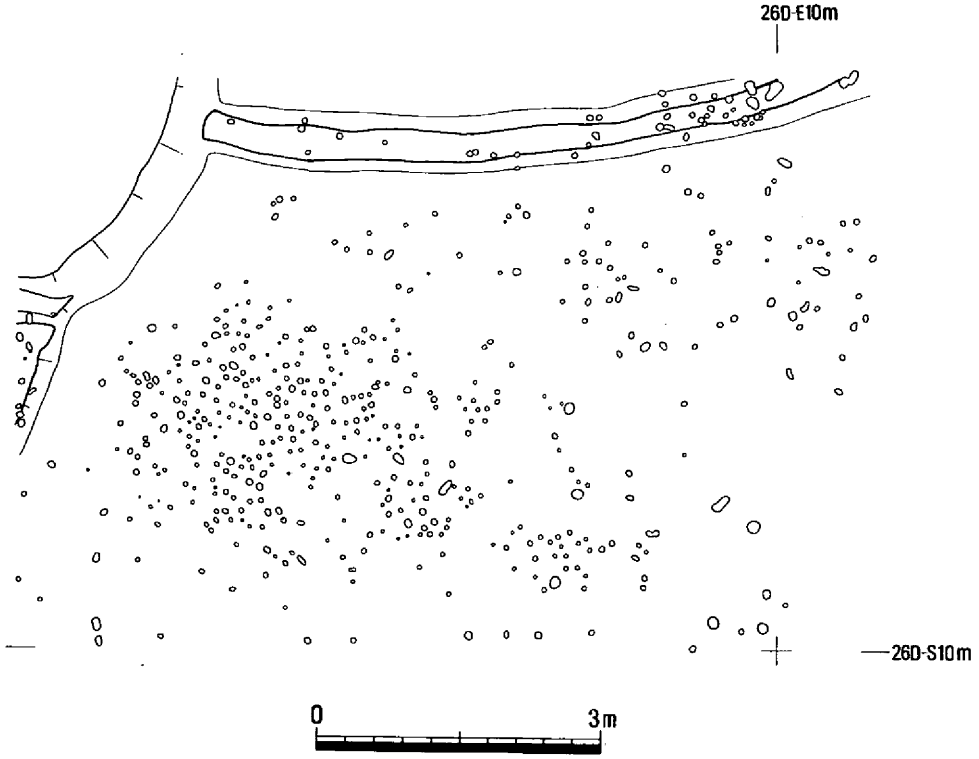
水田は保存状態が良好でないためいま一つ明確ではないが、ほぼ田の字状に並ぶものと考えられる。畦畔は幅20～30cmであるが、高さは削平されて2cm前後と低くなっている。明確に水口と考えられる場所もなく、また畦畔の大小も認められない。水田層は厚さ5cm内外で、淡黄灰色を呈する。

遺物は土器の細片と石器が出土した。図示し得た遺物は甕の口縁部と石鏃5点、打製石包丁1点、石錘1点である。溝の詳細な時期は不明であるが、出土遺物から中期に属すると考えられる。（平井）

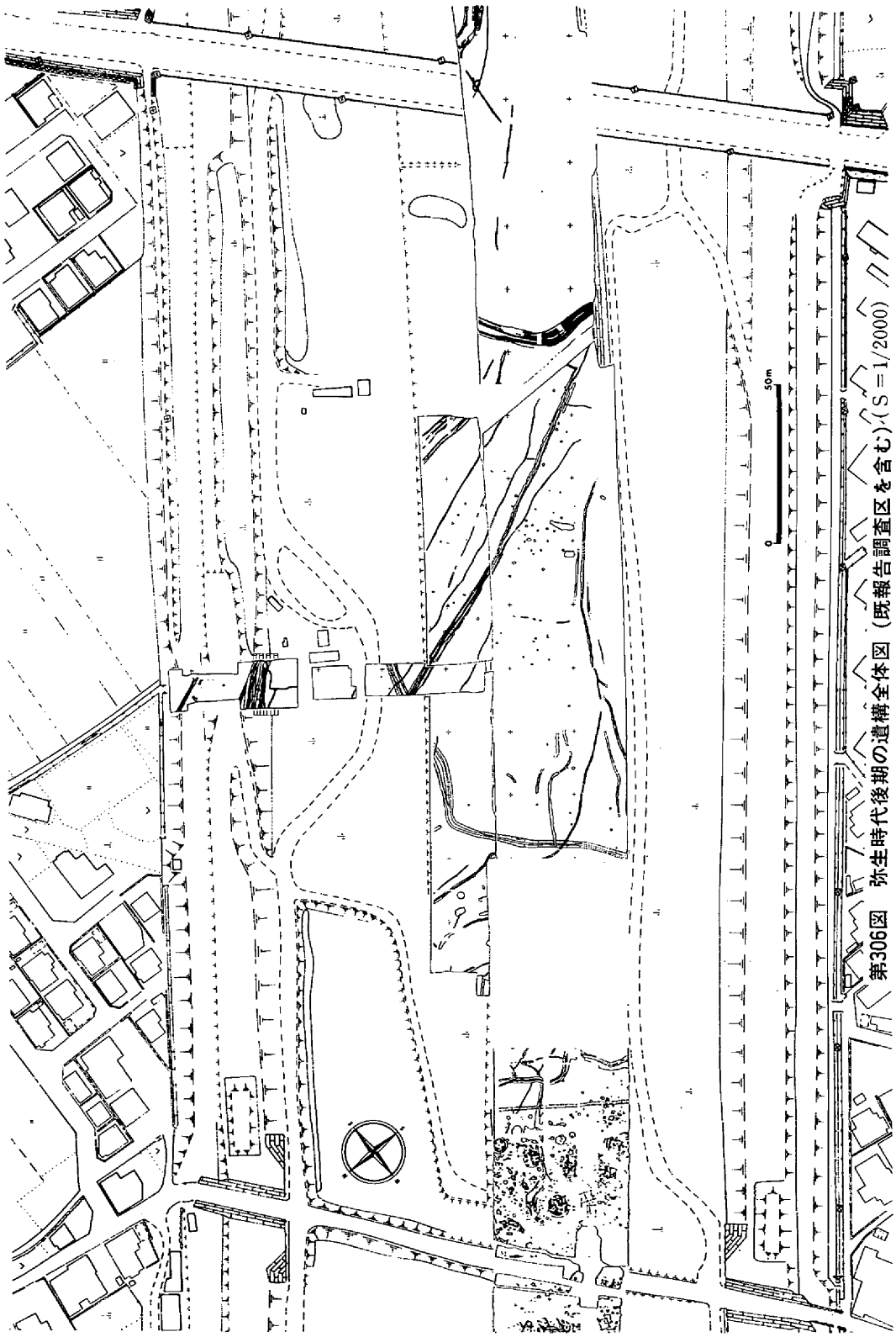
4．弥生時代後期の遺構・遺物

(1)　水田（第300・305図）

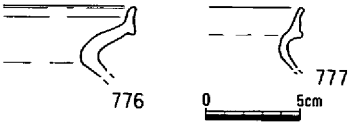
後期の水田は厚さ50～60cmの洪水砂に覆われているもので、調査区の全域に広がっている。水田の区画はほぼ田の字状に並ぶが、島状高まり付近はやや不規則になる。畦畔は大小あり、大畦畔は29・30C・D区をほぼ南北と、26C・D区の島状高まりから東の方向へと西方向への3か所認められる。水口は概して少ない。水田面の高低差はほとんどなく、調査範囲内はほぼ

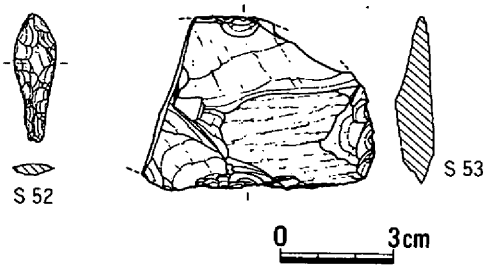


第301図　後期水田の稲株痕（S＝1/80）

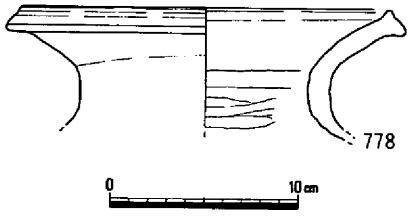


第306図　弥生時代後期の遺構全体図（既報告調査区を含む）（S＝1/2000）

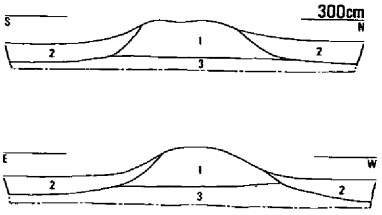




第302図　後期水田層出土遺物

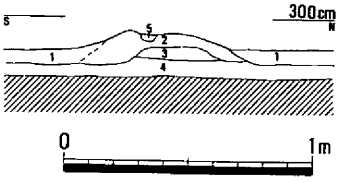


第303図　島状高まり２出土遺物



1．暗灰褐色粘質土
2．灰褐色粘質土（水田層）
3．暗灰茶色土（マンガン多く含む）

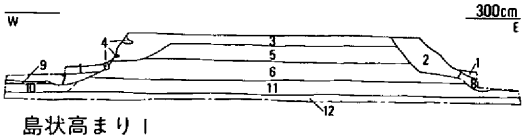
30－D



1．灰色粘土（水田層）
2．灰褐色粘土
3．淡灰色粘質土
4．灰白色粘土
5．砂

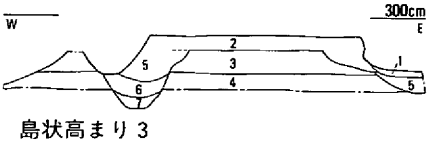
26－D

第304図　大畦畔断面図（S＝1/30）



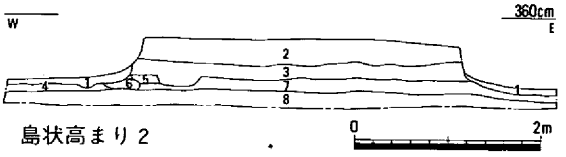
島状高まり１

1．灰色粘土　2．淡黄灰色土
3．黄灰色土　4．砂
5．明黄灰色土　6．暗灰黄色土
7．淡灰色粘質土　8．灰黄色土
9．灰色土　10．灰黄色土
11．黄灰色土　12．灰褐色粘土



島状高まり３

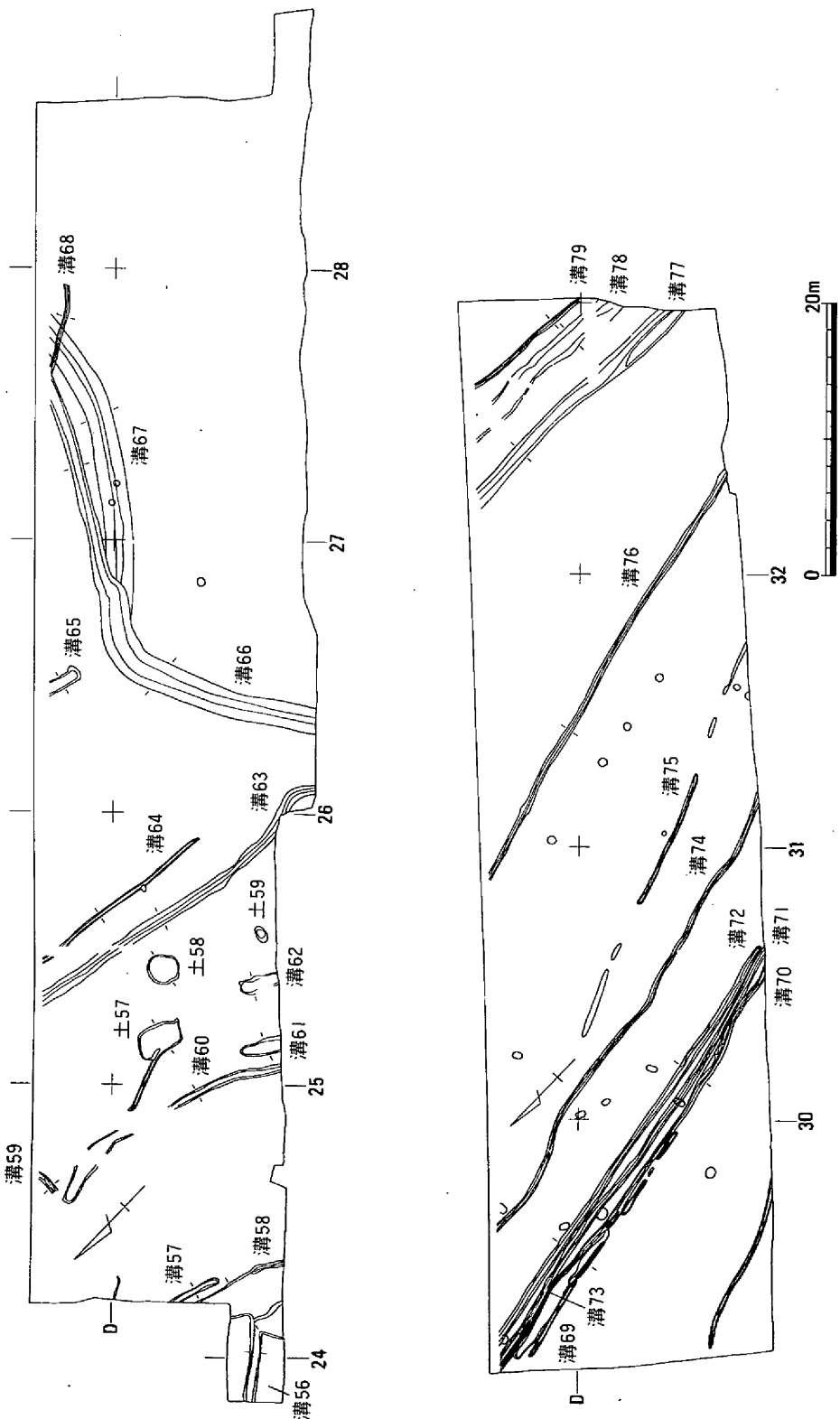
1．灰色粘土　2．黄灰色土
3．淡灰茶色土　4．黄灰色土
5．淡黄褐色土　6．灰茶色土
7．暗灰色粘土　8．暗茶褐色土



島状高まり２

1．黄灰色粘質土　2．灰黄色土
3．暗灰色土　4．にぶい黄色土
5．暗黄色土　6．黄灰色土
7．にぶい黄色土　8．暗オリーブ褐色土

第305図　島状高まり断面図（S＝1/80）



第307図　弥生時代後期の遺構全体図（S＝1/500）

平坦である。なお、26D区の田面には稲株痕跡と推定される小穴群が一部検出された。

島状高まりは、円形を呈するものと細長いものとが認められる。このうち、細長い島状高まりはほぼ南北方向に形成されている。島状高まりは基本的に削り出しているが、周囲に土を盛って大きくしている例もある。

水田層中からの遺物はいずれも弥生土器の細片であるが、1点のみ水田上面から甕の完形品が出土した。時期は百・後・Ⅳで、水田の埋没時期を示すものである。　（平井）

(2)　土壙

土壙57（第308図）

25D区の後期水田層下で検出された土壙である。平面形は長方形状を呈するが、深さは浅く、底も凹凸が著しい。長さ332cm、幅200cm、深さ5cmを測る。埋土は灰色土である。

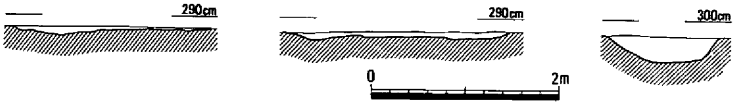
遺物は出土しなかったが、土壙の時期は検出面から後期と考えられる。　（平井）

土壙58（第308図）

25D区の水田層下で検出された土壙である。やや歪んだ円形を呈し、最大径250cm、深さ4cmを測る。埋土は灰色土である。

遺物は出土しなかったが、土壙の時期は検出面から後期と考えられる。　（平井）

土壙59（第308図）



第308図　土壙57(左)・58(中)・59(右)

25D区の水田層下で検出された土壙である。平面形は楕円形を呈する。長軸120cm、短軸70cm、深さ28cmを測る。底は平坦で、壁は急斜に立上る。埋土は灰白色粘土である。

遺物は出土しなかったが、土壙の時期は検出面から後期と考えられる。　（平井）

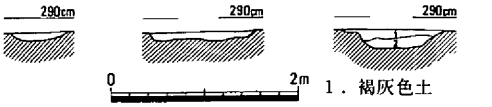
(3)　溝

溝56（第309図）

23・24D区の水田層下で検出された溝である。溝は北西から南東方向へ流走し、南東端は溝58に合流する。規模は幅75cm、深さ7cmを測る。埋土は灰色土である。

第309図　溝56(左端)・57(左)・58(右)・59(右端)

遺物は出土しなかったが、溝の時期は検出面から後期と



第310図　溝60(左)・61(中)・62(右)

考えられる。（平井）

溝57（第309図）

24D区の水田層下で検出された溝で、ほぼ南北に流走するが、長さ４ｍほどで途切れる。規模は幅42cm、深さ５cmを測る。埋土は褐灰色土である。

遺物は出土しなかったが、溝の時期は検出面から後期と推定される。（平井）

溝58（第309図）

24D区の後期水田下で検出された溝である。ほぼ南北方向に流走する幅の広い溝であるが、深さは浅い。幅270cm、深さ５cmを測る。埋土は灰色土である。

遺物は出土しなかったが、溝の時期は検出面から後期と考えられる。（平井）

溝59（第309図）

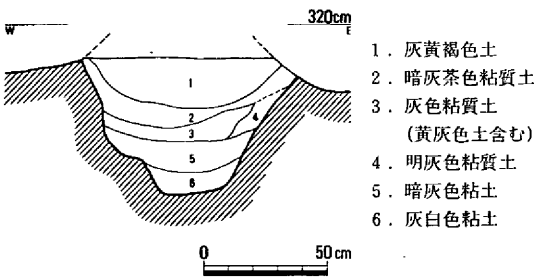
24C区の後期水田層下で検出された溝で、ほぼ東西に流走するが、長さ２ｍほどで途切れる。規模は幅45cm、深さ10cmを測る。埋土は灰色粘質土である。

遺物は出土しなかったが、溝の時期は検出面から後期と考えられる。（平井）

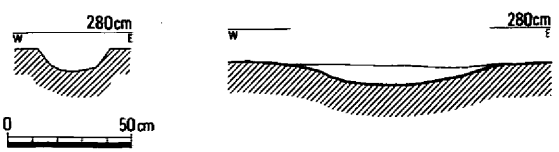
溝60（第310図）

24C・D区の後期水田層下で検出された溝で、ほぼ南北に流走する。溝は北側では幅120cmと広いが、南側では65cmと狭くなる。深さは概して浅く、５cm前後を測る。埋土は褐灰色粘質土である。

遺物は出土しなかったが、溝の時期は遺構面から後期と考えられる。（平井）



第311図　溝63



第312図　溝64(左)・65(右)

溝61（第310図）

25D区の後期水田層下で検出された溝で、北東から南西方向に流走するが、北東方向へ３ｍの場所で途切れる。幅125cm、深さ９cmを測る。埋土は灰色粘質土である。遺物は出土していないが、溝の時期は検出面から後期と考えられる。（平井）

溝62（第310図）

25D区の後期水田層下で検出された溝で、溝61の東側を平行して流走する。規模は、幅120cm、深さ20cmを測る。溝底は広くほぼ平坦で、壁はやや

急斜に立上る。

遺物は出土しなかったが、溝の時期は検出面から後期と考えられる。　（平井）

溝63（第311図）

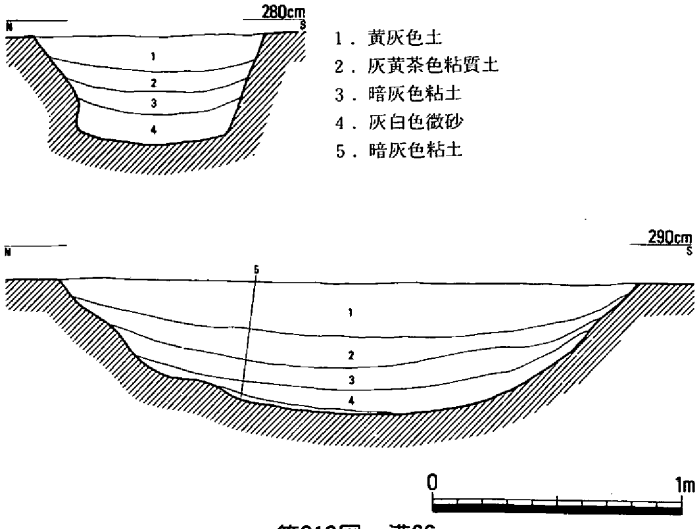
25・26Ｃ・Ｄ区の後期水田層下で検出された溝で、ほぼ南北に流走する。溝底は幅30あまりの平坦部があり、壁は急斜に上る。規模は幅85cm前後、深さ40cm前後を測る。埋土はほぼレンズ状に５～６層堆積している。

遺物は出土しなかったが、溝の時期は検出面から後期と考えられる。　（平井）

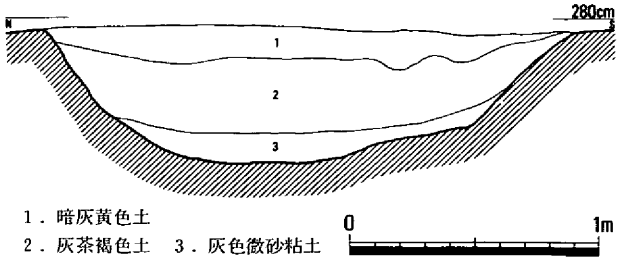
溝64（第312図）

25Ｃ・Ｄ区の後期水田層下で検出された溝で、溝63の東側をほぼ平行して流走する。規模は幅35cm深さ10cmを測る。溝底は丸みをもち、壁は急斜に立上る。埋土は淡灰色粘土である。

遺物は出土しなかったが、溝の時期は検出面から後期と考えられる。　（平井）



第313図　溝66



第314図　溝67

溝65（第312図）

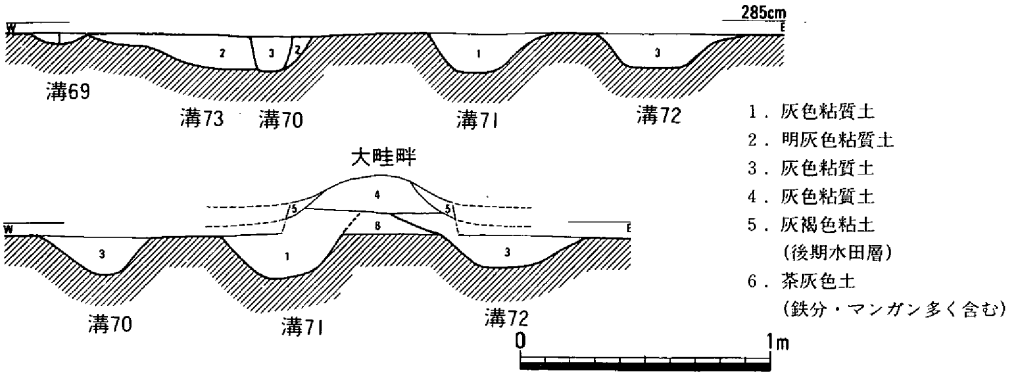
26Ｃ区の後期水田層下で検出された溝で、ほぼ南北に流走するが、長さ３ｍほどで途切れる。規模は幅90cm、深さ10cmを測る。埋土は暗褐色土である。

遺物としては弥生土器の細片をわずかに含むが、詳細な時期は不明である。溝の時期は検出面から後期と考えられる。

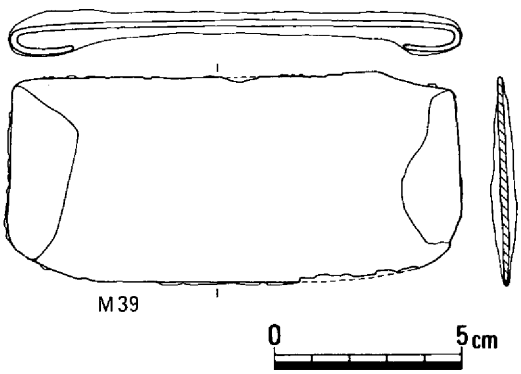
（平井）

溝66（第313図）

26・27Ｃ・Ｄ区の後期水田層下で検出された溝で、東西方向から南北方向へくの字状に屈曲して流走する。当初は溝67と同一のものであったが、屈曲部近くから溝67の北側に溝を掘削し



第315図　溝69・70・72・73



第316図　溝70出土遺物

そちらへ流路を変えている。この新しく掘削された部分は幅が100cmあまりで、旧溝である南西部分の幅210cmに比べるとずいぶん狭い。しかし、溝の底はほぼ同じ高さで推移している。なお、溝の深さは検出面から45～55cmを測る。

埋土はレンズ状に4～5層堆積しており、弥生土器の細片をわずかに含む。溝の時期を決定し得る遺物はないが、遺構検出面から後期と考えられる。（平井）

溝67（第314図）

26・27C・Dの後期水田層下で検出した溝で、本来溝66と連続して掘られていたものと考えられる。溝の幅は200cm、深さ50～60cmを測る。溝底は幅広く丸みをもっており、壁は急斜に立上る。埋土はレンズ状に3層の堆積が認められる。

遺物は弥生土器の細片がわずかに出土した。その中には中期中葉の土器片も認められるが、これが直接この溝の時期を示すものかどうかは不明である。層位的には中期の水田を切っており、かつ後期水田下ということから、溝66より古く後期ないし後期に近い中期とも考えられる。（平井）

溝68

27C区の後期水田層下で検出された溝で、南東から北西方向に流走する。溝の南東端は不明瞭になって消える。規模は幅25cm、深さ5cmを測る。埋土は灰褐色粘質土である。

遺物は出土していないが、溝の時期は検出面から後期と考えられる。（平井）

溝69・70・71・72・73（第315・316図）

29・30C・D区の後期水田層下で検出された溝で、近接してほぼ南北に5条が流走する。このうち溝69は一部途切れながら最も西側を流走する。規模は幅25～30cm、深さ3cmあまりを測る。溝69の東側には長さ11mほどであるが、溝70との間に一部西側を切られながら溝73が流走する。溝73は幅が90cm前後と考えられ、深さは5cmあまりと浅い。

溝73の東側には溝70が流走する。この溝の中からは鉄製鍬（鋤）先が出土した。規模は幅25～60cm、深さ10～18cmを測る。溝70の東に接して溝71が流走する。規模は幅35～48cm、深さ10～16cmを測る。溝72は5条の溝の最も東側を流走する。溝の幅は50～60cm、深さ10cm前後を測る。以上の溝の時期は土器の細片と、検出面から後期と考えられる。

5条の溝から出土した遺物はわずかな土器と鉄器であるが、土器はいずれも細片である。鉄製鍬（鋤）先は溝70内から出土したもので、全体に錆が厚く付着している。長さ5.4cm、幅12cmを測る。（平井）

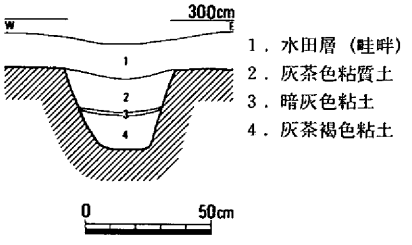
溝74

29～31C・D区の後期水田層下で検出された溝で、ほぼ南北に少し蛇行しながら流走する。溝の幅は26～40cm、深さ10～15cmを測る。埋土は暗灰色粘質土である。

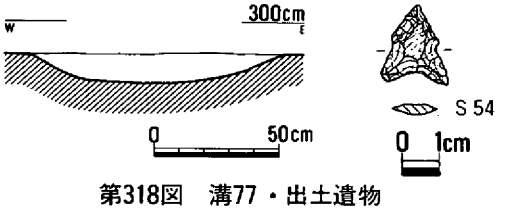
遺物は出土していないが、溝の時期は検出面から後期と考えられる。（平井）

溝75

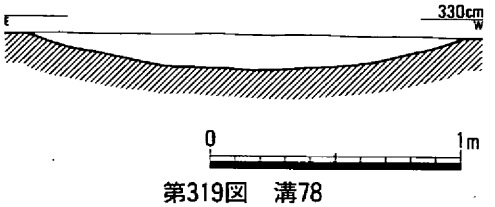
30・31D区の後期水田層下で検出された溝で、一部途切れながらほぼ南北に流走する。溝の北端は浅くなって消えてしまう。規模は幅22～38cm、深さ4cm前後を測る。埋土は灰色粘質土である。



第317図　溝76

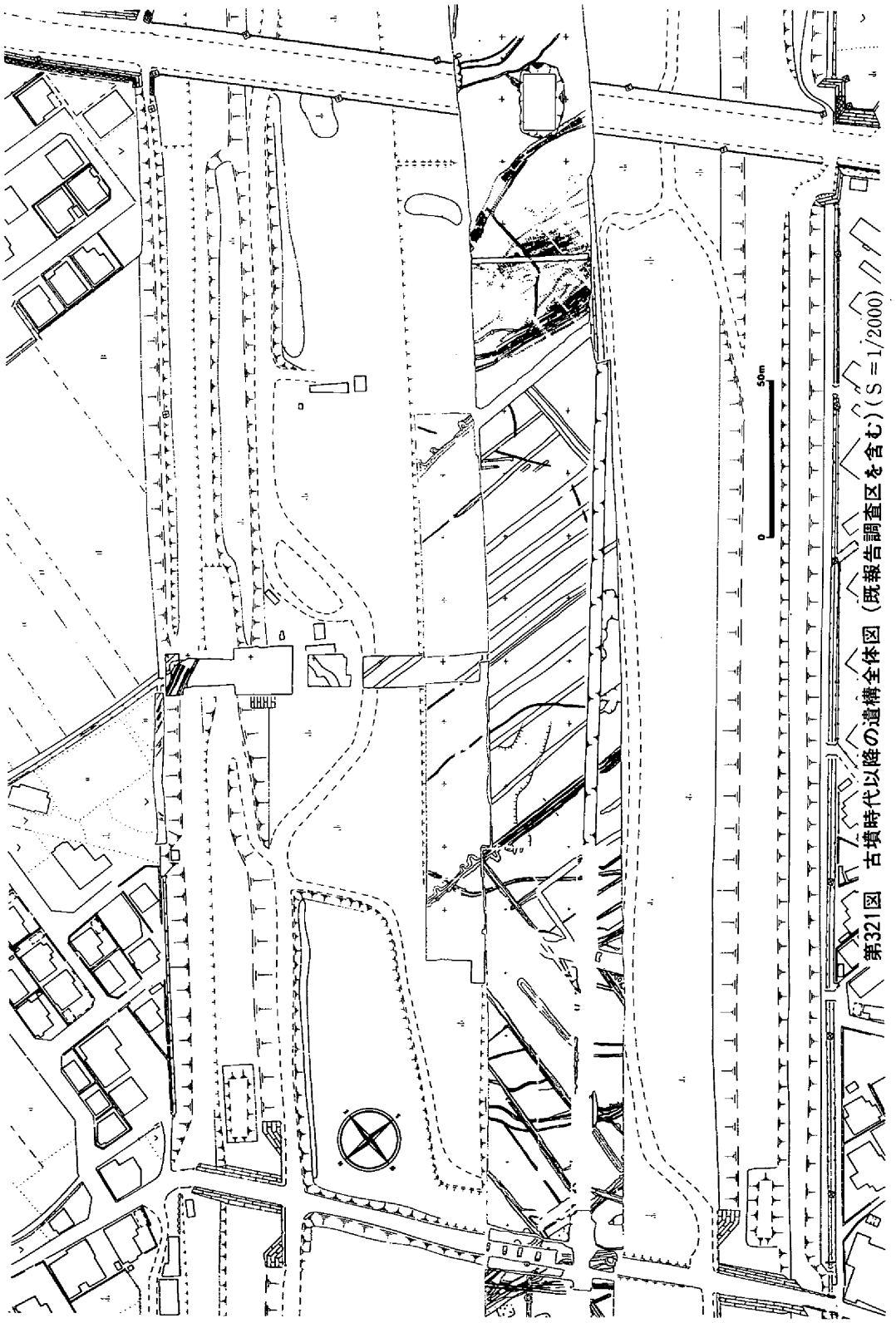


第318図　溝77・出土遺物

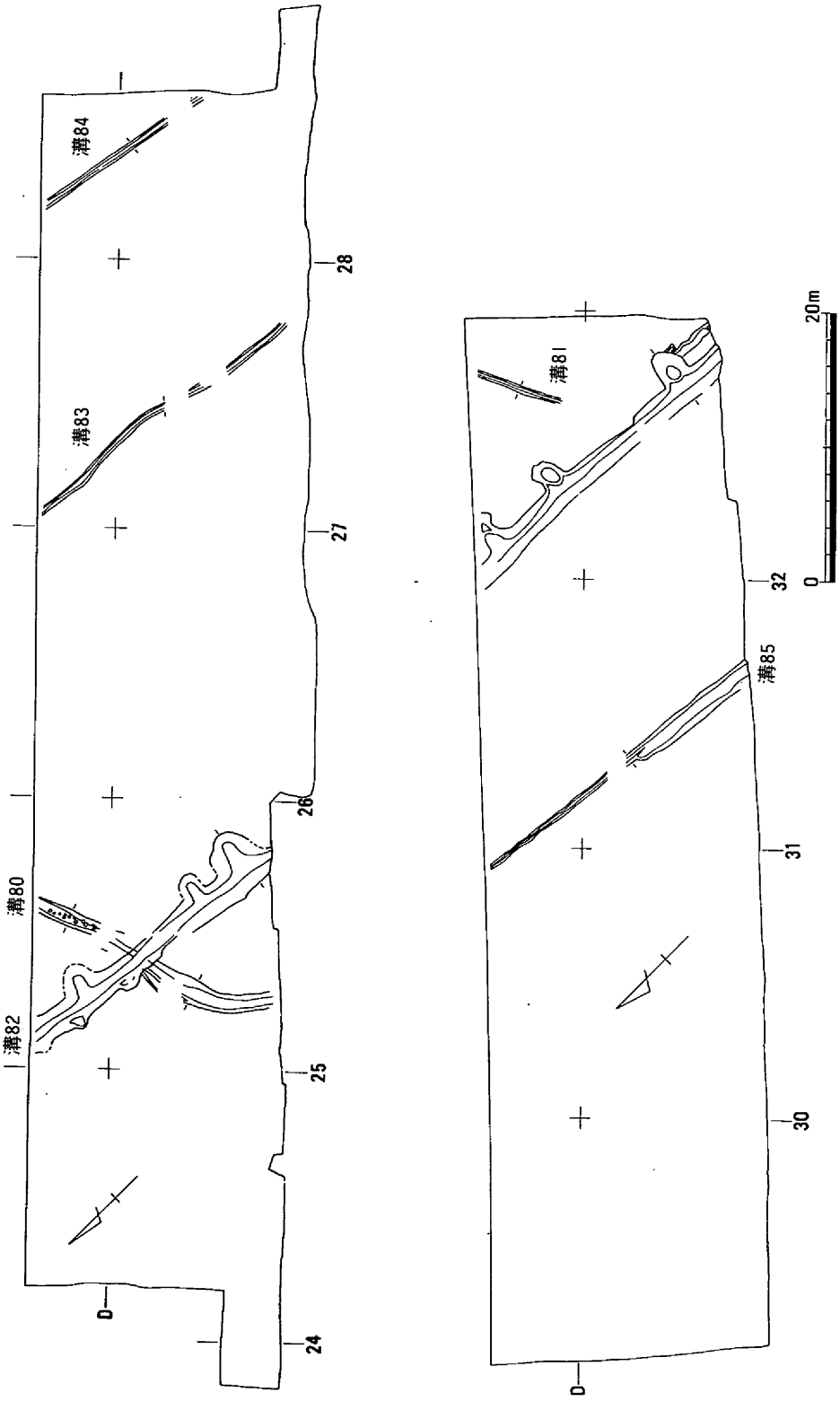


第319図　溝78

第320図　溝79



第321図　古墳時代以降の遺構全体図（既報告調査区を含む）（S＝1/2000）



第322図　古墳時代以降の遺構全体図（S＝1/500）

遺物は出土していないが、溝の時期は検出面から後期と考えられる。（平井）

溝76（第317図）

30～32C・D区の後期水田層下で検出された溝で、ほぼ南北に流走する。溝は底にわずかな平坦部をもつが、断面U字形を呈する。埋土はレンズ状に堆積しており、ほぼ2～3層に分けられる。規模は幅30～54cm、深さ26～60cmを測る。

遺物は出土していないが、溝の時期は検出面から後期と考えられる。（平井）

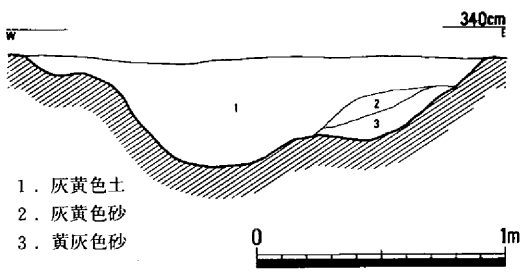
溝77（第318図）

32C・D区の後期水田層下で検出された溝で、島状高まりにそってほぼ南北に流走する。溝は幅92～172cm、深さ18cmを測る。埋土は灰褐色土である。

遺物は出土しなかったが、溝の時期は検出面から後期と考えられる。（平井）

溝78（第319図）

32C・D区で検出された溝で、溝77の東側を平行して流走する。溝の幅は170cmと広いが、深さは浅くて24cmを測る。溝の断面形を見ると、丸みをもった底から壁がゆるやかに立上る中華鍋状を呈する。埋土は暗灰色土である。



第323図　溝80

遺物は出土していないが、溝の時期は検出面から後期と考えられる。（平井）

溝79（第320図）

32C・D区の後期水田層下で検出された溝で、溝78の東側を南北に平行して流走する。溝79は溝77と同様に、島状高まりにそって掘削された浅い溝である。溝の幅は45cm前後、深さ10cm前後を測る。埋土は灰褐色粘質土である。

遺物は出土しなかったが、溝の時期は検出面から後期と考えられる。（平井）

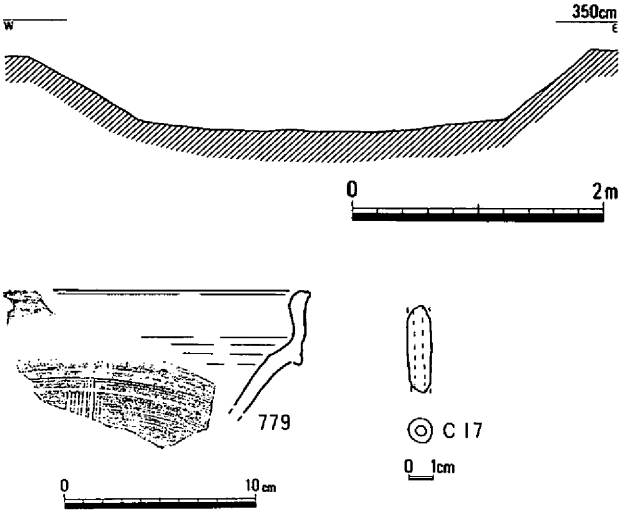
5．古墳時代の遺構・遺物

(1) 溝

溝80（第323図）

25C・D区で検出された溝で、東から南西方向に屈曲しながら流走する。溝は幅108～190cm、深さ45cmを測る。溝底は丸みをもち、壁は両側ともに途中に平坦部を形成しながら立上る。溝の東北端に近い部分の底には小穴が認められたが、南西部にはなかった。

遺物は出土しなかったが、溝の時期は埋土及び検出面から古墳時代と考えられる。（平井）



第324図　溝82・出土遺物

溝81

32D区で検出された溝で、北東から南西方向に流走する。溝は長さ６ｍあまり検出されており、幅50cm、深さ25cmを測る。埋土はほぼ２層に分れ、上層は茶褐色土、下層は暗茶褐色土が堆積していた。

遺物は出土していないが、溝の時期は埋土および検出面から古墳時代と考えられる。

（平井）

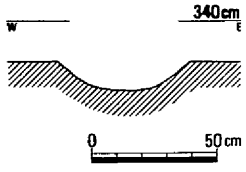
６．中世の遺構・遺物

(1)　溝

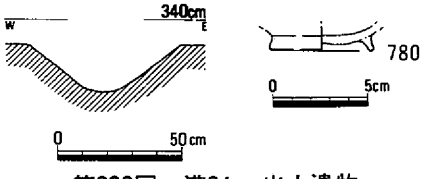
溝82（第324図）

25C・D区で検出された溝で、ほぼ南北に流走する。溝の両側には瘤状の張り出しが認められる。東側の張り出しは３箇所認められるが、その間隔は不規則である。いずれの張り出しとも溝底とほぼ同じ深さに掘削されている。これに対し、西側の張り出しは小さく、また掘削は溝の底まで達しておらず、壁の途中で段状になっている。埋土は灰色土である。

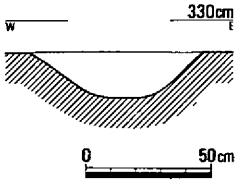
遺物は土器の細片が少量出土しているが、詳細な時期は不明である。溝の時期は埋土および検出面から中世と考えられ



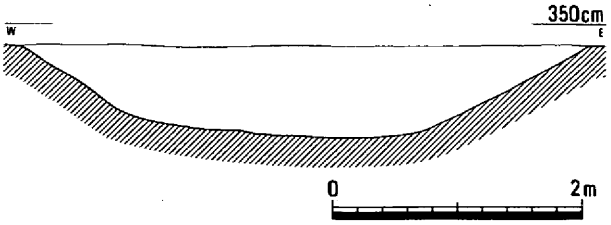
第325図　溝83



第326図　溝84・出土遺物



第327図　溝85



第328図　溝86

る。（平井）

溝83（第325図）

27C・D区で検出された溝で、ほぼ南北に流走する。溝は幅50cm前後、深さ10cm前後を測る。埋土は灰色粘土である。

遺物は出土しなかったが、溝の時期は埋土および検出面から中世と考えられる。（平井）

溝84（第326図）

28C・D区で検出された溝で、ほぼ南北に流走する。溝は幅60cm、深さ15cm前後を測る。

遺物は中世の土器の細片がわずかに出土した。780は土師器椀の底部で、高台がつく。溝の時期は埋土および検出面から中世と考えられる。（平井）

溝85（第327図）

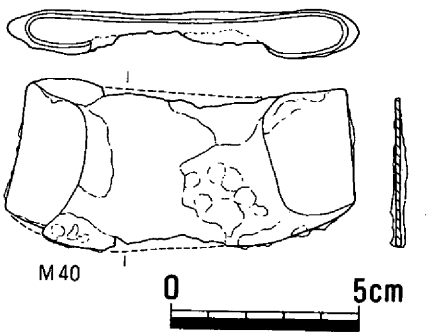
30・31C・D区で検出された溝で、ほぼ南北に流走する。溝の北半は幅が45cm前後と狭いものの、南半は167cmに広がる。深さは7～40cmを測る。溝底の高さは北端より南端が低くなっており、その差は7cmである。埋土は灰色粘土である。

遺物は土器の細片がわずかに出土したが、詳細な時期は不明である。溝の時期は埋土および検出面から中世と考えられる。（平井）

溝86（第328図）

32C・D区で検出された溝で、ほぼ南北に流走する。溝の東側には瘤状の張り出しが3箇所認められる。この張り出しの底は、一番北側のものはほぼ溝の底と同じ高さであるが、他の2箇所は溝底より6cm前後低くなっている。溝の幅は180cm前後、深さ160cm前後を測る。埋土は灰色砂質土である。

遺物は土器の細片が出土したが、詳細な時期は不明である。溝の時期は埋土および検出面から中世と考えられる。（平井）



第329図　包含層出土の遺物

7．包含層出土の遺物

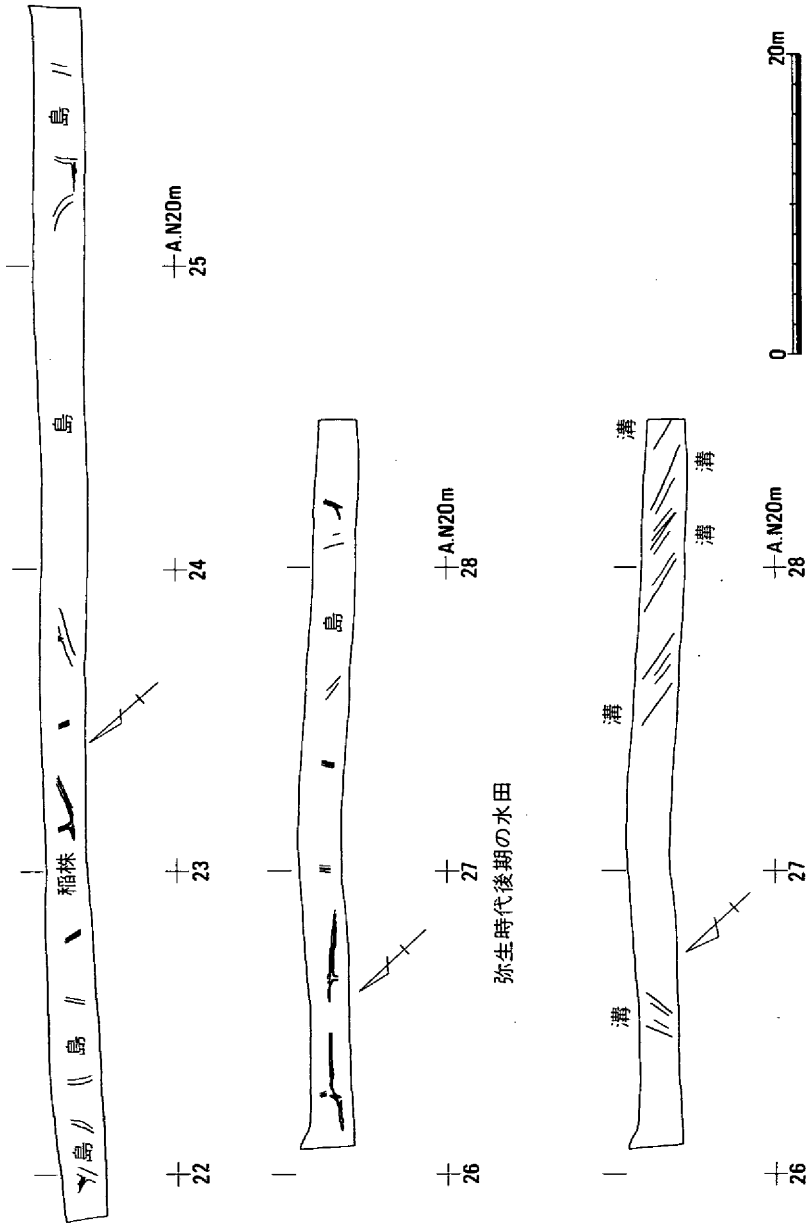
本調査区は低位部で、居住区域と離れているためか、各包含層からの出土遺物はわずかである。遺物の大部分は土器であるが、石器や鉄器も認められる。図示した鉄製鍬（鋤）先（第329図）は、26D区の後期水田層直下で出土したものである。長方形の鉄板の両短辺を折り曲げており、基部側より刃部側が幅広くなる。また刃縁はわずかに弧を描く。長さ4cm、最大幅9.3cmを測る。

時期は包含層から後期の前半と推定される。（平井）

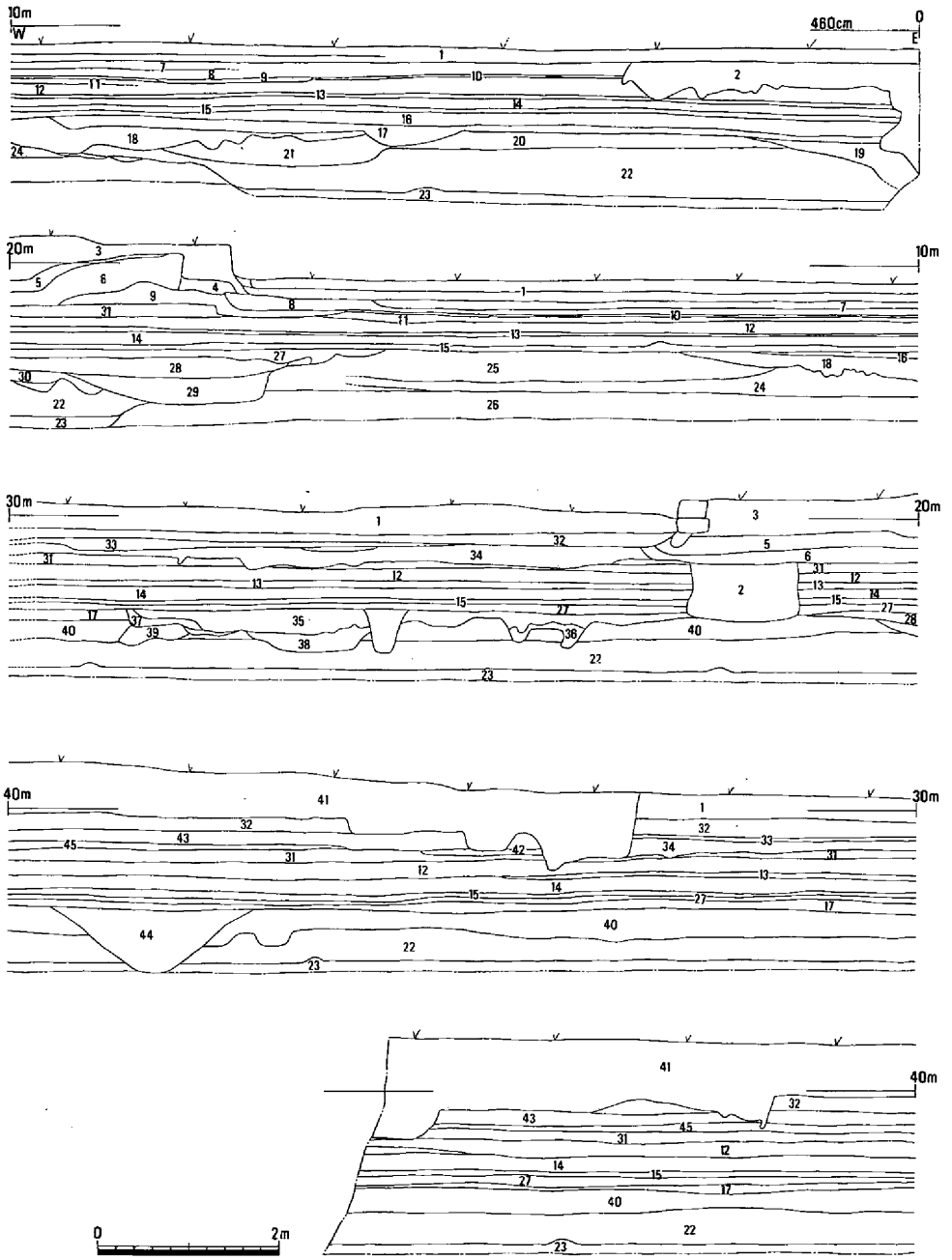
第3節　左岸用水調査区

1．左岸用水調査区の概要

本調査区は左岸側堤防の外側で、川内調査区の北側にあたる。堤防に接する用水路予定地

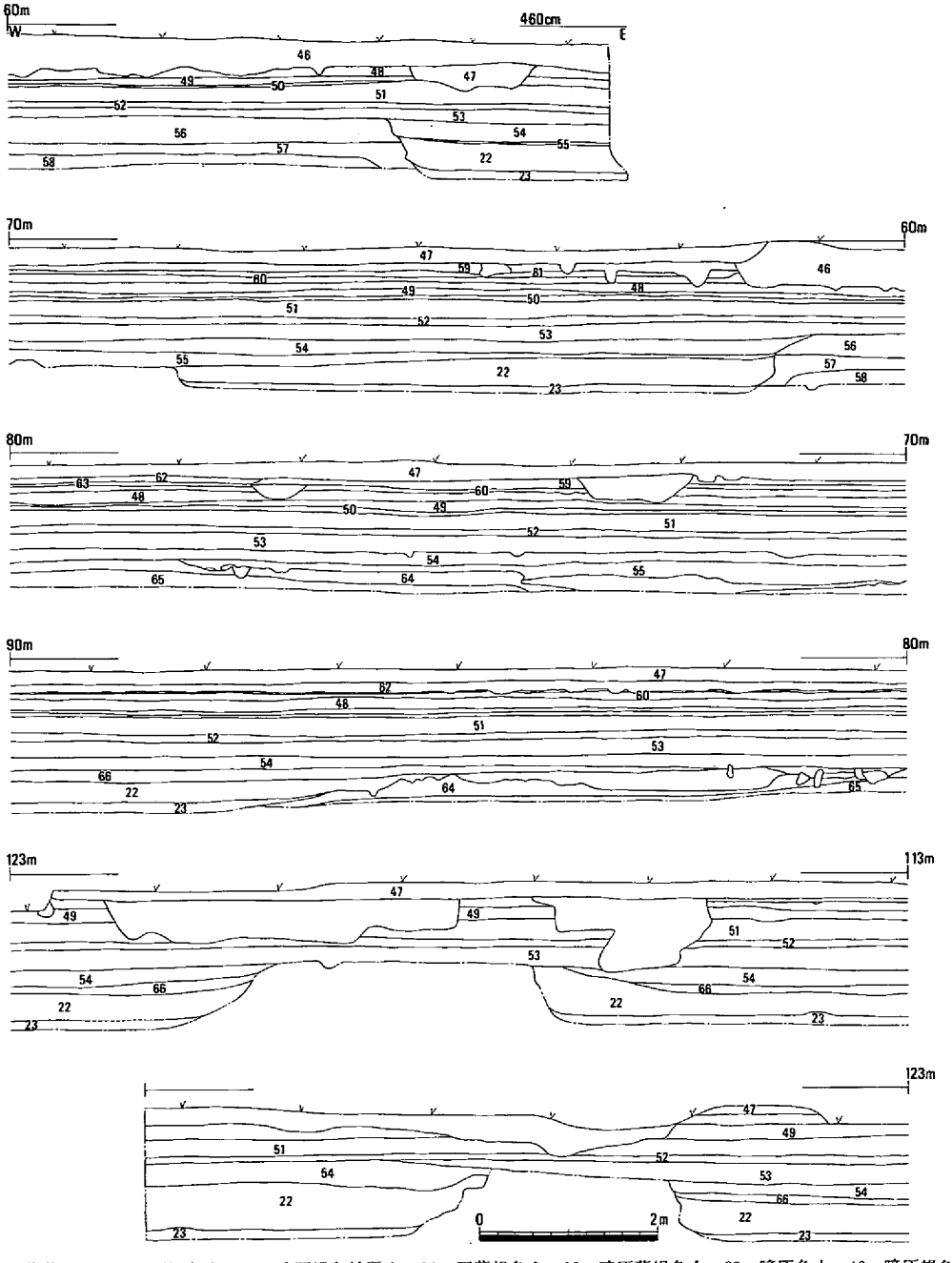


第330図　左岸用水調査区の遺構全体図（S＝1/500）



1．現水田耕土　2．褐色土（撹乱）　3．明黄褐色砂質土　4．黄灰褐色砂　5．灰茶色粘質土　6．茶灰色砂質土
7．淡灰茶色砂質土　8．灰茶色砂質土　9．灰黄色砂質土　10．鉄分・マンガン層　11．淡灰黄色砂質土　12．淡灰色土
13．淡黄灰色土　14．灰色粘質土　15．淡黄灰色粘質土　16．灰黄褐色土　17．暗灰褐色土（古墳時代の遺物含む）
18．暗灰茶色土　19．暗茶灰褐色土（溝）　20．黄茶褐色土　21．黒褐色砂質土（溝）　22．洪水砂　23．灰色粘土（後期水田層）
24．灰茶色土（黄色土混じる）　25．暗茶灰色粘質土　26．茶灰黄色土　27．灰黄褐色土　28．淡灰褐色土　29．灰褐色土（溝）
30．灰褐色土　31．灰褐色土　31．淡灰黄色砂質土　32．灰褐色砂質土　33．灰茶色砂質土

第331図　調査区北壁土層断面図（1）（S＝1/80）



34．明茶黄色砂　35．灰褐色土　36．暗灰褐色粘質土　37．灰茶褐色土　38．暗灰茶褐色土　39．暗灰色土　40．暗灰褐色土
41．褐色土（撹乱）　42．黄茶褐色砂　43．灰褐色砂質土　44．灰褐色土（溝）　45．黄茶色土　46．灰褐色土　47．黄褐色土
48．淡灰黄色砂質土　49．淡灰茶色砂質土　50．灰褐色砂質土　51．灰色粘質土　52．黄褐色土　53．灰褐色粘質土
54．暗灰褐色土　55．黄灰褐色砂質土　56．黄灰茶色土　57．淡灰茶色土　58．明黄褐色土　59．灰黄色砂質土　60．黄褐色土
61．黄茶褐色砂質土　62．灰黄褐色砂　63．黄褐色土　64．茶灰褐色土　65．明黄茶褐色土　66．暗黄灰色粘質土

第332図　調査区北壁土層断面図（２）（S＝1/80）

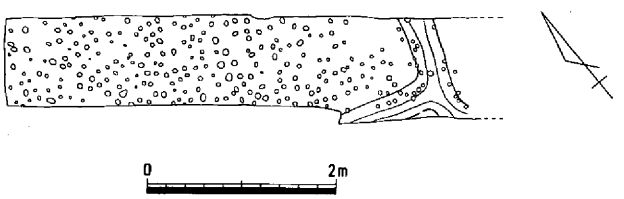
で、幅３ｍ、長さ73ｍが調査対象となったが、遺構面では幅１～1.5ｍしかなく、遺構の性格・規模・時期などを十分に把握することができなかった。

本調査区の基本的な層位は第331・332図に示す通りで、現水田耕土（１）の下には厚さ10cm前後の近世から中世の層がほぼ水平に堆積し、その下には古墳時代の層（17)、さらに下に弥生時代後期末の洪水砂層（22)、そして弥生時代後期水田層（23）と続く。

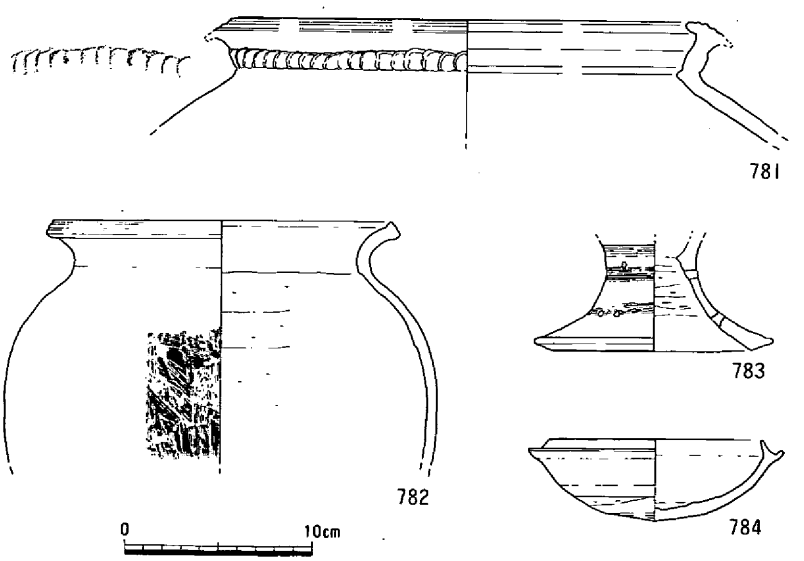
遺構は第330図に示す通り少なく、古代～中世に属するものは認められなかった。古墳時代の遺構は暗灰褐色土を除去して検出した。検出された遺構すべて溝で、26～28区に５条認められた。溝87がほぼ東西に流走する以外は、すべて南北に流走している。以下溝の規模を記すと溝87は幅250cm、深さ70cm、溝88は幅170cm、深さ30cm、溝89は幅200cm、深さ40cm、溝90は幅150cm、深さ30cmを測る。なお溝91は一部であり、規模等不明である。

弥生時代の遺構としては水田と島状高まりがある。後期末の洪水砂で埋没した水田は調査区の全域に広がっており、その中に島状高まりが認められる。また調査区の西端に近い23ライン付近で稲株痕跡（第333図）と考えられる砂の入った小穴が多数検出された。

包含層からは弥生時代から中世に属する土器片が少量出土している。第334図に示したものは弥生土器（781～783）と須恵器（784）である。　（平井）



第333図　稲株痕跡



第334図　包含層出土遺物

第4章　考　察

第1節　弥生時代の遺構・遺物について

1．弥生集落の変遷

今回報告を行った調査区のうち集落が所在するのは三股ケ・丸田調査区である。この調査区においては弥生時代前期、中期の遺構の分布は希薄で、溝6条と水田を検出したにすぎず、土器の出土量も少ない。縄文時代晩期の土器片も少量出土しており、その時期以降この場所が利用されてきたようであるが、主要な居住域ではなくその縁辺にあたると考えられる。こうした状況は後期初頭においても同様であり、大規模な集落域となるのは百・後・Ⅱ期からである。

検出した弥生時代後期（百・後・Ⅱ～Ⅳ期）の主な遺構は竪穴住居11棟、建物28棟、井戸5基、土器棺8基等であり、他に多数の土壙、柱穴がある。

竪穴住居

Ⅱ期からⅢ期の竪穴住居の平面形はいずれも円形で、柱の配置は小形の住居では方形に4本、大形の住居では6～8本を配している。住居の規模は古墳時代のものにくらべて全般に大きく、また、最大のものが径9m、小規模なものが径5mと格差が大きい。Ⅳ期になると住居の平面形は隅丸方形となるが、竪穴住居7のように隅丸方形の住居を拡張して円形にする例も認められる。

これらの竪穴住居を時期別に見れば、Ⅱ期が2、4、6、8、9の5棟、Ⅲ期が1、3の2棟、Ⅳ期が5、7の2棟であり、同時に存在するのは数棟のようである。また、これらは西の8・9CD区と8・11ZA区に分かれて所在しており、調査区中央付近には竪穴住居は設けられておらず、Ⅳ期になってはじめて竪穴住居5が設けられる。なお、このうち8・9CD区のものは南接する中須賀調査区の竪穴住居群と一連のものである。

建物

検出した建物は28棟と多く、建物がほとんど見られない古墳時代前期、中期の集落と対照的である。ただし、遺構の性格上、時期を決定できるものはほとんどなく、柱の抜き取り穴に土器が入っていた建物2と13がそれぞれⅢ期、Ⅳ期前半と言えるにすぎない。建物は2×1ないし1×1間程度のものが多く、規模は3.9～12.6㎡で7㎡前後のものが多い。

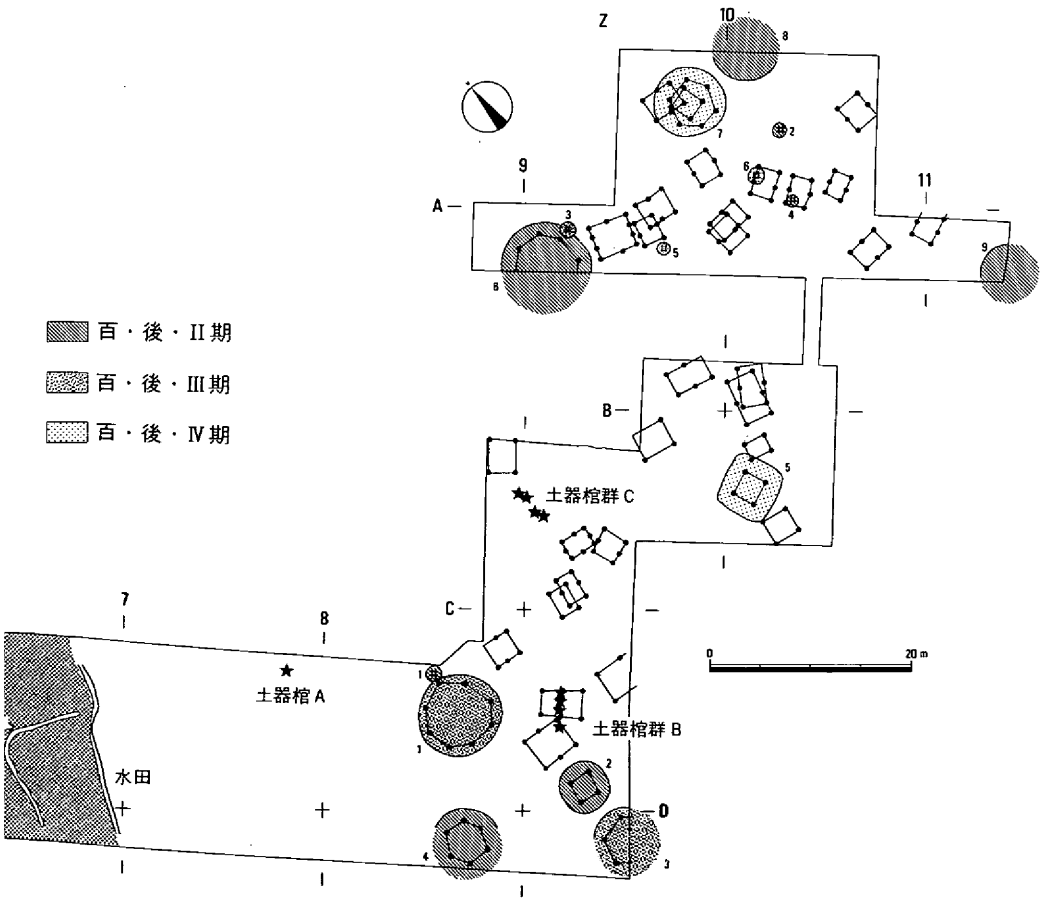
軸線は東西あるいは南北方向になるものが多く、それからはずれるものも南東に向いている

ようであり、建物はいずれも方位に則って建てられていると考えられる。また、これらは南北方位線に対する軸線の振れによって４群程度に区分することができるが（第336図）、後述の一群を除いて、それが時期差を示すかどうか判断できない。

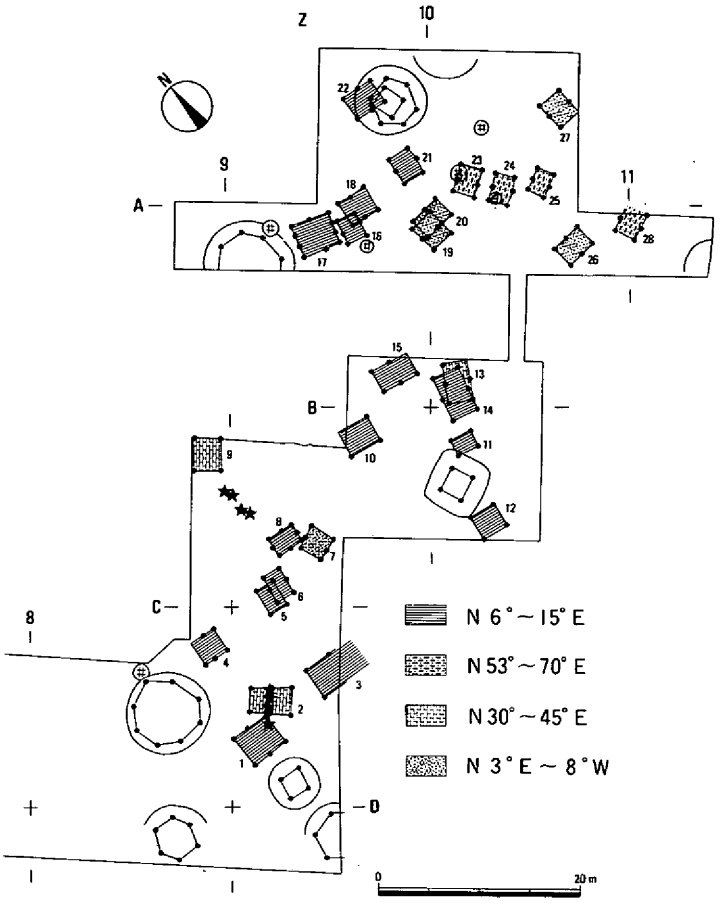
竪穴住居が９棟であるのに対して建物は28棟であり、竪穴住居１棟に対し建物は３棟程度になるとみられるが、建物を認識できなかった柱穴が相当数あり、さらに不整形な建物がかなりの数あったものと推定される。これらの建物の性格については判断の手がかりがない。多くはいわゆる平地式住居であろうが倉庫も含まれていると思われる。

土器棺墓

調査区の３ケ所で土器棺墓群を検出した。群どうしの距離は25ｍ前後である。以前の調査（『県報告39』左岸用水調査区）においても土器棺墓３基からなる群が検出されており、今回の



第335図　弥生時代後期の集落



第336図　弥生時代後期建物の軸線

ものを含めて土器棺墓群は4群となる。今回検出したものを西からA：土器棺墓1、B：土器棺墓2～5、C：土器棺墓6～9とすれば、Aは調査区北端での検出であるためなんとも言えないが、Bは長さ3mの直線をなし、Cも中央に小規模な木棺墓をはさんでほぼ直線をなしている。こうした土器棺墓のありかたから、土器棺の埋納場所が定められていたと判断でき、また、棺が等間隔に埋納されていることからみて、これらに盛土が配されていたものと考えられる。

これらの多くは口縁部が割り取られているためやや正確さを欠くが、いずれも百・後・Ⅱ期と推定されるものである。そして、これらのうちB群の土器棺2、4では胴下部の墓壙底に接する部分に穿孔がなされているのに対し、C群では穿孔は認められない。Ⅱ期のなかで土器棺の墓域が移動していったとも考えられるが、群間でこうした差が見られることからすれば、むしろ造墓の主体が別であった可能性が強く、世帯ごとにこうした墓域が設けられた可能性が考えられる。

この時期、共同体の成員は丘陵上に設けられた墓域に世帯ごとに墳丘墓を築いて埋葬を行っている。小児については、この例のように成員と区分して集落域の一角に葬られるものがある一方、成人とともに墳墓内に埋葬された土器棺も少なくない。この両者の差が何に起因するのかはあきらかでなく、今後の検討課題である。

２．弥生時代後期末の遺構

報告書の冒頭でふれたように、三股ケ・丸田調査区の基盤層は東側に徐々に下がっており、東端の調査区においては弥生時代後期末の洪水によって微高地上に堆積した微砂層が遺存していた。この洪水堆積層は百間川原尾島遺跡から百間川今谷遺跡に及ぶ弥生後期水田を埋めつくした洪水堆積層と同じものであり、これに覆われた遺構は水田と同時期のものである。

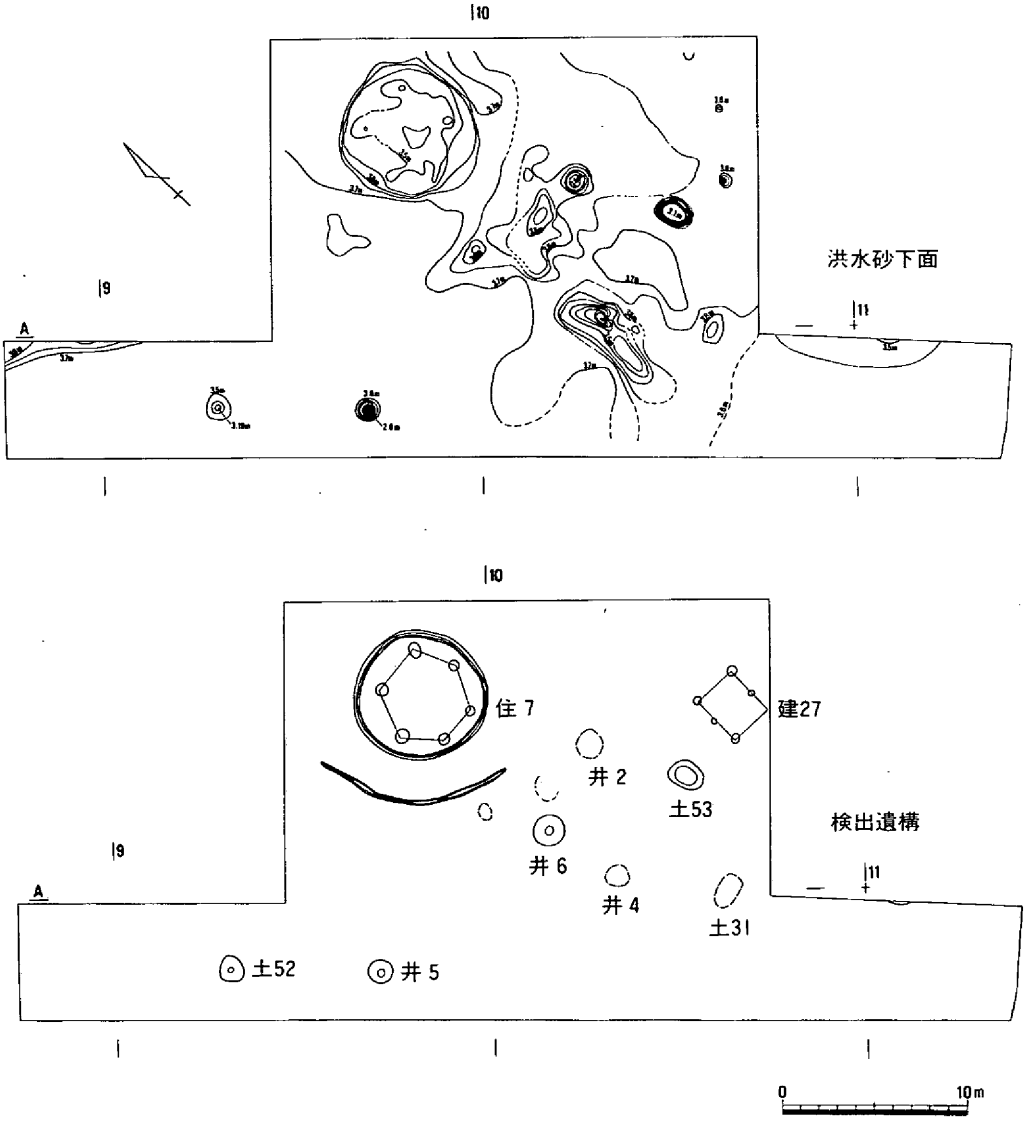
微砂層は調査区の東部が最も厚く30cm前後で、西側にゆくにつれて薄くなっている。洪水の微砂層によって覆われていたため、同時に埋没した遺構を把握することができ、また弥生時代後期末の地表面を検出できたため、通常の調査では確認できない多くの事実が判明した。

第337図上段に示したのは、洪水砂を除去した面、弥生時代後期末の微高地上面の微地形であり、等高線の間隔は５cmである。また、下段に示した遺構のうち、実線で示したのは洪水砂で埋没した遺構およびそれらに近接した時期と判断できる遺構（竪穴住居７外周溝および井戸６）であり、破線で示したのは古い時期の遺構である。

地表はゆるやかに東に下がっており、さらに調査区の中央付近にごく浅い谷状の地形がはいっている。低位部の水田面などでは埋没後に沈下して遺構面が谷状を呈する場合があるが、このように幅が狭く、かつ不規則になる例はほとんどないため、この浅い谷状地形は当時の微地形であると推定される。この浅い谷状地形部分では該期の遺構によっても等高線が乱れているが、それ以上に古い時期の土壙や井戸によってかなり凹凸が生じている。これらの古い時期の遺構は近接した時期に埋没したものではなくⅡ期の井戸２、４やⅢ期の土壙31などである。いくぶんかは洪水による埋没後の沈下も考えられるが、すべての土壙の埋没位置でこうした状況がみられるわけではないことからすれば、いくつかの遺構が完全に埋没せず浅い窪地になって残っていたものと考えられる。

井戸

浅い谷状地形部分の遺構で注目されるのは井戸の位置である。井戸自体の埋没・崩壊による周囲の沈下を差し引いたとしても、井戸４はこの部分で最も深くなる位置に設けられており、井戸２や６もやはり低い位置にある。つまり、今回検出した弥生時代後期の井戸のうち半数はこうした低い部分を選んで設けられているわけである。百間川原尾島遺跡をはじめ弥生時代の井戸の多くは深さ２m前後まで掘削されているが基盤の粘質土層のなかにとどまっており、百間川米田遺跡のもののように湧水砂層に達する井戸は稀である。こうしたものでも地下水を集めることは可能であるが、それに加えて地表の水を集め蓄えることができる窪地に井戸が選定された可能性が考えられる。



第337図　8－11・ＺＡ区洪水砂埋没遺構

洪水砂埋没の遺構

洪水によって埋没した遺構は竪穴住居７、井戸５、６、土壙52、53である。このうち土壙52は底まで洪水砂が入っており、土壙53は下部で火を焚いて使用している段階で埋没している。また、井戸５は下部に土器が大量に廃棄されて後、埋没がはじまった段階で洪水砂が入っており、埋没時には井戸としての機能を停止していたことがあきらかである。一方、井戸６では埋土中に洪水砂は入っておらず、洪水以前に埋没したものである。したがって調査区内には

洪水の時点で機能していた井戸はなく、それがあるとすれば調査区の外になると推定される。

竪穴住居7は覆土が洪水砂であり、洪水で埋没した遺構である。多数の土器に伴って鉋ほかの多数の鉄器が出土している。最終床面と洪水砂の間には厚さ約15cmの暗灰色粘質土が存在しており、この層の評価がむずかしいが住居使用時の堆積土とともに屋根や柱材の腐朽、下記の壁材の流入等によって形成されたものである可能性が考えられる。また、この住居で注目されるのは、住居外も洪水砂によって覆われているにもかかわらず周堤が認められないことである。住居の東側が5cmほど高まっているが、周堤と言えるほどのものではないし、洪水にある程度の水勢があったにしても水田の畦畔は完全に遺存していることからみて、流失したとも考えられない。このことからすれば、この住居は高さは不明であるが壁をもっており、それが水で洗われて崩壊したと考えるのが適当であろう。周堤をもつ竪穴住居は群馬県黒井峰遺跡などにおいて検出されているが、そうした周堤をもつ竪穴住居と壁をもつ住居かどのような関係にあるのか今後検討していく必要があろう。(なお、第337図下段では6本の柱を記しているが、住居の廃絶時には5本柱に変わっており、柱位置は図上段の住居床面のくぼみと一致している。)

また、この竪穴住居の南東で検出した竪穴住居5も、やはり覆土の上部に洪水砂が堆積しており、それと床面との間には暗褐色土が存在しており、竪穴住居7とほぼ同様な堆積状態を示している。床面からは完形の壺を含む多量の土器が出土しており、洪水によって埋没した可能性が高いと考える。

上記以外の埋没遺構として、建物27がある。調査区内に所在する5本の柱穴のうち2本は掘り方の上部が窪み、さらに柱痕部分に洪水砂が入っていた。その状況からみて洪水によって埋没した後に柱材が腐朽して砂が入り込んだか、洪水直前に柱材が引き抜かれているかのいずれかと思われる。この建物で注目される点は、建物の軸線である。上記のように弥生時代後期の建物は大部分が軸線を東西あるいは南北にとることを企図しているものの、方位線からは若干東に振れている。それに対してこの建物の軸線はN4°Wとわずかに西に振れるが、真北からの差は小さくなっており、かなり正確に北を出しているようである。この建物27に近い軸線をもつ建物は19、20、26であり、近接した時期になる可能性も考えられる。

3．土壙1について

本報告書において掲載した土壙の多くは、本来の目的がそうであったのかどうかは別に検討する必要があるが、いわゆる廃棄壙として用いられ、埋没したものと考えられる。それに対して土壙1はそれらとは異なる特徴をもち、長頸壺を中心とする出土土器も通常の土器には見られない特徴をもっている。報告と重複する部分もあるが、これらの特徴を整理し、この土壙の

性格について検討を加えるものとする。

土壙1は長さ124cm、幅78cm、深さ13cmを測り、平面形は隅丸長方形である。他の土壙は楕円形あるいは不規則な形状であり、軸線も認定しがたいものが多いのに対して、この土壙は整った長方形を呈し、長軸を南北にとっている。遺構の上部は削られており、本来の深さは不明であるが、最も近接した位置の竪穴住居1の最終床面から地表までの深さを、竪穴住居8の深さを参考に40cmと仮定すれば弥生時代の地表面は3.82m付近となり、土壙の深さはもとは30cm程度であった可能性が考えられる。

土壙の壁面および底面は火を受けて赤色を呈しているが全面にわたるものではなく、土壙の南壁を中心としており、北からの風で炎が南に流れたためとも考えられる。

この土壙から出土した土器の特徴については土器の記載において記したように、1．断面の色調が漆黒色～黒色を呈する、2．器面の剝離が顕著である、3．破面の変色が認められる、といった特徴をもっている。このうち、1とした断面の色調であるが、通常の土器においても断面が黒色を呈するものはしばしば認められる。しかしながらそれらでは黒色部分の範囲は狭く、器面に近い部分は淡褐色～灰褐色を呈するものがほとんどである。それに対してこの土壙の資料では断面全体が黒色で、内外の表面のみが灰白褐色～褐色を呈している。本来は焼成時の酸化によって厚さを減じるべき黒色部分がまったく残ったものと推定され、焼成が不完全に終わっているものと考えられる。

また、この土壙から出土した土器はいずれも破片となっており、破面の多くは上記のように黒色を呈しているが、一方で一部の破面が黒色を示さない破片もある程度認められる。これが特徴の3としたものであり、破面は内面あるいは外面とまったく同じ色調を呈している。こうした現象が発生する理由としては破損後に改めて火を受けたか、焼成中に破損して破面が変色したかのいずれかと思われる。この二者のいずれによるか判断するのは容易ではないし、また、この評価が土壙の性格を決定するものになる。これについては、以下の点が判断の手がかりとなる。

1．すべての破面において変色が認められる破片がないことからみて、どちらの理由によって生じたものであれ、あとから破損を受けているものと判断できるが、他遺構の二次的に火を受けたと判断できる破片では、変色は破面全周であることが多く、さらに破損しているものは少ない。

2．土器の焼成状態は軟質で、長頸壺196のように器表の色調が暗灰色で十分に赤色を呈していないものを含んでいる。

3．特徴の2としたように器面が鱗状あるいは円盤状に剝離しているものがかなり認められ、その面にも変色が生じているが、こうした剝離は落下や打撃によって生じたものとは考えに

くい。

以上の点からみるかぎり、これらの土器は二次的に火を受けたものとは考えにくく、焼成中に破損したものと考えられる。また、これらの土器がつまった状態で出土したこの土壙は、上記のように壁面が焼けていることから、焼損品を廃棄した穴であるとみる必要はなく、焼成土壙であると判断する。

出土土器のうち下部の大形の壺は並んだ状態で出土しているが、いずれも口縁部が下ないし斜め下になっている。これが本来の設置状況である可能性もなくはないが、黒斑のありかた等からみて放棄される際に逆位に置かれ、底部が割られたものと思われる。したがって、これが焼成時の配置状態ではないとみられるが、本来の配置もこれに近い状態ではなかったかと思われる。出土土器の個体数は壺7、長頸壺10、甕3等とかなり多い。そしてこれらで注目されるのは長頸壺の口縁形態や頸部の沈線の施し方が一様でないことである。これらを頸部の内面調整で大別すれば、ヨコハケ：177、178、ナデ：179～182、ヨコミガキ：183、絞り：184、185の4群に区分でき、口縁部のない184は不明であるが、他は口縁形態による区分とよく合致しており、これらの群は製作者の差を示す可能性も考えられる。

なお、ここで焼成の際に破損したと判断した破片は、土壙1に限っての出土ではない。まとまって出土する例はないが、包含層や土壙、溝など特に遺構の種類を限らず出土しており、出土地点は調査区の全域に及んでいる。また、確認できたのは1個体のみであるが、小形の壺283は図版67に示すように、口縁部から胴部にかけて亀裂がはいっている。井戸底など土圧のかかる遺構から出土した土器で亀裂が生じている例はしばしば見受けられるが、この資料は小形で器壁が厚く、また、浅い土壙からの出土である。亀裂は上にひろがっており、これも焼成の際に生じたものである可能性が考えられる。

籠目について

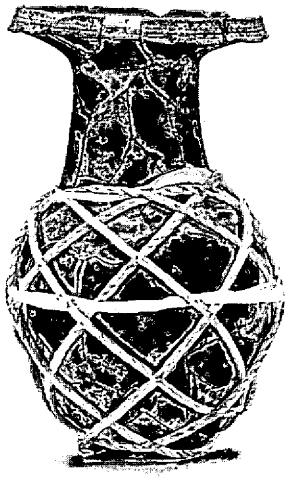
土壙1から出土した資料のなかには高い頻度で籠目をもつ個体が含まれていた。これらの籠目は土器記載の項で記したように、一個体の土器のなかで籠目部分の色調が器壁の色調に対してネガになったりポジになったりして表れており、焼成時に土器に焼き付いたものと考えられるものであった。

籠目をもつ土器はこの土壙1以外に井戸3上層遺物のなかに3点、土壙出土資料のなかに2点含まれており、他に包含層・土器溜まり出土の破片で図を掲載しなかった小破片が2点あり、計9点の出土である。これらの籠目の表出・遺存した理由について推定しかねるものも多いが、1．籠目材の腐朽によると考えられるものが1点、2．ススの付着によって表れたものが3点、3．焼成時に焼き付いたとみられるものが6点、4．籠目材が炭化して付着したものが1点であり、3の焼き付いたと判断したものが最も多い。

籠目の編み方の全体が推定できる資料は少ないが、基本的に同一とみてよいと思われる。籠目は胴部下端から始まっており、この部分では帯が最も密集し、胴最大径部分で最も間隔が開き、頸部下端で再び密集する。また、底部に籠目が認められる例はない。そして、胴の最大径部分と頸部下端では斜めの帯を縫うように横方向の帯が入れられている。

これまでの研究においては、籠目はその名称が良くなかったのか、おおむね「籠」としてとらえられてきたが、こうした帯の形状から復元されるのは「紐かけ」であり、現在も植木結びと呼ばれ使用されている緊縛方法である。この方法では土器を据えたまま一本の紐（蔓）を用いて短時間のうちに紐かけをおこなうことができ、しかも土器の重量を分散して受けることが可能である。また、その材料も容易に入手しうるものである。（百間川沢田遺跡2所収の井戸32出土壺1094は籠目材が一部に遺存した稀有な例である。この資料について畔柳鎮先生に鑑定を願い、アケビないしガマとの所見をいただいた。）

この紐かけの目的は副次的には運搬などにも利用されたであろうが、第一義的には土器をつり下げることであったと思われる。そして、土壙1出土土器の籠目について言えば、土器の乾燥がつり下げて行われ、そのまま焼成がなされたために籠目が遺存した可能性が強い。また、これらの資料は上記のように不完全な焼成であるため明瞭に籠目が遺存したと考えられ、もしこれらが完全に焼きあがって器面が十分に赤化したならば、籠目も当然消失すると推定される。



第338図　「籠目」復原
（使用土器は215）

こうした籠目から推定される紐かけの個体は今回報告した土器のなかでは微々たる量でしかない。他に図示できなかった土器が多数あることからすれば、籠目のある土器が出土土器全体のなかに占める割合は1％にはるかに及ばないものであろう。しかしながら、そのことは土器への紐かけが特殊な用法であったことを示すのではなく、ただ、ツル等のきわめて腐朽しやすいものが用いられていたため、ススが付着するなどなんらかの特殊な条件があってはじめて遺存することを示していると考えたほうが良いであろう。　（宇垣）

第２節　古墳時代の集落と遺物

１．竪穴住居の規模と構造

原尾島遺跡の６～10Ａ～Ｃ区は、安定した微高地にあたることから、23軒の竪穴住居（以下住居と略す）が認められた。これに、これまで報告されている周辺の住居を加えると50軒あまりにもなり、さらに、未掘部を含めると相当な数になるものと推定される。しかし、これらの住居はすべて同時に存在したものではなく、出土した遺物から７期に大別できる。

Ⅰ期は百・古・Ⅰの土器が出土する時期。Ⅱ期は百・古・Ⅱの土器が出土する時期。Ⅲ期は百・古・Ⅲの土器が出土する時期。Ⅳ期は５世紀後半から６世紀初頭（ＴＫ23・47）の時期。Ⅴ期は６世紀前半から中頃の時期。Ⅵ期は６世紀後半の時期。Ⅶ期は６世紀末から７世紀初頭（ＴＫ209）の時期である。

Ⅰ期の住居は６軒確認されており、その多くは東西に辺を揃えている。平面形は、隅丸方形を呈する住居19を除けば方ないし長方形を呈するが、以後の時期に比較していずれも隅がやや丸みをもつのを特徴とする。規模は、床面積が16～25㎡のものまであるが、16～20㎡のグループと24・25㎡のグループに分かれる。住居の屋根を支える主柱穴を見ると、２本と４本柱とが認められ、その比率はほぼ同じである。

住居内の諸施設を見ると、中央に中央ピットと壁に接して土壙をもつものが多い。中央ピットは平面形が円ないし楕円形を呈するが、規模は一定しない。また深さも皿状の浅いものから、柱穴状の深いものまで様々である。しかし、共通することは、ピット内部に焼土や炭化物を多く含むこと、あるいは底ないし壁の一部、またピット縁辺部に被熱による赤化が認められることである。

Ⅰ期に特徴的に認められる施設として、ベッド状遺構がある。基本的には４本柱を結ぶ線から壁側の床面を一段高く仕上げるものであるが、変形したものも認められる。

Ⅱ期に属する住居は明確でないが、Ⅲ期には１軒認められる。しかし、残存状態が悪く、その構造などは明確にし得ない。ただⅢ期に造り付カマドが出現する点は特筆される。

Ⅳ期の住居は５軒認められる。平面形はいずれも方形である。規模は、床面積が10～21㎡の小規模グループと、39～42㎡の中規模グループとが見られる。主柱穴はいずれも４本柱で、２本柱が認められない点はⅠ期と異なる。Ⅳ期の最も大きな特徴は造り付カマドが普及することである。それとともに中央ピットや壁際の土壙は消失する。

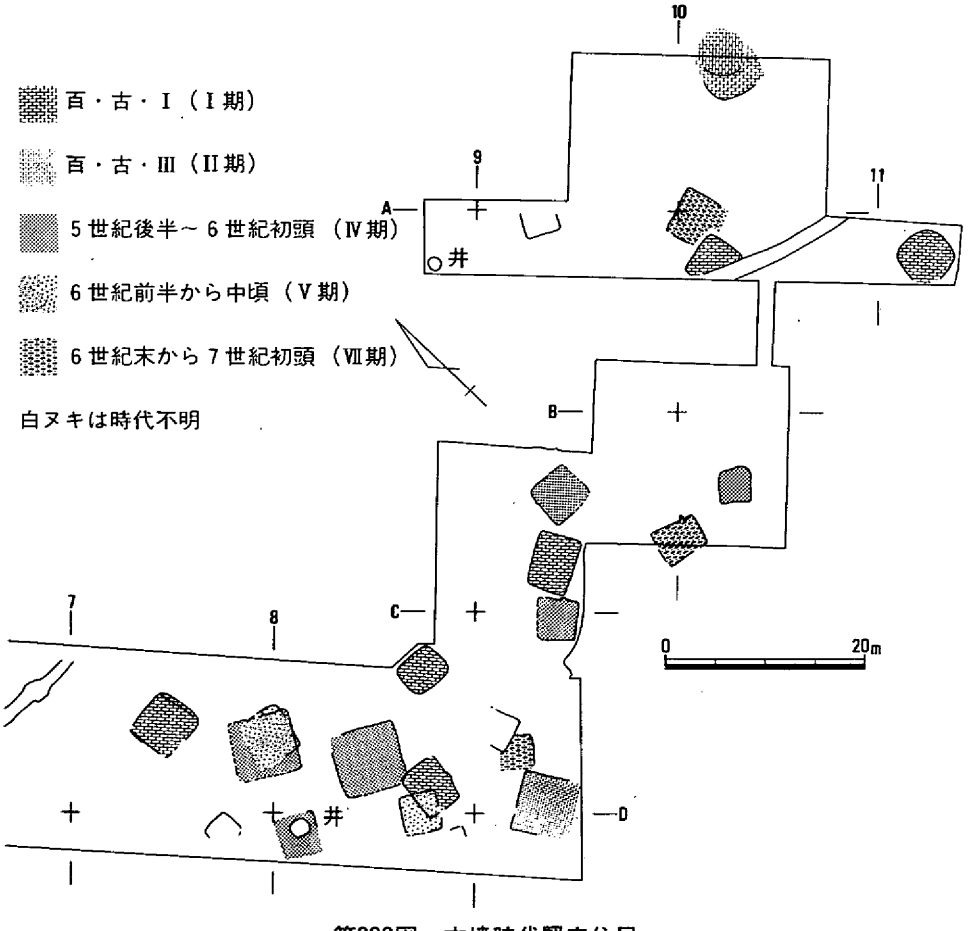
Ⅴ期の住居は１軒しか認められず、この傾向はⅥ・Ⅶ期においても同様である。したがって

一括して概観する。

住居の平面形は方形であるが、規模は概して小形化するようで、床面積が11～18㎡のものが多い。主柱穴は4本であるが、Ⅵ・Ⅶ期のものには柱穴の検出されないものが多い。造り付カマドの付設率は約40%程度である。

以上、住居の規模と構造を概観したが、大きな画期はⅢ期にあることが見てとれる。Ⅲ期の住居が少ないため必ずしも明確でないが、Ⅲ期にはⅠ・Ⅱで確立していた中央ピットと壁際土壙が減少し、造り付カマドが出現するなど、変革への始動が感じられる。そしてⅣ期には須恵器とともに造り付カマドが急速に普及する。

次の画期は竪穴住居そのものが消滅してゆき、掘立柱建物に取って変わるⅦ期であるが、これについては後で述べる。



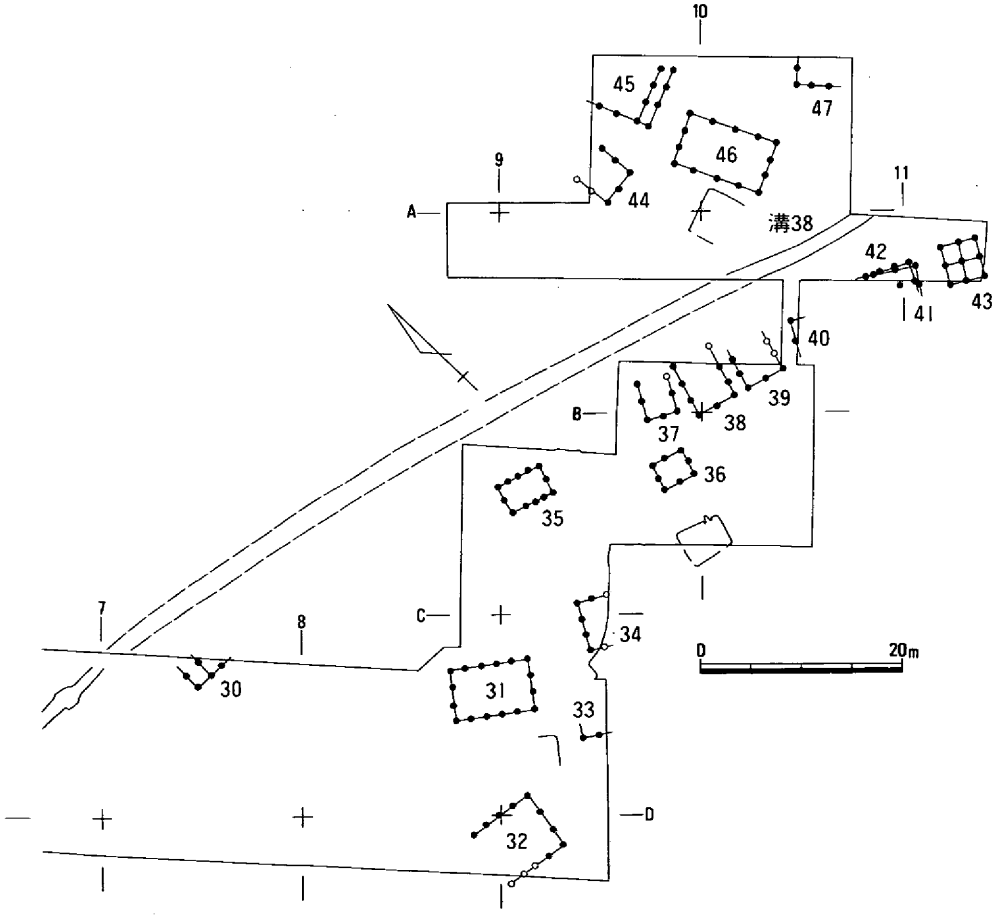
第339図　古墳時代竪穴住居

２．集落の変遷

６～10Ａ～Ｃ区で認められた住居は23軒であるが、未掘部分が多く、今後調査によって大きく変わることを承知で、集落としての変遷を見ておきたい。

Ⅰ期の住居は６軒認められるが、すでに報告されている上流部の新田サイフォン・新田樋門調査区にも８軒以上が知られている。したがって原尾島遺跡の０～11Ａ～Ｄ区に広がる微高地には、床面積約81㎡を測る大形の新田サイフォンⅡ－１住居を核に、多くの小・中形住居が点在するものと思われる。

Ⅱ期になると住居はなく、井戸がわずかに認められる。上流の左岸用水でも１軒のみであり、原尾島遺跡では集落の急激な衰退が見てとれる。ただ百間川遺跡群全体、特に沢田遺跡ではⅠ期に続いてなお多くの住居が認められる。



第340図　古墳時代建物

Ⅲ期の住居も1軒のみで、Ⅱ期に引き続き集落の衰退期といえる。この傾向は百間川遺跡群全体についても同様であり、この点は原尾島遺跡のみが衰退したⅡ期とは異なる。

Ⅳ期は集落が再び活況を呈する。住居は6軒認められ、9・10B・C区にある3軒の小形グループと、8C・D区にある3軒のグループに分けることができる。さらに新田樋門・新田サイフォン及び7～11Dで確認された15軒あまりの住居も、2ないし3軒でまとまるようである。

ただしこの2～3軒のまとまりは、近接しているものが多いことから、同時併存とは考えられない。

Ⅴ期は1軒、Ⅵ期は1軒も認められないことから、再び衰退したと考えられる。百間川遺跡群全体を見ても、遺構・遺物の少ない時期である。

Ⅶ期は主に掘立柱建物（以下建物と略す）で集落は構成されると考えられるが、同時期の竪穴住居も4軒認められる。17棟の建物はいずれもⅦ期という時期幅の中で捉えられるにしても、すべて同時に存在していたとは思えない。まず方位で見ると、北から17度前後東へ振る建物33・34・36・37、北から30度前後東へ振る建物32・35・38～41、北から25度前後西へ振る建物43・44に分けられ、残りはすべて異なる。このうち建物33・34・36・37はほぼ東西に流走する溝の南側に並ぶ。このグループは規模が9～22㎡の小さなもので構成される。建物32・35・38～41のグループは先のグループと一体となって溝38の南側に並ぶ。このグループも小規模なもので構成される。建物43・44は溝38の北側に並ぶ。規模はいずれも大きく建物44は49㎡を測る。

建物の分布を見ると溝38を境に北と南に分けられる。北は調査範囲が狭いため明確でないが、南側は溝38にそって倉庫一棟を含む建物が並ぶ。いずれも小規模なものであるが、建物29（45㎡）と30はやや大きい。ただ、遺物を見ると建物が建てられていた頃には溝38はかなり埋まっていたと考えられ、そうなると溝による区分は意味をなさなくなる可能性もあるが、その一方で溝に規制されたような建物配置が認められるのも事実である。

以上、原尾島遺跡の7～11A～Dを中心に集落の様相を概観した。その結果弥生時代後期末の大洪水後、最初に形成されたⅠ期の集落は、大形住居をもつ大集落であった可能性が強く最も活況を呈していたといえる。それがⅡ期になると急激に衰退し、Ⅲ期まではほぼ同じような状況を呈している。しかし、造り付カマドと須恵器が普及するⅣ期には再び拡大し活況を呈するようになる。さらにⅤ・Ⅵ期になると再び衰退するものの、Ⅶ期には竪穴住居から掘立柱建物へという変化を伴って拡大するという状況が確認できた。　（平井）

3．弥生時代末～古墳時代前期の甕について

本報告書で取り扱った遺構では弥生時代後期末から古墳時代前期初頭のものも比較的多く、井戸7などからは保存状態が良好な土器が多数出土した。この時期の土器全般を論じるには器種が十分にそろっていないため、ここでは出土量がもっとも多かった甕についての観察所見を記しておく。

古墳時代前期の甕の分類については井戸7で少しふれたが、圧倒的多数を占めるのは「ボウフラ」、吉備甕等と呼ばれている、口縁部を上方に拡張し櫛描き沈線を施すもので、この型式の甕は吉備南部に広く分布している。器壁はきわめて薄く、厚い部分でも3㎜前後、薄い部分では2㎜以下になる。外面調整はおおむねタテハケののちヘラミガキである。

通常、内面下部は使用等によって器面が荒れていることが多いが、今回取り扱った資料では内面調整を十分に観察できるものがある程度含まれており、そのうちのいくつかの個体（158、462、648）では内面の円形圧痕内に木目状の痕跡を残すものが認められた。円形圧痕はこれまで指頭圧痕と呼ばれてきたものであるが、指頭大のもの以外に、径7㎜程度の指の圧痕とみるには小さすぎるものがかなりあり、また、爪の圧痕が残る例はない。こうした点や上記の木目状の痕跡から判断すれば、圧痕の原体は棒あるいは細長い円礫の先端であって指頭ではないと推定される。

円形圧痕には肩部内面に点在するものと、網部下半に密集して施されるものとがある。観察のかぎりでは前者はヘラケズリに切られており、後者はヘラケズリののち施されている。したがって、調整の先後関係は円形圧痕（肩部）→ヘラケズリ→円形圧痕（胴部下半）となる。肩部の円形圧痕については外面のタタキとの関係をもう少し検討する必要があるためここでは保留とするが、下半部のそれについては一つの解釈が可能である。胴部下半の円形圧痕は底にむかって徐々に密度が高くなっており、器壁の厚さもそれに応じるように底にむかって厚さを減じるものが多い。この時期の甕の成形については型作りとみる見解があるが、こうした特徴からは型作りとは考えにくく、むしろ大まかな成形ののち押出しによって胴部下半の成形を行ったと考えたほうがよいであろう。

この円形押圧を用いて製作され、口縁部を上方に拡張する甕は吉備では百・後・Ⅳに出現し百・古・Ⅱにかけて盛行する。この甕は口縁部径や胴部最大径などに高い規格性をもつのが特徴である。また、付載1に示すように胎土分析からは、この甕が弥生時代後期の土器と異なる胎土であり、しかも備前南部の百間川原尾島遺跡の出土資料と備中南部に所在する窪木薬師遺跡のもとが共通するという結果が得られている。これらのことからすれば、この甕は一元的ないしそれに近い形で生産されていた可能性が考えられ、また、胴部下半の押出し成形も、効率

的に器壁の薄い甕を製作する技法として採用されたものと考えられる。

なお、讃岐から搬入された甕444・445では、肩部内面には下半のヘラケズリに先行して円形圧痕が施されており、それには木目様の凹凸が明瞭に認められる。円形圧痕は吉備の甕のものよりも大きく浅い。十分な資料数がないため判断しかねるものの、タタキ成形の際の当て具痕跡である可能性が考えられる。

また、前節において出土の弥生後期土器に焼成時の破損品が見られることを述べたが、それらは百・後・Ⅱ～Ⅲであり、百・後・Ⅳ以降の資料においてはごく微量にしか認められず、少なくとも百間川原尾島遺跡においてはこの間に土器製作・生産の変化があったものと考える。

（宇垣）

付載1　百間川原尾島遺跡出土土器の胎土分析

岡山理科大学
白石　純

Ⅰ．はじめに

この胎土分析では、以下に述べる点について検討した。

(1) 弥生時代後期から古墳時代初頭の土器で、時期により胎土に差がみられるかどうか。また、器種により差があるかどうか。

(2) 古墳時代初頭の吉備地方で生産された土師器「ボウフラ[1]」と、讃岐地方からの搬入と考えられる土器との比較。また、以前分析した窪木薬師遺跡出土[2]の土師器（ボウフラおよび東海系）も加えて比較検討。

Ⅱ．分析方法および結果

1．分析方法

分析方法は蛍光X線分析法で行い、測定装置、方法、条件、試料の作製方法については、現在まで筆者が行っている方法である[3]。また、測定元素はSiO_2、TiO_2、Fe_2O_3、Al_2O_3、CaO、K_2O、MgO、Sr、Rbの9元素である。

2．分析結果

(1) 弥生時代後期から、古墳時代初頭の土器の胎土分析では、弥生時代後期と古墳時代初頭の土器で胎土に差がみられた（第1表参照）。特にSiO_2、Al_2O_3、Fe_2O_3、TiO_2、MgOの元素に顕著な差がみられた。そこで、これら各元素からSiO_2／Al_2O_3、Fe_2O_3／TiO_2、K_2O／CaO、K_2O／MgO、Sr／Rbのそれぞれの比をとり[4]、散布図を作製した。

第1図SiO_2／Al_2O_3—Fe_2O_3／TiO_2の散布図では、弥生時代（遺物番号1、2、6、7、8、12、15、16、17、18、19、20、21、22、23、24、26—1～26—5）、庄内式（10）のグループと古墳時代（3、4、13、27—1～27—5）、讃岐産土器（5、18）、弥生時代（9、13、14、20、25）の2つのグループに大きく分かれた。

第2図Fe_2O_3／TiO_2—K_2O／CaOの散布図では、弥生時代（2、6、7、8、12、15、16、17、18、19、21、22、23、24、26—1～26—5）、庄内式（10）のグループと弥生時代（1、9、14、20、25）、古墳時代（3、4、27—1～27—5）のグループ、讃岐産土器（5、18）のグループの3つに分かれた。

第３図SiO_2／Al_2O_3－Sr／Rbの散布図では、弥生時代（１、２、６、７、８、９、12、14、15、16、17、19、20、21、22、23、24、26－１～26－５）、庄内式（10）のグループと弥生時代（11、13、25）、古墳時代（３、４、27－１～27－５）、のグループと讃岐産土器（５、18）の３つのグループに分かれた。

第４図K_2O／MgO－SiO_2／Al_2O_3の散布図では、弥生時代（１、７、８、16、17、21、22、24、25、26－２、26－３、26－４）、庄内式（10）のグループと弥生時代（６、９、12、14、15、19、20、23、26－１、26－５）、古墳時代（３、４、27－１～27－５）のグループと讃岐産土器（５、18）、弥生時代（11）の３つのグループに大きく分かれた。この散布図では、弥生時代の土器が大きく２つに分かれ、１つは古墳時代初頭の土師器と重なる結果となった。

第５図K_2O／CaO－Sr／Rbの散布図では、弥生時代（１、２、６、７、８、９、12、13、14、15、16、17、19、20、21、22、23、24、25、26－１～26－５）、庄内式（10）のグループ、古墳時代（３、４、27－１～27－５）のグループ、讃岐産土器（５、18）グループの３つに分かれた。

以上、第４図以外の各散布図とも弥生時代後期のグループと古墳時代初頭のグループに大きく分かれるようである。しかし、弥生時代の土器のなかには古墳時代のグループに入るものもある。これらの土器のなかには遺物番号９の焼土塊、11の丹塗り壺（胴部）、20の精製粘土の高杯、25の丹塗りの坩などがあり、特異な胎土の土器でもある。

また、讃岐地方からの搬入と考えられる土師器（５、18）は、第２・３・４・５図の散布図で１つのグループをつくり識別できるようである。

遺物番号10の庄内系の壺はいずれの散布図でも弥生時代後期土器の分布範囲に入っている。

遺物番号11の壺（胴部）は丹塗りで、色調は断面・内面が褐色を呈し、胎土に雲母を多く含み、角閃石もみられる。この土器は、第１・２・５図で１点だけ離れてプロットされ、特異な胎土を示している。また、13の外面に粗いタタキが施されている甕は、第２・４図で１点だけ離れて分布している。

次に以前分析した総社市窪木薬師遺跡出土の古墳時代初頭の土師器（ボウフラおよび東海系）を、第１～５図の散布図に重ねているが、いずれの散布図でも原尾島遺跡の古墳時代初頭の土師器（ボウフラ）と重なるようである。ただ、第４・５図では窪木薬師遺跡の東海系土師器は弥生時代後期のグループとが一部重なる結果となった。

Ⅲ．まとめ

(1)　百間川原尾島遺跡出土の弥生時代後期から古墳時代初頭の土器の胎土分析では、時期別にある程度のまとまりがあることがわかった。ただ、弥生時代後期の土器のなかには、古墳時代

初頭のグループに入る特異な胎土の土器もあるようである。たとえば、９の焼土塊、11、25の丹塗り土器などである。今後、これら特異な胎土の資料を増やして改めて検討しなければならない。

(2)　讃岐地方からの搬入と考えられる遺物番号５、18の甕形土器は胎土分析でも、明らかに分かれ識別できた。しかし、讃岐地方の土器を分析し、比較してないことから、今後これらを加えて改めて検討する必要がある。

(3)　総社市窪木薬師遺跡出土の古墳時代初頭の在地産（ボウフラ）および東海系の土師器を百間川原尾島遺跡出土土器と対比させてみた。その結果、窪木薬師遺跡出土の在地産土師器（ボウフラ）は、原尾島遺跡の古墳時代初頭の土師器（ボウフラ）とほぼ重なることがわかった。また、東海系と考えられる土師器は弥生時代後期のグループと古墳時代初頭のグループのほぼ中間にプロットする傾向にあり、識別が困難になった。

以上のように、今回の分析では古墳時代初頭の原尾島遺跡および窪木薬師遺跡の甕形土器（ボウフラ）がほぼ１つにまとまった。これは、特定の地域の粘土を使用していることが考えられ、ひいては、特定の工人集団による一括生産も十分に考えられる。しかしながら、資料的にまだまだ不十分であり、資料の蓄積を行い改めて検討したい。

また、以前在地産（ボウフラ）と東海系と考えられる土師器が識別可能であることを述べた(2)。しかし今回、吉備地方の弥生時代後期の土器と一部重なることから、東海地方出土の土師器と比較検討しなければならない。

この小稿を草するに当たりまして、亀田修一先生には終始ご指導、ご教示いただきました。また、資料の収集では、正岡睦夫、浅倉秀昭、中野雅美、柴田英樹の各氏にはお世話になりました。末筆ではありますが記して謝意を表します。

註

（１）高橋　護　「弥生時代終末期の土器編年」『研究報告９』岡山県立博物館　1988.3

（２）白石　純　「窪木薬師遺跡出土遺物の胎土分析」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告86』岡山県教育委員会　1993．３

（３）白石　純　「蛍光Ｘ線による須恵器の同一個体内の化学的不均質性について」『蒜山研究所研究報告第15号』岡山理科大学　1989

（４）東村武信　「石器産地推定法」（ニュー・サイエンス社）による産地推定法では測定機器による特性などにより、各元素比を決めている。また、永塚澄子他「蛍光Ｘ線分析法による関東ローム層の元素分析　―東京都多摩ニュータウンNo.471Ｂ遺跡の土壌分析―」『東京都埋蔵文化財センター　研究論集Ⅶ　1989.3』では土壌の識別をするには土壌母材の岩質の指標となる鉄、アルミニウム、チタンの相

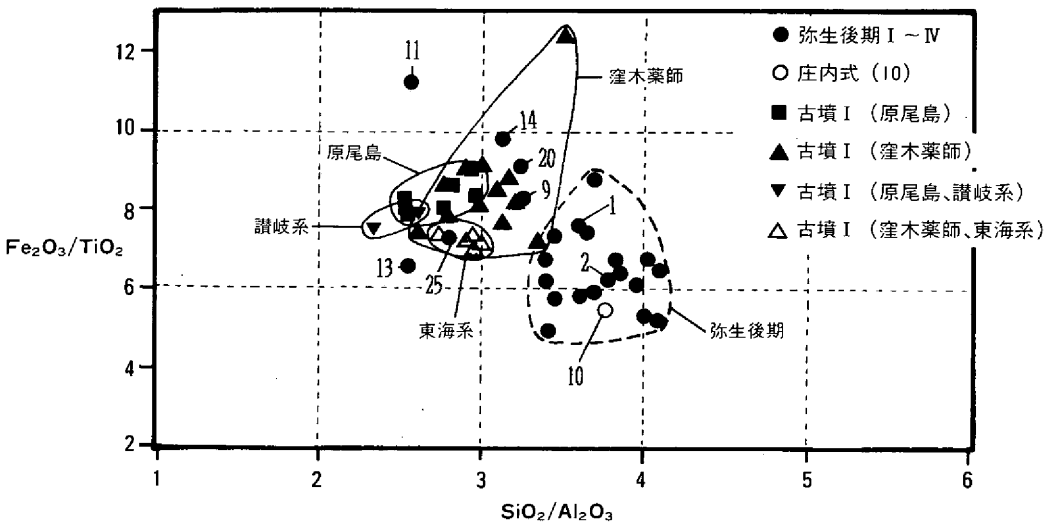
対比と、化学的風化の指標となるアルカリ、アルカリ土類元素の比が有効な手段となることが述べられている。筆者も、現在までに分析した土器類のデータを検討した結果、識別には前記した元素の比をとることが、現在もっとも有効と考えられる。

（5）(2)と同じ

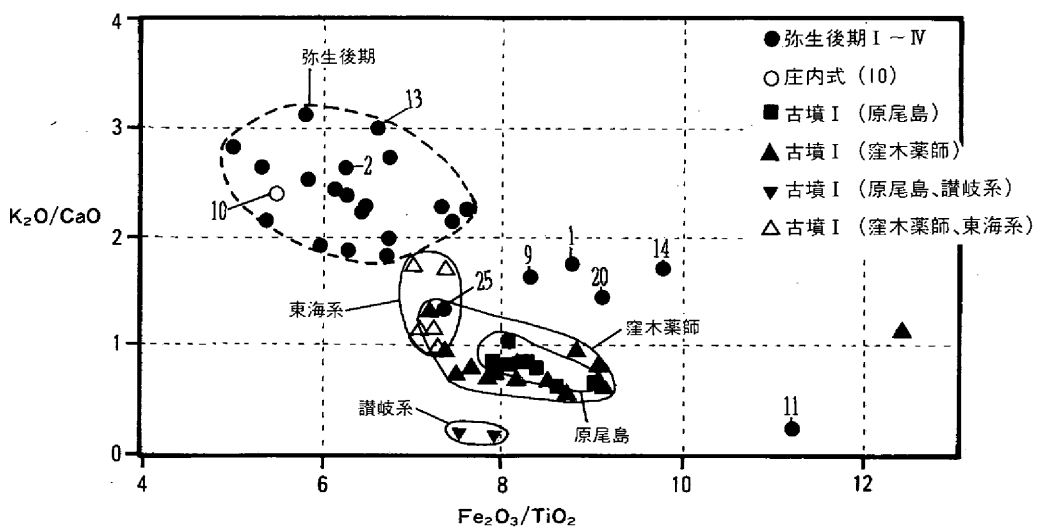
第1表　百間川原尾島遺跡出土土器の胎土分析試料一覧表

遺物番号	地区・遺構		器種		備考
1	8C　P276		長頸壺	胴部	弥生後期Ⅲ
2	藤原橋東区包含層　3.55-3.60	850316	壺	口縁部	弥生後期Ⅲ
3	藤原橋東区包含層　3.6まで	850312	甕	口縁部	古墳Ⅰ　胎土に角閃石を含む
4	藤原橋東区包含層　3.6まで	850307	甕	口縁部	古墳Ⅰ　胎土に角閃石を含む
5	藤原橋中央西区包含層　3.55まで	850325	甕	口縁部	古墳Ⅰ　讃岐搬入土器　雲母および黒色粒を多量に含む
6	PR－1　土器溜まり	830624	甕	口縁部	後期Ⅱ
7	PR－1　土器溜まり	830624	甕	口縁部	後期　「く」の字口縁部
8	PR－1　土器溜まり	830624	製塩土器	脚部	後期後半
9	PR－1　溝－6	830624	焼土塊		後期
10	PR－1　土器溜まり	830625	壺	口縁部	古墳Ⅰ　庄内式　波状文
11	PR－1　溝－6	830704	壺	胴部	後期　丹塗り(表面)で内・断面が褐色を呈し胎土に雲母(多い)角閃石を含む
12	PR－1　土器溜まり	830624	高杯	脚部	後期Ⅲ　精製粘土
13	PR－1　溝－6	830713	甕	胴部	後期Ⅳ～古墳Ⅰ　外面粗いタタキ
14	PR－1　溝－6	830704	甕	口縁部	後期Ⅲ　胎土に黒色粒を少し含む
15	PR－1　土器溜まり	830624	高杯	脚部	後期Ⅲ
16	PR－1　土器溜まり	830513	長頸壺	頸部	後期Ⅲ
17	PR－1　土器溜まり	830624	壺	口縁部	後期Ⅰ
18	PR－1　溝－古2	830607	甕	口縁部	古墳Ⅰか　讃岐搬入土器　雲母および黒色粒を多量に含む
19	PR－1　土器溜まり	830513	壺	口縁部	後期Ⅱ
20	PR－1　溝－6	830713	高杯	脚部	後期Ⅲ　精製粘土
21	PR－1　土器溜まり	830513	高杯	脚部	後期Ⅱ　胎土に角閃石を含む
22	PR－1　土器溜まり	830513	甕	口縁部	後期Ⅳ
23	PR－1　溝－6	830704	壺	口縁部	後期Ⅰ
24	PR－1　溝－6	830708	製塩土器	脚部	後期
25	PR－1　土器溜まり	830624	坩		後期　丹塗り（内外面）断面は明褐色
26-1	PR－1　土器溜まり	830624	甕	口縁部	後期Ⅱ
26-2	〃　〃		〃	〃	〃
26-3	〃　〃		〃	〃	〃
26-4	〃　〃		〃	〃	〃
26-5	〃　〃		〃	〃	〃
27-1	藤原橋		甕	口縁部	古墳Ⅰ～Ⅱ　胎土に角閃石を含む
27-2	〃		〃	〃	〃　〃
27-3	〃		〃	〃	〃　〃
27-4	〃		〃	〃	〃　〃
27-5	〃		〃	〃	〃　〃

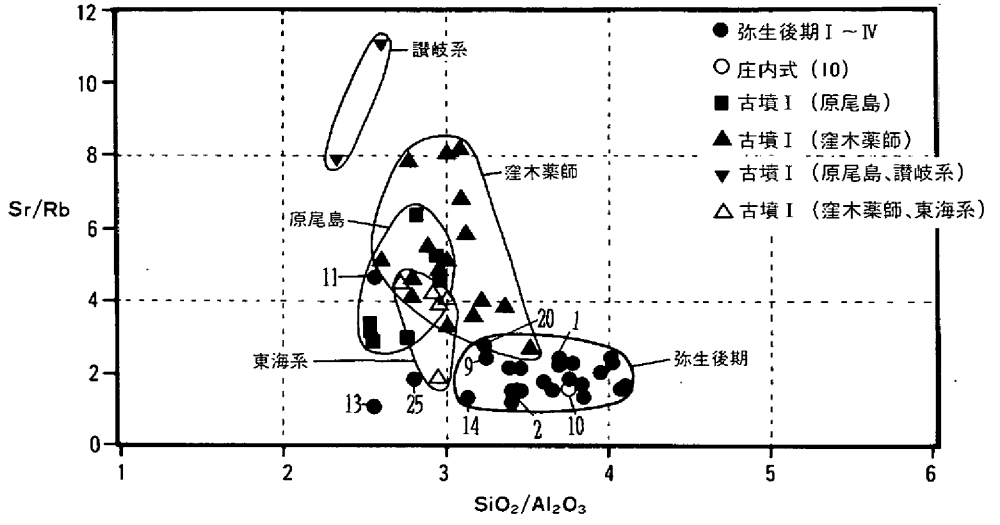
※備考覧の土器の時期は資料提供者による。また、胎土の観察は筆者が記載した。
遺構名はいずれも旧遺構名である。



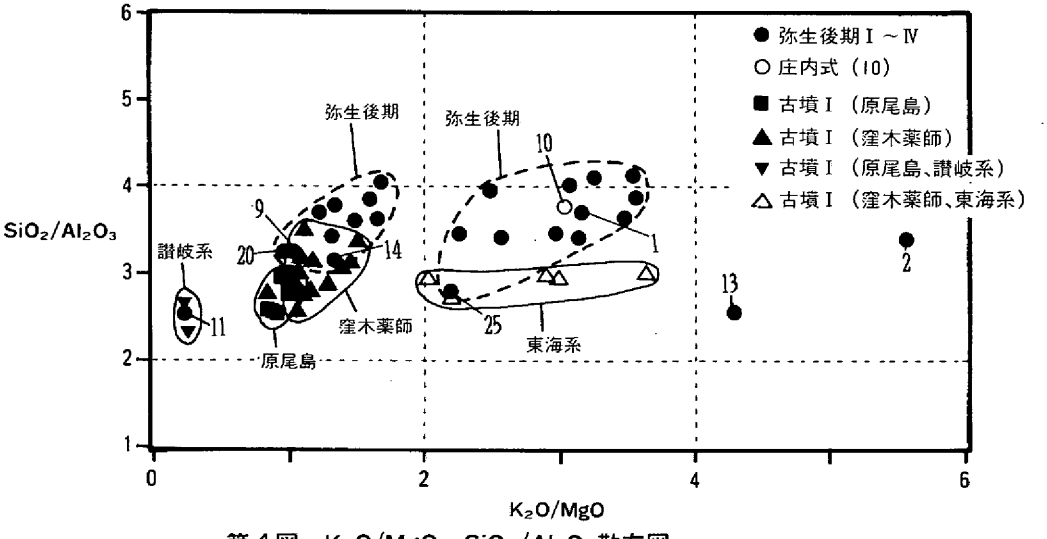
第１図　$SiO_2/Al_2O_3-Fe_2O_3/TiO_2$散布図
百間川原尾島遺跡　弥生～古墳時代出土土器の比較



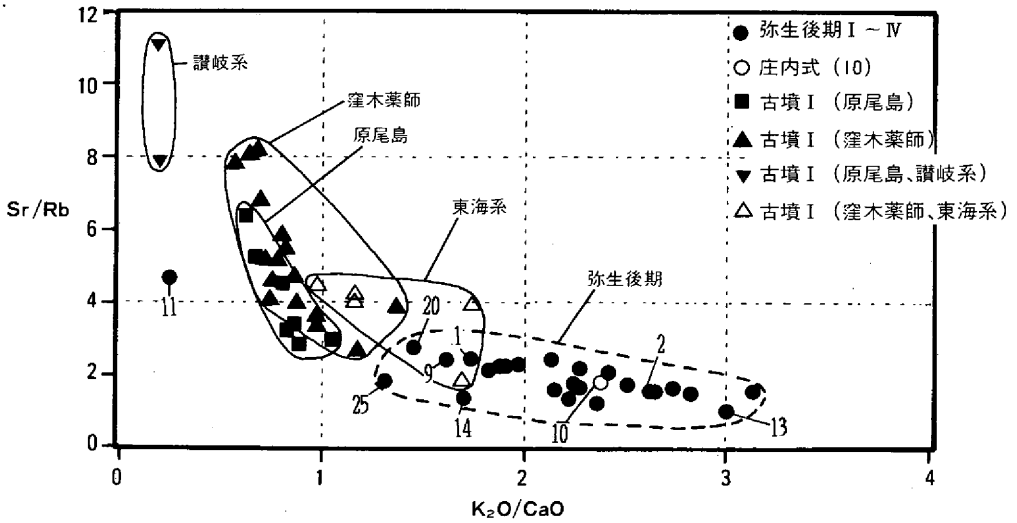
第２図　$Fe_2O_3/TiO_2-K_2O/CaO$散布図
百間川原尾島遺跡　弥生～古墳時代出土土器の比較



第３図　SiO_2/Al_2O_3－Sr/Rb散布図
百間川原尾島遺跡　弥生～古墳時代出土土器の比較



第４図　K_2O/MgO－SiO_2/Al_2O_3散布図
百間川原尾島遺跡　弥生～古墳時代出土土器の比較



第５図　$K_2O/CaO-Sr/Rb$散布図
百間川原尾島遺跡　弥生～古墳時代出土土器の比較

付載２　百間川原尾島遺跡出土のヒスイ製勾玉の産地分析

京都大学原子炉実験所
藁　科　哲　男

はじめに

遺跡から出土する大珠、勾玉、管玉の産地分析というのは、玉類の製品が何処の玉造遺跡で加工されたということを調査するのではなくて、何ケ所かあるヒスイの原産地うち、どこの原産地の原石を使用しているかを明らかにするのが、玉類の原産地推定である。玉類の原石の産地を明らかにすることは考古学上重要な意味をもっている。糸魚川市でヒスイが発見されるまでは、中国、雲南、ビルマ説、発見後は、専ら国内説で、岩石学的方法[1]および貴重な考古遺物を非破壊で産地分析を行った蛍光Ｘ線分析で行う元素比法[2,3]が報告されている。また、碧玉製管玉の産地分析で系統的に行った研究は蛍光Ｘ線分析法と電子スピン共鳴法を併用し産地分析をより正確に行った例[4]が報告されている。石鏃など石器と玉類の製品はそれぞれ使用目的が異なるため、それぞれの産地分析で得られた結果の意味も異なる。(1)石器の原材産地推定で明らかになる、遺跡から石材原産地までの移動、活動範囲は、石器は生活必需品であるため、生活上必要な生活圏と考えられる。(2)玉類は古代人が生きるために必ずしもいるものではない。勾玉、管玉は権力の象徴、お祭、御守り、占いの道具、アクセサリーとして、精神的な面に重要な作用を与えると考えられる。従って、玉類の産地分析で明らかになるヒスイ製玉類の原石の分布範囲は、権力の象徴としての玉類であれば、権力圏を現しているかもしれない、お祭、御守り、占いの道具であれば、同じような習慣を持つ文化圏が考えられる。石器の原材産地分析で得られない貴重な資料を考古学の分野に提供することができる。

今回分析を行った玉類は岡山市の百間川原尾島遺跡出土のヒスイ製勾玉１点（Ｊ14）で、この遺物の分析結果が得られたので報告する。

非破壊での産地分析の方法と手段

原産地推定の第一歩は、原産地間を区別する人間で言えば指紋のような、その原産地だけにしかないという指標を見つけなければならない。その区別するための指紋は鉱物組成の組合わせ、比重の違い、原石に含有されている元素組成の違いなどにより、原産地同士を区別できなければ産地分析はできない。成功するかどうかは、とにかく行ってみなければわからない。原産地同士が指紋でもって区別できたならば、次に遺跡から出土する遺物の指紋と原産地の指紋

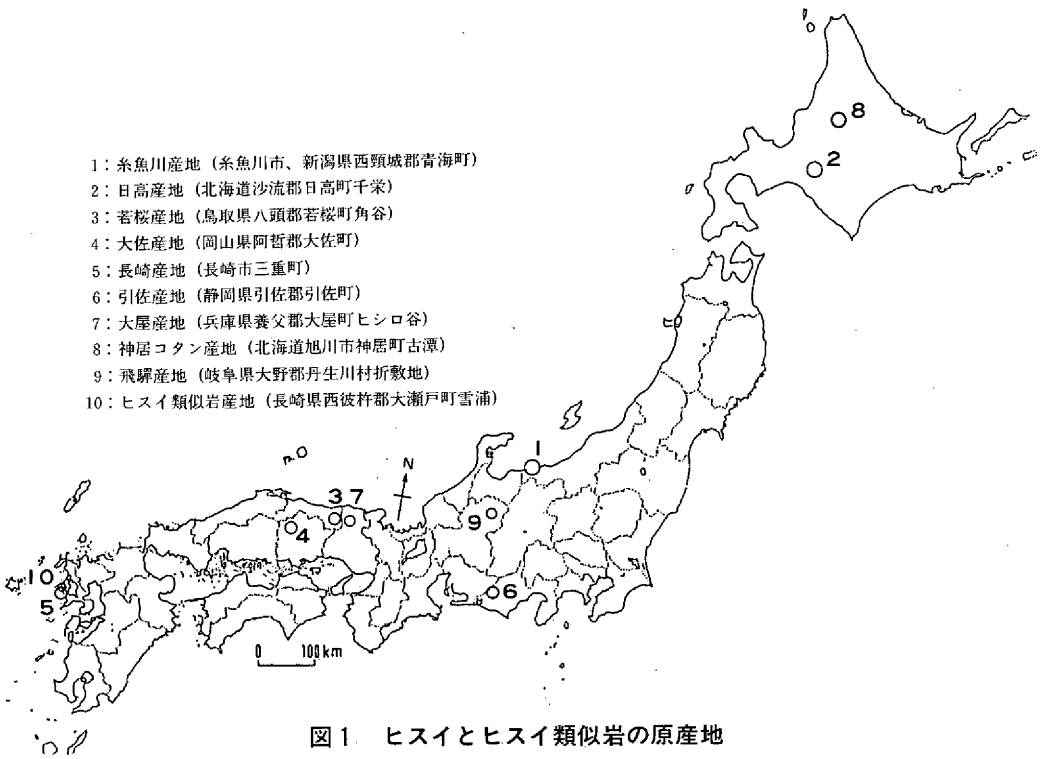


図1　ヒスイとヒスイ類似岩の原産地

を比較して、一致しない原産地を消去して一致する原産地の原石が使用されていると判定する。

ヒスイ、碧玉製勾玉、大珠、管玉などは、国宝、重要文化財級のものが多くて、非破壊で産地分析が行なえる方法でなければ発展しない。石器の原材産地分析で成功している[5]非破壊で分析を行う蛍光X線法を用いて玉類に含有されている元素を分析する。

遺跡から出土した大珠、勾玉、管玉などを水洗いして、試料ホルダーに置くだけの、完全な非破壊で産地分析を行った。ヒスイ製玉類は蛍光X線分析法で元素の種類と含有量を求め、試料の形や大きさの違いの影響を打ち消すために分析された元素同士で含有量の比をり、この元素比の値を原産地区別すする指紋とした。

ヒスイの原産地

分析したヒスイ原石は、日本国内産では(1)新潟県糸魚川市と、それに隣接する同県西頸城郡青海町から産出する糸魚川産、(2)軟玉ヒスイと言われる北海道沙流郡日高町千栄の日高産[6]、(3)鳥取県八頭郡若桜町角谷の若桜産、(4)岡山県阿哲郡大佐町の大佐産、(5)長崎県長崎市三重町の長崎産であり、さらに(6)西黒田ヒスイと呼ばれている静岡県引佐郡引佐町の引佐産の原石、(7)

兵庫県養父郡大屋町からの原石、(8)北海道旭川市神居町の神居コタン産、(9)岐阜県大野郡丹生川村の飛騨産原石、また、肉眼的にヒスイに類似した原石で玉類等の原材になったのではないかと考えられる(10)長崎県西彼杵郡大瀬戸町雪浦からの原石である。国内産のヒスイ原産地は、これでほぼつくされていると思われる。これら原石の原産地を図１に示す。これに加えて外国産として、ミャンマー産の硬玉と台湾産軟玉および韓国、春川産軟玉などのヒスイの分析も行われている。

ヒスイ試料の蛍光Ｘ線分析

ヒスイの主成分元素はナトリウム（Na）、アルミニウム（Al）、珪素（Si）などの軽元素[7]で、次いで比較的含有量の多いカルシウム（Ca）、鉄（Fe）、ストロンチウム（Sr）である。また、ヒスイに微量含有されている、カリウム（K）、チタニウム（Ti）、クロム（Cr）、マンガン（Mn）、ルビジウム（Rb）、イットリウム（Y）、ジルコニウム（Zr）、ニオビウム（Nb）、バリウム（Ba）、ランタニウム（La）、セリウム（Ce）の各元素を分析した。主成分の珪素など軽元素の分析を行わないときには、励起線源のＸ線が試料によって散乱されたピークを観測し、そのピークの大きさが主に試料の分析面積に比例することに注目し、そのピークを含有元素と同じく産地分析の指標として利用できる。ナトリウム元素はヒスイ岩を構成するヒスイ輝石に含有される重要な元素で、出土した遺物が硬玉か否かを判定するには直接ヒスイ輝石を観測すればよい。しかし、ヒスイ輝石を非破壊で検出できる方法が確立されるまでは、蛍光Ｘ線分析でNa元素を分析し間接的にヒスイ輝石の存在を推測する方法にたよる他ないのではなかろうか。各原産地の原石のなかで、確実にNa元素の含有が確認されるヒスイ産地は糸魚川、大屋、若桜、大佐、神居コタン、長崎の各原産地の原石でこれらは硬い玉に属すると思われる。Na元素の含有量が分析誤差範囲の産地は日高、引佐、飛騨の各産地の原石である。糸魚川産原石のうち緑色系硬玉に、肉眼的に最も似た原石を産出する産地は、他の硬玉産地よりも後述した日高、飛騨、引佐の原石に見られる。各原産地の原石の他の特徴を以下に記述する。若桜産のヒスイ原石はSrのピークがFeのピークに比べて相当大きく、またZrの隣に非常に小さなNbのピークが見られ、Baのピークも大きく、糸魚川産では見られないLa、Ceのピークが観測されている。このCeのピークは大佐産と長崎産ヒスイ原石のスペクトルにも見られ、これらCeを含有する原石の産地は、糸魚川の産地と区別するときに有効な判定基準になる。長崎産ヒスイは、Tiの含有量が多く、Ｙのピークが見られるのが特徴的である。日高産、引佐産、飛騨産ヒスイ原石は、Caピークに比べてTiとかK、またFeピークに比べてSrなどのピークが小さいのが特徴で糸魚川産のものと区別するときの判定基準になる。

春川軟玉原石は、優白色の工芸加工性に優れた原石で、軟玉であるが、古代では勾玉などの

表１　ヒスイ製遺物の原石産地の判定基準(1)

原産地名	分析個数	蛍光X線法による元素比の範囲 比重	K／Ca	Ti／Ca	Sr／Fe	Zr／Sr	Ca／Si
糸魚川産	41	3.00～3.35	0.01～0.17	0.01～0.56	0.15～30	0.00～2.94	0.72～27.6
若桜産	12	3.12～3.29	0.01～0.91	0.03～0.59	3.45～47	0.00～0.25	4.33～48.4
大佐産	20	2.85～3.17	0.01～0.07	0.00～1.01	3.18～61	0.00～12.4	3.47～28.6
長崎産	3	3.16～3.23	0.01～0.14	0.17～0.33	0.02～0.06	4.30～16.0	
日高産	22	2.98～3.29	0.00～0.01	0.00～0.02	0.00～0.37	0.00～0.063	5.92～51.6
引佐産	8	3.15～3.36	0.04～0.04	0.00～0.03	0.03～0.33	0.00～0.018	36.3～65.9
大屋産	18	2.96～3.19	0.03～0.08	0.04～0.16	1.08～79	0.02～0.48	0.95～4.81
神居コタン産	9	2.95～3.19	0.02～0.49	0.09～0.17	0.04～0.22	0.12～0.85	2.22～17.3
飛騨産	40	2.85～3.15	0.01～0.04	0.00～0.00	0.02～0.10	0.00～1.24	12.7～28.5
ミャンマー産	26	3.15～3.36	0.02～0.14	0.01～0.26	0.08～2.5	0.01～23	
台湾産	1	3.00	0.003	ND	ND	ND	

ND：検出限界以下の濃度

表２　ヒスイ製遺物の原石産地の判定基準(2)

原産地名	蛍光X線法による分析元素（各元素が確認できた個体数の百分率） Cr	Mn	Rb	Y	Nb	Ba	La	Ce
糸魚川産	26%	6%	20%	ND	13%	33%	ND	ND
若桜産	ND	ND	16%	ND	100%	100%	67%	67%
大佐産	ND	ND	44%	ND	33%	100%	67%	67%
長崎産	ND	ND	ND	100%	100%	100%	100%	100%
日高産	tr	tr	ND	ND	ND	tr	ND	ND
引佐産	88%	75%	ND	ND	ND	ND	ND	ND
大屋産	tr	ND	31%	ND	6%	90%	100%	100%
神居コタン産	ND	100%	22%	100%	ND	55%	ND	ND
飛騨産	100%	100%	ND	ND	ND	ND	ND	ND
ミャンマー産	13%	4%	ND	ND	ND	35%	ND	ND
台湾産	tr	tr	ND	ND	ND	ND	ND	ND

ND：検出限界以下　　tr：検出確認

原材料となった可能性も考えられることから分析を行った。この原石には、Sr、Zrのピークが全く見られないため、糸魚川産などのSr、Zrを含有する原石と容易に区別できる。また、長崎県雪浦のヒスイ類似岩をヒスイの代替品として勾玉、大珠などの原材料に使用している可能性が考えられ、分析を行った。この岩石は比重が2.91と小さく、比重でもって他の産地のものと区別できる。また砒素（As）のピークが見られる個体が多いのも特徴である。

これら各原産地の原石は同じ産地の原石であっても、原石ごとに元素の含有量には異同がある。したがって、一つの原産地について多数の原石を分析し、各元素の含有量の変動の範囲を

求めて、その産地の原石の特徴としなければならない。

糸魚川産のヒスイは、白色系が多いが、緑色系の半透明の良質のもの、青色系、コバルト系、およびこれらの色が白地に縞となって入っているものなど様々である。分析した糸魚川産原石の比重を調べると、硬玉の3.2～3.4の範囲のものと、3.2に達しない軟玉に分類される原石もある。若桜産、大佐産の分析した原石には、半透明の緑色のものはないが、全体が淡青緑がかった乳白色のような原石、また大屋産は乳白色が多い。このうち大佐産、大屋産の原石では比重が3.20に達したものはなく、これらの原石は比重からは軟玉に分類される。しかし、ヒスイ輝石の含有量が少ない硬玉とも考えられる。長崎産のヒスイ原石は３個しか分析できなかったが良質である。このうち１個は濃い緑色で、他の２個は淡い緑色で、少しガラス質である。日高産ヒスイの原石は、肉眼観察では比較的糸魚川産のヒスイに似ている。ミャンマー産のヒスイ原石は、質、種類とも糸魚川産のヒスイ原石と同じものがみられ肉眼で両産地の原石を区別することは不可能と考えられる。分析した台湾産のヒスイは軟玉に属するもので、暗緑色のガラス質な原石である。これら各原産地の原石の分析結果から各産地を区別する判断基準を引き出し産地分析の指標とする。

ヒスイ原産地の判別基準

原石産地の判定を行なうときの判断基準を原石の分析データーから引き出すが、分析個数が少ないため、必ずしもその原産地の特徴を十分に反映したと言えない産地もある。表１に各原産地ごとの原石の比重と元素比量をまとめた。元素比量の数値は、その原産地の分析した原石の中での最小値と最大値の範囲を示し、判定基準(1)とした。ヒスイで比重が3.19未満の軽い原石は、硬玉ヒスイではない可能性があるが、糸魚川産の原石で比重が3.19未満のものも分析を行った。大佐産のヒスイは比重が3.17未満であった。したがって、遺物の比重が3.3以上を示す場合は判定基準(1)により大佐産のヒスイでないと言える。日高産、引佐産の両ヒスイではSr／Feの比の値が小さくて、糸魚川産と区別する判定基準(1)になる。表２の判定基準(2)にはCr、Mn、Rb、Y、Nb、Ba、La、Ceの各元素の蛍光X線ピークが観測できた個体数を％で示した表である。例えば遺物を分析してBaのピークが観測されなかったとき、その遺物は、若桜、大佐、長崎産のヒスイでないといえる。

図２はヒスイ原石のSr／Feの比の値とSr／Zrの比の値の分布を各原産地ごとにまとめて分布範囲を示したものである。●は糸魚川産のヒスイで、分布の範囲を実線で囲み、この枠内に遺物の測定点が入れば糸魚川産の原石である可能性が高いと判断する。□はミャンマー産のヒスイの分布で、その範囲を短い破線で囲む。糸魚川の実線の範囲とミャンマーの破線の範囲の大部分は重なり両者は区別できないが、ミャンマーと糸魚川が区別される部分がSr／Feの値

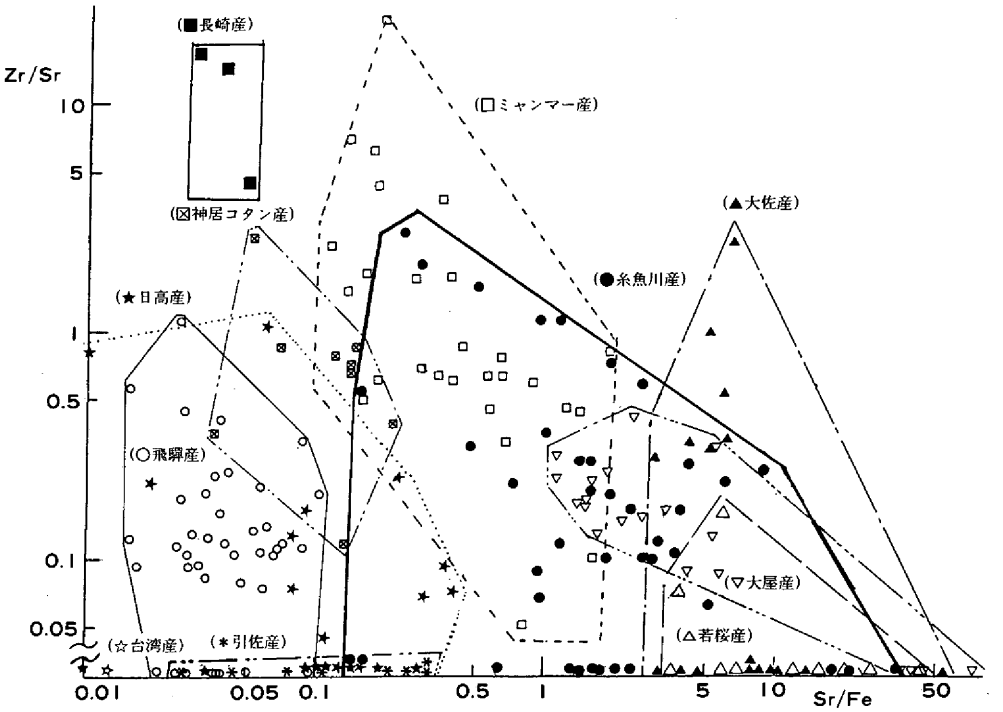


図２　ヒスイ原石の元素比値Zr/Sr対Sr/Feの分布および分布範囲

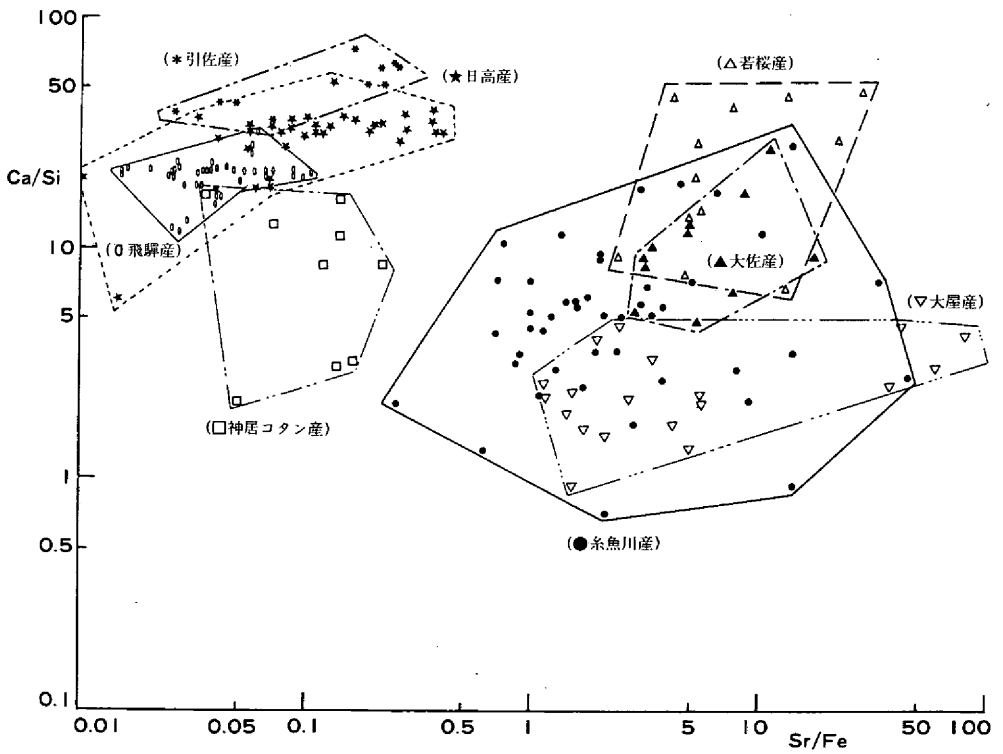


図３　ヒスイ原石の元素比値Ca/Si対Sr/Feの分布および分布範囲

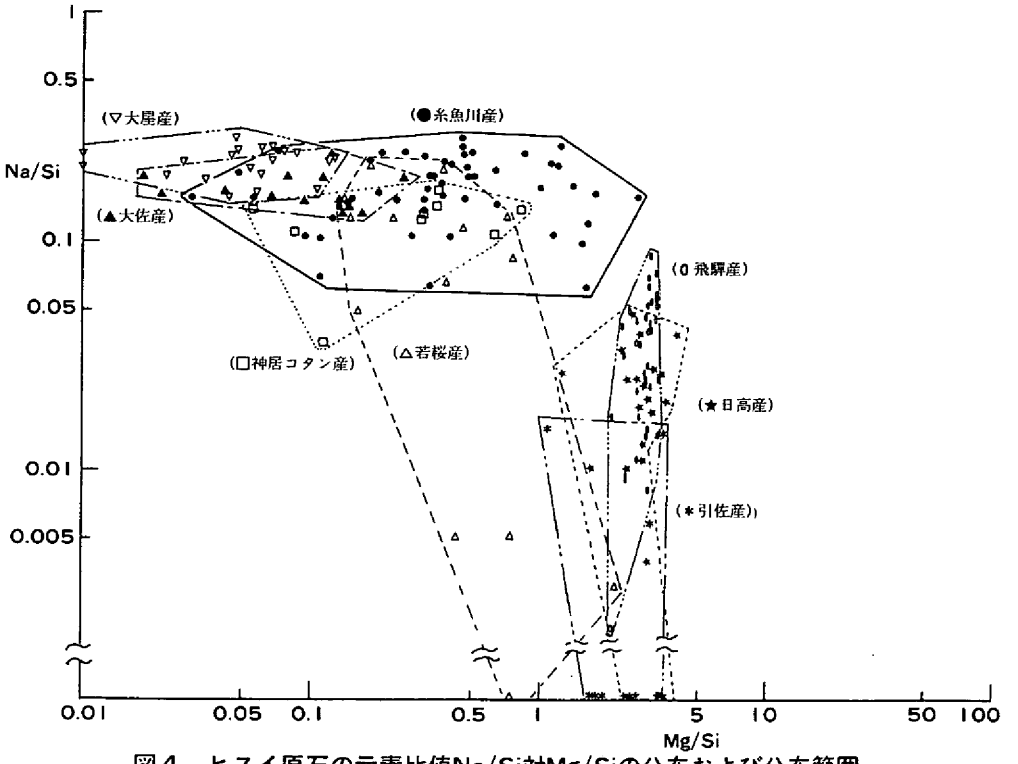


図4　ヒスイ原石の元素比値Na/Si対Mg/Siの分布および分布範囲

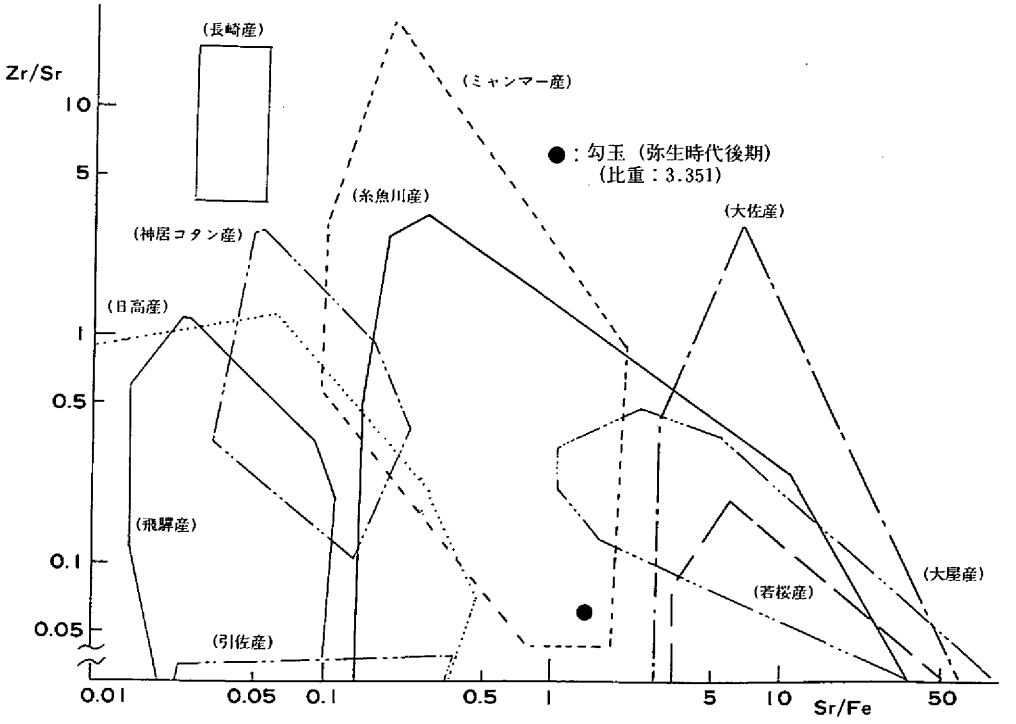


図5　百間川原尾島遺跡出土のヒスイ製勾玉のZr/Sr対Sr/Feの分布

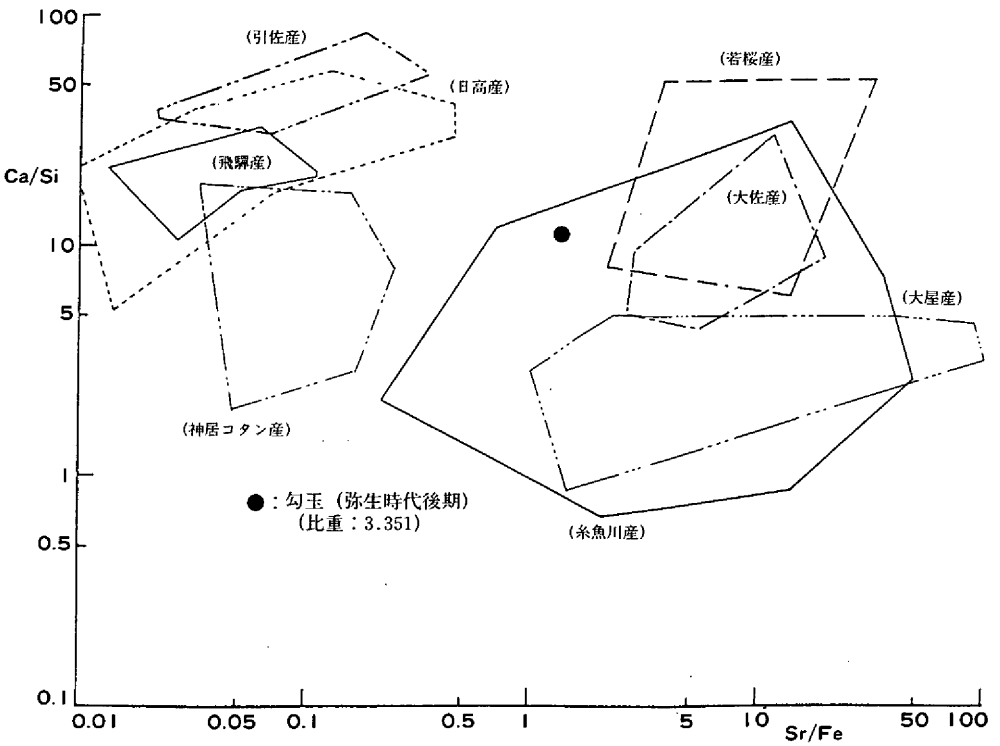


図６　百間川原尾島遺跡出土のヒスイ製勾玉のCa/Si対Sr/Feの分布

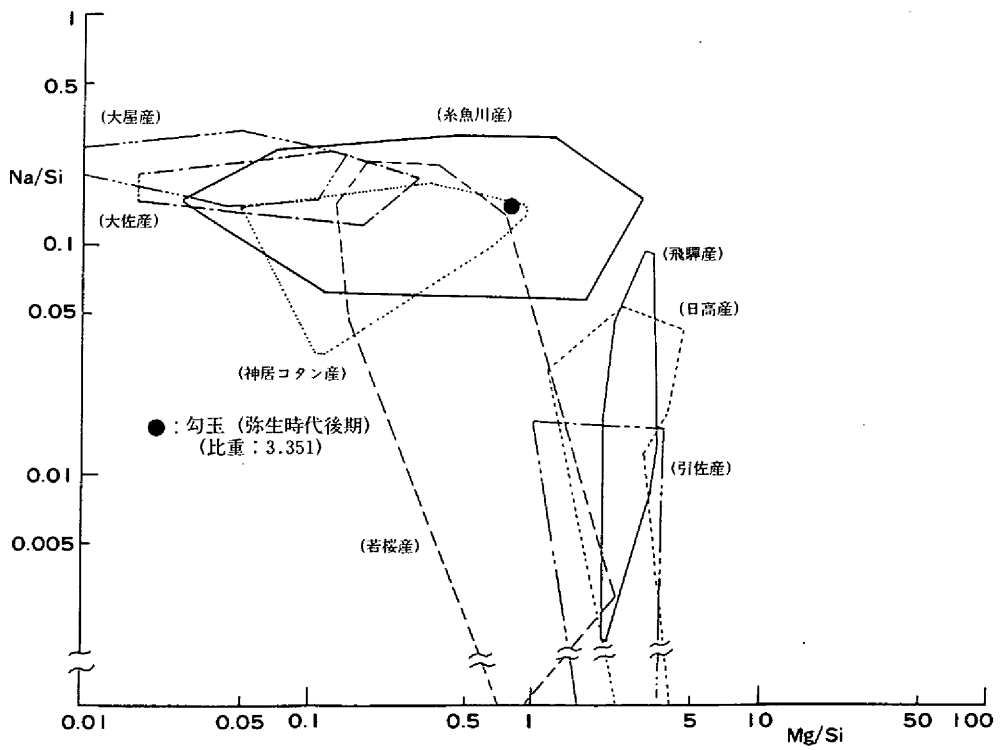


図７　百間川原尾島遺跡出土のヒスイ製勾玉のNa/Si対Mg/Siの分布

表３　百間川原尾島遺跡出土のヒスイ製勾玉の元素分析値

分析番号	元素分析値の比量 K／Ca	Ti／Ca	Sr／Fe	Zr／Sr	Ca／Si	Na／Si	Mg／Si	分析元素の有無 ○有、△微量、×無 Nb	Ba	La	Ce
30832	0.014	0.006	0.538	0.062	11.778	0.158	0.750	×	×	×	×
JG-1[a)]	1.320	0.271	0.354	0.739	2.412	0.029	0.090	加圧固化整形試料			

a）標準試料：Ando, A., Kurasawa, H., Ohmori, T.& Takeda, E (1974) 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG－1 granodiorite and JB－1 basalt. Geochemical Journal, Vol. 8 175－192.

表４　百間川原尾島遺跡出土のヒスイ製勾玉の原石産地推定結果
岡山市

分析番号	品名、遺物番号、層	遺物重量	遺物比重	時代時期	総合判定原石産地
30832	勾玉、９Ｃ区、包含層	2.235	3.351	弥生時代後期	糸魚川産

（横軸）2.5以上の範囲で見られる。この範囲の中に、遺物の測定点が入ればミャンマー産と考えるより、糸魚川産である可能性の方が高いと考えられる。▲は大佐産の、△は若桜産の、▽は大屋産のヒスイの分布を示している。

糸魚川と大佐、若桜、大屋のヒスイが重なる部分に遺物の測定点が入った場合、これら複数の原産地を考えなければならない。しかし、この遺物にBaの蛍光Ｘ線スペクトルのピークが見られなかった場合、表２の判定基準(2)に従えば糸魚川産または大屋産のヒスイであると判定でき、その遺物の比重が3.2以上あれば大屋産でなくて、糸魚川産と推定される。■は長崎産ヒスイの分布で、独立した分布の範囲を持っていて他の産地のヒスイと容易に区別できる。台湾産の軟玉はグラフの左下に外れる。★印の日高産および＊印の引佐産ヒスイの分布の一部分が、糸魚川産と重なり区別されない範囲がみられる。しかし、Ca／Si比とSr／Fe比を指標とすることにより（図３）、糸魚川産ヒスイは日高産および引佐産の両ヒスイと区別することができる。Na／Si比とMg／Si比を各原産地の原石について分布を示すことにより（図４）、遺物がどこの原産地の分布内に帰属するかにより、硬玉か軟玉かの判別の手段の一つになると考えられる。

百間川原尾島遺跡出土のヒスイ製勾玉の分析結果

この勾玉の比重は3.351（アルキメデス法）で、蛍光Ｘ線スペクトルにはNa元素が観測され硬玉の可能性を示唆している、比重も硬玉の範囲に入る、この勾玉の原石産地を明らかにするために、K／Ca、Ti／Ca、Sr／Fe、Zr／Sr、Ca／Si、Na／Si、Mg／Siなどの各比値を求め表３に示し、また各原産地の原石の元素比量の分布範囲と比較し図５、６、７に示した。これらの図

中で、Zr／Sr対Sr／Feの分布範囲では勾玉は糸魚川産、ミャンマー産の枠内に入り、Ca／Si対Sr／Feでは糸魚川産に、またNa／Si対Mg／Siでは糸魚川産と神居コタン産の枠内にそれぞれはいり、常に糸魚川産原石の組成に似ることから最も可能性のある産地は糸魚川産地であることが分かる。また、この硬玉の蛍光X線スペクトルはBa元素が観測されないために若桜、大佐の原石の可能性は低いと言える。以上ヒスイの判定基準に従えば糸魚川産ヒスイを使用した勾玉であると結論できる（表４）。ヒスイなど貴重な玉は権力の強い古代人が入手できると考えると、この玉の持ち主はかなり権力を持っていた可能性を考察しても産地分析の結果と矛盾しないであろう。

参考文献

1）茅原一也（1964）、長者が原遺跡産のヒスイ（翡翠）について（概報）。長者ケ原、新潟県糸魚川市教育委員会：63—73

2）藁科哲男・東村武信（1987）、ヒスイの産地分析。富山市考古資料館紀要６：１—18

3）藁科哲男・東村武信（1990）、奈良県内遺跡出土のヒスイ製玉類の産地分析。橿原考古学研究所紀要『考古学論攷』、14：95—109

4）Tetsuo Warashina（1992）、Alloction of Jasper Archeological Implements By Means of ESR and XRF. Journal of Archaeological Science 19：357—373

5）藁科哲男・東村武信（1983）、石器原材の産地分析。考古学と自然科学、16：59—89

6）番場猛夫（1967）、北海道日高産軟玉ヒスイ。調査研究報告会講演要旨録　№18：11—15

7）河野義礼（1939）、本邦における翡翠の新産出及び其化学的性質。岩石礦物鉱床学雑誌22：195—201

付載3　百間川原尾島遺跡9・10Z区出土ガラス滓

株式会社ニコン・相模原製作所
苅谷道郎

1．資料および実体顕微鏡監察結果

百間川原尾島遺跡（9・10－Z区　包含層）出土ガラス滓は灰色粒状あるいは粉状で実体顕微鏡観察によれば内部に多量の泡と未溶解物を含有する暗緑色のガラス部分とガラス化が進んでない焼結体部とがある。また砂粒が多量に付着している。

いずれも以前の百間川今谷遺跡出土の「ガラス滓」あるいは鹿田遺跡出土の「ガラス滓」と同類の資料である。

2．分析結果と組成の推定

資料をエネルギー分散型X線分析装置（フィリップスEDAX9100）で分析した。分析は木戸一博氏、安達伸夫氏（いずれも株式会社ニコン硝子製造部）に依頼した。分析結果を表1に示す。

本分析法ではガラス表面の約1μmまでの組成を半定量分析している。ガラスは不均質であり、本分析法では表面の微小部分を分析しているため、組成として多数点の分析値を示した。

3．考察

資料1の主成分の組成を、分析法は異なるが百間川今谷遺跡出土のガラス滓および鹿田遺跡出土のガラス滓[1]と比較し表2に示す

資料1は百間川今谷遺跡出土のガラス滓および鹿田遺跡出土のガラス滓に較べSiO_2含有量が少なく、Fe_2O_3が多い。資料1はNa_2Oが少ないが、これは資料が小粒ないし粉状であり、地中埋蔵中に水によってNa_2Oが溶出したためと考えられる。資料1はFe_2O_3含有量が最大22％に達し鉄滓の可能性もあるが、従来発表されている鉄滓の組成と比較すると、Fe_2O_3含有量が少なく、SiO_2含有量が多く、鉄滓と考えにくい。

これらの組成のガラス滓のうち鉄含有量の少ないものは強還元条件で熔解（製鉄の温度・酸素条件）されると、青色のガラスとなることが実験により判明した。

表１　百間川原尾島遺跡出土ガラス滓組成分析結果

資　料	百間川原尾島遺跡 a	b	c	d	e
組成(ｗｔ％)					
SiO_2	51	56	45	51	50
Na_2O	2.1	2.1	4.2	1.6	1.6
K_2O	1.5	2.2	0.6	1.5	1.6
MgO	2.9	3.1	5.6	2.5	2.2
CaO	1.8	1.4	5.1	1.5	1.6
Al_2O_3	22	23	11	25	23
TiO_2	0.8	0.6	0.4	0.8	0.9
Fe_2O_3	15	9.3	22	15	12
MnO	2.5	2.9	5.9	1.3	6.9
cl	—	—	—	—	—

表２　ガラス滓の主成分の比較

資　料	百間川原尾島遺跡	鹿田遺跡	百間川今谷遺跡
SiO_2	50.6±3.5	60.7±1.8	62.6±1.8
Na_2O	2.5±1.0	9.4±0.4	11.5±1.2
K_2O	1.5±0.5	2.0±0.6	1.3±0.3
MgO	3.3±1.2	5.7±1.3	4.9±1.1
CuO	2.3±1.4	3.6±1.0	2.6±0.5
Al_2O_3	20.8±5.0	9.7±1.7	9.5±2.0
Fe_2O_3	14.7±4.2	5.1±1.9	4.2±1.0

（単位：ｗｔ％，±の後は標準偏差）

参考

１）三浦定俊、苅谷道郎、岡山大学構内遺跡発掘報告第３冊　鹿田遺跡Ⅰ、ｐ463

付載４　百間川原尾島遺跡の竪穴住居15中央ピット内に遺存した赤色顔料物質の微量化学分析

武庫川女子大学薬学部
安田　博幸　金杉　直子

標記遺跡の10Ａ区からは、古墳時代初頭の方形の竪穴住居が検出された。この住居跡は、１辺が3.5m×4.5mで竪穴住居としては小型で、特筆すべき構造・遺物は認められなかったものの、住居中央に設けられた中央ピット内からは赤色顔料物質が認められた。

今回、この赤色顔料物質について、化学分析による鑑定を依頼されたので、筆者らの常法[1]とするろ紙クロマトグラフ法と検出試薬による微量化学分析を行ない、所見を得たので報告する。

試料の外観および分析用試料の採取

試料：10Ａ区住居15の中央穴より採取された土壌（全量0.4ｇ）。その中に混在する赤色顔料物質約３㎎を綱針を用いて注意深く削り取り分析用試料とする。

試料検液の作製

上記の分析用試料をガラス尖形管に移し、濃硝酸１滴と濃塩酸３滴を加え、加温して酸可溶性成分を溶解させたのち、適当量の蒸留水を加えて遠心分離機にかけ、酸不溶性成分から分離した上澄液を加熱濃縮して、ろ紙クロマトグラフ用の試料検液とする。

ろ紙クロマトグラフ法と検出試薬による呈色反応からの赤色顔料成分の確認

東洋ろ紙№51Ｂ（２㎝×40㎝）を使用し、ブタノール硝塩酸を展開溶媒として、試料検液と、対照の鉄イオン（Fe^{3+}）と水銀イオン（Hg^{2+}）の標準液を同条件下で展開した。

展開の終わったろ紙を風乾してから縦に二分し、その一方は、検出試薬として１％ジフェニルカルバジドンのエタノール溶液を噴霧してからアンモニア蒸気に曝し、もう一方には、検出試薬として0.05％ジチゾンのクロロホルム溶液を噴霧して、それらの際に、ろ紙上に発現するそれぞれの呈色スポットの位置（Rf値で表現する）と色調を検した。

上記試料検液、ならびに、対照イオンの標準液について得られたろ紙上のスポットのRf値と色調は、下記の表１、表２のとおりである。

(1)　ジフェニルカルバジド・アンモニアによる検出：（Hg^{2+} は紫色、Fe^{3+} は紫褐色のスポットとして検出される。）

表1　ジフェニルカルバジドによる呈色スポットのRf値と色調

試　　料	Rf　値　（　色　調　）
試　料　検　液	0.16（紫褐色）
Fe^{3+}　標　準　液	0.19（紫褐色）
Hg^{2+}　標　準　液	0.94（紫色）

(2)　ジチゾンによる検出：（Hg^{2+} は橙色スポットとして検出され、Fe^{3+}は反応陰性のため呈色せず。）

表2　ジチゾンによる呈色スポットのRf値と色調

試　　料	Rf　値　（　色　調　）
試　料　検　液	呈色スポット発現せず
Fe^{3+}　標　準　液	呈色スポット発現せず
Hg^{2+}　標　準　液	0.92（橙色）

判定

以上の結果のとおり、百間川原尾島遺跡における10A区竪穴住居15の中央穴の土壌中に混在した赤色顔料物質の分析用試料検液中からは、Fe^{3+} のみが検出され、Hg^{2+} は検出されなかった。したがって、その赤色顔料は、ベンガラ（酸化鉄、Fe_2O_3）系の赤色顔料のみであって、水銀朱（辰砂、HgS）の混在ないし遺存はなかったと判定する。

註

1）安田博幸：「古代赤色顔料と漆喰の材料科学」『斎藤忠編集　日本考古学論集1　考古学の基本的諸問題』吉川弘文館　pp. 389—407（1986）

安田博幸：「古代赤色顔料と漆喰の材料ならび技法の伝流に関する二、三の考察」『橿原考古学研究所論集』第7　吉川弘文館　pp. 449—471（1984）

付載5　百間川原尾島遺跡・沢田遺跡出土土器のプラント・オパール分析

古環境研究所

1．はじめに

本報告は、原尾島遺跡および沢田遺跡から出土した土器についてプラント・オパール分析を行い、古代稲作の可能性を検討したものである。

2．試料

試料は、沢田遺跡および原尾島遺跡から出土した計7点の土器である。

次表に試料の詳細を示す。

表1　分析試料一覧

試料番号	遺跡名	地　点	層　位　等	時期
No.1	沢　田	213-SS·TT	包含層	縄文後期
No.2	沢　田	213-SS·TT	包含層	縄文後期
No.3	原尾島	16～19－C·D	No.90溝下層（上部）	弥生前期
No.4	沢　田	207-0	包含層	縄文晩期
No.5	原尾島	10～15－C·D	溝34	弥生前期
No.6	沢　田	213-QQ	溝152	弥生中期
No.7	原尾島	9・10－A·B	土壙23	弥生後期

3．分析法

プラント・オパールの抽出と同定は、「プラント・オパール土器胎土分析法（藤原，1982）」をもとに、次の手順で行った。

(1)　土器試料（以下試料と略す）表面の研磨

(2)　超音波による試料の洗浄

(3)　試料の煮沸

(4)　試料の粉砕

(5)　試料の絶乾（105℃・24時間）

(6)　試料約1ｇを秤量、ガラスビーズ添加（直径約40μｍ，約0.02ｇ）

※電子分析天秤により1万分の1ｇの精度で秤量

(7)　超音波による分散（300W・42KHz・10分間）

(8)　沈底法による微粒子（20μm以下）除去、乾燥

(9)　封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成

(10)　検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

4．分析結果および所見

原尾島遺跡および沢田遺跡から出土した7点の土器についてプラント・オパール分析を行った。その結果、イネのプラント・オパールはいずれの試料からも検出されなかった（表2）。このため、さらにプレパラート数を増やして定性的に検鏡を行ったが、イネのプラント・オパールはまったく検出されなかった。

なお、試料No.6を除く試料では、試料に含まれるプラント・オパールの量が全体的に非常に低く、ヨシ属やタケ亜科などが若干見られただけである。これらのことから、分析に供した土器は、イネ科植物の生育には適さない環境下で堆積した土壌（粘土）を用いて製作された可能性が考えられる。これに対し沢田遺跡の試料No.6では、サヤヌカグサが多量に検出され、タケ亜科も比較的多く検出された。このことから試料No.6は他の土器とは異なる環境下で堆積した土壌が用いられた可能性が考えられる。

なおサヤヌカグサはイネ族に属しており、水田のアゼなどにも見られる野草である。サヤヌカグサの検出をもって稲作の可能性について言及することはできないが今後とも注目して検討する必要があろう。

表2　プラント・オパール土器胎土分析結果
原尾島・沢田遺跡出土土器（おもな分類群について）

試料名	イネ	サヤヌカグサ	ヨシ属	タケ亜科	ウシクサ族	キビ族
No.1	0	0	300	0	0	0
No.2	0	0	0	3,600	0	0
No.3	0	0	0	2,600	0	0
No.4	0	0	0	3,500	0	0
No.5	0	0	700	1,900	0	0
No.6	0	27,400	700	15,900	0	0
No.7	0	0	1,300	7,800	0	0

5．まとめ

以上のように、分析に供した土器からはイネのプラント・オパールはまったく検出されず、これらの試料（土器）からは稲作が行われていたことを示す分析的な証拠は得られなかった。

参考文献

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—．考古学と自然的科学，9:15—29.

藤原宏志（1979）プラント・オパール分析法の基礎的研究(4)—熊本地方における縄文土器胎土に含まれるプラント・オパールの検出．考古学と自然科学，14:55—65.

付載６　百間川原尾島遺跡出土種子の鑑定結果

東京大学総合研究資料館
松　谷　暁　子

1　井戸４　下層出土　　種子の長さ（㎜）　10.5　10.1　12.0　10.4
　ウリ類種子４点＋破片　　幅　（㎜）　7.0　7.5　7.5　8.1

2　井戸４　最下層出土　　破片の長さ（13㎜）
　モモの核の破片　１点　　幅　（16㎜）

3　竪穴住居７　覆土出土　　長さ　18.7㎜
　モモの核　１点　　幅　11.3㎜
　黒く焼けており、一部欠如している。　　厚さ　13.1㎜

4　竪穴住居１　床上層（炭層）出土　　長さ　20.5㎜
　モモの核　１点　　幅　17.0㎜
　黒く焼けており、ほぼ完全に残っている。　　厚さ　12.9㎜

種　子　一　覧　表

番号	地　区	遺構・土層名	時　期	種　名	備　考
1	三・丸６－C	近世土取り埋土		モモ	
2	三・丸７－C	竪穴住居12	古墳前期	モモ　５点	
3	三・丸８－C	竪穴住居１	弥生後期	モモ	鑑定４
4	三・丸８－C	包含層		モモ	
5	三・丸９・10－A・B	窪地１	弥生後期	モモ	
6	三・丸９・10－A・B	竪穴住居31	古墳後期	モモ	
7	三・丸９・10－A・B	竪穴住居31	古墳後期	モモ	
8	三・丸９・10－Z	井戸４	弥生後期	ウリ類	鑑定１
9	三・丸９・10－Z	井戸４	弥生後期	モモ	鑑定２
10	三・丸９・10－Z	Ｐ－77（旧）		モモ	
11	三・丸９・10－Z	井戸２		モモ	
12	三・丸９・10－Z	溝27		モモ	
13	三・丸９・10－Z	竪穴住居10	弥生後期	モモ	
14	三・丸９・10－Z	竪穴住居７		モモ	
15	三・丸９・10－Z	竪穴住居７	弥生後期	モモ	鑑定３
16	三・丸９・10－Z	土壙32		モモ	
17	三・丸９・10－Z	包含層		モモ	
18	三・丸９・10－Z	Ｐ－285（旧）	弥生後期	種子	
19	川29～32－C・D	近世土壙	近　世	モモ	
20	川29～32－C・D	近世土壙	近　世	種子	
21	川32～D	近世土壙	近　世	種子	

（一覧表作成は編集者）

付載7　百間川原尾島遺跡出土獣骨の鑑定結果

早稲田大学
金子浩昌

井戸、竪穴住居覆土などからウシ、イノシシの遺骸を検出している。ウシは乳臼歯をつける一才未満の個体のもので、井戸内にあったためか保存がよい。

1　遺　構　　井戸10
　動物名　　ウシ　md．L
　　（md_2～$M_{1,2}$）

2　遺　構　　竪穴住居31　覆土
　動物名　　イノシシ　I－（$^{+,+,-}M_3$）
　　mdがあったらしい。
　　ウシ　P_4　fr　L

獣　骨　一　覧　表

番号	地　区	遺構・土層名	時　期	種　名	備　考
1	三・丸8・9－B・C	P－64（旧）		小骨片	
2	三・丸8－C	P－259（旧）	弥生後期	骨細片	
3	三・丸8－C	溝51	古代	骨細片	
4	三・丸8－C	土壙56	中世	骨細片	
5	三・丸9・10－A・B	竪穴住居31	古墳後期	牛歯	鑑定2
6	三・丸9・10－A・B	竪穴住居31	古墳後期	牛歯	
7	三・丸9・10－A・B	竪穴住居31	古墳後期	牛歯	
8	三・丸9・10－A・B	竪穴住居31	古墳後期	牛歯	
9	三・丸9・10－A・B	P－29（旧）		骨片	
10	三・丸9・10－A・B	竪穴住居24	古墳中期	小骨片	
11	三・丸9・10－A・B	土器溜まり	弥生後期	小骨片	
12	三・丸9・10－A・B	井戸10	中世	牛歯	鑑定1
15	三・丸9－C・D	溝52	中世	骨小片	
16	三・丸9－C・D	溝52	中世	骨片多数	

（一覧表作成は編集者）

百間川原尾島遺跡出土遺物一覧（観察）表

1．土器観察表

2．石器・石製品一覧表

3．土製品一覧表

4．金属器一覧表

5．玉類一覧表

6．竪穴住居21臼玉一覧表

7．新旧遺構名称対照表

凡　　例

1．各一覧（観察）表の時代・時期は遺構の時期を示しており、必ずしもその遺物の時期を示すものではない。

2．出土地区欄の三・丸は三股ケ・丸田調査区の、川は川内調査区の略記である。

3．土製品、石製品、金属器、玉類一覧表の番号は整理番号であり、掲載番号が本報告書掲載図の番号にあたる。

4．遺溝名の欄は特に記さないかぎり新（報告書作成時）遺構名である。

5．石製品の型式は、石鏃についてのみ以下の分類を行なっている。

Ⅰ．平基式　Ⅱ．凹基式　Ⅲ．凸基Ⅰ式　Ⅳ．有茎式　Ⅴ．抉り入り式　Ⅵ．凸基Ⅱ式

6．土製品の型式は、土錘についてのみ以下の分類で行なっている。

A．ずん胴で穴が中央を貫通	Ⅰ	長80㎜以上、幅30㎜以上、若干不正形
	Ⅱ①	Ⅰよりも細目、長80㎜近い
	Ⅱ②	長70㎜程、幅30㎜未満、中形
	Ⅱ③	長70㎜未満、幅30㎜未満、小形
	Ⅲ	長60㎜未満、幅30～35㎜、長丸
	Ⅳ	長60㎜程、幅50㎜程
B．上下の口部分が細い中太の紡錘形	Ⅰ	中太で長い大形品
	Ⅱ	先細で長い
	Ⅲ	中太で短い
	Ⅳ	先細で中位の長さ
	Ⅴ	先細で短い

C．楕円球、長軸にそって溝がある

D．球形で溝と穴がある

E．両端に穴のある腕骨形

7．新旧遺構名称対照表の新名称は報告書作成時に付したもので、旧名称は発掘調査時のものである。

土器観察表

掲載番号	遺構・土層名	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	特徴・備考
1	中世斜面堆積	土師質	椀	13.9	4.4	5.0	内面ヘラミガキ。内底に重ね焼き痕跡。
2	中世斜面堆積	土師質	椀	—	7.4	—	外底は回転ヘラ切り。器台か。
3	中世斜面堆積	土師質	杯	13.4	7.4	2.7	底部外面に板目痕。
4	中世斜面堆積	瓦器	皿	7.8	5.7	1.6	内底に回転ヘラケズリ状の調整。
5	中世斜面堆積	須恵質	こね鉢	—	—	—	
6	弥生後期洪水砂層	弥生土器	甕	18.8	7.5	28.2	外面下部にスス付着。
7	弥生後期洪水砂層	弥生土器	鉢	10.5	4.0	5.0	
8	弥生後期洪水砂層	弥生土器	高杯	—	13.2	—	
9	弥生後期洪水砂層	弥生土器	甕	13.4	—	—	内面ナデ調整。
10	弥生後期洪水砂層	弥生土器	鉢	13.1	3.4	7.7	
11	微高地斜面堆積下層	弥生土器	壺	—	8.7	—	
12	微高地斜面堆積下層	弥生土器	壺	—	—	—	
13	微高地斜面堆積下層	縄文土器	深鉢	—	—	—	
14	溝3	縄文土器	浅鉢	—	—	—	
15	溝3	弥生土器	甕	—	—	—	外面にスス付着。口縁端に刻み目。
16	溝5	弥生土器	甕	21.9	—	—	やや摩滅。
17	竪穴住居1	弥生土器	長頸壺	16.7	—	—	
18	竪穴住居1	弥生土器	壺	14.9	—	—	
19	竪穴住居1	弥生土器	壺	7.2	—	—	
20	竪穴住居1	弥生土器	壺	9.0	4.4	13.7	外面に赤色顔料塗布。頸部に円孔あり。
21	竪穴住居1	弥生土器	甕	14.4	—	—	
22	竪穴住居1	弥生土器	甕	15.4	—	—	
23	竪穴住居1	弥生土器	甕	20.3	—	—	
24	竪穴住居1	弥生土器	高杯	13.4	—	—	
25	竪穴住居1	弥生土器	ミニチュア	5.0	—	—	
26	竪穴住居1	弥生土器	高杯	15.9	—	—	
27	竪穴住居1	弥生土器	脚付坩	8.0	10.1	11.5	脚部内面に布目状痕跡。
28	竪穴住居1	弥生土器	鉢	35.0	—	—	
29	竪穴住居2	弥生土器	壺	13.6	—	—	
30	竪穴住居2	弥生土器	甕	14.0	5.2	22.6	外面にスス付着。
31	竪穴住居2	弥生土器	高杯	30.7	—	—	杯部内底に黒斑あり。
32	竪穴住居2	弥生土器	高杯	17.7	12.4	13.7	
33	竪穴住居4	弥生土器	壺	16.8	—	—	
34	竪穴住居4	弥生土器	鉢	12.7	4.5	10.8	外面にスス付着。
35	竪穴住居4	弥生土器	甕	—	6.6	—	外面にスス付着。
36	竪穴住居4	弥生土器	脚付鉢	—	6.7	—	
37	竪穴住居4	弥生土器	高杯	—	7.4	—	脚部の円孔は上段4個、下段7個。
38	竪穴住居4	弥生土器	甕	—	5.3	—	外面にスス付着、底部に穿孔。
39	竪穴住居4	弥生土器	製塩土器	12.0	3.8	16.0	

掲載番号	遺構・土層名	種別	器種	法量 (cm) 口径	底径	器高	特徴・備考
40	竪穴住居 4	弥生土器	台付鉢	—	5.9	—	
41	竪穴住居 4	弥生土器	製塩土器	14.6	4.4	15.0	
42	竪穴住居 4	弥生土器	製塩土器	—	5.5	—	
43	竪穴住居 5	弥生土器	壺	16.9	—	—	口縁端部外面に 2 個一単位の円形浮文。
44	竪穴住居 5	弥生土器	壺	15.1	—	—	口縁端部外面に 4 個一単位の円形浮文。
45	竪穴住居 5	弥生土器	壺	14.0	—	—	
46	竪穴住居 5	弥生土器	壺	9.6	3.1	12.0	
47	竪穴住居 5	弥生土器	鉢	8.2	3.8	4.7	
48	竪穴住居 5	弥生土器	鉢	11.0	2.8	6.3	
49	竪穴住居 5	弥生土器	鉢	14.5	3.6	8.3	
50	竪穴住居 5	弥生土器	甕	17.1	7.7	28.2	底部外面はヘラミガキ。
51	竪穴住居 5	弥生土器	甕	14.1	—	—	口縁端部外面にヘラ描沈線 4 条めぐる。肩部に刺突が 4 個。
52	竪穴住居 5	弥生土器	高杯	10.4	—	—	
53	竪穴住居 5	弥生土器	高杯	14.8	—	—	水こし粘土。
54	竪穴住居 5	弥生土器	高杯	—	12.2	—	水こし粘土。
55	竪穴住居 5	弥生土器	高杯	13.3	—	—	水こし粘土。
56	竪穴住居 5	弥生土器	高杯	13.0	—	—	水こし粘土、外面横方向の細かいヘラミガキ。
57	竪穴住居 5 外周溝	弥生土器	甕	16.0	—	—	
58	竪穴住居 5 外周溝	弥生土器	甕	14.5	—	—	
59	竪穴住居 5 外周溝	弥生土器	高杯	18.3	—	—	杯底部内外面は横方向の細かいヘラミガキ、水こし粘土。
60	竪穴住居 6	弥生土器	甕	15.8	5.1	22.3	外面下半にスス残存。
61	竪穴住居 6	弥生土器	台付鉢	23.2	8.6	15.5	
62	竪穴住居 6	弥生土器	鉢	27.0	6.8	12.4	
63	竪穴住居 6	弥生土器	蓋	17.8	—	11.5	
64	竪穴住居 6	弥生土器	蓋	15.6	—	10.1	
65	竪穴住居 6	弥生土器	蓋	20.5	—	13.8	
66	竪穴住居 6	弥生土器	高杯	26.5	—	—	
67	竪穴住居 7	弥生土器	壺	—	—	—	
68	竪穴住居 7	弥生土器	壺	—	—	—	
69	竪穴住居 7	弥生土器	壺	18.9	—	—	器表の剥落が著しい。
70	竪穴住居 7	弥生土器	壺	—	9.0	—	器表の剥落が著しい。
71	竪穴住居 7	弥生土器	壺	—	6.9	—	半裁して容器に転用か。
72	竪穴住居 7	弥生土器	甕	14.5	—	—	
73	竪穴住居 7	弥生土器	甕	15.8	—	—	器表の剥落が著しい。
74	竪穴住居 7	弥生土器	甕	—	4.5	—	外面にスス付着。
75	竪穴住居 7	弥生土器	高杯	16.2	—	—	
76	竪穴住居 7	弥生土器	高杯	—	13.4	—	
77	竪穴住居 7	弥生土器	鉢	14.0	4.7	10.6	外面にスス付着。
78	竪穴住居 7	弥生土器	鉢	13.8	5.4	11.9	
79	竪穴住居 7	弥生土器	鉢	16.4	7.8	13.7	

掲載番号	遺構・土層名	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	特徴・備考
80	竪穴住居7	弥生土器	鉢	12.6	7.4	7.2	外面にスス付着。
81	竪穴住居7	弥生土器	鉢	15.4	4.0	9.0	外面にスス付着。
82	竪穴住居7	弥生土器	鉢	17.8	4.3	7.9	
83	竪穴住居7	弥生土器	手あぶり形	—	—	—	
84	竪穴住居7	弥生土器	鉢	8.8	3.6	7.5	
85	竪穴住居7	弥生土器	ミニチュア	—	2.2	—	
86	竪穴住居7	弥生土器	壺	—	—	—	
87	竪穴住居7	弥生土器	甕	—	—	—	
88	竪穴住居7	弥生土器	鉢	—	—	—	
89	竪穴住居7	弥生土器	甕	11.9	3.2	13.3	外面にスス付着。
90	竪穴住居7	弥生土器	脚付直口坩	9.2	—	—	
91	竪穴住居8	弥生土器	高杯	30.4	—	—	口縁部がやや湾曲している。
92	竪穴住居9	弥生土器	鉢	10.7	—	—	
93	竪穴住居9	弥生土器	鉢	7.1	3.8	5.3	
94	竪穴住居9	弥生土器	製塩土器	9.9	4.6	9.8	
95	建物5P3	弥生土器	甕	12.8	—	—	
96	建物14P3	弥生土器	高杯	—	—	—	口径約19cm、水こし粘土。
97	建物14P1	弥生土器	高杯	15.2	—	—	内外面とも器表の剝離が著しく調整不明。
98	建物15P2	弥生土器	甕	14.1	4.2	23.6	
99	建物15P2	弥生土器	甕	15.2	—	—	
100	建物15P2	弥生土器	甕	16.0	4.6	25.9	底部外面ハケメ。
101	建物15P2	弥生土器	甕	14.2	—	—	
102	建物15P2	弥生土器	鉢	14.5	6.2	9.5	
103	建物15P2	弥生土器	高杯	—	—	—	
104	井戸1	弥生土器	壺	13.6	6.8	26.8	口縁端わずかに欠損。
105	井戸1	弥生土器	壺	12.6	6.8	25.9	
106	井戸1	弥生土器	壺	9.1	6.3	18.1	
107	井戸1	弥生土器	壺	12.2	—	—	
108	井戸1	弥生土器	壺	19.9	6.4	17.0	外面に紐かけ痕跡か。頸部に円孔あり。
109	井戸2	弥生土器	甕	16.1	—	—	
110	井戸2	弥生土器	壺	16.4	6.8	31.4	胴部外面下半にスス付着。
111	井戸2	弥生土器	壺	14.5	5.4	27.3	
112	井戸2	弥生土器	壺	13.9	5.3	24.7	
113	井戸2	弥生土器	壺	12.3	5.2	25.5	
114	井戸2	弥生土器	台付鉢	10	—	—	丹塗り。暗褐色で角閃石粒を多く含む。
115	井戸2	弥生土器	鉢	9.3	5.7	7.4	
116	井戸2	弥生土器	壺	11.9	6.3	21.5	
117	井戸2	弥生土器	台付鉢	19.3	10.0	16.5	
118	井戸2	弥生土器	鉢	—	10.2	—	底面ヘラケズリ。
119	井戸3	弥生土器	長頸壺	22.0	10.6	49.3	胴部下半を中心に籠目が残る。

掲載番号	遺構・土層名	種別	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	特徴・備考
120	井戸3	弥生土器	長頸壺	14.9	—	—	二次燃焼を受けているか。
121	井戸3	弥生土器	壺	11.5	6.7	22.0	
122	井戸3	弥生土器	壺	13.7	7.8	30.3	円盤状の剝離が認められる。
123	井戸3	弥生土器	壺	7.2	4.3	12.8	主にススによる籠目が見られる。
124	井戸3	弥生土器	壺	—	—	—	
125	井戸3	弥生土器	壺	14.7	—	—	籠目あり。焼成は良好。
126	井戸3	弥生土器	壺	15.6	—	—	円盤状の剝離が見られる。破損後の被熱により破面赤変。
127	井戸3	弥生土器	甕	—	—	—	円盤状の剝離が認められる。
128	井戸3	弥生土器	甕	14.3	—	—	二次焼成を受けているか。
129	井戸3	弥生土器	甕	10.0	3.8	13.1	口縁部にタタキ。
130	井戸3	弥生土器	高杯	12.9	14.9	11.1	
131	井戸3	弥生土器	高杯	27.3	15.6	18.0	
132	井戸3	弥生土器	高杯	—	17.2	—	
133	井戸3	弥生土器	壺	17.8	—	—	円盤状の剝離顕著。焼成破損の可能性がある。
134	井戸3	弥生土器	鉢	14.1	5.0	8.4	外面中ほどに竹管文。
135	井戸3	弥生土器	手づくね	5.0	3.3	3.8	
136	井戸3	弥生土器	壺	13.0	5.3	17.9	
137	井戸3	弥生土器	壺	14.1	5.6	25.9	肩部に竹管文7を配する。
138	井戸4	弥生土器	壺	15.1	6.7	28.2	
139	井戸4	弥生土器	壺	20.8	—	—	
140	井戸4	弥生土器	壺	—	7.2	—	外底面はヘラケズリ。
141	井戸4	弥生土器	小壺	—	2.9	—	
142	井戸4	弥生土器	小壺	5.5	2.8	7.7	
143	井戸4	弥生土器	壺	14.8	6.2	27.0	口縁部や内面調整は壺374によく似る。
144	井戸4	弥生土器	壺	—	7.0	—	
145	井戸4	弥生土器	甕	12.7	—	—	モミ痕が認められる。外面にス付着。
146	井戸4	弥生土器	甕	13.3	—	—	外面にス付着。破損後火を受けているか。
147	井戸4	弥生土器	甕	—	4.2	—	
148	井戸4	弥生土器	高杯	21.9	—	—	
149	井戸4	弥生土器	鉢	33.8	—	—	
150	井戸5	弥生土器	壺	17.4	—	—	
151	井戸5	弥生土器	蓋	11.5	—	5.5	高杯脚部を転用して製作している。
152	井戸5	弥生土器	高杯	12.9	—	—	
153	井戸5	弥生土器	壺	18.4	—	—	内面に炭化物、外面下半にス付着。
154	井戸5	弥生土器	壺	—	3.2	—	外面に若干ス付着。
155	井戸5	弥生土器	甕	16.6	—	—	外面タタキ、内面ナデ。外面肩部に竹管文あり。
156	井戸5	弥生土器	甕	18.0	4.1	32.0	胎土に金雲母が目だつ。
157	井戸5	弥生土器	甕	15.4	5.4	26.1	内面下部に炭、外面に厚くス付着。
158	井戸5	弥生土器	甕	14.2	5.0	25.0	外面にス付着。
159	井戸5	弥生土器	甕	15.0	—	—	内面下半・外面にス付着。

掲載番号	遺構・土層名	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	特徴・備考
160	井戸5	弥生土器	甕	14.1	—	—	外面にスス付着。
161	井戸5	弥生土器	甕	14.3	—	—	外面にスス付着。
162	井戸5	弥生土器	甕	13.9	3.5	22.4	内面下半・外面にスス付着。
163	井戸5	弥生土器	鉢	16.2	—	—	廃棄時に破面にスス付着。
164	井戸5	弥生土器	鉢	10.4	3.0	5.5	
165	井戸5	弥生土器	鉢	11.9	2.8	7.2	
166	井戸5	弥生土器	鉢	13.7	6.0	7.5	外表の剝落・赤変が著しい。
167	井戸5	弥生土器	鉢	15.6	4.2	8.9	
168	井戸5	弥生土器	鉢	19.5	—	—	
169	井戸6	弥生土器	鉢	21.0	—	—	
170	井戸6	弥生土器	甕	15.6	—	—	外面にスス付着。
171	井戸6	弥生土器	甕	15.2	6.9	27.1	外面にスス、内面下部に炭化物付着。
172	井戸6	弥生土器	甕	—	5.5	—	外面にスス、内面下部に炭化物付着。円形押圧内に指紋あり。
173	井戸6	弥生土器	甕	—	5.0	—	胎土、色調は他の土器と同様。ススの付着は認められない。
174	井戸6	弥生土器	甕	—	3.8	—	胎土は細かく、褐色を呈する。ススの付着は認められない。
175	井戸6	弥生土器	高杯	15.7	13.8	11.1	
176	井戸6	弥生土器	鉢	10.2	3.3	6.4	
177	土壙1	弥生土器	長頸壺	23.1	8.5	43.1	内面を中心に器面剝落。鱗状剝離も顕著。籠目一部遺存。
178	土壙1	弥生土器	長頸壺	18.7	7.3	32.9	焼成裂、鱗状剝離。籠目あり。
179	土壙1	弥生土器	長頸壺	23.6	—	—	鱗状剝離。口縁受け部に円孔2・円形圧痕3。
180	土壙1	弥生土器	長頸壺	20.0	—	—	焼成裂。
181	土壙1	弥生土器	長頸壺	19.8	—	—	焼成裂あり。
182	土壙1	弥生土器	長頸壺	—	—	—	焼成裂あり。
183	土壙1	弥生土器	長頸壺	—	—	—	焼成比較的良い。
184	土壙1	弥生土器	長頸壺	20.0	—	—	焼成軟質。焼成裂。
185	土壙1	弥生土器	長頸壺	—	—	—	肩部内面のヘラケズリ右方向。
186	土壙1	弥生土器	壺	14.1	8.3	27.9	焼成裂、鱗状剝離。
187	土壙1	弥生土器	壺	17.5	10.0	35.5	鱗状剝離、籠目あり。
188	土壙1	弥生土器	壺	23.5	—	—	鱗状剝離、焼成裂。籠目。絵画。
189	土壙1	弥生土器	壺	16.8	—	—	焼成裂。籠目明瞭。内面部分的に剝離。
190	土壙1	弥生土器	台付き鉢	17.2	—	—	鱗状剝離。
191	土壙1	弥生土器	壺	17.6	—	—	焼成良好。
192	土壙1	弥生土器	甕	16.0	—	—	焼成裂あり。内面ケズリの上にミガキが及ぶ。
193	土壙1	弥生土器	甕	23.6	—	—	頸部内面剝脱。
194	土壙1	弥生土器	甕	20.2	9.2	—	焼成は良好。破面は黒色を呈する。
195	土壙2	弥生土器	壺	18.8	—	—	
196	土壙2	弥生土器	長頸壺	18.0	7.1	31.7	鱗状剝離顕著。籠目あり。
197	土壙2	弥生土器	壺	21.3	9.3	—	焼成裂、鱗状剝離顕著。
198	土壙2	弥生土器	鉢	25.5	8.4	12.3	砂粒が少ない。
199	土壙3	弥生土器	高杯	21.8	—	—	

掲載番号	遺構・土層名	種別	器種	法量 (cm) 口径	底径	器高	特徴・備考
200	土壙 3	弥生土器	高杯	17.8	—	—	
201	土壙 5	弥生土器	高杯	12.6	—	—	
202	土壙 5	弥生土器	長頸壺	19.0	6.0	32.9	
203	土壙10	弥生土器	甕	13.4	5.9	25.6	外面にスス付着。
204	土壙10	弥生土器	甕	14.7	—	—	外面にスス付着。
205	土壙10	弥生土器	甕	14.0	5.7	19.7	外面にスス付着。
206	土壙10	弥生土器	甕	13.7	4.7	23.3	外面下部にのみスス付着。
207	土壙11	弥生土器	甕	13.1	—	—	
208	土壙11	弥生土器	高杯	21.4	—	—	
209	土壙11	弥生土器	高杯	—	14.6	—	
210	土壙11	弥生土器	鉢	—	—	—	内面炭化物付着。
211	土壙12	弥生土器	甕	14.0	—	—	胴外面スス付着。
212	土壙12	弥生土器	甕	15.3	—	—	
213	土壙13	弥生土器	壺	21.0	6.7	33.5	口縁部内面に円形竹管による刺突が2個あり。
214	土壙13	弥生土器	壺	—	6.5	—	外面丹塗り。
215	土壙13	弥生土器	長頸壺	22.5	7.0	37.4	口縁部内面に円形竹管文2個あり。
216	土壙13	弥生土器	壺	15.8	7.0	30.9	頸部下端の突帯上およびその上下に竹管文を施す。
217	土壙13	弥生土器	甕	12.9	—	—	
218	土壙13	弥生土器	甕	14.4	—	—	
219	土壙13	弥生土器	甕	14.4	—	—	
220	土壙13	弥生土器	甕	14.9	6.5	24.7	
221	土壙13	弥生土器	甕	16.4	6.1	26.0	胴外面スス付着。
222	土壙13	弥生土器	甕	15.0	6.5	29.6	胴下半スス付着。
223	土壙13	弥生土器	甕	13.4	4.0	22.3	胴外面スス付着。
224	土壙13	弥生土器	甕	14.8	5.7	24.6	
225	土壙13	弥生土器	鉢	15.2	7.5	15.8	
226	土壙13	弥生土器	小壺	—	—	—	
227	土壙13	弥生土器	鉢	24.3	8.3	10.4	
228	土壙13	弥生土器	高杯	18.0	10.7	11.5	水こし粘土、透かし孔は不明。
229	土壙13	弥生土器	高杯	16.6	12.7	9.8	水こし粘土
230	土壙13	弥生土器	台付鉢	10.7	3.9	6.9	内面ハケメ後ヘラミガキ、外面ハケメ。
231	土壙14	弥生土器	甕	13.9	—	—	
232	土壙14	弥生土器	甕	—	6.0	—	内面に炭化物付着。
233	土壙15	弥生土器	鉢	—	—	—	
234	土壙16	弥生土器	鉢	41.0	—	—	
235	土壙16	弥生土器	器台	23.8	—	—	236の上部である可能性が強い。
236	土壙16	弥生土器	器台	—	20.8	—	円形の透かし孔2段。
237	土壙16	弥生土器	鉢	10.0	5.6	8.2	口縁部下端に円孔1対。
238	土壙16	弥生土器	甕	15.3	6.8	25.3	外面スス付着。
239	土壙16	弥生土器	甕	14.8	5.7	29.3	胴部外面スス付着。

掲載番号	遺構・土層名	種別	器種	法量（cm）			特徴・備考
				口径	底径	器高	
240	土壙16	弥生土器	高杯	—	15.8	—	
241	土壙16	弥生土器	高杯	28.4	14.3	20.7	杯部内外面にクモの巣状のヘラミガキ。
242	土壙16	弥生土器	高杯	27.2	15.3	18.3	
243	土壙17	弥生土器	壺	13.2	—	—	
244	土壙17	弥生土器	高杯	—	13.2	—	
245	土壙17	弥生土器	製塩土器	—	4.0	—	
246	土壙18	弥生土器	甕	12.5	—	—	
247	土壙18	弥生土器	台付鉢	—	6.0	—	
248	土壙18	弥生土器	製塩土器	—	4.8	—	
249	土壙19	弥生土器	鉢	46.6	14.0	18.8	外面に籠目痕跡が見られる。
250	土壙21	弥生土器	甕	14.6	—	—	胴外面に若干スス付着。
251	土壙23	弥生土器	壺	13.9	—	—	
252	土壙23	弥生土器	甕	13.1	4.4	18.5	胴外面わずかにスス付着。
253	土壙23	弥生土器	甕	12.1	4.5	17.0	
254	土壙23	弥生土器	甕	—	—	—	口径約23cm
255	土壙23	弥生土器	甕	—	—	—	胴部外面斜ハケメ、内面ヘラケズリ。
256	土壙23	弥生土器	甕	13.4	—	—	
257	土壙23	弥生土器	甕	14.4	—	—	
258	土壙23	弥生土器	甕	15.4	—	—	
259	土壙23	弥生土器	甕	14.6	—	—	外面スス付着。
260	土壙23	弥生土器	鉢	18.4	5.6	10.0	
261	土壙23	弥生土器	高杯	—	—	—	脚部に円形透かし孔4方向。
262	土壙23	弥生土器	高杯	21.0	—	—	全体に赤色変化している。
263	土壙23	弥生土器	甕	13.8	—	—	肩部以下スス付着。
264	土壙24	弥生土器	甕	13.4	—	—	胴部最大径以下にスス付着。
265	土壙24	弥生土器	甕	12.8	—	—	
266	土壙24	弥生土器	壺	2.9	3.1	—	胴部外面ヘラケズリ。
267	土壙24	弥生土器	甕	14.8	—	—	
268	土壙24	弥生土器	甕	16.0	—	—	
269	土壙24	弥生土器	高杯	8.8	—	—	内外面にヘラミガキ。
270	土壙25	弥生土器	長頸壺	17.5	—	—	頸部に円形刺突文4個あり。
271	土壙25	弥生土器	壺	14.2	7.6	33.9	
272	土壙25	弥生土器	甕	20.0	—	—	
273	土壙25	弥生土器	長頸壺	19.3	6.6	34.2	
274	土壙25	弥生土器	壺	12.0	—	—	頸部に沈線4条めぐる。
275	土壙25	弥生土器	直口壺	—	—	—	
276	土壙25	弥生土器	壺	12.2	—	—	
277	土壙25	弥生土器	甕	14.4	—	—	胴部外面スス付着。
278	土壙25	弥生土器	甕	13.8	6.0	24.4	肩部以下スス付着。
279	土壙25	弥生土器	甕	12.8	—	—	器高約230㎜。胴部外面スス付着。

掲載番号	遺構・土層名	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	特徴・備考
280	土壙25	弥生土器	甕	13.6	5.6	23.8	肩部以下スス付着、底部穿孔。
281	土壙25	弥生土器	甕	13.6	—	—	口縁部下端と胴部外面にスス付着。
282	土壙25	弥生土器	甕	14.8	—	—	口縁部下端と胴部外面にスス付着。
283	土壙25	弥生土器	甕	10.3	5.6	15.9	
284	土壙25	弥生土器	甕	13.4	—	—	口縁端と胴部外面にスス付着。
285	土壙25	弥生土器	甕	12.3	—	—	
286	土壙25	弥生土器	甕	12.8	—	—	肩部以下にスス付着。
287	土壙25	弥生土器	甕	—	7.0	—	胴部外面一部にスス付着。
288	土壙25	弥生土器	鉢	41.3	—	—	
289	土壙25	弥生土器	鉢	—	—	—	口径約18.5cm。
290	土壙25	弥生土器	台付鉢	10.2	3.7	5.2	
291	土壙25	弥生土器	鉢	12.7	6.7	10.4	縦方向の円形刺突文は4方向で、最下は横に3個並ぶ。
292	土壙25	弥生土器	鉢	10.4	4.6	8.5	
293	土壙25	弥生土器	鉢	13.4	5.3	13.0	口縁下に1対の穿孔あり。
294	土壙25	弥生土器	台付鉢	—	6.0	—	器表の剝離が著しい。
295	土壙25	弥生土器	台付鉢	—	8.8	—	外面ヘラミガキ、脚部内面調整不明。
296	土壙25	弥生土器	器台	13.4	15.6	13.2	4列一単位の竹管文が口縁端外面に8か所、脚部に4か所。
297	土壙25	弥生土器	高杯	—	9.0	—	脚端には6本一単位の篦描き文がある。
298	土壙25	弥生土器	高杯	—	15.0	—	
299	土壙25	弥生土器	高杯	24.6	14.6	23.5	杯部内外面はクモの巣状のヘラミガキ、縦方向の円形竹管文。
300	土壙26	弥生土器	甕	17.8	—	—	破損後スス付着。
301	土壙26	弥生土器	鉢	13.4	—	—	
302	土壙27	弥生土器	甕	14.8	5.8	24.0	外面にスス付着。
303	土壙27	弥生土器	高杯	19.6	—	—	
304	土壙27	弥生土器	鉢	11.4	—	—	
305	土壙27	弥生土器	製塩土器	—	4.1	—	
306	土壙28	弥生土器	甕	17.5	—	—	外面にスス付着。
307	土壙28	弥生土器	甕	—	—	—	外面にスス付着。
308	土壙28	弥生土器	高杯	12.4	13.0	11.1	
309	土壙31	弥生土器	壺	16.0	7.4	35.0	
310	土壙31	弥生土器	甕	16.2	—	—	二次的に火を受けている可能性あり。
311	土壙31	弥生土器	甕	16.0	—	—	外面にスス付着。
312	土壙31	弥生土器	甕	13.5	5.1	24.9	外面にスス付着。
313	土壙31	弥生土器	甕	14.3	4.8	25.9	外面にスス付着。
314	土壙31	弥生土器	甕	17.7	6.3	15.8	外面にスス付着。
315	土壙31	弥生土器	甕	13.4	5.3	20.4	外面にスス付着。
316	土壙31	弥生土器	高杯	19.8	12.0	10.4	
317	土壙31	弥生土器	高杯	19.8	11.6	10.3	
318	土壙31	弥生土器	高杯	11.6	9.4	7.6	
319	土壙31	弥生土器	高杯	20.3	11.1	10.7	

掲載番号	遺構・土層名	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	特徴・備考
320	土壙31	弥生土器	高杯	17.3	12.0	10.1	口縁端部に黒斑。
321	土壙31	弥生土器	脚付直口坩	—	8.3	—	脚内面に鋸歯文2。
322	土壙31	弥生土器	高杯	19.0	—	—	
323	土壙31	弥生土器	高杯	—	11.1	—	
324	土壙31	弥生土器	高杯	23.5	12.9	10.3	杯内面の一部と脚端に黒斑。
325	土壙31	弥生土器	小高杯	—	5.5	—	全器面黒色をなす。
326	土壙31	弥生土器	高杯	18.7	—	—	口縁端に小黒斑。
327	土壙31	弥生土器	高杯	19.3	—	—	
328	土壙31	弥生土器	高杯	28.3	—	—	口縁端に小黒斑。
329	土壙31	弥生土器	高杯	—	14.8	—	
330	土壙31	弥生土器	脚付直口坩	6.6	11.3	10.4	
331	土壙31	弥生土器	鉢	16.1	4.1	7.6	
332	土壙31	弥生土器	鉢	15.1	5.1	6.4	高杯と同様の胎土。
333	土壙31	弥生土器	鉢	16.6	4.9	6.0	
334	土壙31	弥生土器	鉢	12.0	4.4	6.4	壺と同様の胎土。
335	土壙31	弥生土器	鉢	17.1	4.7	7.3	壺と同様の胎土。
336	土壙31	弥生土器	台付鉢	18.0	10.3	18.8	
337	土壙31	弥生土器	鉢	40.9	—	—	
338	土壙31	弥生土器	器台	31.4	30.0	—	
339	土壙32	弥生土器	甕	12.2	4.9	—	外面にスス付着。
340	土壙32	弥生土器	甕	13.5	5.5	—	外面にスス付着。
341	土壙32	弥生土器	甕	13.5	5.5	—	外面にスス付着。
342	土壙32	弥生土器	鉢	16.4	5.6	11.6	
343	土壙37	弥生土器	長頸壺	25.8	—	—	
344	土壙37	弥生土器	壺	20.7	—	—	
345	土壙38	弥生土器	甕	15.0	5.6	25.3	胴部外面下半にスス付着。
346	土壙39	弥生土器	甕	16.0	—	—	
347	土壙39	弥生土器	高杯	16.4	10.3	8.6	脚部の透かし孔は3方向。
348	土壙39	弥生土器	甕	16.5	—	—	
349	土壙39	弥生土器	甕	11.1	—	—	
350	土壙39	弥生土器	鉢	—	—	—	口径約14cm。
351	土壙39	弥生土器	甕	12.6	—	—	
352	土壙39	弥生土器	甕	—	4.6	—	外面にスス付着。
353	土壙40	弥生土器	甕	—	—	—	
354	土壙40	弥生土器	高杯	16.7	—	—	
355	土壙41	弥生土器	壺	14.9	—	—	
356	土壙41	弥生土器	甕	14.8	—	—	
357	土壙41	弥生土器	甕	16.6	—	—	口縁端部刻目あり、胴部外面タタキ、内面ナデ。
358	土壙41	弥生土器	鉢	14.6	—	—	
359	土壙41	弥生土器	高杯	—	10.2	—	脚部透かし孔3方向。

掲載番号	遺構・土層名	種別	器種	法量（cm）			特徴・備考
				口径	底径	器高	
360	土壙41	弥生土器	装飾高杯？	—	—	—	
361	土壙41	弥生土器	鉢	36.0	—	—	
362	土壙43	弥生土器	壺	13.4	6.7	27.4	
363	土壙43	弥生土器	甕	15.2	5.1	23.0	外面にスス付着。
364	土壙43	弥生土器	甕	7.5	3.7	13.0	
365	土壙43	弥生土器	鉢	—	3.9	—	
366	土壙43	弥生土器	高杯	—	14.0	—	破損後ほぼ全面にススが付着している。
367	土壙43	弥生土器	甕	15.4	—	—	
368	土壙43	弥生土器	鉢	—	—	—	円盤状剝離が見られる。
369	土壙44	弥生土器	壺	11.3	5.6	22.0	
370	土壙46	弥生土器	長頸壺	24.4	7.3	38.6	
371	土壙46	弥生土器	長頸壺	19.8	—	—	
372	土壙46	弥生土器	壺	15.6	9.4	—	破損後火を受け、ススが吸着している。
373	土壙46	弥生土器	壺	15.6	9.4	—	破損後火を受け、ススが吸着している。
374	土壙46	弥生土器	壺	12.3	6.3	18.9	
375	土壙46	弥生土器	甕	12.4	—	—	外面に浅いヘラ描きのX字記号がある。
376	土壙46	弥生土器	壺	—	—	—	肩部に籠目。
377	土壙46	弥生土器	甕	23.3	10.0	42.9	
378	土壙46	弥生土器	甕	12.8	4.6	18.3	
379	土壙46	弥生土器	脚付直口坩	7.0	13.7	16.0	
380	土壙46	弥生土器	高杯	27.5	—	—	破損後二次的にススを吸着しており変色著しい。
381	土壙47	弥生土器	甕	13.2	—	—	肩部にX印あり。
382	土壙49	弥生土器	甕	16.6	—	—	外面にスス付着。
383	土壙49	弥生土器	壺	—	4.7	—	
384	土壙53	弥生土器	甕	14.7	5	24.1	破損後火を受け変色している。
385	土壙53	弥生土器	甕	15.1	5.1	21.9	破損後火を受け変色している。
386	土壙53	弥生土器	甕	8.4	3.5	8.3	
387	土壙53	弥生土器	鉢	13.3	5.6	6.8	
388	土壙53	弥生土器	高杯	18.7	—	—	
389	土壙53	弥生土器	高杯	—	12.6	—	
390	土壙53	弥生土器	鉢	33.2	—	—	
391	土壙55	弥生土器	壺	—	10.7	—	彩文。外面下半はケズリののちヘラミガキ。
392	土壙55	弥生土器	壺	—	—	—	
393	土壙55	弥生土器	台付鉢	12.1	6.7	11.6	
394	土壙55	弥生土器	甕	11.9	5.2	22.1	外面下半にスス付着。
395	土壙墓1	弥生土器	甕	17.0	—	—	
396	土壙墓1	弥生土器	高杯	—	—	—	
397	土器棺墓1	弥生土器	鉢	—	11.5	—	内面に赤色顔料付着。
398	土器棺墓1	弥生土器	壺	14.8	9.2	32.0	
399	土器棺墓2	弥生土器	壺	—	9.9	—	

掲載番号	遺構・土層名	種別	器種	法量（cm）			特徴・備考
				口径	底径	器高	
400	土器棺墓2	弥生土器	壺	—	8.9	—	
401	土器棺墓3	弥生土器	壺	—	16.0	—	
402	土器棺墓4	弥生土器	鉢	39.3	—	—	棺蓋に使用。
403	土器棺墓4	弥生土器	甕	22.2	11.1	42.7	
404	土器棺墓5	弥生土器	鉢	42.2	—	17.0	
405	土器棺墓6	弥生土器	台付鉢	15.7	11.0	21.8	口縁部から胴部上半を斜めに打ち欠き棺に転用。
406	土器棺墓6	弥生土器	甕	16.5	7.2	35.1	
407	土器棺墓6	弥生土器	長頸壺	—	—	—	
408	土器棺墓7	弥生土器	壺	13.5	8.2	35.2	口縁部から胴部上半を斜めに打ち欠き棺に転用。
409	土器棺墓8	弥生土器	鉢	40.0	10.0	20.8	棺の蓋に転用。
410	土器棺墓8	弥生土器	甕	17.7	8.4	35.7	棺に転用。
411	土器棺墓9	弥生土器	鉢	27.2	7.2	15.5	棺の蓋に転用。
412	土器棺墓9	弥生土器	甕	—	8.2	—	口縁部を打ち欠き棺に転用。
413	溝7	弥生土器	壺	11.8	—	—	肩部に記号文（平行線）。
414	溝20	弥生土器	壺	12.3	—	—	頸部下端に円形竹管文がめぐる。
415	溝20	弥生土器	壺	12.5	—	—	
416	溝20	弥生土器	甕	14.6	—	—	胴部外面ハケメ。
417	溝20	弥生土器	壺	—	4.7	—	頸部下端には円形竹管文、胴肩部には刺突文あり。
418	溝20	弥生土器	台付鉢	12.2	5.9	10.0	
419	土器溜り	弥生土器	台付鉢	10.7	6.0	7.8	
420	土器溜り	弥生土器	台付鉢	13.0	6.0	9.2	
421	土器溜り	弥生土器	手捏ね	3.9	—	4.0	
422	土器溜り	弥生土器	台付鉢	16.0	10.8	19.3	
423	土器溜り	弥生土器	台付壺	—	11.0	—	
424	土器溜り	弥生土器	鉢	20.0	8.7	12.8	
425	土器溜り	弥生土器	鉢	17.9	7.2	15.2	
426	土器溜り	弥生土器	長頸壺	14.4	—	—	推定器高34.5cm。胎土に角閃石、雲母を含み、色調はチョコレート色。
427	土器溜り	弥生土器	壺	—	—	—	口縁端部外面に2個一単位の円形浮文がめぐる。
428	土器溜り	弥生土器	壺	—	—	—	口縁下端と外端面に円形浮文、内外面には櫛描波状文がめぐる。
429	土器溜り	弥生土器	高杯	13.9	—	—	
430	土器溜り	弥生土器	壺	—	—	—	口縁端部外面に波状文を施し、その上に円形浮文を張り付ける。
431	土器溜り	弥生土器	壺	34.1	—	—	棒状浮文には丹が塗られている。
432	窪地1	弥生土器	壺	13.0	8.1	25.8	
433	窪地1	弥生土器	壺	10.6	—	—	
434	窪地1	弥生土器	壺	25.0	—	—	
435	窪地1	弥生土器	甕	11.0	—	—	口縁部と胴部外面にスス付着。
436	窪地1	弥生土器	鉢	19.6	—	—	
437	窪地1	弥生土器	壺	20.3	—	—	
438	窪地1	弥生土器	鉢	13.0	6.2	11.6	口縁部に穿孔あり（一対か）
439	窪地1	弥生土器	鉢	15.5	5.4	12.4	

掲載番号	遺構・土層名	種別	器種	法量（cm）口径	底径	器高	特徴・備考
440	包含層	縄文土器	深鉢	—	—	—	
441	包含層	縄文土器	深鉢	—	—	—	
442	包含層	弥生土器	壺	—	—	—	
443	包含層	弥生土器	手あぶり	—	—	—	
444	（旧）土器溜りC	弥生土器	甕	15.9	—	—	讃岐からの搬入土器。
445	（旧）土器溜りC	弥生土器	甕	14.8	5.0	23.5	外面にスス付着。讃岐からの搬入土器。
446	（旧）土器溜りC	弥生土器	甕	16.4	—	—	外面にスス付着。
447	包含層	弥生土器	壺	—	5.2	—	胴部に突帯がめぐる。
448	包含層	弥生土器	壺	22.7	—	—	内外面に櫛描き波状文。
449	包含層	弥生土器	壺	11.7	7.7	3.2	
450	（旧）P153	弥生土器	把手付甕	13.2	14.0	34.5	把手は2方にあり。
451	（旧）溝1	弥生土器	壺	5.8	2.7	9.4	
452	（旧）溝1	弥生土器	壺	5.1	3.1	10.3	
453	（旧）P184	弥生土器	器台	9.2	8.0	7.0	
454	（旧）溝4	弥生土器	壺	—	—	—	
455	（旧）P418	弥生土器	台付甕	14.6	10.6	20.3	
456	（旧）建物8	弥生土器	甕	13.7	—	—	
457	（旧）溝4	弥生土器	甕	13.7	—	—	
458	（旧）溝4	弥生土器	高杯	—	15.8	—	
459	包含層	弥生土器	脚付直口坩	8.2	—	—	水こし粘土。
460	包含層	弥生土器	鉢	14.5	4.8	8.6	水こし粘土。
461	包含層	弥生土器	椀	12.8	5.7	6.0	
462	竪穴住居10	土師器	甕	15.0	—	26.2	外面にスス付着。
463	竪穴住居12	土師器	壺	—	—	—	口縁部が剥脱し、擬口縁をなす。
464	竪穴住居12	土師器	甕	15.8	—	—	
465	竪穴住居12	土師器	甕	—	—	—	
466	竪穴住居12	土師器	高杯	—	—	—	
467	竪穴住居12	土師器	高杯	—	13.0		
468	竪穴住居12	土師器	壺	11.8	—	—	二次的に火を受けているか。
469	竪穴住居12	土師器	鉢	10.5	5.3	7.9	
470	竪穴住居12	土師器	鉢	14.8	—	—	河内からの搬入土器か。
471	竪穴住居12	土師器	鉢	15.8	2.7	5.6	底部にタタキが認められる。
472	竪穴住居12	土師器	脚付坩	—	—	—	
473	竪穴住居12	土師器	手づくね	4.6	—	4.8	外面に赤色顔料塗布。
474	竪穴住居13	土師器	壺	11.4	—	—	
475	竪穴住居13	土師器	高杯	20.6	—	—	
476	竪穴住居13	土師器	鉢	—	4.9	—	外面は粗いハケ調整。
477	竪穴住居13	土師器	鉢	12.9	7.3	8.9	
478	竪穴住居13	土師器	鉢	16.8	—、	—	
479	竪穴住居13	土師器	鉢	13.1	—	7.0	

掲載番号	遺構・土層名	種別	器種	法量（cm）			特徴・備考
				口径	底径	器高	
480	竪穴住居14	土師器	甕	—	—	—	
481	竪穴住居14	土師器	甕	14.7	3.0	23.5	胴部外面下半部スス付着。
482	竪穴住居14	土師器	甕	11.9	—	—	
483	竪穴住居14	土師器	高杯	19.5	—	—	調整不明。
484	竪穴住居14	土師器	高杯	21.3	—	—	調整不明。
485	竪穴住居14	土師器	高杯	—	13.3	—	
486	竪穴住居14	土師器	甕	15.4	—	—	口縁部と胴部外面にスス付着。
487	竪穴住居14	土師器	手あぶり	—	—	20.8	
488	竪穴住居14	弥生土器	鉢	14.8	—	—	水こし粘土
489	竪穴住居14	土師器	鉢	10.3	—	7.6	
490	竪穴住居14	土師器	鉢	9.2	—	8.2	
491	竪穴住居14	土師器	鉢	13.8	—	7.1	
492	竪穴住居14	土師器	鉢	14.0	—	6.7	
493	竪穴住居14	土師器	鉢	9.7	—	3.4	
494	竪穴住居14	土師器	製塩土器	—	4.8	—	
495	竪穴住居15	土師器	椀	12.9	3.2	7.7	
496	竪穴住居16	土師器	甕	13.5	—	—	外面にスス付着。
497	竪穴住居16	土師器	高杯	20.5	—	—	
498	竪穴住居16	土師器	鉢	13.3	—	6.3	
499	竪穴住居16	土師器	鉢	10.9	2.0	6.4	
500	竪穴住居16	土師器	鉢	10.9	3.2	5.7	
501	竪穴住居19	土師器	壺	10.1	—	15.5	外面下部にスス付着。
502	竪穴住居19	土師器	壺	8.5	—	13.1	
503	竪穴住居19	土師器	坩	9.2	—	11.3	
504	竪穴住居19	土師器	坩	7.6	—	6.7	
505	竪穴住居19	土師器	甕	16.6	—	—	
506	竪穴住居19	土師器	手づくね	5.6	—	3.3	
507	竪穴住居19	土師器	甕	12.4	5.1	17.5	外面片側にスス付着。
508	竪穴住居19	土師器	高杯	15.2	—	—	
509	竪穴住居19	土師器	高杯	15.9	—	—	
510	竪穴住居19	土師器	高杯	15.9	—	—	
511	竪穴住居19	土師器	高杯	15.9	—	—	
512	竪穴住居19	土師器	高杯	15.3	10.4	12.9	
513	竪穴住居19	土師器	高杯	20.2	—	—	
514	竪穴住居19	土師器	高杯	19.5	—	—	
515	竪穴住居19	土師器	高杯	17.3	11.8	13.3	
516	竪穴住居19	土師器	高杯	15.8	11.0	12.2	
517	竪穴住居19	土師器	高杯	—	10.7	—	
518	竪穴住居19	土師器	高杯	—	19.2	—	
519	竪穴住居19	土師器	甑	25.1	14.5	22.3	

掲載番号	遺構・土層名	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	特徴・備考
520	竪穴住居20	須恵器	壺	16.0	—	—	
521	竪穴住居20	須恵器	杯蓋	—	—	—	
522	竪穴住居20	土師器	高杯	15.6	—	—	
523	竪穴住居21	須恵器	杯蓋	11.5	—	4.2	ロクロ左回り。
524	竪穴住居21	須恵器	杯蓋	12.4	—	5.2	ロクロ右回り。
525	竪穴住居21	須恵器	杯身	10.7	—	5.4	ロクロ左回り。
526	竪穴住居21	須恵器	杯蓋	11.4	—	6.1	ロクロ左回り。
527	竪穴住居21	須恵器	杯蓋	12.2	—	5.4	ロクロ左回り。
528	竪穴住居21	須恵器	高杯	15.8	—	—	
529	竪穴住居21	須恵器	椀	7.3	—	—	
530	竪穴住居21	土師器	坩	6.1	—	6.3	
531	竪穴住居21	土師器	甕	11.9	—	—	
532	竪穴住居21	土師器	鉢	13.7	—	—	
533	竪穴住居21	土師器	甕	10.5	—	13.4	
534	竪穴住居21	土師器	高杯	16.6	—	—	
535	竪穴住居21	土師器	甑	—	—	—	
536	竪穴住居21	土師器	甕	25.6	—	—	
537	竪穴住居21	土師器	甕	21.1	—	—	
538	竪穴住居21	土師器	鉢	25.8	—	—	
539	竪穴住居22	土師器	甕	14.6	—	—	
540	竪穴住居22	土師器	甕	13.8	—	—	
541	竪穴住居22	土師器	甕	—	—	—	胴部内面ナデアゲ。
542	竪穴住居22	須恵器	杯蓋	—	—	—	
543	竪穴住居22	土師器	高杯	13.5	—	—	
544	竪穴住居22	土師器	高杯	13.9	10.8	12.9	
545	竪穴住居22	土師器	高杯	23.0	—	—	
546	竪穴住居22	土師器	高杯	—	14.2	—	
547	竪穴住居22	土師器	高杯	—	11.2	—	水こし粘土。
548	竪穴住居23	土師器	甕	15.4	—	—	胴部内面ナデアゲ。
549	竪穴住居23	土師器	甕	12.6	—	—	
550	竪穴住居23	土師器	甕	14.4	—	—	
551	竪穴住居23	土師器	鉢	11.0	—	—	
552	竪穴住居23	須恵器	杯蓋	—	—	—	
553	竪穴住居24	土師器	甕	14.0	—	—	胴部内面ナデアゲ、口縁部以下スス付着。
554	竪穴住居24	土師器	甕	13.0	—	—	肩部以下スス付着。
555	竪穴住居24	土師器	甕	11.4	—	—	胴部内面ナデアゲ。
556	竪穴住居24	土師器	甕	13.8	—	—	
557	竪穴住居24	土師器	甕	15.7	—	—	胴部内面ナデアゲ、外面スス付着。
558	竪穴住居24	土師器	甕	18.6	—	—	
559	竪穴住居24	土師器	甕	17.4	—	—	胴外面は荒いハケメ、内面はナデアゲ。

掲載番号	遺構・土層名	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	特徴・備考
560	竪穴住居24	土師器	高杯	15.0	—	—	器表荒れ、調整不明。
561	竪穴住居24	土師器	高杯	16.0	—	—	
562	竪穴住居24	土師器	甑	22.8	—	—	把手は剝離している。内面ナデアゲ。
563	竪穴住居24	須恵器	杯身	11.1	—	5.3	口縁端部上面はわずかに凹む。
564	竪穴住居25	須恵器	杯蓋	14.7	—	—	
565	竪穴住居25	須恵器	杯身	11.2	—	4.5	
566	竪穴住居25	須恵器	高杯	—	8.4	—	
567	竪穴住居25	土師器	製塩土器	8.8	—	—	外面タタキ。
568	竪穴住居25	須恵器	甕	—	—	—	
569	竪穴住居26	須恵器	高杯	—	—	—	
570	竪穴住居26	土師器	甕	—	—	—	外面にスス付着。
571	竪穴住居27	須恵器	杯蓋	13.5	—	4.2	ロクロ右回り
572	竪穴住居27	須恵器	高杯	—	—	—	
573	竪穴住居27	土師器	甕	20.8	—	—	外面スス付着。
574	竪穴住居27	土師器	鉢	—	—	—	外面スス付着。
575	竪穴住居27	土師器	椀	10.6	—	7.7	器表の剝落が著しい。
576	竪穴住居27	土師器	製塩土器	15.5	—	14.2	口縁部外面にタタキ。
577	竪穴住居30	須恵器	杯蓋	14.1	—	4.3	
578	竪穴住居30	須恵器	杯身	12.6	—	4.0	
579	竪穴住居30	須恵器	短頸壺	8.7	—	7.5	
580	竪穴住居30	土師器	羽釜形土器	21.0	—	—	外面下半にスス付着。
581	竪穴住居31	土師器	甕	14.3	—	16.3	
582	竪穴住居31	土師器	甕	17.4	—	—	胴内面はナデアゲ。
583	竪穴住居31	土師器	高杯	15.2	—	—	内外面にヘラミガキ。
584	竪穴住居31	土師器	製塩土器	—	—	—	外面に太いタタキ目あり。
585	竪穴住居31	土師器	把手付椀	13.8	—	—	
586	竪穴住居31	須恵器	杯蓋	—	—	—	
587	竪穴住居31	須恵器	杯蓋	—	—	—	口径約13.5cm。
588	竪穴住居31	須恵器	杯	11.8	—	—	外面自然釉付着。
589	竪穴住居31	須恵器	杯蓋	12.4	—	4.3	天井部は右方向へのヘラケズリ。
590	竪穴住居31	須恵器	杯	11.4	—	4.2	底部は左方向へのヘラケズリ。
591	竪穴住居32	須恵器	杯蓋	11.9	—	3.9	天井部はヘラ切り未調整。
592	竪穴住居32	須恵器	杯身	—	—	—	
593	建物36	須恵器	杯蓋	—	12.9	—	
594	建物36	須恵器	高杯	—	8.8	—	
595	建物43	須恵器	杯蓋	13.8	—	4.9	ヘラ切りの後部分的にヘラケズリ。
596	建物43	須恵器	杯身	13.4	—	4.3	
597	建物46	須恵器	杯身	13.1	—	—	
598	建物46	須恵器	鉢	—	—	—	
599	井戸7	土師器	壺	17.1	—	—	

掲載番号	遺構・土層名	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	特徴・備考
600	井戸7	土師器	壺	9.8	—	—	丹塗り。
601	井戸7	土師器	壺	15.1	3.0	31.4	
602	井戸7	土師器	壺	15.0	6.6	25.3	
603	井戸7	土師器	壺	20.6	—	—	タタキの後粗いハケメ。
604	井戸7	土師器	壺	—	6.8	—	
605	井戸7	土師器	壺	16.6	—	—	
606	井戸7	土師器	壺	15.3	—	—	
607	井戸7	土師器	壺	15.8	—	—	
608	井戸7	土師器	大形甕	21.6	—	—	
609	井戸7	土師器	大形甕	29.3	8.5	39.8	外面スス付着。
610	井戸7	土師器	壺	18.5	—	—	胴部外面下半・口縁端にスス付着。タタキあり。
611	井戸7	土師器	大形甕	23.9	—	—	肩部に刺突4。外面スス付着。
612	井戸7	土師器	大形甕	26.6	7.0	37.8	外面スス付着。
613	井戸7	土師器	大形甕	25.2	—	—	外面スス付着。
614	井戸7	土師器	甕	15.9	—	—	
615	井戸7	土師器	甕	13.2	—	—	外面下端スス付着。
616	井戸7	土師器	甕	13.9	2.5	24.4	肩部に刺突1。
617	井戸7	土師器	甕	14.2	—	—	肩部に刺突1。
618	井戸7	土師器	甕	19.4	—	—	肩部に刺突3。
619	井戸7	土師器	甕	14.7	—	23.7	胴下半にタタキ。
620	井戸7	土師器	甕	14.4	3.3	23.0	肩部に刺突2。
621	井戸7	土師器	甕	12.95	4.0	20.1	肩部に刺突2。
622	井戸7	土師器	甕	13.4	4.75	20.5	肩部に刺突2。
623	井戸7	土師器	甕	13.2	3.5	19.8	底部焼成後穿孔、肩部に刺突4。
624	井戸7	土師器	甕	12.7	4.1	19.2	外面スス付着。
625	井戸7	土師器	甕	12.3	—	—	外面煮こぼれ痕あり。
626	井戸7	土師器	甕	13.0	3.9	18.3	外面スス付着。
627	井戸7	土師器	甕	13.25	—	18.95	肩部に刺突2以上、外面下半スス付着。
628	井戸7	土師器	甕	12.5	3.1	19.0	胴部外面にタタキ痕が残る。肩部に刺突3。
629	井戸7	土師器	甕	17.3	—	—	外面タタキの後タテハケ。
630	井戸7	土師器	甕	14.5	—	—	
631	井戸7	土師器	甕	—	—	—	外面タタキ。
632	井戸7	土師器	甕	11.6	—	—	ススの付着はほとんど見られない。
633	井戸7	土師器	鉢	15.0	—	7.0	
634	井戸7	土師器	鉢	20.0	—	—	内外面ナデ。
635	井戸7	土師器	器台	9.8	13.0	10.0	
636	井戸7	土師器	器台	9.5	12.7	9.8	
637	井戸7	土師器	高杯	21.5	14.7	14.6	丹塗り。明褐色。
638	井戸7	土師器	高杯	21.0	—	—	丹塗り。
639	井戸7	土師器	高杯	17.0	—	—	淡褐色。

掲載番号	遺構・土層名	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	特徴・備考
640	井戸7	土師器	高杯	11.9	13.9	12.85	砂粒を多く含む。暗赤褐色。
641	井戸7	土師器	高杯	—	12.8	—	
642	井戸7	土師器	甕	14.4	3.3	22.9	内面下半に飯？の焦げ付き顕著。
643	井戸7	土師器	甕	14.4	4.5	24.2	胴部にスス厚く付着。
644	井戸7	土師器	甕	13.0	3.2	21.8	外面にスス付着。
645	井戸7	土師器	甕	13.4	—	20.6	肩部刺突4。外面剝落。
646	井戸8	土師器	甕	15.6	4.1	26.9	外面にスス付着。内面下部に炭化物付着。
647	井戸8	土師器	甕	15.2	4.7	24.9	外面にスス付着。
648	井戸8	土師器	甕	14.2	4.5	24.2	外面下半にスス付着。
649	井戸8	土師器	甕	15.2	—	25.1	外面にスス付着。内面下部に炭化物付着。
650	井戸8	土師器	甕	15.3	—	25.5	外面にスス付着。内面下部に炭化物付着。胴部下半に穿孔。
651	井戸8	土師器	甕	14.1	3.4	24.4	外面にスス付着。内面下部に炭化物付着。
652	井戸8	土師器	甕	12.1	—	—	外面下半にスス付着。
653	井戸8	土師器	甕	13.0	—	—	
654	井戸8	土師器	壺	13.6	—	—	
655	井戸8	土師器	鉢	11.9	4.4	8.2	口縁部の一部にスス付着。
656	井戸8	土師器	鉢	11.9	3.4	7.2	
657	井戸8	土師器	甕	14.1	—	—	外面にスス付着。内面下部に炭化物付着。
658	井戸8	土師器	高杯	21.0	—	—	内外面丹塗り。
659	井戸8	土師器	高杯	—	13.3	—	
660	井戸8	土師器	鉢	13.6	3.2	6.5	
661	井戸8	土師器	製塩土器	—	4.4	—	外面に粗いタタキ。
662	溝35	須恵器	杯身	12.0	—	3.9	ロクロ右回り。
663	溝35	須恵器	杯身	12.6	—	3.9	ロクロ右回り。
664	溝35	須恵器	高杯	—	9.2	—	ロクロ右回り。
665	溝35	須恵器	高杯	—	11.2	—	
666	溝35	須恵器	提瓶	5.6	—	—	ロクロ右回り。
667	溝36	須恵器	壺	15.9	—	—	
668	溝35	土師器	高杯	18.5	11.7	11.5	黒斑なし。
669	溝35	土師器	鉢	—	—	—	
670	溝38	須恵器	杯蓋	14.0	—	3.8	
671	溝38	須恵器	杯蓋	13.3	—	3.8	
672	溝38	須恵器	杯蓋	14.4	—	4.9	
673	溝38	須恵器	杯蓋	12.7	—	4.8	
674	溝38	須恵器	蓋	11.4	—	5.4	
675	溝38	須恵器	壺	8.5	—	12.6	
676	溝38	須恵器	杯身	12.5	—	3.7	
677	溝38	須恵器	杯身	13.3	—	4.6	
678	溝38	須恵器	杯身	12.1	—	5.3	
679	溝38	須恵器	高杯	13.7	—	—	

掲載番号	遺構・土層名	種別	器種	法量（cm）			特徴・備考
				口径	底径	器高	
680	溝38	須恵器	高杯	—	9.2	—	
681	溝38	須恵器	高杯	13.2	—	—	脚部剝離。
682	溝38	須恵器	杯身	15.7	—	4.5	
683	溝38	須恵器	高杯蓋	14.8	—	5.0	
684	溝38	須恵器	高杯	13.7	14.1	18.7	
685	溝38	須恵器	壺	13.6	—	18.2	焼成やや不良。
686	溝38	須恵器	甕	16.4	—	29.5	
687	溝38	須恵器	提瓶	11.9	—	33.1	外面上部に自然釉。完形。
688	溝38	須恵器	提瓶	7.6	—	21.3	ほぼ完形。
689	溝38	須恵器	はそう	—	—	—	
690	溝38	須恵器	甕	20.3	—	—	自然釉が薄くかかる。
691	溝38	須恵器	はそう	—	—	—	
692	溝38	須恵器	はそう	—	—	—	
693	溝38	須恵器	甕	28.7	—	—	肩部に灰白色の自然釉がかかる。
694	溝38	土師器	椀	12.9	5.0	6.2	
695	溝38	土師器	椀	11.5	—	—	
696	溝38	土師器	高杯	17.0	10.7	10.8	
697	溝38	土師器	甕	19.6	—	—	
698	溝38	土師器	甑	—	—	—	
699	溝38	土師器	鍋	37.2	17.8	—	外底にスス付着。
700	溝39	土師器	甕	—	—	—	
701	溝39	須恵器	壺	—	—	—	
702	溝42	土師器	甕	15.2	—	—	
703	溝42	土師器	高杯	18.3	—	—	水こし粘土。
704	溝42	土師器	甕	—	—	—	
705	溝51	須恵器	杯蓋	13.5	—	5.1	
706	溝51	須恵器	はそう	—	—	—	
707	包含層	須恵器	器台	—	—	—	
708	（旧）P258	須恵器	杯身	12.0	—	3.6	
709	（旧）土器溜りB	須恵器	特殊偏壺	—	—	13.6	
710	（旧）土器溜りB	須恵器	杯蓋	—	—	—	
711	（旧）土器溜りB	須恵器	杯身	14.1	—	4.1	
712	（旧）P33	須恵器	坩	7.8	4.2	6.9	
713	（旧）溝1	陶質土器	甕	—	—	—	外面に縄席文あり。
714	包含層	須恵器	提瓶	—	—	—	
715	建物54P1	瓦器	椀	—	5.0	—	内面に暗文あり。
716	建物55P2	土師器	椀	—	—	—	口径約14.0cm
717	建物55P2	土師器	皿	9.2	7.0	1.6	
718	井戸9	土師質	椀	—	—	—	
719	井戸9	土師質	椀	—	—	—	

掲載番号	遺構・土層名	種別	器種	法量（cm）			特徴・備考
				口径	底径	器高	
720	井戸9	土師質	椀	16.7	6.9	5.8	
721	井戸9	土師質	椀	16.4	7.4	5.3	内黒土器。
722	井戸9	土師質	椀	—	5.2	—	内黒土器か。
723	井戸9	土師質	椀	—	7.6	—	内黒土器。
724	井戸9	土師質	椀	—	7.8	—	内底に黒斑。
725	井戸9	土師質	杯	15.4	9.0	4.3	
726	井戸9	土師質	杯	—	9.0	—	内外底に黒斑。
727	井戸9	土師質	杯	—	9.4	—	
728	井戸9	土師質	皿	9.8	5.6	2.1	内底に黒斑。
729	井戸9	土師質	皿	10.7	5.7	1.8	
730	井戸9	土師質	皿	11.0	7.3	1.5	
731	井戸9	土師質	皿	10.0	7.8	0.9	
732	井戸9	土師質	皿	9.0	7.1	1.2	
733	井戸9	土師質	杯	9.5	7.0	2.2	口縁の一部にスス付着。
734	井戸9	土師質	杯	9.3	7.6	1.9	内底に小黒斑。
735	井戸9	土師質	皿	9.2	—	1.6	口縁端部に黒斑。
736	井戸9	土師質	皿	9.3	8.5	1.5	
737	井戸9	土師質	皿	8.8	—	1.8	ほぼ全面黒色。
738	井戸9	土師質	皿	9.0	5.2	1.6	内面暗灰色を呈する。
739	井戸9	土師質	皿	9.6	—	1.5	
740	井戸9	土師質	皿	9.3	6.3	0.8	内外面に黒斑あり。
741	井戸9	備前焼	椀	—	—	—	
742	井戸9	土師質	鍋	—	—	—	
743	井戸9	土師質	竈	—	—	—	
744	井戸10	土師質	椀	—	9.0	—	
745	井戸10	備前焼	擂鉢	—	—	—	
746	井戸10	備前焼	擂鉢	—	14.0	—	
747	溝52	土師質	椀	14.6	5.3	4.1	内面に重ね焼き痕跡。
748	溝52	土師質	椀	13.3	5.9	4.7	内面に重ね焼き痕跡。
749	溝52	土師質	椀	13.2	5.6	4.3	内面に重ね焼き痕跡。
750	溝52	土師質	椀	12.6	5.6	4.1	
751	溝52	須恵質	こね鉢	—	—	—	
752	溝52	土師質	皿	8.6	6.2	1.2	
753	溝52	土師質	皿	7.9	5.8	1.0	
754	溝52	土師質	器台か	—	—	—	
755	溝52	瓦器	椀	—	—	—	
756	溝52	瓦器	椀	—	4.5	—	
757	溝52	瓦器	椀	—	4.5	—	
758	溝52	瓦器	椀	—	4.5	—	
759	溝52	瓦器	皿	8.3	3.5	1.3	

掲載番号	遺構・土層名	種別	器種	法量（cm）			特徴・備考
				口径	底径	器高	
760	溝52	瓦器	皿	5.5	—	2.1	
761	溝52	瓦器	皿	7.9	4.0	14.0	
762	溝52	白磁	椀	16.0	—	—	
763	溝52	白磁	椀	—	—	—	
764	溝52	青磁	椀	—	4.7	—	外面はほとんど釉がかからない。
765	溝52	土師器	鍋	4.0	—	—	
766	溝52	瓦器	鍋	—	—	—	脚がつく。
767	溝52	瓦	丸瓦	—	—	—	
768	溝52	瓦	平瓦	—	—	—	
769	（旧）P23	土師器	椀	11.4	4.7	4.2	
770	（旧）建物2	土師器	椀	14.4	5.6	4.5	
771	包含層	青磁	椀	15.9	5.6	7.4	内面・見込みに花文を彫る。
772	現代用水路	青磁	椀	15.7	5.4	6.3	内面に簡単な文様を彫る。
773	前期水田	弥生土器	壺	—	—	—	削り出し突帯がめぐる。
774	前期水田	弥生土器	甕	—	—	—	ヘラ描沈線がめぐる。
775	中期水田	弥生土器	甕	—	—	—	
776	後期水田	弥生土器	甕	—	—	—	
777	後期水田	弥生土器	甕	—	—	—	
778	島状高まり2	弥生土器	壺	19.4	—	—	
779	溝82	備前焼	擂鉢	—	—	—	
780	溝84	土師質	椀	—	5.2	—	
781	包含層	弥生土器	甕	23.8	—	—	胴部内外面ともナデ。
782	包含層	弥生土器	甕	18.0	—	—	胴部外面スス付着。
783	包含層	弥生土器	高杯	—	10.5	—	
784	包含層	須恵器	杯	11.2	—	4.4	底部ヘラ切り未調整。

石器・石製品一覧表

番号	掲載番号	出土地区	遺構・土層名	時代・時期	器種	型式	計測最大幅（㎜） 長	幅(径)	厚	重量（g）	材質	残存
1		三・丸6－C	土器溜り		有溝石錘		55	52	40.5	161.3	安山岩	完形
2	5	三・丸8－C	井戸１上層	弥生後期	有溝石錘		55	44	27	96.3	花崗閃緑岩	完形
3		三・丸6･7－C･D	近世土取り埋土		有溝石錘		59	60	40.5	190.5	花崗岩	完形
4	6	三・丸6－C	溝７	弥生後期	有溝石錘		65	57	58	298.2	花崗岩	完形
5	30	三・丸9－C	竪穴住居19覆土		有溝石錘		83	73	69	547.6	花崗岩	完形
6	2	三・丸8－D	竪穴住居４	弥生後期	有溝石錘		52	51	40	142	花崗岩	完形
7	1	三・丸9－C･D	竪穴住居２土器溜り	弥生後期	有溝石錘		88	68	70	577.6	花崗岩	完形
8	29	三・丸9－C	土壙７	弥生後期	有溝石錘		55	51.5	33	145.3	安山岩	完形
9		三・丸9－C	包含層		有溝石錘		57	44	29	98.4	花崗岩	完形
10		三・丸9－C	包含層		有溝石錘		74	62.5	53	337.1	花崗岩	完形
11		三・丸8－C	包含層		有溝石錘		76	73.5	64	411.7	花崗岩	欠損
12	4	三・丸9･10－Z	竪穴住居８外周溝	弥生後期	有溝石錘		99.5	57	62	426.5	花崗岩	欠損
13		三・丸9･10－Z	土器溜り		有溝石錘		41	36	29	60.7	閃緑岩	完形
14	51	川31－C・D	中期水田	弥生中期	石錘		96.5	69.5	32.5	341	花崗閃緑岩	完形
15	28	三・丸9･10－AB			石錘		50	45	32.5	94	花崗岩	完形
16	27	三・丸9･10－AB	溝２（旧）		石錘		38.5	36	21.5	44.7		完形
17	8	三・丸9･10－AB	土器溜り	弥生後期	石錘		92.5	84	56	569	砂岩	完形
18		三・丸10－A	P－33（旧）		石錘		103	127	33	633.6	花崗岩	完形
19		三・丸９－C	包含層		石錘		83	78	18.5	185.1	細粒花崗岩	完形
20	34	三・丸６－C	溝37		紡錘車未成品		52		17	62.5	輝緑岩	完形
21	32	三・丸８－C	竪穴住居21覆土		紡錘車		46		16	46	堆積岩・頁岩？	完形
22	36	三・丸10－A	溝38		紡錘車		37		19.5	36.7	頁岩	完形
23		川・25－D	溝82		砥石か		83	58	28	174.4	頁岩	破片
24		三・丸８－C	包含層		砥石か		104	43.5	23.5	138	安山岩？	欠損
25		三・丸６－C	近代用水路		砥石		127	75	33	548.7		完形
26	35	三・丸６－C	溝35		砥石		195	82.5	93	1760.5	砂岩	完形
27	31	三・丸７－C	竪穴住居10		砥石		210	132.5	65.5	2801	細粒砂岩	完形
28	33	三・丸8･9－B･C	竪穴住居22		砥石		134	92	61	889.4	細粒花崗岩	完形
29	37	三・丸8･9－B･C	包含層		砥石		85	39	38	135.6	流紋岩（熔岩）	破片
30		三・丸８－C	近世用水路		砥石		125	66.5	57	710.9	流紋岩質熔岩	完形
31		三・丸９－C	包含層		砥石		38	22	18.5	19.1	流紋岩の熔岩？	完形
32		三・丸9･10－Z	P－74（旧）		砥石		110	55	42.5	299.8	流紋岩質熔岩	欠損
33	3	三・丸9･10－Z	竪穴住居８床面	弥生後期	砥石		162	61	18	410.3	泥岩（砂岩を含む）	完形
34		三・丸11－A	溝38		砥石		92	145	88	1426.8	砂岩	欠損
35		三・丸8･9－A	竪穴住居10		砥石		142	73.5	47.5	486.7	黒色頁岩	完形
36		三・丸11－A	竪穴住居32		砥石		115	85	54	750.6	砂岩	完形
37		三・丸８～11－A	包含層		砥石		102.5	39.5	31.5	155.8	流紋岩（熔岩）	完形
38		三・丸9･10－AB	土器溜り		砥石		42	44	18	34.2	流紋岩質凝灰岩	破片
39	52	川25～28－CD	後期水田層		石鏃	Ⅳ	34	11	3	1	サヌカイト	完形

番号	掲載番号	出土地区	遺構・土層名	時代・時期	器種	型式	計測最大幅（mm）			重量（g）	材質	残存
							長	幅(径)	厚			
40	45	川26～28－CD	中期水田層		石鏃	Ⅱ	16	15	2	0.4	サヌカイト	完形
41		川29－C	後期水田大畦		石鏃		14.5	7.5	2	0.2	サヌカイト	破片
42	38	川30・31－C・D	前期水田層		石鏃	Ⅳ	22	14	3.5	0.9	サヌカイト	完形
43		川30～32－C・D			石鏃	Ⅱ	28	15	3	1	サヌカイト	完形
44		川30－C・D	後期水田		石鏃	Ⅱ	18	13	3	0.6	サヌカイト	完形
45		川30－D	灰黄色土		石鏃	Ⅰ	23	13	3	1	サヌカイト	完形
46		川30－D	灰黄色土		石鏃	Ⅱ	15	15	3	0.8	サヌカイト	完形
47	47	川31－C・D	中期水田	弥生中期	石鏃	Ⅱ	33	19.5	4	2.5	サヌカイト	完形
48		川31－C・D	前期水田層		石鏃	Ⅱ	35	18	3	1.2	サヌカイト	完形
49	49	川31－C・D	中期水田	弥生中期	石鏃	Ⅰか	21.5	12	2.5	0.6	サヌカイト	完形
50	46	川31－C・D	中期水田	弥生中期	石鏃	Ⅱ	27.5	13.5	4	1.4	サヌカイト	完形
51	48	川31－C・D	中期水田		石鏃	Ⅴ	26.5	18	2.5	0.8	サヌカイト	完形
52	40	川32－D	溝53上層		石鏃	Ⅱ	19	17	3.5	0.8	サヌカイト	完形
53	41	川32－D	溝53上層		石鏃	Ⅰ	18.5	14	3	0.6	サヌカイト	完形
54	54	川32－D	溝77		石鏃	Ⅴ	20	17.5	3	0.8	サヌカイト	完形
55		川32－C・D	後期水田島状高まり		石鏃	Ⅱ	19	19	3	1	サヌカイト	欠損
56	44	川32－C・D	溝55		石鏃	Ⅱ	22	15	3	1	サヌカイト	完形
57	39	川32－D	溝53		石鏃	Ⅱ	24	19	4	1.2	サヌカイト	完形
58	43	川32－D	溝54上層		石鏃	Ⅰ	18.5	16	2.5	0.9	サヌカイト	完形
59		三・丸8－D	P－542（旧）		石鏃	Ⅰ	21.5	22	4	1.8	サヌカイト	ほぼ完
60		三・丸8－D	竪穴住居4		石鏃	Ⅳ	31	17	5.5	3	サヌカイト	完形
61	17	三・丸9･10－AB	溝2（旧）		石鏃	Ⅰ	25.5	14	3.6	1.4	サヌカイト	完形
62	10	三・丸8－C	竪穴住居25P－33		石鏃	Ⅰ	18.5	17	2.5	0.7	サヌカイト	完形
63	11	三・丸8－C	井戸1上層	弥生後期	石鏃	Ⅰ	29	14.5	3	1.7	サヌカイト	完形
64		三・丸7－C	溝10		石鏃	Ⅱ	11	12.5	2	0.4	サヌカイト	欠損
65		三・丸9－C	竪穴住居10最下面		石鏃	Ⅰ	25	12.5	2.5	0.9	サヌカイト	完形
66	9	三・丸8－C	竪穴住居21覆土		石鏃	Ⅱ	17	15	3.5	0.4	サヌカイト	完形
67		三・丸8－C	竪穴住居25覆土		石鏃	不明	10.5	10	3	0.2	サヌカイト	破片
68		三・丸8－C	竪穴住居25覆土		石鏃	Ⅰ	22	14	4	1.2	サヌカイト	完形
69		三・丸9－C	竪穴住居29覆土		石鏃	不明	22.5	15	3	1	サヌカイト	破片
70		三・丸8－C	竪穴住居1覆土		石鏃	不明	28	12	3	1.1	サヌカイト	欠損
71		三・丸9－D	竪穴住居3覆土	弥生後期	石鏃	不明	21	14.5	2.5	1	サヌカイト	破片
72	12	三・丸9－C	土壙7	弥生後期	石鏃	Ⅱ	34.5	21	4.5	2.5	サヌカイト	完形
73		三・丸8－C	包含層		石鏃	Ⅰ	19	16	2.5	0.6	サヌカイト	完形
74		三・丸8－C	包含層		石鏃	Ⅰ	26	16	4	1.3	サヌカイト	完形
75		三・丸8－C	表土		石鏃	Ⅳ	36	11.5	5	2.1	サヌカイト	完形
76		三・丸8－C	包含層		石鏃	Ⅰ	20	13.5	2	0.7	サヌカイト	完形
77		三・丸9･10－AB	竪穴住居5		石鏃	Ⅰか	26	15.5	2.5	1	サヌカイト	欠損
78		三・丸9･10－AB	竪穴住居5外周溝		石鏃	Ⅱ	17	12.5	2	0.5	サヌカイト	欠損
79		三・丸9･10－AB	土壙21		石鏃	Ⅰ	23	16.5	3	1.2	サヌカイト	完形

番号	掲載番号	出土地区	遺構・土層名	時代・時期	器種	型式	計測最大幅（mm）			重量（g）	材質	残存
							長	幅(径)	厚			
80		三・丸9･10－AB	土壙21（旧）		石鏃	I	21	15	3.5	0.9	サヌカイト	完形
81		三・丸9･10－AB	包含層		石鏃	I	15.5	12	3	0.5	サヌカイト	完形
82	18	三・丸9･10－Z	P－205（旧）	弥生後期	石鏃	IV	44	12	6	2.7	サヌカイト	完形
83		三・丸9･10－Z	建物58		石鏃	IIか	17	13.5	3	0.4	サヌカイト	破片
84	16	三・丸9･10－Z	土壙29	弥生後期	石鏃	I	24	17	3	1.4	サヌカイト	完形
85		三・丸9･10－Z	包含層		石鏃	I	17	23.5	3	1.6	サヌカイト	欠損
86		三・丸9･10－Z	包含層		石鏃	I	20.5	16.5	3	1.2	サヌカイト	欠損
87		三・丸9－A	基盤上層		石鏃	I	26.5	18.5	4	1.7	サヌカイト	ほぼ完
88	15	三・丸10・11－A	包含層	弥生後期	石鏃	IV	33	13.5	4	1.7	サヌカイト	欠損
89		三・丸10・10－Z	包含層		石鏃	V	22.5	16	4.5	1.2	サヌカイト	完形
90	14	三・丸8－C	P－75（旧）		石鏃	IV	48	19.5	7.5	6.5	サヌカイト	完形
91	19	三・丸10－A	竪穴住居17覆土		石鏃	IV	58.5	24	7	8	サヌカイト	完形
92		三・丸9－C	P－456（旧）		石鏃	IV	21.5	13	4	1.2	サヌカイト	破片
93		三・丸9－C	竪穴住居19覆土		石鏃		21.5	18	2.5	1.1	サヌカイト	破片
94	13	三・丸8－C	包含層		石鏃	IV	45.5	16.5	6	3.8	サヌカイト	ほぼ完
95		川26～28－C・D	後期水田		石包丁		40	32.5	6	7.8	サヌカイト	破片
96		川25－C・D	島状高まり2		石包丁		35	39.5	6.5	10.7	サヌカイト	破片
97		川31・32－D	後期水田		石包丁		31	35	7	9.6	サヌカイト	破片
98	42	川32－D	溝53上層		石包丁		88	48	9.5	56.3	変成岩	破片
99		三・丸6－C	溝35		石包丁		65	16	6	7.7	サヌカイト	破片
100	7	三・丸8･9－B･C	土器溜り	弥生後期	石包丁		69	43	14	42	安山岩	欠損
101	22	三・丸9－C	P－509（旧）	弥生後期	石包丁		90	41	18	77	スレート	完形
102	21	三・丸9･10－AB	溝2（旧）		石包丁		68	44	13	49.1	泥岩	破片
103	23	三・丸9－C	包含層	弥生後期	石包丁		100.5	32.5	10	46.4	サヌカイト	完形
104		三・丸9･10－AB			石包丁		77.5	44	13.5	51.8	頁岩	完形
105	26	三・丸9･10－AB	包含層	弥生後期	石包丁		75.5	35.5	5	18.6	スレート	破片
106		三・丸9･10－Z	竪穴住居7		石包丁		48	41	12	22.8	サヌカイト	破片
107	25	三・丸9･10－Z	溝1下層（旧）		石包丁		90	44.5	12.5	56.1	サヌカイト	完形
108	24	三・丸10－A	竪穴住居18覆土		石包丁		68	33	8	20.4	黒色頁岩	完形
109		三・丸6－C	溝35		石包丁		31.5	52	6	10.4	サヌカイト	破片
110		三・丸8・9－A	竪穴住居10		石包丁か		49	31	6	7.8	サヌカイト	破片
111	50	川26～28－C・D	中期水田	弥生中期	スクレイパー		38.5	48	9	21.4	サヌカイト	破片
112	53	川31－C・D	後期水田層		スクレイパー		61	46	10	29.3	サヌカイト	破片
113		三・丸8－C	土壙7		スクレイパー		50	20	6.5	7.8	サヌカイト	破片
114	20	三・丸8－C	包含層		スクレイパー		56	37	6	13.1	サヌカイト	完形
115		三・丸9･10－AB	土器溜まり		スクレイパー		24	20.5	4.5	2.5	サヌカイト	破片
116		三・丸9･10－AB	土器41		スクレイパー		26	9.5	4	0.9	サヌカイト	破片
117		三・丸9･10－AB	包含層		スクレイパー		33	39.5	8	10.2	サヌカイト	破片
118		三・丸9･10－AB	包含層		スクレイパー		31.5	65	10	24.2	サヌカイト	欠損
119		三・丸10･11－A	P－126（旧）		スクレイパー		34	27	8	9.1	サヌカイト	破片

番号	掲載番号	出土地区	遺構・土層名	時代・時期	器種	型式	計測最大幅（mm）			重量（g）	材質	残存
							長	幅(径)	厚			
120		三・丸９－Ｃ	包含層		スクレイパー		35.6	33.5	6	6.3	サヌカイト	破片
121		三・丸9･10－Ｚ	溝９（旧）		すり石		114.2	56	58	428.5	ひん岩	破片
122		三・丸8･9－Ｂ･Ｃ	土器溜り		叩き石		94	49	18	99.3	安山岩	完形
123		三・丸7～9－ＣＤ	現代用水路		石斧		68	35	15	29.7		小破片
124		三・丸9･10－ＡＢ	竪穴住居５貯蔵穴		石剣？		26	30	10	8	サヌカイト	破片
125		三・丸9･10－Ｚ	Ｐ－168（旧）		石鏃原材か		140	73.5	29	467.1	緑色片岩	完形
126		三・丸9･10－ＡＢ			石鏃？		97	50	16	101.8	黒色片岩	完形
127		川31－Ｃ・Ｄ	前期水田		使用剥片		45	44	7	14.2	サヌカイト	破片
128		三・丸9･10－Ａ	基盤層上面		使用剥片		51.5	55	10	18.8	サヌカイト	完形
129		三・丸９－Ａ	包含層		使用剥片		54	45	10	16	サヌカイト	完形
130		三・丸10･11－Ａ	包含層		使用剥片		58	42	7	15	サヌカイト	完形
131		三・丸９－Ｃ	包含層		石片		82	70.5	20	244.1	黒色片岩（紅レン石片岩含む）	
132		三・丸9･10－Ｚ	溝１（旧）		火打ち石破片		16	10	3	0.4	チャート	破片
133		三・丸9･10－Ｚ	包含層		火打ち石剥片		15.5	11.5	4.5	0.8	チャート	完形
134		三・丸９－Ｃ・Ｄ	溝52		不明		34	16.5	5	3.5	泥岩	欠損
135		三・丸10･11－Ａ	溝26		不明		20	24	5.5	3.9	サヌカイト	破片
136		三・丸10･11－Ａ	包含層		不明		29	24	10	8.4	サヌカイト	破片

土製品一覧表

番号	掲載番号	出土地区	遺構・土層名	器種	型式	時代・時期	計測最大値（mm）			重量（g）	残存	備考
							長	幅(径)	厚			
1		三・丸10－A	溝1（旧）	土錘	BⅢ		23	13.5	13	3.3	破片	
2		三・丸10－A	P－14（旧）	土錘	BⅤ	中世	42	12	11	4.7	完	
3		三・丸8～11－A	包含層	土錘	BⅠ		80	28.5	27	60.8	完	
4		三・丸8～11－A	包含層	土錘	AⅢ		56.5	35.5	35	78.1	完	
5		三・丸6－C	淡灰茶色粘質土	土錘	AⅡ2		67	40	40	114.8	完	
6	15	三・丸6－C	溝35	土錘	BⅠ	古墳後期	81	24.5	23.5	45.4	完	
7		三・丸9－D	溝52	土錘	BⅣ	中世	53	13	13	10.8	完	
8		三・丸9－D	溝52	土錘	BⅤ	中世	28.5	9	9	2.8	破片	
9	12	三・丸8－C	竪穴住居21№3	土錘	BⅠ	古墳中期	79.5	24	25	49.8	完	
10		三・丸8－C	竪穴住居21上床面	土錘	BⅤ	古墳中期	25.5	10	9.5	2.1	破片	
11	14	三・丸8－C	竪穴住居21下層	土錘	BⅢ	古墳中期	59.5	17	14	14.1	完	
12	13	三・丸8－C	竪穴住居21	土錘	BⅠ	古墳中期	70	23	24	36.8	完	
13		三・丸9－C	P－327（旧）	土錘	BⅠ		67	23	22	29.1	欠損	
14		三・丸8－C	P－48（旧）	土錘	BⅠ		35.5	24	21	16.3	破片	
15		三・丸8－C	P－103（旧）	土錘	BⅤ		34	10.5	10.5	3.9	完	
16		三・丸7－C	P－2（旧）	土錘	BⅤ		16	10	10	1.3	破片	
17		三・丸8－C	P－243（旧）	土錘	BⅤ		37	11.5	10.5	4.3	完	
18		三・丸9－C	現代用水路	土錘	C		67	38	39	99.1	完	
19		三・丸7－C	現代用水路	土錘	BⅢ		60	23	21.5	25.6	完	瓦質
20		三・丸7－C	現代用水路	土錘	BⅢ		64	22	20	25.4	完	瓦質
21		三・丸7－C	現代用水路	土錘	BⅢ		62	22	22.5	28	完	瓦質
22		三・丸7－C	現代用水路	土錘	BⅢ		67.5	22.5	22	28.2	完	瓦質
23		三・丸7－C	現代用水路	土錘	BⅠ		95	29	25	79.7	完	
24		三・丸7－C	現代用水路	土錘	BⅤ		48.5	10	10	4.6	完	
25		三・丸7－C	現代用水路	土錘	BⅤ		46	10	10	3.8	完	
26		三・丸6・7－C	側溝	土錘	BⅠ		76	28	25	58.4	完	
27	4	三・丸7－C	溝7	土錘	球形	弥生後期	36.5	35	35	33.5	欠損	
28	1	三・丸8－C	竪穴住居1	土錘	AⅢ	弥生後期	57.5	38	34	74.4	完	
29		三・丸8－C	現代用水路	土錘	BⅤ		39	7	7.5	2	完	
30		三・丸9－D	現代用水路	土錘	BⅤ		45.5	9.5	9	3.6	完	
31		三・丸6・7－C・D	近世土取り埋土	土錘	BⅢ		59	22.5	20	22.4	完	
32		三・丸8－C	包含層	土錘	BⅢ		61	21.5	21	23.8	完	
33		三・丸6・7－C・D	近世土取り埋土	土錘	BⅤ		30.5	9	9	2	欠損	
34		三・丸6－C	包含層	土錘	BⅢ		32.5	17	16	7.4	破片	
35		三・丸8－C	包含層	土錘	BⅠ		73	23.5	24	44.5	欠損	
36		三・丸7－C	包含層	土錘	BⅤ		38.5	12	11.5	5	完	
37		三・丸6・7－C・D	近世土取り埋土	土錘	BⅣ		32.5	9.5	10	3	欠損	
38		三・丸6－C	近世土取り埋土	土錘	BⅣ		58.5	10	10	4.8	完	
39		三・丸6－C	包含層	土錘	BⅢ		61	23	22	26.6	完	

番号	掲載番号	出土地区	遺構・土層名	器種	型式	時代・時期	計測最大値（mm）			重量（g）	残存	備考
							長	幅(径)	厚			
40		三・丸6－C	包含層	土錘	BⅠ		55	25	22.5	31.3	欠損	
41		三・丸6－C	包含層	土錘	BⅢ		40	17	17.5	11	完	
42		三・丸6・7－C・D	近世土取り埋土	土錘	BⅤ		42	10	9.5	3.7	完	
43		三・丸6－C	近世土取り埋土	土錘	BⅤ		47	9.5	9	3.8	完	
44	11	三・丸8・9－B・C	竪穴住居14	土錘	AⅡ3	古墳前期	48	24	20	18.9	完	
45		三・丸8・9－B・C	P－50（旧）	土錘	BⅣ		47.5	13	12	7.6	欠損	
46		三・丸9・10－Z	包含層	土錘	BⅤ		40	10	8	1.8	破片	
47		三・丸9・10－Z	現代用水路	土錘	BⅣ		55	17	14	9.9	完	
48		三・丸9・10－Z	耕作土	土錘	BⅣ		52	16.5	16	10.9	完	
49		三・丸9・10－Z	包含層	土錘	BⅡ		49	18	17	10.8	欠損	
50		三・丸9・10－Z	P－69（旧）	土錘	BⅣ		56	15.5	13	10	完	
51		三・丸9・10－A・B	包含層	土錘2	BⅠ		73	25	21	34.8	完	
52		三・丸9・10－A・B	包含層	土錘	BⅣ		56	12.5	12.5	7.5		
53		三・丸9・10－A・B	包含層	土錘	BⅠ		79.5	25	23	44.6	完	
54		三・丸9・10－A・B	包含層	土錘	BⅠ		44	25	23.5	22.6	破片	
55		三・丸9・10－A・B	包含層	土錘	BⅠ		95	27	26	66.9	完	
56		三・丸9・10－A・B	茶黄色砂質土	土錘	AⅡ2		61.5	36	18	36.7	破片	
57		三・丸9・10－A・B	茶灰褐色土	土錘	E		75	28	16	35	完	
58		三・丸9・10－A・B	基盤層上面	土錘	E		83	25	16	36.7	完	
59		三・丸9・10－A・B	P－36（旧）	土錘	BⅣ		52.5	12	11.5	7	完	
60		三・丸9・10－A・B	竪穴住居31	土錘	BⅤ	古墳後期	25	11.5	0.9	2.4	破片	
61	17	川25－D	溝82	土錘	BⅤ	中世	35	9	9	2.6	欠損	
62	2	三・丸8－D	竪穴住居4	紡錘車				38	5		完	土器片利用
63	3	三・丸9・10－Z	竪穴住居7	紡錘車				44	4.5		完	土器片利用
64	5	三・丸8－D	包含層	紡錘車				60	4.4		欠損	土器片利用
65	9	三・丸9・10－A・B	P－202（旧）	紡錘車			54.5	51	7	21.5	完	土器片利用
66	10	三・丸9・10－A・B	包含層	紡錘車		弥生後期	52	30	4.5	7.6	破片	土器片利用
67	7	三・丸9・10－Z	耕作土	紡錘車		弥生後期か	55	45	7.5	16.6	完	土器片利用
68	8	三・丸9・10－Z	包含層	紡錘車		弥生後期	45.5	32	5	6.7	欠損	土器片利用
69	6	三・丸9・10－Z	側溝	紡錘車		弥生後期か	40	37	7	8.9	欠損	土器片利用
70		三・丸9・10－Z	現代用水路	瓦製円盤		弥生後期か	38	37	15.5	20.7	完	近世瓦片利用
71	16	三・丸8－D	近世土取り埋土	羽口			134	84	83		ほぼ完	

金属器一覧表

鉄器

番号	掲載番号	出土地区	遺構・土層名	時代・時期	器種	計測最大値（mm）			重量（g）	残存	備考
						長	幅(径)	厚			
1		三・丸9－Z	竪穴住居7柱穴	弥生後期末	鏃身か	29	6	4	0.97	破片か	
2		三・丸8－C	P268（旧）		鏃類部か	34	6	5	1.15	破片	
3		三・丸9・10－Z	耕土下20cm		鏃類部か	19.5	5.5	4	0.64	破片	
4	24	三・丸8－C	竪穴住居21	古墳後期	鏃類部	111	9	7	9.91	破片	
5		三・丸8－C	P－226（旧）		鏃基部か	26	5	4	0.75	破片	
6		三・丸6・7－C・D	近世土取り埋土		鏃か	37.5	12.5	12.5	7.17	破片	
7		川31－C・D	近代		鏃か	46.5	12	7	7.23	欠損	
8		三・丸9・10－Z	耕土下20cm		鏃か	24.5	13.5	6	3.1	小破片	
9	8	三・丸9－Z	竪穴住居7№4	弥生後期末	鏃か	58	13	5	8.49	完形	
10		三・丸6・7－C・D	近世土取り埋土		鏃	149.5	27	6	18.81	完形	
11	30	三・丸6－C	溝35	古墳後期	鏃	85	29	5	9.04	完形	
12	31	三・丸6－C	溝35	古墳後期	鏃	97	19	4.5	10.14	完形	
13	14	三・丸9・10－A・B	窪地1		鏃	74.5	22	6	10.5	完形	
14	12	三・丸9・10－A・B	土壙41	弥生後期	鏃	52.5	19.5	3.5	5	欠損	
15	17	三・丸8・9－B・C	P－42（旧）		鏃	35.5	18.5	5.5	3.87	破片	
16	16	三・丸9・10－Z	耕土下20cm		鏃	40.5	13	3.5	3.09	完形	
17	27	三・丸8・9－B・C	竪穴住居22	古墳後期	鏃	42	14.5	3	1.98	完形	
18	28	三・丸8・9－B・C	竪穴住居22覆土	古墳後期	鏃	47	10.5	9.5	5.45	破片	
19	4	三・丸9・10－A・B	竪穴住居5	弥生後期末	鏃	34	15.5	2	4.7	欠損	
20	7	三・丸9－Z	竪穴住居7№2	弥生後期末	鏃	56.5	28	3	8.38	完形	
21		三・丸10－Z	溝38	古墳後期	柄部か	58.5	14.5	2.5	2.91	破片	
22	11	三・丸9・10－A・B	土壙23	弥生後期	斧	49	35	14	26.5	欠損	
23		三・丸9・10－A・B	遺構検出中		斧か	39	53	9	34.6	完形	
24		三・丸8・9－C	包含層出中		鍋釣り手か	27.5	22	8	11.94	破片	
25		三・丸7－C	P72（旧）		刀子か	38	13.5	6.5	3.5	破片	
26		三・丸8－C	溝14		刀子か	30.5	11	3	2.09	破片	
27		三・丸6・8－C・D	排土		刀子か	23	15	3	1.73	破片	
28		三・丸8－C	溝14		刀子	34	7	4	2.38	破片	
29		三・丸6・7－C・D	近世土取り埋土		刀子	51.5	15.5	3	3.43	欠損	
30	18	三・丸11・10－A	洪水砂下面	弥生後期末	刀子	42	12	3.5	3.68	破片	
31	26	三・丸8－C	竪穴住居21	古墳後期	刀子	78.5	17.5	4	13.9	欠損	
32		三・丸6～9－C・D	表土下		刀子	33	12	4	3.45	破片	
33		三・丸8－C	P81（旧）	中世	鉄塊	48.5	38	19	53.27	完形	
34		三・丸8－C	P260（旧）		釘か	16	4	3.5	0.41	破片	
35		三・丸7－C	P72（旧）		釘か	25.5	11.5	10.5	2.72	破片	
36		三・丸6－C	P7（旧）	中世	釘か	29.5	7.5	6	2.39	破片	
37		三・丸9－D	溝52	中世	釘か	29	4.5	3	0.66	破片	
38		三・丸6・7－C・D'	近世土取り埋土		釘	35.5	9.5	7	4.28	破片	

番号	掲載番号	出土地区	遺構・土層名	時代・時期	器種	計測最大値（cm）			重量（g）	残存	備考
						長	幅(径)	厚			
39		三・丸６・７－Ｃ・Ｄ	近世土取り埋土		釘	47	14	9.5	16.4	破損	
40		三・丸６・７－Ｃ・Ｄ	近世土取り埋土		釘	54.5	12.5	9.5	15.06	破損	
41		三・丸６・７－Ｃ・Ｄ	近世土取り埋土		釘	61.5	9	6	6.8	完形	
42		三・丸９－Ｄ	溝52	中世	釘	58.5	6	6	3.49	欠損	
43		三・丸９－Ｄ	溝52	中世	釘	24.5	9	9	3.36	破片	
44	38	三・丸８・９－Ｂ・Ｃ	溝１（旧）	中・近世	釘	77	14.5	9.5	28.26	欠損	
45	37	三・丸８・９－Ｂ・Ｃ	溝４（旧）	中世	釘	80	17	12.5	26.26	完形	
46		三・丸８・９－Ｂ・Ｃ	表土		釘	37	4.5	4	0.68	破片	
47		三・丸７－Ｃ	Ｐ22（旧）	中世	釘	42	8.5	6.5	3.92	欠損	
48		三・丸８－Ｃ	Ｐ290（旧）		釘	89	10	8.5	14.52	欠損か	
49		三・丸８－Ｃ	Ｐ465（旧）		釘	26.5	5	4	1.06	破片	
50		三・丸６・７－Ｃ・Ｄ	近世土取り埋土		釘	31	8.5	7.5	4.23	破片	
51		三・丸６・７－Ｃ・Ｄ	近世土取り埋土		釘	34	9.5	9	5.53	欠損	
52		三・丸６・７－Ｃ・Ｄ	近世土取り埋土		釘	44.5	9	8.5	4.42	破片	
53		三・丸６・７－Ｃ・Ｄ	近世土取り埋土		釘	14	6	4	0.79	破片	
54		三・丸６－Ｃ	近世土取り埋土		釘	22	9.5	5.5	2.4	破片	
55		三・丸９－Ｄ	溝52	中世	釘	41	7	6.5	2.72	欠損	
56	36	三・丸９－Ｄ	溝52	中世	釘	94	7	5.5	6.55	欠損	
57		三・丸９－Ｄ	溝52	中世	釘	27	5.5	4.5	1.22	破片	
58		川25・28－Ｃ・Ｄ	表土現代溝		釘	35	6.5	5.5	1.49	完形	
59		川25・28－Ｃ・Ｄ	表土現代溝		釘	28	6	6	4.24	完形	
60		三・丸９・10－Ａ・Ｂ	竪穴住居24	古墳前期	小棒状品	29	9	8	2	破片	
61		三・丸９・10－Ａ・Ｂ	建物12Ｐ２	弥生後期	小刀子か	37	9.5	5	1.6	欠損	
62	40	川30－Ｄ	溝70	弥生後期	鍬・鋤先	55	121	12.5		完形	
63	41	川26－Ｄ	後期水田層直下	弥生後期	鍬・鋤先	45.5	93	7	43.3	完形	
64	20	三・丸８－Ｃ	Ｐ550（旧）	弥生後期	鍬・鋤先	84	36	4.5	31.62	破損	
65	35	三・丸９－Ｄ	溝52	中世	鋤	335	210	23	920.32	完形	
66	13	三・丸８・９－Ｂ・Ｃ	土器溜まり	弥生後期	摘鎌	20	80	40	17.18	完形	
67	5	三・丸８・９－Ａ	竪穴住居７	弥生後期	剣	85	22	3	14.31	ほぼ完	
68		三・丸６・７－Ｃ・Ｄ	近世土取り埋土		鍬破片か	72	46.5	12	52.77	破片	
69		三・丸６・７－Ｃ・Ｄ	近世土取り埋土		鍬破片	103.5	40.5	4.5	23.15	破片	
70		三・丸８－Ｃ	Ｐ405（旧）		ヤリガンナ先端	29.5	6	5	1.1	小破片	
71		三・丸９・10－Ｚ	耕土下20cm		ヤリガンナか	47.5	9.5	6.5	5.87	破片	
72	22	三・丸８－Ｃ	竪穴住居13覆土	古墳前期	ヤリガンナか	29	14	3	2.28	破片	
73	23	三・丸11－Ａ	竪穴住居16覆土	古墳前期	ヤリガンナか	36	17	5	5.96	破片	
74		三・丸９－Ｚ	竪穴住居７覆土	弥生後期末	ヤリガンナか	37	15	3	2.84	破片	
75	6	三・丸９－Ｚ	竪穴住居７№１	弥生後期末	ヤリガンナ	114	14	5.5	14.97	完形	
76	19	三・丸10・11－Ａ	洪水砂	弥生後期末	ヤリガンナ	37	7	5.5	2.01	破片	
77	21	三・丸８－Ｃ	竪穴住居13覆土	古墳前期	ヤリガンナ	43.5	14	4.5	5.02	破片	
78	2	三・丸９－Ｄ	竪穴住居３	弥生後期	ヤリガンナ	117	17.5	4.5	13.83	欠損	

番号	掲載番号	出土地区	遺構・土層名	時代・時期	器種	計測最大値（mm）			重量（g）	残存	備考
						長	幅(径)	厚			
78	2	三・丸9－D	竪穴住居3	弥生後期	ヤリガンナ	117	17.5	4.5	13.83	欠損	
79		三・丸8－C	P260（旧）		不明棒状品	96.5	12	4	11.05	完形	
80		三・丸6・7－C・D	近世土取り埋土		不明板状品	45.5	34	9	29.55	破片か	
81		三・丸9・10－A・B	建物55P2	中世	不明板状品	28	38	4	5.8	破片	
82		三・丸8－C	竪穴住居12		不明小棒状品	43	4.5	4	1.29	破片	
83		三・丸8－C	包含層		不明小板状品	31.5	20.5	5	81.68	破片	
84		三・丸9・10－A・B	土器溜り	弥生後期	不明、斧か	34	20	15	9.4	破片	
85		三・丸6－C	側溝		不明					小片	
86		三・丸9－C	P100（旧）		不明					小片	
87		三・丸9・10－Z	井戸4	弥生後期	不明	9	4.5	3.5	0.16	破片	
88		三・丸6・7－C・D	近世土取り埋土		不明	20.5	15	8	5.37	破片	
89		三・丸9・10－Z	洪水砂		不明	28	22	3.5	2.05	破片	
90	32	三・丸11・10－A	溝38		不明	42	12	11.5	8.25	破片	
91		三・丸9・10－Z	竪穴住居18		不明	16	8.5	3	0.47	破片	
92	9	三・丸9－Z	竪穴住居7No.3	弥生後期末	不明	41	26	3.5	10.19	破片	
93		三・丸9－Z	竪穴住居7No.13	弥生後期末	不明	27	16.5	4.5	3.15	破片	
94		三・丸9・10－Z	包含層		不明	11	6.5	3.5	0.22	小破片	
95		三・丸9・10－A・B	黄色砂質土		不明	33.5	21	8	4.7	破片	
96		三・丸9・10－A・B	建物38P2		不明	27	9	4	1.4	小片	
97		三・丸9・10－A・B	淡黄色砂		不明	18	22	6	2.6	破片	
98		三・丸9・10－A・B	土壙25	弥生後期	不明	16.5	13	5	1.2	破片	
99		三・丸8－C	P152（旧）		不明	15	14	6.5	1.24	破片	
100		三・丸8－C	P197（旧）		不明	65	10.5	9	9.34	破片	
101		三・丸9・10－A・B	P19（旧）		不明	26	16	8	5.4	破片	
102		三・丸8－C	P226（旧）		不明	28	6	5.5	1.46	欠損	
103		三・丸6・7－C・D	近世土取り埋土		不明	31	18	7.5	6.16	破片	
104		三・丸6・7－C・D	近世土取り埋土		不明	24.5	23.5	6	3.76	破片	
105		三・丸6・7－C・D	近世土取り埋土		不明	14.5	14.5	8	3.24	破片	
106		三・丸6・7－C・D	近世土取り埋土		不明	3.15	17.5	4.5	5.12	破片	
107		三・丸9・10－A・B	窪地1	弥生後期	不明	25	12	4	1.8	破片	
108	33	三・丸10・11－A	溝38	古墳後期	不明	36.5	13	2.5	2.98	破片	
109		三・丸8・9－B・C	溝39		不明					小片	
110		三・丸9・10－A・B	溝45	古墳	不明	19.5	17	4	1.8	破片	
111		三・丸9－D	溝52	中世	不明	28.5	28	12	22.58	破片	
112		三・丸9・10－Z	耕土下20cm		不明	8	6	2	0.17	小破片	
113		三・丸9・10－Z	耕土下20cm		不明	12	11.5	6	0.99	破片	
114	25	三・丸8－C	竪穴住居21		不明	26.5	25	4	3.52	破片	
115	29	三・丸8－C	竪穴住居25柱穴	古墳後期	不明、鎌か	70	25.5	4.5	7.73	欠損	
116		三・丸9・10－A・B	竪穴住居31	古墳後期	不明	32.5	20.5	6	5.7	破片	
117	1	三・丸8－C	竪穴住居1		不明	39	16	7	6.1	破片	

番号	掲載番号	出土地区	遺構・土層名	時代・時期	器種	計測最大値(cm) 長	幅(径)	厚	重量(g)	残存	備考
118		三・丸9・10－A・B	土器溜り	弥生後期	不明	19	9	8	1.2	破片	
119		三・丸6・8－C・D	排土		不明	15.5	6.5	3	0.81	破片	
120		三・丸8－C	包含層		不明	24	5	4.5	1.39	破片	
121		三・丸8－C	包含層		不明	27	18	5	6.68	破片	

青銅製品

122	34	三・丸9・10－Z	包含層		耳環					完形	
123	3	三・丸9－D	竪穴住居4	弥生後期	銅鏃					欠損	
124		三・丸9－Z	竪穴住居7床	弥生後期末	銅鏃					崩壊	
125	10	三・丸9－Z	竪穴住居7下層床	弥生後期末	銅鏃	22.5	7	4	1	崩壊	
126	15	三・丸9・10－A・B	包含層		銅鏃	29	9	4	1.5	欠損	
127	15	三・丸9・10－A・B	竪穴住居5		銅銙					小片	
128		三・丸6・7－C・D	近世土取り埋土		銅銭	23.5		1.5	3	完形	○宋元宝
129		三・丸6・7－C・D	近世土取り埋土		銅銭	24.2		1.8	3.3	完形	不明
130		三・丸6～9－C・D	現代溝		銅銭	24.5				破片	銭銘不明
131		三・丸8・9－B・C	溝1（旧）		銅銭					完形	明治以降
132		三・丸8・9－B・C	溝1（旧）		銅銭					完形	寛永通宝
133		三・丸9・10－A・B	溝9（旧）		銅銭					完形	寛永通宝
134		三・丸9・10－A・B	溝20		キセルか					完形	

玉類一覧表

番号	掲載番号	出土地区	遺構・土層名	時代・時期	種類	計測最大値（mm）			重量（g）	材質・色調	残存
						長（高）	幅（径）	内径			
1	1	三・丸9—D	竪穴住居4	弥生後期	丸玉	5.4	7.5	1.8	0.36	水色	完
2	15	三・丸9—C	P— 592（旧）	弥生後期	管玉	17.2	4.6	2.0	0.63	緑色凝灰岩か	完
3	14	三・丸9—C	包含層	弥生後期	勾玉	16.0	8.3			ひすい	破片
4		三・丸8—C	包含層	弥生後期	小玉					ガラス・水色	破損
5		三・丸9—C	竪穴住居1	弥生後期（混入か）	臼玉	3.3	4.9	2.0	0.12	滑石	完
6		三・丸9—C	包含層	弥生後期	小玉					ガラス・水色	破損
7		三・丸6—C	溝35	古墳後期	臼玉	4.0	6.0	2.2	0.18	滑石	完
8		三・丸8—C	P— 322（旧）	弥生後期	小玉	2.7	4.6	1.6	0.07	ガラス・水色	完
9		三・丸9—D	土壙7	弥生後期	小玉	2.2	3.8	0.9	0.04	ガラス・水色	完
10		三・丸9—D	竪穴住居3	弥生後期	小玉	3.4	4.3	1.3	0.08	ガラス・水色	完
11	9	三・丸9—C	土器棺墓2	弥生後期	小玉	2.2	3.3	1.4	0.06	ガラス・紺色	完
12	12	三・丸9—C	土器棺墓2	弥生後期	小玉	1.8	3.4	1.1	0.03	ガラス・紺色	完
13	13	三・丸9—C	土器棺墓2	弥生後期	小玉	1.3	3.1	1.3	0.02	ガラス・紺色	完
14	5	三・丸9—C	土器棺墓2	弥生後期	小玉	4.0	3.7	1.2	0.1	ガラス・水色	完
15	4	三・丸9—C	土器棺墓2	弥生後期	管玉	12.2	5.4	1.7	0.73	ガラス・風化	完
16	10	三・丸9—C	土器棺墓2	弥生後期	小玉	2.1	3.5	1.0	0.03	ガラス・紺色	完
17	7	三・丸9—C	土器棺墓2	弥生後期	小玉	3.6	4.3	1.5	0.08	ガラス・水色	完
18	8	三・丸9—C	土器棺墓2	弥生後期	小玉	3.0	3.4	1.0	0.05	ガラス・紺色	完
19	6	三・丸9—C	土器棺墓2	弥生後期	小玉	3.1	3.8	1.1	0.07	ガラス・紺色	完
20	11	三・丸9—C	土器棺墓2	弥生後期	小玉	1.5	3.4	1.2	0.02	ガラス・紺色	完
21		三・丸9—C	竪穴住居2	弥生後期	小玉	2.7	3.9		0.01	ガラス・水色	完
22		三・丸9—C	竪穴住居2	弥生後期	管玉	6.0	4.0	1.4	0.15	ガラス・緑色	完
23		三・丸9—C	竪穴住居2	弥生後期	小玉	3.5	4.9	1.6	0.06	ガラス・水色	完
24	17	三・丸8—C	竪穴住居21	古墳後期	有孔板	27	18.5	4.5		滑石	完
25		三・丸8—C	竪穴住居21	古墳後期	小玉	3.9	2.8	1.2		ガラス・紺色	欠損
26		三・丸8—C	包含層		臼玉	2.7	4.6	1.9	0.09	滑石	完
27		三・丸7—C	包含層		臼玉	3.2	4.5	1.7	0.07	滑石	完
28	23	三・丸9・10—A・B	P— 144（旧）	古墳時代	小玉	3.0	3.3	1.3	0.05	ガラス・水色	完
29		三・丸9・10—A・B	茶黄褐色土		小玉	3.0	4.5	1.2		ガラス・水色	完
30	24	三・丸9・10—A・B	P— 144（旧）	古墳時代	なつめ玉	4.0	6.0		0.52	琥珀	破砕
31		三・丸9—Z	竪穴住居7	弥生後期	ガラス滓	10.0	6.0	7.0			
32		三・丸9・10—Z	包含層		ガラス滓						
33		三・丸9・10—Z	竪穴住居8外周溝	弥生後期	ガラス滓か						
34	3	三・丸10—Z	竪穴住居8外周溝	弥生後期	勾玉	27.5	18	8.0	4.9	頁岩	完
35	2	三・丸9・10—Z	竪穴住居8	弥生後期	小玉	3.1	4.0	1.8	0.05	ガラス・水色	完
36	16	三・丸9・10—A	包含層	弥生後期	管玉	17.7	4.7	1.6	0.66	緑色凝灰岩か	ほぼ完

竪穴住居21臼玉一覧表

番号	径	高さ	孔径	番号	径	高さ	孔径	番号	径	高さ	孔径
1	5	3.1	1.8	40	4.8	4.0	1.9	79	5.0	2.8	1.9
2	5.1	3.1	2.2	41	5.2	4.2	2.0	80	5.0	3.5	1.9
3	4.4	4	2.2	42	5.2	3.4	1.9	81	5.0	3.4	1.9
4	5.3	3.9	2.1	43	4.8	3.3	1.9	82	5.1	4.1	1.9
5	4.6	4	2.0	44	5.2	3.4	1.9	83	4.7	1.8	1.8
6	4.9	2.7	2.0	45	5.1	2.3	1.9	84	4.6	3.7	1.9
7	5.0	4.2	1.8	46	5.1	2.7	1.8	85	4.8	3.4	1.9
8	5.8	4.9	2.2	47	5.2	3.5	1.7	86	4.5	3.3	2.0
9	5.4	3.4	1.9	48	5.2	3.3	1.9	87	4.9	3.2	2.0
10	5.3	3.6	2.2	49	4.9	2.6	1.8	88	4.9	3.5	2.1
11	5.1	3.8	2.0	50	4.7	2.9	1.9	89	5.0	3.0	1.9
12	4.6	3.1	1.9	51	4.8	3.0	1.9	90	4.6	2.6	2.0
13	4.6	3.2	1.9	52	4.8	3.6	1.8	91	4.5	4.3	1.9
14	4.5	2.2	1.8	53	5.2	4.4	2.0	92	5.0	3.2	2.0
15	5.0	3.2	2.0	54	5.1	3.3	2.0	93	4.7	4.2	2.0
16	5.3	4.1	1.8	55	4.7	3.1	2.0	94	4.7	3.7	2.0
17	4.6	4.5	1.9	56	4.7	3.1	1.9	95	5.2	4.4	1.8
18	4.8	3.9	1.9	57	5.2	4.8	1.8	96	5.0	3.8	1.9
19	4.9	3.6	1.9	58	4.8	3.2	1.9	97	5.0	3.4	2.0
20	4.8	3.2	1.9	59	5.1	3.1	2.0	98	4.9	3.5	1.9
21	4.6	3.0	1.9	60	4.9	3.5	1.9	99	4.6	3.0	2.0
22	4.9	2.7	1.8	61	5.2	3.2	1.9	100	5.0	2.3	1.9
23	6.1	5.0	2.2	62	5.0	3.0	2.0	101	5.2	3.6	1.9
24	4.7	3.1	1.8	63	5.0	3.0	1.8				
25	5.2	4.2	2.0	64	4.9	3.3	1.9				
26	4.7	1.6	1.8	65	4.7	3.3	2.0				
27	4.5	3.0	1.7	66	4.8	2.3	1.8				
28	5.2	4.0	1.9	67	5.0	4.2	1.9				
29	4.5	2.7	1.9	68	5.0	2.1	1.8				
30	4.8	2.5	1.1	69	5.0	4.0	1.7				
31 (J21)	4.9	3.8	1.9	70	5.0	3.8	1.7				
32 (J20)	4.6	2.8	1.8	71	4.9	3.2	1.9				
33	4.5	3.8	1.9	72	5.0	2.9	2.0				
34 (J19)	4.7	3.0	2.0	73	4.7	2.4	1.9				
35	4.5	3.6	1.9	74	5.2	3.5	1.8				
36 (J18)	4.7	3.4	1.9	75	5.1	2.8	1.9				
37 (J22)	4.9	3.5	1.9	76	5.0	3.5	2.0				
38	4.5	2.6	2.0	77	4.9	3.0	1.9				
39	4.6	4.2	2.0	78	5.0	4.2	1.9				

（単位：mm）

新旧遺跡名称対照表

報告書遺構名	調査時遺構名	調査区	担当者	年度	報告書遺構名	調査時遺構名	調査区	担当者	年度
水田	低位部水田	69CD	江・宇	1984	建物23	建物7	藤原橋A	江・山	1983
溝1	溝18	69CD	江・宇	1984	建物24	建物8	藤原橋A	江・山	1983
溝2	溝17	69CD	江・宇	1984	建物25	建物9	藤原橋A	江・山	1983
溝3	溝29	69CD	江・宇	1984	建物26	建物認定	藤A・護岸	江・宇	1983 1984
溝4	溝31	69CD	江・宇	1984	建物27	建物10	藤原橋A	江・山	1983
溝5	溝27	69CD	江・宇	1984	建物28	東区建物	藤原橋護岸	江・宇	1984
溝6	溝28	69CD	江・宇	1984	井戸1	P 595	69CD	江・宇	1984
水田	低位部水田	69CD	江・宇	1984	井戸2	P 135	藤原橋A	江・山	1983
竪穴住居1	竪穴住居16	69CD	江・宇	1984	井戸3	P39	藤原橋護岸	江・宇	1984
竪穴住居2	竪穴住居17	69CD	江・宇	1984	井戸4	P 172	藤原橋A	江・山	1983
竪穴住居3	竪穴住居18	69CD	江・宇	1984	井戸5	P27	藤原橋護岸	江・宇	1984
竪穴住居4	竪穴住居15	69CD	江・宇	1984	井戸6	P 136	藤原橋A	江・山	1983
竪穴住居5	竪穴住居4	PR1	平・古	1983	土壙1	P 276	69CD	江・宇	1984
竪穴住居6	竪穴住居3	藤原橋護岸	江・宇	1984	土壙2	P 295	69CD	江・宇	1984
竪穴住居7	竪穴住居3	藤原橋A	江・山	1983	土壙3	P 183	藤原橋A	江・山	1983
竪穴住居8	竪穴住居8	藤原橋A	江・山	1983	土壙4	P 364	69CD	江・宇	1984
竪穴住居9	竪穴住居6	藤原橋護岸	江・宇	1984	土壙5	P 272	69CD	江・宇	1984
建物1	建物Ⅳ	69CD	江・宇	1984	土壙6	P 433	69CD	江・宇	1984
建物2	建物認定	69CD	江・宇	1984	土壙7	P 332	69CD	江・宇	1984
建物3	建物9	89BC	柳・平	1984	土壙8	P 111	69CD	江・宇	1984
建物4	建物認定	89BC	柳・平	1984	土壙9	P 167	69CD	江・宇	1984
建物5	建物11	89BC	柳・平	1984	土壙10	P 360	69CD	江・宇	1984
建物6	建物10	89BC	柳・平	1984	土壙11	土壙1	89BC	柳・平	1984
建物7	建物認定	89BC	柳・平	1984	土壙12	土壙4	89BC	柳・平	1984
建物8	建物7	89BC	柳・平	1984	土壙13	土壙5	89BC	柳・平	1984
建物9	建物6	89BC	柳・平	1984	土壙14	土壙2	89BC	柳・平	1984
建物10	建物16	PR1	平・古	1983	土壙15	土壙3	89BC	柳・平	1984
建物11	建物	PR1	平・古	1983	土壙16	土壙6	89BC	柳・平	1984
建物12	建物10	PR1	平・古	1983	土壙17	土壙7	89BC	柳・平	1984
建物13	建物13	PR1	平・古	1983	土壙18	土壙15	PR1	平・古	1983
建物14	建物11	PR1	平・古	1983	土壙19	土壙9	89BC	柳・平	1984
建物15	建物12	PR1	平・古	1983	土壙20	土壙16	PR1	平・古	1983
建物16	建物認定	藤A・護岸	江・宇	1983 1984	土壙21	井戸3	PR1	平・古	1983
建物17	建物認定	藤A・護岸	江・宇	1983 1984	土壙22	土壙17	PR1	平・古	1983
建物18	建物2	藤原橋A	江・山	1983	土壙23	土壙5	PR1	平・古	1983
建物19	建物4	藤原橋A	江・山	1983	土壙24	土壙12	PR1	平・古	1983
建物20	建物Ⅲ	藤原橋A	江・山	1983	土壙25	土壙19	PR1	平・古	1983
建物21	建物5	藤原橋A	江・山	1983	土壙26	P 174	藤原橋A	江・山	1983
建物22	建物6	藤原橋A	江・山	1983	土壙27	P 175	藤原橋A	江・山	1983

報告書遺構名	調査時遺構名	調査区	担当者	年度	報告書遺構名	調査時遺構名	調査区	担当者	年度
土壙28	P 181	藤原橋A	江・山	1983	溝 9	溝 6	69CD	江・宇	1984
土壙29	P 272	藤原橋A	江・山	1983	溝10	溝 9	69CD	江・宇	1984
土壙30	P 282	藤原橋A	江・山	1983	溝11	溝 7	69CD	江・宇	1984
土壙31	P 283	藤原橋A	江・山	1983	溝12	溝10	69CD	江・宇	1984
土壙32	P 241	藤原橋A	江・山	1983	溝13	溝11	69CD	江・宇	1984
土壙33	P 333	69CD	江・宇	1984	溝14	溝23	69CD	江・宇	1984
土壙34	P 351	69CD	江・宇	1984	溝15	溝24	69CD	江・宇	1984
土壙35	P 316	69CD	江・宇	1984	溝16	溝22	69CD	江・宇	1984
土壙36	P 337	69CD	江・宇	1984	溝17	溝21	69CD	江・宇	1984
土壙37	P 641	69CD	江・宇	1984	溝18	溝 8	89BC	柳・平	1984
土壙38	P 454	69CD	江・宇	1984	溝19	溝 7	PR1	平・古	1983
土壙39	土壙18	PR1	平・古	1983	溝20	溝 8	PR1	平・古	1983
土壙40	土壙14	PR1	平・古	1983	溝21	溝 4	藤原橋護岸	江・宇	1984
土壙42	土壙13	PR1	平・古	1983	溝22	溝 7	藤原橋護岸	江・宇	1984
土壙41	土壙11	PR1	平・古	1983	溝23	溝 6	藤原橋護岸	江・宇	1984
土壙43	P 191	藤原橋A	江・山	1983	溝24	溝	排水溝	平・高	1986
土壙44	P 287	藤原橋A	江・山	1983	溝25	溝	排水溝	平・高	1986
土壙46	P 133	藤原橋A	江・山	1983	溝26	溝 7	藤原橋A	江・山	1983
土壙45	P 109	藤原橋護岸	江・宇	1984	溝27	溝 8	藤原橋A	江・山	1983
土壙50	P97	藤原橋護岸	江・宇	1984	溝28	溝	藤原橋A	江・山	1983
土壙47	土壙 8	89BC	柳・平	1984	溝29	溝	藤原橋A	江・山	1983
土壙48	P 134	藤原橋A	江・山	1983	溝30	溝	藤原橋A	江・山	1983
土壙49	P 137	藤原橋A	江・山	1983	溝31	竪穴住居 6	藤原橋A	江・山	1983
土壙51	P96	藤原橋護岸	江・宇	1984	溝32	竪穴住居 7	藤原橋A	江・山	1983
土壙52	P38	藤原橋護岸	江・宇	1984	溝33	溝 9	藤原橋護岸	江・宇	1984
土壙53	P91	藤原橋A	江・山	1983	溝34	溝 9	藤原橋護岸	江・宇	1984
土壙54	土壙10	89BC	柳・平	1984	住居11外周溝	溝 8	藤原橋護岸	江・宇	1984
土壙55	P 116	藤原橋護岸	江・宇	1984	住居 8 外周溝 1′	溝	藤原橋A	江・山	1983
土壙墓 1	墓 1	89BC	柳・平	1984	住居 8 外周溝 2′	溝	藤原橋A	江・山	1983
土器棺墓 1	土器棺 1	69CD	江・宇	1984	住居 8 外周溝 3′	溝	藤原橋A	江・山	1983
土器棺墓 2	土器棺 2	69CD	江・宇	1984	住居 8 外周溝 3″	溝	藤原橋A	江・山	1983
土器棺墓 3	土器棺 4	69CD	江・宇	1984	住居 8 外周溝 1	溝 6	藤原橋A	江・山	1983
土器棺墓 4	土器棺 3	69CD	江・宇	1984	住居 8 外周溝 2	溝 9	藤原橋A	江・山	1983
土器棺墓 5	土器棺 5	69CD	江・宇	1984	住居 8 外周溝 3	溝10	藤原橋A	江・山	1983
土器棺墓 6	土器棺 2	89BC	柳・平	1984	住居 5 外周溝	溝 6	PR1	平・古	1983
土器棺墓 7	土器棺 1	89BC	柳・平	1984	住居 7 外周溝	溝11	藤原橋A	江・山	1983
土器棺墓 8	土器棺 3	89BC	柳・平	1984	窪地 1	竪穴住居 5	PR1	平・古	1983
土器棺墓 9	土器棺 4	89BC	柳・平	1984	竪穴住居10	竪穴住居 3	69CD	江・宇	1984
溝 7	溝15	69CD	江・宇	1984	竪穴住居11	竪穴住居 2	69CD	江・宇	1984
溝 8	溝12	69CD	江・宇	1984	竪穴住居12	竪穴住居 9	69CD	江・宇	1984

報告書遺構名	調査時遺構名	調査区	担当者	年度	報告書遺構名	調査時遺構名	調査区	担当者	年度
竪穴住居13	竪穴住居11	69CD	江・宇	1984	井戸7	P 359	69CD	江・宇	1984
竪穴住居14	竪穴住居3	89BC	柳・平	1984	井戸8	P36	藤原橋護岸	江・宇	1984
竪穴住居15	竪穴住居4	藤原橋護岸	江・宇	1984	溝35	溝8	69CD	江・宇	1984
竪穴住居16	竪穴住居1	藤原橋護岸	江・宇	1984	溝36	溝5	69CD	江・宇	1984
竪穴住居17	竪穴住居5	藤原橋A	江・山	1983	溝37	溝14	69CD	江・宇	1984
竪穴住居18	竪穴住居4	藤原橋A	江・山	1983	溝38	溝5	藤A・護岸	江・宇	1983 1984
竪穴住居19	竪穴住居7	69CD	江・宇	1984	溝39	溝5	89BC	柳・平	1984
竪穴住居20	竪穴住居12	69CD	江・宇	1984	溝40	溝6	89BC	柳・平	1984
竪穴住居21	竪穴住居10	69CD	江・宇	1984	溝41	溝7	89BC	柳・平	1984
竪穴住居22	竪穴住居2	89BC	柳・平	1984	溝42	溝5	PR1	平・古	1983
竪穴住居23	竪穴住居1	89BC	柳・平	1984	溝43	溝1	PR1	平・古	1983
竪穴住居24	竪穴住居2	PR1	平・古	1983	溝44	溝4	PR1	平・古	1983
竪穴住居25	竪穴住居1	69CD	江・宇	1984	溝45	溝3	PR1	平・古	1983
竪穴住居26	竪穴住居13	69CD	江・宇	1984	溝46	溝5	藤原橋護岸	江・宇	1984
竪穴住居27	竪穴住居8	69CD	江・宇	1984	溝47	溝2	藤原橋A	江・山	1983
竪穴住居28	竪穴住居14	69CD	江・宇	1984	溝48	溝4	藤原橋A	江・山	1983
竪穴住居29	竪穴住居5	69CD	江・宇	1984	溝49	溝3	藤原橋A	江・山	1983
竪穴住居30	竪穴住居4	69CD	江・宇	1984	建物48	6C建物	69CD	江・宇	1984
竪穴住居31	竪穴住居1	PR1	平・古	1983	建物49	建物認定	69CD	江・宇	1984
竪穴住居32	竪穴住居1	藤原橋A	江・山	1983	建物50	7C建物1	69CD	江・宇	1984
竪穴住居33	竪穴住居2	藤原橋護岸	江・宇	1984	建物51	7C建物2	69CD	江・宇	1984
建物29	建物Ⅲ	69CD	江・宇	1984	建物52	建物1	89BC	柳・平	1984
建物30	建物Ⅰ	69CD	江・宇	1984	建物53	建物1	PR1	平・古	1983
建物31	建物	69CD	江・宇	1984	建物54	建物3	PR1	平・古	1983
建物32	建物認定	69CD	江・宇	1984	建物55	建物4	PR1	平・古	1983
建物33	建物認定	69CD	江・宇	1984	建物56	建物1	PR1	平・古	1983
建物34	建物12	89BC	柳・平	1984	建物57	建物認定	藤原橋A	江・山	1983
建物35	建物5	89BC	柳・平	1984	建物58	建物1	藤原橋A	江・山	1983
建物36	建物6	PR1	平・古	1983	井戸9	P1	藤原橋A	江・山	1983
建物37	建物7	PR1	平・古	1983	井戸10	井戸1	PR1	平・古	1983
建物38	建物8	PR1	平・古	1983	土壙56	P9	69CD	江・宇	1984
建物39	建物9	PR1	平・古	1983	土壙墓2	P3	藤原橋A	江・山	1983
建物40	建物	排水溝	平・高	1986	土壙墓3	P2	藤原橋A	江・山	1983
建物41	建物3	藤原橋護岸	江・宇	1984	土壙墓4	P4	藤原橋A	江・山	1983
建物42	建物2	藤原橋護岸	江・宇	1984	土壙墓5	P40	藤原橋A	江・山	1983
建物43	建物1	藤原橋護岸	江・宇	1984	溝50	溝3	69CD	江・宇	1984
建物44	建物	藤原橋A	江・山	1983	溝51	溝4	69CD	江・宇	1984
建物45	建物	藤原橋A	江・山	1983	溝52	溝19	69CD	江・宇	1984
建物46	建物	藤原橋A	江・山	1983	前期水田	前期水田	26～32CD	柳・平	1984
建物47	建物	藤原橋A	江・山	1983	溝53	溝27	32CD	柳・平	1984

報告書遺構名	調査時遺構名	調査区	担当者	年度
溝54	溝29	32CD	柳・平	1984
溝55	溝30	32CD	柳・平	1984
中期水田	中期水田	27～32CD	柳・平	1984
後期水田	後期水田	23～32CD	柳・平・藤・村	1984 1990
土壙57	土壙4	25D	平・藤・村	1990
土壙58	土壙3	25D	平・藤・村	1990
土壙59	土壙1	25D	平・藤・村	1990
溝56	溝7	23・24D	平・藤・村	1990
溝57	溝8	24D	平・藤・村	1990
溝58	溝6	24D	平・藤・村	1990
溝59	溝5	24C	平・藤・村	1990
溝60	溝4	24CD	平・藤・村	1990
溝61	土壙1	25D	平・藤・村	1990
溝62	土壙2	25D	平・藤・村	1990
溝63	溝6	25・26CD	柳・平	1984
溝64	溝10	25CD	柳・平	1984
溝65	溝11	26C	柳・平	1984
溝66	溝8	26・27CD	柳・平	1984
溝67	溝9	26・27CD	柳・平	1984
溝68	溝7	27C	柳・平	1984
溝69	溝16	29・30CD	柳・平	1984
溝70	溝17	29・30CD	柳・平	1984
溝71	溝18	29・30CD	柳・平	1984
溝72	溝19	29・30CD	柳・平	1984
溝73	溝23	29・30CD	柳・平	1984
溝74	溝21	29～31CD	柳・平	1984
溝75	溝22	30・31D	柳・平	1984
溝76	溝24	30～32CD	柳・平	1984
溝77	溝26	32CD	柳・平	1984
溝78	溝25	32CD	柳・平	1984
溝79	溝28	32CD	柳・平	1984
溝80	溝3・2	25CD	柳・平	1984
溝81	溝15	32D	柳・平	1984
溝82	溝1・4	25CD	柳・平	1984
溝83	溝2	27CD	柳・平	1984
溝84	溝1	28CD	柳・平	1984
溝85	溝13	30・31CD	柳・平	1984
溝86	溝12	32CD	柳・平	1984
溝87	溝5	26～28Z	平・古	1982
溝88	溝4	26～28Z	平・古	1982
溝89	溝1	26～28Z	平・古	1982
溝90	溝2	26～28Z	平・古	1982
溝91	溝3	26～28Z	平・古	1982

担当者欄の文字はそれぞれ柳＝柳瀬、平＝平井、古＝古谷野、藤＝藤田、江＝江見、山＝山本、宇＝宇垣、高＝高田、村＝村田の略記である。

1．岡山平野と百間川（西から）

2．百間川原尾島遺跡付近

図版２

１．三股ケ・丸田調査区　作業風景（北東から）

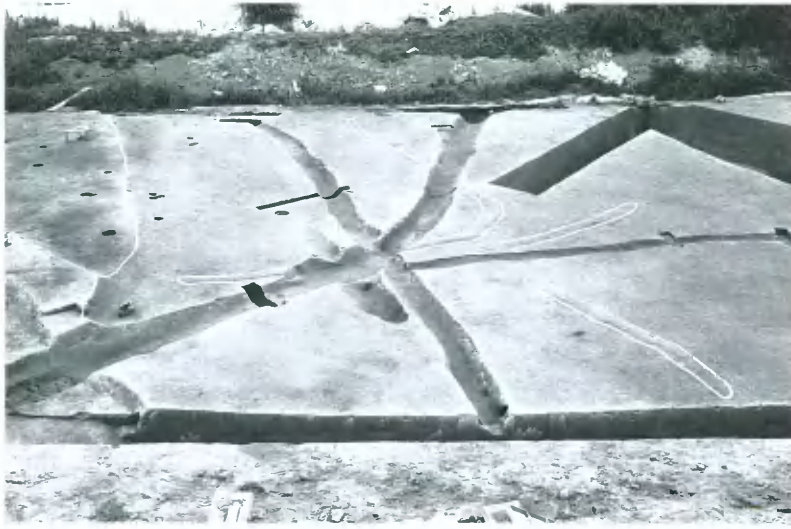
２．三股ケ・丸田調査区　調査区の状況（北東から）

1．三股ケ・丸田　近世土取り跡（南から）

2．三股ケ・丸田　低位部下層の遺構（北東から）

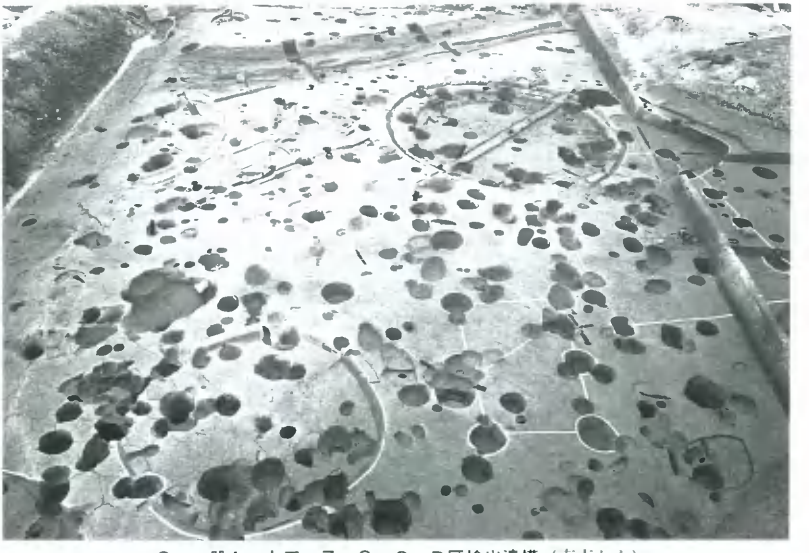
図版４

１．溝３・４（南から）



２．三股ケ・丸田　弥生後期水田（北東から）

1．三股ケ・丸田　7～9－C・D区検出遺構（北東から）



2．三股ケ・丸田　7～9－C・D区検出遺構（南東から）

図版6

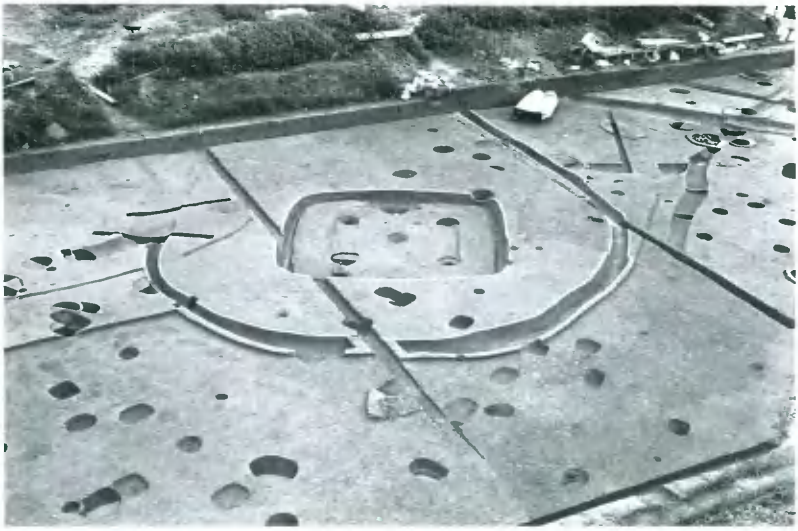
1．竪穴住居1（西から）

2．竪穴住居2（東から）

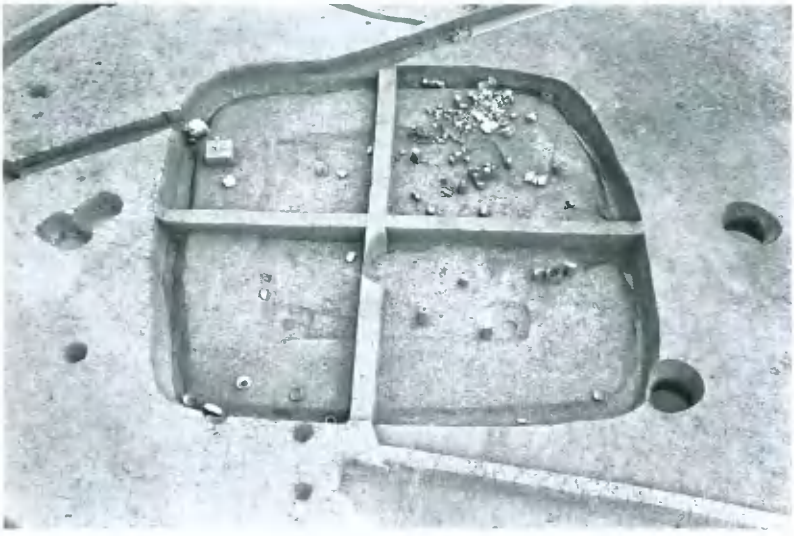
１．竪穴住居３（南東から）

２．竪穴住居４（南西から）

図版8

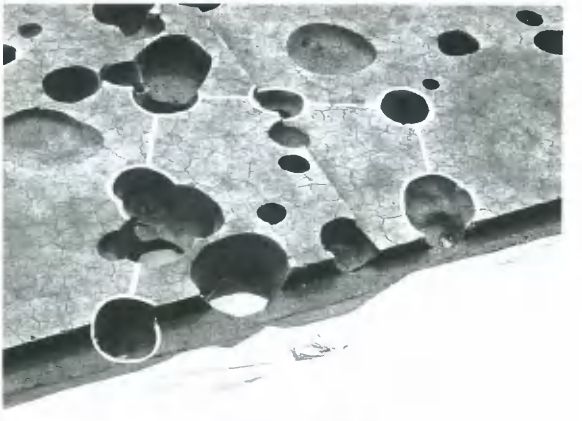


1．竪穴住居5（北から）



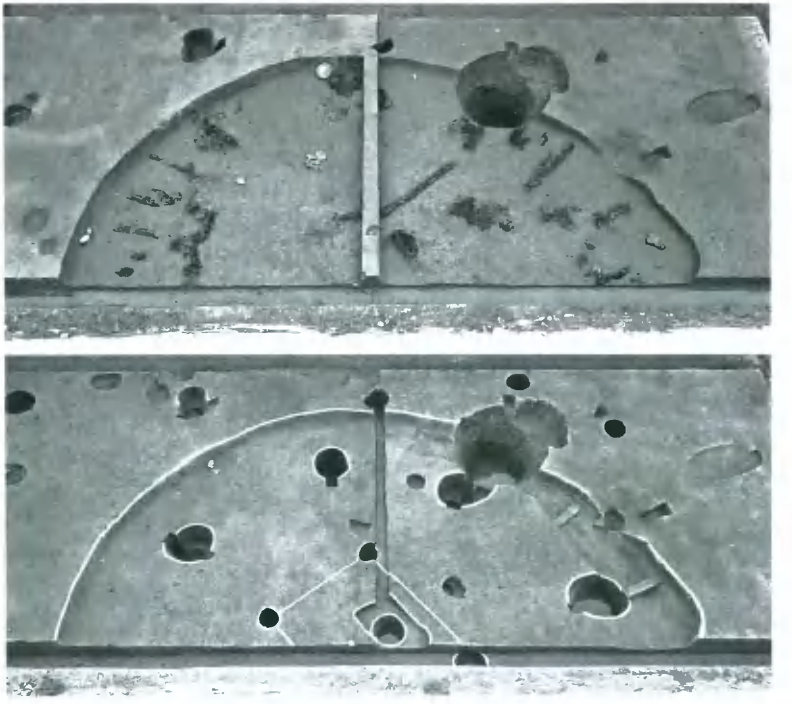
2．竪穴住居5（西から）

１．三股ケ・丸田
８～11Ａ区検出の遺構（南東から）



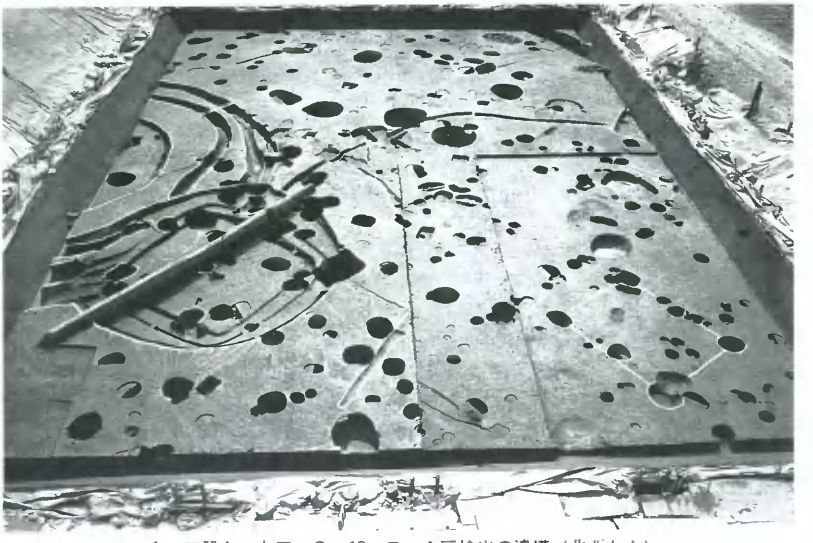
２．建物28（北東から）

図版10



1．竪穴住居６　覆土下面(上)、床面(下)（南西から）

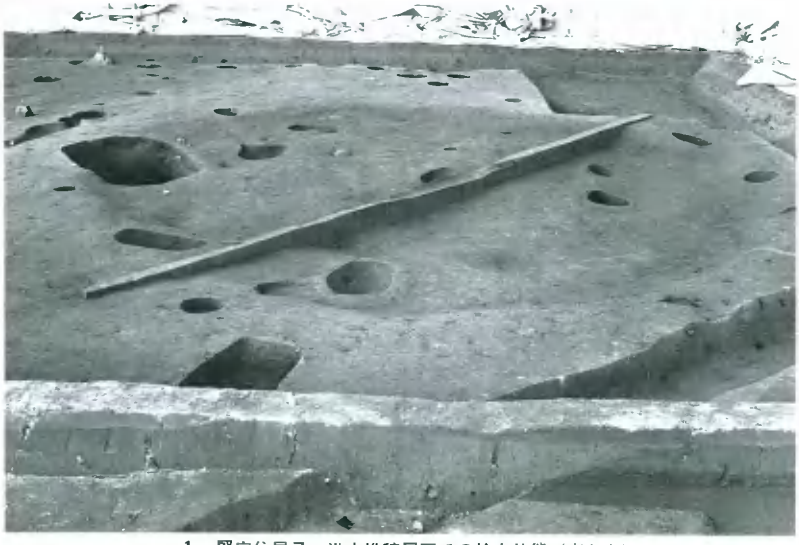
2．竪穴住居９（北東から）



1．三股ケ・丸田　9・10－Z・A区検出の遺構（北西から）

2．三股ケ・丸田　9・10－Z・A区検出の遺構（北東から）

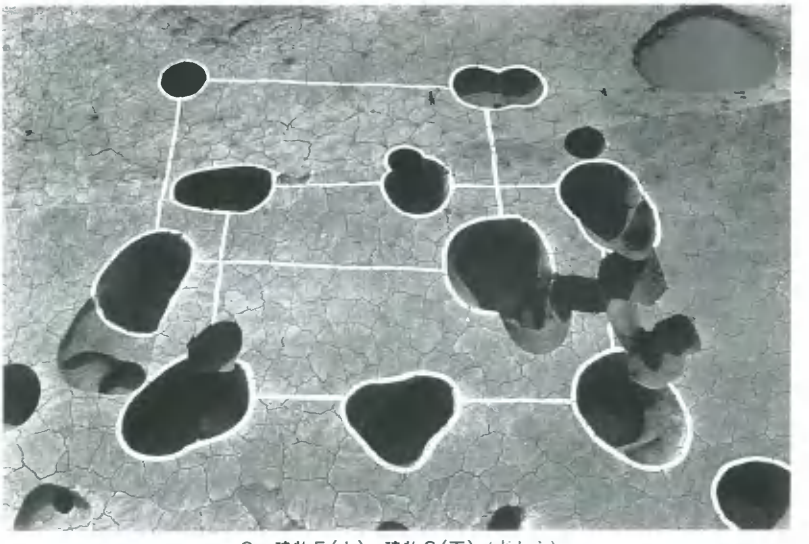
図版12



1．竪穴住居７　洪水堆積層下での検出状態（南から）

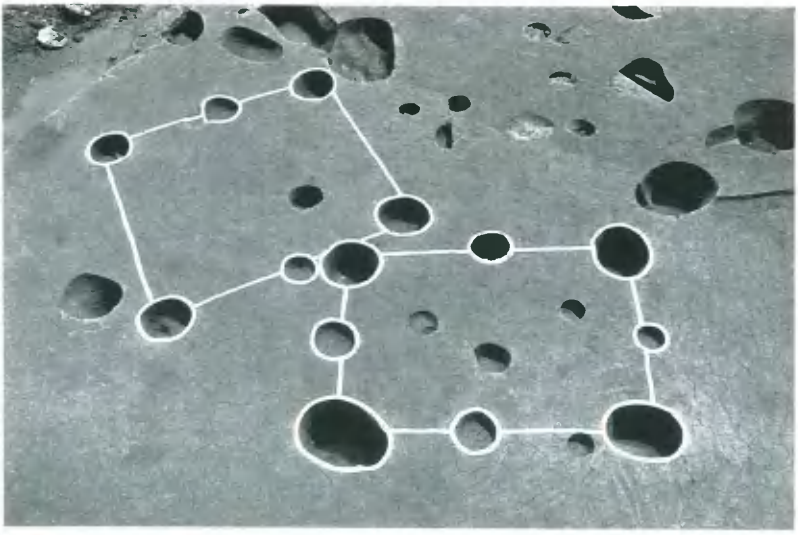
2．竪穴住居７　床面（南から）

1．三股ケ・丸田　8・9－B・C区検出の建物（弥生・古墳）（北東から）

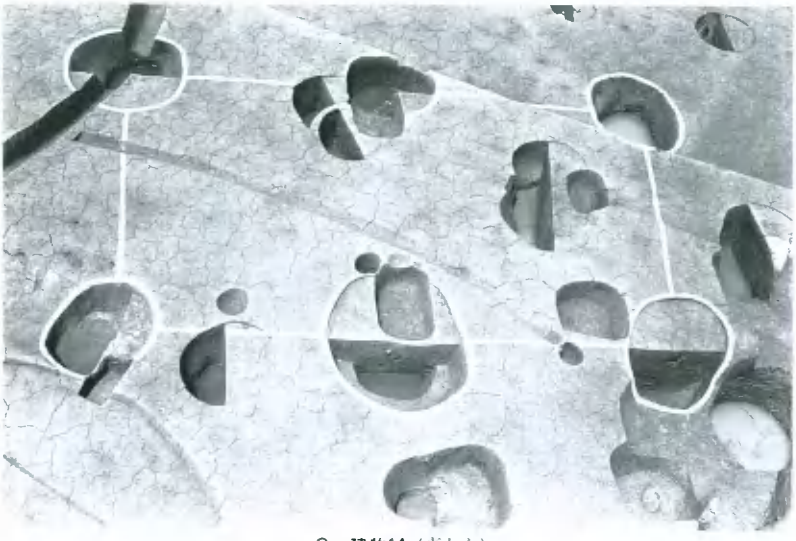


2．建物5（上）、建物6（下）（東から）

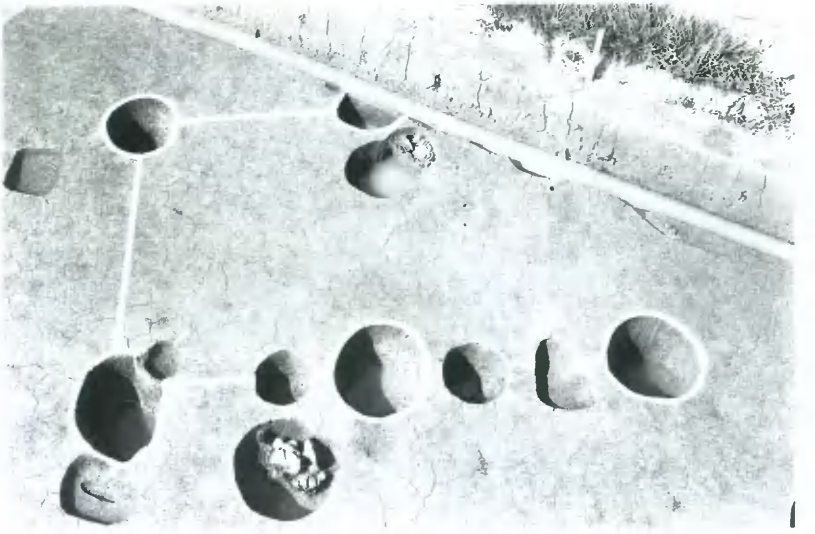
図版14



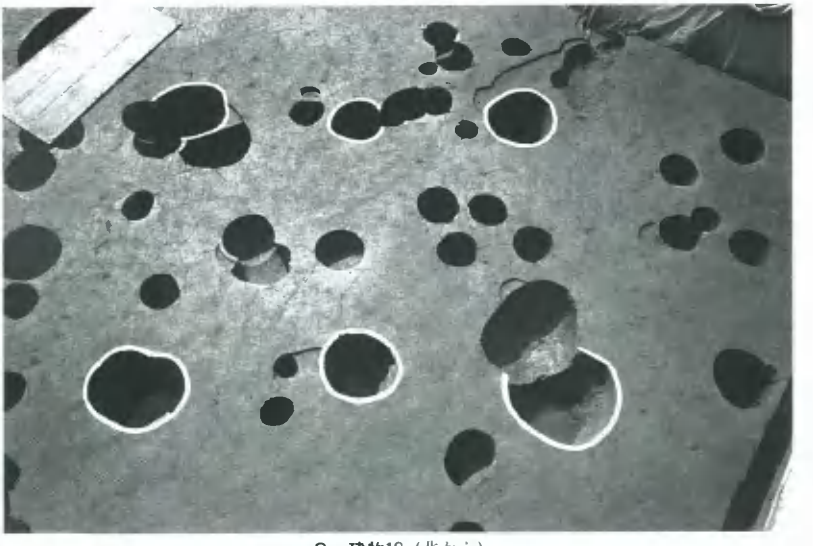
1．建物7（上）、建物8（下）（北から）



2．建物14（東から）



1．建物15（南から）



2．建物18（北から）

図版16

1．井戸１（北から）

2．井戸２（東から）

3．井戸３（南東から）

1．井戸４（南から）

2．井戸５（北東から）

図版18

1．井戸４底部（南から）

2．井戸５底部（北東から）

3．井戸６（南西から）

2．土壙１底面（南から）

1．土壙１（南から）

図版20

1．土壙３（北から）

2．土壙６（南西から）

1．土壙８（北東から）

2．土壙13（南東から）

図版22

1．土壙16（北西から）

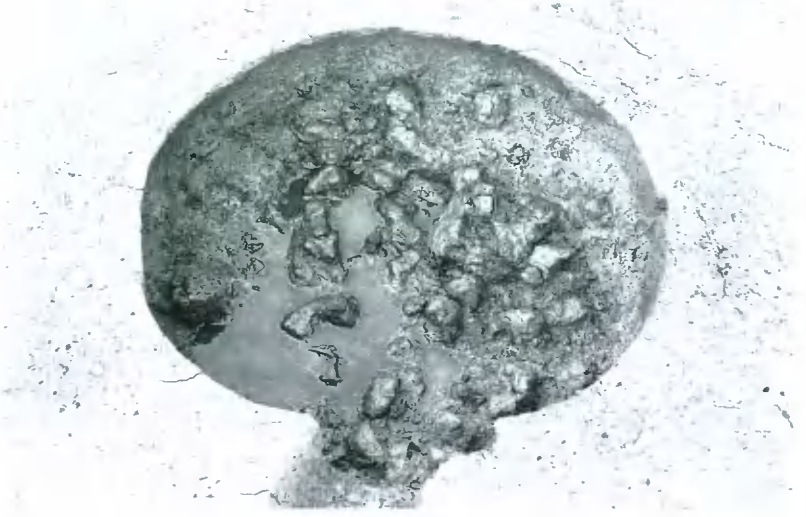
2．土壙24（東から）

1．土壙25（北から）

2．土壙31（北から）

図版24

1．土壙38（北東から）



2．土壙40（南西から）

1．土壙44（東から）

2．土壙50（北西から）

図版26

1．土壙53（南東から）

2．土壙墓1（南から）

1．土器棺墓１（北から）

2．土器棺墓２～５（北西から）

図版28

1．土器棺墓２（南から）

2．土器棺墓２（南から）

3．土器棺墓３、４（南西から）

1．土器棺墓8、9（西から）

2．溝7（北東から）

図版30

1．三股ケ・丸田　8・9－B・C区土器溜まり（北東から）

2．三股ケ・丸田　9・10－A・B区土器溜まり

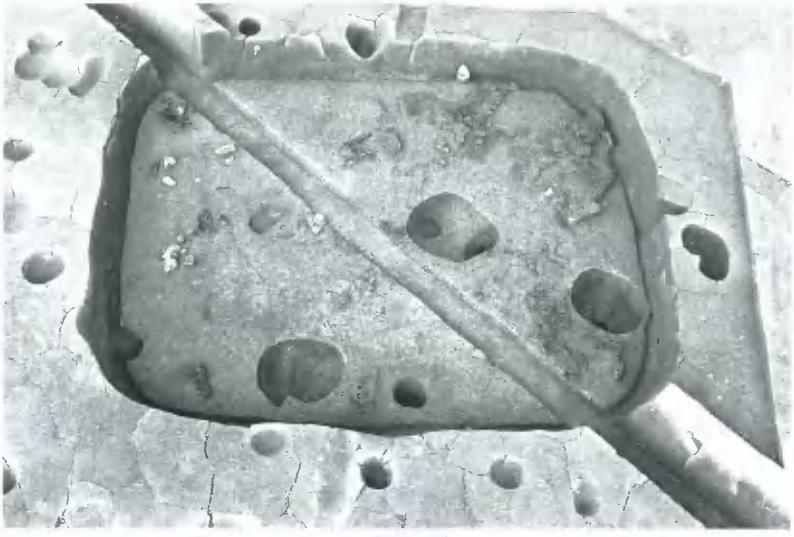
1．発掘調査状況

2．竪穴住居10（南から）

図版32

1．竪穴住居11（南から）

2．竪穴住居12（西から）

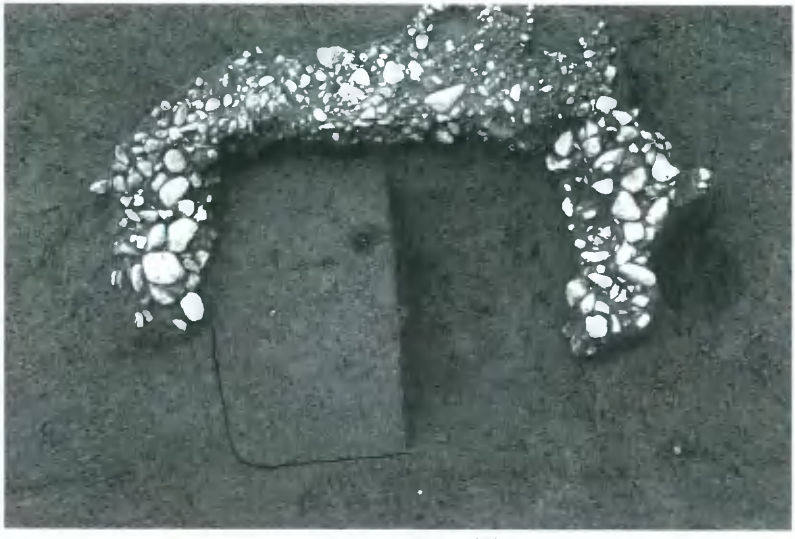


1．竪穴住居13（南から）

2．竪穴住居15（南から）

図版34

1．竪穴住居14（北西から）

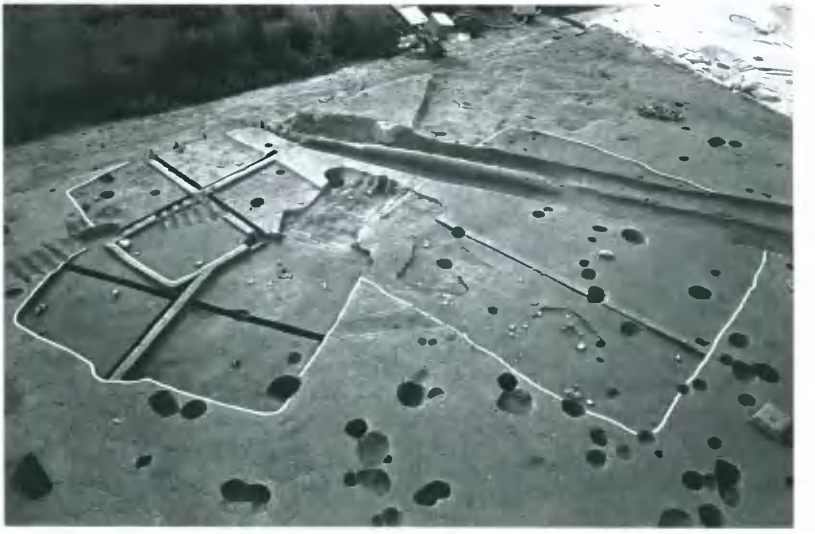


2．竪穴住居14　貯蔵穴（南東から）

1．竪穴住居16（西から）

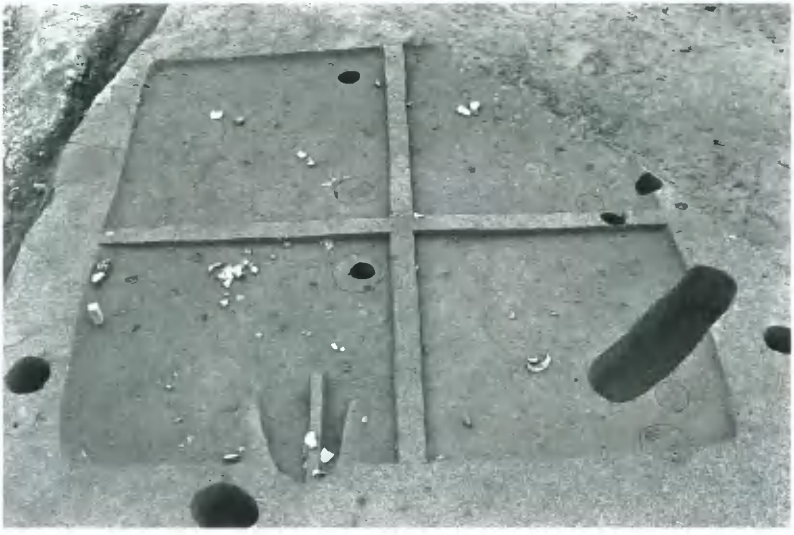
2．竪穴住居19（南東から）

図版36



1．竪穴住居12・21・27（東から）

2．竪穴住居23（南から）



1．竪穴住居22（北東から）

2．竪穴住居22　竈（南東から）

図版38

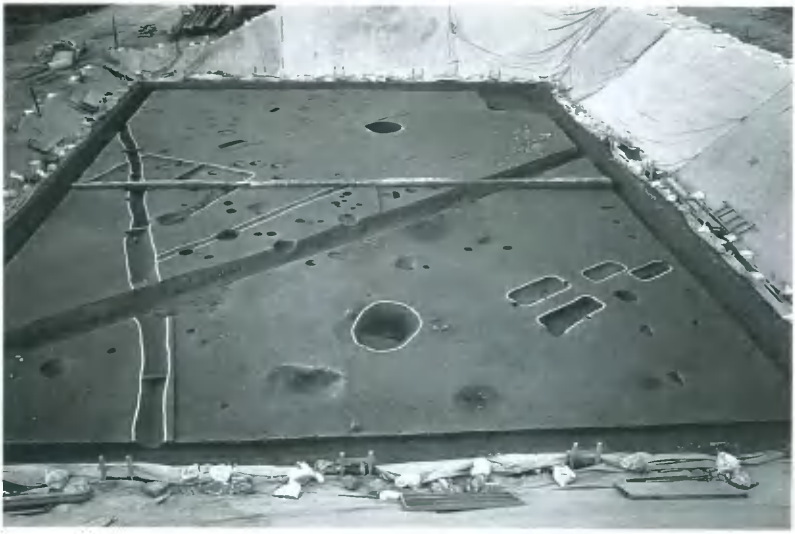
1．竪穴住居24（南から）

2．竪穴住居25（西から）

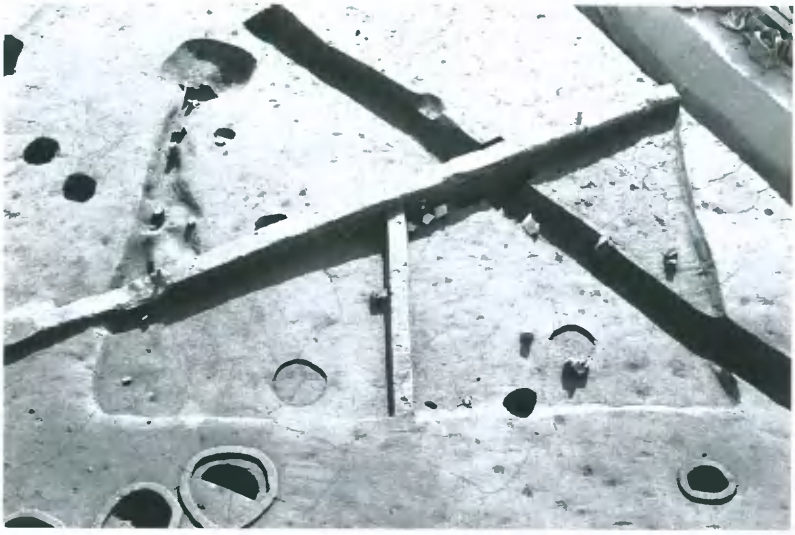
1．竪穴住居31（南から）

2．竪穴住居31　竈（南から）

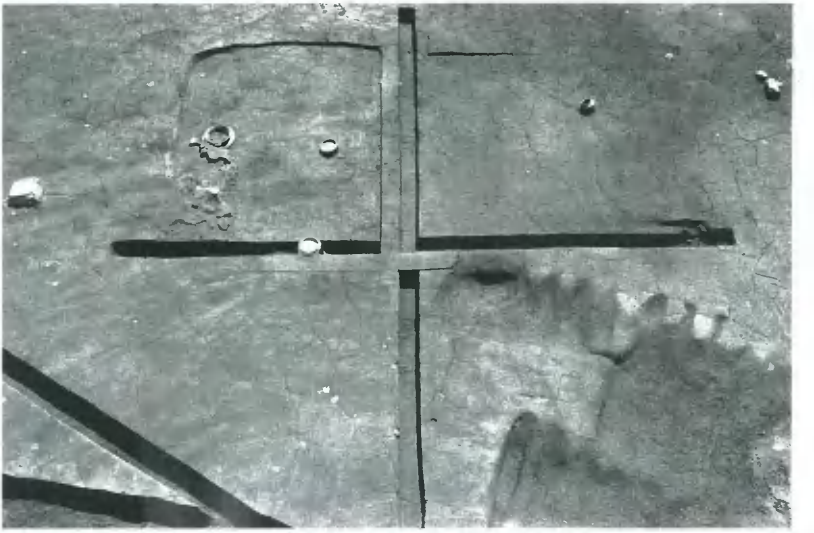
図版40



1．三股ケ・丸田　9・10－Z・A区古墳時代～中世の遺構



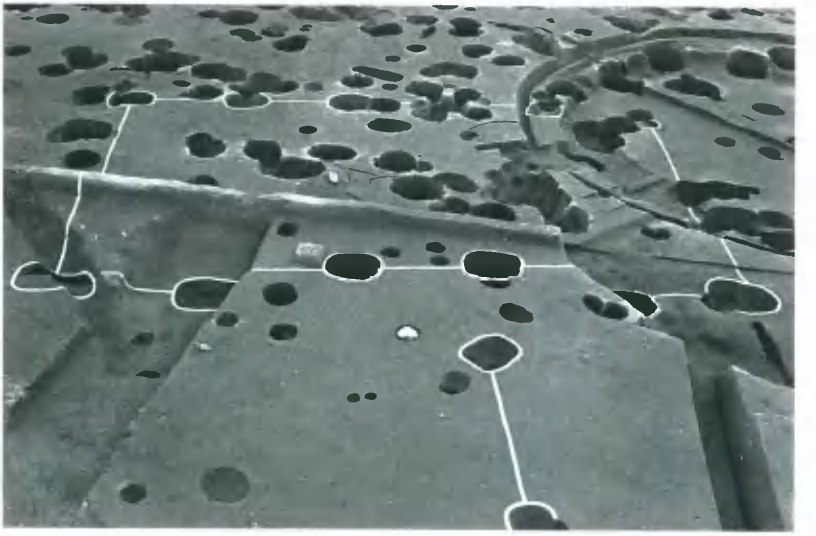
2．竪穴住居32（北から）



1．竪穴住居30（南西から）

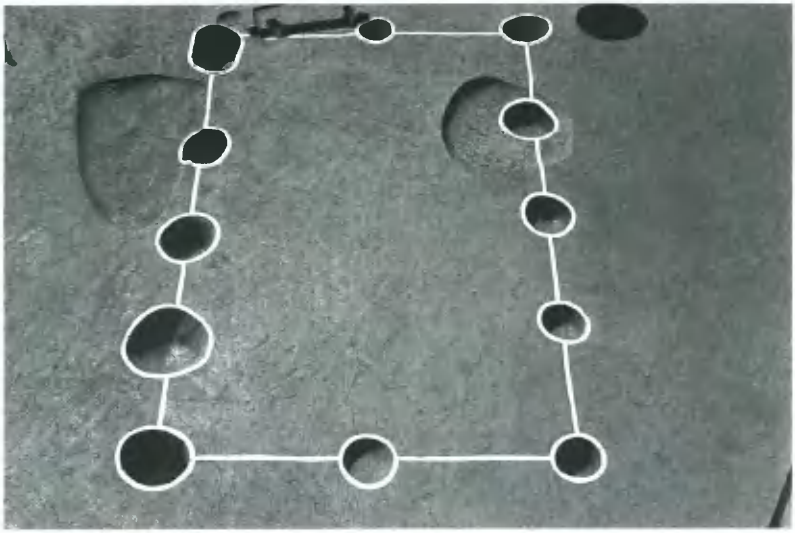
2．建物29（北西から）

図版42



1．建物31（北東から）

2．三股ケ・丸田　9・10－A・B区古墳時代建物群



1．建物35（東から）

2．建物41～43（北から）

図版44

1．建物46（西から）

2．井戸7（北から）

1．井戸７　２層下部（北から）

2．井戸７　底部（南東から）

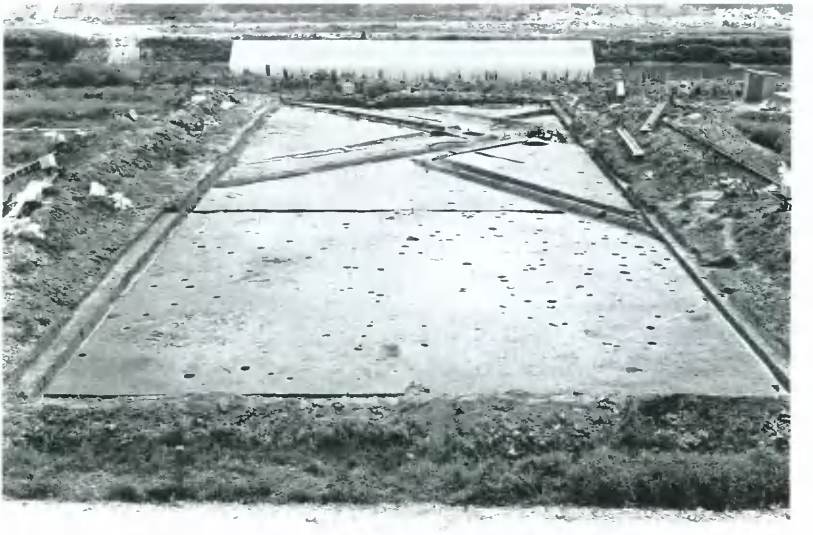
3．井戸８　底部（西から）

図版46

1．溝38（東から）・断面

2．三股ケ・丸田　5・6－C・D区古墳時代～中世の遺構（北東から）

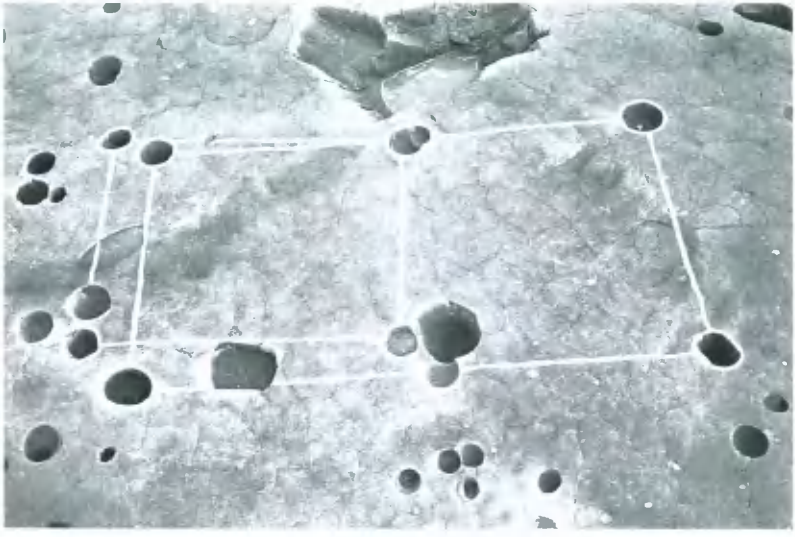
1．三股ケ・丸田　８・９－Ｂ・Ｃ区中世の遺構（北東から）



2．三股ケ・丸田　９・10－Ａ・Ｂ区中世の遺構（北東から）

図版48

1．三股ケ・丸田　5・6－C・D区中世の下がり（南から）



2．建物50、51（西から）

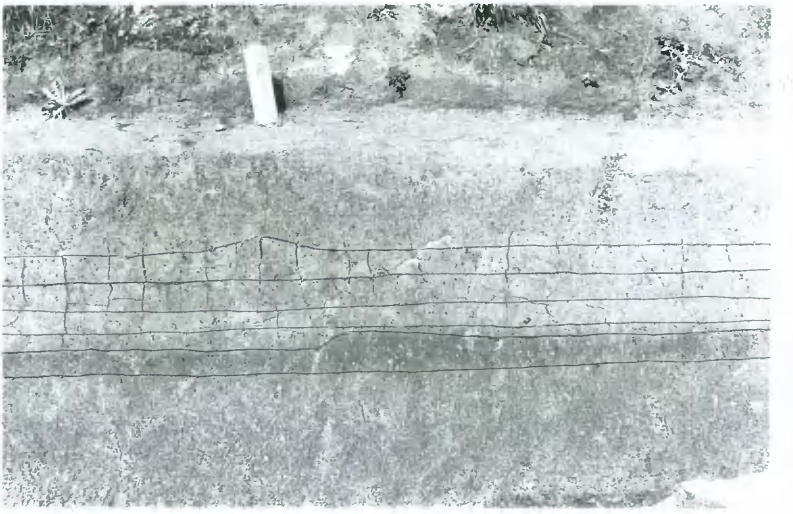
1．井戸９遺物出土状況（南から）

2．井戸９底部（南から）

図版50

1．土壙56

2．土壙墓2～4



1．川内　30C区土層断面（南から）

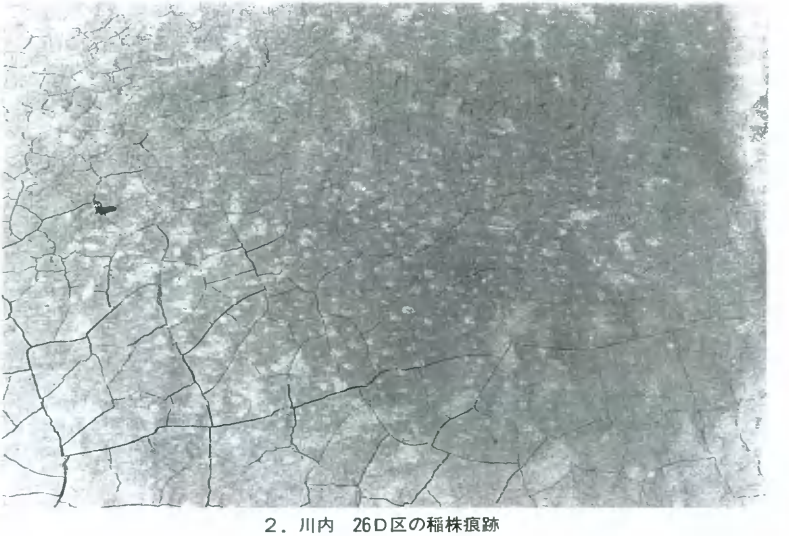
2．川内　26～28－C・D区の弥生時代前期水田（西から）

図版52

1．溝53～55（北から）

2．川内　29・30－C・D区の弥生時代中期水田（西から）

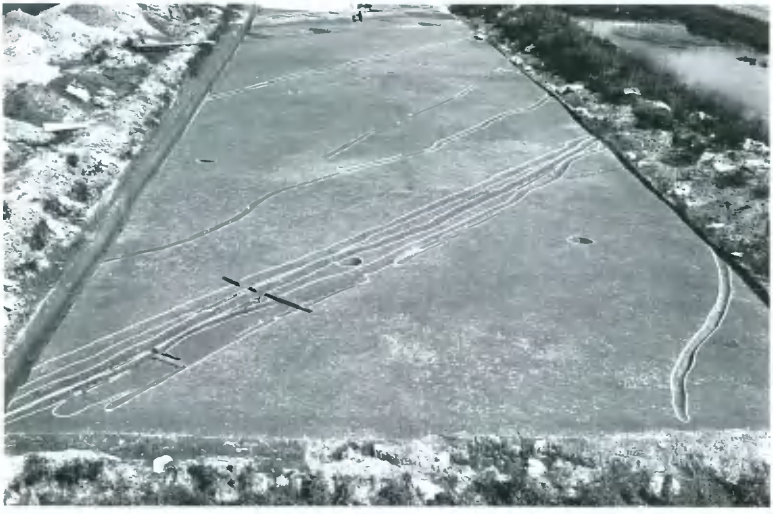
1．川内　25～28－C・D区の弥生時代後期水田（西から）



2．川内　26D区の稲株痕跡

図版54

1．川内　29～32－C・D区の弥生時代後期水田（東から）



2．川内　29～32－C・D区の弥生時代後期の遺構（西から）

27

44

45

49

46

50

51

竪穴住居１(27)・竪穴住居５(44～51)〈１〉出土遺物

図版56

56

48

47

54

61

39

63

41

64

竪穴住居５(47～56)〈２〉・竪穴住居４(39・41)・竪穴住居６(61～64) 出土遺物

82

89

90

108

104

105

106

竪穴住居７(82～90)・井戸１(104～108) 出土遺物

図版58

110

111

114

113

117

123

井戸２(110～117)・井戸３(123)〈１〉出土遺物

125

119

121

136

122

130

井戸３出土遺物〈２〉

図版60

129

134

167

153

158

154

156

井戸３(129・134)〈３〉・井戸５(153～167) 出土遺物

138

143

176

171

177

189

井戸４（138・143）・井戸６(171・176)・土壙１(177・189)〈１〉出土遺物

図版62

188

190

187

186

193

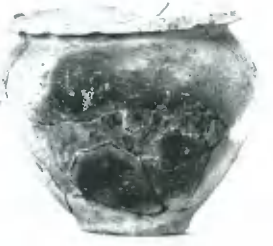
196

土壙１(186~193)〈2〉・土壙２(196) 出土遺物

220

214

223



225

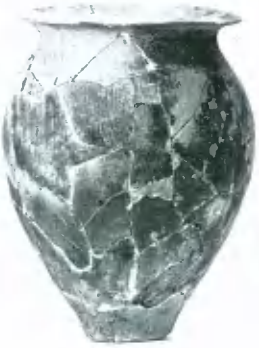
227

224

229

土壙13出土遺物

図版64



238

239

237

241

242

240

土壙16出土遺物

203

205

252

260

244

253

266

土壙10(203・205)・土壙17(244)・土壙23(252～260)・土壙24(266) 出土遺物

図版66

249

270

271

278

273

280

土壙19(249)・土壙25(270～280)〈1〉出土遺物

283

293

291

298

292

299

296

土壙25出土遺物〈2〉

図版68

316

326

308

320

347

324

357

土壙31(316～326)・土壙28(308)・土壙39(347)・土壙41(357) 出土遺物

369

381

385

土壙44(369～中段)・土壙47(381)・土壙53(385) 出土遺物

図版70

370

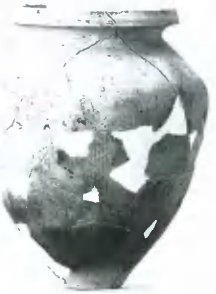
374

379

391

394

土壙46(370～379)・土壙55(391・394) 出土遺物



345

363

364

98

100

土壙29(上段)・土壙38(345)・土壙43(363・364)・建物15(98・100) 出土遺物

図版72

397

398

401

403

402

土器棺1(397・398)・土器棺3(401)・土器棺4(402・403)

399

400

404

土器棺２(399・400)・土器棺５(404)

図版74

405

406

409

410

土器棺6（405・406）・土器棺8（409・410）

408

417

418

411

423

412

421

土器棺７(408)・土器棺９(411・412)・溝20(417・418)
８-９ＢＣ区土器溜まり(421・423) 出土遺物

図版76

419

424

426

420

432

438

8－9BC区土器溜まり(419～424)・9－10A区土器溜まり(426・右下)
窪地1(432・438)出土遺物

445

447

451

450

452

453

455

包含層・柱穴等出土遺物

図版78

487

489

483

490

485

493

492

竪穴住居14出土遺物

501

507

563

519

554

竪穴住居19(501～519)・竪穴住居24(563・564) 出土遺物

図版80

553

557

576

581

579

585

580

590

竪穴住居24(553・557)・竪穴住居27(576)
竪穴住居30(579・580)・竪穴住居31(581～590) 出土遺物

603

616

601

619

602

620

井戸７出土遺物〈１〉

図版82

612

621

623

626

628

624

井戸７出土遺物〈２〉

642

632

635

643

636

644

640

井戸７出土遺物〈３〉

図版84

647

651

652

657

671

676

673

681

井戸８出土遺物(647～657)・溝38(671～681)〈１〉出土遺物

683

684

687

688

689

699

溝38出土遺物<2>

図版86

686

675

696

709

720

725

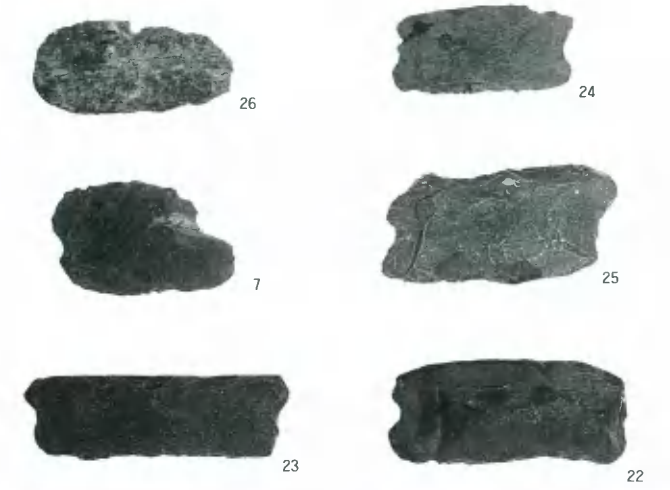
733

738

732

740

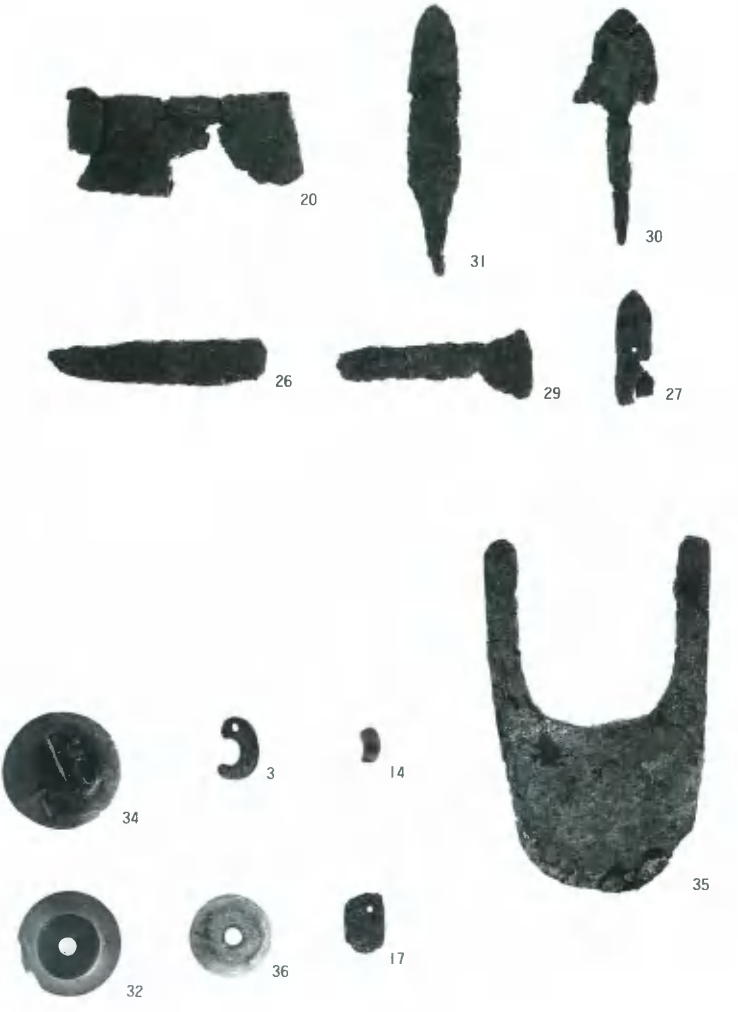
溝38(675～696)〈3〉・土器溜まり(709)・井戸9(720～740) 出土遺物



石器および青銅器

図版88

弥生時代の鉄器



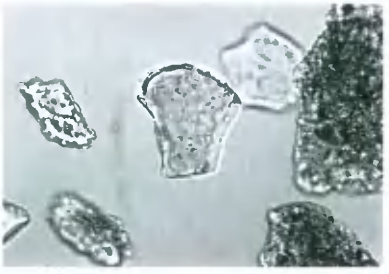
弥生時代～中世の鉄器および石製品・玉類

図版90

1．サヤヌカグサ属（No 6）

4．ヨシ属（No 7）

2．サヤヌカクサ属（No 6）



5．タケ亜科（No 2）

3．ヨシ属（No 6）

6．ウシクサ族（No 6）

プラントオパール顕微鏡写真（×250）

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告88

百間川原尾島遺跡　3

旭川放水路（百間川）改修
工事に伴う発掘調査　Ⅸ

1994年３月20日　印刷
1994年３月20日　発行

編集　岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325－３

発行　建設省岡山河川工事事務所
岡山市鹿田町２－４－36

岡山県教育委員会
岡山市内山下２－４－６

印刷　西日本法規出版株式会社
岡山市高柳西町１－23